麓Ⅱ遺跡
坂本谷遺跡
京田遺跡 (1 区)

２０１７年９月

島根県教育委員会

序

現在、一般国道９号の出雲市知井宮町～湖陵町三部間は、現道では通過交通と、生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに、一般国道の代替路線がなく、交通事故等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上及び生活圏域の連携を促進することを目的として、出雲・湖陵道路を平成 20 年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分に留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、事業地内に所在する埋蔵文化財について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成 26･27 年度に実施した「麓Ⅱ遺跡 (1 区)」「坂本谷遺跡」「京田遺跡」の調査結果をとりまとめたものであり、島根県の歴史を伝える貴重な学術資料として、後世に引き継がれることを期待します。

最後に、本調査にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成 29 年９月

国土交通省中国地方整備局
松江国道事務所長　鈴木　　祥弘

序

本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成 26･27 年度に実施した一般国道９号 (出雲湖陵道路) 改築事業地内に所在する麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡 (1 区) の発掘調査の成果をまとめたものです。

麓Ⅱ遺跡では縄文時代後期の土器や集落跡、古墳時代中期の水路や木製品などの遺物が発見されたほか、中世の集落跡や神西城に関連する防御施設の一部が確認できました。神西城に関連すると考えられる防御施設や同時代の集落は坂本谷遺跡でも見つかっています。また、京田遺跡からは古代の建物跡が発見されました。

遺跡が多いことで知られるこの地域は、『出雲国風土記』に記載される神門水海と山や平野の接点にあたり、今回の調査成果は自然環境に恵まれたこの地域に古くから人々が集落を形成していたことを示す貴重な資料となりました。本書が、この地域の歴史や埋蔵文化財に対する理解を深めるために広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成にあたり、御協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、出雲市教育委員会、地元の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 29 年９月

島根県教育委員会

教育長　鴨　木　　朗

例言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成26 ～ 27 年度に実施した一般国道９号 (出雲湖陵道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
2. 本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。

平成 26 年度　　麓（ふもと）Ⅱ遺跡１～４区 (出雲市東神西町 742 外)
坂本谷（さかもとだに）遺跡 (出雲市西神西町 163 外)

平成 27 年度　　麓Ⅱ遺跡５区 (出雲市東神西町 446-4 外)
京田（きょうでん）遺跡 (出雲市湖陵町常楽寺 572-3 外)

平成 28 年度　　整理等作業・報告書作成

3. 調査組織

調査主体　　島根県教育委員会

平成 26 年度事務局　廣江耕史 (埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之 (総務課長)、池淵俊一 (管理課長)

調査担当者　大庭俊次 (調査第一課長)、勝部智明 (同課第一係長)、阿部智子 (同課臨時職員)、岩橋康子 (同課臨時職員)

平成 27 年度事務局　廣江耕史 (埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之 (総務課長)、池淵俊一 (管理課長)

調査担当者　今岡一三 (調査第一課長)、勝部智明 (同課第一係長)、阿部智子 (同課臨時職員)、岩橋康子 (同課臨時職員)

平成 28 年度事務局　萩　雅人 (埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之 (総務課長)、池淵俊一（管理課長）

調査担当者　守岡正司 (調査第二課長)、勝部智明 (同課第三係長)、岩橋康子 (同課臨時職員)

4. 発掘調査作業 (安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等) については次の機関に委託した。
   平成 26 年度：株式会社トーワエンジニアリング、平成 27 年度：株式会社大畑建設
5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。(五十音順・肩書きは当時)
   石丸恵利子 (広島大学総合博物館研究員)、千葉　豊 (京都大学文化財総合研究センター准教)
6. 発掘調査に際して、以下の方々、関係機関から御協力、御助言をいただいた。（五十音順・肩書きは当時）
   幡中光輔 (出雲市文化財課主事)、渡辺正巳
7. 挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系Ｘ軸方向を示し、座標系ＸＹ座標は世界測地系による。レベルは海抜高を示す。
8. 本書で使用した第２・５図は国土地理院発行 1/25,000 地形図 (神西湖) を、第３・６・91・117 図は出雲市都市計画平面図 1/20,000 と国土交通省松江国道事務所が作成した計画平面図図 1/1,000 使用して作成したものである。

9. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会義事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修 に従って表記した。
10. 本調査に伴う動物遺存体の鑑定については石丸恵利子氏に依頼した。また、自然科学的分析は次の機関に委託して実施し、その成果は第６章にまとめて掲載した。
    自然科学的分析 (植物珪酸体分析・花粉分析・軟 X 線観察・樹種同定)：文化財調査コンサルタント株式会社、AMS 年代測定：文化財調査コンサルタント株式会社
11. 発掘調査に伴って、出土木製品の保存処理を次の機関に委託した。
    平成 27 年度：(公財) 大阪市博物館協会、平成 28 年度：(公財) 大阪市博物館協会
12. 保存処理を実施した木製品の樹種同定は、10 の機関を通じて、(一社) 文化財科学研究センターが行い、その成果は第６章にまとめて掲載した。
13. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は勝部が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、各調査員・臨時職員・整理作業員が行ったほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。
14. 本書の執筆は、第１～５章、第７章は勝部が行い、第６章は各節ごとに執筆者を明記している。
15. 本書の編集は勝部が行った。
16. 註は各章ごとに連番を振り当該頁下に配置し、参考文献等は各章末にまとめて示した。写真、挿図及び表の番号は全体の通し番号により表示した。
17. 本書に掲載した遺物及び実測図･写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター (松江市打出町 33 番地) にて保管している。

凡例

本書で用いた土器の分類及び編年観は下記の論文・報告書に依拠している。

１. 縄文土器

柳浦俊一 2010「各地域の土器編年」『西日本の縄文土器』真陽社

古代文化センター 2014『山陰地方の縄文文化』

２. 弥生土器・土師器

松本岩雄 1991「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社

鹿島町教育委員会 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５ 南講武草田遺跡』

松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 - 大東式の再検討」『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会

松山智弘 2000「小谷式再検討 - 出雲平野における新資料から -」『島根考古学会誌』第 17 集　島根考古学会

島根県教育委員会 2008『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』

３. 須恵器

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集

島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡 - ９ 総括編 - 風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22』

本文目次

第１章　調査の経過　1
　第１節　調査にいたる経緯と経過　1
　　１．事業計画の概要　1
　　２．埋蔵文化財保護部局への照会と調整　1
　　３．法的手続き　3
　第２節　発掘作業と整理作業の経過　4
　　１．麓Ⅱ遺跡　4
　　２．坂本谷遺跡　6
　　３．京田遺跡　6
　　４．整理等作業　6

第２章　遺跡の位置と環境　7
　第１節　地理的環境　7
　第２節　歴史的環境　8

第３章　麓Ⅱ遺跡の調査成果　13
　第１節　調査の方法　13
　　１．発掘調査区の設定　13
　　２．表土・包含層掘削と遺構の検出　13
　　３．遺構掘削　13
　　４．記録の作成　13
　　５．整理等作業　13
　第２節　調査区の概略と層序　14
　　１．試掘確認調査　14
　　２．１区　15
　　３．２区　17
　　４．３区　21
　　５．４区　24
　　６．５区　30
　第３節　１区の遺構と遺物　31
　　１．土坑　31
　　２．斜面ピット群　34
　　３．遺構外出土遺物　34
　第４節　２区の遺物　35
　第５節　３区の遺構と遺物　42

１．縄文時代　42
２．中世　54
３．遺構外出土遺物　57
第６節　４区の遺構と遺物　58
１．縄文時代　58
２．中世　63
第７節　５区の遺構と遺物　67
１．弥生時代・古墳時代　67
２．古代・中世　86

第４章　坂本谷遺跡の調査成果　88
第１節　調査の方法　88
１．発掘調査区とグリッドの設定　88
２．表土・包含層掘削と遺構の検出　89
３．遺構掘削　89
４．記録の作成　89
５．整理等作業　89
第２節　調査区の概略と層序　90
１．試掘確認調査　90
２．発掘調査の概略　90
第３節　遺構と遺物　95
１．斜面ピット群　95
２．建物跡　95
３．土坑　109
４．遺構外出土遺物　109

第５章　京田遺跡の調査成果　111
第１節　調査の方法　111
１．発掘調査区とグリッドの設定　111
２．表土・包含層掘削と遺構の検出　112
３．遺構掘削　112
４．記録の作成　112
５．整理等作業　112
第２節　調査区の概略と層序　113
１．試掘確認調査　113
２．発掘調査の概略　113
第３節　遺構と遺物　118
１．建物跡　118

２．溝跡 124
３．遺構外出土遺物 126
第６章　自然科学分析 127
第１節　麓Ⅱ遺跡から出土した動物遺存体 127
第２節　出雲湖陵道路発掘調査における樹種同定 131
第３節　麓Ⅱ遺跡３・５区発掘調査に伴う自然化学分析 136
第４節　坂本谷遺跡発掘調査に伴う AMS 年代測定 160
第７章　総括 162
第１節　麓Ⅱ遺跡 162
第２節　坂本谷遺跡 165
第３節　京田遺跡 168

挿図目次

第 1 図	麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡の位置	1
第 2 図	事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地	2
第 3 図	出雲湖陵道路改築事業と調査区 (1/15,000)	3
第 4 図	遺跡周辺の微地形分類図 (1/150,000)	7
第 5 図	麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)	9
第 6 図	調査区配置と周辺地形・土層模式図 (1/3,000・1/120)	14
第 7 図	1 区遺構配置図 (1/200)	15
第 8 図	1 区北壁・中央土層断面図 (1/80)	16
第 9 図	1 区南壁土層断面図 (1/80)	17
第 10 図	2 区全体図 (1/200)	18
第 11 図	2 区南東壁土層断面図 (1/80)	19
第 12 図	2 区北東壁・北西壁・中央ベルト土層断面図 (1/80)	20
第 13 図	3 区第 1 ・第 2 遺構面配置図 (1/200)	22
第 14 図	3 区北東壁・北西壁土層断面図 (1/80)	23
第 15 図	4 区第 1 ・第 2 遺構面配置図 (1/200)	25
第 16 図	4 区北東壁・北西壁土層断面図 (1/80)	26
第 17 図	5 区第 1 ・第 2 遺構面配置図 (1/200)	27
第 18 図	5 区北東壁土層断面図 (1/80)	28
第 19 図	5 区北西壁・南東壁土層断面図 (1/80)	29
第 20 図	1 区 SK01・02、SK02 出土遺物実測図 (1/60・1/3)	31
第 21 図	斜面ピット群平面図 (1/60)	32
第 22 図	斜面ピット列断面図 (1/60)	33
第 23 図	1 区斜面出土土師器実測図 (1/3)	34
第 24 図	1 区出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	35
第 25 図	2 区Ⅲ層出土縄文土器実測図 1 (1/3)	36
第 26 図	2 区Ⅲ層出土縄文土器実測図 2 (1/3)	37
第 27 図	2 区Ⅲ層出土縄文土器実測図 3 (1/3)	38
第 28 図	2 区Ⅲ層出土縄文土器実測図 4 (1/3)	39
第 29 図	2 区Ⅲ層出土縄文土器実測図 5 (1/3)	40
第 30 図	2 区Ⅲ層出土縄文土器実測図 6 (1/3)	40
第 31 図	2 区Ⅲ層出土石器実測図 (1/2・1/3)	41
第 32 図	2 区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図 (1/1・1/3)	41
第 33 図	3 区 SK02 実測図 (1/40)	42
第 34 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 1 (1/3)	42
第 35 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 2 (1/3)	43
第 36 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 3 (1/3)	44
第 37 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 4 (1/3)	45
第 38 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 5 (1/3)	46
第 39 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 6 (1/3)	47
第 40 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 7 (1/3)	48
第 41 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 8 (1/3)	49
第 42 図	3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 9 (1/3)	50

第 43 図　3 区Ⅳ層出土土製品実測図 (1/2)　51
第 44 図　3 区Ⅳ層出土石器実測図 1 (1/3)　51
第 45 図　3 区Ⅳ層出土石器実測図 2 (1/3)　52
第 46 図　3 区Ⅳ層出土石器実測図 3 (1/2)　53
第 47 図　3 区Ⅳ層出土石器実測図 4 (1/3)　54
第 48 図　3 区 SB01 実測図 (1/60)　55
第 49 図　3 区 SB02 実測図 (1/60)　55
第 50 図　3 区 SB03 実測図 (1/60)　56
第 51 図　3 区 SB04 実測図 (1/60)　56
第 52 図　3 区 SB05 実測図 (1/60)　57
第 53 図　3 区 SB06 実測図 (1/60)　57
第 54 図　3 区 SK01 実測図 (1/60)　57
第 55 図　3 区 I 層出土銭貨拓影 (1/1)　57
第 56 図　4 区第 2 遺構面遺構実測図 (1/30・1/60)　59
第 57 図　4 区遺構出土縄文土器実測図 (1/3)　60
第 58 図　4 区Ⅲ層出土縄文土器実測図 (1/3)　61
第 59 図　4 区Ⅲ層出土石器実測図 (1/2・1/3)　62
第 60 図　4 区 SB01 実測図 (1/60)　62
第 61 図　4 区 SB02 実測図 (1/60)　62
第 62 図　4 区 SB03 実測図 (1/60)　64
第 63 図　4 区 SB04 実測図 (1/60)　64
第 64 図　4 区 SB05 実測図 (1/60)　65
第 65 図　4 区 SB06 実測図 (1/60)　65
第 66 図　4 区 SB07 実測図 (1/60)　65
第 67 図　4 区 SB08 実測図 (1/60)　65
第 68 図　4 区 SB09 実測図 (1/60)　66
第 69 図　4 区 SB10 実測図 (1/60)　66
第 70 図　4 区 I 層出土磁器実測図 (1/3)　66
第 71 図　5 区 SD01(古)・02 実測図 (1/60)　68
第 72 図　5 区 SD01(古) 遺物出土状況 (1/60・1/6・1/20・1/40)　69
第 73 図　5 区 SD01(古) 護岸・堰実測図 (1/20・1/60)　70
第 74 図　5 区 SD01(古) 出土遺物実測図 1 (1/3)　71
第 75 図　5 区 SD01(古) 出土遺物実測図 2 (1/3)　72
第 76 図　5 区 SD01(古) 出土遺物実測図 3 (1/3)　73
第 77 図　5 区 SD01(古) 出土遺物実測図 4 (1/3)　74
第 78 図　5 区 SD01(古) 出土石器実測図 (1/2・1/3)　75
第 79 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 1 (1/3)　75
第 80 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 2 (1/4・1/6・1/8)　76
第 81 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 3 (1/6・1/8・1/10)　77
第 82 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 4 (1/8・1/10)　78
第 83 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 5 (1/3・1/4・1/6・1/8・1/15)　79
第 84 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 6 (1/4・1/6・1/8)　80
第 85 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 7 (1/6・1/8)　81
第 86 図　5 区 SD02 杭・遺物出土状況 (1/60)　83
第 87 図　5 区 SD02 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6・1/8)　84

第 88 図　5区Ⅲ層出土遺物実測図 1 (1/2・1/3) 85
第 89 図　5区Ⅲ層出土木製品実測図 (1/3) 86
第 90 図　5区Ⅱ層出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4) 87
第 91 図　調査区配置と周辺地形 (1/3,000) 88
第 92 図　調査区割図 (1/600) 89
第 93 図　遺構配置図 (1/300) 91
第 94 図　縦断土層断面図 (1/80) 92
第 95 図　横断土層断面図 (1/80) 93
第 96 図　南壁土層断面図 (1/80) 94
第 97 図　斜面遺構配置図 (1/60) 96
第 98 図　斜面ピット列断面図 (1/60) 97
第 99 図　P123 出土土師器実測図 (1/3) 97
第 100 図　平坦面遺構配置図 (1/100) 98
第 101 図　SB01・05 実測図 (1/60) 99
第 102 図　SB01・05 周辺ピット出土遺物実測図 (1/2・1/3) 100
第 103 図　SB06、SD04 出土遺物実測図 (1/3・1/60) 100
第 104 図　SB03、周辺ピット出土遺物実測図 (1/3・1/60) 101
第 105 図　SB02 実測図 (1/60) 102
第 106 図　SB02・周辺ピット出土遺物実測図 (1/2・1/3) 102
第 107 図　SB07 実測図 (1/60) 103
第 108 図　SB07・周辺ピット出土遺物実測図 (1/2・1/3) 104
第 109 図　SX02・03 出土遺物実測図 (1/3) 105
第 110 図　SB04 実測図 (1/60) 105
第 111 図　SB08 実測図 (1/60) 106
第 112 図　SB08・周辺ピット出土遺物実測図 (1/3) 106
第 113 図　SK01 ～ 03・05 実測図 (1/60) 107
第 114 図　Ⅲ層出土遺物実測図 (1/3) 108
第 115 図　Ⅲ層出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3) 109
第 116 図　Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図 (1/2・1/3) 110
第 117 図　調査区配置と周辺地形 (1/3,000) 111
第 118 図　調査区割図 (1/600) 112
第 119 図　1区遺構配置図 (1/300) 114
第 120 図　北壁土層断面図 (1/80) 115
第 121 図　中央ベルト・南壁土層断面図 (1/80) 116
第 122 図　北側遺構配置図 (1/100) 117
第 123 図　SI01 実測図 (1/60) 118
第 124 図　SB01 実測図 (1/60) 118
第 125 図　SB02 実測図 (1/60) 119
第 126 図　SB03、周辺ピット出土遺物実測図 (1/3・1/60) 120
第 127 図　SB04 実測図 (1/60) 121
第 128 図　SB05・出土遺物実測図 (1/3・1/60) 122
第 129 図　SB06 実測図 (1/60) 123
第 130 図　SD01・03・04、SD04 周辺ピット出土遺物 (1/3・1/60) 124
第 131 図　Ⅱ層出土遺物実測図 (1/3) 125
第 132 図　Ⅰ層出土遺物実測図 (1/2・1/3) 125

第 133 図　出雲平野周辺の古地理変遷 129
第 134 図　試料採取地点 136
第 135 図　３区北西壁断面図 (試料採取層準) 137
第 136 図　３区南東壁断面図 (試料採取層準) 137
第 137 図　５区北東壁東側断面図 (試料採取層準) 137
第 138 図　５区北東壁西側断面図 (試料採取層準) 137
第 139 図　３区№２地点軟Ｘ線写真観察結果 (左：実視　中：軟Ｘ線　右：解析結果) 139
第 140 図　３区№３地点軟Ｘ線写真観察結果 (左：実視　中：軟Ｘ線　右：解析結果) 140
第 141 図　３区№４地点軟Ｘ線写真観察結果 (左：実視　中：軟Ｘ線　右：解析結果) 141
第 142 図　植物珪酸体ダイアグラム 143
第 143 図　樹種同定顕微鏡写真 (左：横断面　中：接線断面　右：放射断面) 143
第 144 図　AMS 年代測定結果 (3 区試料№１～ 3) 144
第 145 図　ウイグルマッチング結果 (5 区試料№４～ 6) 144
第 146 図　３区北西壁 (№１～３地点) の花粉ダイアグラム 145
第 147 図　３区南東壁 (№４地点) の花粉ダイアグラム 145
第 148 図　５区№１地点の花粉ダイアグラム 146
第 149 図　５区№２地点の花粉ダイアグラム 146
第 150 図　５区№２地点の花粉ダイアグラム 147
第 151 図　５区№２地点の花粉ダイアグラム 147
第 152 図　JZ01 の花粉ダイアグラム：主な分類群のみ示す　(渡辺，未公表) 148
第 153 図　遺跡平面図（試料採取遺構：SK01 の位置） 160
第 154 図　SK01 断面図（試料採取層準） 160
第 155 図　暦年較正図 161
第 156 図　麓Ⅱ遺跡出土縄文土器 (有文) の組成 164
第 157 図　神西城縄張り・発掘調査区配置図 166
第 158 図　中近世陶磁器類の組成 167

表目次

表１　出土動物遺存体種名表 127
表２　麓Ⅱ遺跡出土動物遺存体観察一覧 128
表３　出雲湖陵道路における樹種同定結果 131
表４　植物珪酸体と母植物 138
表５　微化石概査結果 142
表６　AMS 年代測定結果 143
表７　調査区間及び JZ01 との対比 148
表８　AMS 年代測定結果 161
表９　麓Ⅱ遺跡出土土器類時期別計量表 162
表 10　麓Ⅱ遺跡出土土器類器種別計量表 163
表 11　麓Ⅱ遺跡出土縄文土器 (無文) の調整 164
表 12　坂本谷遺跡出土土器類時期別計量表 167
表 13　坂本谷遺跡出土土器類器種別計量表 167
表 14　京田遺跡出土遺物種別計量表 167
表 15　麓Ⅱ遺跡土器観察表 169
表 16　麓Ⅱ遺跡石器観察表 179

表 17　麓Ⅱ遺跡金属器観察表　180
表 18　麓Ⅱ遺跡銭貨計測表　180
表 19　麓Ⅱ遺跡木製品観察表　180
表 20　坂本谷遺跡土器観察表　183
表 21　坂本谷遺跡石器観察表　186
表 22　坂本谷遺跡金属器観察表　187
表 23　坂本谷遺跡銭貨計測表　187
表 24　京田遺跡土器観察表　187
表 25　京田遺跡石器観察表　188
表 26　京田遺跡金属器観察表　188

本文写真目次

写真 1　麓Ⅱ遺跡３区試料採取風景　4
写真 2　麓Ⅱ遺跡５区発掘作業風景　4
写真 3　坂本谷遺跡の現地説明会風景　5
写真 4　京田遺跡発掘作業風景　5
写真 5　木材顕微鏡写真Ⅰ　134
写真 6　木材顕微鏡写真Ⅱ　135

写真目次

図版 1　1. 神西城・１区遠景
2. 1 区北壁土層堆積状況
図版 2　1. 1 区中央ベルト土層堆積状況
2. 1 区中央ベルト土層堆積状況
図版 3　1. 1 区南壁土層堆積状況
2. 1 区南壁土層堆積状況
図版 4　1. 1 区 SK01・02 検出状況
2. 1 区 SK01 土層堆積状況
図版 5　1. 1 区 SK01・02 完掘状況
2. 1 区平坦部完掘状況
図版 6　1. 1 区岩塊土器溜り遺物出土状況
2. 1 区斜面完掘状況
図版 7　1. 1 区完掘状況
図版 8　1. 2 区横断ベルト土層堆積状況
2. 2 区南東壁土層堆積状況
図版 9　1. 2 区北西壁土層堆積状況
2. 2 区北東壁土層堆積状況
図版 10　1. 2 区縄文土器出土状況
2. 2 区倒木出土状況
図版 11　1. 2 区完掘状況
図版 12　1. 3 区第 1 遺構面遺構検出状況
2. 3 区第 1 遺構面完掘状況
図版 13　1. 3 区 SK01 埋土堆積状況
2. 3 区北西壁土層堆積状況
図版 14　1. 3 区北東壁土層堆積状況
2. 3 区第 2 遺構面 SX01 調査状況、第 2 遺構面遺物出土状況
図版 15　1. 3 区完掘状況
図版 16　1. 4 区第 1 遺構面遺構検出状況
2. 4 区第 1 遺構面完掘状況
図版 17　1. 4 区第 2 遺構面 SK01 ～ 05 検出状況

2．4区SK04遺物出土状況
図版18　1．4区第2遺構面SK05遺物出土状況
2．4区第2遺構面完掘状況
図版19　1．4区北西壁土層堆積状況
2．4区北東壁土層堆積状況
図版20　1．5区SD01(新)検出状況
2．5区SD01(新)完掘状況
図版21　1．5区SD01(古)遺物出土状況
2．5区SD01(古)遺物出土状況
図版22　1．5区SD01(古)遺物出土状況
2．5区SD01(古)遺物出土状況
図版23　1．5区SD01(古)護岸・堰出土状況
2．5区SD01(古)護岸・堰出土状況
図版24　1．5区SD01(古)矢板出土状況
2．5区SD01土層堆積状況
図版25　1．5区北東壁・SD01(古)土層堆積状況
2．5区南東壁・SD01(古)土層堆積状況
図版26　1．5区SD02杭・木材出土状況
2．5区北東壁・SD02土層堆積状況
図版27　1．5区完掘状況
図版28　1．1区SK02出土弥生土器・斜面出土土師器
2．1区出土遺物
図版29　1．1区出土鉄器・銭貨・石器
2．2区Ⅲ層出土縄文土器
図版30　1．2区Ⅲ層出土縄文土器
図版31　1．2区Ⅲ層出土縄文土器
2．2区Ⅲ層出土遺物、Ⅰ・Ⅱ層出土遺物
図版32　1．3区Ⅳ層出土縄文土器
2．3区Ⅳ層出土縄文土器
図版33　1．3区Ⅳ層出土縄文土器
2．3区Ⅳ層出土縄文土器
図版34　1．3区Ⅳ層出土縄文土器
2．3区Ⅳ層出土縄文土器
図版35　1．3区Ⅳ層出土縄文土器
2．3区Ⅳ層出土縄文土器
図版36　1．3区Ⅳ層出土縄文土器
2．3区Ⅳ層出土縄文土器
図版37　1．3区Ⅳ層出土縄文土器
2．3区Ⅳ層出土縄文土器
図版38　1．3区Ⅳ層出土縄文土器
2．3区Ⅳ層出土土製品
図版39　1．3区Ⅳ層出土石器
2．3区Ⅳ層出土石器
図版40　1．3区Ⅳ層出土石器
2．3区Ⅳ層出土石器・Ⅰ層出土銭貨、4区Ⅰ層出土青磁
図版41　1．4区SK01・02・04出土縄文土器
2．4区SK05・落ち込み・流路跡出土縄文土器
図版42　1．4区Ⅲ層出土縄文土器
2．4区Ⅲ層出土石器
図版43　1．5区SD01(古)出土弥生土器
2．5区SD01(古)出土弥生土器
図版44　1．5区SD01(古)出土遺物
2．5区SD01(古)出土土師器
図版45　1．5区SD01(古)出土土師器
図版46　1．5区SD01(古)出土土師器
図版47　1．5区SD01(古)出土土師器
2．5区SD01(古)出土土師器・石器
図版48　1．5区SD01(古)出土木製品
図版49　1．5区SD01(古)出土木製品
図版50　1．5区SD01(古)出土木製品
図版51　1．5区SD01(古)出土木製品
図版52　1．5区SD01(古)出土木製品
図版53　1．5区SD01(古)出土木製品
図版54　1．5区SD02出土縄文土器・石器・木製品
図版55　1．5区Ⅲ層出土土師器・須恵器
2．5区Ⅲ層出土土師器
図版56　1．5区Ⅲ層出土遺物
2．5区Ⅲ層出土木製品・Ⅱ層出土白磁
図版57　1．5区Ⅱ層出土須恵器
2．5区Ⅱ層出土土師器・須恵器・瓦質土器・石器

図版 58　1. 麓Ⅱ遺跡出土動物遺存体
図版 59　1. 坂本谷遺跡遠景
2. 坂本谷遺跡遠景
図版 60　1. 調査区南東壁土層堆積状況
2. 調査区南東壁土層堆積状況
図版 61　1. 斜面ピット群検出状況
2. 斜面ピット群完掘状況
3. 斜面ピット群完掘状況
図版 62　1. Cラインベルト中央土層堆積状況
2. Cラインベルト西側土層堆積状況
図版 63　1. Cラインベルト西側土層堆積状況
2. 3ラインベルト南半土層堆積状況
図版 64　1. 3ラインベルト北半土層堆積状況
2. 平坦部遺構検出状況
図版 65　1.SK01・02 調査状況
2.SK03・05 調査状況
図版 66　1.SB05 完掘状況
2.SB07 完掘状況
図版 67　1.SB03・08 完掘状況
2.SB07 周辺 P382・383 遺物出土状況
図版 68　1. 完掘状況
図版 69　1. 斜面 P123・平坦部建物周辺遺構出土遺物
2.SB05・02 周辺ピット出土遺物
図版 70　1.SB07・周辺ピット出土遺物
2.SB07 周辺 P200・383・SX02 出土遺物
図版 71　1.SX02 出土遺物
2.SX03・SB08・周辺ピット出土遺物
図版 72　1. Ⅲ層出土遺物
図版 73　1. Ⅲ層出土遺物
2. Ⅲ層出土鉄器
図版 74　1. Ⅲ層出土鉄器・銭貨、同 X 線写真
2. Ⅰ・Ⅱ層出土遺物
図版 75　1. Ⅰ・Ⅱ層出土石器・石製品
2. Ⅰ・Ⅱ層出土鍛冶滓・鉄器
図版 76　1. 京田遺跡 1 区遠景
2. 京田遺跡 1 区全景
図版 77　1.I1 ～ G2 北壁土層堆積状況
2.F2 ～ D3 北壁土層堆積状況
図版 78　1.C3 北壁土層堆積状況、中央ベルト土層堆積状況
2.A8 ～ C9 南壁土層堆積状況、D9 ～ E10 南壁土層堆積状況
図版 79　1.SB01・02・05・06 検出状況
2.SD04・ピット検出状況
図版 80　1.SI01 検出状況
2.SB05・06 完掘状況
図版 81　1.SD04 土層堆積状況・完掘状況、SI01 土層堆積状況・完掘状況
2.SB02・05 完掘状況
図版 82　1.SB03・04 完掘状況
2.SB03、SD01・02 完掘状況
図版 83　1.SB01 柱穴 P18・117・15・16 土層堆積状況
2.SB05 柱穴 P59・64・60・69 土層堆積状況
図版 84　1. 調査区北側完掘状況
2. 遺構出土遺物、Ⅱ層出土遺物
図版 85　1. Ⅰ層出土遺物
2. Ⅰ層出土遺物

第 1 章　調査の経過

第 1 節　調査にいたる経緯と経過

1．事業計画の概要

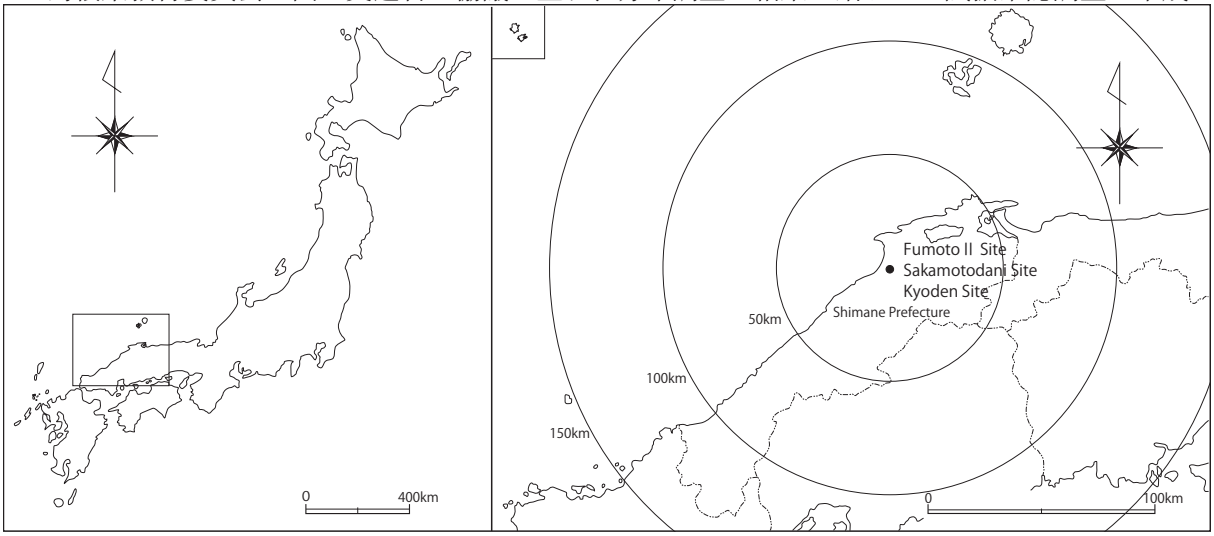
一般国道 9 号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離 750㎞の、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は島根県下でも例外ではない。出雲市周辺においては、通過車両と生活車両が混在し、県中西部方面から出雲市中心部への流入部付近で交通混雑が発生しており、交通事故の多発や地域経済活動への悪影響が懸念されている。

こうした状況のもと、現道の渋滞対策や交通危険個所を解消し、一般国道のバイパスとして高速道路の連続性をできるだけ早く確保するために、国土交通省により出雲湖陵道路の事業化が図られ、平成 18 年 3 月に出雲仁摩線として都市計画決定された。一般国道 9 道 (出雲湖陵道路) は、出雲市地井宮町の山陰自動車道出雲インターチェンジを起点として、同市湖陵町三部の湖陵インターチェンジ (仮称) までを結ぶ延長 4.4㎞の自動車専用道路として、平成 20 年度に事業が着手された。

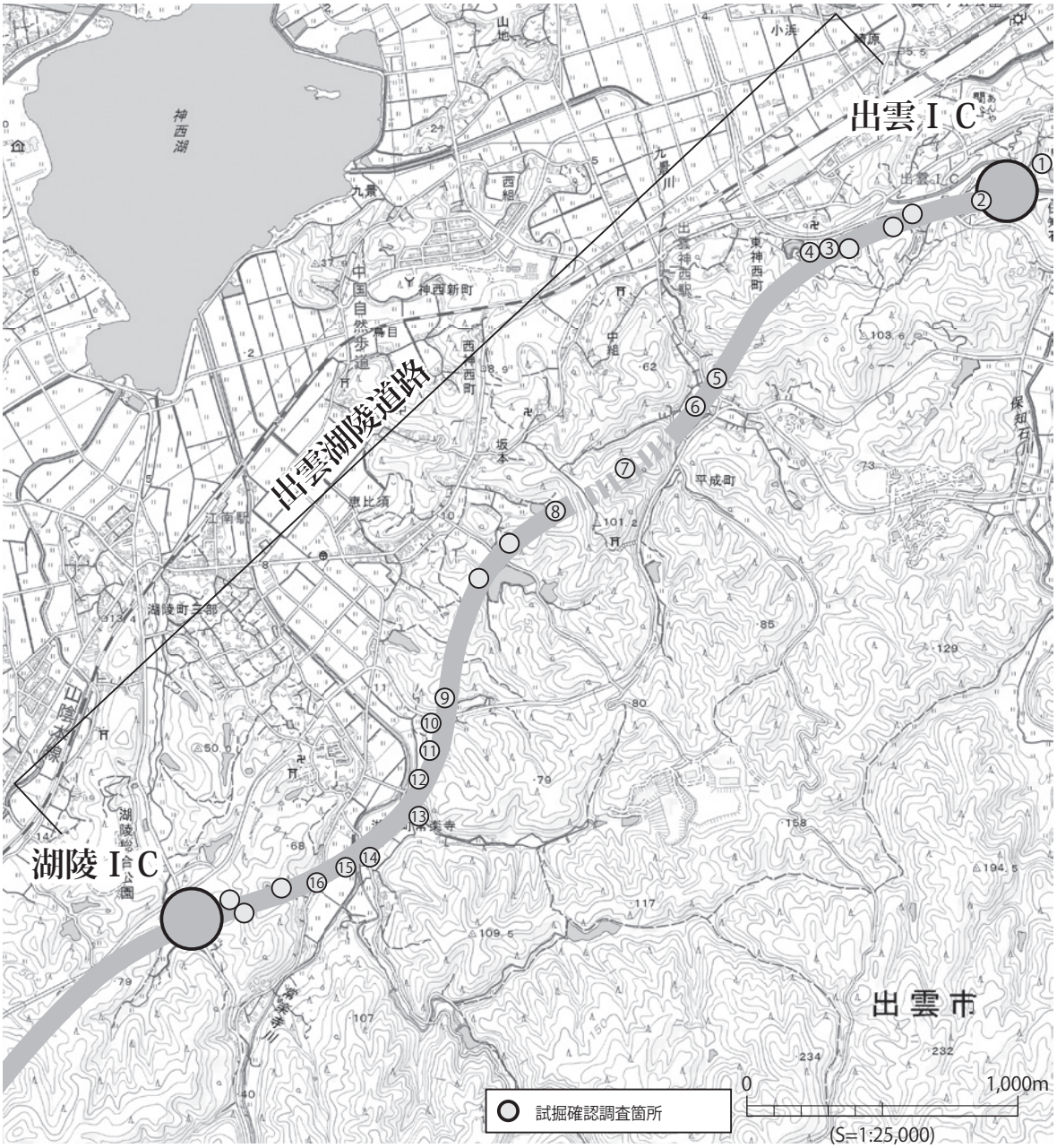
2．埋蔵文化財保護部局への照会と調整

計画策定の段階での重要遺跡の存否照会によって、尼子十旗に数えられる神西城跡がルート上にあることが判明した。島根県教育委員会と国土交通省は協議を重ね、トンネル工法に変更することで保存することが決まった。事業化に際して、国土交通省から島根県教育委員会に対して事業予定地内における埋蔵文化財の有無について照会が行われた。これを受けて島根県教育委員会では出雲市教育委員会の協力のもと、平成 22 年 3 月に分布調査を実施し、周知の遺跡に加えて試掘確認調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘確認調査が必要な旨を平成 22 年 5 月 25 日付け島教文財第 233 号で回答した。その後も工事用道路や調整池整備等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。

島根県教育委員会は国土交通省と協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成



第 1 図　麓 II 遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡の位置



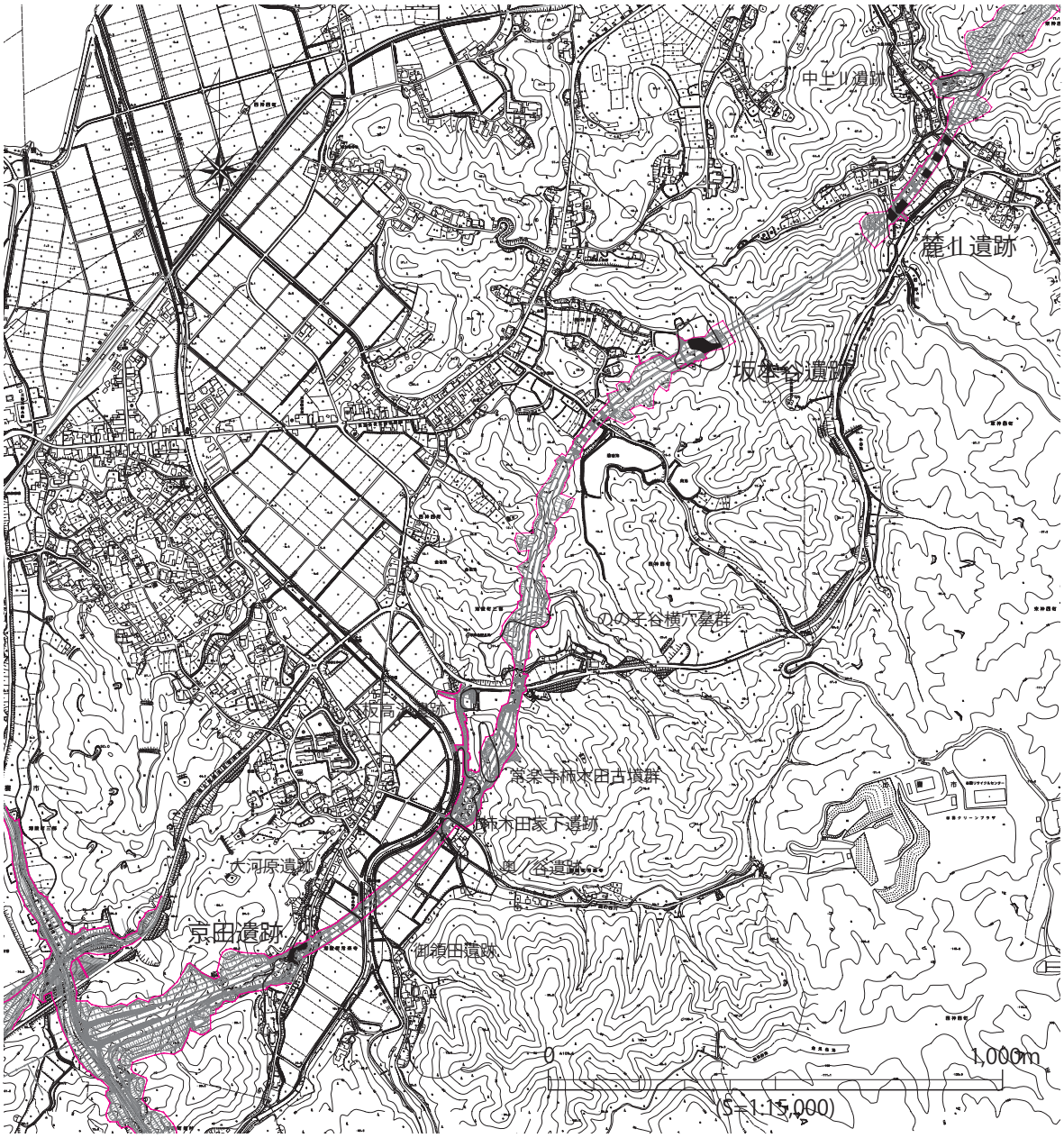
No.	遺跡名	所在地	種別	調査
1	浅柄Ⅲ遺跡	出雲市知井宮町	集落跡	平成 28 年度
2	柳ノ内Ⅱ遺跡	出雲市知井宮町	古墳	ー (平成 24 年度試掘調査)
3	玉泉寺裏遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
4	九景川遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
5	中上Ⅱ遺跡	出雲市東神西町	集落跡	
6	麓Ⅱ遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26・27 年度
7	神西城跡	出雲市東神西町	城跡	ー (工法変更)
8	坂本谷遺跡	出雲市西神西町	集落跡	平成 27 年度
9	のの子谷横穴墓群	出雲市湖陵町	古墳・横穴墓	平成 27 年度
10	板高池遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	ー (平成 26 年度試掘調査)
11	常楽寺柿木田古墳群	出雲市湖陵町	古墳	(一部工法変更)
12	柿木田家下遺跡	出雲市湖陵町	散布地	
13	奥ノ谷遺跡	出雲市湖陵町	散布地	
14	御領田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡・貝塚	
15	大河原遺跡	出雲市湖陵町	散布地	ー (平成 27 年度試掘調査)
16	京田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	平成 27 年度～

第 2 図　事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地

22 年度から国庫補助事業により実施し、以後、予定地内の各埋蔵文化財の調査・取り扱いについて具体的な検討が行われた。麓Ⅱ遺跡は平成 25 年 10 月に、坂本谷遺跡は平成 25 年 8 ～ 9 月に、京田遺跡は平成 27 年 5 月に試掘確認調査を実施し、本発掘調査が必要な範囲等を定めている。

3．法的手続き

麓Ⅱ遺跡は平成 26 年 1 月 31 日付け国中整松工第 85 号及び平成 27 年 3 月 23 日付け国中整松調工第 95 号、坂本谷遺跡は平成 26 年 3 月 24 日付け国中整松工第 102 号で、京田遺跡については平成 27 年 9 月 18 日付け国中整松調設第 65 号で文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による通知がそれぞれ国土交通省から島根県教育委員会教育長あて提出された。それに対して島根県教育委員会は、試掘確認調査の結果を踏まえ、麓Ⅱ遺跡は平成 26 年 2 月 6 日付け島教文財第 15 号の 68、平成 27 年 3 月 23 日付け島教文財第 35 号の 112、坂本谷遺跡は平成 26 年 3 月 25 日付島教文財第 15 号の 85、京田遺跡は平成 27 年 9 月 18 日付け島教文財第 120 号の 89 でそれぞれ記録作成



第 3 図　出雲湖陵道路改築事業と調査区 (1/15,000)

のための発掘調査の実施を勧告している。

各遺跡は埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなり、国土交通省と工程上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による通知は、下記により埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。

麓Ⅱ遺跡 1 ～ 4 区　平成 26 年 5 月 27 日付島教埋第 134 号
坂本谷遺跡　平成 26 年 10 月 14 日付島教埋第 245 号の 2
麓Ⅱ遺跡 5 区　平成 27 年 5 月 20 日付島教埋第 145 号
京田遺跡 1 区　平成 27 年 10 月 2 日付島教埋第 145 号の 2

現地調査終了後、各遺跡の取扱は記録保存とすることとなり、下記により島根県教育委員会教育長から松江国道事務所長あて終了報告を提出した。

麓Ⅱ遺跡 2 ～ 4 区　平成 26 年 8 月 29 日付島教文財第 774 号
麓Ⅱ遺跡 1 区・坂本谷遺跡　平成 27 年 2 月 13 日付島教文財第 829 号
麓Ⅱ遺跡 5 区　平成 27 年 9 月 18 日付島教文財第 586 号
京田遺跡 1 区　平成 28 年 2 月 8 日付島教文財第 873 号

第 2 節　発掘作業と整理作業の経過

1．麓Ⅱ遺跡

発掘作業の概要　調査対象地は、暫定 2 車線で工事が行われる橋台・橋脚部で、西側からそれぞれを 1 ～ 5 区とした。残り 2 車線分の橋脚位置は変更される可能性があるため、今回の発掘調査の対象からは除外されたが、将来的に施工される際には発掘調査が必要となる箇所が残っている。

写真 1　麓Ⅱ遺跡 3 区試料採取風景

写真 2　麓Ⅱ遺跡 5 区発掘作業風景

工事工程の関係上、発掘調査は平成 26 年 5 月 28 日～ 10 月 16 日にかけて、2・3・4・1 区の順で行い、5 区は平成 27 年 6 月 15 日～ 8 月 6 日に実施した。各調査区は、試掘確認調査によって判明している包含層まで重機掘削を行い、その後人力による発掘作業を行った。

2 区は標高 7.5m まで重機で掘り下げ、その後縄文後～晩期にかけての包含層を掘削した。調査は湧水を切るための側溝で層準を確認しながら掘り下げ、遺物が出土しなくなったところで停止した。包含層は砂主体の河道堆積層と考えられ、遺物が出土する範囲は限られた。河道に埋もれた流木や周辺部に根差した立木のほかに遺構を確認することはできなかった。7 月 8 日には完了協議を行い、調査残務を確認した。翌 7 月 9 日には完掘状況を撮影し、7 月 14 日には地形測量を終えて埋め戻しを行った。

３区は６月 30 日に重機掘削を行い、標高 6.5m 前後で第１遺構面を検出した。灰色系の粘土層上面には多数のピットが掘り込まれており、埋土が黒褐色系であったことから検出は容易であった。７月８日に検出状況を撮影し、半裁・測量を進めていった。７月 18 日にはピットをほぼ完掘し、完掘状況の撮影と測量を行い、第１遺構面の調査を終えた。試掘確認調査によって下層に縄文後期の包含層があることが確認されていたことから、７月 22 日から再び重機掘削を行い、標高５m付近で包含層を検出した。湧水が著しいため水切り側溝の掘削と壁の精査を繰り返しながら、徐々に掘り下げていった。包含層には縄文後期の土器・石器のほか、獣骨と見られる骨片が多く含まれていたが、微細で脆弱なため遺存状態が良いものを除いてほとんど回収することはできなかった。７月 25 日に中間協議を行い以後の調査方法等について確認し、７月 30 日から第２遺構面の精査を行った。検出した土坑と流路跡を完掘した８月１日には完了協議を行い、記録作業を終えた８月 11 日には自然科学分析の試料採取を行って埋め戻しに着手した。

４区は７月７日から表土掘削を開始、３区と連続すると考えられる粘土層を検出し、３区と同様に小さなピットを多数確認したが、現地で建物柱穴の配置を認識することはできなかった。また、遺構覆土と同じ土砂が広範囲で遺構面を被覆していたが、遺物を確認することはできなかった。遺構検出状況を撮影した後、７月 15 日から精査と測量を行い、遺構完掘と記録が終わった７月 28 日には重機掘削を開始し、標高 4.8 ～ 4.4m で３区と連続するとみられる縄文後期の包含層を検出した。包含層遺物は３区に比べて少なく、獣骨等の動物遺存体はほとんど検出しなかったが、第２遺構面では土坑を５基確認し、うち１基からは土器がまとまって出土した。８月６日にはこれらの土坑と流路跡を完掘し、写真撮影、記録作業を行い、８月８日に完了協議を行った後、８月 12 日にすべての作業を終了して埋め戻しに着手した。

１区は丘陵裾部に設置される橋台部で、丘陵斜面から平坦部にかかる範囲である。調査は隣接する市道の付け替えが終了した後の、９月 17 日から開始した。斜面は造成土が厚く堆積し、重機掘削が終了した９月 29 日から、人力による包含層掘削を行った。包含層からは土師器小片が出土したが少量であった。10 月１日から遺構検出を行い、急傾斜する地山上面でピット群と溝状遺構を検出した。平坦部は耕作土の下から須恵器・土師器が出土し、標高 7.5 ～ 8m で河道に堆積したとみられる無遺物の砂礫層を検出した。砂礫層上面では流木あるいは倒木が検出されたほか、浅い土坑を２基検出し、10 月９日にはすべての遺構を完掘した。10 月 10 日の空中撮影後、完了協議を経て記録作業を行い、10 月 16 日にすべての調査を終了して埋め戻しを行った。

写真３　坂本谷遺跡の現地説明会風景

写真４　京田遺跡発掘作業風景

５区は水田部東端の橋脚予定地で、平成 27 年６月 15 日から耕作土等の重機掘削を行い、標高 6.5m で検出した包含層から人力掘削を行った。包含層掘削は

6 月 19 日から着手し、平安～中世の上層、奈良～平安の下層を順次掘り下げ、砂・粘砂上面において須恵器を含む溝状の落ち込み SD01(新) を検出した。最下面で木製品を検出したが、断ち割りをした結果、木製品は下層に含まれることが判明し、古段階の溝の存在がこの段階で予見された。その後掘り下げを進めたところ、SD01(古) から木製品・木材が多量に出土したため、乾燥防止の処置をしたうえで撮影・実測を行い、7 月 15 日から随時取り上げていった。7 月 24 日にはベースとなる砂礫層上面で新たに SD02 を検出し、すべてを完掘した 8 月 3 日には空中撮影を行った。8 月 4 日には自然科学分析の試料を採取、8 月 6 日には現地完了協議を行い、埋め戻しを行った。

2．坂本谷遺跡

発掘作業の概要　調査対象地は、中世城館神西城の西側に開口するトンネル坑口部の下方、谷奥の平坦地から丘陵斜面にかけて位置する。現地調査は、麓Ⅱ遺跡 1 区が終了した後の、平成 26 年 10 月 16 日から開始した。斜面裾から平坦部にかけては、試掘確認調査の結果から包含層が厚く堆積していると考えられたが、重機掘削の過程でそのほとんどが盛土・地滑土であるこが判明し、重機によりこれを取り除いた。10 月 28 日からはグリッドと、調査区を縦断・横断する土層観察ベルトを設定して人力掘削を行い、斜面最上部と平坦地の 2 か所に遍在するピットを多数検出した。上部のピットは歪なものが多く、また、地面を加工した痕跡もないことから柵列等の防御施設である可能性を想定して調査を行った。調査区の中ほどは遺構が全く存在せず、古くに堆積したと見られる谷堆積土砂を確認したところで掘削を停止した。平坦部のピットは上部ピット群と比して掘り方がしっかりとし、中世土師器が多数出土したことから該期の集落であることが明らかとなったが、ピットが密集しており建物配置を現地で確認することはできなかった。遺構掘削と測量作業を併行して進め、12 月 18 日には除雪と清掃を実施して、翌 19 日に空中撮影を行った。12 月 19 日には調査収束に向けた完了協議を行い、測量作業と壁面の実測を残して 12 月 22 日に年内の作業を終えた。年が明けた平成 27 年 1 月 15 日に現地調査を完了し、2 月 21 日には国土交通省の協力を得て現地説明会を開催し、地元住民 20 名の参加があった。

3．京田遺跡

発掘作業の概要　調査対象地は、常楽寺川左岸の丘陵東斜面の掘削工事予定地で、平成 27 年 10 月 13 日から調査を開始した。重機掘削後、グリッドを設定して人力掘削を行った。調査区のほとんどは造成により削平され、遺構・遺物が確認できたのは調査区の北側のみであった。堆積土の大半は客土で、当初の包含層は残っているところでも厚さ 5 ㎝以下という状況で、出土遺物はごくわずかであった。11 月 12 日には造成土・包含層掘削を終え、遺構の検出作業を行い、古代と推定される建物跡とこれに伴うと見られる浅い溝を検出した。柱穴は半裁・撮影・実測を行い、12 月 8 日にはすべての遺構を完掘し、空中撮影を行った。その後測量等の記録作業を行い、完了協議を経て 12 月 15 日にすべての調査を終了した。

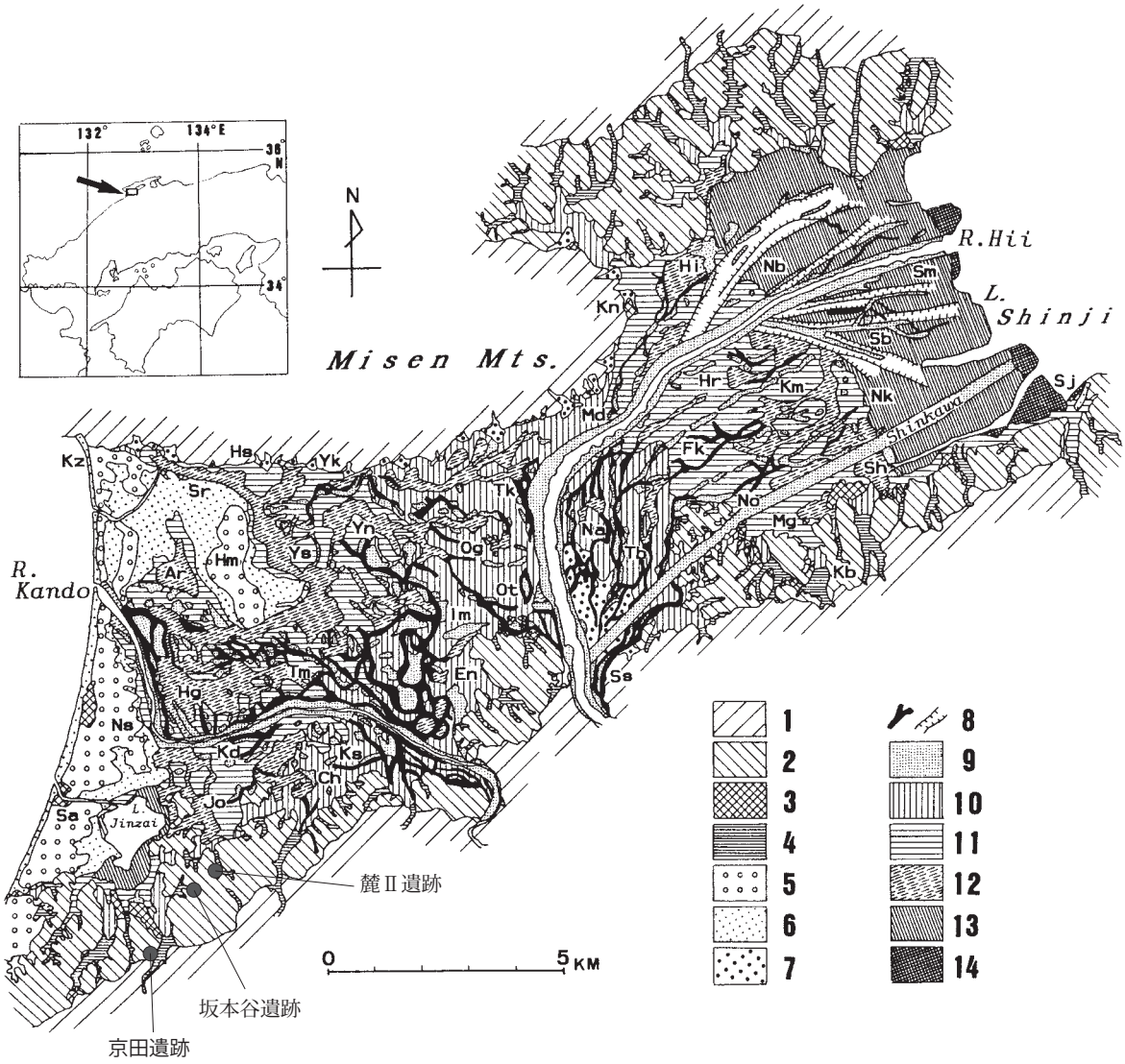
4．整理等作業

遺物の水洗・注記・接合作業は各年度の現地調査に並行して実施し、冬期は埋蔵文化財調査センターにて復元・実測等の整理作業を行った。平成 28 年度は各遺跡出土品を通覧して非掲載品についても分類し、遺跡の全体像が把握できるよう計量を行った。現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても、出土品と併せて総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、写真、割付、原稿執筆を行った。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本書で報告する麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡は出雲平野の南西、出雲市東神西町から西神西町にかけて分布し、第５図に示すとおり、丘陵地から谷底平野に立地する。以下、周辺の地理的環境の変遷を概観しておきたい。縄文前期の海進期は、最高海水準が現在より３～４ｍ高く、出雲平野には島根半島を島状に分離する内湾が形成されていたと考えられている。麓Ⅱ遺跡で活動が認められる縄文時代後期には海退がはじまり、縄文晩期から弥生時代には、海退によって形成された標高５ｍ以上の三角州Ⅰ面により半島は陸続きとなり、この周辺一帯には後の『出雲国



1. 山地，2. 丘陵地，3. 段丘，4. 谷底平野，5. 砂丘地，6. 砂州，7. 扇状地・沖積錐，8. 旧河道，9. 微高地，10. 三角州Ⅰ面，11. 三角州Ⅱ面，12. 低湿地，13. 埋立・干拓地Ⅰ，14. 埋立・干拓地Ⅱ

Sm: 島村，Nb: 灘分，Hi: 平田，Kn: 国富，Md: 美談，Sj: 宍道，Sh: 荘原，Nk: 中洲，Sb: 三分市，Km: 黒田，Hr: 原鹿，Fk: 福富，No: 直江，Mg: 三絡，Kb: 神庭，Na: 名島，Tb: 高村，Ss: 出西，Ot: 大津，Og: 荻杼，Tk: 武志，Im: 今市，En: 塩冶，Yn: 矢野，Ys: 八島，Tm: 高松，Ks: 古志，Ch: 知井宮，Kd: 神門，Jo: 神西沖，Hg: 東園，Ns: 西園，Ar: 荒木，Kz: 杵築，Sr: 修理免，Hm: 浜山，Hs: 菱根，Yk: 遙堪，Sa: 差海

第４図　遺跡周辺の微地形分類図 (1/150,000)(林 1991 から転載)

風土記』に「神門水海」と記載される潟湖が誕生する。その後より低位の三角州Ⅱ面が湾に向かって成長して平野は拡大し、近世初頭には入海は現在の神西湖にその面影を残す程度にまで埋積されたと考えられている。

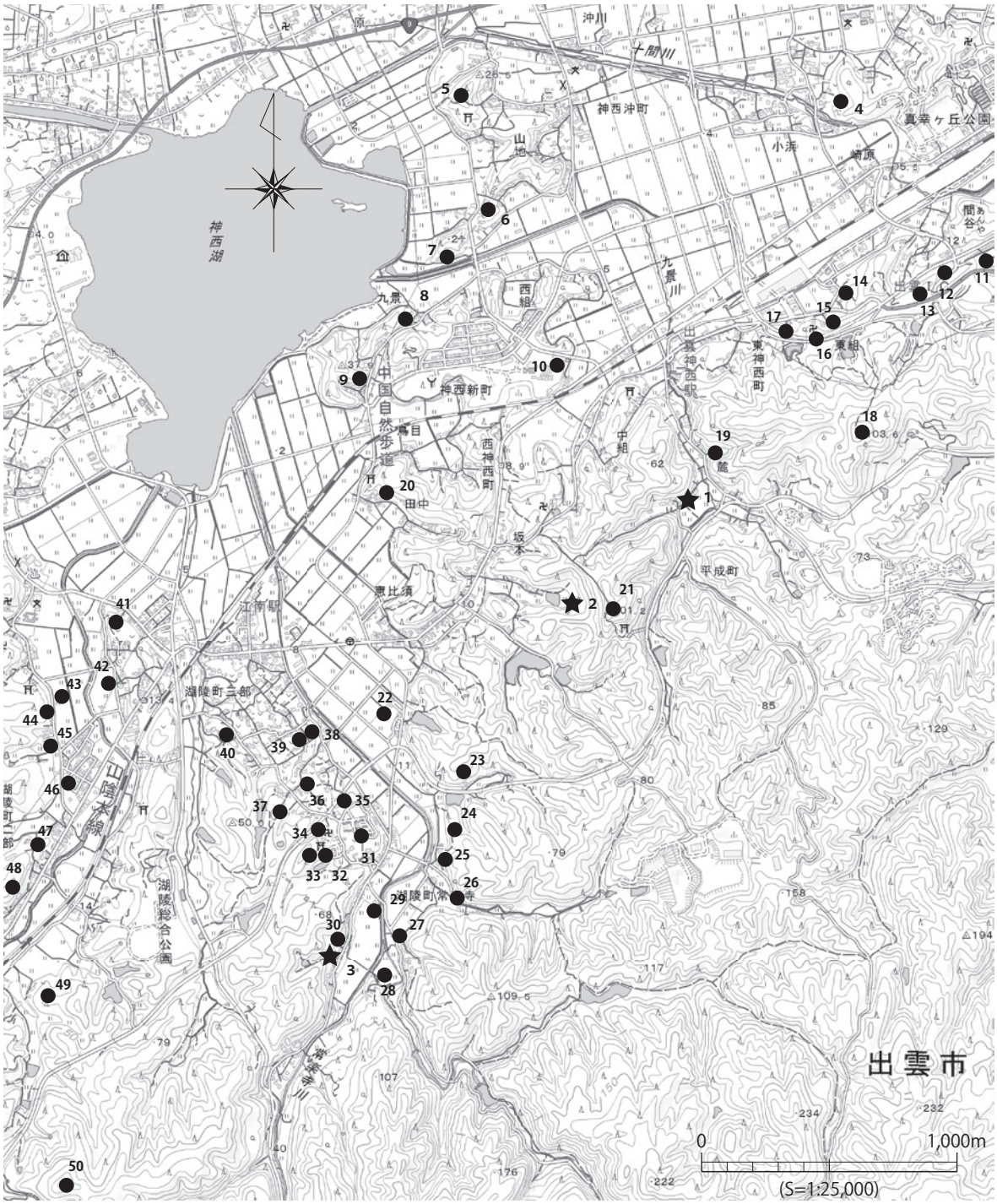
第２節　歴史的環境

当地域の歴史的展開においては、古来より良好な港湾として利用され、常に外界との接点であった入海地帯と、南から派生する丘陵及びその谷に形成された谷底平野の結節点という地理的特性が大きく作用していたことは論を俟たない。以下、こうした観点から当地の歴史的展開について概観しておきたい。

縄文時代　旧石器時代の遺跡は出雲平野ではまだ確認されていない。縄文時代早期になると菱根遺跡や上長浜貝塚などの遺跡が確認されるようになる。神西湖南岸の御領田遺跡では縁帯文期の方形竪穴住居が検出されている (湖陵町教育委員会 1996)。当該期の住居址は出雲山間部では近年のダム関連の調査によって明らかにされつつあるが、平野部では稀有な事例に属する。京田遺跡や麓Ⅱ遺跡では住居址は見つかっていないが該期の遺物がまとまって出土しており、周辺域で発見例が増加する可能性がある。縄文時代晩期になると、出雲平野南部の小支谷では遺構そのものは検出されていないものの、土器や打製石斧など該期の遺物が多数確認されるようになり、この頃出雲平野縁辺部に初期農耕集落が成立していたことを物語る。代表的な事例としては三田谷Ⅰ遺跡 (島根県教育委員会 2000)、保知石遺跡 (島根県教育委員会 2005) がある。

弥生時代　出雲平野における弥生時代前期の遺跡としては、原山遺跡、矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などがある。遺跡の性格が判明する事例は乏しいが、原山遺跡では前期の配石墓が確認されており、出雲部における砂丘立地の弥生初期墓制として注目される (村上・川原 1979)。当地域周辺では九景川遺跡や保知石遺跡などで該期の遺物が散発的に検出されてはいるものの、集落全体の様相は不明と言わざるを得ない。この地域で遺跡が増加するのは弥生時代中期中葉以降であり、著名な例としては古志本郷遺跡、下古志遺跡、田畑遺跡、知井宮多門院遺跡等があり、当地で古墳時代前期初頭まで継続的に営まれる大規模集落は当該期に開始される例が多い (藤永 2005・米田 2006)。弥生時代後期に入ると出雲平野中央部・北部では姫原西遺跡、山持遺跡、青木遺跡など大規模な遺跡が増加する傾向にある。入海南岸地域周辺では明確な集落は確認できていないものの、調査された遺跡の大半からは当該期の遺物がそれぞれまとまって出土していることから、この時期、集落の増加傾向にあったことはほぼ間違いないことと思われる。墳墓は玉泉寺裏遺跡で弥生時代終末期から古墳時代初頭の木棺墓が若干検出されているのみであり、出雲平野中央部・北部にみられる四隅突出型墳丘墓は現在のところ確認できていない。

古墳時代　出雲平野の遺跡は弥生時代中期中葉以降順調な発展を続けてきたが、こうした様相が大きな変化を見せるのが古墳時代前期段階である。従来から指摘されているとおり、当地域においては西谷９号墓に後続する前期前半の有力首長墓を現状では確認できない状況にある (渡邊 1986)。９号墓に隣接する７号墓は近年の確認調査で四隅を削り出す特異な構造が注目されたが (出雲市教育委員会 2006)、規模的には９号墓と比較すると遥かに見劣りし、かつ築造時期も出土土器から前期後葉まで下る可能性が高い。その他の前期古墳としては、山地古墳、大寺１号墳、



１.麓Ⅱ遺跡　２.坂本谷遺跡　３.京田遺跡　４.神門横穴墓群　５.佐伯神社古墳　６.山地古墳　７.湖東屋山古墳群　８.正久寺横穴墓群　９.九景川横穴墓群　10.神待山横穴墓群　11.間谷東古墳　12.間谷西Ⅱ遺跡　13.間谷西古墳群　14.浜井場古墳群15.御崎谷遺跡　16.玉泉寺裏遺跡　17.九景川遺跡　18.北光寺古墳　19.中上Ⅱ遺跡　20.田中谷貝塚　21.神西城跡　22.三部竹崎遺跡　23.のの子谷横穴墓群　24.常楽寺柿木田古墳群　25.柿木田家下遺跡　26.奥ノ谷遺跡　27.御領田遺跡　28.滝ノ尻遺跡　29.大河内遺跡　30.産の岩古墳　31.常楽寺遺跡　32.安子神社横穴墓群　33.高丸城跡　34.西蓮寺山古墳群　35.庭反Ⅰ遺跡・庭反Ⅱ遺跡　36.雲部Ⅰ遺跡・雲部Ⅱ遺跡　37.雲部古墳群　38.森の前古墳群　39.竹崎遺跡　40.倉道古墳　41.中島遺跡　42.中島下遺跡　43.三部八幡下遺跡　44.八幡宮横穴墓群　45.保知石谷遺跡　46.姉谷恵比須遺跡　47.只谷遺跡　48.姉谷城跡　49.柿木田古墳　50.要害山城跡

第５図　麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)

浅柄Ⅱ古墳、権現山古墳などが知られるが、時期不明の権現山古墳を除き、いずれも前期後葉に下るものである。

一方、集落遺跡は、従前は古墳時代前期になると減少すると理解されていたが、古志本郷遺跡や中野清水遺跡のように前期中葉頃まで継続的に集落が営まれる事例も存在し、墳墓の動向とは単純にはリンクしないようである (松山 2002)。しかし、小谷式後半期には集落数が減少する傾向は認められるようであり、いかなる要因に基づくものか、その背景が注目される。

古墳時代前期末から中期にかけても出雲平野の様相は今一つ不明確だが、当地域周辺ではいくつか重要な様相が確認できる。一つは、山地古墳、浅柄Ⅱ古墳、間谷東Ⅰ古墳のような礫床を備える古墳の出現である。山地古墳は小規模な円墳でありながら筒型銅器や銅鏡を備える、当地域で豊富な副葬品を有する古墳として位置づけられる。さらに間谷東 1 号墳は奥才型木棺 (鹿島町教育委員会 2002) と称される棺内礫敷組合式木棺の埋葬施設を備える中期初頭の古墳である。同タイプの埋葬施設は北部九州から北近畿にかけて分布し、当時の海浜部に立地する中小古墳被葬者層に広域的な地域間交渉が存在していことを物語る。こうした特異な古墳群の出現は対外交渉結節点として重要な当地域の地理的特性を雄弁に物語るものと言えよう。

古墳時代中期中葉には全長 64m の大形前方後円墳である北光寺古墳が築造される。当古墳は出土遺物や石棺残片から中期前半～中葉に編年され、同時期としては出雲最大の古墳であり、その突発的な出現の背景の解明は出雲平野の地域史を再構築する上で大きな課題である (島根県古代文化センター 2007)。

古墳時代後期になると、出雲平野では大念寺古墳や上塩冶築山古墳など、全国的にも著名な巨石墳が相次いで築かれ、山代二子塚古墳、山代方墳に代表される出雲東部勢力と拮抗関係にあった出雲西部の大首長の奥津城と理解されている (渡邊 1986)。当地域にほど近い神門川左岸地域でも豊富な副葬品が出土した前方後円墳である妙蓮寺山古墳、圭頭大刀が出土し精美な切石づくりの横穴式石室を有する放れ山古墳などが点在する神門古墳群が存在し、大念寺古墳・上塩冶築山古墳等の大首長層を補佐する第 2 クラスの首長墓域として位置づけられている (大谷 1997)。こうした巨石墳の背景には当然平野の開発の進展が想定されようが、今のところ当該期における大規模な集落は出雲平野では確認できず、鍛冶関連等の生産遺跡の断片を知り得るのみである (角田 2006)。こうした大形古墳の築造が停止されるのとほぼ期を同じくして平野南部の丘陵には上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群などの大規模な横穴墓群が営まれるようになる。

古代　麓Ⅱ遺跡・京田遺跡の位置する神門水海南岸域は奈良時代の神門郡滑狭郷に属す。出雲平野における官衙関連遺跡は近年の発掘調査の進展によりその解明が飛躍的に進み、神門郡は出雲市腰本郷遺跡 (島根県教育委員会 2003) が、出雲郡家の関連施設として斐川町後谷Ⅴ遺跡 (斐川町教育委員会 1996) が比定されており、その他に神門郡内では天神遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、尾山遺跡、古志遺跡などが官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。また、九景川遺跡 (島根県教育委員会 2008) では、奈良時代から平安時代初期の建物跡や遺物が多数確認されている。なかでも桁行 14m を測る大形の掘立柱建物や漆付着土器などは、その性格が注目されるところである。さらに、浅柄遺跡 (出雲市教育委員会 2000) には 7 ～ 8 世紀にかけての多数の掘立柱建物が検出されている。両遺跡が所在する出雲平野南縁部には古代山陰道が通じていたと推定されることから、その関係の解明も今後の調査研究の課題の一つである。

官衙遺跡以外では、寺院跡として神門寺境内廃寺、長者原廃寺が古くから知られているほか、墳墓遺跡としては西日本では稀な蕨手刀が出土した小坂古墳石櫃、方形マウンドを備え石櫃が出土した光明寺３号墓、石製骨蔵器が使用されていた菅沢古墓や朝山古墓などが知られている。

中世　神門水海周辺の中世の遺跡としては、冒頭に述べた上長浜貝塚が特筆される。中世の貝塚としては全国屈指の規模を備え、土錘や鉄製釣針など多数の漁撈具の出土から専業的な漁撈集団の存在が推定される。上長浜貝塚の他にも神門水海周辺では九景川遺跡をはじめ当該期に属する小規模な貝塚が幾つか知られており、その成立要因の一つに当該期における神門水海の拡大といった自然環境変化の要因も今後検討課題として俎上にのせる必要があろう。

出雲平野において括目すべきものとしては蔵小路西遺跡で検出された居館跡が挙げられる。これは一町四方の大溝に囲まれた中に多数の建物を配置する方形居館跡で、出土した陶磁器類から 12 世紀後半から 15 世紀にかけてのものと考えられ、朝山氏または塩冶氏の居館である可能性が指摘されている (島根県教育委員会 1999a)。室町時代から戦国時代にかけては山城も多数築かれるようになる。神門水海南岸の代表的な山城としては神西氏代々の居城であり出雲十旗に数えられた神西城が挙げられ、最近の分布調査に加えて、麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡の調査では丘陵斜面において防御施設と考えられる柵列状の遺構を確認しており、従前の推定範囲より遥かに広域な縄張りを有する山城であることが明らかになりつつある。また、坂本谷遺跡では 11 世紀から 14 世紀にかけての建物跡を多数検出し、建物規模が小さく遺物もほとんど伴わない農村集落的な麓Ⅱ遺跡の様相と異なる点が注目される。

そのほかの中世集落としては、ミニチュア五輪塔が出土した渡橋沖遺跡 (島根県教育委員会 1999b)、鍛冶炉などが検出された築山遺跡 (出雲市教育委員会 2007) などが挙げられる。墳墓例としては、青磁の優品を出土した荻杼古墓 (近藤 1969) があり、当該期の木棺墓は余小路遺跡や姫原西遺跡、蔵小路西遺跡などで多数確認されている。

【参考文献】

林正久 1991「出雲平野の地形発達」『地理科学』第 64 巻第 1 号

出雲市教育委員会 1996『上長浜貝塚』

湖陵町教育委員会 1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』

島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡 vol.3』

島根県教育委員会 2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡』

村上　勇・川原和人 1979「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第２冊

藤永照隆 2005「遺跡の分布からみた出雲平野の古地理再考」『八雲立つ風土記の丘館報』№ 182

米田美江子 2006「遺跡分布から見た出雲平野の形成史」『島根考古学会誌』第 23 集

渡邊貞幸 1986「古代出雲の栄光と挫折」『王権の争奪』集英社

出雲市教育委員会 2006『西谷墳墓群 - 平成 14 ～ 16 年度発掘調査報告書 -』

松山智弘 2002「古志本郷遺跡の調査について」『八雲立つ風土記の丘館報』№ 170

鹿島町教育委員会 2002『奥才古墳群第８支群』

島根県古代文化センター 2007『北光寺古墳発掘調査報告』

大谷晃二 1997「出雲の大首長」『古代出雲文化展 (図録)』朝日新聞社・島根県教育委員会

角田徳幸 2006「白枝本郷遺跡の調査」『中野清水遺跡 (3)・白枝本郷遺跡 一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７』

島根県教育委員会 2003『古志本郷遺跡Ⅴ 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅥ』

斐川町教育委員会 1996『後谷Ｖ遺跡』

出雲市教育委員会 2000『浅柄遺跡』

島根県教育委員会 1999a『蔵小路西遺跡 一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告２』

島根県教育委員会 1999b『渡橋沖遺跡』

出雲市教育委員会 2007『築山遺跡Ⅱ』

近藤　正 1969「出雲市荻杼発見の骨蔵器について」『考古学雑誌』第 54 巻３号

島根県教育委員会 2008「九景川遺跡 一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」

第３章　麓Ⅱ遺跡の調査成果

第１節　調査の方法

１．発掘調査区の設定 (第６図)

調査対象は丘陵と丘陵の間、延長 200m 区間にわたる橋台・橋脚の建設地と、これに係る市道の付替予定地で、後述する試掘確認調査の結果に基づき西側からそれぞれ１～５区とした。調査面積は、１区 365㎡、２区 480㎡、３区 265㎡、４区 263㎡、５区 260㎡の合計 1,630㎡である。遺跡の所在する標高７～９m の谷底平野はその中央部を北流する九景川の氾濫原で、伏流水による調査区壁面の崩壊が試掘確認調査結果から懸念された。そのため、工事が及ぶ床掘範囲から１割５分～１割７分の安全勾配の法面をできる限り確保するため各調査区を広く設定した。

調査区が狭小なため、調査にあたっては座標系に基づく座標軸を合わせたグリッド設定は行わず、層位の記載のみにより遺物の取り上げを行った。

２．表土・包含層掘削と遺構の検出

調査前の現地の状況は、１区の山林斜面以外は標高７～９m の平坦地に造成された水田地帯であった。また、１区斜面も盛土造成されており、各区ともバックフォーを用いて造成土を除く必要があった。重機掘削は、バケットに平爪を装着して、少しずつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。２～５区は湧水があることから、法面と水切側溝を設け、併せて土層観察を行いながら、包含層・遺構面まで余裕を持たせて掘削を停止した。その後はベルトコンベアーを設置し、スコップ・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。遺物包含層についてもスコップにより水切側溝を先行し、層位を確認しながら、掘削を行った。出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテ等の道具を併用し、取り上げに際しては地点と層位の記録のみを行った。遺構検出にはジョレン・草削りを使用した。

３．遺構掘削

遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削りを使用した。掘削にあたっては基本的にベルトを設定するか半裁をし、土層観察を行いつつ掘り下げた。土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。遺構からの出土遺物については出土状況を記録した後、取り上げ№を振って取り上げた。

４．記録の作成

遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは６×７判フィルム (モノクロネガ・カラーポジフィルム) による撮影を行い、それ以外は 35㎜フィルムカメラ (モノクロネガ) 及びデジタルカメラで撮影した。

５．整理等作業

出土した遺物は分類作業を行った上で遺跡の総体が把握できるよう重量を記録した。

本書の編集にあたっては DTP 方式を採用し、Adobe 社の Illustrator CS5、Photoshop CS5 を用いてトレース・画像処理等を行い、InDesign CS5 で編集を行った。

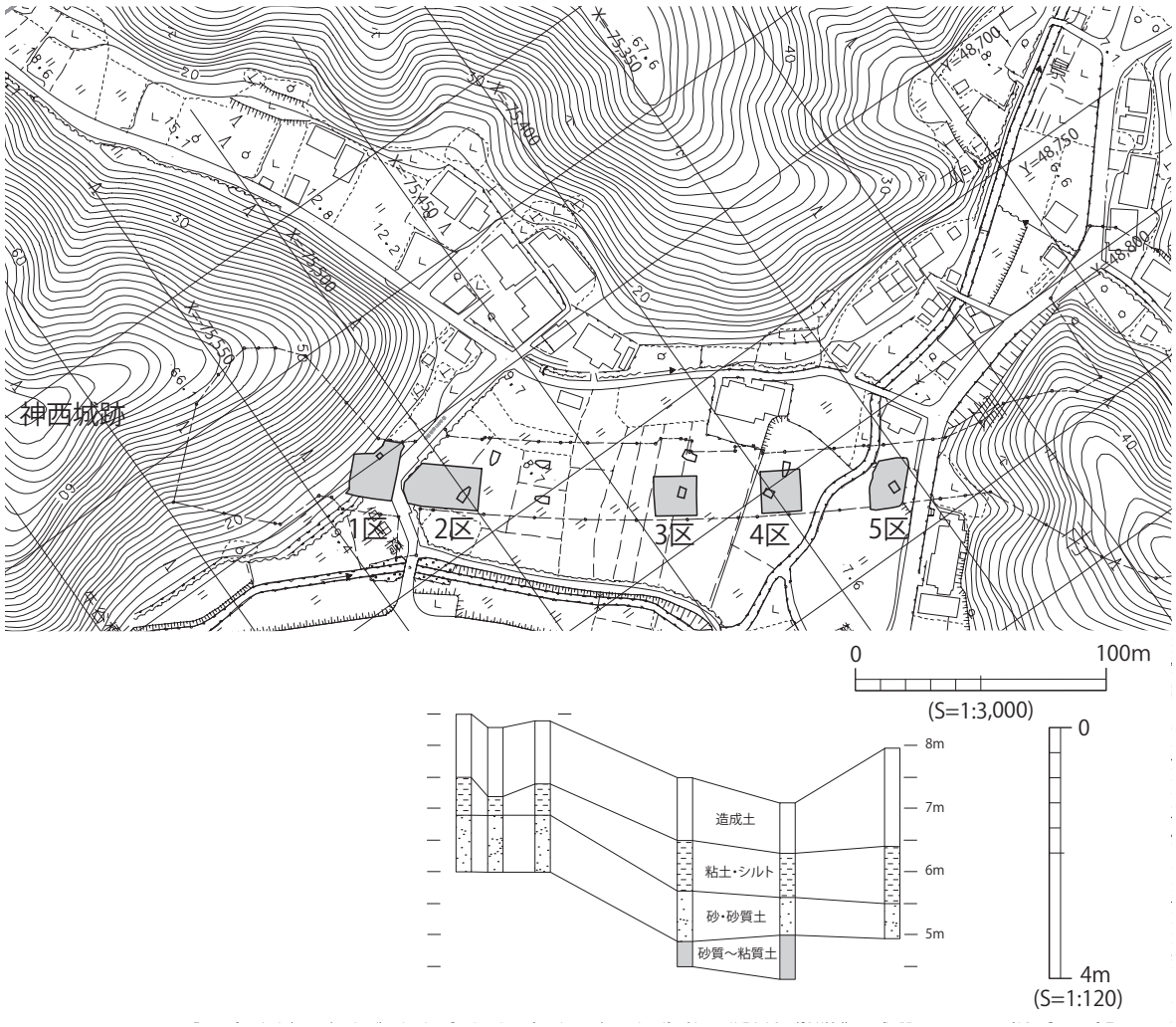
第２節　調査区の概略と層序

１．試掘確認調査 (第６図)

本発掘調査の対象は、平成 25 年度と平成 26 年度に実施した試掘確認調査の結果に基づいて決定した。調査は平成 25 年度に T1 ～ T9 を、平成 26 年度に 1 か所を追加して、計 10 か所の調査を実施している。

平成 25 年度　T4(１区) では地表下 1.2m の地山で遺構を検出し、出土した土師器片から古代～中世の建物跡の存在が推定された。T1(2 区) では地表下 1.6m で厚さ 90㎝の包含層を確認し、縄文土器 55 点が出土したが、その後遺構は確認されなかった。T9(3 区) とその北西の T3 では地表下１m までの造成土を除去したところで粘土層を検出し、その上面で柱穴と考えられるピットを確認しているが、遺物は造成中から土師器片が少量出土した程度である。T8(4 区) と T7 でも T9・T3 と同様の結果が得られている。

平成 26 年度　T10(5 区) では地表下 1.3m まで耕作土・造成土、1.3 ～ 1.9m までは造成前の水田耕作土・床土、1.9 ～３m までは川跡の堆積層とみられる砂・シルト層が堆積し、砂・シルトからは弥生土器～古代の須恵器が出土した。前年度 T8・T9 で確認された遺構面に対応するとみられる



第６図　調査区配置と周辺地形・土層模式図 (1/3,000・1/120)

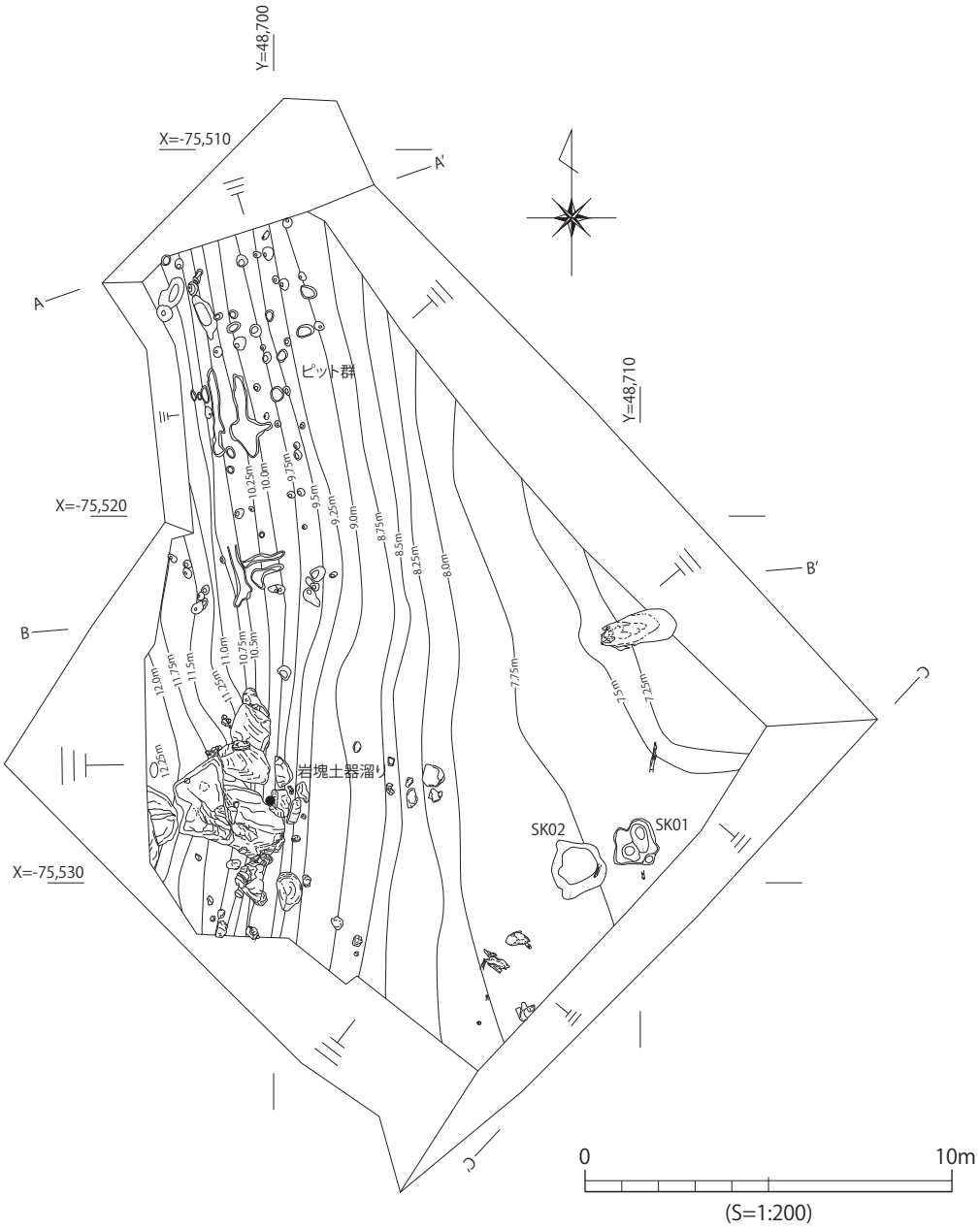
粘土層も検出したこから、同一遺構面の拡がりが推定された。

各年度の試掘確認調査によって当該区域において古代から中世にかけての集落跡、縄文時代の包含層が確認され、事業地内における発掘調査が必要な範囲が定められた。このうち、実際に工事が行われる橋台・橋脚部について本発掘調査を実施することとなった。

２．１区（第６・７図）

調査区は、出雲十旗の七番目に数えられる神西氏の居城・神西城の東麓、標高９～ 12m の平地から丘陵斜面にかけて位置する。東側からの高架を受ける橋台建設予定地で、これより西側にはトンネル坑口の建設が予定されている。調査区の東側の平坦部は市道と水田で、今回の工事に伴って市道が付替えられることから併せて調査を行った。

層序（第８・９図）　前述のとおり、調査区は丘陵斜面と平坦部からなっており、斜面・道路下ともに盛土造成がなされていた。そのため、造成土を取り除くと丘陵裾はさらに下方へと延び、標高８

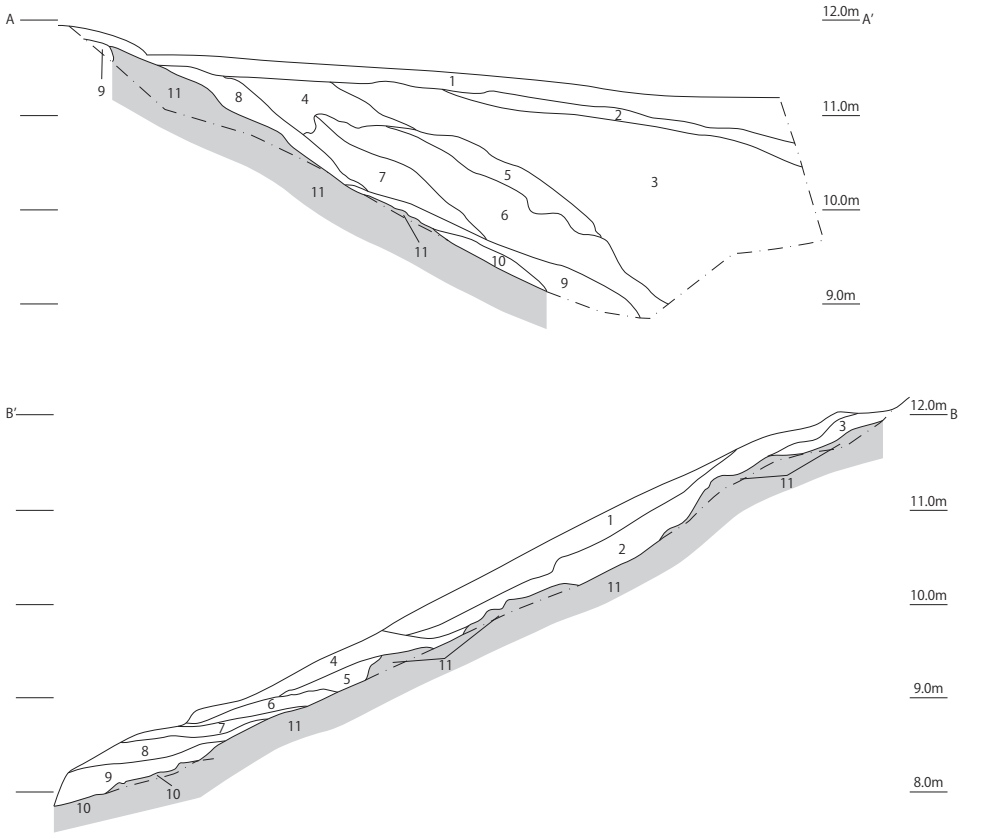


第７図　１区遺構配置図 (1/200)

m で傾斜変換し、２区へと緩やかに傾斜していく様子が確認できた。

斜面と平坦部で堆積状況は異なる。斜面は畑地として利用されており、耕作土の下には平坦面を作り出すために 厚いところで２m も客土されていた。この造成土の下には流土と見られる土砂が１m ほどの厚さで斜め堆積し、土師器細片や古銭、骨片等の遺物が少量出土した。流土は下から黒褐色系 (北壁７～９層)- 黄灰色系 (北壁５・６層、中央２～４層) の層序となるが、黒褐色系の流土は調査区の北側付近でしか認められなかった。これら流土を除いたところで風化礫を多量に含む黄褐色の固く締った地山を検出している。

調査区東側の平坦部では、斜面流土の下にグライ化した粘土が堆積しており (中央６～ 10 層)、流土堆積以前の水田もしくは湿地性の堆積物と考えられる。調査区南壁付近は調査前は水田で、上から耕作土･床土 (南壁 1･2 層)- 粘土･粘質土 (南壁３～８層)- 砂質土 (南壁９層)- 砂 (南壁 10 層)



1　2.5Y4/2 暗灰黄色土（表土。耕作土。）
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色土（造成土。やや粘質でやわらかい。）
3　2.5Y4/3 黒褐色土（造成土。3cm 以下の礫多く含みわりとしまる。土師器細片わずかに包含。）
4　10YR4/1 灰褐色土（造成土か。3cm 以下の礫含みわりとしまる。）
5　2.5Y5/2 暗灰黄色土（流土。やや粘質でわりとしまる。）
6　2.5Y4/1 黄灰色土（流土。2cm 以下の礫含みわりとしまる。土師器細片・炭を若干含む。）
7　2.5Y3/1 黒褐色土（流土。2cm 以下の礫含みわりとしまる。土師器細片・炭を包含。）
8　5Y3/2 オリーブ黒色土（流土。3cm 以下の礫若干含み、粘質でややしまる。ピット覆土。）
9　5Y2/1 黒色土（流土。わりとしまり、炭化物多く含む。ピット覆土。）
10　2.5Y4/1 黄褐色土（11 層より暗く、わりとしまる。地山の二次堆積土。）
11　10YR5/6 黄褐色土（10cm 以下の礫多く含みかたくしまる。地山。）

第 8 図　１区北壁・中央土層断面図 (1/80)

と続く。６・７層は粘土と砂が不均質に混在しており、旧耕作土の可能性がある。土層断面での連続性は確認できなかったが、南壁６～９層は中央土層断面の６～９層に対応する可能性が高い。南壁９層からは須恵器以前の遺物が出土しており、これらを中世以前の堆積と捉えることは斜面の層序と矛盾しない。

発掘作業と検出遺構（第７図）　斜面の耕作土・造成土を重機掘削したのち、人力で流土の掘削を行った。流土は土師器を包含するが出土量が少ない上に、破片が極めて小さく、時期を特定できるものはごくわずかであった。堆積した流土を除いたところで地山を検出し、その上面でピット多数と溝状の浅い掘り込みを検出した。当初は建物跡の可能性を考えたが、これらは標高９～ 11m 付近の比較的に急傾斜となっている斜面上部にまとまっており、床面を加工した形跡がないことや、ピットの配置状況、掘り込み角度が垂直でない点など、通常の建物柱穴と考えるのには躊躇された。また、溝状の浅い掘り込みも雨落溝や壁体溝等とするのには違和感を持つものであった。斜面南側の表土直下ではピット群と同レベルで巨大な岩塊が出土し、その下方から地形が緩やかに傾斜変換する様子が確認できた。岩塊の窪みからは糸切底の土師器が出土したことから、城跡最外周の防御施設としての性格を視野に入れて調査を行った。

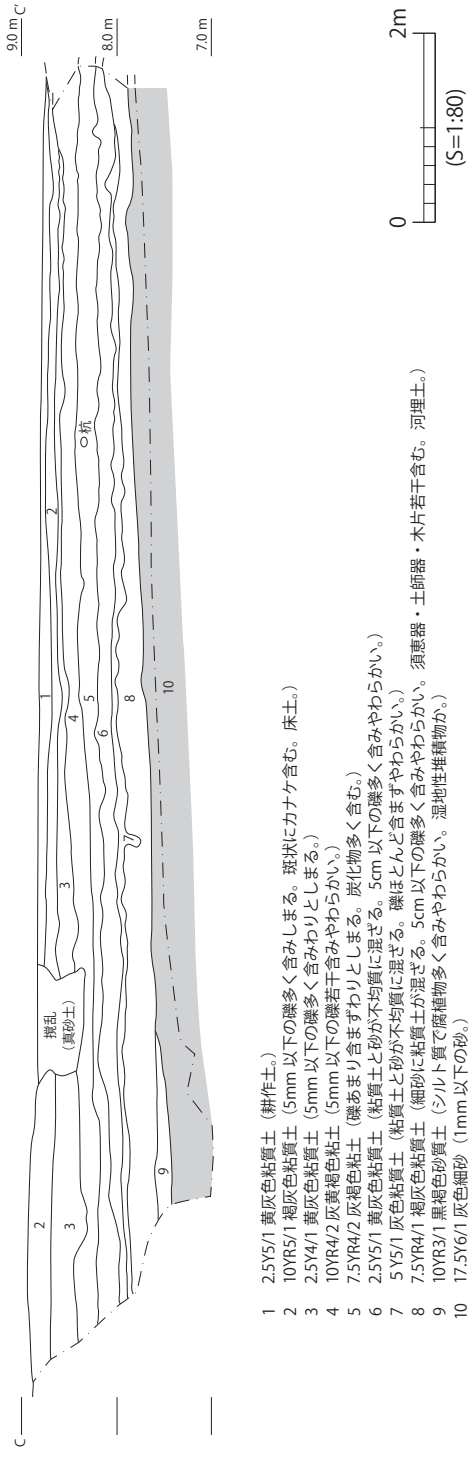
平坦部は南壁７層まで重機で掘削し、８層以下は人力による掘削を行った。土器のほか木片が出土したが、斜面と同様に遺物の包含量は少なかった。30㎝ほど掘り下げたところで細砂～粗砂を検出し、上面で SK01・02 を確認した。

調査の完了状況　水切側溝・ポンプ釜場で砂層下位の様相を確認したところ、粒度の違いはあるものの砂礫層が続くことが分かった。この砂礫層は丘陵縁辺に広がる谷底平野を形成した九景川旧河道堆積物と考えられ、２区の調査結果も加味すると当調査区に新たな包含層が存在する可能性は低いと考えられたことから、平坦部のこれ以上の掘り下げは行わず、調査を終了した。

３．２区（第６・10 図）

調査区は、神西城東麓に広がる標高８m 余りの水田部に位置し、橋脚工事に併せて市道が付け替えられることから、当該区域を加えて発掘調査を実施した。

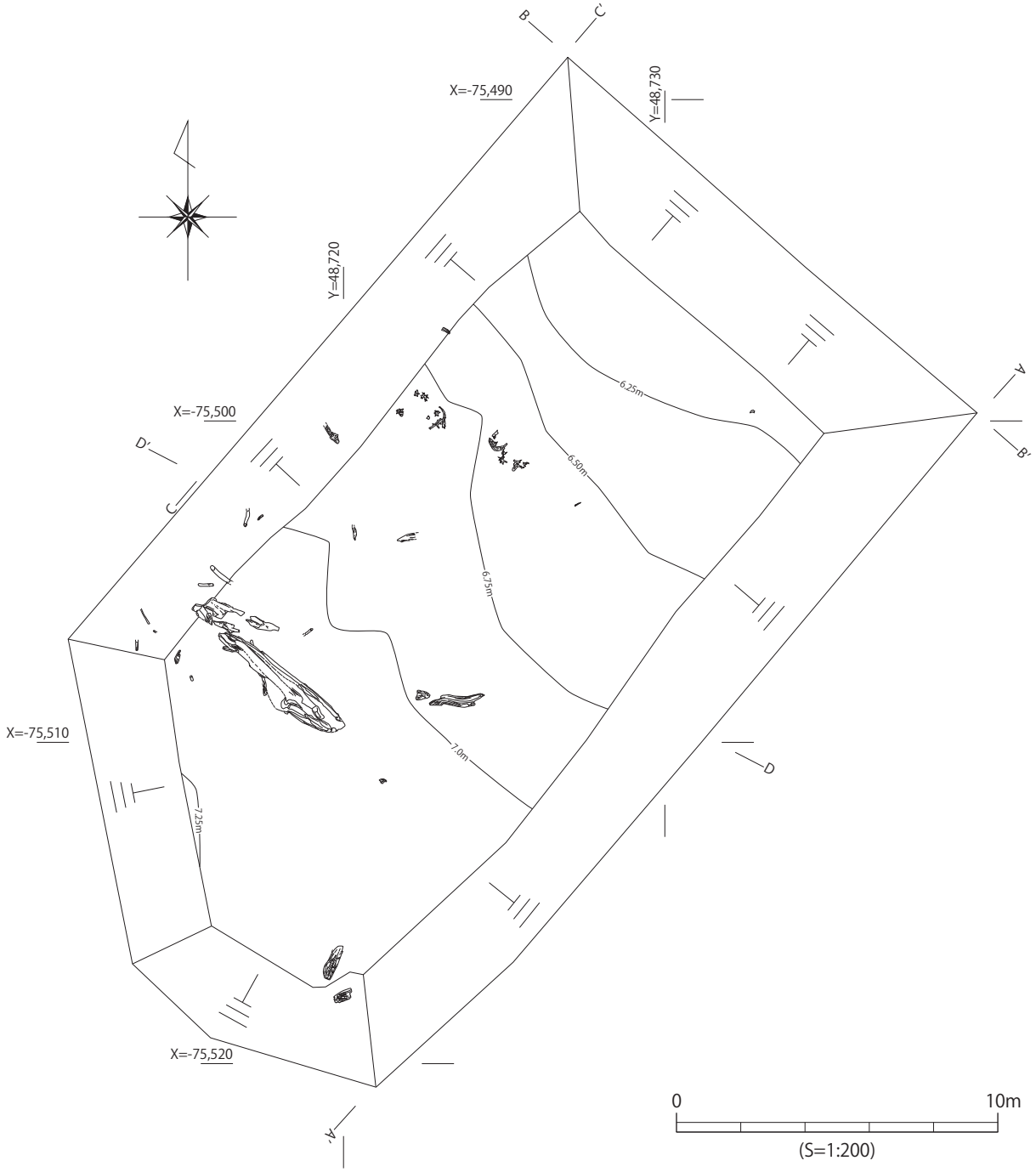
層序（第 11・12 図）　基本層序は、上からⅠ粘質土 - Ⅱ粘砂 - Ⅲ砂・砂質土 - Ⅳ粘砂 - Ⅴ砂礫と続く。Ⅰ層は耕作土・床土等の目的で造成された強粘性の粘土である。Ⅱ層はやや粒度が粗いがⅠ層と同じく強粘性の粘砂で、



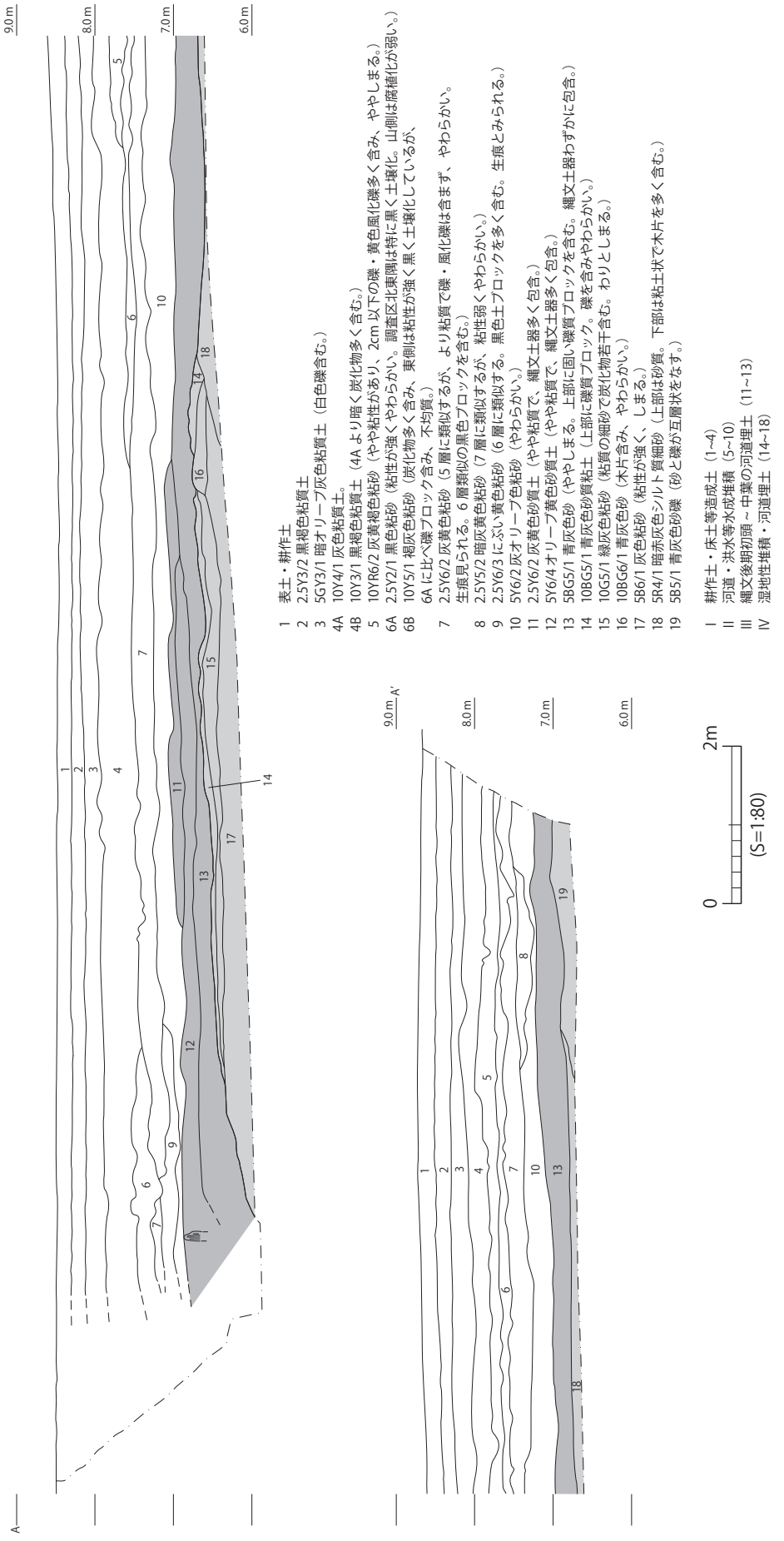
第９図　１区南壁土層断面図 (1/80)

地元では重粘土とよばれている。九景川旧河道や氾濫等による堆積と考えられるが、部分的に黒く土壌化しているところもあり、堆積環境は一様ではなかったと考えられる。Ⅲ層は砂主体の縄文後期の遺物包含層で、成因はⅡ層と同様河川由来のものと考えられる。湿地状態に近いⅡ層の堆積環境に比べ、遺物が運ばれてくるほどの流量があったものと推測される。Ⅳ層はグライ化した粘砂やシルト質細砂で、基本的に遺物は含まないが、Ⅳ層との境界付近はコンタミによるものか、水切側溝を掘削する際に若干の遺物が出土した。木片や腐植物を含み、湿地性の堆積環境にあったものと推定される。Ⅴ層は締りのある砂礫で、砂・礫層が互層に堆積する様子を断ち割りで確認している。

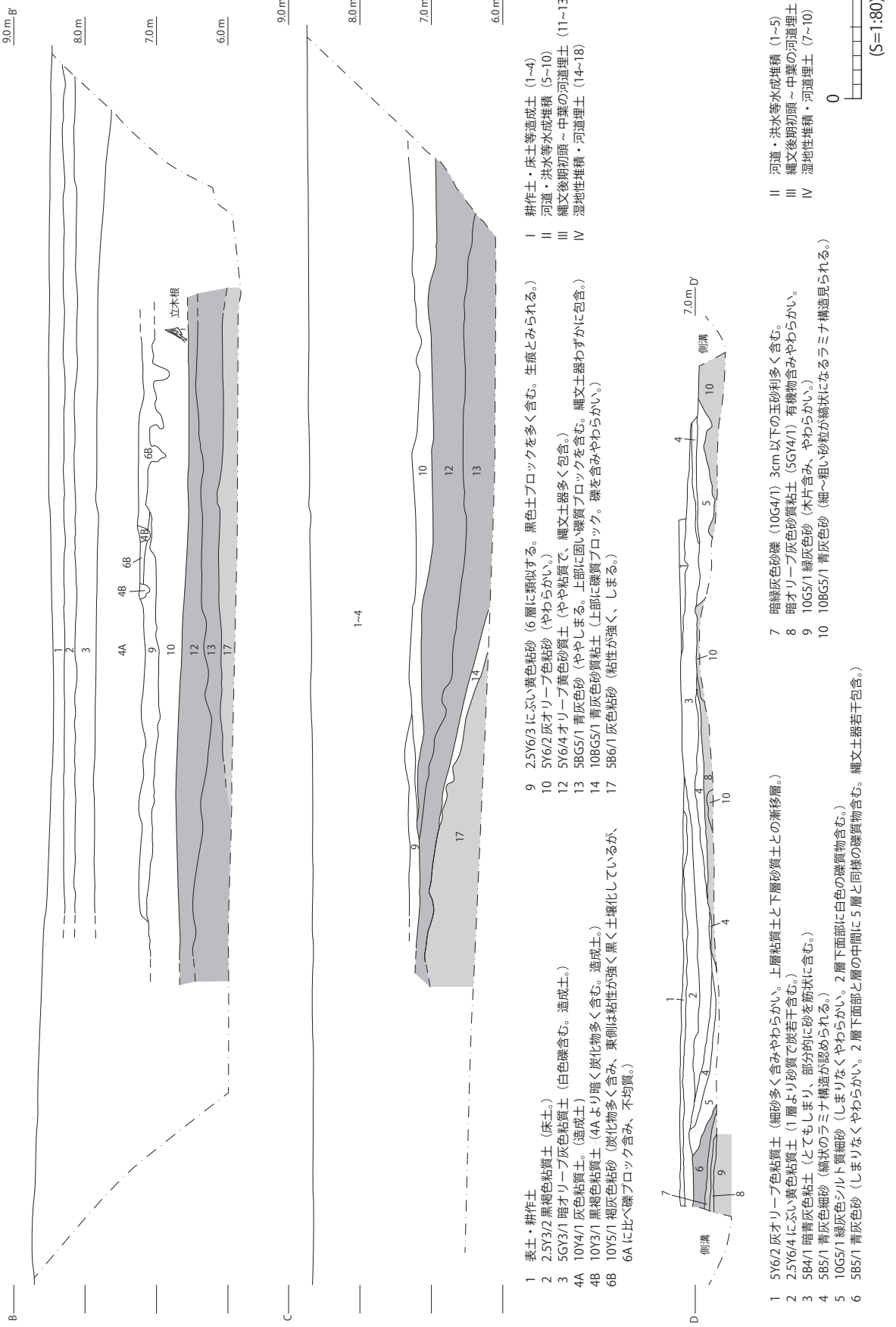
南東壁土層断面の砂礫層の堆積から分かるように、旧地形は１区側から北東に向けて緩やかに傾斜しており、そこに旧河道に起因して折り重なるように水成堆積していったと考えられる。調査区



第 10 図　２区全体図 (1/200)



第 11 図　２区南東壁土層断面図 (1/80)



第 12 図　２区北東壁・北西壁・中央ベルト土層断面図 (1/80)

長軸に直交する旧河道の痕跡は調査区北西壁面でも確認することができる。調査区の中央部の横断土層断面では、旧河道の堆積を切るレンズ状の堆積を確認することができ、調査区長軸方向の流路跡として捉えることができる。縄文後期の包含層を切っていることから、該期以降の旧河道あるいは氾濫による堆積と考えられる。

発掘作業と検出遺構 (第 10 図)　重機掘削は試掘確認調査結果に基づいて安全勾配の法面と水切側溝を設けながらⅢ層上面付近まで行った。後述するように３・４区では標高６～ 6.5m で検出した粘土層に中世と考えられる建物柱穴が掘り込まれている。試掘確認調査では、当調査区で遺構面は検出されていないが、標高７m 付近で類似する粘土層を検出し、掘り下げに際しては平爪で極力漉き取り確認をしながら慎重におこなった。その結果、３・４区に対応する明確な遺構を平面的に確認することはできなかったが、調査区北東部において、断面のみではあるが部分的にピット状の落ち込みを確認した。標高の高い地点については圃場整備により削平され、消滅してしまった可能性が残る。

重機の使用はⅢ層上面から余裕をもったところで終了し、ベルトコンベアーを設置したのち人力掘削を開始した。遺物は調査区の北東半に遍在し、土層断面の観察で包含層が旧河道に堆積した土砂であることを確認した。包含層の上面付近では火山灰が凝固したような軽石状の白色礫が所々で散発的に確認されている。また上面付近では倒木や立木根が出土しており、河道が埋積して安定した時期に小規模な林が形成されたものと推定される。

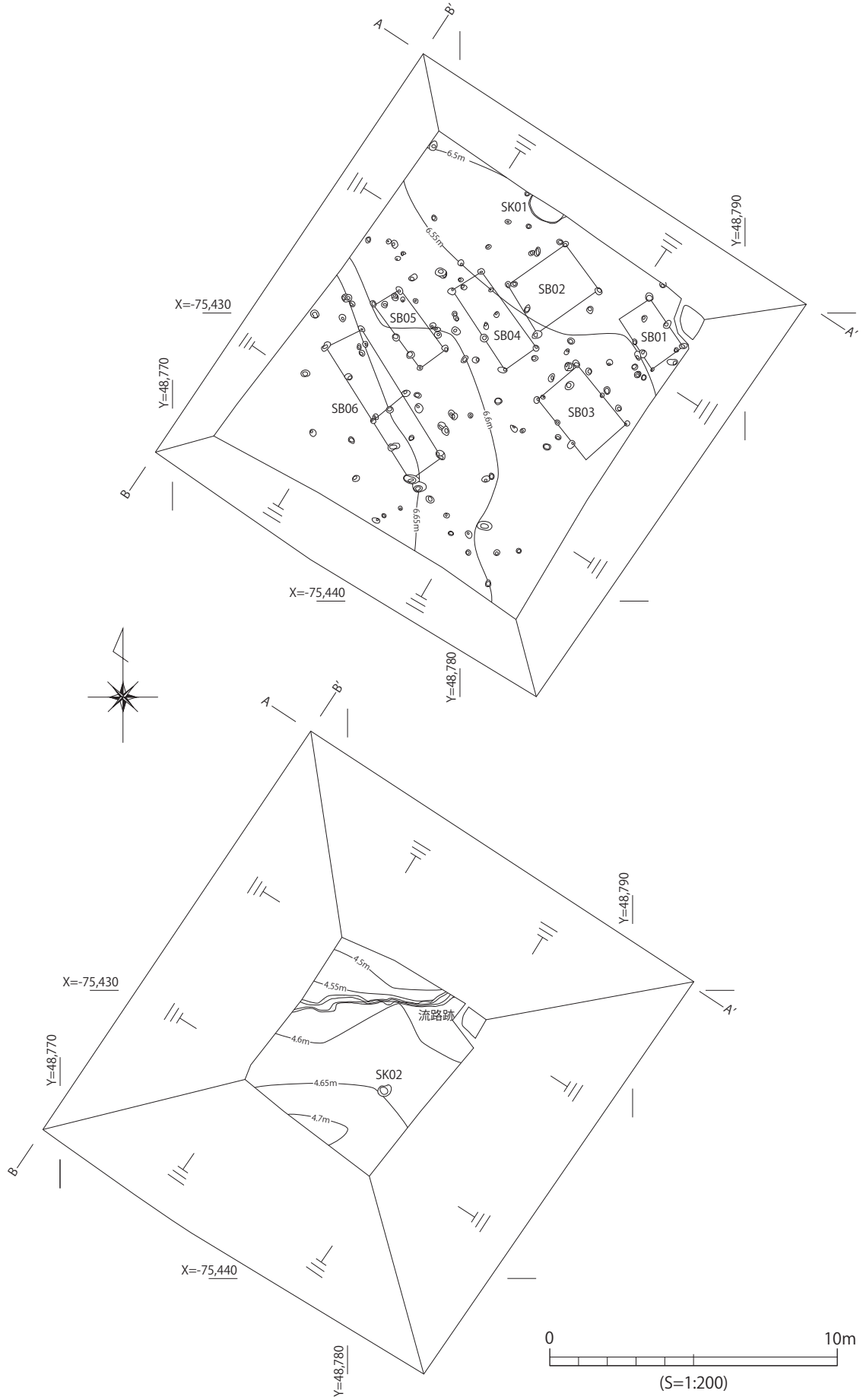
調査の完了状況　包含層を取り除き、断ち割りを入れた結果、下位には湿地性の堆積が認められ、遺構・遺物とも存在しないことを確認した。調査区北東端付近は湧水が集まることで軟弱となり、壁面崩壊の危険があったため完全に掘り切ることはできず、作業の安全確保のため遺物の出土量が減少したところで掘り下げを終了した。

４．３区 (第６・13 図)

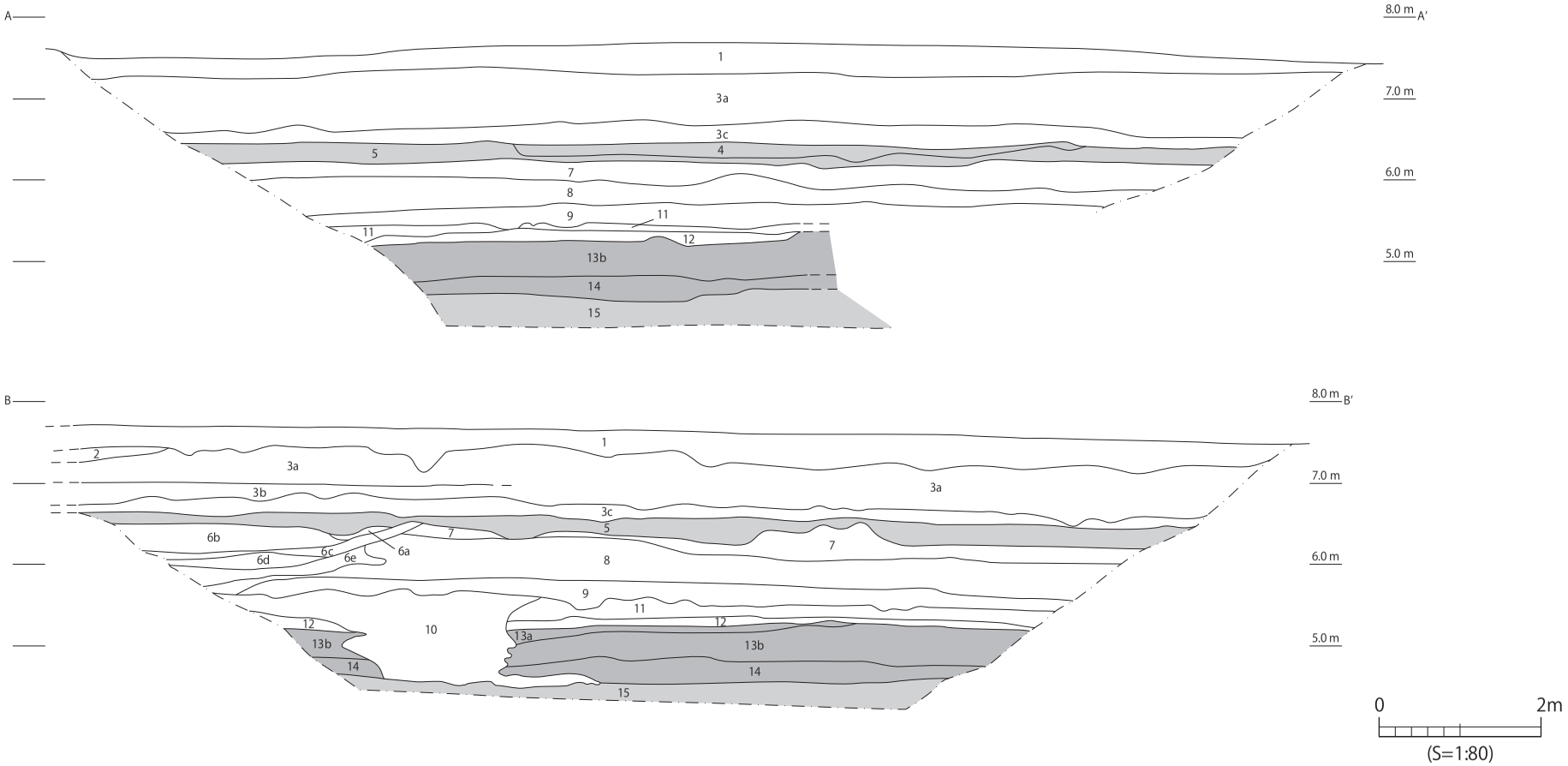
調査区は、神西城東麓に広がる標高８m 足らずの水田部に位置し、２区の北東 70m のところに建設予定の橋脚工事に伴い発掘調査を実施した。

層序 (第 14 図)　基本層序は、上からⅠ褐色系粘土 - Ⅱ青～緑灰色粘土 - Ⅲ粘砂・粘質土 - Ⅳ砂質土 - Ⅴ砂と続く。Ⅰ層は耕作土・床土等の目的で造成された粘土である。Ⅱ層は標高 6.5m 前後で検出した強粘土層で、上面はピットが多数掘り込まれた遺構面である。部分的に耕作等の影響を受けてはいるものの、比較的に均質で締りのある粘土層で、中世以前の耕作土か湿地性堆積層と考えられる。Ⅲ層は砂を主体とする河川や氾濫由来の堆積層と考えられる。北西壁の土層断面 10 層は 15 層上面まで達する溝状の流路に堆積した砂礫層で、最下部では抉るように 14 層下に潜り込んでいる様子が観察された。木片を若干含むものの遺物は含んでいない。Ⅳ層は厚さ 70㎝の砂を主体とする縄文中期末～後期初頭の遺物包含層で、土器や石器のほか、炭化物や 5㎜以下の微細な骨片が多量に含まれていた。Ⅴ層は標高 4.6m 前後で検出した河川堆積による細砂で、上面では土坑１基を検出した。これより下層は断ち割りを行い、遺物を含まないことを確認している。

発掘作業と検出遺構 (第 13 図)　重機掘削は試掘結果に基づいて安全勾配の法面と水切り側溝を設けながらⅡ層上面付近まで行った。重機掘削に際しては第１遺構面を被覆する包含層が存在する可能性も念頭に置いて慎重に掘り下げたが、遺物を確認することはできなかった。第１遺構面はほとんど水平で、上面をざっと清掃するだけでピットを検出することができた。検出したピットは概し



第 13 図　３区第１・第２遺構面配置図 (1/200)



第 14 図　3 区北東壁・北西壁土層断面図 (1/80)

1　7.5YR4/3 褐色粘質土
2　N4/ 灰色粘土（5mm 以下の礫若干含む。）
3a　10YR4/1 褐灰色粘土（礫ほとんど含まない。）
3b　10YR5/2 灰黄褐色粘土（1cm 以下の白色礫含む。）
3c　10YR3/3 暗褐色粘土（1cm 以下の白色礫とても多く含む。）
4　10BG6/1・2.5Y3/1 青灰色・黒色粘土（マーブル状に黒色粘土を含む。上面でピット検出。）
5　10GY3/1 暗緑灰色粘土（1cm 以下の白色礫若干含み、しまる。上面でピット検出。）
6a　7.5YR4/3 褐色粘土（やや砂を含みやわらかい。）
6b　5BG6/1 青灰色細砂（やや粘質で 1cm 以下のクサリ礫多く含む。）
6c　2.5Y3/1 黒褐色粘土（やや砂質で腐植物多く含む。）
6d　2.5Y3/1・5G6/1 黒褐色・緑灰色細砂（互層状の砂に腐植物多く含む。）
6e　5G6/1 緑灰色粘質土（やや砂質。）
7　2.5Y7/3 浅黄色細砂（粘質でやわらかい。）
8　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂（やや粘質でやわらかい。）
9　10YR4/1 褐灰色粘質土（やや粘質でやわらかい。）
10　10BG4/1・7.5YR4/4 暗青灰色・褐色砂礫（主体は細砂～中砂で最下部に粗～極粗砂。4cm 以下の礫をとても多く含み、木片も若干包含。15 層上面まで達する。土石流跡か。）
11　2.5Y5/3 黄褐色細砂（5mm 以下のクサリ礫若干含み、やわらかい。）
12　2.5Y4/2 暗灰色黄色粘質土（10cm 以下の粘土・砂をブロック状に含み、わりとしまる。）
13a　5BG6/1 青灰色砂質土（粘性強い。）
13b　5BG6/1 青灰色砂質土（粘質でやわらかい。微細な炭化物と縄文土器を若干包含。）
14　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（やや砂質でやわらかい。縄文土器・石器のほか、円礫・炭化物・骨片を包含。南東側は腐植化が顕著。）
15　5G6/1 緑灰色細砂（やや粘質でしまる。無遺物で縄文遺構のベース。）

Ⅰ　耕作土・床土等造成土（1~3）
Ⅱ　中世以前の耕作土・湿地性堆積層（4・5）
Ⅲ　河川・洪水による堆積層（6~12）
Ⅳ　縄文中期末 ~ 後期初頭の包含層（13・14）
Ⅴ　河川堆積物（15）

て小形で、掘り方が不整形な柱穴かどうか疑わしいものも含めると 130 基を数える。建物を構成する柱穴と考えらたが、現地で建物配置を復元することはできなかったため、半裁して断面の写真撮影を行い完掘していった。土師器・須恵器の細片が出土したピットもあるが、時期を特定できるものは確認できなかった。すべての遺構掘削後、遺構完掘状況の写真撮影・地形測量を行った。Ⅳ層の縄文包含層までは厚さが１m 以上あることから、作業の効率化を図るためⅡ・Ⅲ層の掘削には再び重機を使用し､Ⅳ層よりやや上部から人力掘削を再開した。包含層は上層 (13 層) と下層 (14 層) に分かれ、遺物の殆どは下層から出土しているが、上下での時期差は読み取れなかった。前述したとおり、包含層からは骨片が多量に出土したが、微細で脆弱なために回収できるものは限られた。持ち帰った動物遺存体については、広島大学総合博物館の石丸恵利子氏に同定を依頼し、分析結果については第６章に掲載した。40㎡に満たない狭小な範囲にも拘わらず、遺物の出土量は比較的に多く、また食物残滓とみられる動物遺存体も相当量出土していることから、調査区近隣に当該期の集落が存在すると予見された。期待された第２遺構面では土坑１基を検出し、埋土からはクジラの骨を採取している。

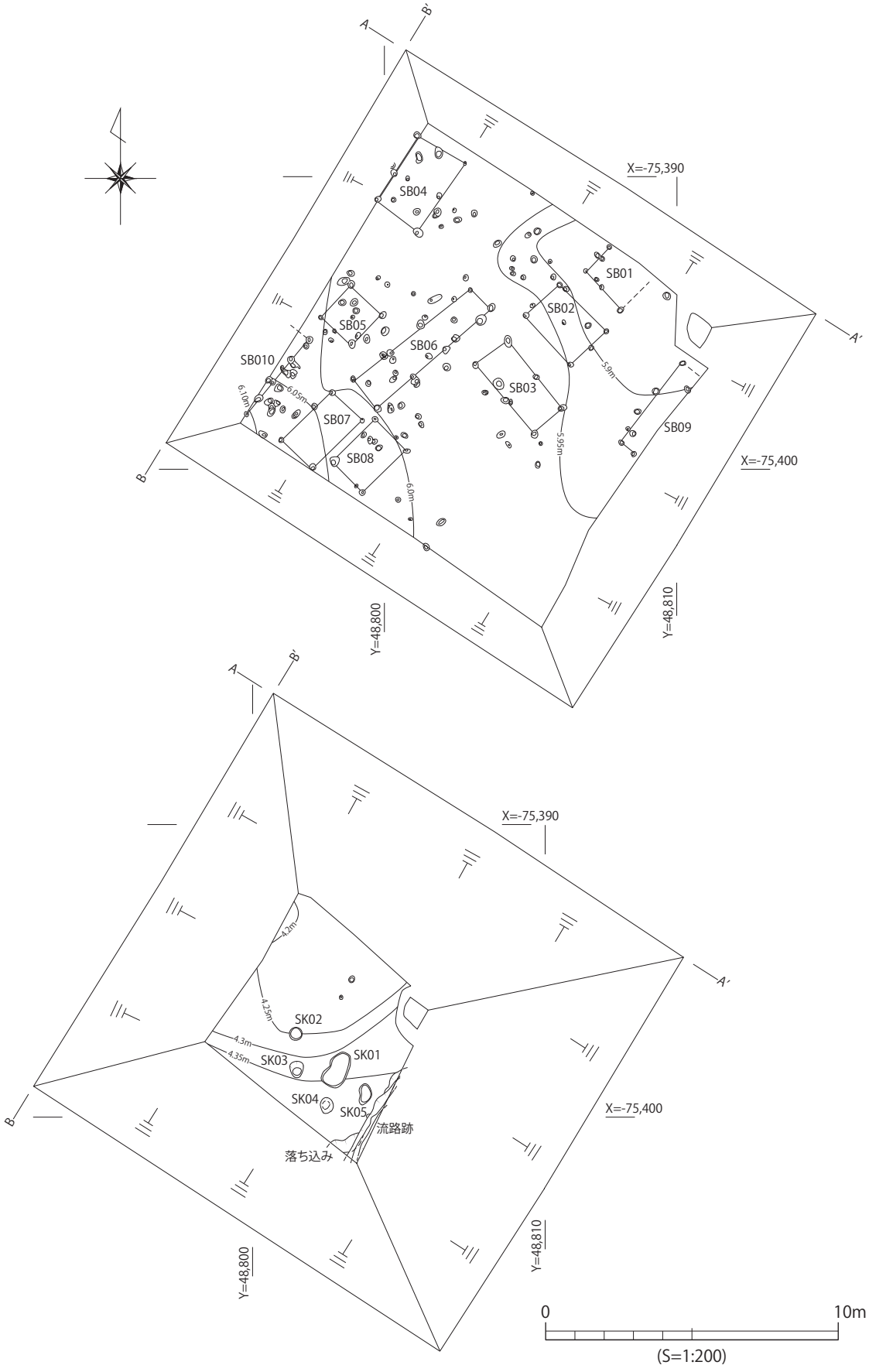
調査の完了状況　遺構精査ののち、第２遺構面の基盤となるⅤ層に断ち割りを入れた結果、同様の細砂層が続き、湧水で壁が崩れる状況となった。断ち割りで確認できた限りでは遺物包含層は認められなかったことから、作安全確保のためそれ以上の深掘は行わず、Ⅴ層上面で掘削を終了した。記録作業を終えた後、自然科学分析のための試料採取を行って調査を終了した。

５．４区 (第６・15 図)

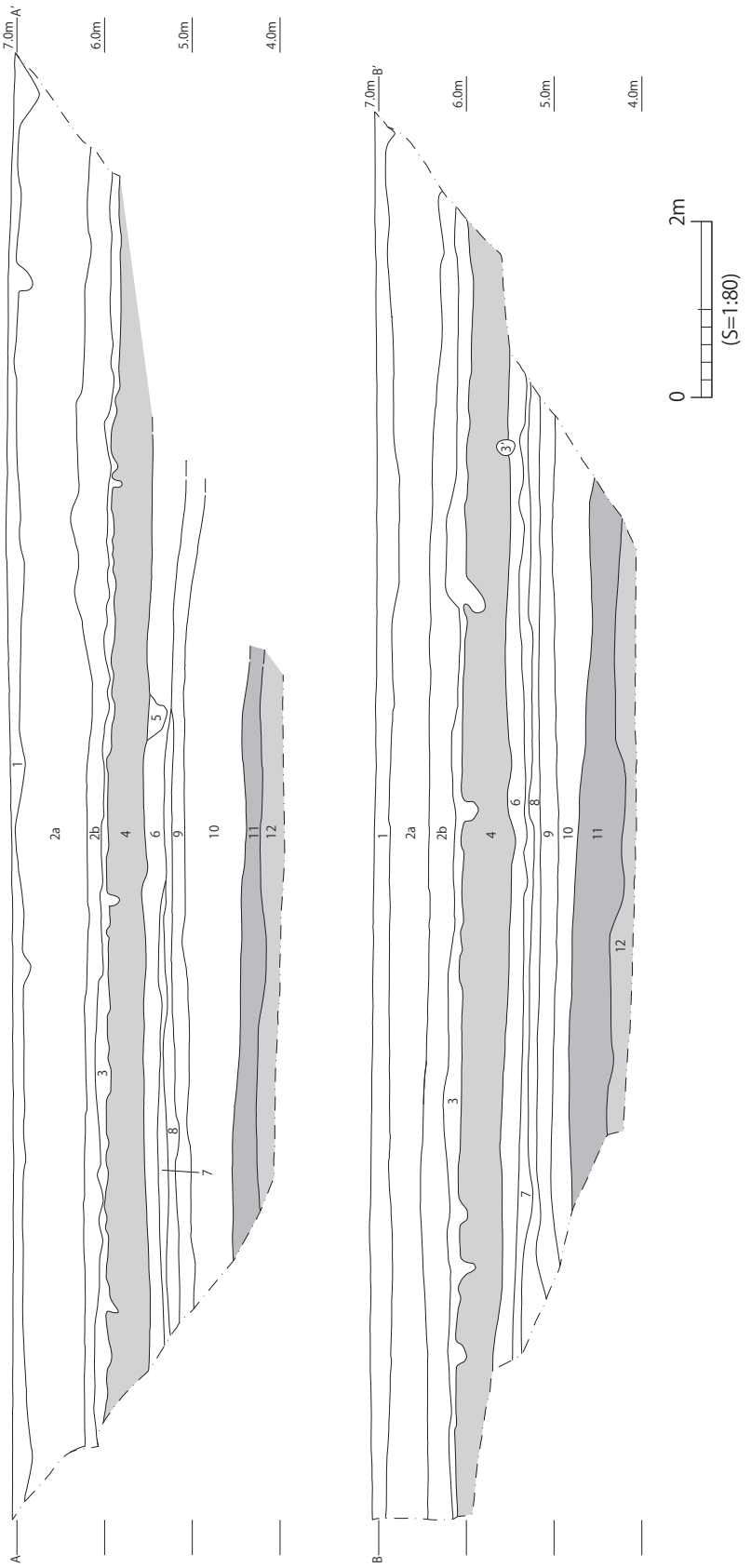
調査区は、神西城東麓に広がる標高７m の水田部に位置し、３区の北東 30m のところに建設予定の橋脚工事に伴い発掘調査を実施した。

層序 (第 16 図)　基本層序は、上からⅠ褐色～灰色系粘土 - Ⅱ灰～青灰色粘土・シルト - Ⅲ緑灰色シルト～粘質土 - Ⅳ青灰色シルト～細砂と続く。Ⅰ層は耕作土・床土等の造成土である。Ⅱ層は標高 6m 前後で検出した強粘土層で、上面はピットが多数掘り込まれた遺構面である。部分的に薄く７層細砂や８層シルトを挟むが、基本的には粘土質で中世以前の耕作土か湿地性堆積層と考えられる。３区ではⅡ層下に河川・洪水等由来の砂が厚く堆積しているが、当区の砂層は薄く堆積した７層のみで、３区と明確に対応する堆積は認められなかった。Ⅲ層は厚さ 40㎝の縄文中期末～後期初頭の遺物包含層で、３区と同時期ではあるが、遺物の出土数量はかなり少ない。また、イノシシの骨片も出土しているが、動物遺存体についても３区に比べて包含量が少なく、土器・石器の出土量とは相関関係にあると考えられる。Ⅳ層は標高４m 前後で検出した河川・湿地性堆積層で、上面では土坑や流路跡を検出している。断ち割りをした結果、上部からコンタミによると考えられる少量の縄文土器が出土しているが、基本的には無遺物層であることを確認している。

発掘作業と検出遺構 (第 15 図)　重機掘削は試掘結果に基づいて安全勾配の法面と水切り側溝を設けながらⅡ層上面付近まで行った。重機掘削に際しては第１遺構面を被覆する包含層が存在する可能性も念頭に置いて慎重に掘り下げたが、遺物を確認することはできなかった。第１遺構面は３区と同様、ほとんど水平で、上面を清掃するだけでピットを検出することができた。検出したピットの形態も３区のそれと類似しており、両区で検出した第１遺構面は同一面と考えられる。検出したピットは 140 基余りで、遺構密度も３区の様相と同じといえる。現地で建物配置を復元することはできなかったため、半裁して断面の写真撮影を行い完掘していった。土師器・須恵器の細片が



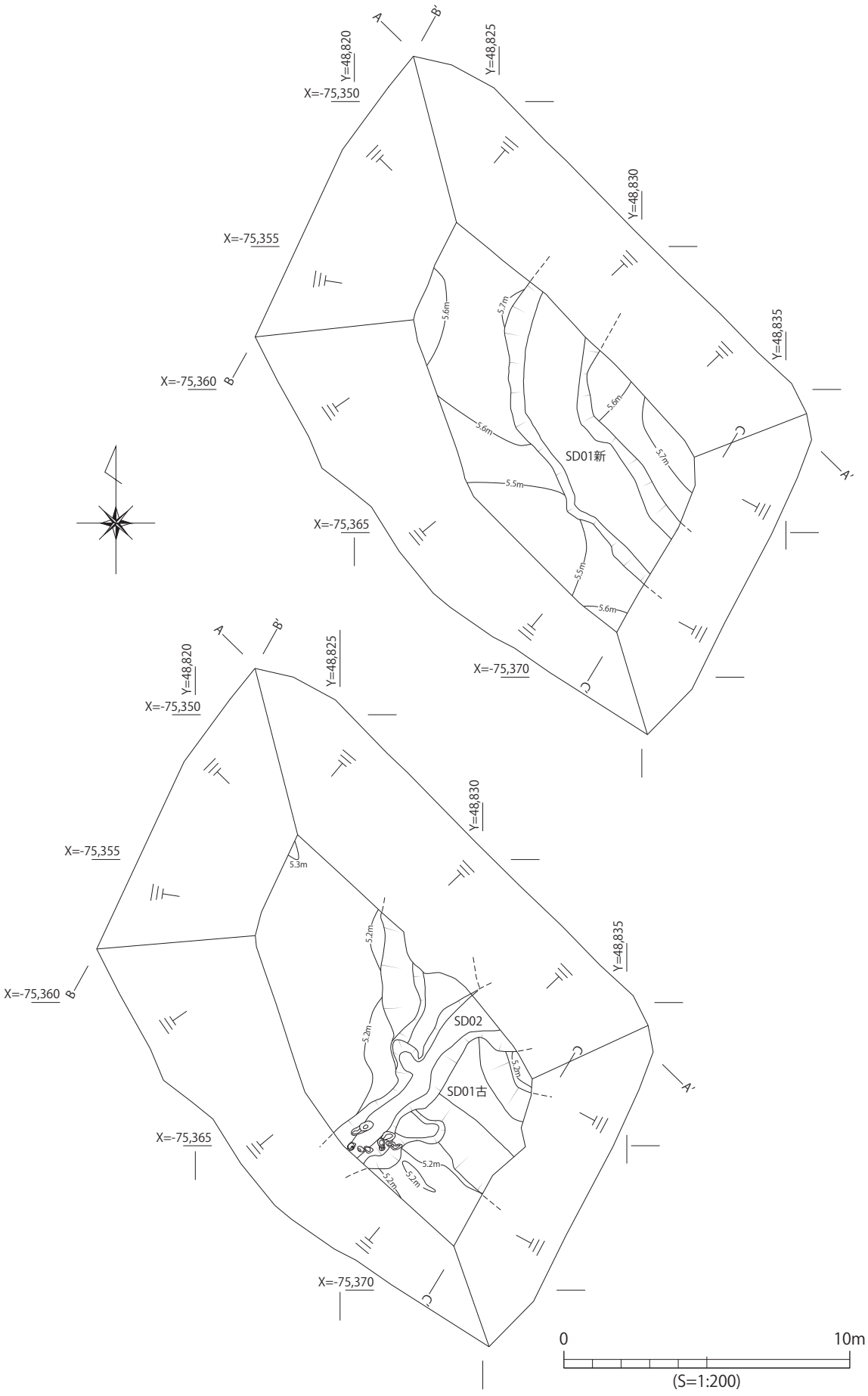
第 15 図　４区第１・第２遺構面配置図 (1/200)



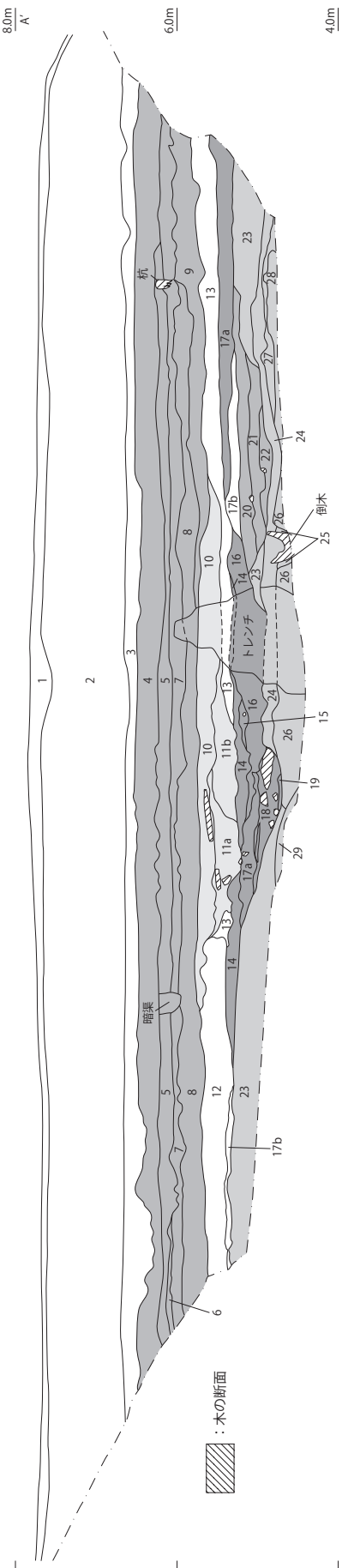
1　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（1cm 以下の礫含みやわらかい。）
2a　10YR3/1 黒褐色粘土（礫ほとんど含まずやわらかい。陶磁器包含。）
2b　2.5Y4/1 黄灰色粘土（3cm 以下の白色礫多く含みやわらかい。）
3　10BG4/1 暗青灰色粘土（3cm 以下の白色礫多く含みやわらかい。一部マーブル状に 3 層を含む。）
4　10BG6/1 青灰色粘土（炭化物若干含みやや細砂含む。上面でピット多数検出。）
5　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土（炭化物含みやわらかい。下面に砂礫が溜る流路跡。）
6　N6/ 灰色粘土（4 層に類似するが、砂がより多く含まれ締まる。4 層 -7 層の漸移層。）
7　5B5/1 青灰色細砂（礫を含まずわりと締まる。）
8　N5/ 灰色シルト（やわらかい。）
9　N3/ 暗灰色粘土（炭化物若干含む。）
10　5B6/1 青灰色粘土（締まる。間に薄い砂層と暗灰色の粘土層を含む。）
11　5G5/1 緑灰色シルト～粘質土（炭化物含む。石器・縄文土器多く包含。やわらかい。）
12　5BG5/1 青灰色細砂～シルト（上部に縄文土器わずかに包含。）

Ⅰ　表土・耕作土等造成土（1~3）
Ⅱ　中世以前の耕作土・河川・湿地性堆積層（4~10）
Ⅲ　縄文中期末～後期初頭の包含層（11）
Ⅳ　河川・湿地性堆積層（12）

第 16 図　４区北東壁・北西壁土層断面図 (1/80)



第 17 図　５区第１・第２遺構面配置図 (1/200)



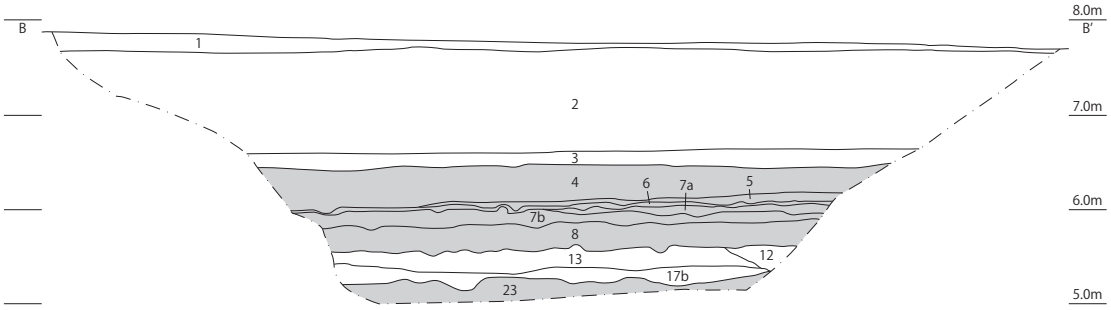
1　10YR5/2 灰黄褐色土
2　10YR7/8 黄橙色粘質土（30cm 以下の粘土ブロック、真砂含む。）
3　10Y2/1 黒色粘質土（炭化物多く含み、陶磁器・土師器・須恵器を少量包含。）
4　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土（炭化物・白色風化礫ブロックを含み、やや しまる。土器・陶器包含。）
5　10Y3/1 オリーブ黒色粘質土（細砂～中粒砂多く含み、斑状にカナケ多く含む。炭化物、弥生～須恵器少量包含。）
6　2.5Y5/3 黄褐色砂（細粒～粗粒砂）
7　2.5Y3/2 黒褐色粘土（細粒砂～中粒砂を斑状に含み、弥生～須恵器少量包含。上部は粘性が強く下部はやや砂質。）
8　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト（極細砂～細砂をブロック状に多く含む。木片多く含み須恵器包含。）
9　2.5Y3/2 黒褐色粘土（部分的に細粒砂多く含む。）
10　2.5Y3/1 黒褐色シルト（炭化物・木片若干含み、土師器・須恵器を少量包含。）
11a　5Y3/1 オリーブ黒色シルト質細砂（シルト多く含み、ラミナ見られる。木片多く含むが土器は少量包含。）
11b　2.5Y3/1 黒褐色シルト質細砂（シルト多く含み、ラミナ見られる。木片多く含むが土器は少量包含。）
12　7.5GY 4/1 暗緑灰色砂礫（極細砂～中粒砂に風化礫、シルトをブロック状に含み、一部ラミナが見られる。炭化物多く含む。）
13　7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質粘土（わりとしまる。極細砂～細砂をブロック状に含み、遺物ほとんど包含しない。）
14　5Y3/2 オリーブ黒色砂礫（細砂～3cm 以下の礫、風化礫を含み、ラミナ見られる。弥生後期～土師器小片多く包含。）
15　5Y3/1 オリーブ黒色シルト（細砂多く含み、木片・木器包含。）
16　2.5Y2/1 黒色砂質シルト（細砂～中粒砂をラミナ状、ブロック状に多く含む。木質・土器を包含。）
17a　5Y3/1 オリーブ黒色粘土（細砂をブロック状に含む。弥生～土師器、木器包含。）
17b　2.5Y3/1 黒褐色砂質粘土（細砂を多く含む。木片・遺物を包含しない。）
18　10Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト（細砂多く含む。木片・木器・土器包含。）
19　10Y4/1 灰色砂（極細砂～粗砂。）
20　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質細砂（木片・炭化物多く含む。）
21　5Y2/2 オリーブ黒色シルト（細粒砂～中粒砂含む。木片・木器・土器少量包含。）
22　10Y4/1 灰色砂（中粒～粗砂。木片・土器若干包含。）
23　7.5Y4/1 灰色粘質砂～砂質シルト（シルト～中粒砂。部分的に粘土を含む。遺物ほとんど包含せず、腐植物わりと含む。）
24　7.5Y3/1・10Y5/1 オリーブ黒色・灰色砂（細砂～粗粒砂にシルトを含み、ラミナ見られる。木質・腐植物多く含む。）
25　7.5Y4/1 灰色粘土（炭化物・木質含む。）
26　7.5Y4/1 灰色砂（極細粒砂～極粗粒砂のラミナ見られる。木質・腐食物とても多く含む。）
27　10Y3/1 オリーブ黒色砂礫（中粒～1cm 以下の礫多く含み、やや粘質。）
28　10Y5/1 灰色砂質粘土（細粒砂多く含み、グライ化顕著。炭化物若干含む。）
29　7.5Y4/1 灰色極細砂～細粒砂（やや粘質で炭化物多く含む。）

Ⅰ　表土・造成土・耕作土（1~3）
Ⅱ　耕作土・平安～中世の包含層（4・5）
Ⅲ　奈良～平安の包含層（7~9）
Ⅳ　SD01（新）埋土（10・11）
Ⅴ　SD01（古）埋土（14~19）
Ⅵ　SD02 埋土（20~22）
Ⅶ　河川・湿地性堆積層、ベース（23~29）

第 18 図　5 区北東壁土層断面図 (1/80)

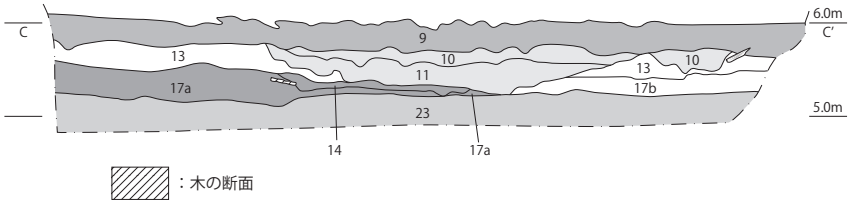
出土したピットもあるが、時期を特定できるものは確認できなかった。すべての遺構掘削後、遺構完掘状況の写真撮影・地形測量を行った。Ⅲ層の縄文包含層までは厚さが１m 以上あることから、作業の効率化を図るためⅡ層の掘削には再び重機を使用し、Ⅲ層よりやや上部から人力掘削を再開した。Ⅲ層は３区のⅣ層に対応すると考えられるが、層厚・遺物の出土量ともに３区Ⅳ層に比して少なかった。包含層を取り除き、検出作業を行ったところ、土坑４基と落ち込み、流路跡を検出した。第２遺構面は標高４m 前後で、包含層との層序関係からも３区第２遺構面と同一面として捉えることができる。流路跡も埋積した土砂が類似し、記録した断面には表れないが第Ⅲ層形成後～第１遺構面以前に形成していることから３区のそれとつながる可能性がある。

調査の完了状況　遺構精査ののち、第２遺構面の基盤であるⅣ層に断ち割りを入れた結果、同様の



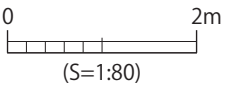
1　10YR5/2 暗黄褐色土
2　10YR7/8 黄橙色粘質土（30cm 以下の粘土ブロック含む。）
3　10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土（炭化物多く含み、陶磁器・土師器・須恵器を少量包含。）
4　10BG4/1 暗青灰色粘質土（炭化物・白色風化礫ブロック含み、ややしまる。3 層と同様に遺物少量包含。）
5　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土（中粒砂多く含み、斑状にカナケ多く含む。土師器・須恵器を少量包含。）
6　2.5Y5/3 黄褐色砂（細粒～粗粒砂。）
7a　10YR3/1 黒褐色粘質土（粘性強く、細粒砂多く含む。）
7b　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（細粒砂～中粒砂を斑状に含み、弥生～須恵器少量含む。）
8　5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト（7b 層に類似。極細砂を斑状に含み粘質。弥生～須恵器包含。）
12　7.5GY4/1 暗緑灰色砂礫（極細粒～中粒砂に風化礫、シルトを部分的にブロック状に含み、一部ラミナと見られる炭化物多く含む。）
13　10Y4/1 灰色粘質土（細粒砂多く含み、わりとしまる。遺物はほとんど含まない。）
17b　10Y4/1 灰色粘土（細粒砂わりと含み、やわらかい。）
23　10Y5/1 色粘質砂（極細粒～中粒砂にシルト・粘土を含み粘質。）

Ⅰ　表土・造成土・耕作土（1~3）
Ⅱ　耕作土・平安 ~ 中世の包含層（4・5）
Ⅲ　奈良 ~ 平安の包含層（7・8）
Ⅶ　河川・湿地性堆積層、ベース（23）



9　10YR3/2 褐色粘土（部分的に細粒砂多く含む。須恵器包含。）
10　2.5Y3/1 黒褐色シルト（粘土極細粒砂を部分的にブロック状に含み、わりとしまる。）
11　10YR3/1 黒褐色シルト～シルト質砂（細粒砂とシルトのラミナ見られる。遺物ほとんど含まない。）
12　7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質粘土（13 層に近似。細粒砂をブロック状に含む。）
13　7.5Y4/1 灰色粘土（部分的に細粒砂を含む。）
14　10Y3/1 オリーブ黒色砂礫（細粒～ 1cm 以下の礫。部分的にシルト含み、ラミナ見られる。弥生～土師器小片とても多く包含。）
17a　2.5Y3/2 黒褐色シルト（部分的にブロック状の粘土、細粒砂を含む。木片・木器を多く含み、土器はあまり包含しない。）
17b　2.5Y3/1 黒褐色砂質粘土（細砂を多く含む。木片、遺物を包含しない。）
23　10Y4/1 灰色粘質砂～砂質シルト（シルト～中粒砂。部分的に粘土を含む。遺物を包含せず、腐植物をわりと含む。）

Ⅲ　奈良 ~ 平安の包含層（9）
Ⅳ　SD01（新）埋土（10・11）
Ⅴ　SD01（古）埋土（14・17a）
Ⅶ　河川・湿地性堆積層、ベース（23）



第 19 図　５区北西壁・南東壁土層断面図 (1/80)

細砂層が続き、遺物は出土しなかった。湧水のポンプアップにより、砂が集まり壁面が崩壊する恐れも生じたため、作安全確保のためそれ以上の断ち割りは行わず、Ⅳ層上面で掘削を終了した。

６．５区（第６・17 図）

調査区は、神西城東麓に広がる標高７m 足らずの水田部に位置し、４区の北東 30m の九景川右岸に建設予定の橋脚工事に伴い発掘調査を実施した。

層序（　第 18・19 図）　基本層序は、上からⅠ黄褐色・黒色土 - Ⅱ黒色粘質土 - Ⅲ黒褐色粘土 - Ⅶ粘砂・シルト・砂礫である。Ⅰ層は旧耕作土とその上に客土された造成土である。Ⅱ層は標高 6.4m で検出した平安時代～中世の遺物包含層である。北東壁の断面では、４層下面にウネリが見られることから、耕作土の可能性がある。Ⅲ層は奈良時代～平安時代の包含層で、Ⅱ層と同様に北東壁断面で７層下面にウネリが認められ、耕作土であった可能性がある。Ⅶ層は河川・湿地性の堆積で、堆積環境の違いにより砂やシルトが堆積している。これらが堆積する過程で、SD01（新・古）・02 がそれぞれのベース層を切り込む様子が北東壁・南東壁の土層断面で確認できる。なお、断ち割りによって SD01 古・SD02 のベース層以下では遺物が出土しないことを確認した。

発掘作業と検出遺構（第 17 図）　重機掘削は試掘結果に基づいて安全勾配の法面と水切り側溝を設けながらⅡ層上面付近まで行った。包含層は古代末～中世以降の上層と、奈良時代～平安時代にかけての下層に分かれ、これらを取り除いたところでⅦ層砂～粘砂（北東壁 12・13 層、北西・南東壁 12・13 層）を検出した。検出面の標高は 5.6m 前後で、土質は異なるが３・４区で検出した第１遺構面に相当するものと考えたが、精査したところ建物ピットは検出できず、細長い溝状の落ち込み SD01 を検出した。覆土からわずかに須恵器が出土しており、検出面を被覆する包含層と近い時期の遺構と考えられた。SD01 底面まで掘り下げたところで木製品を検出し、当初この溝に伴うものと考えたが、断ち割りを入れた結果、木製品が下層に続くことが判明した。ベース面を掘り下げたところ、先の SD01 に平面的に重複するように大量の木製品が出土し、この溝に新旧があることを認め、以後上層検出の SD01（新）としてこれと区別した。SD01（古）は杭や矢板材が打ち込まれた導水施設のようで、堰と考えられる構造も確認した。SD01（古）の埋土・遺物を取り除いたところ、同じベース面で SD02 を検出した。

調査の完了状況　遺構精査ののち、基盤であるⅦ層に断ち割りを入れた結果、ほとんど遺物は出土しなかった。湧水のポンプアップにより、砂が集まり壁面が崩壊し始めており、作安全確保のためそれ以上の断ち割りは行わずⅦ層上面で掘削を終了し、打設された杭の一部と矢板材は抜き取って持ち帰った。

壁面の記録を終えた後、自然科学分析試料の採取を行い調査を完了した。

第３節　１区の遺構と遺物

１．土坑

(1)SK01（第 20 図）

形態と規模　標高 7.5m 余りの平坦部砂層上面において検出した。砂に掘り込まれているため本来の形状なのか定かではないが、平面形態は不整形を呈し、底面は浅い窪みが連なるように一段深くなっていた。規模は南北 1.3m、東西 1.2m、深さは 20㎝ほどの大きさである。

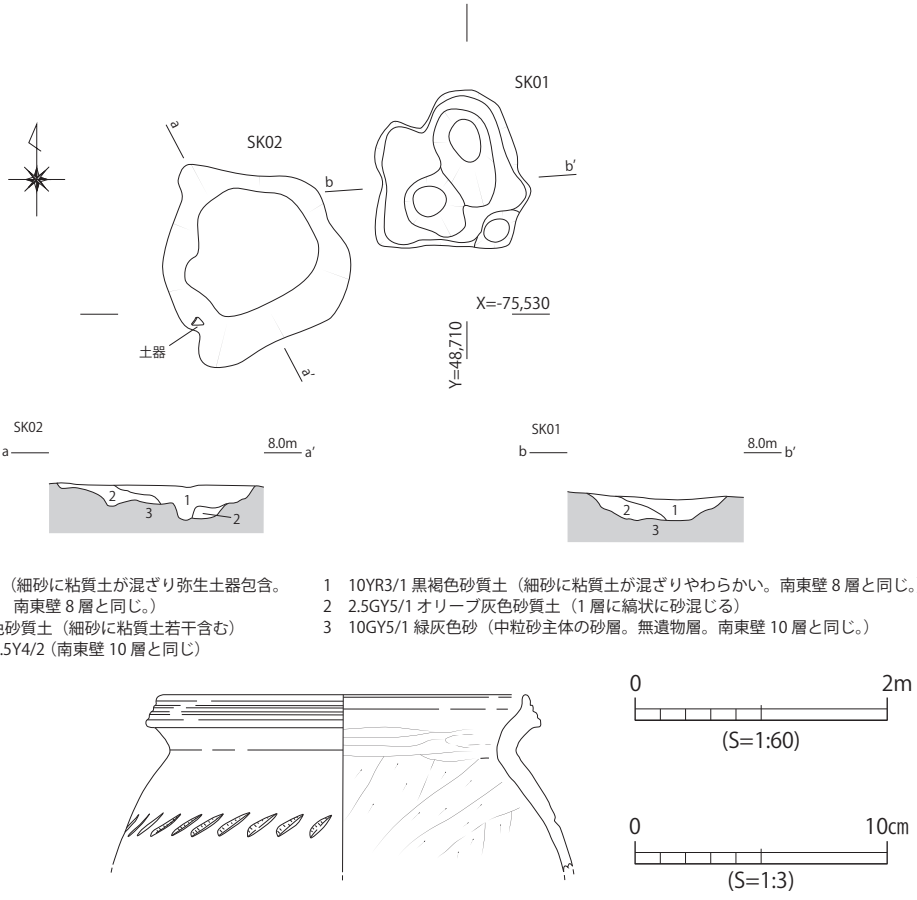
堆積状況　埋土は砂層上面に堆積した８層 (第９図) と同じで、砂と粘質土が混在した土砂で、人為的に埋めたような痕跡を確認することはできなった。

遺構の性格と時期　情報が乏しく遺構の評価は難しい。周辺では小さな立木根が点々と見られたほか、倒木又は流木も確認しており、当時は丘陵裾の川辺に広がる林のような環境であったと推測される。人為的に掘り込まれた可能性以外に、倒木の際にできた窪みの可能性も残る。出土遺物が無いため、時期を特定することはできないが、８層からは須恵器・古式土師器の小片が出土していることから、古代を下ることはないと考えられる。

(2)SK02(第 20 図)

形態と規模　SK01 の西側に近接して検出した。SK01 と同様にやや不整形で、底面にも凹凸が認められた。規模は長さ 1.4 ～ 1.6m、深さ 30㎝を測り、SK01 よりも一回り大きい。

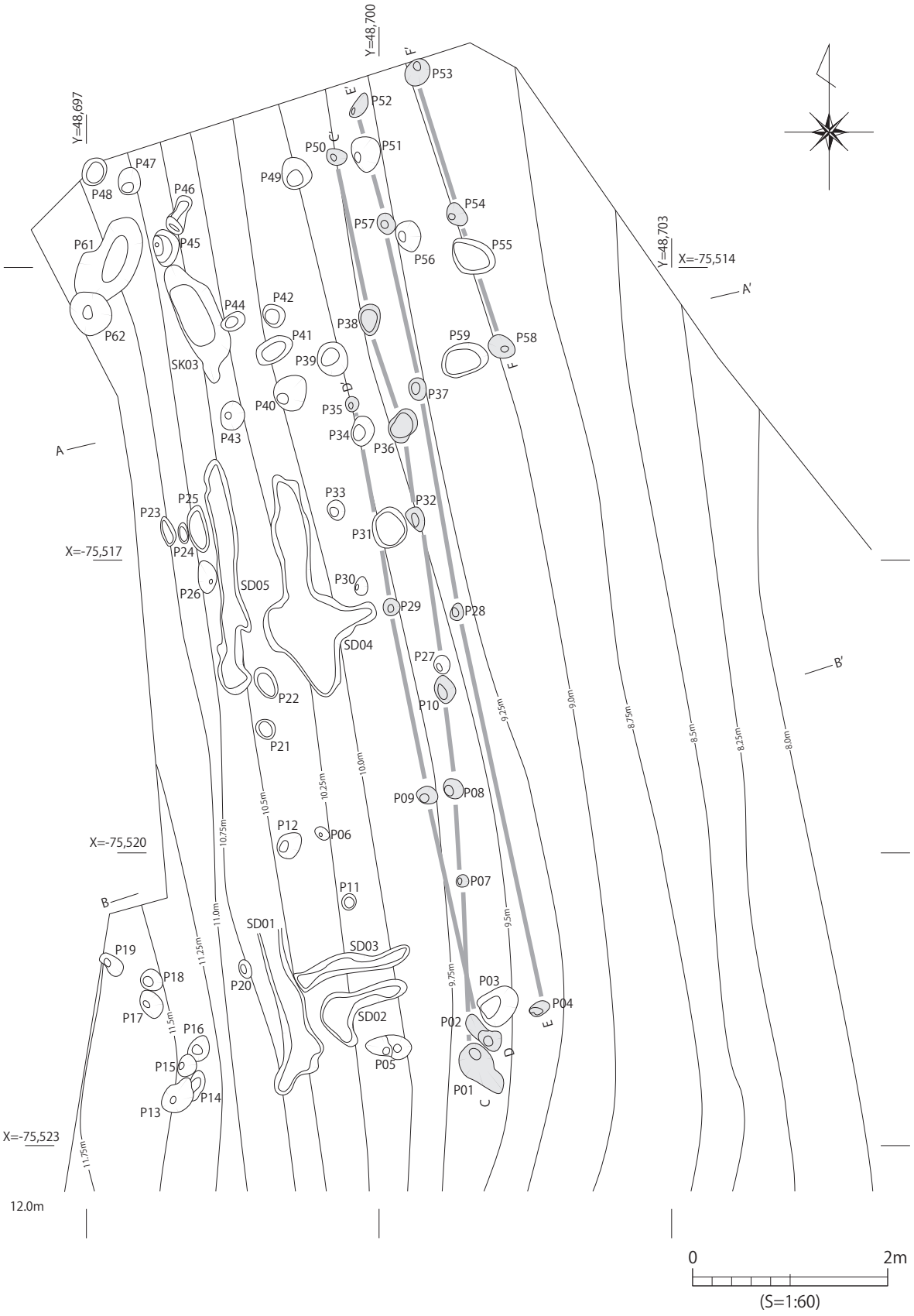
堆積状況　埋土は砂層上面に堆積した８層と同じで、SK01 と同様に人為的に埋めたような痕跡



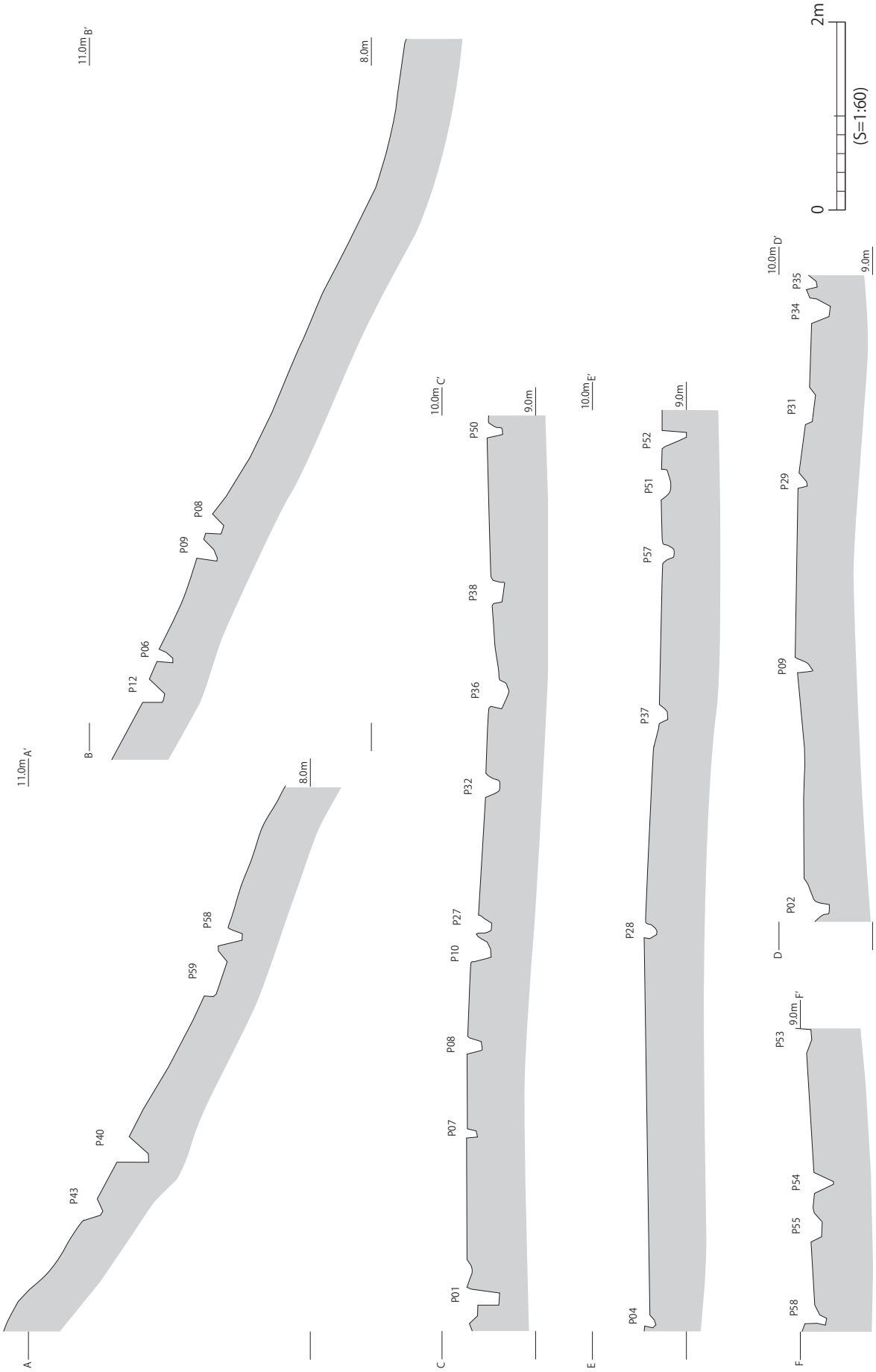
1　2.5Y3/1 褐色砂質土（細砂に粘質土が混ざり弥生土器包含。南東壁８層と同じ。）
2　5Y2/2 オリーブ黒色砂質土（細砂に粘質土若干含む）
3　灰オリーブ色砂　7.5Y4/2（南東壁 10 層と同じ）

1　10YR3/1 黒褐色砂質土（細砂に粘質土が混ざりやわらかい。南東壁８層と同じ。）
2　2.5GY5/1 オリーブ灰色砂質土（1 層に縞状に砂混じる）
3　10GY5/1 緑灰色砂（中粒砂主体の砂層。無遺物層。南東壁 10 層と同じ。）

第 20 図　１区 SK01・02、SK02 出土遺物実測図 (1/60・1/3)



第 21 図　斜面ピット群平面図 (1/60)



第 22 図　斜面ピット列断面図 (1/60)

は確認できなかった。

出土遺物　埋土２層からⅤ - １様式の弥生土器甕が１点出土している。肩部には板状工具の小口により連続刺突を施す。

遺構の性格と時期　SK01 と共通する点が多いことから性格・時期ともにこれと同様のものと推定され、人為的に掘り込まれた可能性以外に、倒木の際にできた窪みの可能性が考えられる。

２．斜面ピット群 (第７・21・22 図)

斜面に堆積した流土を取り除き、地山上面で精査を行ったところ、調査区北半部の標高９～ 11m の斜面上部において、ピット多数と溝状の浅い掘り込みを検出した。斜面南側には巨大な岩塊が斜面に切り立っており、この周辺部ではピットを検出していない。

形態と規模　ピットは平坦面を造り出すことなく、斜面にそのまま掘り込まれ、総じて等高線に沿う状況が看守される。特に標高９～ 10m にかけては顕著で、ピットの間隔は一定ではないものの、概ね１～２m の間隔で配置されたピット列が４列並ぶ様子が確認できる。ピットは径 20 ～ 30㎝、深さは 10 ～ 30㎝ほどで、垂直にではなく斜めに掘られているものが多く認められた。一部交差しているが、列の間隔は、DD'-CC' 間で 50㎝、DD'-EE' 間で 40 ～ 70㎝、EE'-FF' 間で 80㎝である。

これらピット列の上部には幅 20 ～ 30㎝、深さ 5㎝ほどの浅い溝状の落ち込みがあり、ピット列に併行するものと直交するものを検出している。

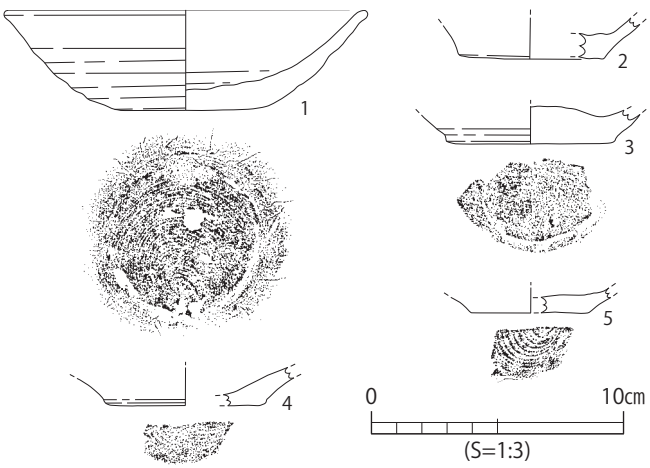
斜面南側は、ピット群と同じ標高付近に巨大な岩塊が斜面に切り立っており、この岩塊付近ではピットは認められなかった。

出土遺物 (第 23 図)　１～３は岩塊の隙間から出土した土器で、いずれも糸切底の土師器である。１は唯一器形が分かるもので、口縁は丸みをもって大きく開き、底径も大きい。４・５は P05 から出土した土師器底部で、やや外反気味に立ち上がるタイプとみられる。これらは概ね 13 世紀後半～ 14 世紀頃の所産と考えられる。

遺構の性格と時期　ピット群は比較的に急こう配な斜面にあって、加工段を伴わない点や、ピットが斜めに掘り込まれる点など、通常の建物跡と考えるのには難がある。分布範囲を斜面南側の岩塊と関連付けて考えると、逆茂木や柵列のような神西城の防御施設として捉えた方が理解し易い。

３．遺構外出土遺物 (第 24 図)

１～４は斜面南半の流土から出土したものである。１は有稜の高坏で坏部が深く口縁部が緩やかに外反する。脚部との接合部には粘土を充填している。九景川２～３期に属すものとみられる。２～４は中世土師器の坏・皿である。５・６は平坦部の８層から出土した頭折れの和釘と元祐通寶 (初鋳年 1086 年) である。７は斜面半からの流土から出土した微細剥離のある剥片で、石材は安山岩とみられる。８～ 10 は表土から出土した土師器皿と布志名焼陶器である。９は燈明皿で、口縁部に油煙が残る。



第 23 図　１区斜面出土土師器実測図 (1/3)

第４節　２区の遺物

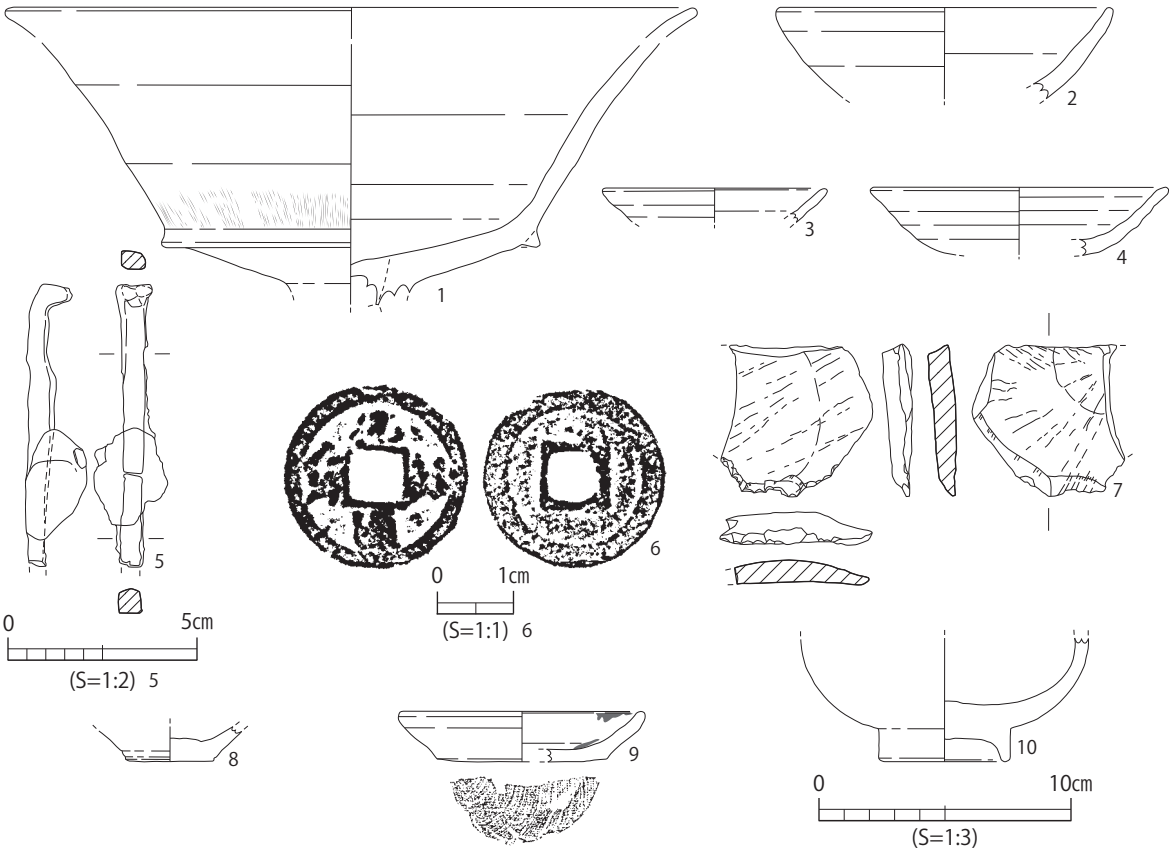
２区では試掘確認調査・本発掘調査で遺物が出土しており、出土層位の対応関係を整理した上で併せてⅢ層出土遺物 (第 25 ～ 31 図)、Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 (第 32 図) として報告する。

Ⅲ層は、九景川旧河道又は流路の堆積物と考えられ、縄文後期の土器・石器が出土している。

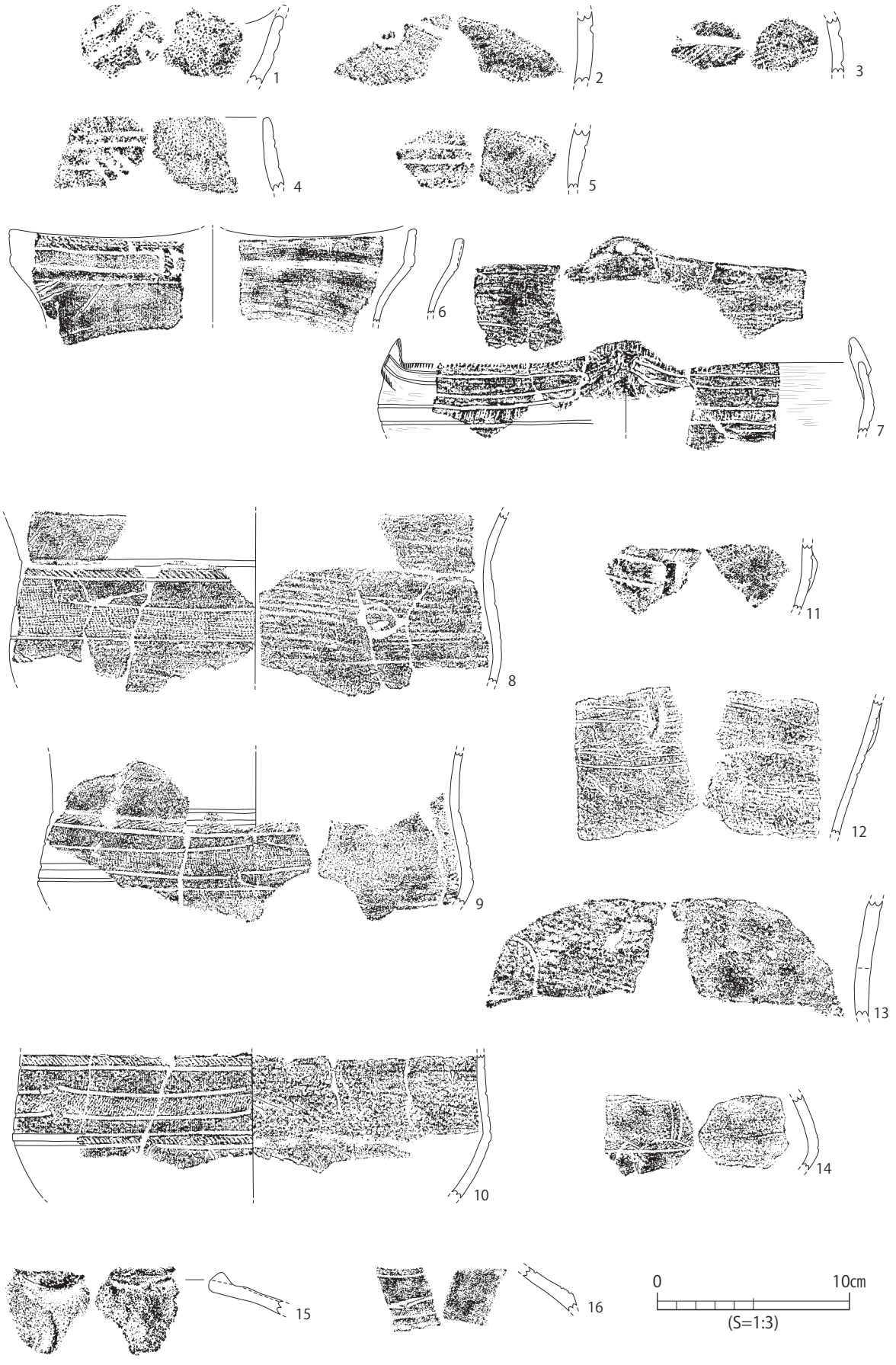
縄文土器　25- １～５は磨消縄文の有文土器である。１は波状口縁の波頂部付近の破片で、外面には幅４㎜の太い２条の沈線とＪ字文が施される。沈線区画内にはRLの縄文が施文される。２は幅4.5㎜の太い沈潜文と鉤状の小さなＪ字文があるもので、沈線区画内にはLRの縄文が施される。３は幅５㎜の太い２条沈線間にLR縄文を施す。１～３は破片が小さく、文様の全体構成は不明だが、文様の特徴から後期初頭の九日田式に併行する土器と考えられる。

４はやや内湾気味の口縁で、３条の沈線が横走し、５は２条の沈線が横走するものである。いずれも内外面はナデ調整を基調とし、胎土は黄色い。全容がわからないが、１～３に比べ沈線が細くて浅く、九日田式よりも一段新しい段階の五明田式・暮地式併行の土器と考えられる。

６～ 16 は縁帯文土器である。６は波状口縁の深鉢で、屈曲する口縁文様帯には２条の末端刺突沈線と波底部から垂下する隆帯で区画を設け、その下に１条の沈線が廻る。区画の上縁と垂下隆帯にはRLの縄文を、口縁端部には刻目文を施す。７は内湾する口縁に突起が付く深鉢である。突起の内面には円形刺突が施され、外面は逆Ｙ字形の隆帯が垂下する。文様帯には末端刺突沈線による区画文と楕円形の沈線区画文が横位に展開し、上下に刻目文が施される。



第 24 図　１区出土遺物 (1/1・1/2・1/3)



第 25 図　２区Ⅲ層 出土縄文土器実測図１(1/3)

８は２条の横走沈線間に左上がりの刻目文を施し、その下にクランク形の沈線区画文を配し、区画内に RL の縄文を施すものである。９は２条の横走沈線間に右上がりの刻目文を施し、その下に長方形の沈線区画文が２段に展開するものである。区画内には巻貝による擬縄文が施される。10 は２条沈線間の刻目文帯を２段に配し､その間に２条の末端刺突短沈線と巻貝による擬縄文を施す。

11・12 はノの字状垂下隆帯をもつもので、11 は隆帯の横に２条の沈線が横走する。12 は隆帯の左右に２条の沈線が横走し、鋸歯状の沈線文が反対位に２段施される。沈線文は総じて浅く、また施文も雑で稚拙な印象を受ける資料であるが、器面はミガキにより丁寧に仕上げられている。

13 は浅い沈線で弧を描き、下端を直線で閉じたようなモチーフがみられるものである。14 は対向する連弧文を２条の縦走沈線で連結し、下段連弧文内には刻目を入れたのち磨消しを行っているものである。縦走沈線はやや弧を描いており、隆帯を模したものと考えられる。

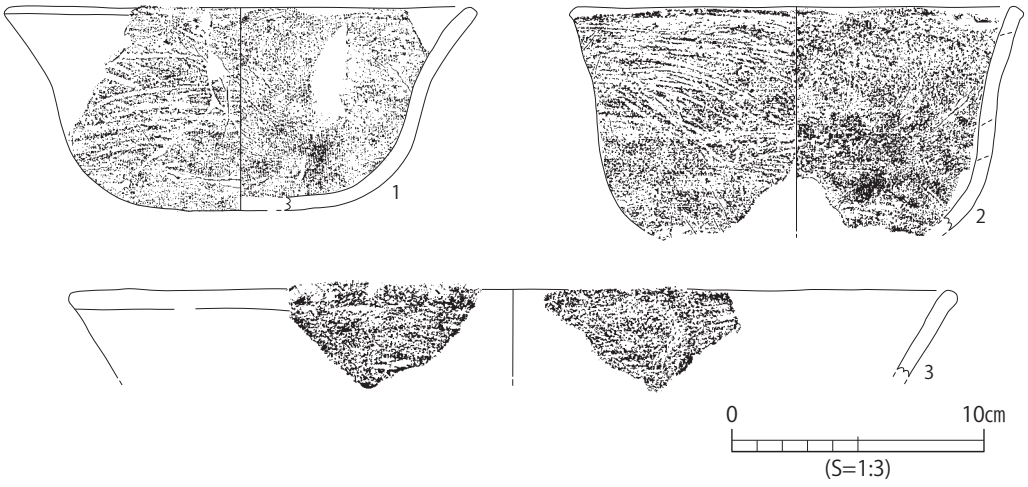
15・16 は無頸の壺もしくは注口土器である。15 は口縁部に隆帯状の突起が付き、その下にノの字状の垂下隆帯を貼り付ける。隆帯の横にはわずかに沈線区画の痕跡が残る。16 は円形刺突文と沈線内刺突文による文様帯と、擬縄文を施す沈線区画文をもつものである。沈線区画は短沈線を連ねて構成するもので、末端刺突は確認できない。

６～ 16 は文様の特徴からも権現山式新段階に併行する土器群と考えられる。胎土が比較的に緻密で器壁が薄く、全体的に黒い外観を呈する。調整は内外面ともミガキか丁寧なナデを多用するものが多い。

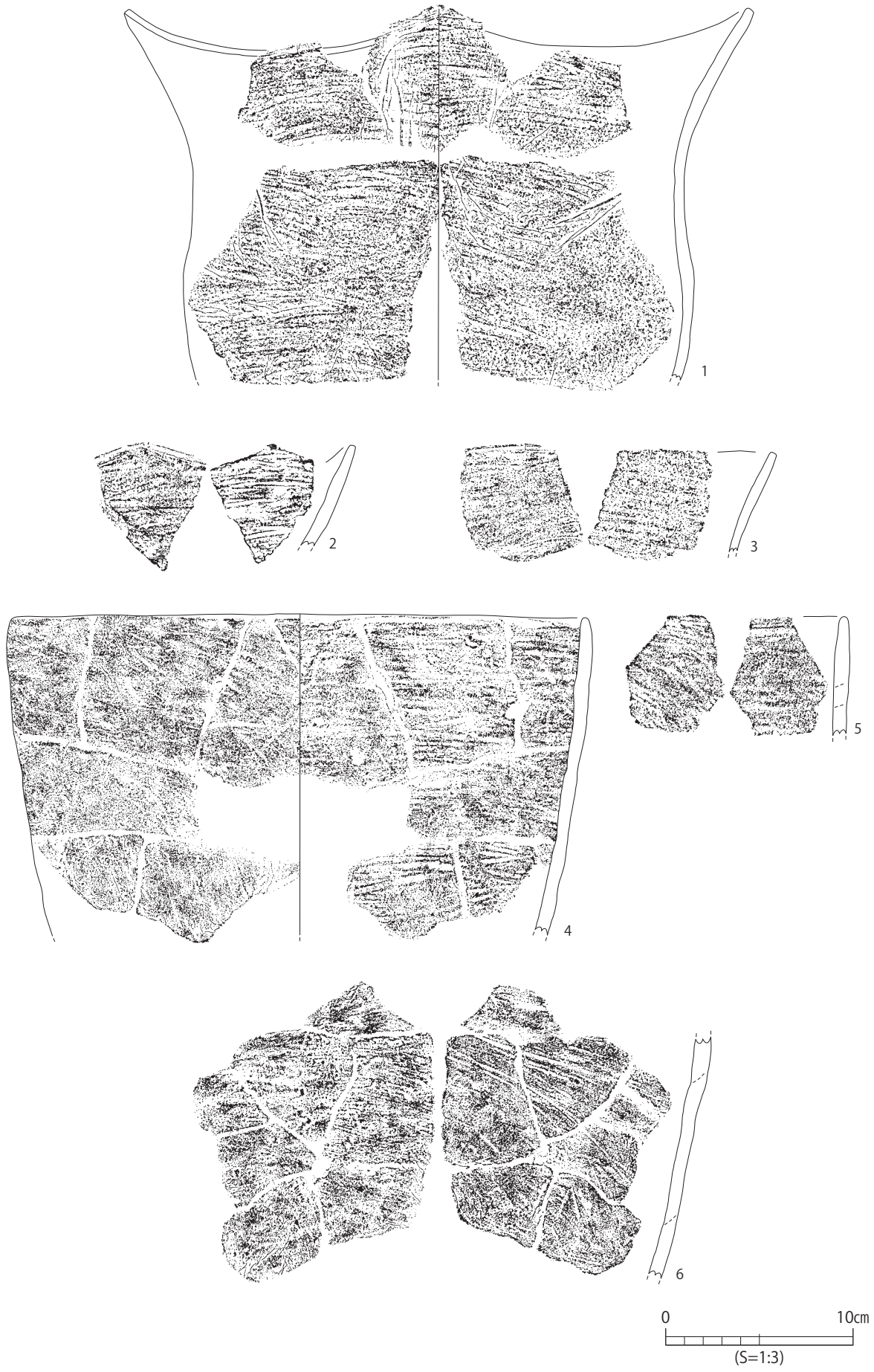
第 26 図は無文の浅鉢である。１・２は口頸部が外反するタイプで、内外面はナデを基調とし、外面の一部に二次調整の巻貝条痕がみられる。３は口縁が鉢形に開くものである。

第 27 ～ 29 図は無文深鉢で、器形は口頸部が大きく外反するもの (27- １～３) と砲弾形 (27-4 以降) に大きく分けることができ、後者の方が多数を占める。器面調整は多様である。27 図は内外面に巻貝条痕を施すもので、このうち１・２は波状口縁、３～５は平口縁の資料である。２・３は二次調整にナデを加え比較手に作りは丁寧といえる。４～６もナデを併用することで器面が比較的に平滑に仕上がるが、条痕との前後関係は不明である。

28- １・２は内外面ともに二枚貝条痕を施すもので、２はわずかに盛り上がるような突起が付くかあるいは波状口縁の資料である。３は外面に二枚貝条痕、内面にはナデを施す。４は外面に巻貝条痕にナデを加え、内面には二枚貝条痕を施す。５・６は外面に巻貝を施文具としたミガキを施し



第 26 図　２区Ⅲ層出土縄文土器実測図２ (1/3)



第 27 図　２区Ⅲ層出土縄文土器実測図３(1/3)

て平滑に仕上げ、内面にはに横位の巻貝条痕が顕著にみられる。７は外面条痕ののち粗いナデを施し、内面には巻貝条痕を施す。８は外面に削り、内面には条痕が認められる。９は外面が条痕であろうか、器面が荒れており判然としなが、内面は丁寧なナデがみられる。10 ～ 12 は外面に巻貝条痕とナデ、内面にはナデを施す。

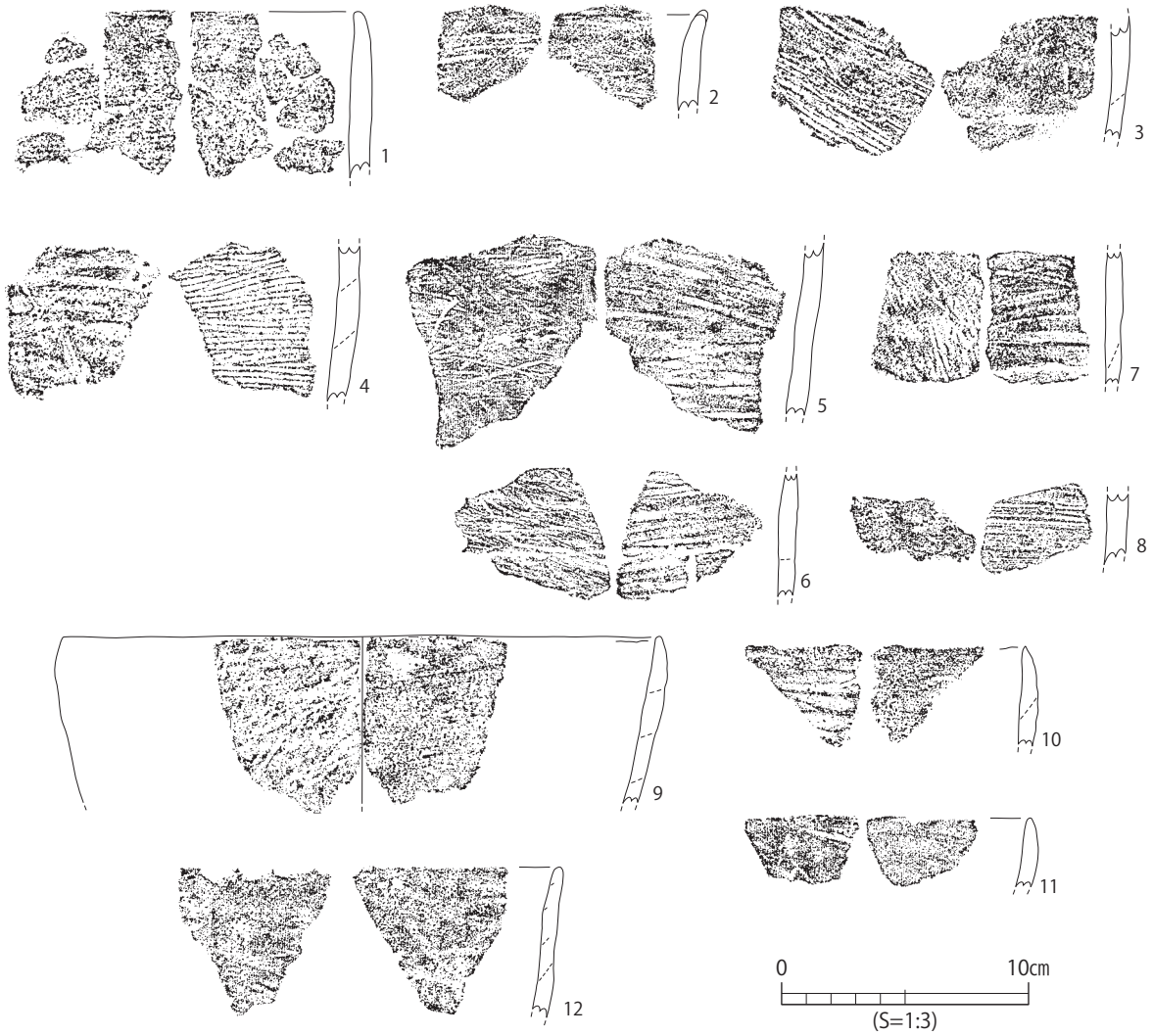
29-1 ～ 4 は内外面ともにナデ調整のもので、表面は凹凸が少なく平滑な外観を呈するものである。この内、２の外面には籾状の圧痕が確認できるが詳細な分析を加えることはできなかった。

第 30 図は底部資料で、凹底のもの (1 ～ 3) と平底 (4) がある。調整は内外面ともにナデを基本とするが、３は内面の一次調整に二枚貝を使用している。

個別の無文土器について時期を特定することは難しいが、Ⅲ層から出土した有文土器は後期中葉～後葉頃の縁帯文終末段階にまとまることから、これらに伴う土器群と考えて支障はないと思われる。調整は巻貝を使用するものが多く見られるが、条痕とナデを併用するものもある。次いで見られるのはナデを主体とする調整で、無文でも比較的に丁寧なつくりのものが認められる。

第 31 図はⅢ層から出土した石器である。１はスクレーパーで、横長剥片の縁辺に剥離面を並べて刃部を形成する。２～４は安山岩系の剥片である。

５・６は礫石器で、石材は河原石を使用している。５・６ともに敲打した痕跡がよく残ることか

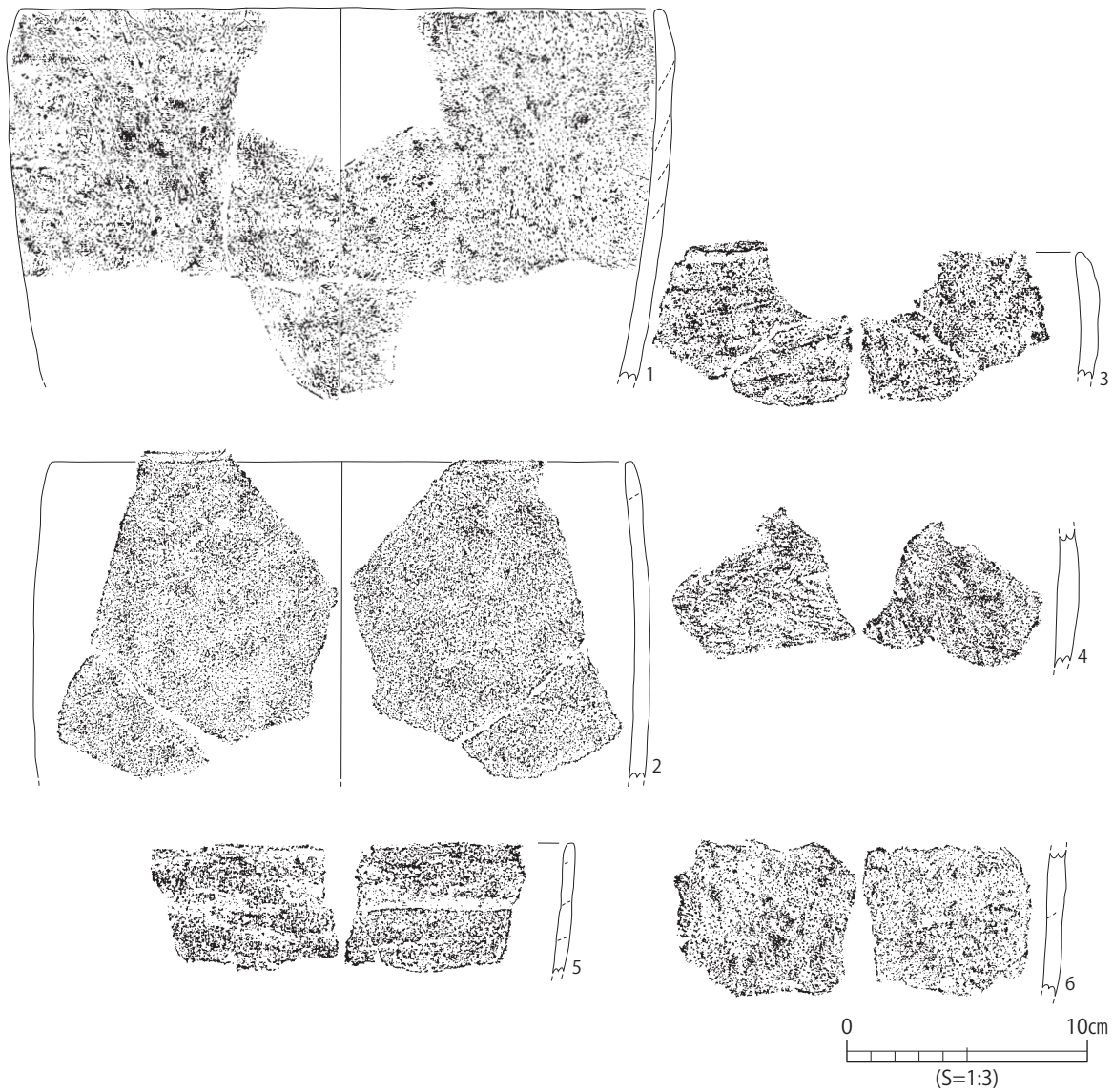


第 28 図　２区Ⅲ層出土縄文土器実測図４(1/3)

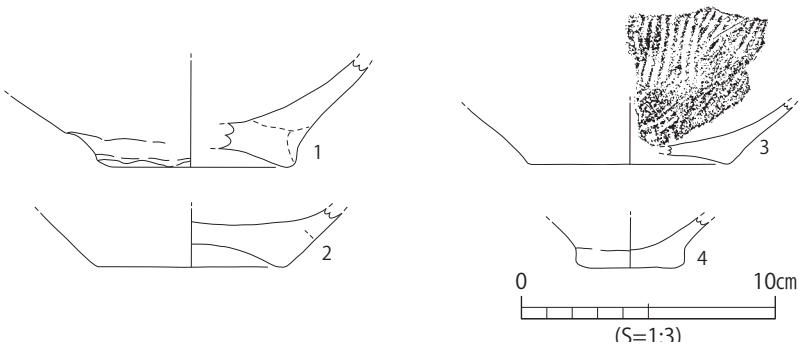
ら、叩石と考えられる。

32-1 はⅠ層で出土した焼土塊だが全面が破面のため、用途等の詳細は不明である。

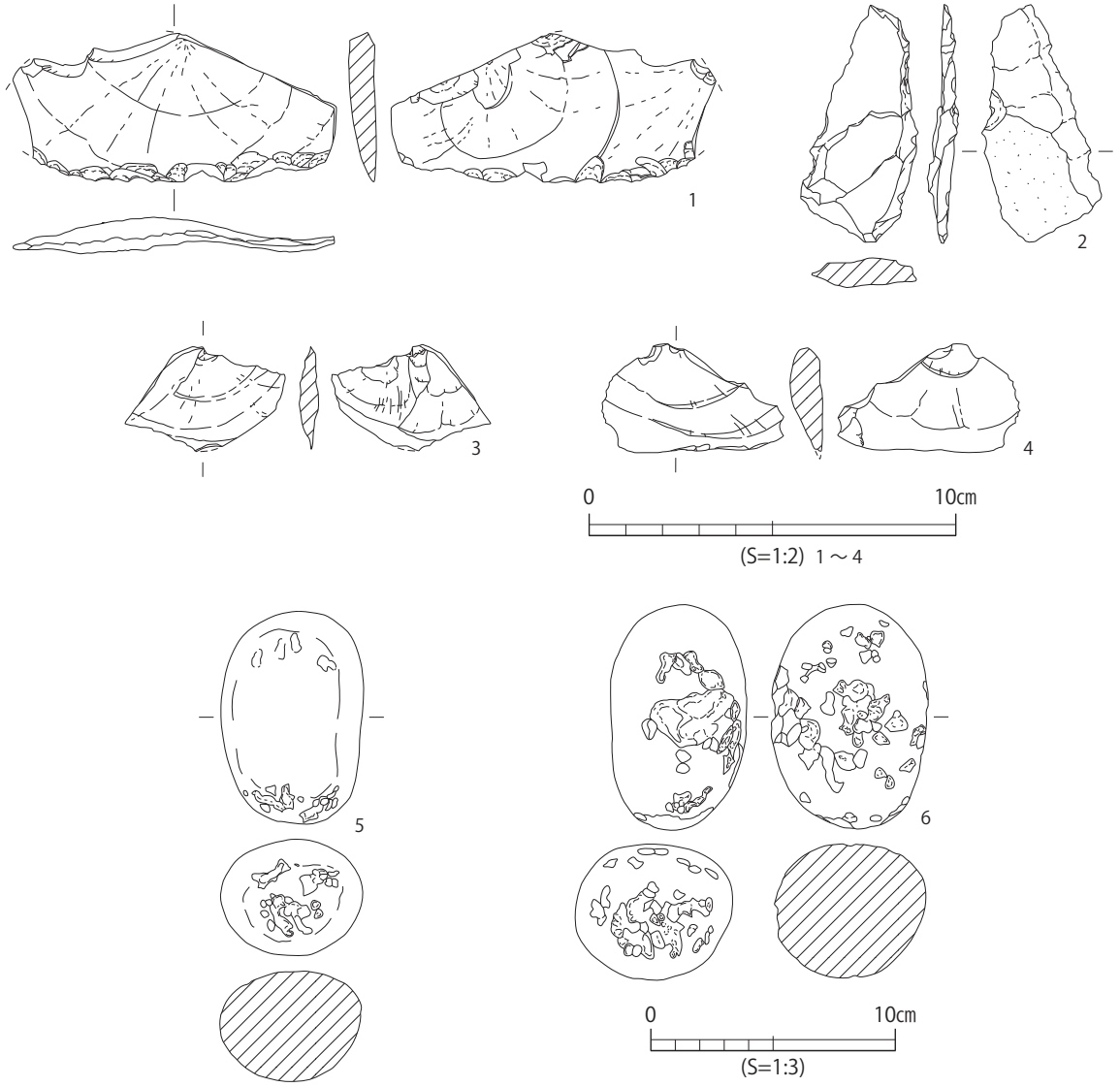
２・３はⅡ層出土品である。２軟質な須恵器の鉢か甕の類で、外面にはハケメを施す。３は縄文土器で、内屈する口縁に２条の沈線を廻らす。



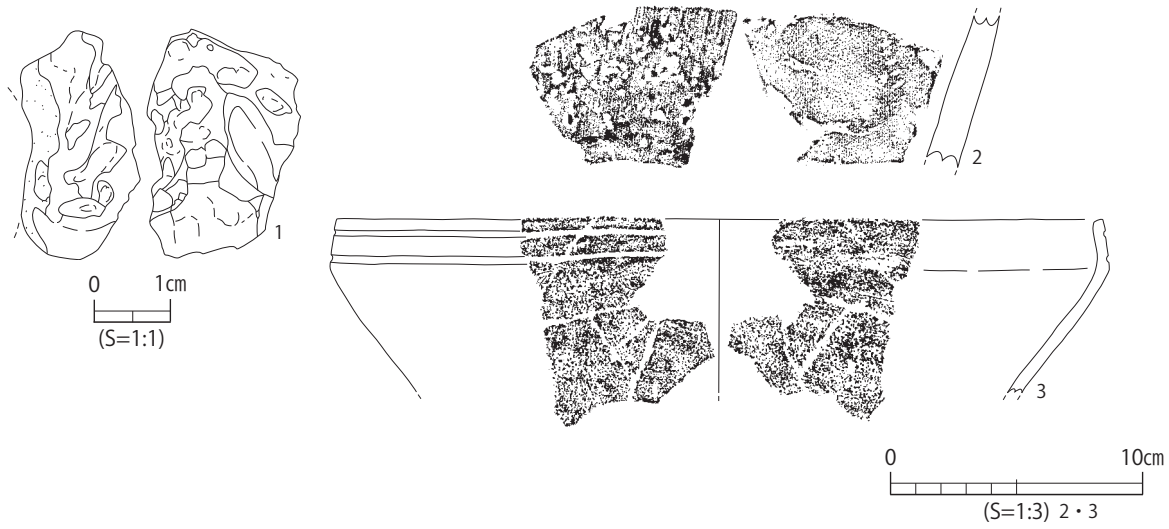
第 29 図　２区Ⅲ層出土縄文土器実測図５(1/3)



第 30 図　２区Ⅲ層出土縄文土器実測図６(1/3)



第 31 図　２区Ⅲ層出土石器実測図 (1/2・1/3)



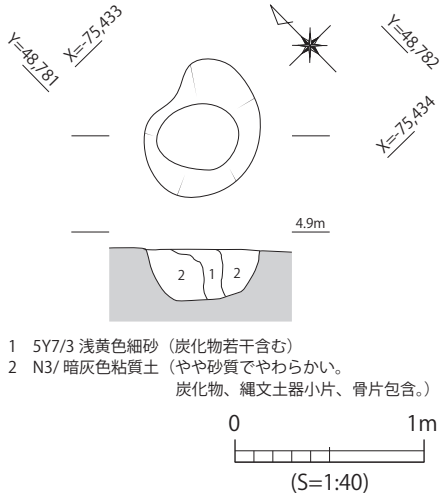
第 32 図　２区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図 (1/1・1/3)

第５節　３区の遺構と遺物

１．縄文時代

(1) 土坑 (第 13・33 図)

形態と規模　第２遺構面において土坑 SK02 を検出した。土坑は、やや不整な長楕円形を呈し、長径 74㎝、短径 60㎝、深さは 30㎝弱を測り、径 30 ～ 40㎝ほどの底面を持つ。



第 33 図　３区 SK02 実測図 (1/40)

堆積状況　埋土は炭化物を含む砂質土で、遺構面を被覆するⅢ層と同様の土砂が堆積し、中央に柱痕状の立ち上がりが観察された。

出土遺物　埋土２層からは縄文土器細片が出土したほか、クジラの骨が出土している[1]。

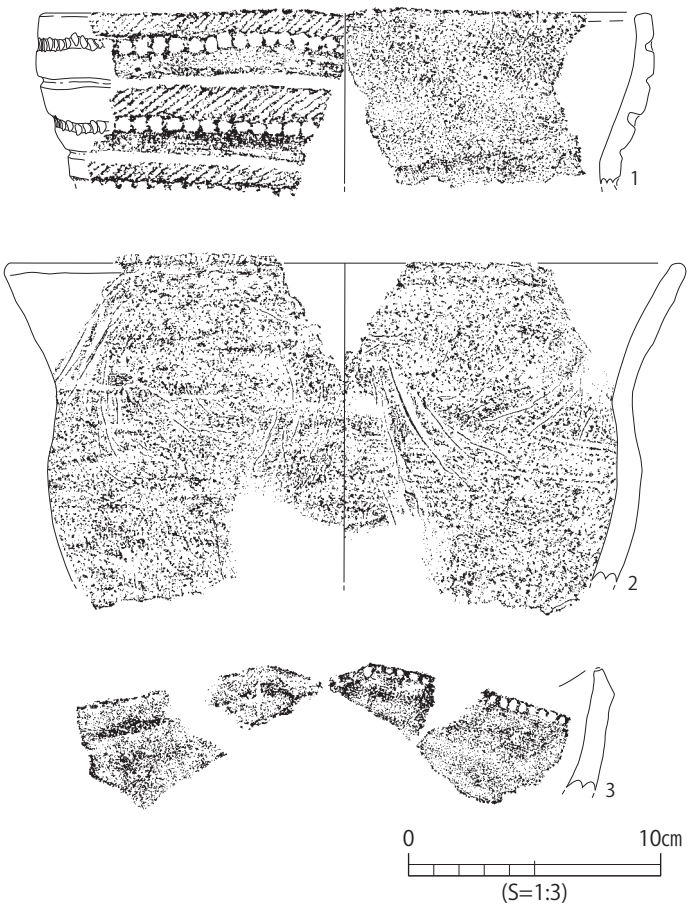
遺構の性格と年代　直上の包含層からは微細な骨片等の動物遺存体が出土しており、遺構の埋土と共通することからゴミ穴の可能性が考えられる。その一方で、出土したクジラの骨が他の遺存体に比べて大形で、土層断面に見られる立ち上がりも標識の痕跡と見ることも可能である。後述する４区と異なり、周囲に他の遺構もないことから、この土坑や周辺域が特別な空間として扱われた可能性も排除できず、ここでは祭祀土坑として捉えておきたい。

時期を特定し得る土器は出土してないが、包含層出土遺物から後期初頭頃と考えられる。

(2) 包含層出土遺物 (第 34 ～ 47 図)

Ⅳ層から縄文時代中期末～後期初頭頃を中心とする土器と石器が出土している。

縄文土器（第 34 ～ 42 図）　第 34 ～ 37 図は磨消縄文土器である。総じて幅広で深い２本沈線で区画した意匠の内外に縄文を施すもので、基本的には



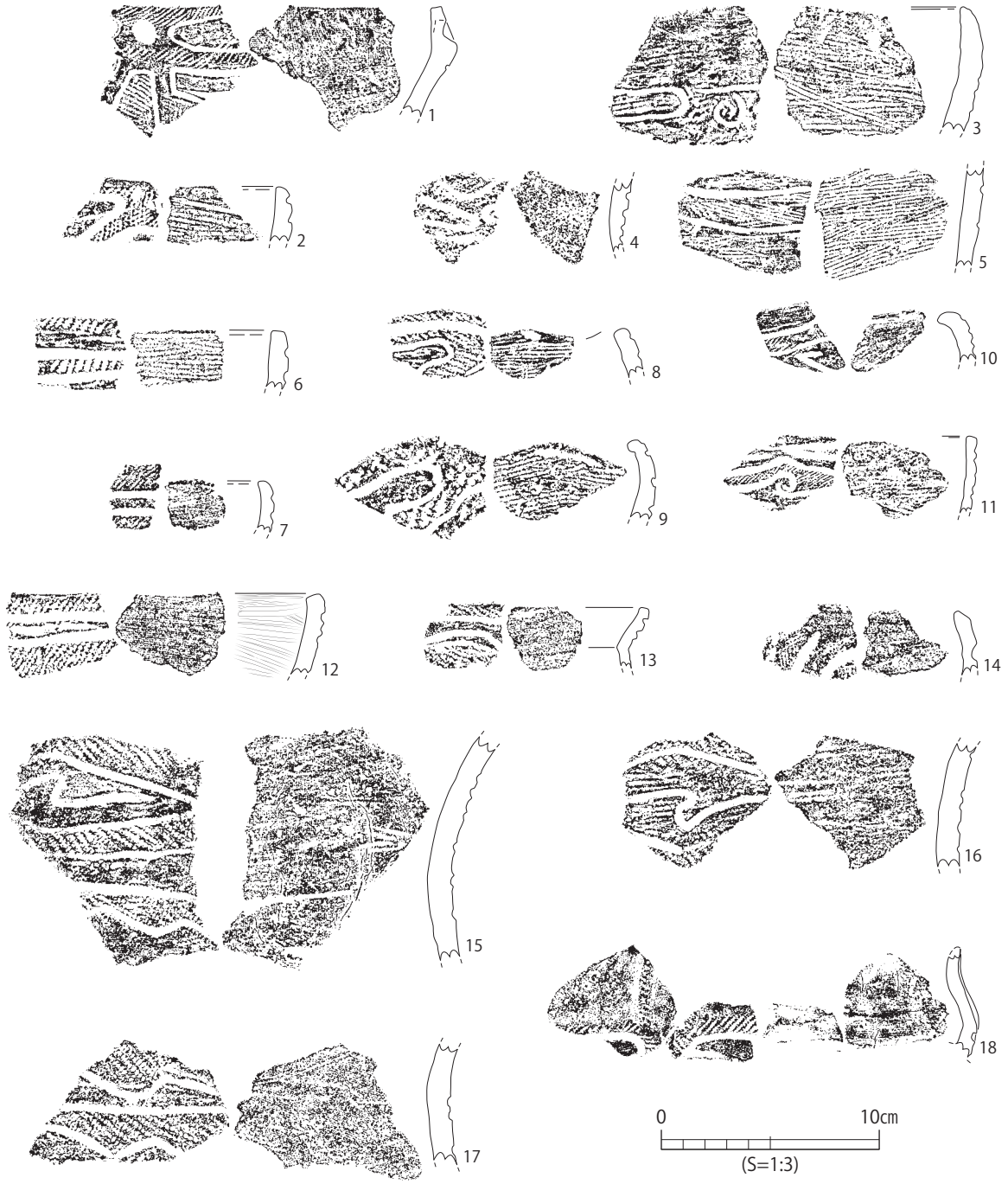
第 34 図　３区Ⅳ層出土縄文土器実測図１(1/3)

1　詳細は後掲第６章第１節を参照のこと

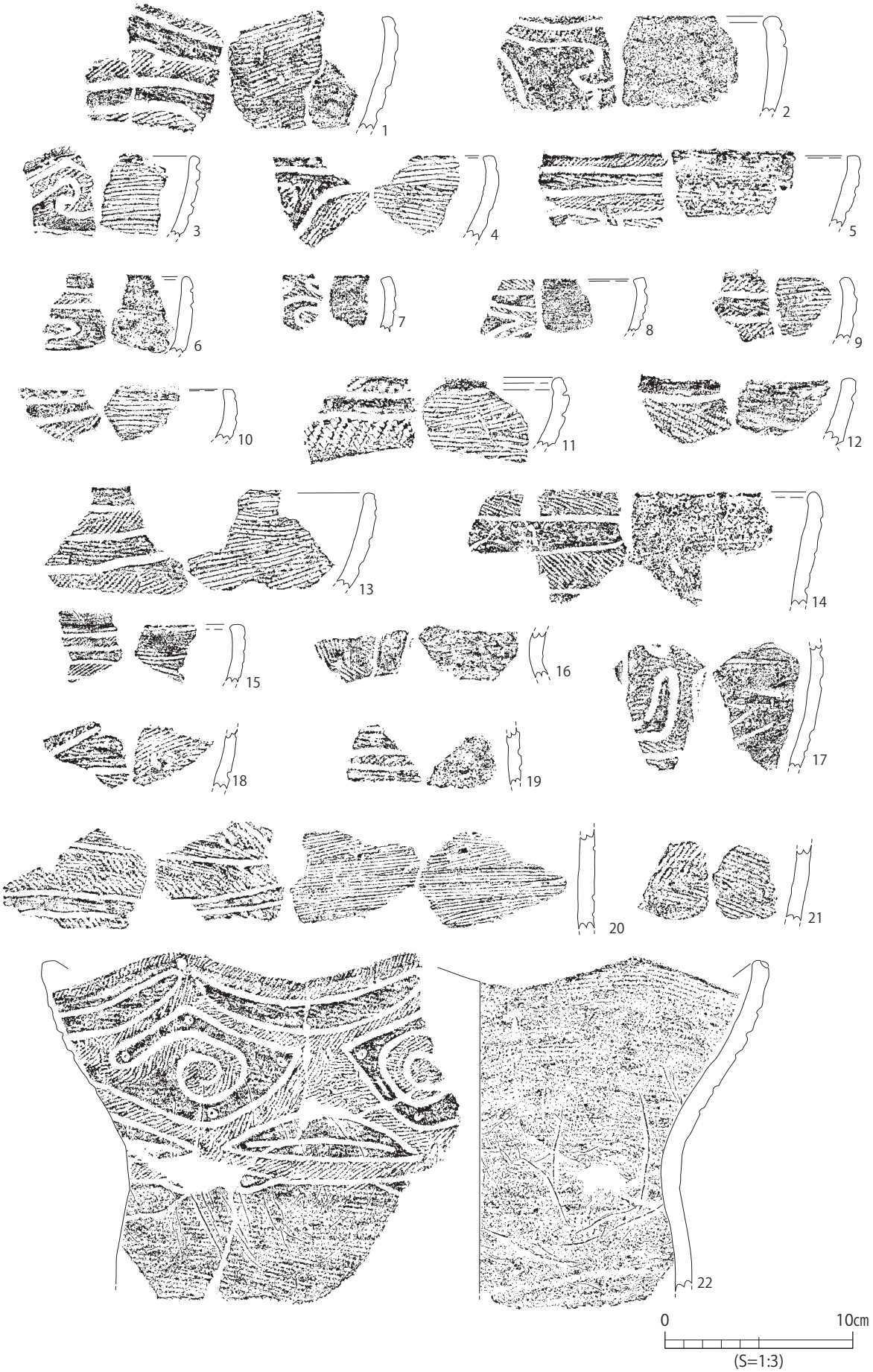
中津式とされる範疇だが、通覧すると古相のもの (第 34~36 図) と、新相のもの (37 図) に分けることができる。このうち 35 図に掲げる一群は、モチーフや施文方法などが定型化以前の様相を残しており、中期末段階までさかのぼる可能性がある。

35-1 は頸部が外反気味で口縁部が短く内屈するもので、口頸部にかけて施文される。幅２～３㎜の沈線区画に円形刺突と LR 縄文を施すが、横位展開する縄文帯と無文帯に境界が無いため磨消縄文になっていない部位が見られる。調整は内外面とも細密条痕を施したのち、外面にはナデを加える。２は幅４㎜の深い沈線区画内に LR 縄文と円形刺突を施すもので、１と類似する意匠を持つ。内面には二枚貝条痕が加えられる。

３～５は沈線区画を有するが縄文施文が見られない一群である。３は内湾する口縁に楕円系のの



第 35 図　3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 2 (1/3)



第 36 図　3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 3 (1/3)

区画と、その間を横走する短沈線と渦巻文を配す。内外面とも二枚貝条痕を施し、外面は条痕をナデ消す。６・７はいずれも太い横走沈線とLR縄文を施すもので、６は内面二枚貝条痕、７は丁寧なナデを施す。

８・９は波頂部に太い沈線で描出した巻きの小さなJ字文を有し、内部に縄文施文するが、９のJ字文は１本沈線と口縁端部で囲繞する。10は縄文帯とは別に１本沈線による鉤状の文様が確認できる。11は末端が途切れて入り組んだJ字文を持つもので、沈線区画内にはLR縄文を施す。

12・13は横走沈線や嘴状のモチーフを持つもので、沈線の上下に縄文を施すものである。14は内湾口縁部の小片で、詳細は不明だが縦走する太い沈線とLRの縄文が認められる。沈線の末端は途切れて一筆書きに閉じないもので、内面は巻貝条痕の後にナデを施す。

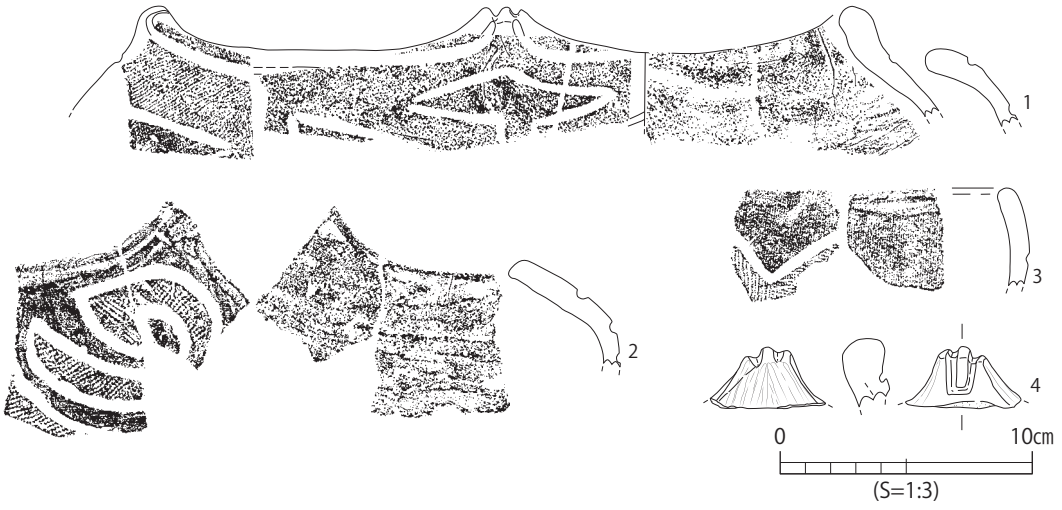
15は横位に展開する縄文帯内部にN字状に沈線が施される。無文部は菱形になる可能性もある。下段には横走する沈線と波状沈線による区画内にRL縄文を施しており、17は同様の意匠が二段に配されるものである。16は沈線で小さなJ字文を描出し、沈線の上下RLの縄文を施すが、沈線が閉じていないため無文帯と縄文帯の境界が曖昧で磨消縄文になりきっていないものである。

18は壷とみられる口縁部小片で、端部は欠損する。２条の垂下隆帯には縄文が施され、垂下したのち沈線区画を縁取るように縄文が横位展開するものである。

34-1は緩やかに内湾する口縁部に、幅５㎜の太い横走沈線と連続刺突文を施し、刺突文帯の上部にLR縄文を施文する。２は口縁端部に浅い刻みを持つもので、内外面ともナデを施すが、内面に一次調整の二枚貝条痕が観察される。３は波状口縁の波頂部資料で、鏨状に尖った端部に浅い刻みを施し、外面屈曲部には細密条線が認められる。一見、貝殻による細密条痕とみられるが、植物茎を転がして施文した可能性も残る[2]。

36-1はやや内湾気味の波状口縁で、太い沈線区画文にLR縄文施文し、内面には二枚貝条痕を残す。２は太い沈線でJ字文を描き、区画内にLR縄文を充填する。内面にはススが付着する。３は波状口縁の波頂部資料で、２本の太い沈線でJ字文を描出し、内部にはLR縄文を充填する。内外面ともに二枚貝条痕を施し、外面はナデ消される。４は２・３と文様帯が反転する資料とみられるが小片で詳細は不明である。５は横走する２本沈線の下に長方形の区画をつくるのもので、無文

2　丹波・但馬に類例。千葉　豊氏のご教示による



第37図　３区Ⅳ層出土縄文土器実測図４(1/3)

第 38 図　3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 5 (1/3)

帯には二枚貝条痕の痕跡が残る。

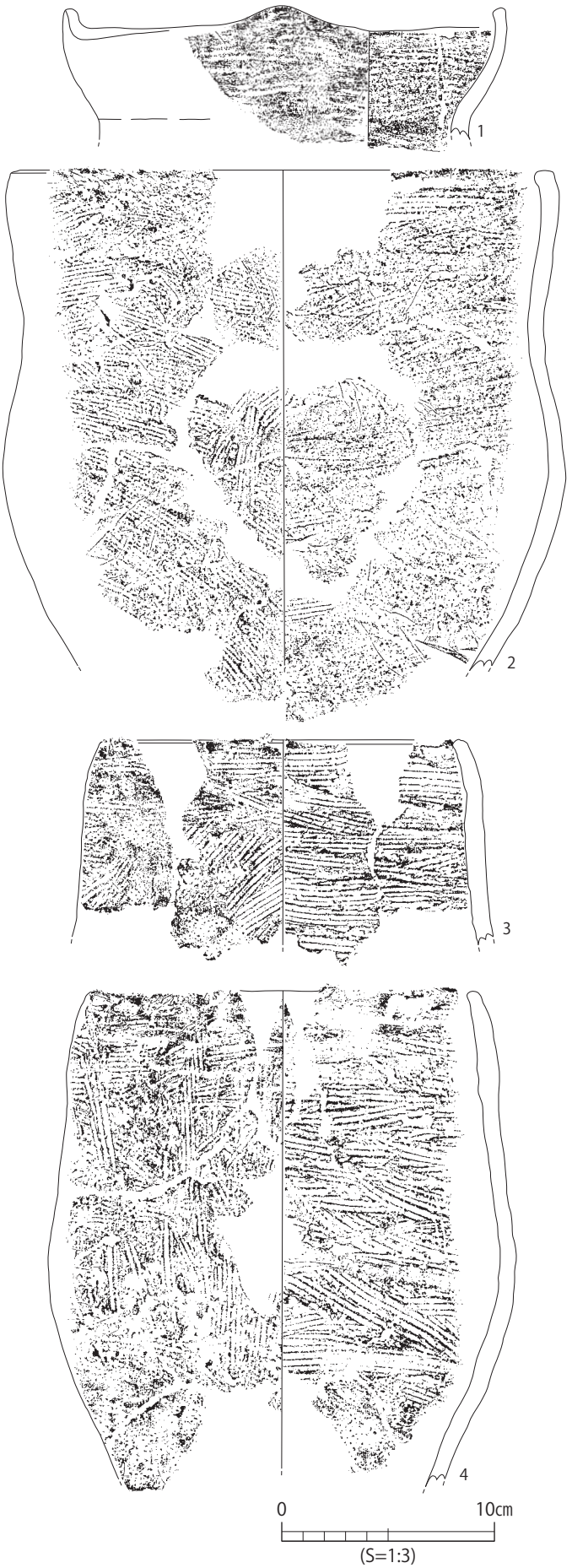
６・７は横位に展開する楕円状の曲線区画をもつもので、７は小さなＪ字文が見られる。８は菱形状の区画を持つもの、９～ 15 は横走沈線区画を持つものである。このうち、13 は縦位の沈線を辛うじて確認することができ、16 にも２本の垂下沈線が施される。17 は碇形の区画文、18 は鉤状のＪ字文もしくは 35-15 と同様の意匠と考えられる。

22 は内湾する波状口縁の深鉢で、出土した有文土器の中で器形と文様展開が最もよく確認できる資料である。口頸部は比較的に短く、文様も横位展開する。沈線による渦巻文は一筆書きとならず、そのため縄文帯と無文帯が区別されず磨消縄文になっていないものである。

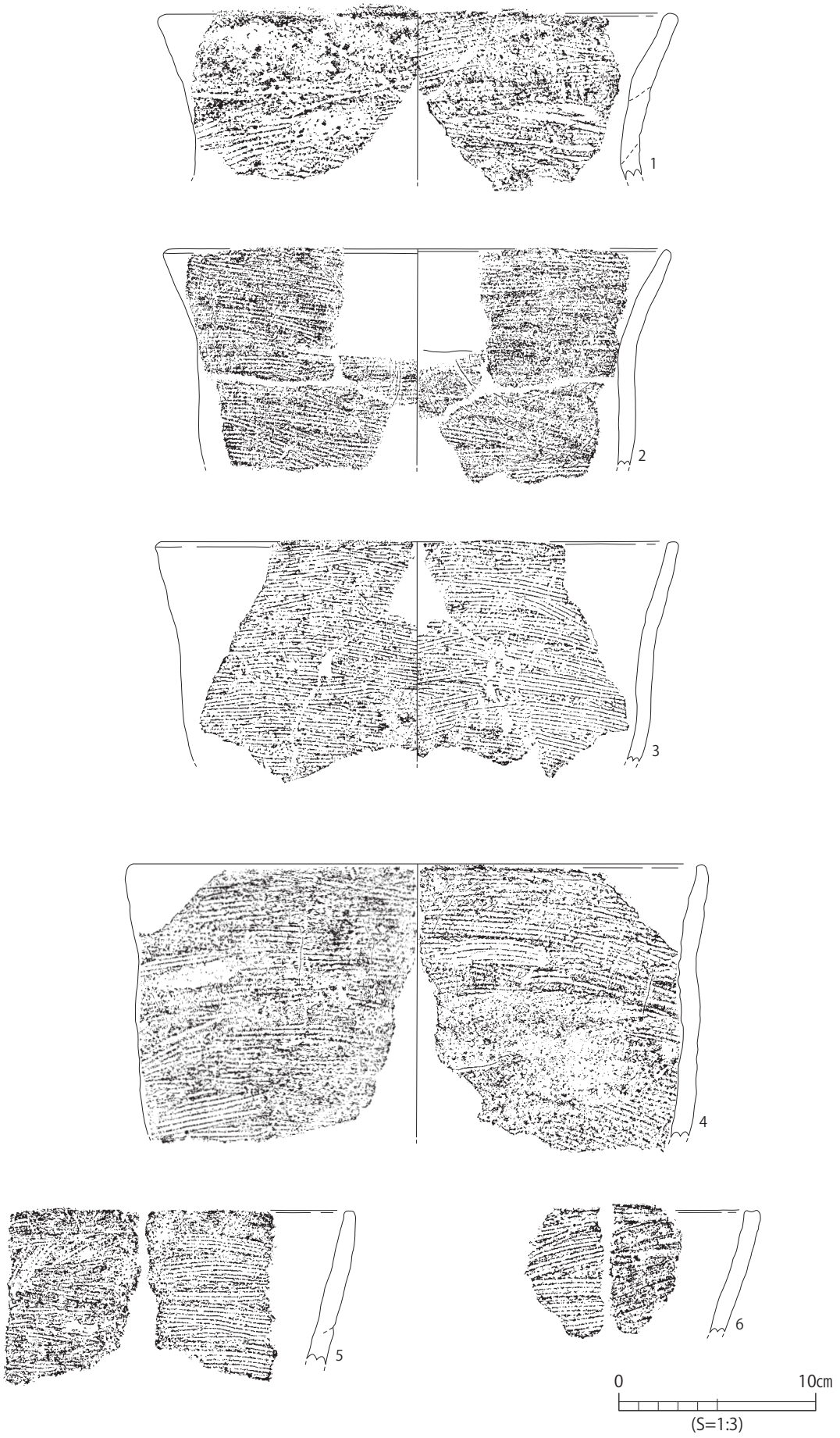
37- １～４は九日田式の新相と考えられる精製の土器群で、細密な縄文を施文する点が特徴的である。１は波頂部の突起から口縁に沿って沈線を廻らすもので、無文に反転した菱形区画から垂下する意匠が見られる。２は波頂部に独立した区画文を持つものである。

38 ～ 40 図は無文の土器である。前掲のとおり有文土器は中期末～後期初頭のものでまとまることから、これらの無文土器もこれらに共伴するものと考えられる。

土器形態は、波状口縁の 38-1・2、39-1 などがあるものの、平口縁のものが多い。さらに口縁部では口縁が短く端部付近が内湾する 38-2 ～ 4・39-1、口縁が長く大きく内湾する 38-1・7、口縁が長く浅く内湾する 38-9・39-2、外反する 40-1 ～ 4、頸部のくびれがほとんどなく、内傾する 39-3・4 などがある。内湾口縁のなかには 38-4 のようにキャ



第 39 図　３区Ⅳ層出土縄文土器実測図６(1/3)

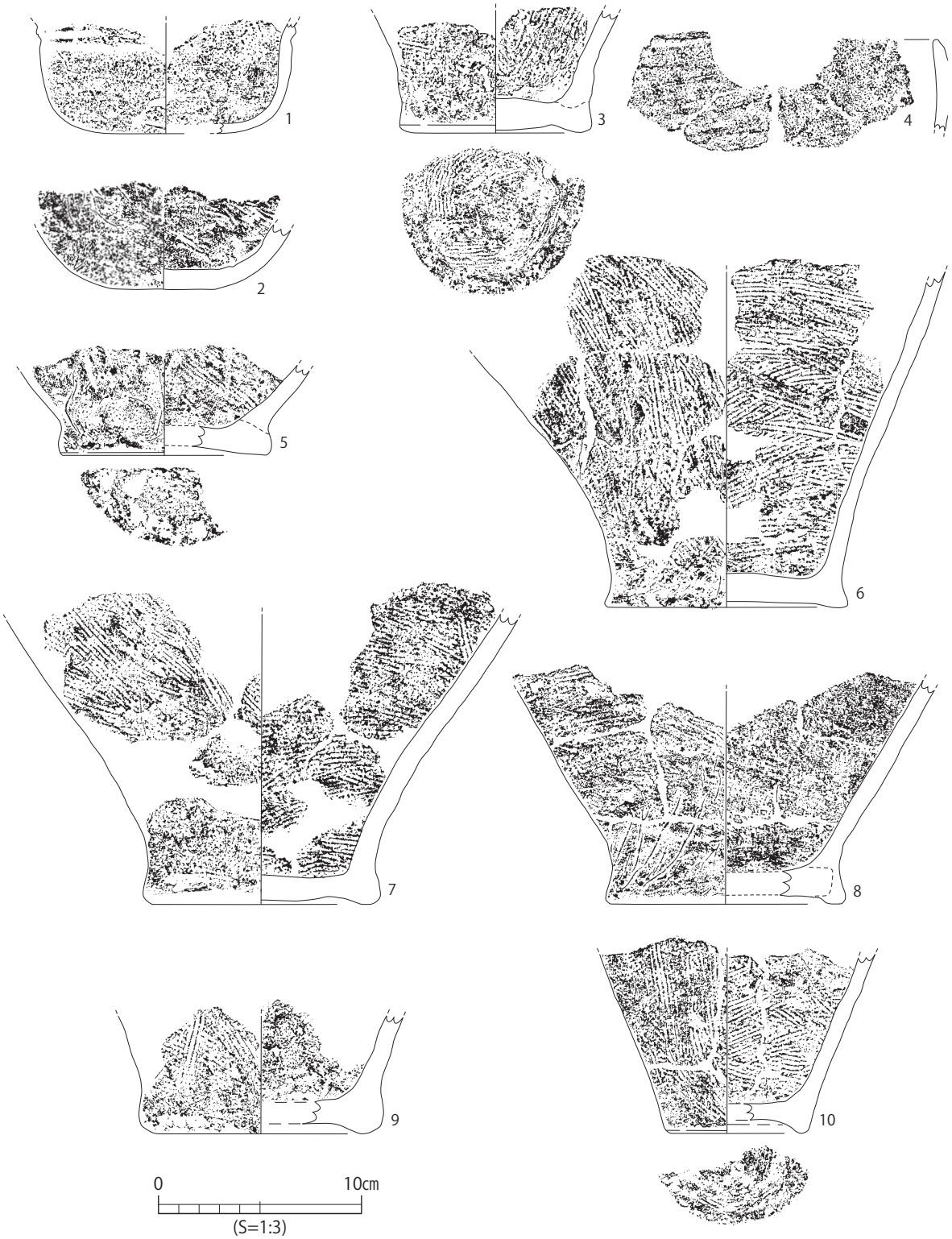


第 40 図　3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図 7 (1/3)

リパー形の口縁も含まれることから中期的特徴を無文土器にも見出すことができる。

器面調整については、内外面いずれかに二枚貝条痕を用いるものが多く、二次調整や部分的にナデを加えているものも含めるとこの類が大半を占めるといっていい状況である。このほかには、内外面ミガキの 38-1、内外面とも二枚貝条痕を施す 38-2 ～ 9、内外面ナデの 38-11、内外面巻貝条痕の 39-1 や二枚貝と巻貝を併用する 39-2 などがある。

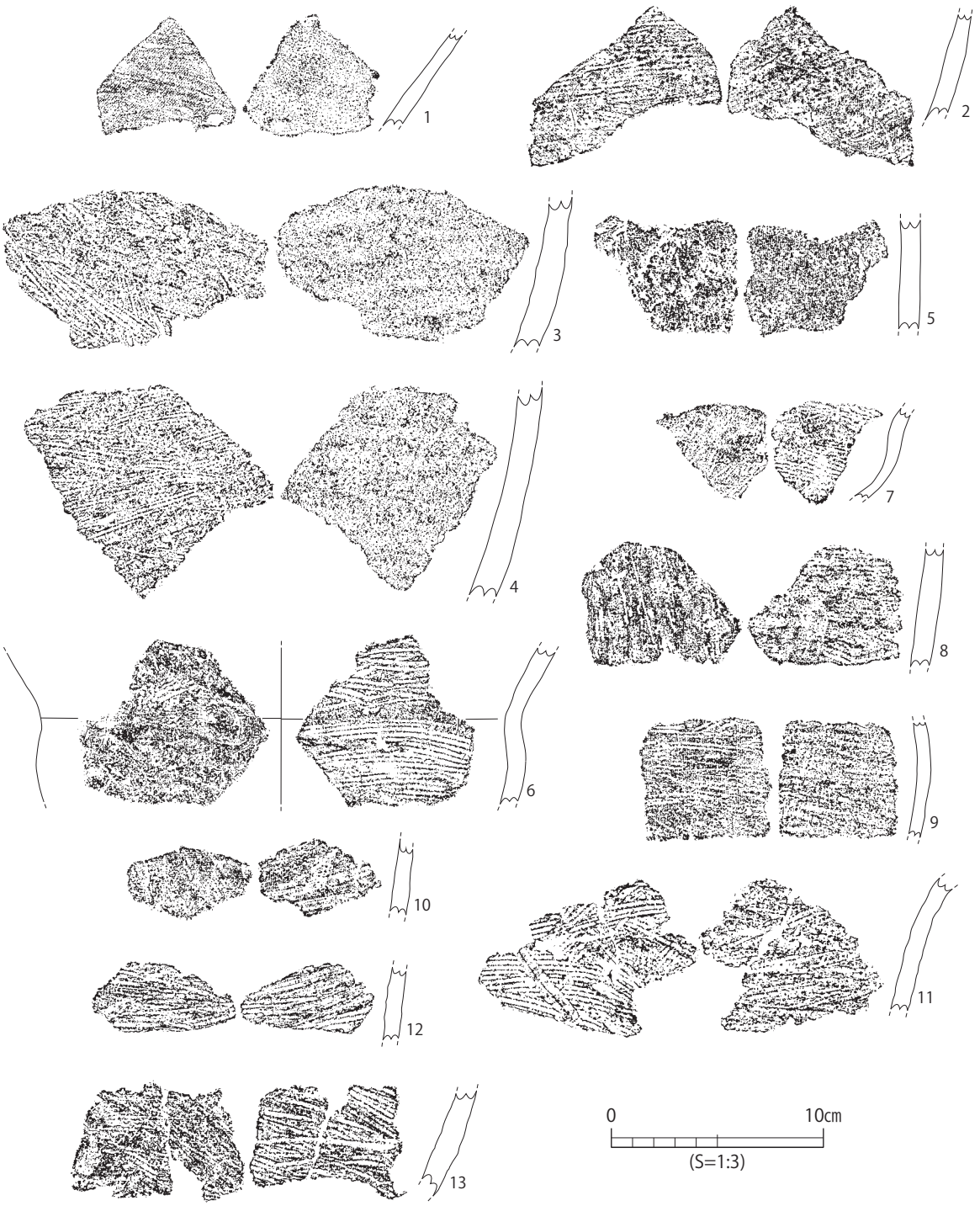
41 図は底部で、1・2 は丸みがあるが面で支えて自立する平底の鉢か浅鉢と考えられる。このう



第 41 図　3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図８(1/3)

ち１は頸部に２本の太い沈線を持つ。３～９は平底だが、底部接地面は外縁部のみで、外縁が張り出し、胴部にかけて一端くびれてから立ち上がるものである。10 は底部接地面が外縁部のみで、くびれることなく立ち上る凹底である。調整は、口縁資料と同様に条痕を多用する物が多いが、内外面ともナデを施す１、外面にナデを施す２・５、内面ケズリののち一部ナデを施す８、内面にナデを施す９など、内外面の調整の組み合わせでヴァリエーションが認められる。但し、一次調整に条痕が用いられても１のように丁寧なナデが加えられるとその痕跡が残らないものも存在すると推測される。

42 図は胴部から頸部にかけての破片である。このうち１～５は内面にナデを施すもので、外面

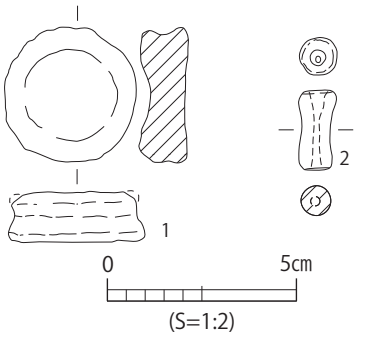


第 42 図　3 区Ⅳ層出土縄文土器実測図９(1/3)

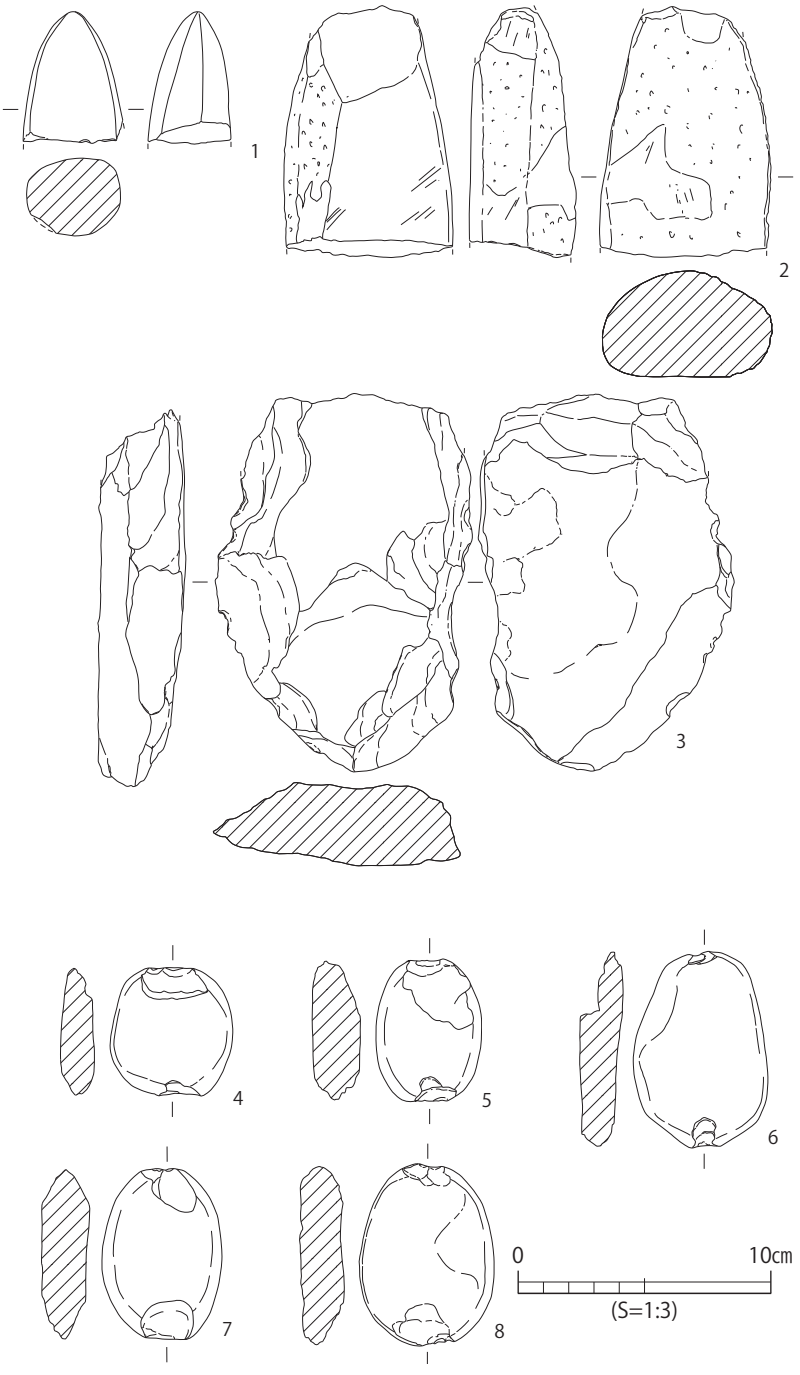
にミガキを施す１、二枚貝条痕の２～４、ケズリを施す５などがある。６～８は内面に二枚貝条痕を施すもので、外面ナデの６、二枚貝条痕にナデを加える７、ケズリを施す８がある。９は内面ケズリ、外面二枚貝条痕を施す。このほか、内面に巻貝条痕を有す 10 ～ 13 があり、外面の調整はナデを施す 10、二枚貝条痕の 11、巻貝条痕の 12・13 などがある。

土製品（第 43 図）　１は径 3.6 ㎝、厚さ 1.3㎝を測る耳栓である。側縁はタイヤホイールのように浅い窪みを有す。２は長さ 2㎝、幅 1㎝を測る装身具とみられる管状土製品で、中央部にわずかに窪みを持つことから耳飾と考えられる。

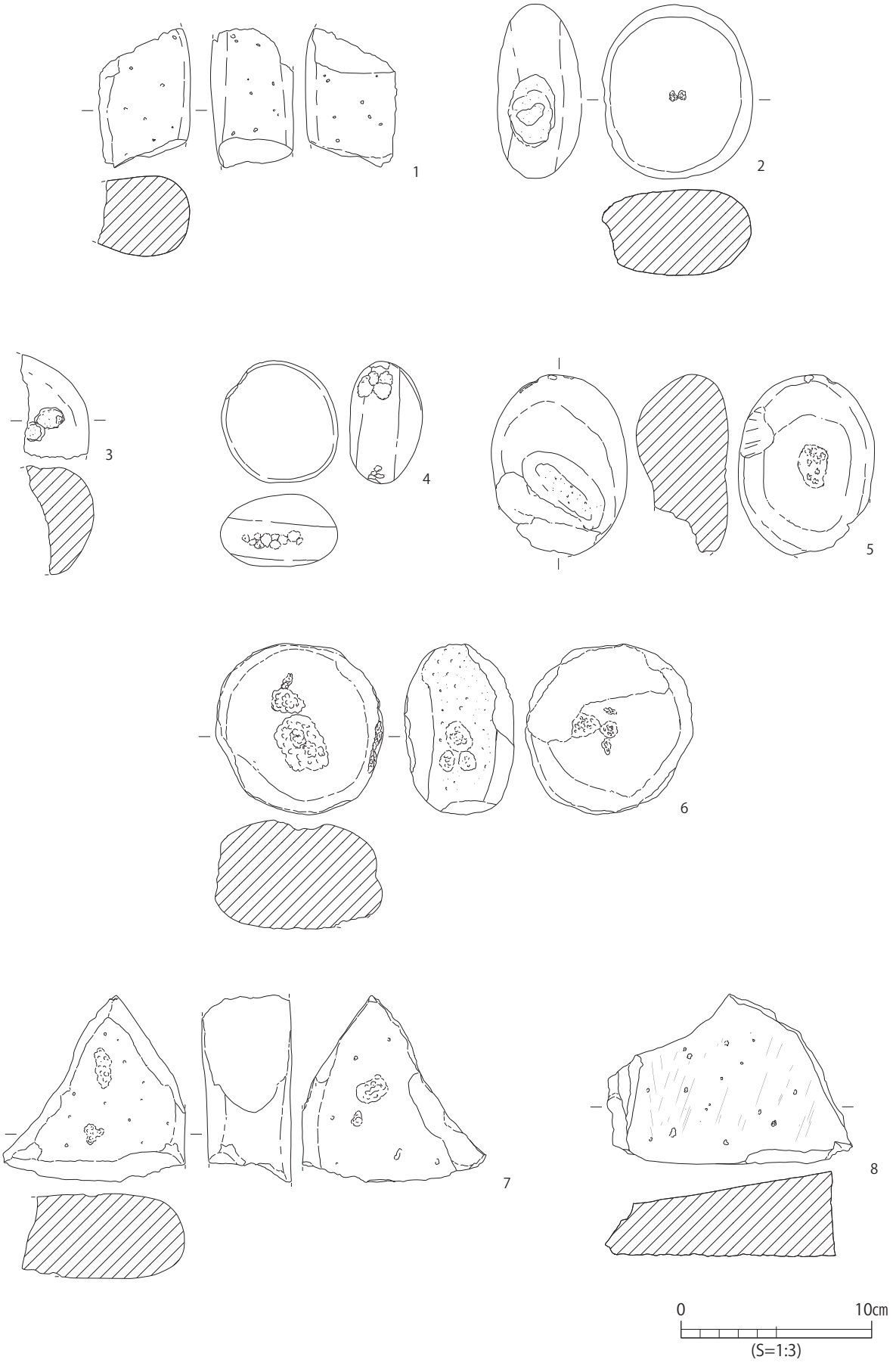
石器 (第 44 ～ 47 図)　１は乳棒状磨製石斧の基部である。２は刃部と基端部を欠損する石斧で、礫面を多く残すが磨製石斧と考えられる。３は風化が著しく、片側の側縁部が破損しているが先端がやや尖り気味となるもので打製の土掘具と考えられる。４～８は石錘で、扁平な河原石の両端を打ち欠いたものである。１個あたりの重量はまちまちだが、平均すると 70g ほどである。45-1・２は磨石である。１は側縁の一部を残して破損しているが、残存部はすべて使用された形跡が認められる。２は使用面に２か所の凹みと、側面にも敲打痕が見られること



第 43 図　３区Ⅳ層出土土製品実測図 (1/2)



第 44 図　３区Ⅳ層出土石器実測図１(1/3)



第 45 図　3 区Ⅳ層出土石器実測図 2 (1/3)

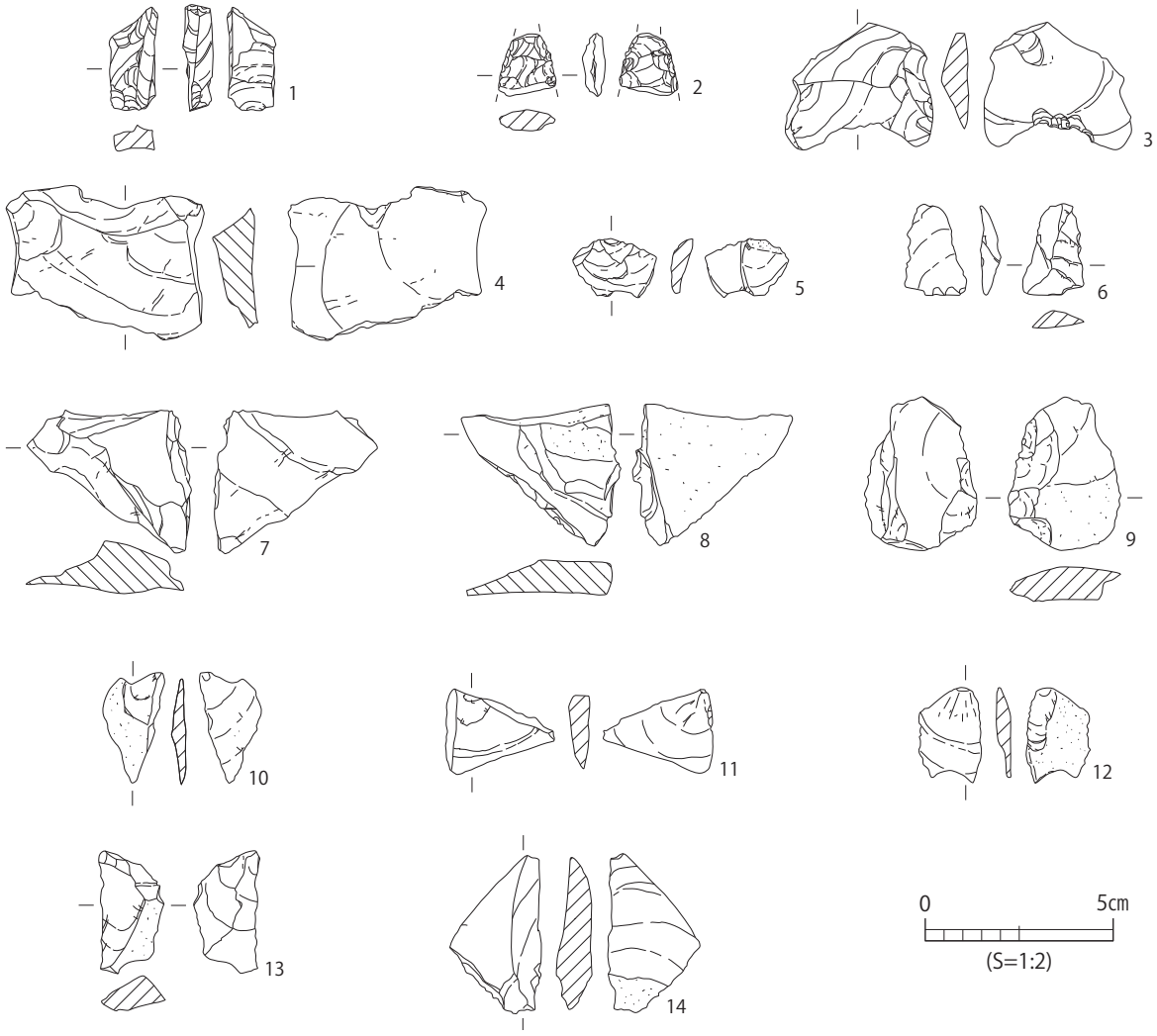
から、台石や敲石兼用で使用されたと考えられる。

３・４は敲石で側縁部に使用痕が残る。５・６は両平坦面に窪みがのこる一方、平滑面にもなっており、磨石としても使用されたと考えられる。

７・８は破損著しいが扁平な石皿で、７は両平坦面ともに使用により平滑となる。８は片面だけが使用面で、擦痕が認められる。以上の礫石器は河原石を使用し、手近な石材を使用している。

第 46 図は剥片石器である。１はやや薄手で直方体状の黒曜石で、上下端部に打撃による階段状剥離が認められることから楔形石器の可能性がある。２は黒曜石製の石鏃で、先端と基部は欠損している。両側縁からの押圧剥離が見られるものの、大きさに比べて全体的に厚く、加工途上で破損した未成品と考えられる。

３～ 14 は剥片で、３には二次加工の剥離が見られる。４は安山岩の剥片で、剥離をとった痕跡があることから石核の残欠の可能性もある。５は黒曜石、６は玉髄、その他は安山岩系の石材と考えられる。47- １～３は石核もしくは素材であろうか。



第 46 図　３区Ⅳ層出土石器実測図３(1/2)

２．中世

標高 6.5m の粘土層上面 (第 1 遺構面) でピット多数と土坑 1 基を検出した（第 13 図)。

検出したピットはいずれも小規模で、間隔も規格性が無いことから現地調査の段階では建物柱穴の配列状況を認識することができなかったが、後述する 4 区第 1 遺構面と併せて検討した結果、概ね北北西 - 南南東に主軸をおくか、それに直交する 6 棟の掘立柱建物を復元することができた。建物柱穴及び周辺のピットからは時期を特定しうる遺物は出土していないが、これらは相前後して存続した可能性が高い。確証はないが、遺構面を被覆するⅠ層から出土した銭貨や、柱穴形態、配列が不揃いな点などから、中世のある時期の建物群と推定される。

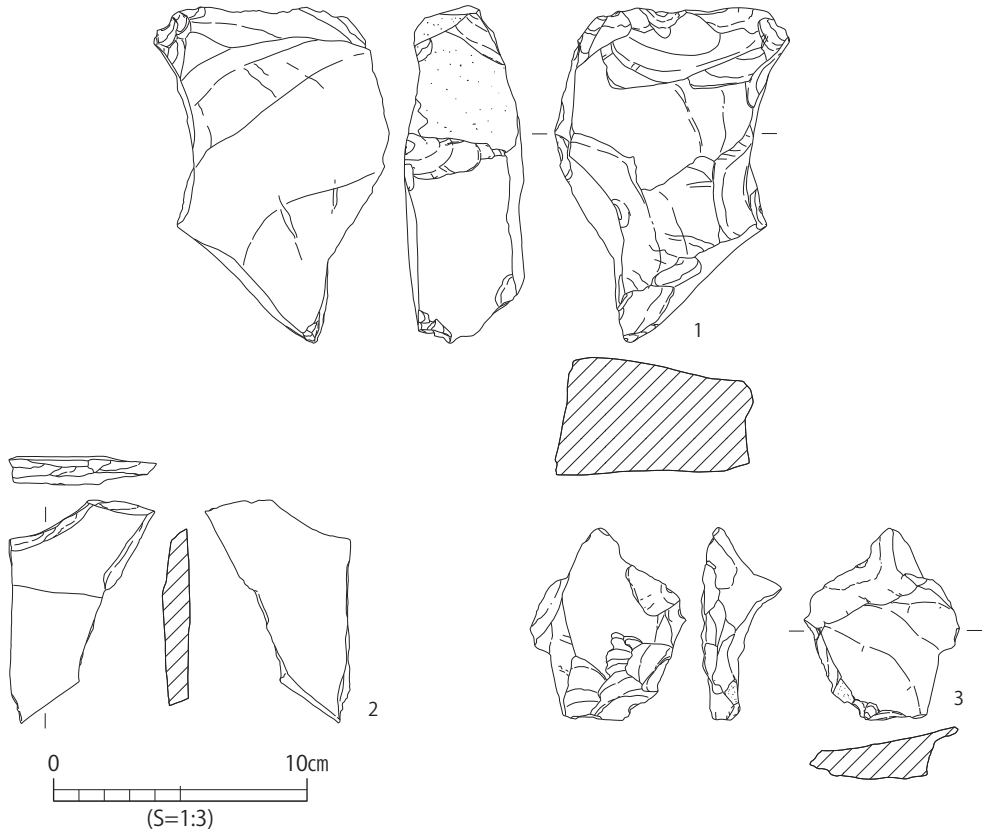
(1)SB01(第 48 図)

形態と規模　２間 × １間の掘立柱建物跡である。規模は桁行 2.1m、梁行 1.3m で、床面積は 2.73㎡と一坪にも満たない小さな建物である。桁間は、P81-P84 で 1.3m、P75-PP77 で 1.15m、P77-P78 で 0.95m と、一定ではない。北西隅の柱穴を確認することはできなかった。柱穴は径 10 ～ 30㎝、深さは浅いもので 20㎝、深いもので 50㎝とまちまちである。

遺構の性格　居住するにはきわめて小さいことから、住居以外に、物置小屋のような建物の可能性もある。

(2)SB02(第 49 図)

形態と規模　1 間× 1 間の掘立柱建物跡で、SB01 とは主軸を直交する。規模は桁行 2.7m、梁行２m の小さな建物である。床面積は 5.4㎡ほどで、上述の SB01 の倍を測るが、決して居住するのに



第 47 図　3 区Ⅳ層出土石器実測図 4 (1/3)

満足な空間ではない。柱穴は総じて径 20㎝内外、深さは 30 ～ 40㎝である。

遺構の性格　建物の規模に対して柱間が広く、簡粗な造りといえる。小人数が起居する程度の住居建物と考えられる。

(3)SB03(第 50 図)

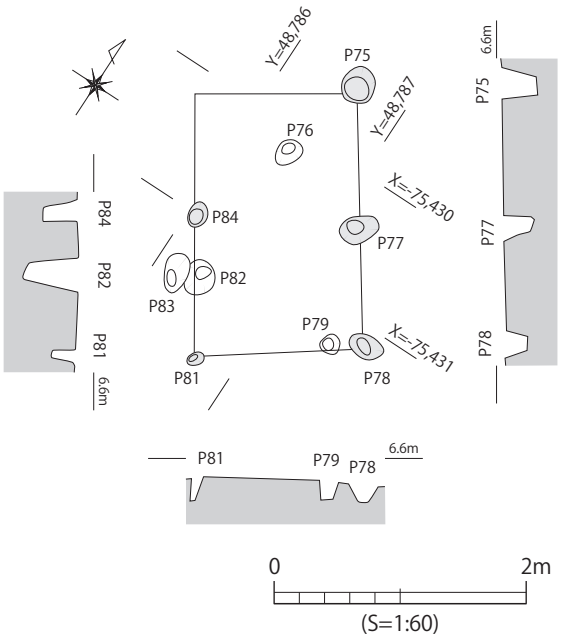
形態と規模　現状は 2 間× 1 間の掘立柱建物で、規模は桁行 2.7m、梁行 1.85m である。南西側の桁行はもう 1 間延びる可能性があり、その場合は変則的な柱間となるが、該当する柱穴を確認することはできなかった。床面積は 5 ㎡ほどで、SB02 とほぼ同規模の建物である。北東の桁間は、1.4m、南西の桁間は 1 m である。柱穴は径 10 ～ 20㎝、深さは 20 ～ 40㎝ほどである。

遺構の性格　建物規模は SB02 と同様であることから、少人数が起居できる程度の住居と推測される。

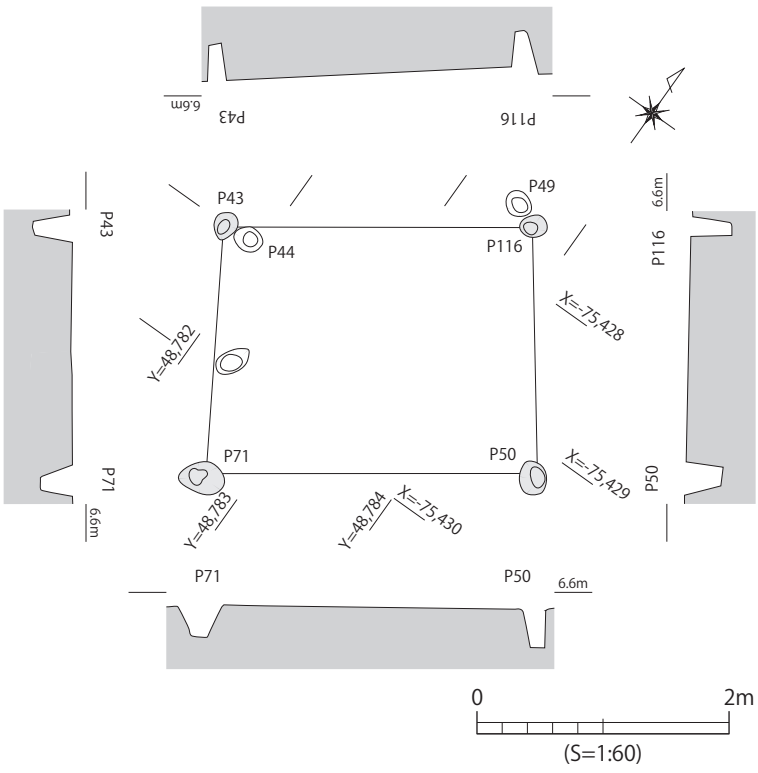
(4)SB04(第 51 図)

形態と規模　SB02 と軒が接するほどに近接する、2 間× 1 間の掘立柱建物跡である。規模は桁行 3.3m、梁行 1.35m で、東側の桁間は 1 間分の柱穴しか認められない。また、西側の桁間は、P34-P39 で 2.1m、P39-P125 で 1.35m と不等間隔とる変則的な柱配置となっている。P40・P41 は建物に関係する可能性が皆無ではないが、梁間が狭く、建物を構成する柱穴として評価する積極的な根拠は見出せない。床面積は 4.3 ㎡ほどで、SB01 を引き延ばしたような建物である。柱穴は径 20㎝、深さは 30㎝内外を測る。

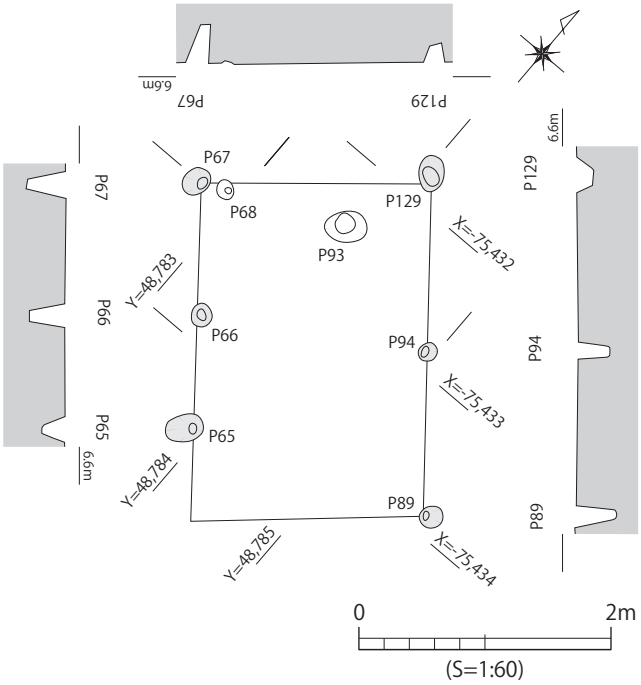
遺構の性格　建物はやや狭長で、通常の住居よりもむしろ長屋的な建物や小屋などの可能性が考えられる。



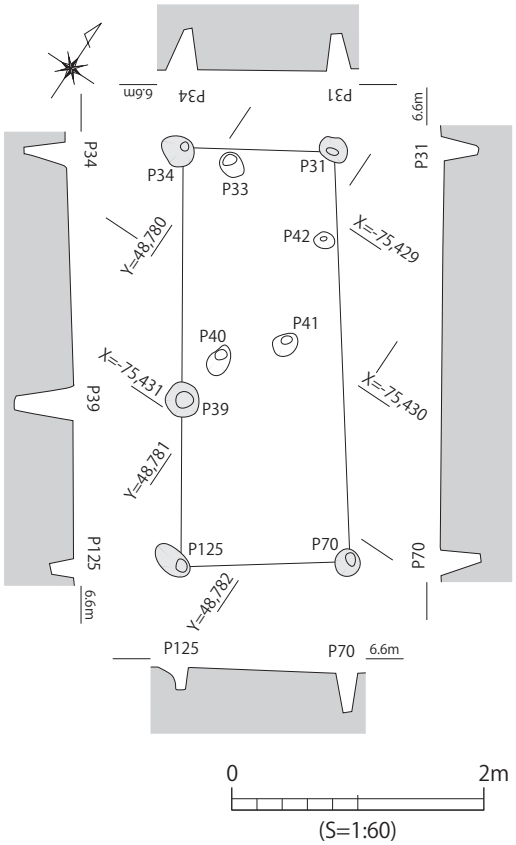
第 48 図　3 区 SB01 実測図 (1/60)



第 49 図　3 区 SB02 実測図 (1/60)



第 50 図　３区 SB03 実測図 (1/60)



第 51 図　３区 SB04 実測図 (1/60)

(5)SB05(第 52 図)

形態と規模　SB04・06 と並列する、３間×１間の掘立柱建物跡である。規模は、桁行 2.8m、梁行 1.1m で、東側の桁間は１間分しか認められない。P4 が丁度 P19 に対応する位置にあることから建物を構成する可能性もあるが、床面積が３㎡と一坪足らずで、SB01 に次いで小規模であることから、殊更に柱を多くする必要性は考えられない。その点で P19 は建物とは無関係なピットの可能性も残る。西側の桁間は、P5-P20 で 1.4m、P20-P19 で 0.8m、P19-P22 で 0.6m である。柱穴は、直径 20㎝、深さは 20 ～ 40㎝を測る。

遺構の性格　小規模なことから、住居のほかに小屋などの可能性が考えられる。

(6)SB06(第 53 図)

形態と規模　SB05 の西側に並列する、４間×１間の掘立柱建物跡である。規模は、桁行 5.5m、梁行 1.3m で、東側の桁間は２間分しか認められない。桁間　は P110-P98 で 1.3m、P98-P51 で 1.7m、P51-P53 で 1.2m、P53-P105 で 1.3m を測る。一方、P21-P123 は 2.2m、P123-P95 は 2.4m である。建物中心にある P106 や P154 なども建物に関連する可能性はあるが、梁間が狭いことから構造的に必要性は感じられない。床面積は 7.15 ㎡で、３区の建物では最大規模である。

遺構の性格　SB04・05 と同様に狭長な建物で、長屋風の住居もしくは小屋と捉えておきたい。

(7)SK01(第 54 図)

形態と規模　調査区際で検出した浅い土坑で、長さ 1.4m、深さ 20㎝を測る。底面は平坦面をつくるがところどころに凹凸を認める。

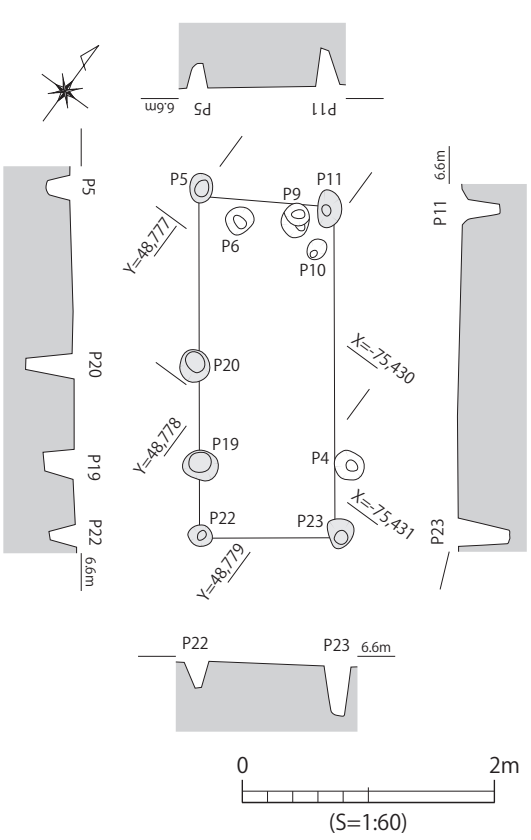
堆積状況　埋土は遺構面直上を被覆する I

層下半の土砂に類似する粘土である。

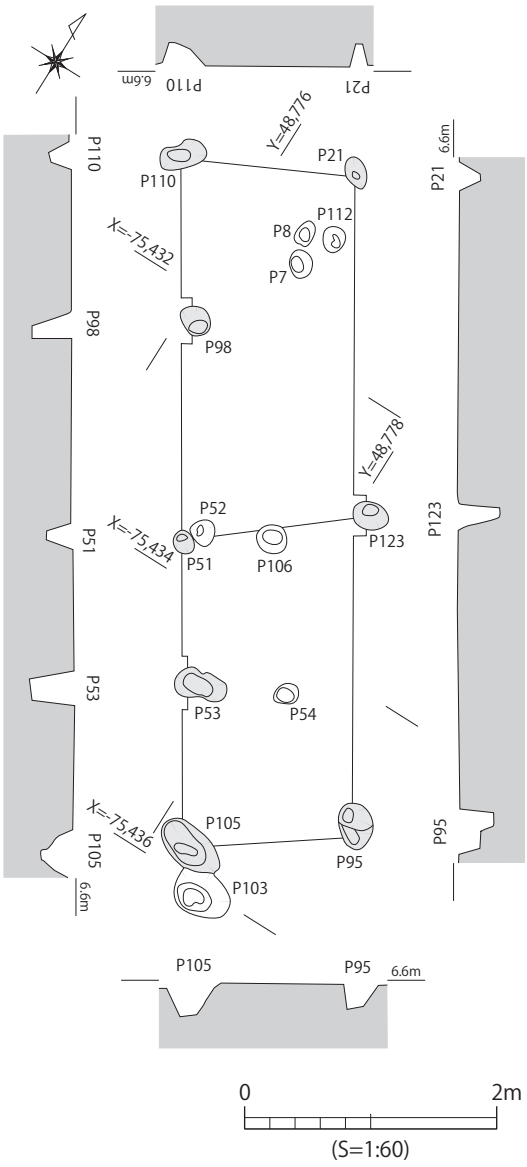
遺構の性格と時期　遺物が出土しておらず、詳しいことは不明だが、覆土の様子から建物と同時期と考えられる。

3．遺構外出土遺物 (第 55 図)

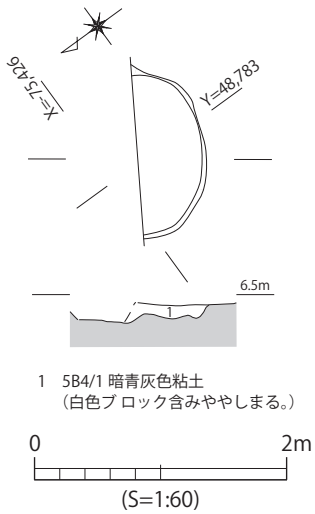
1 は I 層から出土した元祐通寶 (初鋳年 1086 年) で、1 区平坦部からも 1 枚出土している (24-6)。



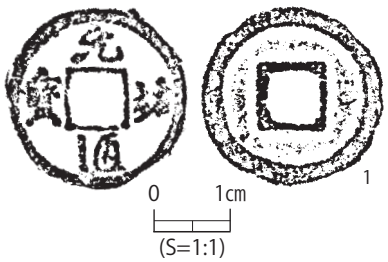
第 52 図　3 区 SB05 実測図 (1/60)



第 53 図　3 区 SB06 実測図 (1/60)



第 54 図　3 区 SK01 実測図 (1/60)



第 55 図　3 区 I 層出土銭貨拓影 (1/1)

第６節　４区の遺構と遺物

１.縄文時代

標高４ｍ余りのⅣ層上面 (第２遺構面) において土坑５、ピット２、落ち込み、流路跡を検出した (第 15 図)。土坑は調査区の南側にまとまりをもって分布する。ピットはこのほかに検出しておらず、詳細は不明である。また、落ち込みも調査区際で検出し、区外へと続くが、流路跡に切られて詳細は不明である。同様の流路跡は３区においても検出しており、一連の可能性があるが、切り合いから縄文以降、中世以前のものと考えられる。

(1)SK01 ～ 05(第 56 図)

形態と規模　SK01 は他の４つの土坑に取り囲まれるような位置で検出した。やや不整な楕円径を呈し、長径 130㎝、短径 80㎝ほどの大きさである。深さ 10㎝と坑の大きさの割には浅い。底部は平坦気味だが、中央付近に起伏があり、平面形もそれに対応する様子が見られることから異なる土坑が切り合っている可能性が高い。

SK02 は直径 40㎝余りのほぼ正円に近い平面形で、深さは 10㎝と浅い。底部はほぼフラットである。

SK03 は平面隅丸台形で、規模は長軸長 60㎝、最大幅 50㎝、最大深さが 20㎝である。底面はやや傾斜し、小さな平坦面を作る。

SK04 は平面不整円形で、規模は長径 55㎝、短径 45㎝、深さは 10㎝と浅い。底部は平坦である。

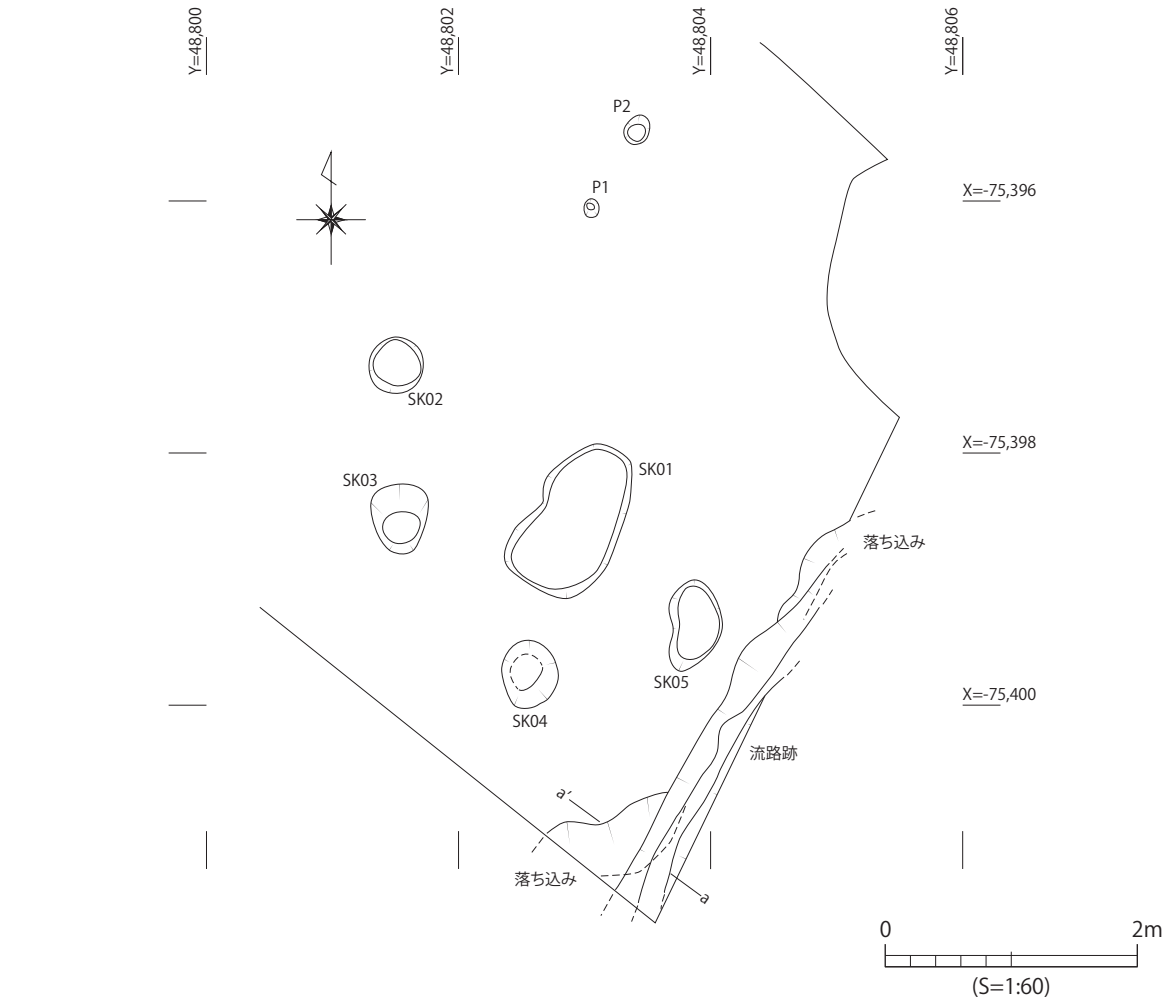
SK05 は不整な長楕円形で、規模は長軸長 75㎝、短軸長 40㎝、深さは 8㎝前後と浅い。底部は平坦である。

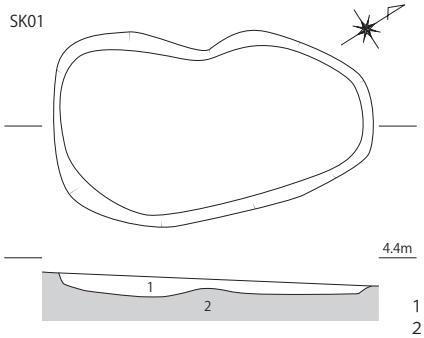
堆積状況　SK01 の埋土は縄文土器を含む単一層で、切り合いを確認することはできなかった。埋土中には３区 SK02 のような骨片は含まれていない。

SK02 ～ 05 の埋土は縄文土器を含む単一層で、SK01 埋土と同様である。このうち SK04 は埋土上部から土器片が多数出土した。土器は部分的に折り重なっているが、流れ込むような角度ではなく、面的に出土している。土器の上下での層の違いは峻別できなかった。

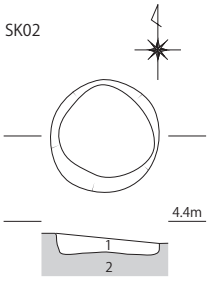
出土遺物（第 57 図）　埋土から縄文土器が出土している。１は SK01 から出土した底部に近い無文の土器片で、外面は二枚貝条痕のあとにナデを施す。内面はナデである。２は SK02 から出土した無文の胴部小片で、内外面ともに二枚貝条痕、外面はナデによる二次調整が見られる。３～５は SK04 から出土した無文の土器で、口縁部２個体と底部付近１個体を復元した。３・４とも口頸部が短く内湾するもので、内外面とも二枚貝条痕を施す。５は内外面ともに二枚貝条痕を施した後、二次調整としてナデを加える。６・７は SK05 から出土した有文・無文の土器である。６は波状口縁の外面に幅４～５㎜の太い沈線が横走し、沈線間には楕円状の区画文が認められる。内外面とも二枚貝条痕と二次調整のナデが見られるが、外面は条痕が消し切れていない。また、内面については口縁上部は丁寧にナデ消すが、下部には条痕がはっきりと残っており、部位によって二次調整の加減を行っていることが分かる資料である。７は内外面ともナデで、内面は特に丁寧である。６は太い横走沈線があるものの磨消縄文がみられす、中期末新段階と考えられる。

遺構の性格と時期　冒頭に述べたが、土坑の分布状況にはまとまりが見られた。SK01 は２基の土

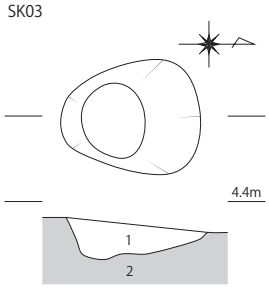




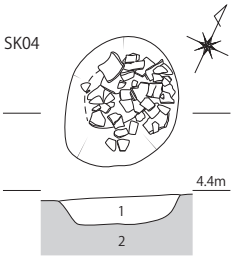
1　5G5/1 緑灰色シルト～粘質土（縄文土器含む。）
2　5G5/1 青灰色細砂～シルト



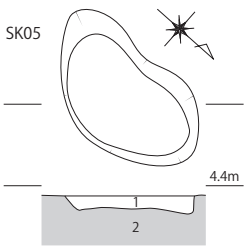
1　5G5/1 緑灰色シルト～粘質土（縄文土器含む。）
2　5G5/1 青灰色細砂～シルト



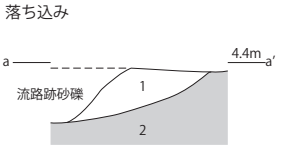
1　5G5/1 緑灰色シルト～粘質土（縄文土器含む。）
2　5G5/1 青灰色細砂～シルト



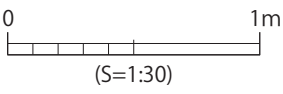
1　5G5/1 緑灰色シルト～粘質土（縄文土器多く含む。）
2　5G5/1 青灰色細砂～シルト



1　5G5/1 緑灰色シルト～粘質土（縄文土器含む。）
2　5G5/1 青灰色細砂～シルト

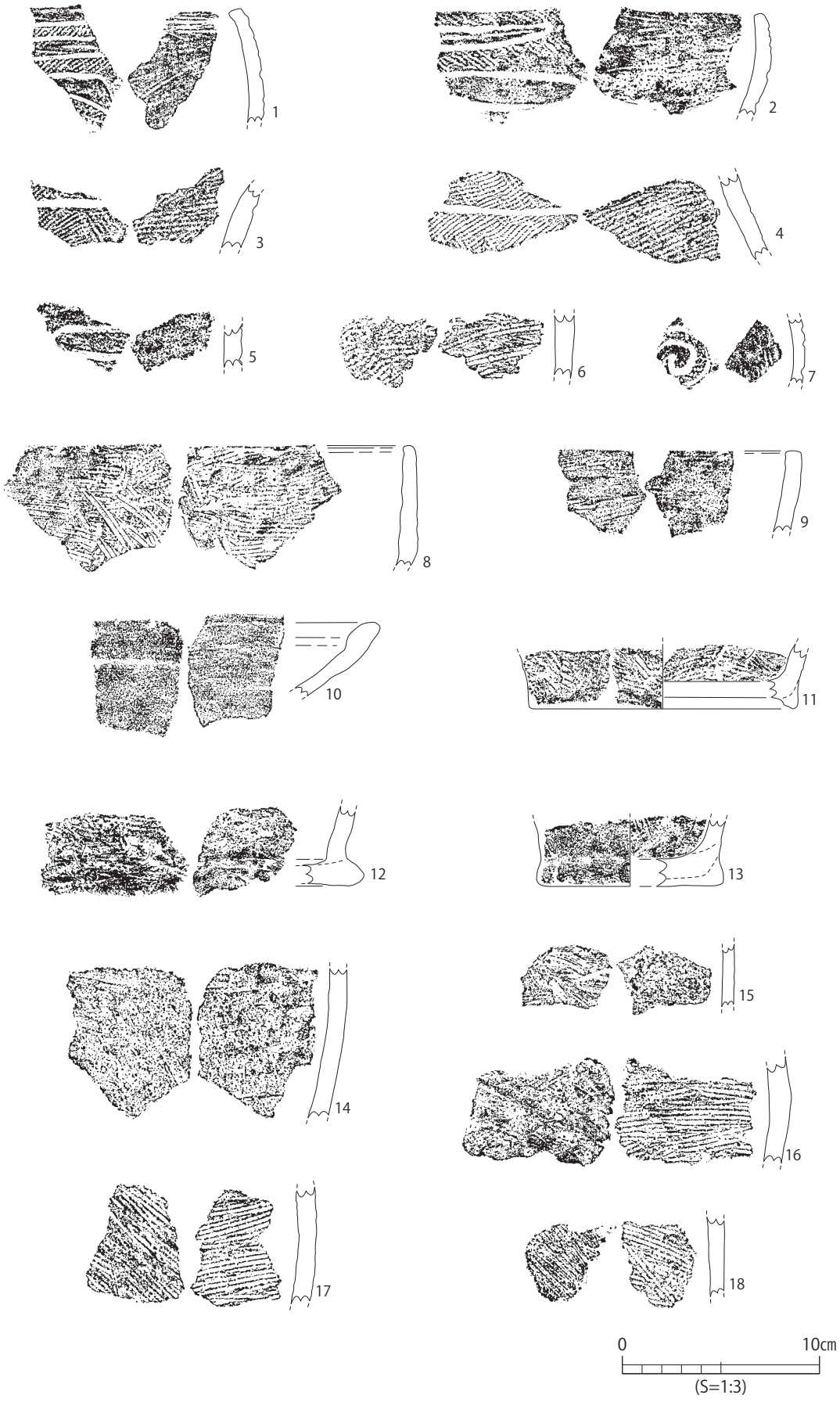


1　5G5/1 緑灰色シルト～粘質土（縄文土器多く含む。）
2　5G5/1 青灰色細砂～シルト



第 56 図　４区第２遺構面遺構実測図 (1/30・1/60)

第 57 図　４区遺構出土縄文土器実測図 (1/3)



第 58 図　４区Ⅲ層出土縄文土器実測図 (1/3)

坑が切り合っている可能性が高いことを考慮に入れると、検出した土坑の規模に際だった違いはないといえる。掘り込みが浅いのも共通で、掘り込み面が直上に堆積するⅢ層中にあった可能性も考慮する必要がある。土坑内から人為的な痕跡を認めることができるのは SK04 だけだが、上記のようにこれらがまったく異なる性格の遺構とは考えにくい。規模の点から成人の墓とは考えられないが、幼児や小動物を埋葬することは可能である。

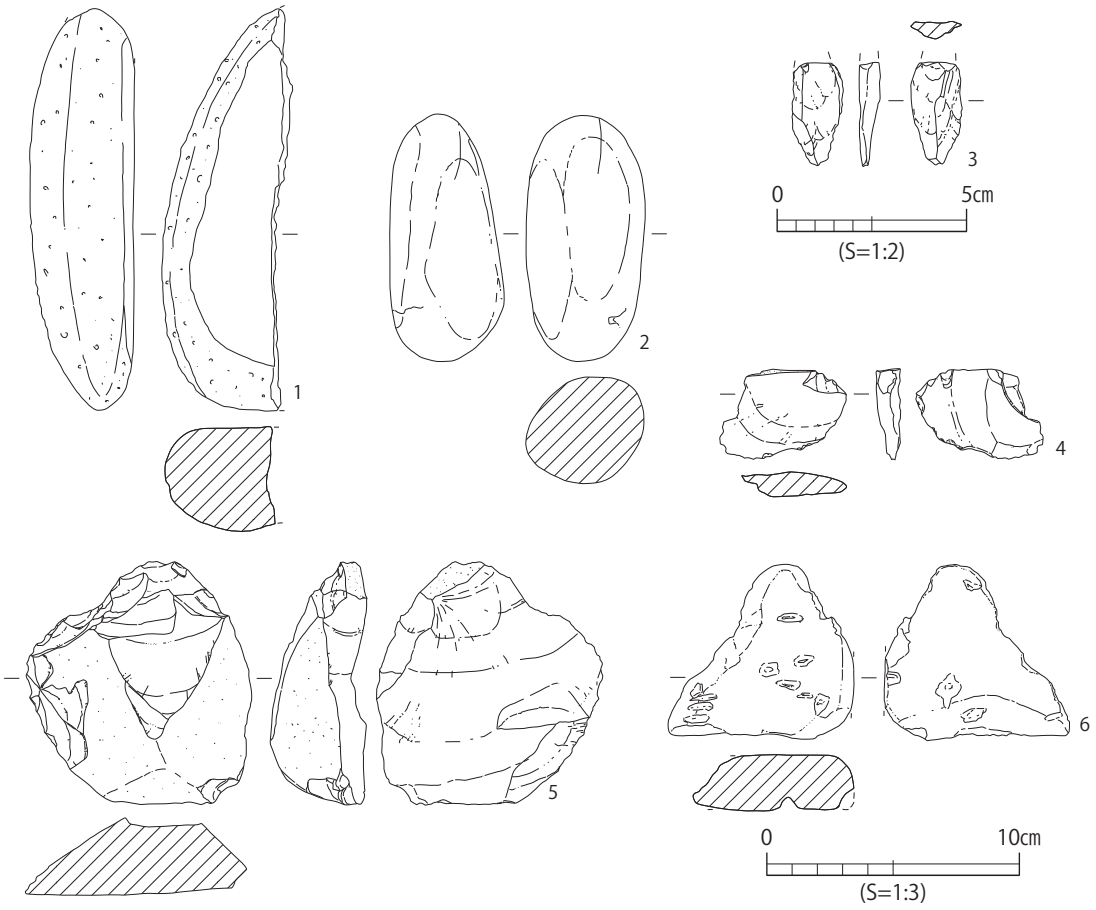
SK05 や直上包含層からは中期末頃の土器が出土し、他の無文土器は３区出土土器の様相と近似することから、これらはおおむね縄文中期末新段階～後期初頭の所産であろう。

(2) 落ち込み (第 56 図)

形態と規模　南東側に落ち込んでいくが湧水が著しく、また、３区から続くとみられる流路によって切られており、詳細を明らかにすることはできなかった。検出状況での長さは 3.5m を測る。

堆積状況　埋土は流路の砂礫層に切られて大半が失われていた。肩部の堆積を見る限りでは、遺構面を被覆する包含層や前述の土坑埋土と同様であった。

出土遺物 (第 57 図)　落ち込み埋土からも土器が少量出土した。８は頸部に太い横走沈線と楕円文を描出するもので、内外面とも二枚貝条痕ののちにナデを施している。９は内湾する口縁部で、波状になると考えられる。外面は口縁端部と沈線によって区画され、内部には LR 縄文を充填し、無文帯はナデを施す。内面には細密条痕が認められる。10 は外面に RL の縄文を施し、内面には細密条痕が見られる。内外面とも縄文・条痕の前段にナデを施す。11 は無文土器の口縁部で、口頸部は短く外反し、内外面には巻貝と考えられる条痕が残る。



第 59 図　４区Ⅲ層出土石器実測図 (1/2・1/3)

12 ～ 14 の無文土器は、流路跡から取り上げをしているが、前記のとおり掘削時には湧水のため手さぐりで取り上げており、状況的に考えて本来は落ち込みに伴う土器と考えられることから併せて掲載した。いずれも内外面二枚貝条痕又はナデを用いており、土器の様相からも矛盾はない。

遺構の性格と時期　情報が限られるため詳細は不明だが、旧河道か古い流路跡と推定される。

(3) 包含層出土遺物 (第 58・59 図)

縄文土器　58- 1 ～ 18 はⅢ層から出土した縄文土器である。１～７は有文土器で、太い横走沈線と区画文を有し、磨消縄文を施す１・２・７、縄文地に太い沈線をいれる３・４、太い沈線による楕円状の区画文を有するが縄文施文がない５などがある。６は小片のため詳細は分からないが、縄文帯が広いことから４・６と同様のものであろう。縄文は１・３・４が LR、２・６・７は RL で、内面調整は５以外は条痕か条痕後にミガキ・ナデを施す。５はナデと見られるが小片のため詳細不明である。

８～ 10 は無文土器の口縁部で、８は内面二枚貝条痕、外面には巻貝条痕を施す。９は巻貝とみられるが判然としない。10 は口縁内面がやや肥厚する浅鉢で、内外面とも丁寧なナデを施す。11 ～ 13 は底部で、12 は再外周が突出する。14 ～ 18 は胴部片で、14 以外は内面が二枚貝条痕である。外面は二枚貝条痕、ナデがあり、15 は細密条痕を施す。

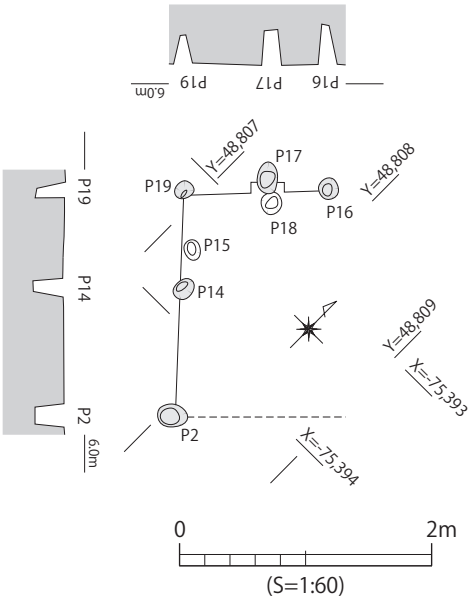
有文土器の特徴から、中期末～後期初頭に位置付けられる。

石器 (第 59 図)　１は石皿で、使用によって磨り減った平滑面が１面確認できる。２は摩石である。３・４は安山岩の剥片で、３は石鏃の未成品の可能性がある。５は剥離痕のある石核様の流紋岩である。６は軽石で、特に加工痕はないが２面が平滑になっており摩石として使用された可能性がある。

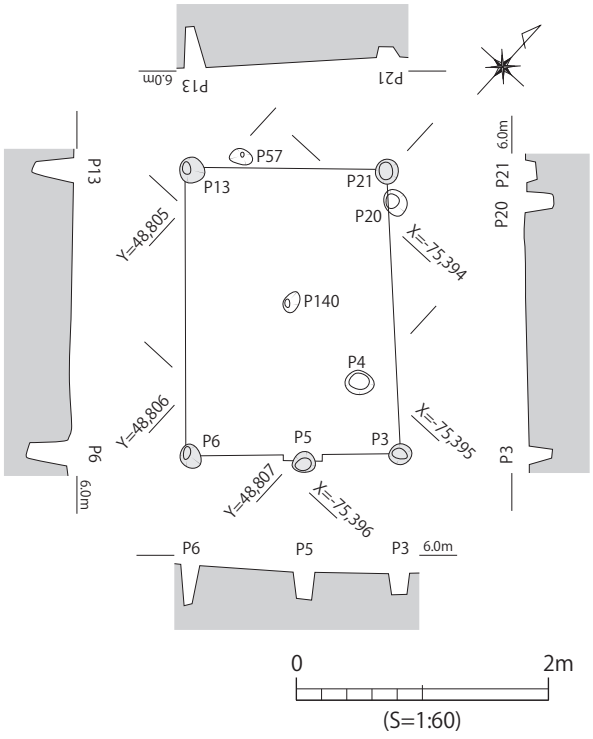
２. 中世

標高 6m の粘土層上面 (第 1 遺構面) でピット多数を検出した（第 15 図)。

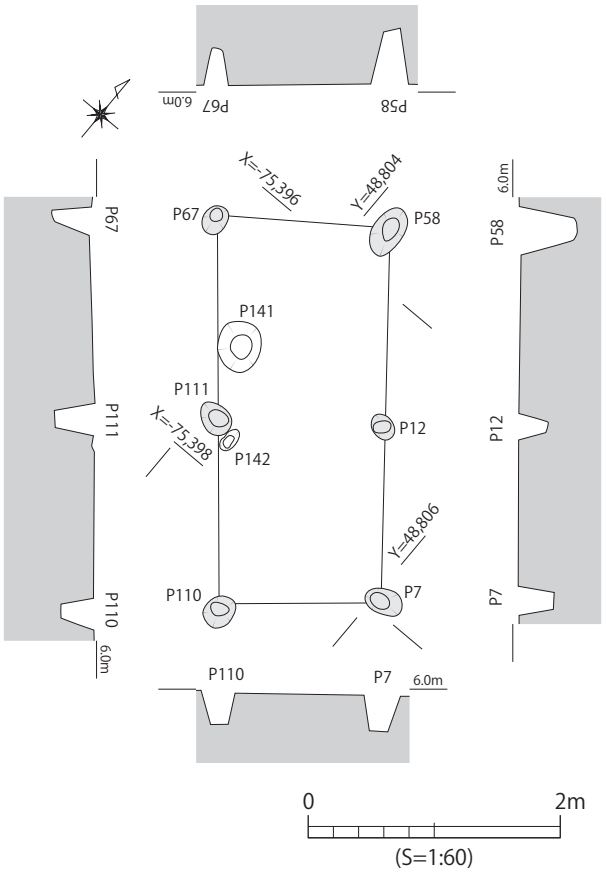
検出したピットはいずれも小規模で、間隔も規格性が無いことから現地調査の段階では建物柱穴の配列状況を認識することができなかったが、前述の３区第１遺構面と併せて検討した結果、概ね北北西 - 南南東に主軸をおくか、それ



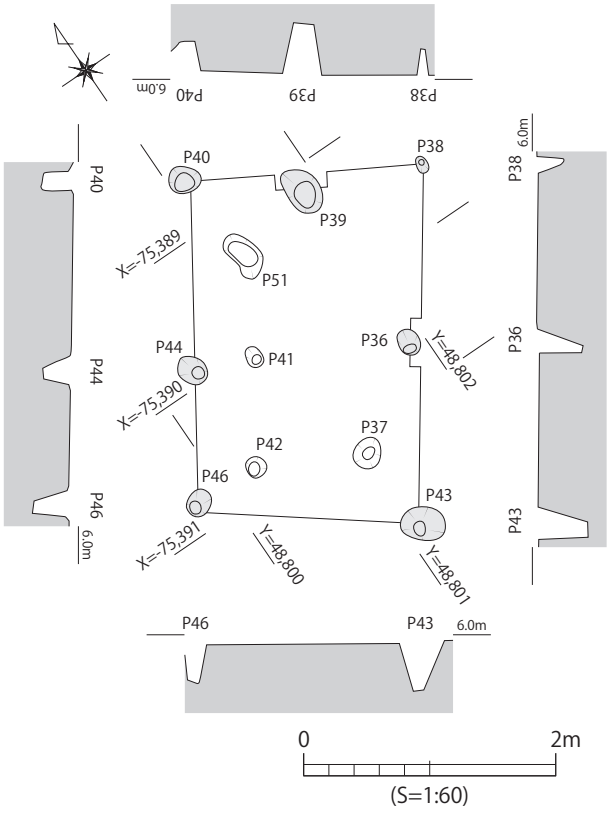
第 60 図　４区 SB01 実測図 (1/60)



第 61 図　４区 SB02 実測図 (1/60)



第 62 図　４区 SB03 実測図 (1/60)



第 63 図　４区 SB04 実測図 (1/60)

に直交する 10 棟の掘立柱建物を復元することができた。建物柱穴及び周辺のピットからは時期を特定しうる遺物は出土していないが、これらは相前後して存続した可能性が高い。確証はないが、遺構面を被覆すⅠ層から出土した青磁や、柱穴形態、配列が不揃いな点などから、中世のある時期の建物群と推定される。

(1)SB01(第 60 図)

形態と規模　建物は調査区外へと続くため全容は不明だが、２間× 1 間以上の掘立柱建物跡である。柱間はP16-P9 で 1.2m、P 2 -P14 で 1.1m、P14-P19 で 0.8m である。P17 は柱間が狭くなり過ぎるが建物を構成する可能性もある。柱穴は径 15㎝、深さは 25㎝ほどである。

遺構の性格　全容が不明だが、柱間や周辺の建物の様相から、小規模な住居や、小屋のような建物の可能性が考えられる。

(2)SB02(第 61 図)

形態と規模　1 間× 1 間の掘立柱建物で、規模は桁行 2.3m、梁行 1.6m である。南東側の P5 は建物を構成する可能性も考えられる。床面積は 3.68㎡と一坪余りの広さである。柱穴は径 20㎝内外、深さは 10 ～ 40㎝ほどである。

遺構の性格　小規模なことから、住居のほかに小屋などの可能性が考えられる。

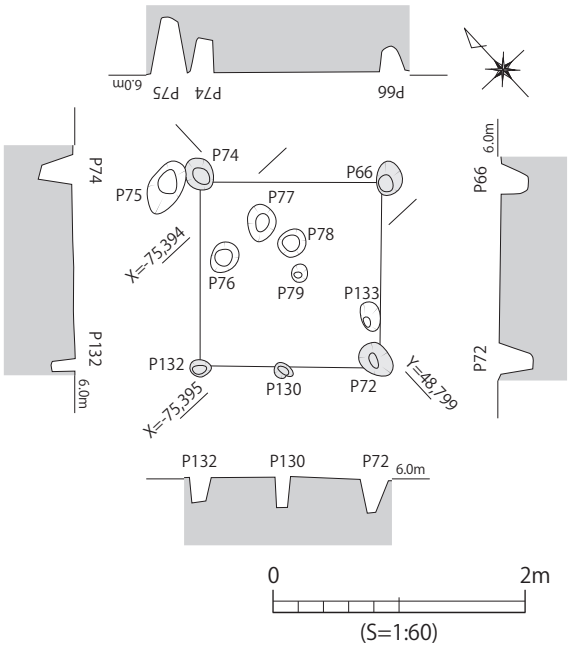
(3)SB03(第 62 図)

形態と規模　２間× 1 間の掘立柱建物で、規模は桁行 3.1m、梁行 1.3m である。柱間は、P58-P12 で 1.6m、P12-P7 で 1.45m、P67-P111 で 1.15m、P111-P110 で 1.1m を測る。床面積は 4.03㎡、柱穴は径 10 ～ 20㎝、深さは 15 ～ 50㎝とまちまちである。

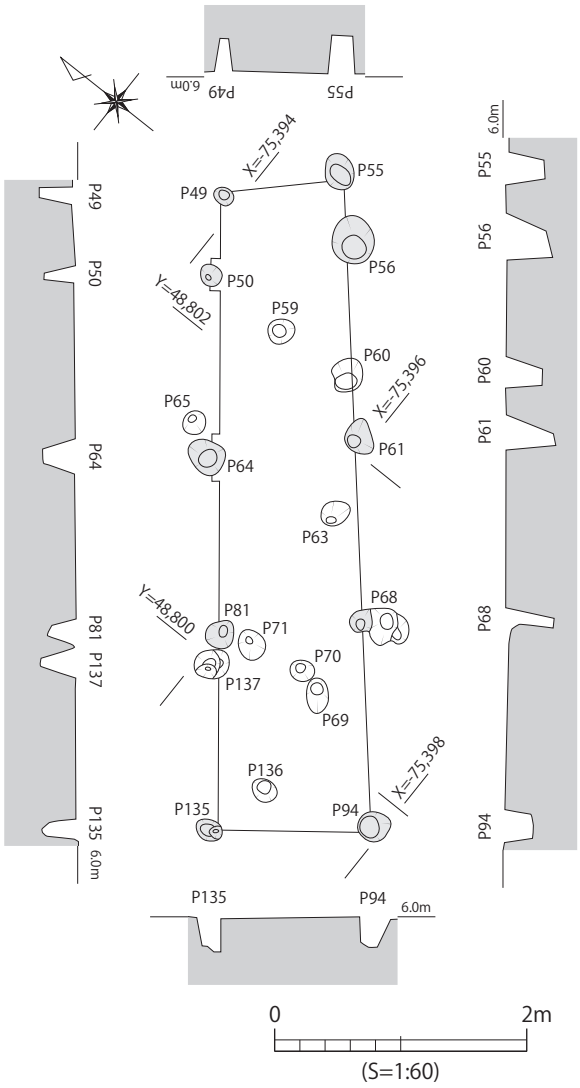
遺構の性格　３区 SB04 と同様、建物はやや狭長な長屋風の住居もしくは小屋と考えられる。

(4)SB04(第 63 図)

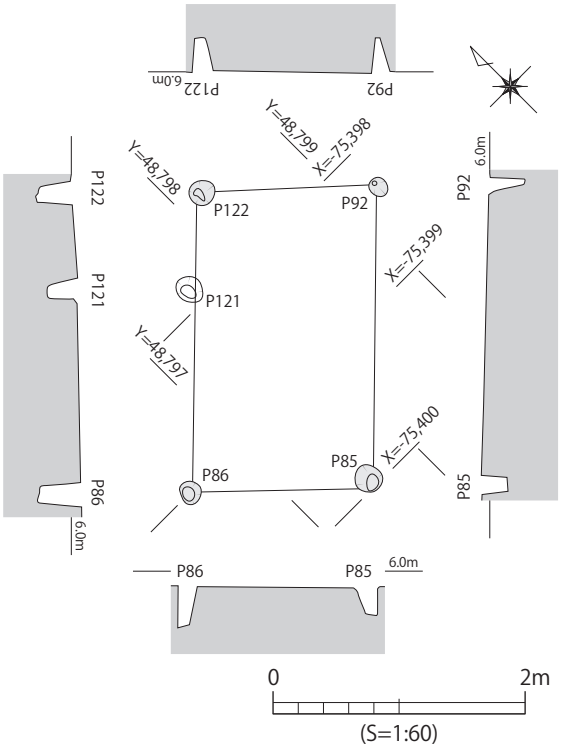
形態と規模　２間× 1 間の掘立柱建物で、規模は桁行 2.2 ～ 3.0m、梁行 1.8m である。柱間 は、P38-P36 で 1.5m、P36-P43 で 1.5m、



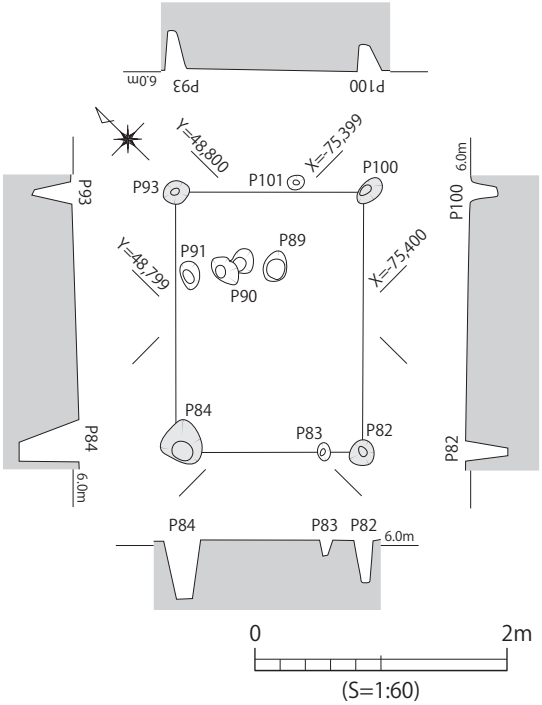
第 64 図　４区 SB05 実測図 (1/60)



第 65 図　４区 SB06 実測図 (1/60)



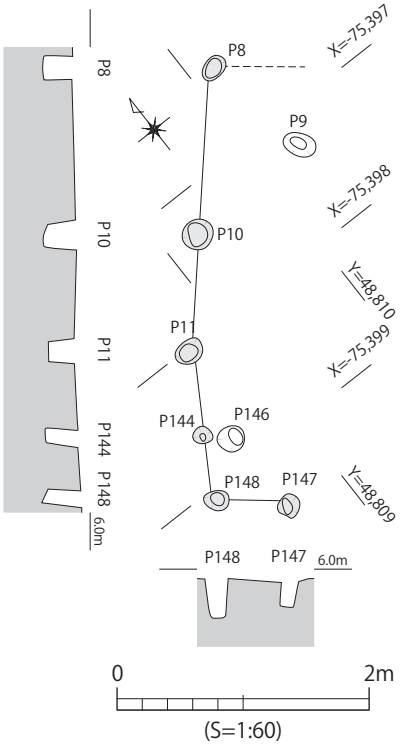
第 66 図　４区 SB07 実測図 (1/60)



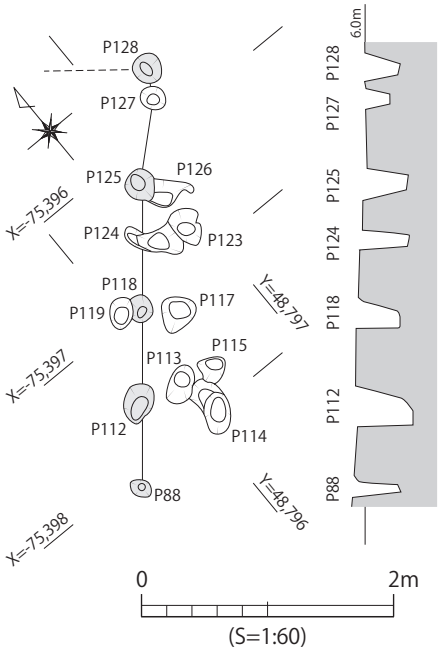
第 67 図　４区 SB08 実測図 (1/60)

P40-P44 で 1.55m、P44-P46 で 1.1m である。北側妻の P39 は建物を構成する柱穴の可能性がある。床面積は 4.68㎡で、柱穴は径 10 ～ 40㎝、深さ 25 ～ 40㎝を測る。

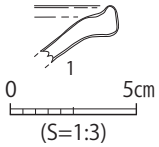
遺構の性格　小人数が起居できる程度の住居と考えられる。



第 68 図　４区 SB09 実測図 (1/60)



第 69 図　４区 SB10 実測図 (1/60)



第 70 図　４区Ⅰ層出土磁器実測図 (1/3)

(5)SB05(第 64 図)

形態と規模　1 間× 1 間の掘立柱建物で、規模は 1 間 1.9 ～ 2.0m、床面積 3.8㎡、柱穴は径 10 ～ 30㎝、深さ 20㎝である。P130、建物中央の P79 も建物を構成する可能性がある。

遺構の性格　住居･小屋以外に櫓のような建物が推定される。

(6)SB06(第 65 図)

形態と規模　4 間× 1 間で桁行 5 m、梁行 1.2m の狭長な掘立柱建物である。柱間は 1 間 1.4 ～ 1.5m 前後だが、P49-P50・P55-P56 は 0.6m 前後と短い。床面積は 5.8㎡、柱穴は概ね径 10 ～ 30㎝、深さ 20 ～ 40㎝ほどである。

遺構の性格　長屋風の住居又は小屋が考えられる。

(7)SB07（第 66 図）

形態と規模　1 間× 1 間で桁行 2.4m、梁行 1.5m の掘立柱建物である。床面積は 3.6㎡、柱穴は径 10 ～ 20㎝、深さ 20 ～ 30㎝を測る。

遺構の性格　住居又は小屋と考えられる。

(8)SB08(第 67 図)

形態と規模　1 間× 1 間で桁行 2.1m、梁行 1.5m の掘立柱建物である。床面積は 3.15㎡、柱穴は径 20㎝、深さ 20 ～ 50㎝を測る。

遺構の性格　住居又は小屋と考えられる。

(9)SB09(第 68 図)

形態と規模　建物は調査区外へと続くため全容は不明だが、4 間× 1 間以上の掘立柱建物跡と考えられる。柱間はまちまちで、柱穴は径 20㎝、深さは 20 ～ 30㎝ほどである。

遺構の性格　全容が不明だが､柱間や周辺の建物の様相から、小規模な住居や、小屋のような建物の可能性が考えられる。

(10)SB10(第 69 図)

形態と規模　調査区外へと続くため全容は不明である。延長 3.4m、4 間分の柱穴を確認した。柱間は 0.7 ～ 1m とまちまちで、柱穴は直径 20 ～ 30㎝、深さは 40㎝である。

遺構の性格　周辺の状況から住居又は小屋と考えられる。

(11) Ⅰ層出土遺物 (第 70 図)

実測に耐える遺物は皆無に等しい。表採した唯一の青磁片 70-1 は、14 ～ 15 世紀頃の龍泉窯系の盤である。

第７節　５区の遺構と遺物

１.弥生時代・古墳時代

(1)SD01(古)(第 17・71 図)

形態と規模　標高５m 余りの第２遺構面で検出した溝状遺構である。南東から北に向けて緩やかに曲がり、両端は調査区外へと続く。長さは約８m、幅４m、深さ 60 ～ 70㎝である。横断面形は浅い逆台形を呈し、氾濫原に堆積した砂層・粘質土を切り込んでいる。底面のレベルは北側に向けてわずかに低くなる。

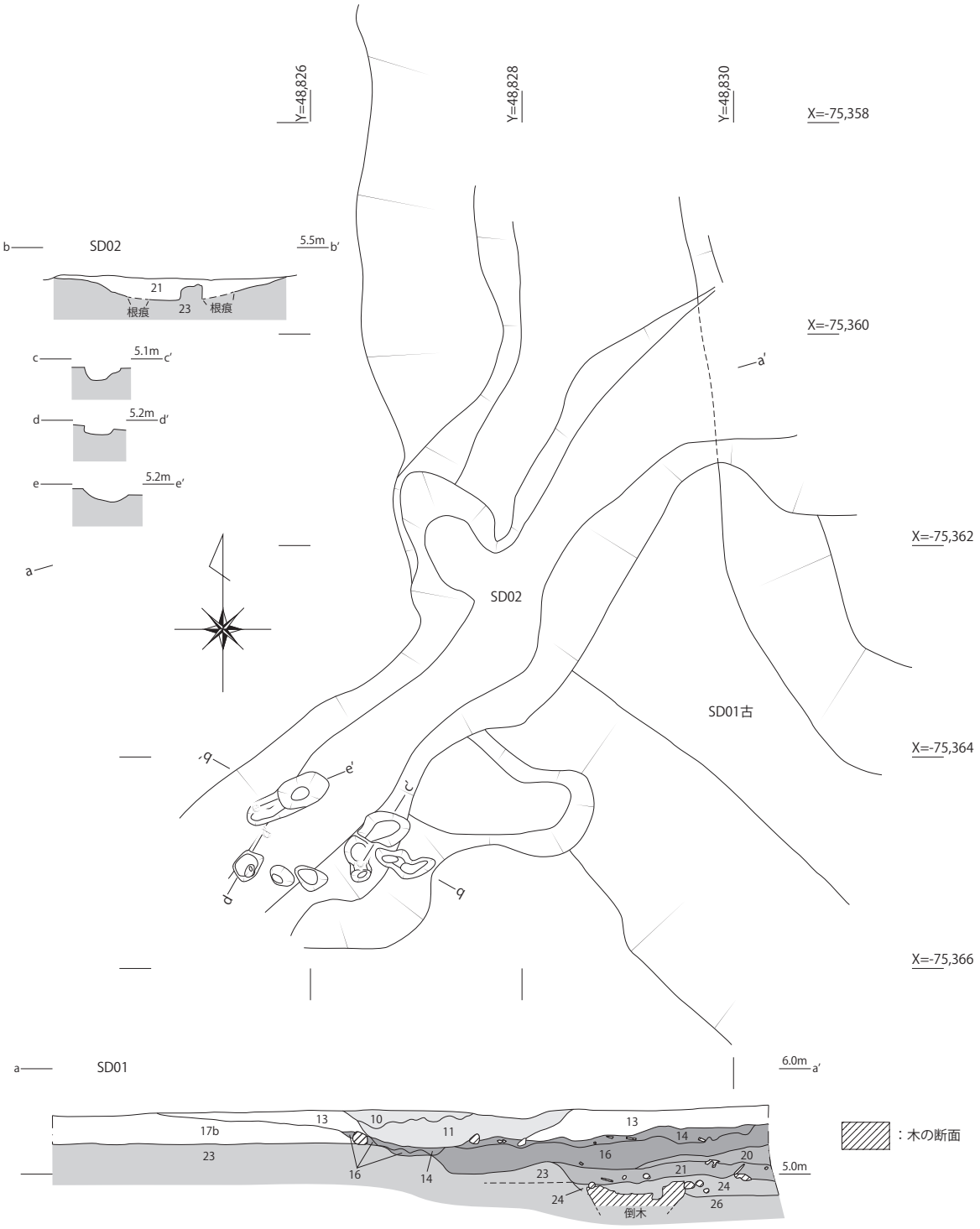
堆積状況(第 18･19･71 図)　最上層には弥生土器･土師器の小片を多量に含む薄い砂礫層が堆積し、その下層にはシルト・粘質土が堆積していた。砂礫層は粒度が粗く、洪水等によって急激に堆積したものと推測される。一方、下層のシルト・粘質土にはところどころに細砂から粗砂によるラミナ構造が認められ、停滞と水勢の強弱があった様子がうかがえる。

遺物出土状況(第 72・73 図)　シルト系の土砂からは土器のほか、木製品をはじめとする多量の遺物が出土した。遺物は検出した当初、上流から流れてきたものと考えたが、土器は砂礫層の細片と比較して大きく、遺存状態は良好で、近隣で使用されたものと推定される。土器以外では自然木に混在して木製品が多量に出土した。大小さまざまなものが乱雑に堆積し、規則性も無いように見えたが､取り上げを進めたところ､杭で固定した横木で堰き止める構造を北端部で確認した。出土した木製品等は、水流が堰き止められたことにより集積した状態で埋積したものと考えられる。また、溝の両岸には杭や矢板が打設され、これらに沿って縦木が出土している。この縦木は、棒状･板状の材がみられ､大きさや形状も不揃いで整然と組み合わせた様子はないが､明らかに溝･杭に沿っていいることから、杭で支えられていたものと考えられる。

出土遺物（第 74 ～ 85 図）　74 図は弥生土器である。１はⅡ様式の甕で、口唇部にキザミ、頸部に櫛描直線文と刺突文を有す。２はⅣ様式の甕で、肥厚した口縁部に刺突文を施す。３・５～ 31 はⅤ様式の土器である。５は低脚坏、６～８は高坏もしくは鉢、９～ 11 は壺である。このうち９は貼付突帯に半裁竹管で刺突し、突帯の上部には鋸歯文を施す加飾壺である。10 は短頸壺で、直立する口縁部に２か所の円孔がみられる。甕は、口縁が厚く、外面に擬凹線を施す 14 ～ 17、やや薄く擬凹線が省略される 18・19、口縁がさらに薄く、長くなる 20 ～ 23 などがある。24 ～ 31 は貝殻腹縁や板状工具による刺突文、平行沈線文を有す胴部片である。75-1 ～５は低脚坏、６～９は鼓形器台である。10 ～ 11 は弥生時代終末から古墳時代前期の甕で、12 は台付甕の脚部であろう。

76- １～７は土師器の高坏である。１は外反口縁で､脚接合部には粘土盤を充填した痕跡が残る。２・３は接合部に刺突痕のある粘土盤を充填した脚部である。４は口縁が直線的に立ち上がり、底部外面に段を持つ形態のもので、接合部には刺突痕のない厚めの粘土を充填するものである。６は坏部が浅い椀形を呈すもので、接合部は刺突痕のない粘土を充填する。

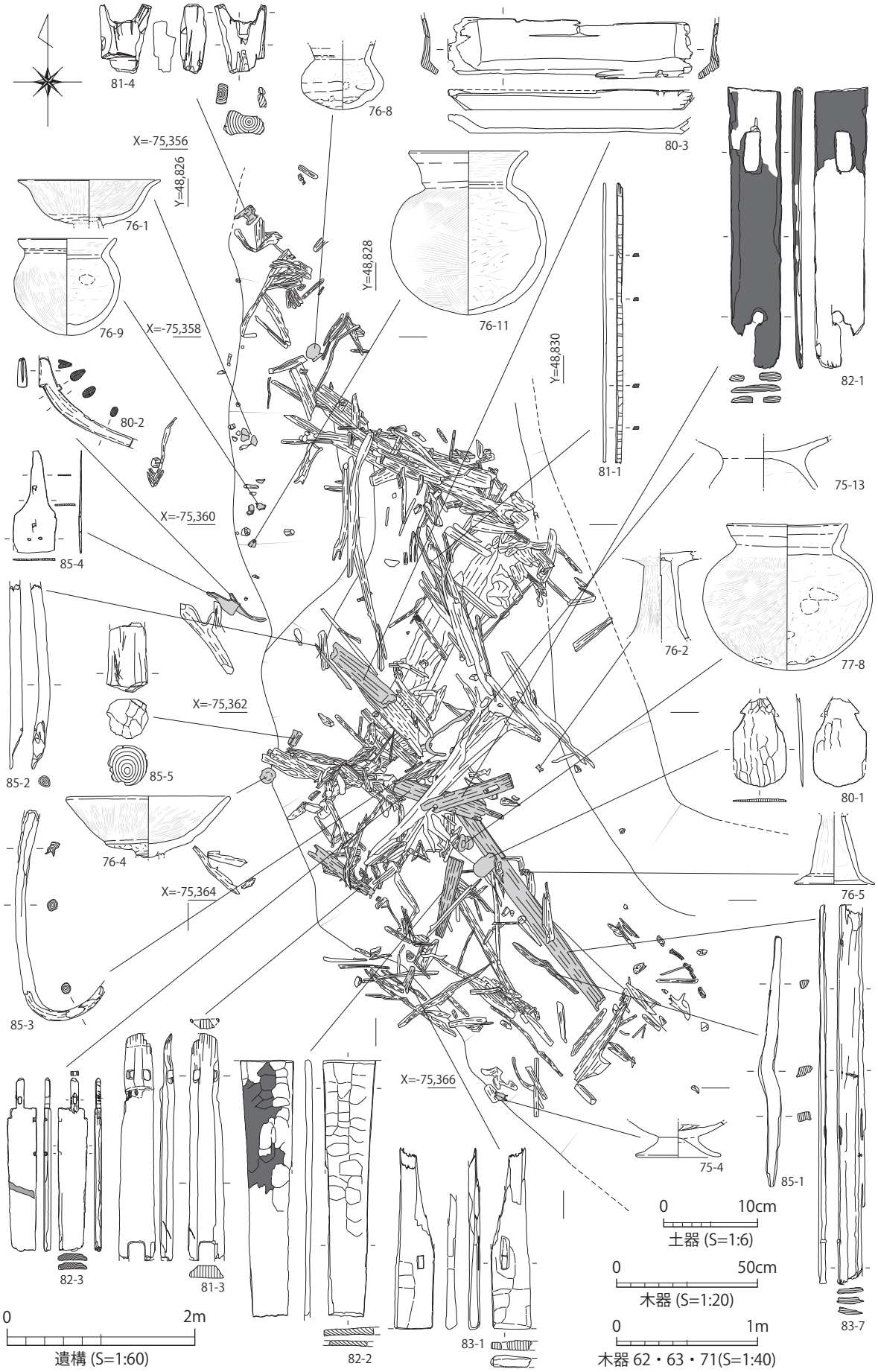
８～ 11 は壺である。８は手捏成形による小形丸底壺で、胴部下半に凹凸が多く器面調整が雑である。９は口縁が短く外反し、器面調整は通常の甕と同様にハケメを施す小形の丸底壺である。10 は直口壺で、口縁は内外面ともにハケメを施す。11 は外反するやや長めの口縁を有する。器形



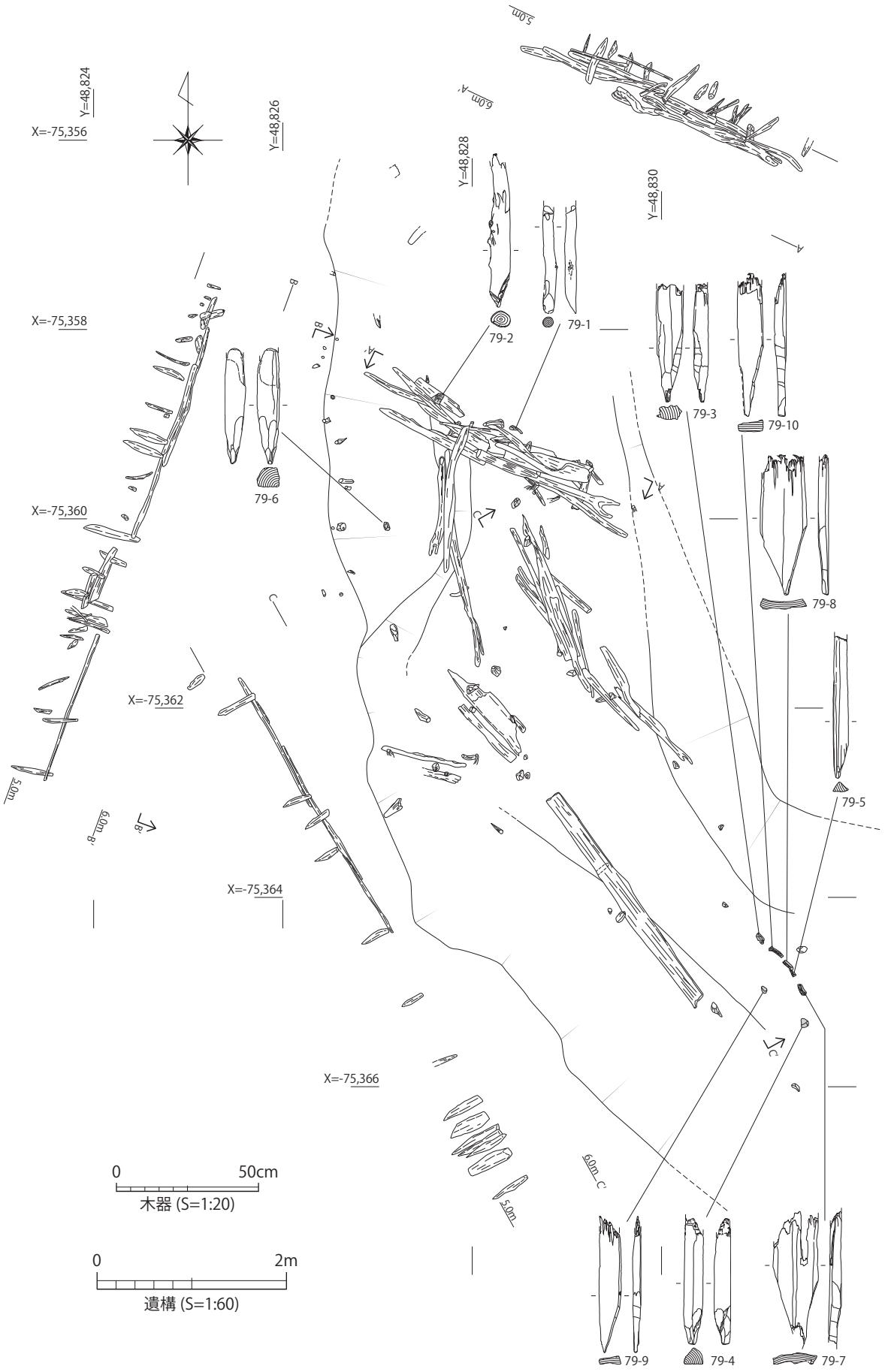
10　7.5Y2/2 オリーブ黒色シルト（弥生・土師器・須恵器包含。木片若干含む。）
11　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト質砂（シルトと細粒砂のラミナ見られる。最下部にシルトが 5cm 程度堆積する。遺物はほとんど含まない。）
13　7.5Y3/2 オリーブ黒色砂質粘土（部分的にラミナ状に極細粒砂含む。弥生・土師器わずかに包含。SD01 新の検出面。）
14　7.5Y3/2 オリーブ黒色砂礫（極細粒～ 5cm 以下の礫含む。弥生～土師器の小片を多く包含。木片若干包含、木材を被覆。洪水等の一時的堆積か。）
16　2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト（細砂～粗砂を含みやわらかい。弥生・土師器を包含し、上面付近で木器・木材多く出土。杭も上面で検出が多い。）
17b　7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質粘土（1cm 前後の白色礫・砂ブロックを若干含む。炭化物少量含むが、木質などは含まない。）
20　7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト質砂（細粒砂とても多く含む。）
21　7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト（木器・土器包含。）
23　10Y5/1 灰色粘質砂（細粒～極細砂やや粘質でしまる。遺物包含しない。）
24　7.5Y3/1 ～ 10Y5/1 オリーブ黒色～灰色砂（細粒～粗粒砂。木片・炭化物多く含む。）
26　7.5Y4/1 灰色砂（極細粒砂～極組粒砂のラミナ見られる。木片多く含む。）

Ⅳ　SD01（新）埋土（10・11）
Ⅴ　SD01（古）埋土（14・16）
Ⅵ　SD02 埋土（20・21）
Ⅶ　河川・湿地性堆積層、ベース（23・24・26）

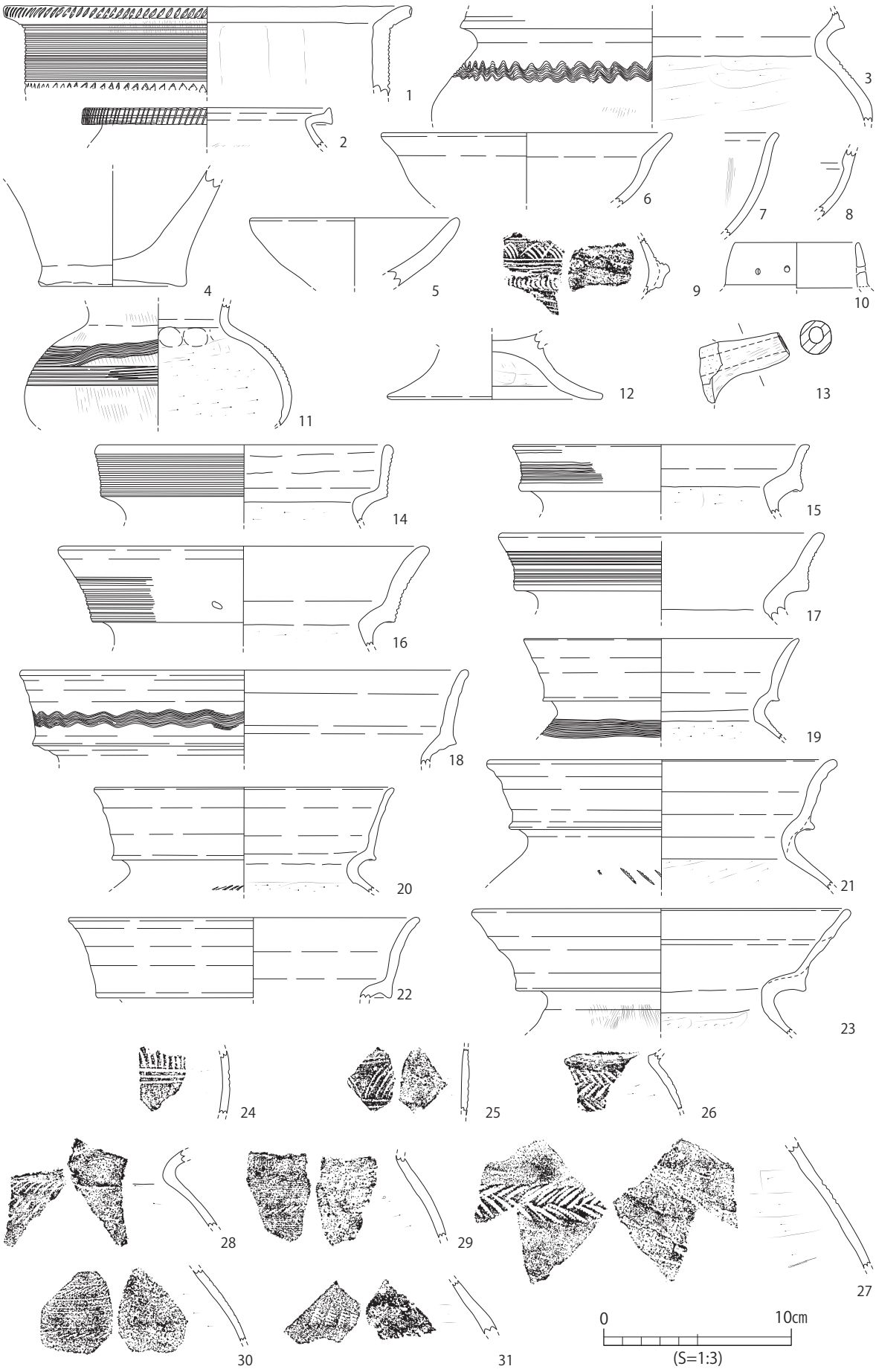
第 71 図　5 区 SD01(古)・02 実測図 (1/60)



第 72 図　5 区 SD01(古) 遺物出土状況 (1/60・1/6・1/20・1/40)



第 73 図　5 区 SD01(古) 護岸・堰実測図 (1/20・1/60)



第 74 図　５区 SD01(古) 出土遺物実測図 1 (1/3)

は壺に近いが、外面には煤が付着しており、甕として使用されたものである。

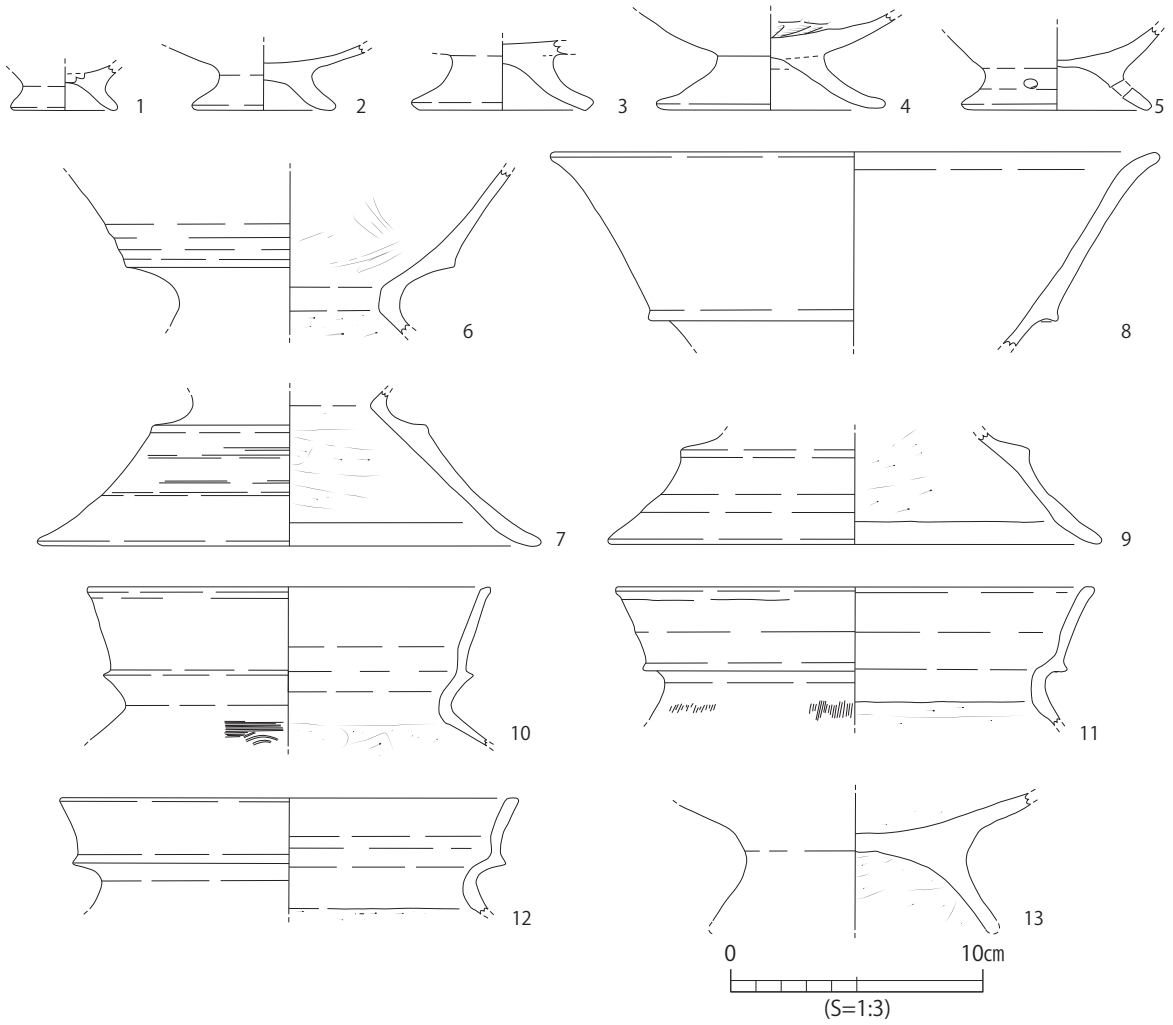
77- １～ 11 は土師器の甕である。このうち、１・３～８は器壁が厚く、複合口縁の突出部が退化して不明瞭なものである。外面は粗いハケメ、口縁部内面にもハケメを施すものがある (3･5･7)。２･９･10 は単純口縁の甕で、２は口縁部が内湾気味に立ち上がり、肥厚せずそのまま丸くおさめ、９・10 は口縁が外反するものである。

77-12 は焼成粘土塊で、全面が破面のため詳細は不明である。

78-1 は太形蛤刃の磨製石斧である。基部を欠損し、刃部には擦痕が残存する。２～６は黒曜石の剥片で、２～４は石鏃未成品の可能性がある。６は上下端に階段状の剥離がみられ、楔形石器の可能性もある。

79 図は SD01(古) に打設された杭・矢板である (第 73 図)。１・２は北端部で検出した堰材とみられる横木を支持していたものである。いずれも、丸太材の先端を斜めに切っただけのもので、１は径４㎝、２は径７㎝の材である。３～ 10 は護岸の縦木を支えたと考えられる杭と矢板である。３～６は分割材、７～ 10 は板目材を両側縁から斜めに切り落としたものである。矢板の厚さは概ね３㎝で、幅は 16㎝と８㎝前後のものがある。

80-1・２は曲柄鍬の身と柄である。身はアカガシ柾目材の平鍬で、基部を欠損するが現状では全長 31㎝、幅 19㎝、厚さ 1㎝余りを測る。柄はスダジイ芯去材の反柄で、鍬台の装着面に溝が施

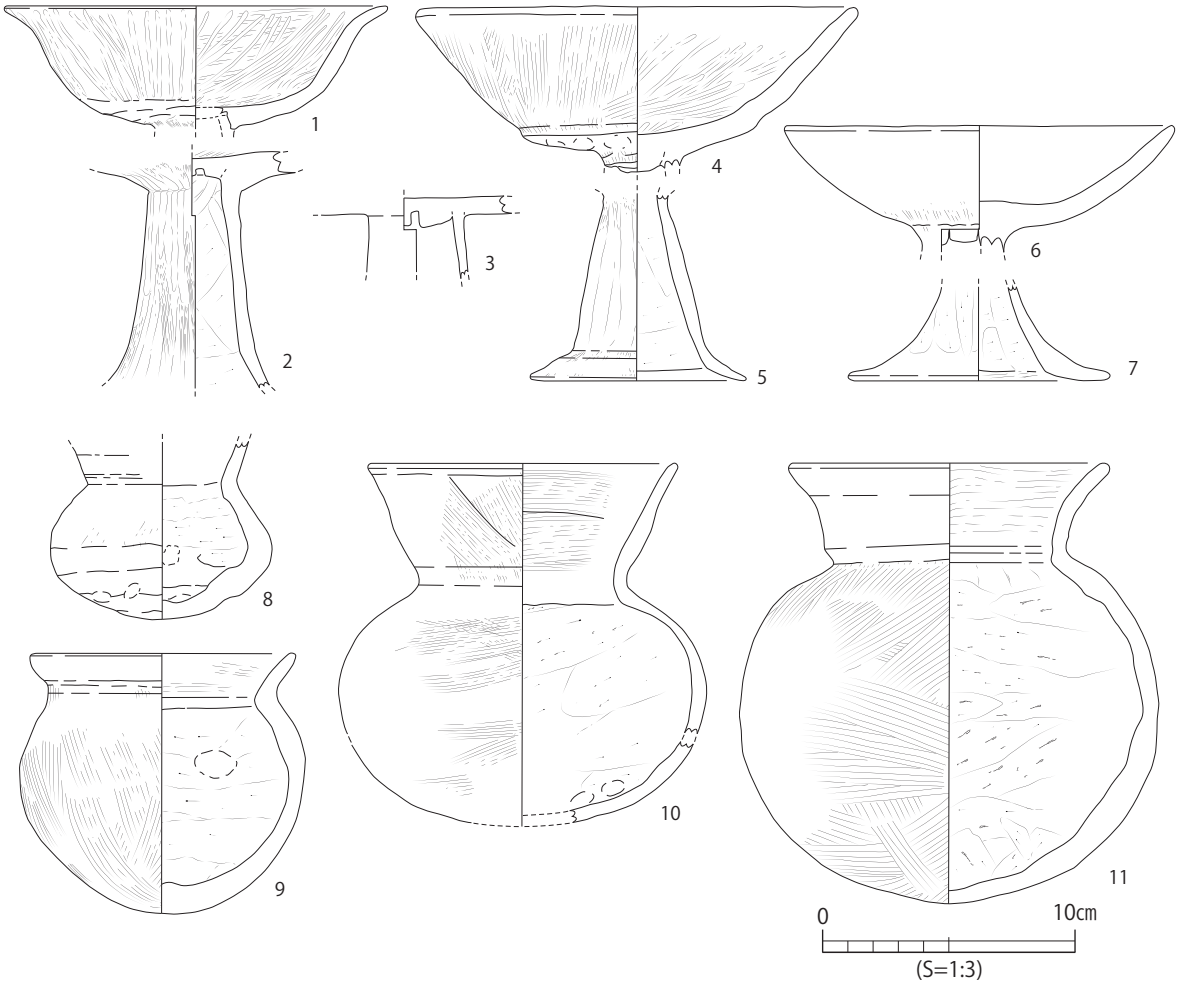


第 75 図　５区 SD01(古) 出土遺物実測図２(1/3)

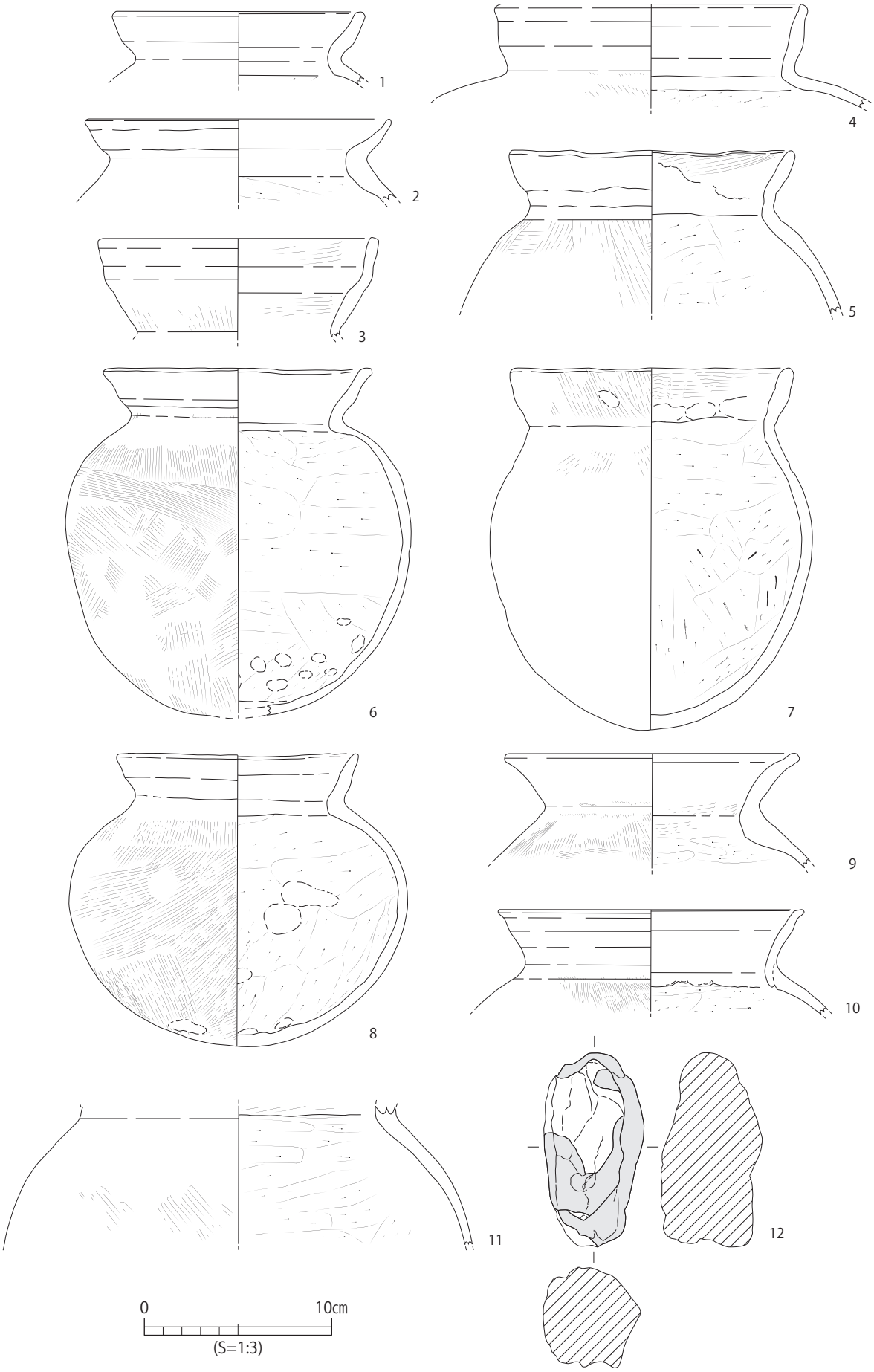
される。現況で長さ 44㎝、最大幅 5㎝、厚さ３cm を測る。３は槽で、スギ横木材を刳ったものである。損壊しているが、大きさは全長 87㎝、幅 22㎝、高さ 7㎝である。４は不明容器で、スギ横木材を刳ったものである。幅が均等でないことから柄を伴っていた可能性もある。

81・82 図は建築部材である。１・２は加工痕のある棒状材で、垂木と考えられる。１は長さ２m、２は先端部に横材を受ける抉りが残る。３は桁と考えられ、柱を受けるホゾ穴と垂木を連結する貫通孔が残る。ホゾ穴付近で欠損しており、現況は長さ 80㎝ほどで、半分程度が残存しているものと考えられる。４は二股に加工した柱で、水平構造材の受部である。受部は幹と枝分かれする部位を利用している。82-1 は現況で長さ２m、幅 19㎝、厚さは３㎝の板材で、壁材と考えられる。長辺端部には丸みを持ち、短辺小口も仕上げが雑なことから、二次的に短く切断された可能性がある。円形と長方形の孔も再利用の痕跡であろうか。２も壁材と考えられるもので、現況で長さ 96㎝、幅 18㎝、厚さ３㎝である。３は現況で長さ 1.2m、幅 20㎝、厚さ４㎝の床材で、ホゾに貫通孔があることから楔で固定したものと考えられる。４は床などの水平構造材で、両端部を欠損している。

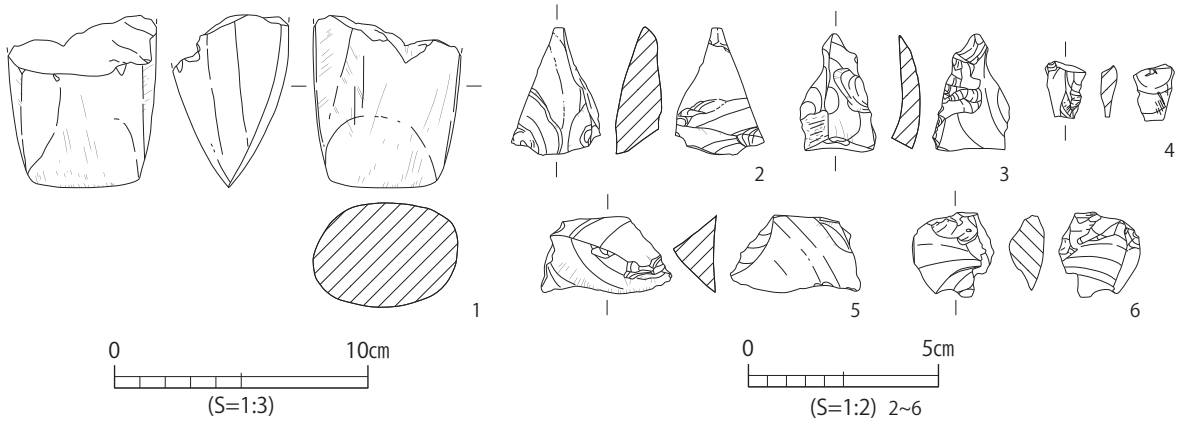
83・84 図は施設材又は器具材である。83-1 は方形孔のある板材で、孔周辺には他材の当たり痕とみられる窪みが残る。２・３は段状加工のある板である。４・５は段状の加工のある棒である。83-6 ～ 8、84-1 ～ 14 は孔・段状加工の無い板材である。このうち７は 2.7m、８は 1.7m の長材である。15 は径３㎝ほどの芯持材を鉤状に折り曲げたもので、用途は不明だが何らかの器具として用いられたものと考えられる。



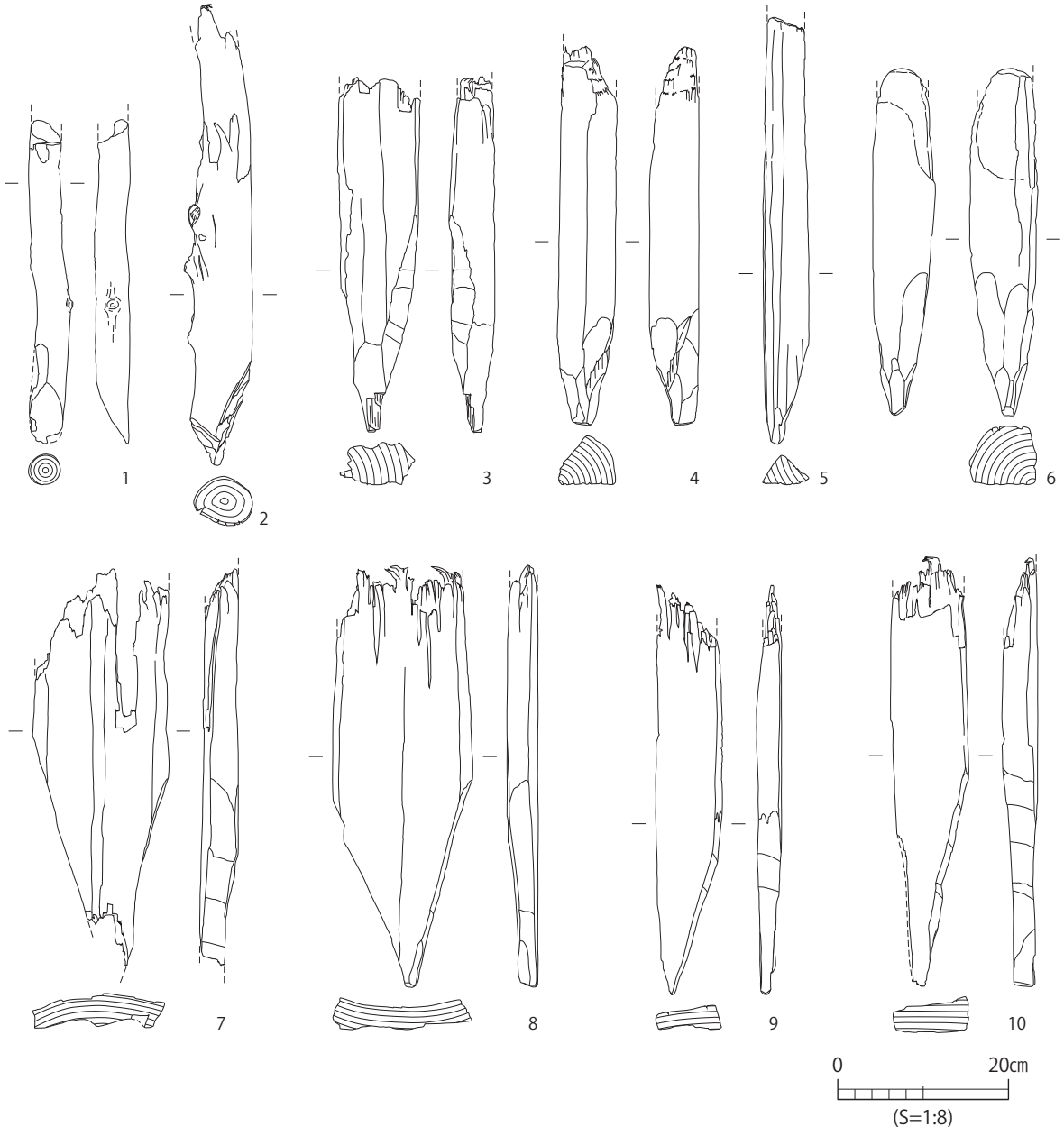
第 76 図　５区 SD01(古) 出土遺物実測図３(1/3)



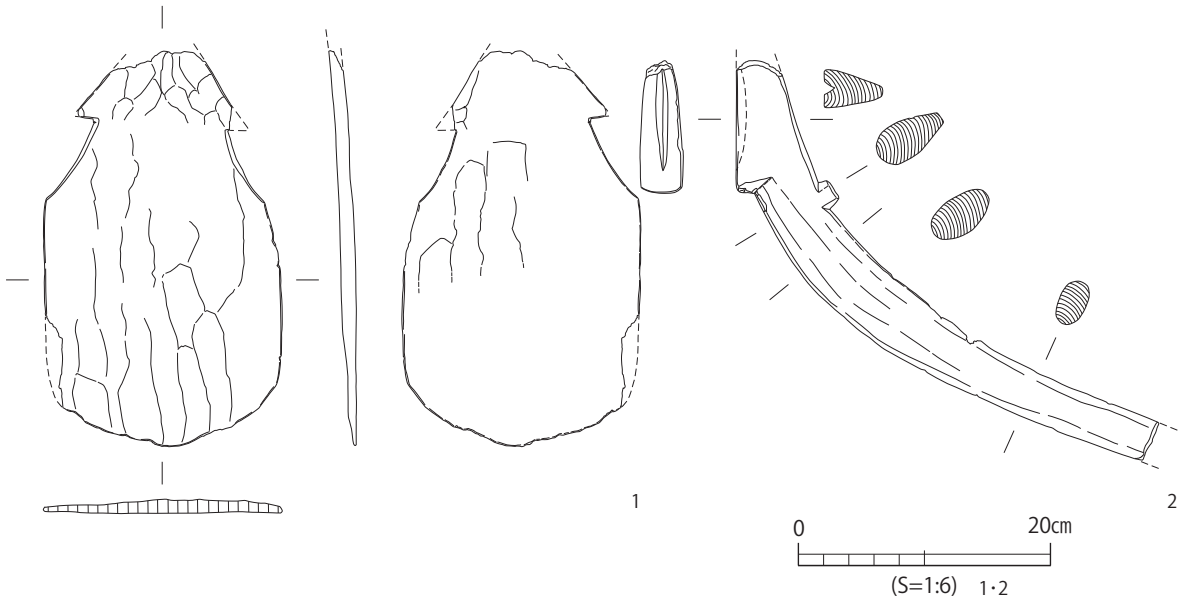
第 77 図　5 区 SD01(古) 出土遺物実測図 4 (1/3)

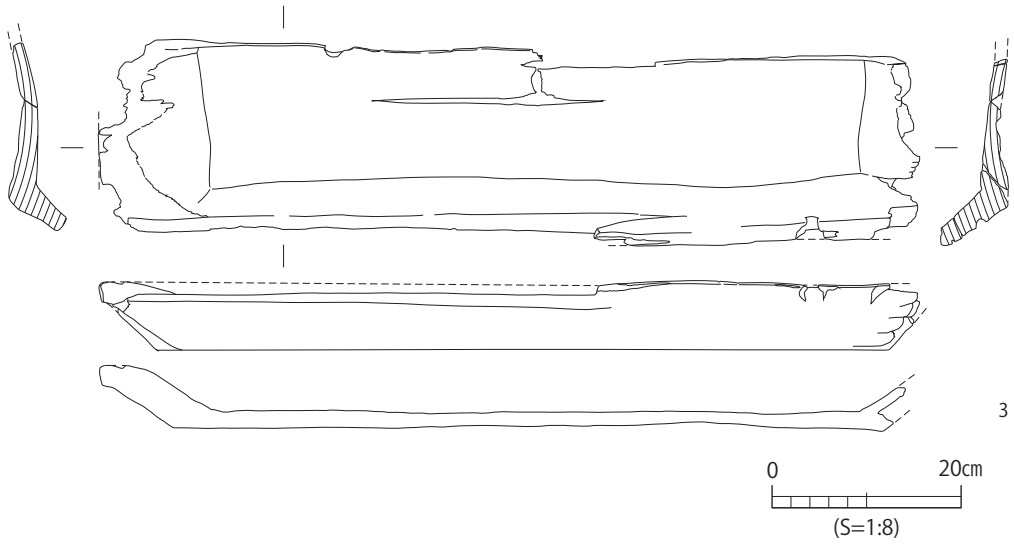


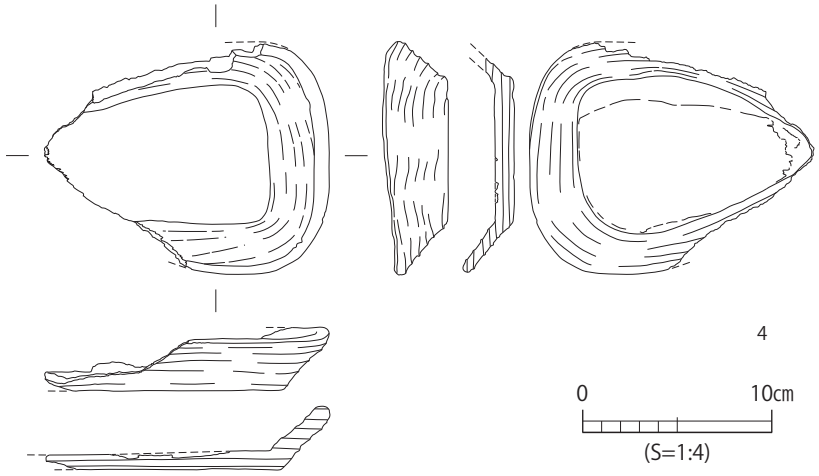
第 78 図　５区 SD01(古) 出土石器実測図 (1/2・1/3)



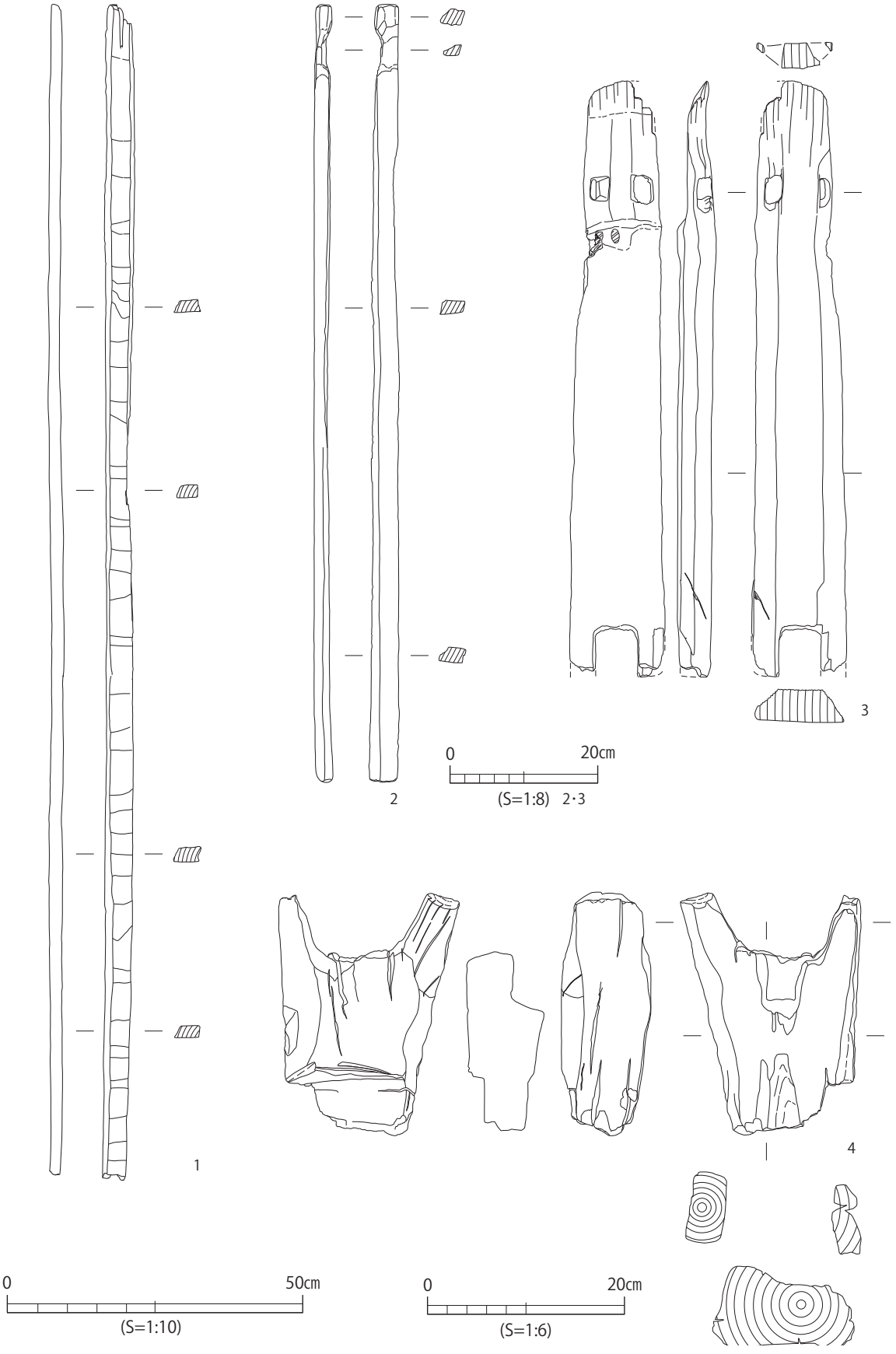
第 79 図　５区 SD01(古) 出土木製品実測図 1 (1/3)



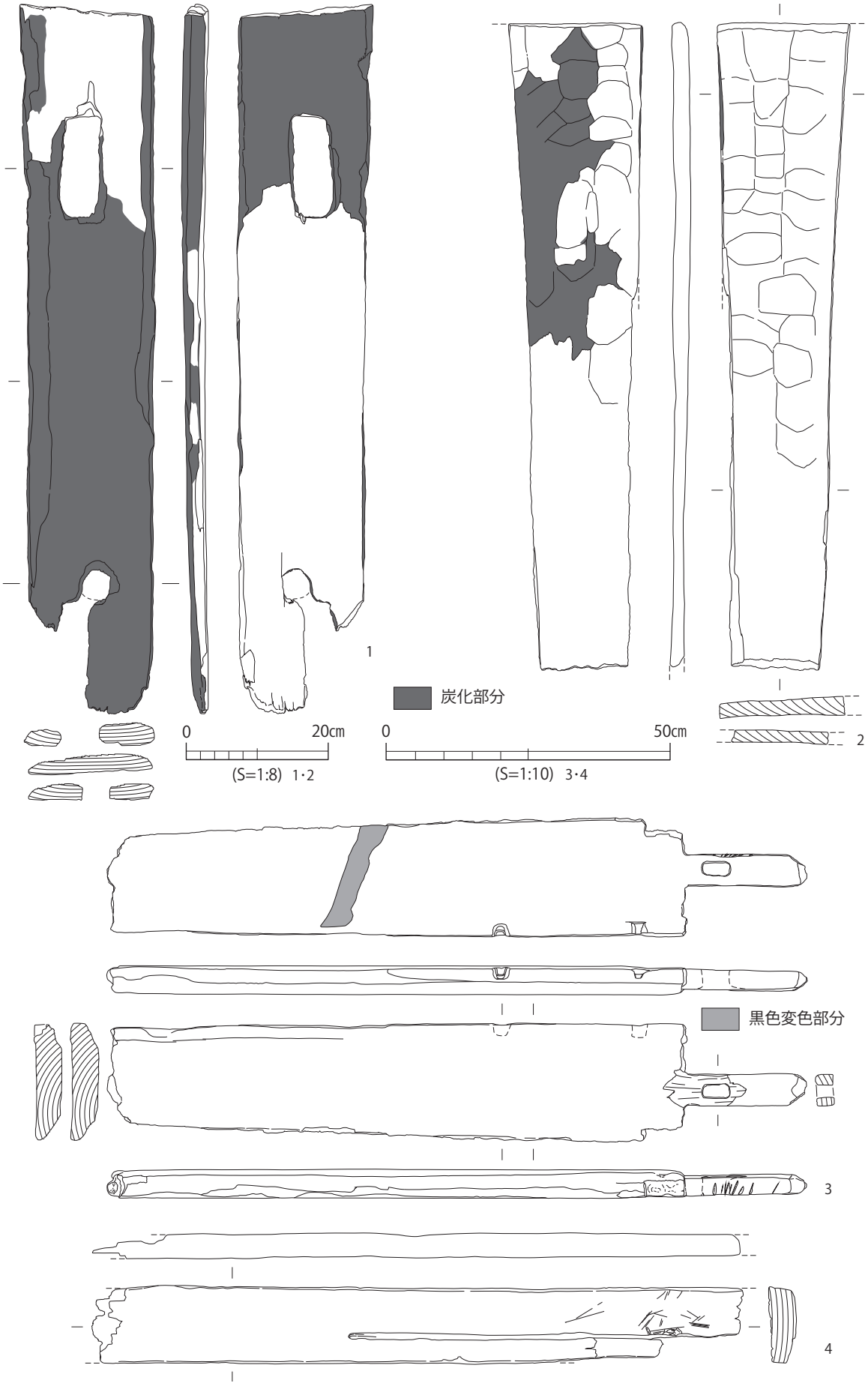




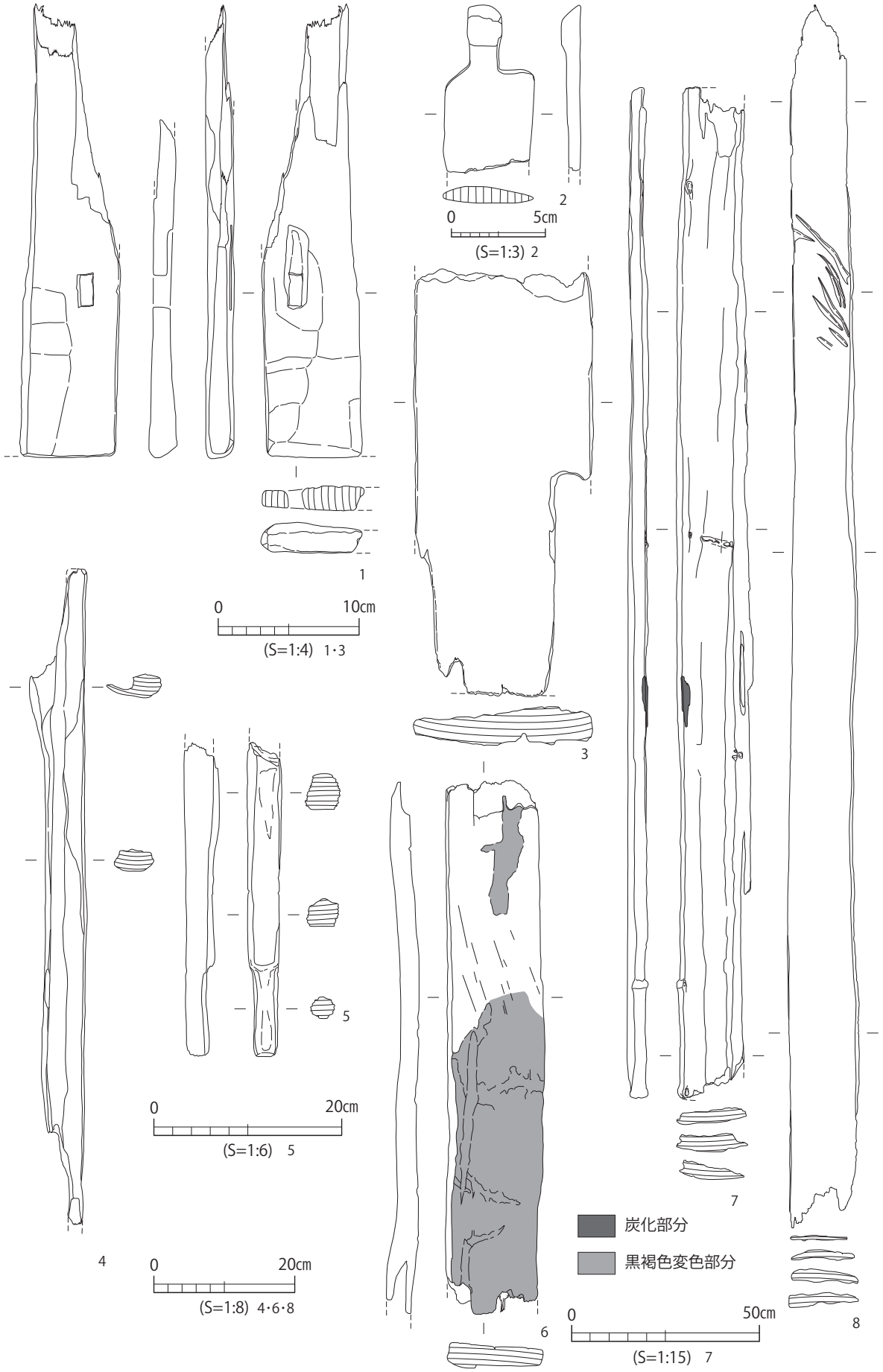
第 80 図　5 区 SD01（古）出土木製品実測図 2 (1/4・1/6・1/8)



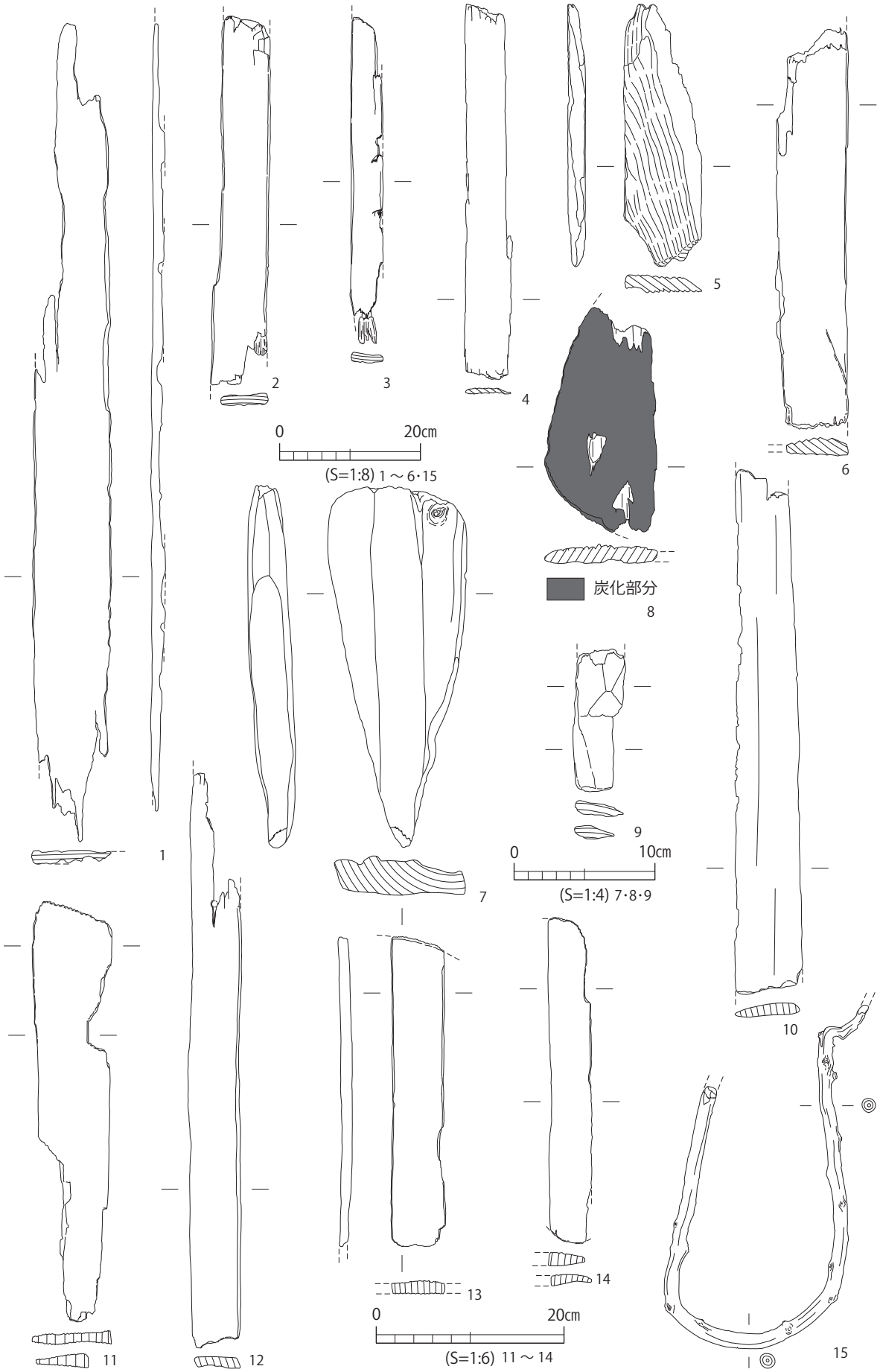
第 81 図　５区 SD01(古) 出土木製品実測図３(1/6・1/8・1/10)



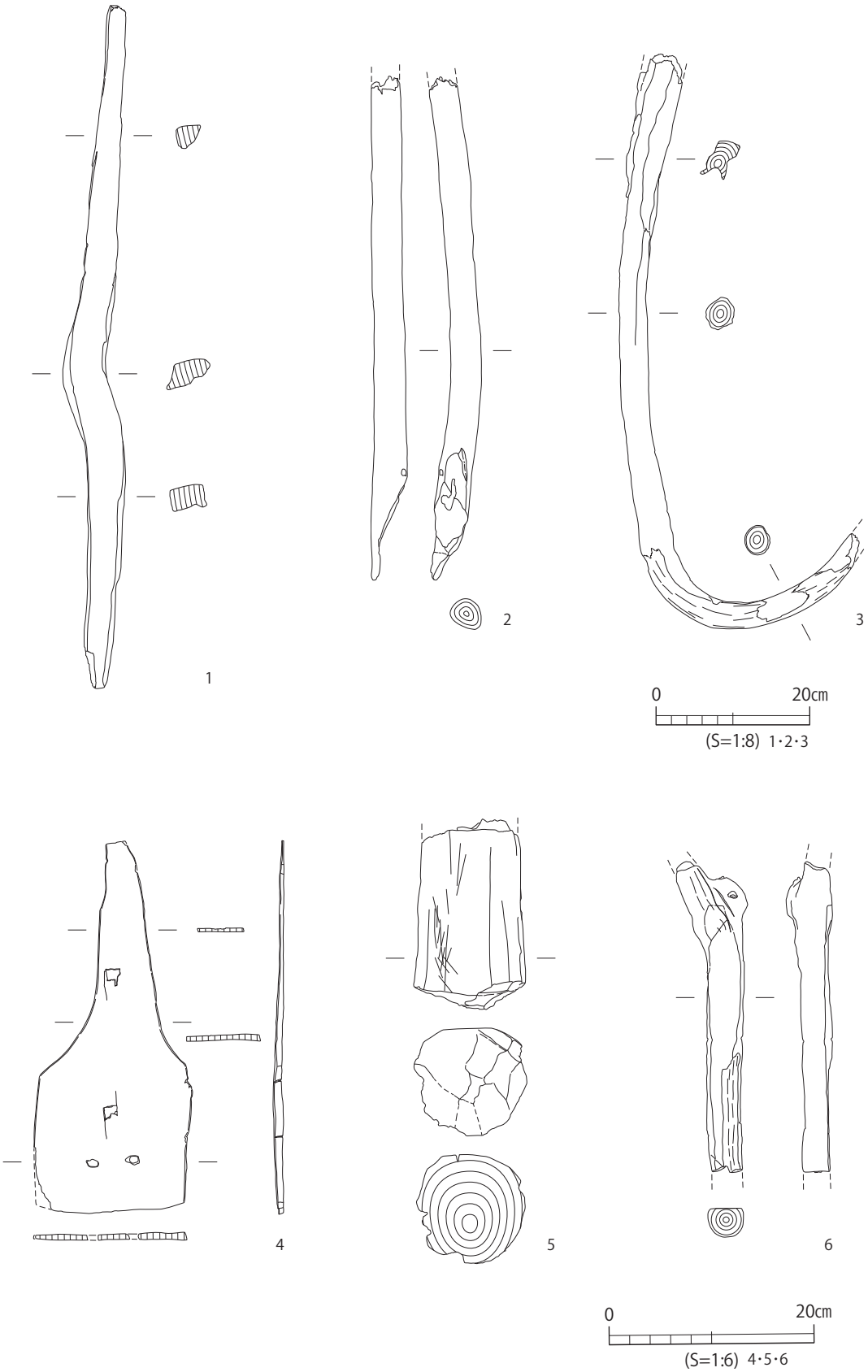
第 82 図　５区 SD01(古) 出土木製品実測図４(1/8・1/10)



第 83 図　５区 SD01(古) 出土木製品実測図 5 (1/3・1/4・1/6・1/8・1/15)



第 84 図　5 区 SD01(古) 出土木製品実測図 6 (1/4・1/6・1/8)



第 85 図　５区 SD01(古) 出土木製品実測図７(1/6・1/8)

85-1 は芯去材の杭、２は丸太の先端を尖らせただけの杭である。３は用途不明の木製品で、径４㎝ほどの芯持材を鉤形に変形したものである。４は長さ 36㎝、幅 16㎝、厚さ１㎝ほどの薄い板状製品である。上部は内湾しながら先細りとなり、下端と両側辺は直線的に加工されている。材はアカガシで、曲柄鍬を二次加工し、別の用途に転用したものと考えられる。補修孔又は転用時に穿孔したものか不明だが、円孔が２か所が残る。５・６は芯持材を加工したもので、５は端部を削って尖らせ、一部に小さな傷が多数みられる。

遺構の性格と時期　SD01(古) は、埋土の状況から水勢に強弱はあるもののある程度の流れがあったと考えられる。下流側では流れを遮るように大小の自然木・分割材の長材を横木として配置し、しがらみ状を呈していた。また、縦木の長材は溝・杭に沿って出土しており、杭で固定されていた可能性が高い。SD01 そのものが人工的に掘削したものか否かは判断材料に欠け、自然流路を利用した可能性も十分ある。いずれにせよ、流れを堰き止めて水をコントロールしようとしたとことは明らかである。出土品を見てみると、加工前の材木や未成品がないことから貯木施設とは考えにくい。一方、用途転用されたものも含め建築材や施設・器具材が多く、次いで数は多くないが農具が出土していることや、近隣に水田に適した低地が拡がっていることなどから、周辺に集落が存在し、建物廃材等を使って灌漑目的に整備した可能性が高い。

土器の年代からは、古墳時代中期前半ごろの所産と考えられる。

(2)SD02(第 17・71 図)

形態と規模　SD01（古）と同じベース面で検出した溝状遺構である。SD01(古) と切り合い、交差するように、調査区南西から北東方向に伸び、両端部は調査区外へと続く。長さは９m、幅 1.8m、深さ 25 ～ 40㎝で、横断面形は皿形を呈し、SD01(古) に比べて幅が狭い。底面のレベルは南西端・北東端とも標高約 4.8m で傾斜はほとんど認められなかった。

堆積状況 (第 18・71 図)　遺構はベース層を切り込み、埋土は部分的にラミナ構造が認められるシルト～砂層が堆積している。底面の傾斜がほとんどないことから、常時水が流れている状況ではなかったと推測される。埋土からは少量の土器と木器が出土している。

溝は、掘り込み面のベース層まで埋積したのち、調査区内の全体が無遺物層 (17b) によって被覆されたようで、その後 SD01（古）によって切られている様子が土層断面からも確認できる。

遺物出土状況 (第 86 図)　SD02 埋土を掘り下げたところ、杭列を検出した。SD01(古) と交差するか所では SD01(古) に伴う杭との峻別が当初は困難であったが、SD02 の杭先端の根入りの標高が低いことが判明したことからある程度は区別することが可能となった。杭のほかにも農具や小さな木材が出土しているが、相対的に出土量は SD01 よりも少なく、また、杭列に伴う明確な横木・縦木は出土しておらず、SD01(古) とは性格の異なる遺構である可能性もある。杭の間隔は 40 ～ 50㎝で、先端のレベルは標高 4.7 ～ 4.9 である。

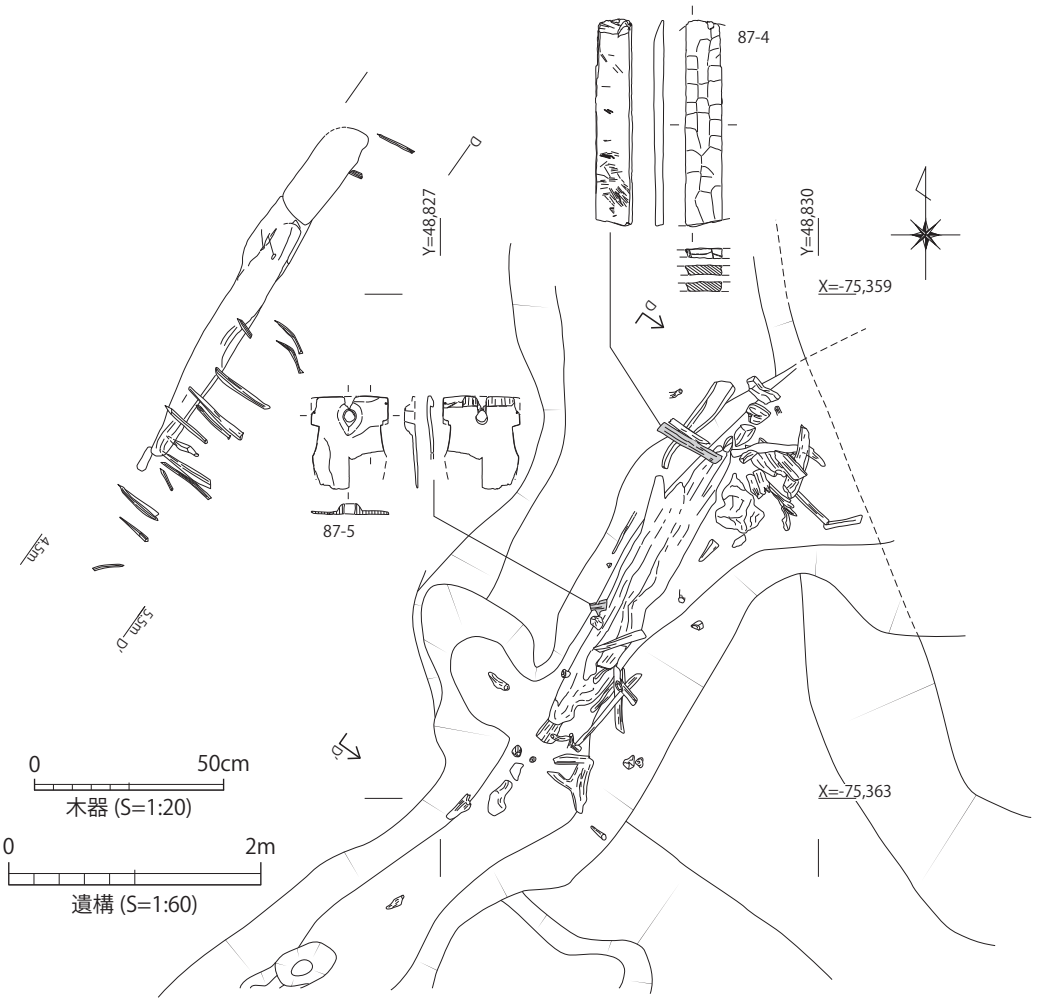
溝の底面からは、倒木とみられる欅の丸太が出土した。溝の向きと一致していることから、当初は溝に伴うものと考え、精査をしたところ、北東側に進むにつれ、丸太が深く沈み込んでいく状況が確認できた。溝底が同様に傾斜していると考えたが、この時点ですでに湧水が激しく、溝埋土とベースとの区別が困難で、調査区北東壁の土層断面で断ち割りを入れて確認したところ、丸太は溝底部の下層にあることが明らかとなった。丸太は上面の腐朽が進んでいたことから、SD02 以前に倒れるか、流されるなどし、この位置で地表にさらされていたと考えられる。辺材を残す資料であっ

たことから、遺物に乏しい SD02 の時期を推定するために年代分析・ウィグルマッチングを行い、縄文晩期初頭の年代を得た[1]。

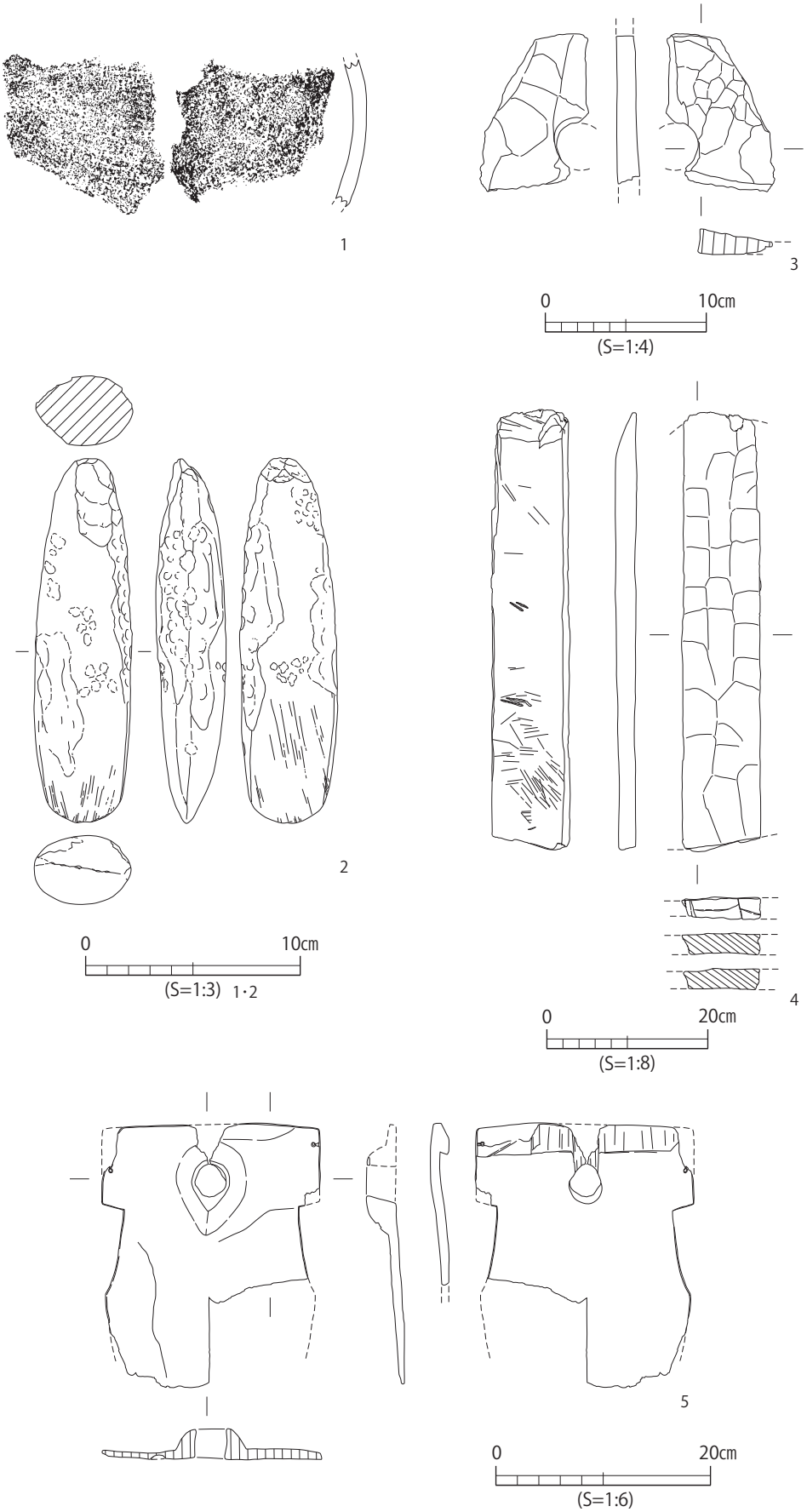
出土遺物 (第 87 図)　埋土中からは土器、石器、木器が出土した。１は無文の縄文土器の鉢である。内外面ともにナデを施すものである。２はほぼ完形で、全長は 15㎝、幅４㎝余りの磨製石斧で、石材は塩基性片岩とみられる。先端には使用痕がよく残り、基部から側面にかけては敲打痕が残る。３は大半が欠損しており全容は不明だが、施設もしくは器具に使用されたと考えられる板材である。現況は、長さ 10㎝、幅 6㎝、厚さ 2㎝足らずで、表面は丁寧に加工し平滑に整えられ、径 3㎝余りの円孔が穿たれている。４は施設材又は器具材とみられる板材で、長辺側が折損しており、痕跡から意図的に切断された可能性がある。現況で長さ 55㎝、幅 10㎝、厚さ 2.5㎝を測る。５は直柄の鍬身で、完形に近い平鍬である。径３㎝ほどの柄孔の他、側縁部２か所に径２㎜ほどの貫通小孔が残る。樹種と木取りはアカガシの柾目である。

遺構の性格と時期　遺物が少なく推定根拠は乏しいが、平鍬が出土していること、SD01(古) が SD02 直上被覆土を切っていることなどから、SD01(古) とそれほど大きな時期差はないと考えられ、弥生時代後期から SD01(古) に切られるまでの所産と推定される。

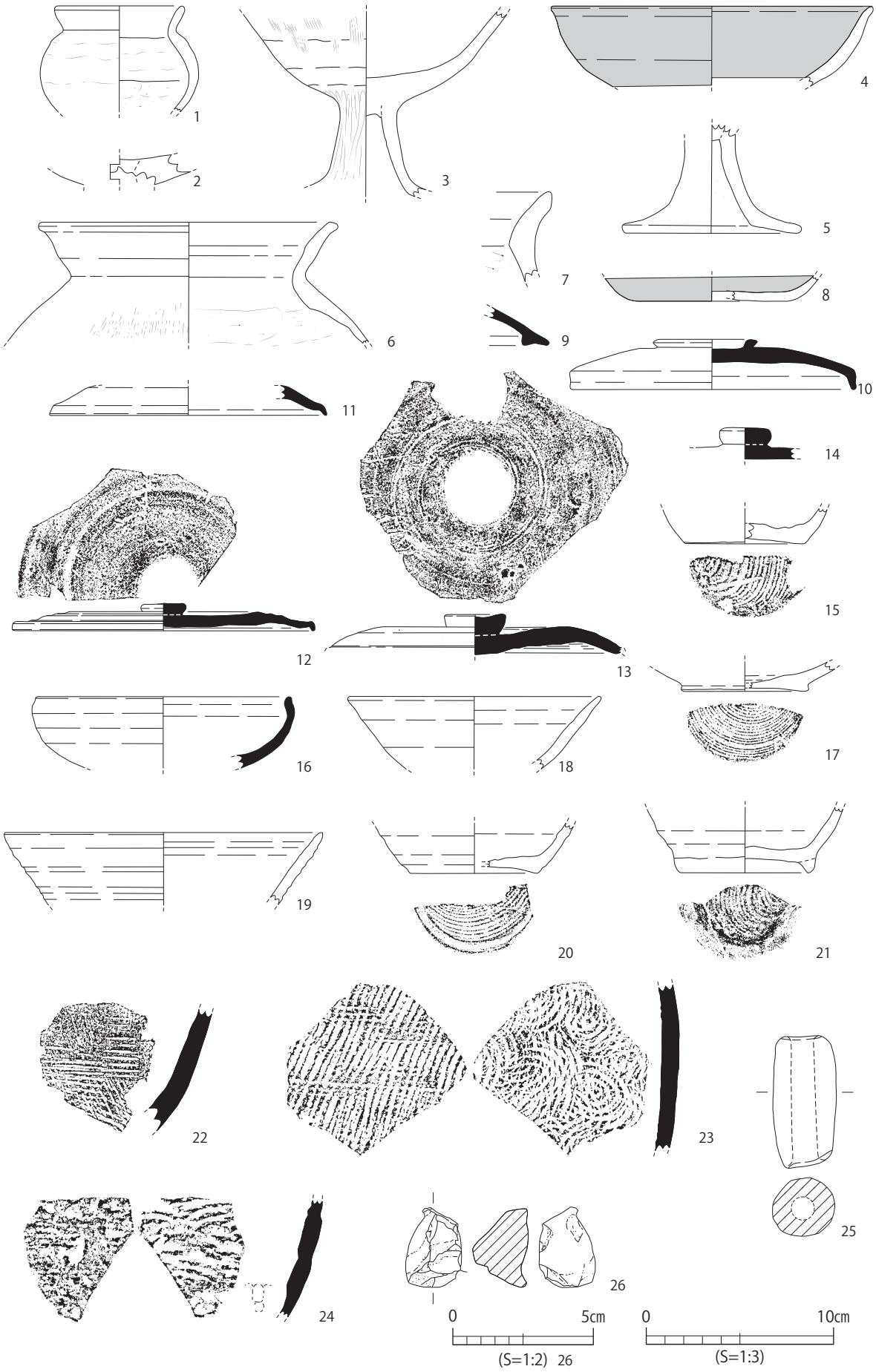
1　詳細は後掲第６章第２節を参照のこと



第 86 図　５区 SD02 杭・遺物出土状況 (1/60)



第 87 図　5 区 SD02 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6・1/8)



第 88 図　５区Ⅲ層出土遺物実測図１(1/2・1/3)

２. 古代・中世

(1)SD01(新)(第 17 図)　覆土からわずかに須恵器が出土しており、検出面を被覆する包含層と近い時期の遺構と考えられた。SD01 底面まで掘り下げたところで木製品を検出し、当初この溝に伴うものと考えたが、断ち割りを入れた結果、木製品が下層に続くことが判明した。

形態と規模　標高 5.6m 前後の第 1 遺構面で検出した溝状遺構である。南東から北に向けて緩やかに曲がり、両端は調査区外へと続く。長さは約 10m、幅３m、深さ 60㎝である。横断面形は浅い逆台形を呈し、SD01(古) が埋積した後調査区全体を被覆した土砂を切り込んでいる。底面のレベルは標高 5.3m でほぼフラットである。

堆積状況 (第 18・19・71 図)　埋土は上層がシルト、下層がシルト質細で、下層はラミナ構造が観察された。埋土からは木片が出土しているが、木製品は出土してらず、遺物は土師器・須恵器小片がごく少量出土しているに過ぎない。

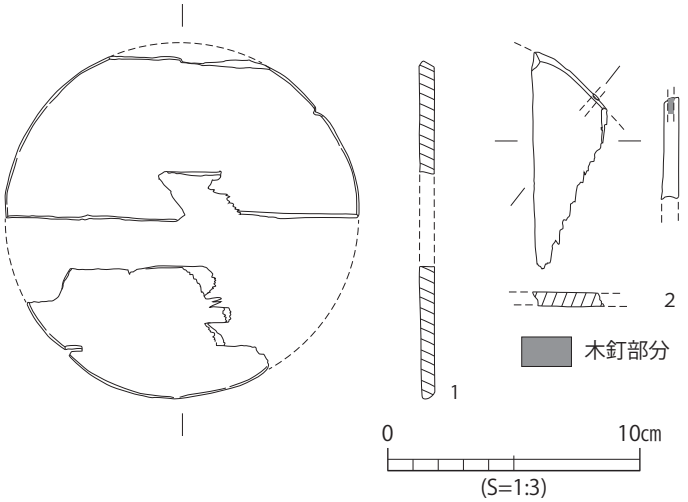
遺構の性格と時期　SD01(古) とほぼ重複する位置にあるが、遺物の出土量や時期、性格は異なる。特に、杭や横木・縦木などの土木行為の痕跡が確認できなかったのは大きな相違点といえる。人為的に掘削した可能性は除外できないものの、一次的な流路の可能性もある。

(2) 遺構外出土遺物 (第 88 ～ 90 図)

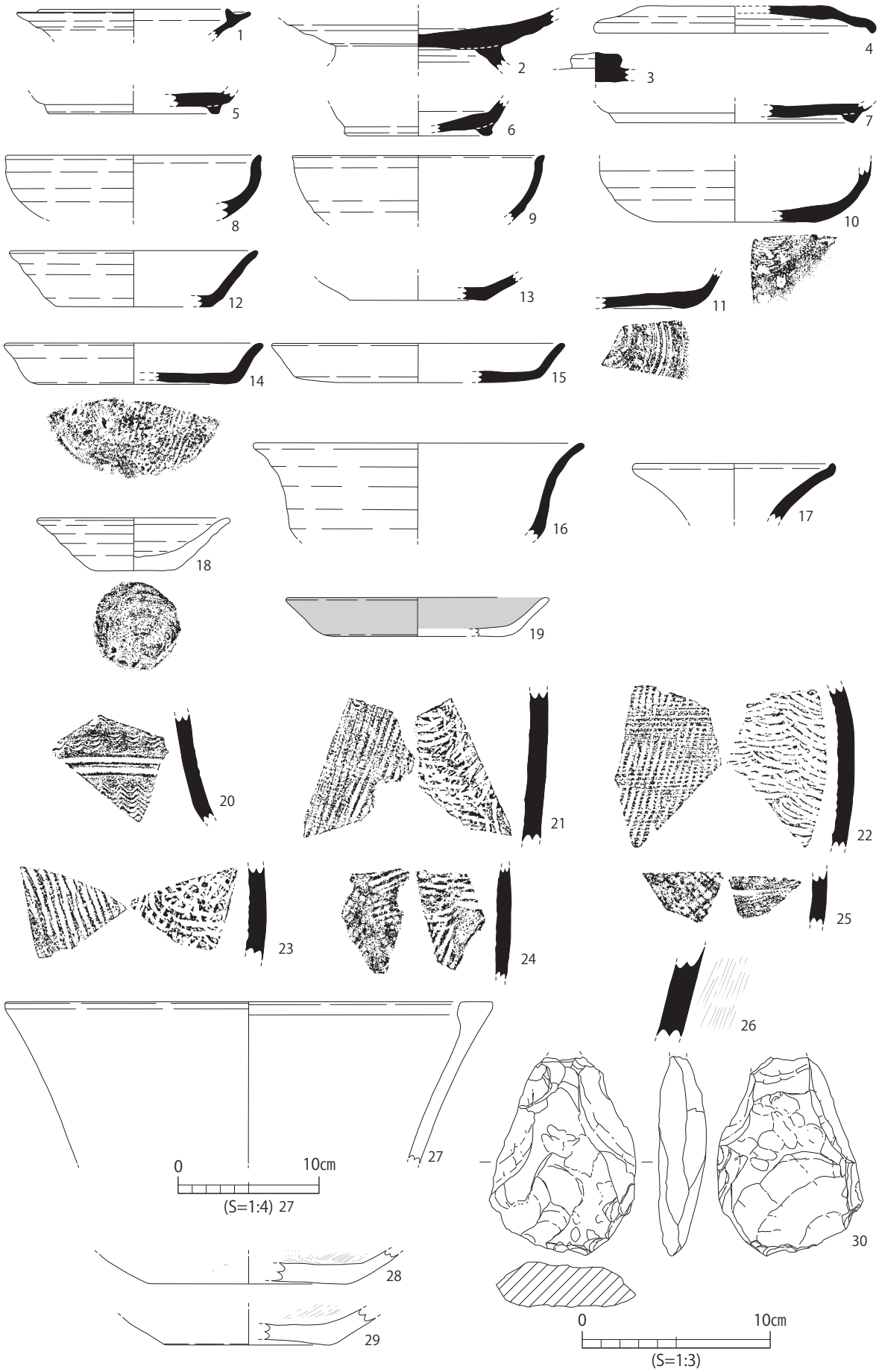
包含層は古代末～中世以降の上 (Ⅱ) 層と、奈良時代～平安時代にかけての下 (Ⅲ) 層に分かれる。

88・89 図はⅢ層出土遺物である。88- 1 ～ 8 は土師器である。 1 は手捏ね成形の小形丸底壺、２は坏部がラッパ形、 4 はやや椀形で口縁部が短く外反する高坏で、いずれも古墳時代中期前半期～中頃のものである。 8 は内外面赤彩の坏である。 9 ～ 13 は須恵器蓋で、かえりの付く蓋 (9)、輪状つまみで口縁端部がしっかりと垂下するもの (10)、ボタン状のつまみで口縁端部が小さく屈曲するもの (12) がある。坏は無高台 (15 ～ 17) が多い。18 ～ 21 は土師器である。須恵器は７世紀末～９世紀代、土師器は９世紀中葉～ 10 世紀前半代におさまるものである。25 は管状土錘、26 は玉髄の剥片である。89-1 は容器の底板又は蓋板、２は底板で側面に木釘が残る。

90 図はⅣ層出土遺物である。 1 ～ 17 は須恵器で、古墳時代～平安時代のものがみられる。これらに加えて、10 世紀後半以降の土師器 (18) や、中世須恵器 (25・26)、瓦質土器鉢 (27 ～ 29) など、Ⅲ層と重なる時期の遺物のほかに中世まで下る遺物が出土している。90-8 は打製石斧である。



第 89 図　５区Ⅲ層出土木製品実測図 (1/3)



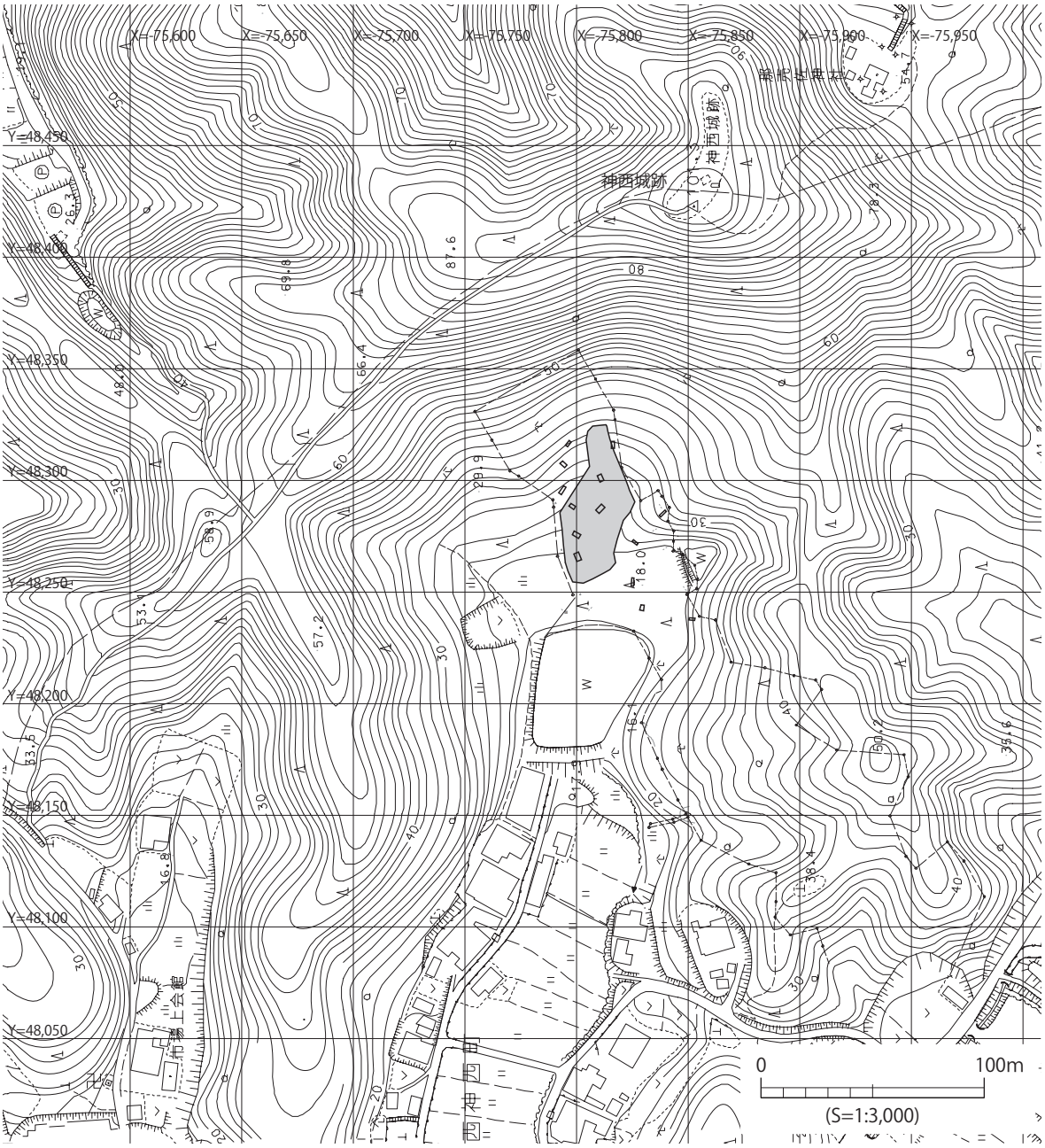
第 90 図　５区Ⅱ層出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

第 4 章　坂本谷遺跡の調査成果

第 1 節　調査の方法

1．発掘調査区とグリッドの設定 (第 91・92 図)

調査対象は、中世城館神西城の西側に開口するトンネル坑口部の下方、谷奥の平坦地から丘陵斜面にかけての完成形 4 車線となる盛土工事予定地で、調査面積 1,400㎡である。事前に行った試掘確認調査結果に基づき調査区を設定した。調査にあたり、世界測地系の第Ⅲ座標系に基づき座標軸を合わせた 10 m四方のグリッドを設定した。X=-75,790、Y=48,250 を原点とし、南に向けてアルファベット順、東に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は各交点の北西



第 91 図　調査区配置と周辺地形 (1/3,000)

隅をもってグリッド名称とし、遺構等に伴わない遺物はこのグリッドで取り上げ等を行った。

2．表土・包含層掘削と遺構の検出

調査地の現況は、竹林・荒蕪地で、周辺には等高線の乱れ等から、地滑りが起きたとみられる地点も散見された。表土・造成土はトレンチ調査から、斜面で厚さ 1 m 余り、平坦地で 50㎝ほどと推定していたが、バックフォーを用いて広範囲に掘削を開始したところ、斜面下半から平坦地にかけては、包含層と考えていた土砂も造成土・地滑土であることが分かり、作業の効率化のために併せて除去した。重機掘削は、バケットに平爪を装着して、包含層まである程度余裕を持たせたところで停止した。その後はグリッド及び土層観察用のベルトを設定し、スコップを用いた人力によって包含層掘削を行った。遺物包含層についてもスコップにより同様に掘削を行った。

3．遺構掘削

遺構の検出・掘削等の精査には草削り・移植ゴテなどを使用した。掘削に際しては、基本的に土層観察用のベルトを設定するか、半裁し、堆積状況の写真撮影後に必要に応じて土層断面図を作成、埋土完掘と完掘状況の写真撮影を実施するという手順をとった。

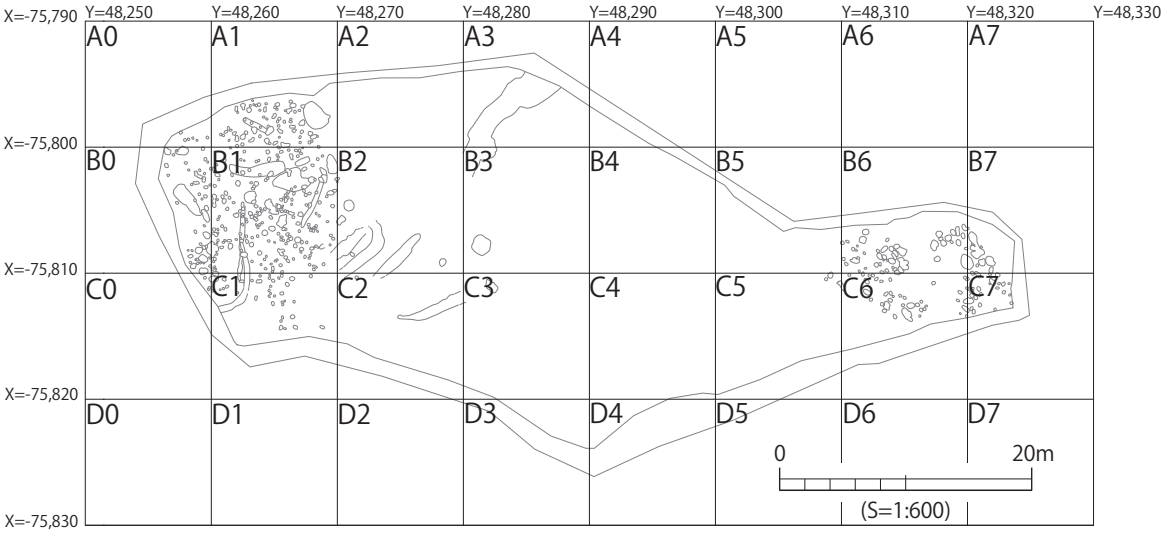
4．記録の作成

遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは 6 × 7 判フィルム (モノクロネガ･カラーポジフィルム) による撮影を行い、それ以外は 35㎜フィルムカメラ (モノクロネガ) 及びデジタルカメラで撮影した。

5．整理等作業

出土した遺物は分類作業を行った上で遺跡の総体が把握できるよう重量を記録した。遺物の実測は、全体量があまり多くなかったため、実測に耐えうるものは極力図化し、掲載することとした。

本書の編集にあたっては DTP 方式を採用し、Adobe 社の Illustrator CS5、Photoshop CS5 を用いてトレース・画像処理等を行い、InDesign CS5 で編集を行った。



第 92 図　調査区割図 (1/600)

第 2 節　調査区の概略と層序

1．試掘確認調査 (第 91 図)

試掘確認調査は、平成 25 年度に実施した。丘陵緩斜面と平坦面、舌状に張り出した丘陵部に計 14 か所のトレンチを設定し、人力掘削によって調査を行った。調査の結果、遺構は確認されなかったが、谷間斜面の 5 か所から中世土師器が出土した。包含層は地点によって異なるが、地表から 50 ～ 130㎝のところに層厚 40 ～ 100㎝ほど堆積していた。土器は小片が多いものの、比較的にまとまって出土しており、これらの試掘結果に基づいて約 1,500㎡を対象に本発掘調査を実施することとなった。

2．発掘調査の概略

遺跡は、出雲平野南西部の標高約 101m の丘陵に居を構える中世城館・神西城の西麓、標高約 16 ～ 30m の谷奥平坦地から斜面に位置する。調査区は標高 16 ～ 18m の平坦部、標高 18 ～ 23m の緩斜面、標高 23 ～ 30m の比較的急な斜面で構成される。

層序 (第 94 ～ 96 図)　土層の堆積状況は、調査区を東西に縦断するグリッド C ライン (第 94 図)、南北を横断するグリッド 3 ライン (第 95 図)、調査区南壁の一部 (第 96 図) で確認した。

基本層序は、Ⅰ表土 - Ⅱ黄褐色系土砂 (盛土・流土)- Ⅲ褐灰色系～黒褐色系土砂 (中世包含層)- Ⅳ黄褐色土・砂質土 (地山・地滑り土) と続く。試掘確認調査で包含層としたのは、Ⅱ・Ⅲ層に相当する。

Ⅱ層は、中世土師器の破片が含まれるものの、土質が軟質・不均質な上に、土器片は極めて微細なもので、2 次的な包含層であると考えられる。南壁では表土下に厚さ 2 m にわたって造成がなされていることが確認できた (第 96 図 6 ～ 10 層)。

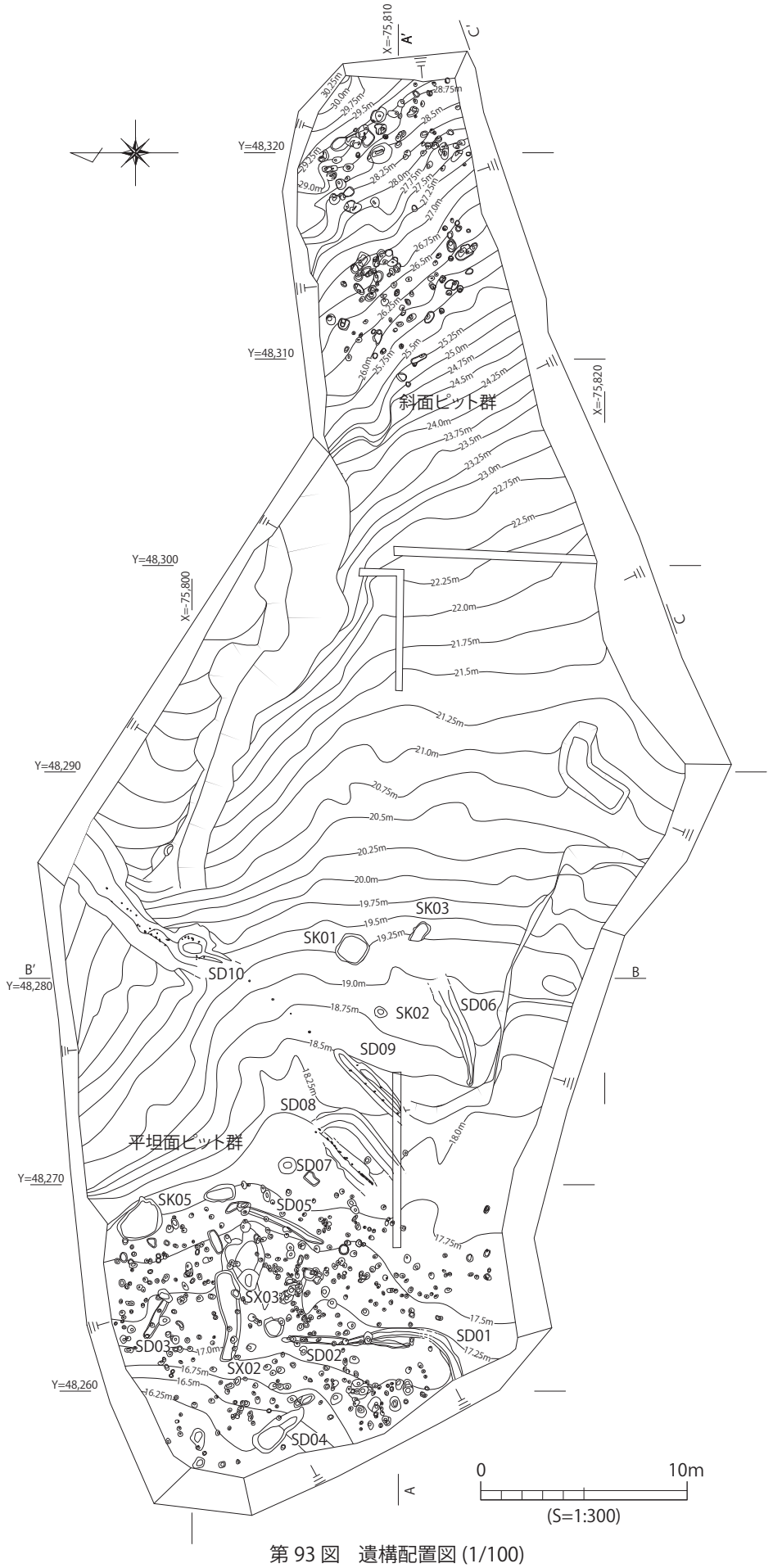
Ⅲ層は、やや粘質で締りのある土砂で、柱状高台皿を伴う時期の土師器皿や坏を包含する。層厚は、斜面では 20 ～ 100㎝、平坦部では 20㎝程度堆積する。Ⅳ層上面で検出した遺構の覆土も基本的にはⅢ層と同様である。

Ⅳ層は、クサリ礫や礫を多く含む粘質土の地山で、谷地形の窪地では古い堆積層と考えられる青灰色粘質土が基盤となっている。また、A 2 グリッドでは、断面図には表れないが、地山と同質の土砂 (第 95 図 18・19 層) の下層から無遺物の黒色土を検出し、層位の反転現象が確認された。調査区北側の斜面中腹にみられる舌状地形は、地滑り痕跡の可能性が高い。

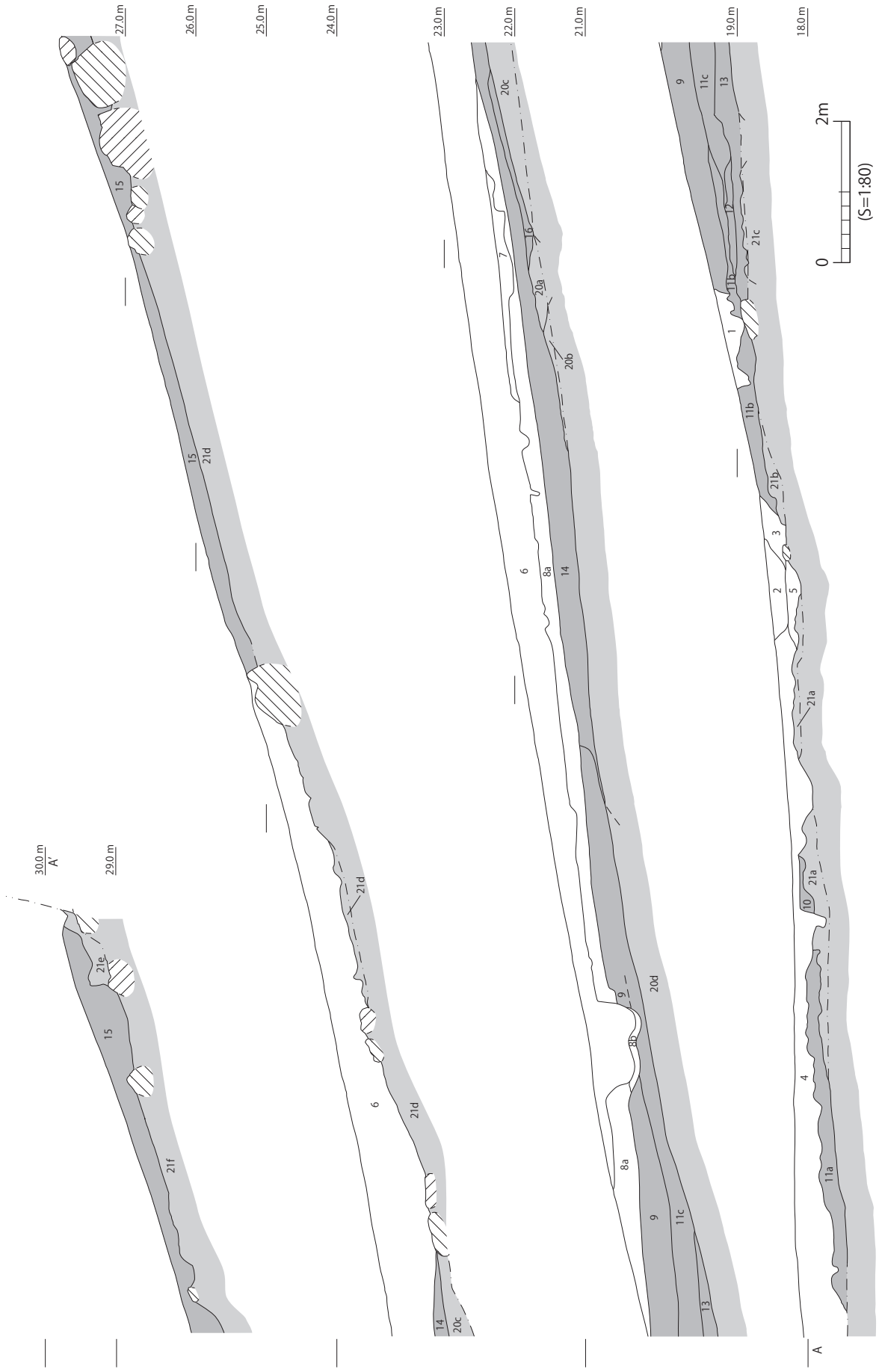
発掘作業と検出遺構 (第 93 図)　斜面上部から平坦部に向けて、順次重機による表土・造成土掘削を行った。試掘確認調査の結果から、調査区中央の B3・B4・C3・C4 グリッド付近は、包含層が厚く堆積しているものと考えていたが、重機掘削の過程でこれらの多くが造成土であることが判明し、取り除いた。重機掘削が終了すると、グリッド設定とベルトコンベアーの配置を行い、土層観察用ベルトを残しつつ斜面上部から下方に向けて包含層掘削と遺構検出を行っていった。

斜面最上部では、黄褐色系粘質土の地山上面でピット 150 余りを検出した (斜面ピット群)。比較的に急な斜面でありながら、平坦面を造り出した痕跡は確認できなかった。遺物はピットから古墳時代後期の土師器甕が出土したほかは、中世土師器ばかりだが、出土量はさほど多くはなかった。

調査区中ほどの緩斜面は、包含層が厚く堆積しており、掘削の過程で土坑 SK01 ～ 03 を検出し



第 93 図　遺構配置図 (1/100)

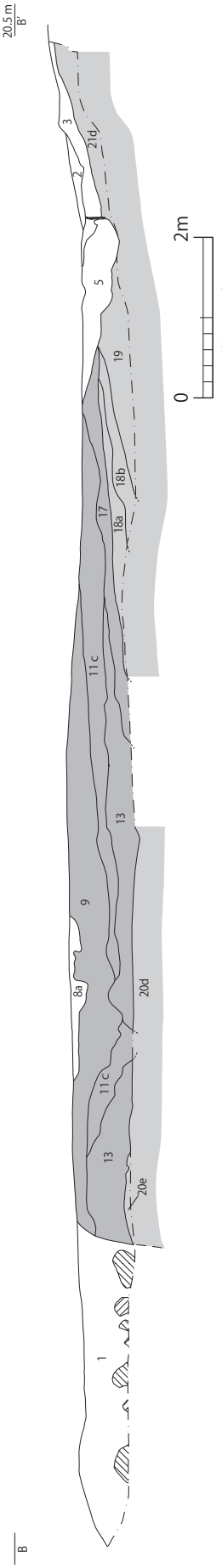


第 94 図　縦断土層断面図 (1/80)

たほか、近代以降の土水路 SD09・10 を確認した。地山は谷地形に堆積した締まりの強い灰色系土砂で、上面で検出したのは浅い溝 SD06 のみであった。特に標高 20 ～ 23 までの間は遺構がまったく存在しておらず、当遺跡における遺構の偏在性が確認された。

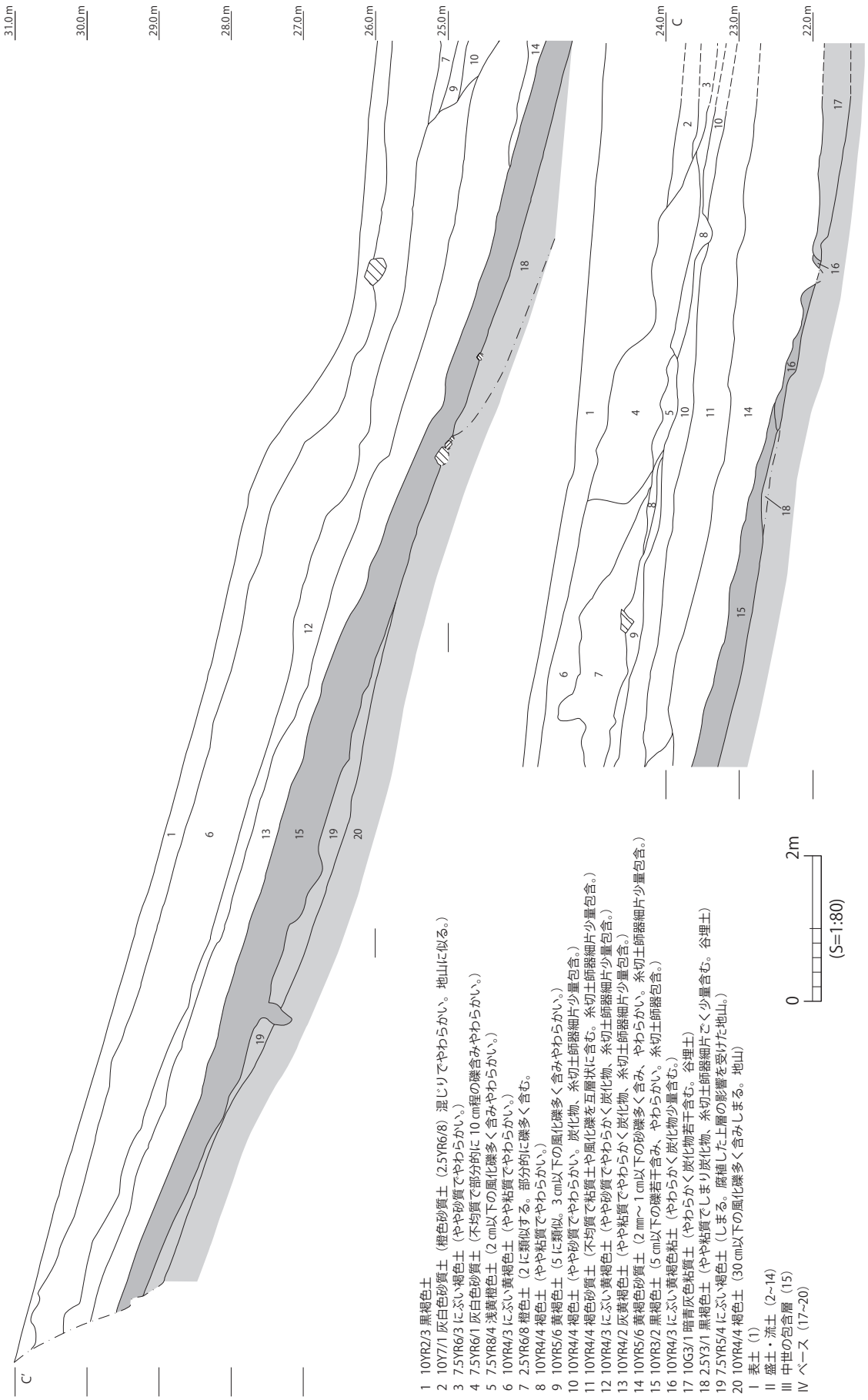
平坦部では黄褐色系粘質土の地山上面で、柱穴と考えられるピットを 400 以上 (平坦面ピット群) と、建物に関連するとみられる溝 SD01 ～ 05 を検出した。出土遺物は大半が中世土師器で、陶磁器が若干量含まれた。中世の集落跡と考えられたが遺構の密度が高く、建物規模や柱配置を現地で確認することはできなかった。このため、建物復元に関しては現地調査終了後に溝の方向と柱穴の規模等から推定して建物を復元した。

調査の完了状況　調査区が谷地形で、周辺地表面から相当深く掘削していたということもあり、調査区内には周囲から水が寄ってくる状況であった。このため平坦部は壁際に側溝・釜場を設け、水を排水しながらの調査となった。側溝掘削により遺構面が地山であることが確認されたため、遺構精査、測量、南壁面実測作業を経て現地調査は完了した。



【縦断・横断土層共通】
1 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質土（50cm 以下の礫含み、やわらかい。撹乱。）
2 N6/ 灰色粘質土（5mm 以下の砂礫、50cm 以下の礫を含む。土水路掘り返し後の埋土。近代以降の遺物包含。）
3 2.5Y6/2 灰黄色粘質土（20cm 以下の礫多く含む。土水路掘り返し後の埋土。近代以降の遺物包含。）
4 5Y6/1 灰色土（やや砂質で 1cm 以下の礫含む。炭化物若干含み、近世以降の陶磁器含む。水田耕作土。）
5 10Y6/1 灰色砂質土（部分的に粘土と砂を互層状に含み、やわらかい。土水路の埋土。）
6 10YR5/3 にぶい黄褐色土（1cm 以下の礫多く含み、わりとしまる。炭化物、糸切土師器包含。）
7 10YR3/1 黒褐色土（3cm 以下の礫多く含み、とてもやわらかい。糸切土師器包含。）
8a 10YR7/6 明黄褐色土（地山に近似。とてもやわらかい。）
8b 10YR7/8 黄橙色土（地山に近似。とてもやわらかい。）
9 10YR4/3 にぶい黄褐色土礫（ほとんど含まずやわらかい。炭化物、糸切土師器多く包含。）
10 5YR3/1 黒褐色土（やや粘質で 1cm 以下の礫若干含み、わりとしまる。炭化物多く含み、糸切土師器包含。）
11a 7.5YR4/1 褐灰色土（やや粘質で 1cm 以下の礫若干含み、わりとしまる。炭化物多く含み、糸切土師器包含。）
11b 10YR5/1 褐灰色土（やや砂質で炭化物多く含む。糸切土師器包含。）
11c 10YR4/1 褐灰色土（1cm 以下の礫多く含み、しまる。炭化物、糸切土師器包含）
12 10YR4/2 灰黄褐色土（やや粘質で 5mm 以下の礫多く含み、わりとしまる。糸切土師器包含。）
13 2.5Y4/1 黄灰色土（礫ほとんど含まずとてもしまる。炭化物、糸切土師器若干含む。）
14 2.5Y5/2 暗灰黄色土（3cm 以下の礫わりと含み、しまる。炭化物・糸切土師器包含。）
15 10YR4/2 灰黄褐色土（2mm~30cm 以下の黄色地山礫ブロックとても多く含み、しまる。糸切土師器包含。流土。）
16 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土（礫ほとんど含まず、かたくしまる。炭化物少量含む。）
17 7.5YR4/1 褐灰色土（1cm 以下の礫若干含み、わりとしまる。炭化物、糸切土師器包含。）
18a 2.5Y6/4 にぶい黄色土（やや粘質でしまる。微細な炭化物若干含む。無遺物、地山に相当。）
18b 2.5Y7/6 明黄褐色土（やや砂質でしまる。無遺物、地山に相当。）
19 2.5Y5/2 暗灰黄色土（5mm 以下の礫若干含み、わりとしまる。炭化物若干含む。）
20a 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（礫ほとんど含まず、かたくしまる。炭化物、土器細片少量包含。）
20b 2.5Y4/1 黄灰色土（1cm 以下の礫若干含み、かたくしまる。炭化物、土器細片少量包含。）
20c 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土（5cm 以下の礫わりと含み、かたくしまる。地山に相当。）
20d N4/ 灰色砂質土（炭化物若干含む。谷堆積土。土器わずかに包含。）
20e 2.5Y5/1 黄灰色土（かたくしまる。地山に相当。）
21a 5Y6/4 オリーブ黄色粘質土（3cm 以下の礫、クサリ礫含み、かたくしまる。）
21b 2.5Y5/6 黄褐色粘質土（5cm 以下の礫、クサリ礫多く含み、かたくしまる。）
21c 2.5Y7/3 浅黄色粘質土（3cm 以下の礫、クサリ礫含み、かたくしまる。）
21d 10YR4/3 にぶい黄褐色土（10cm 以下の黄色地山礫ブロック多く含む。）
21e 10YR4/4 褐色粘質土（2mm~10cm 以下の黄色地山礫ブロックとても多く含み、しまる。）
21f 10YR4/3 にぶい黄褐色土（20e 層に近似。1cm~10cm 以下の黄色礫ブロックとても多く含み、しまる。）
21g 10YR4/4 褐色粘質土（炭化物わずかに含み、しまる。地山に相当。）
II 盛土・流土（6~8）
III 中世の包含層（9~17）
IV 地滑り層・ベース（18~21）

第 95 図　横断土層断面図 (1/80)



第 96 図　南壁土層断面図 (1/80)

第３節　遺構と遺物

１．斜面ピット群 (第 97 図)

(1) ピット列（第 97・98 図）

形態と規模　調査区の北辺、標高 25 ～ 29.5m 付近の比較的急な斜面でピット 150 余りを検出した。ピット群は標高 28 ～ 29m 辺りと、標高 26 ～ 27m 辺りの２群に大きくまとまりが分かれるが、斜面には平坦に加工した形跡がなく、建物に復元できるものはなかった。

ピットは大小さまざまで、掘り方も歪なものが多く、斜めに掘り込まれているものも確認された。このうち、P13 ～ P36-1、P15 ～ P36-2、P17 ～ P41-1、P12 ～ P41-2、P77 ～ P114 は等高線に並行しており、間隔は不規則だが列状に配置されている様子が認められた。また、P41-1 ～ P48-1、P41-2 ～ P48-2 は連続するピット列から直交する配置となっている。

遺構の性格と時期　ピットの分布域は調査区の中で比較的急な斜面にあって平坦面を伴わない点、ピットそのものが建物柱穴とするには粗雑である点から、住居跡とは推定しがたい。直上に神西城主郭と目される南郭群が位置することや、掘り方の共通性から、麓Ⅱ遺跡 1 区のピット群と同様、逆茂木や柵列といった神西城の防御施設と推測される。

(2) 出土遺物 (第 99 図)

直上の包含層 (Ⅲ層) からは中世土師器が若干出土しているが、遺構からは、P123 から出土した遺物が唯一である。土師器甕で、胴部から口縁部にかての破片 1 個体分が出土した。口縁部はくの字に屈曲し、肩が張らず長胴なタイプのもので、古代まで下る可能性がある。

２．建物跡 (第 100 図)

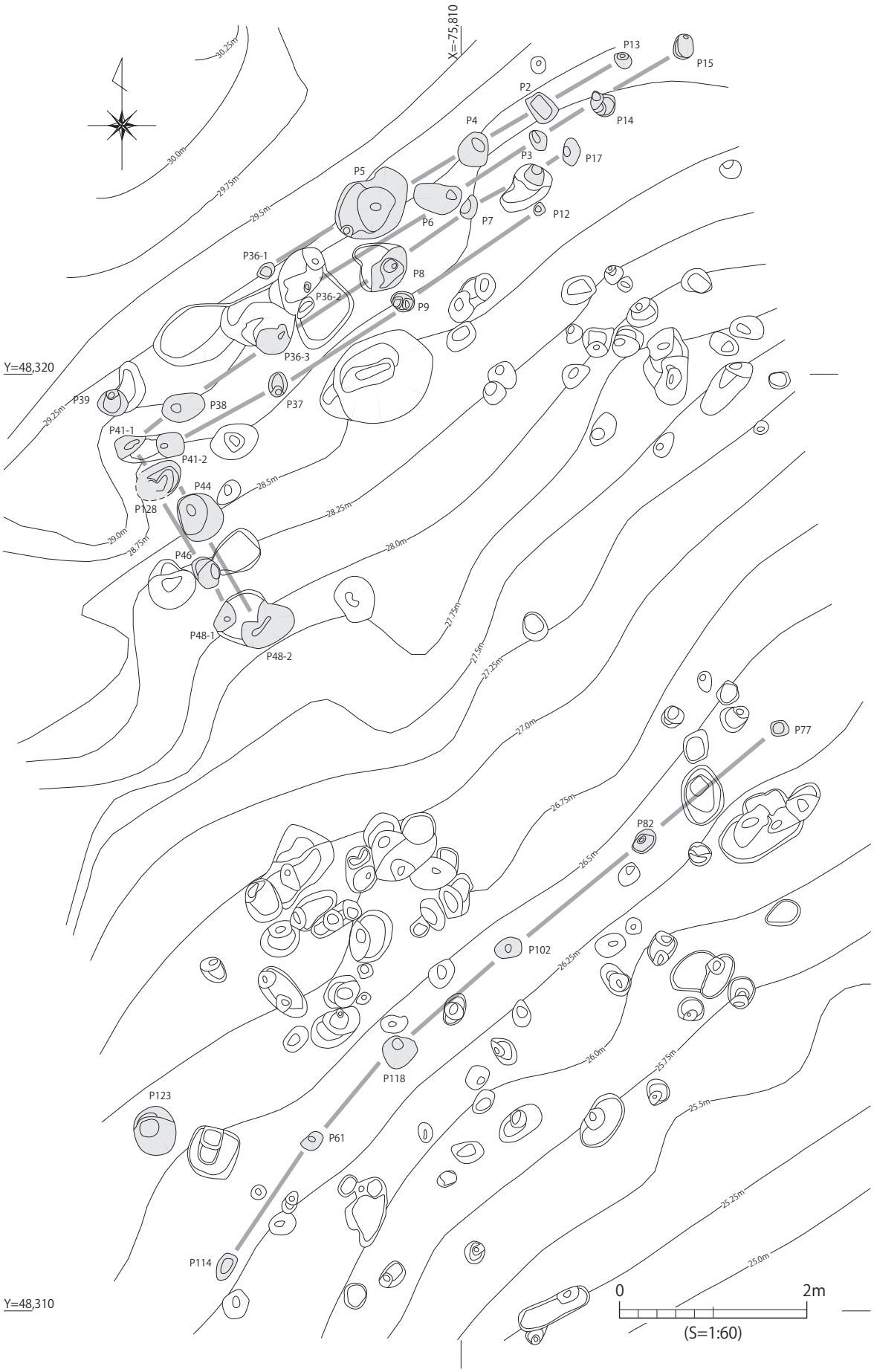
標高 16 ～ 18m の平坦部で掘立柱建物跡を８棟と建物に伴うと考えられる溝跡を確認した。建物は、非常に近接又は重複する位置関係のものもあり、主軸方位を目安に少なくとも 4 段階に分かれると推定される。

(1)SB01・SB05(第 101 図)

SB01　主軸をほぼ南北にもつ、１間× 4 間の建物跡である。建物の東側には、長さ 6.3m、幅 0.4m、深さ 0.1m の溝 SD02 が並行しており、建物に伴う区画溝又は排水用の溝と考えられる。建物規模は梁行 1.3 ～ 1.4m、桁行は 4 m ほどである。桁行きの柱間は、P320-P316 で 1.65m、P316-P265 で 2.4m、P280-P276 で 1.65m、P276-P260 で 2.35m を測る。柱穴は、長径 20 ～ 30㎝、深さ 10 ～ 40㎝とまちまちである。

SB05　SB01 と重複し、主軸をやや西に振る、１× 3 間の建物跡である。建物南側から東側にかけて建物を取り囲むように溝 SD01 が廻っており、SB01 と同様、建物に付属する溝と考えられる。建物規模は、梁行 2.95m、桁行 3.4m である。桁行の柱間は、P306-P299 で 2.35m、P299-P294 で 1m、P294-P430 で 1.1m、P283-P286 で 1.22m を測る。柱穴は、長径 15 ～ 50㎝、深さは 20 ～ 40㎝である。

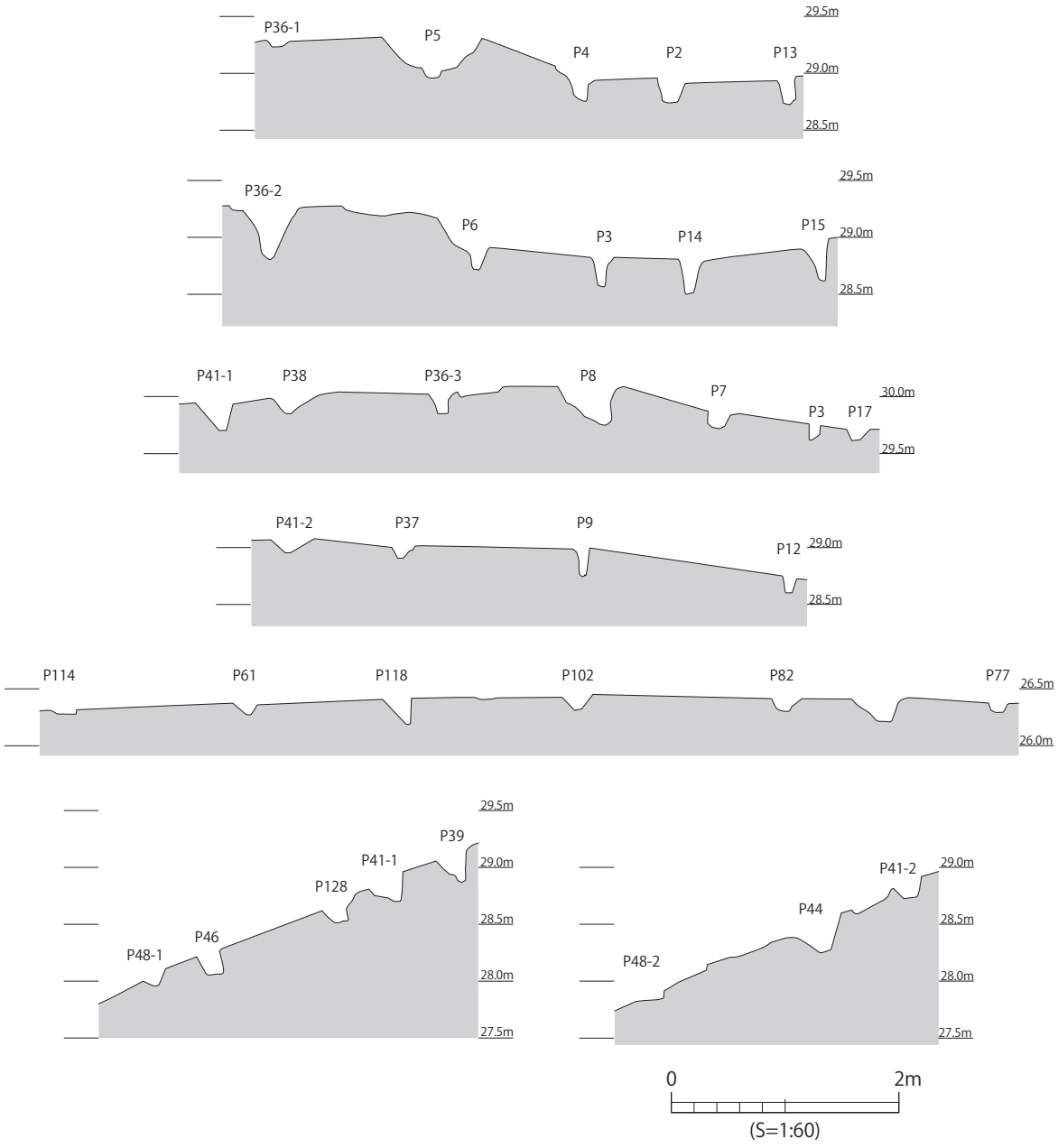
出土遺物 (第 102 図)　建物を構成する柱穴からは時期を判断できる遺物は出土していないが、周辺のピットから遺物が出土している。１は P426、２は P263、３・4 は P287 から出土した土師器坏皿と柱状高台皿である。５は P272 から出土した鉄釘である。土師器は概ね 12 世紀頃のもの



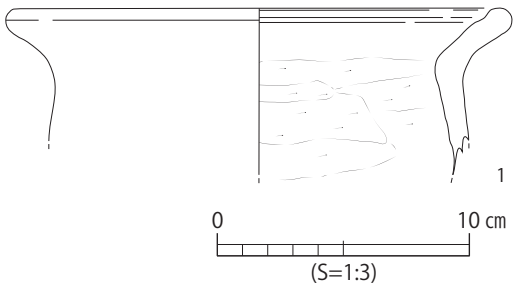
第 97 図　斜面遺構配置図 (1/60)

と考えられる。

遺構の時期　溝の切り合いから、建物の前後関係は SB01 → SB05 と考えられ、時期は、包含層や周辺ピットからの出土遺物の様相から、12 世紀を中心とする中世前半期と推定される。

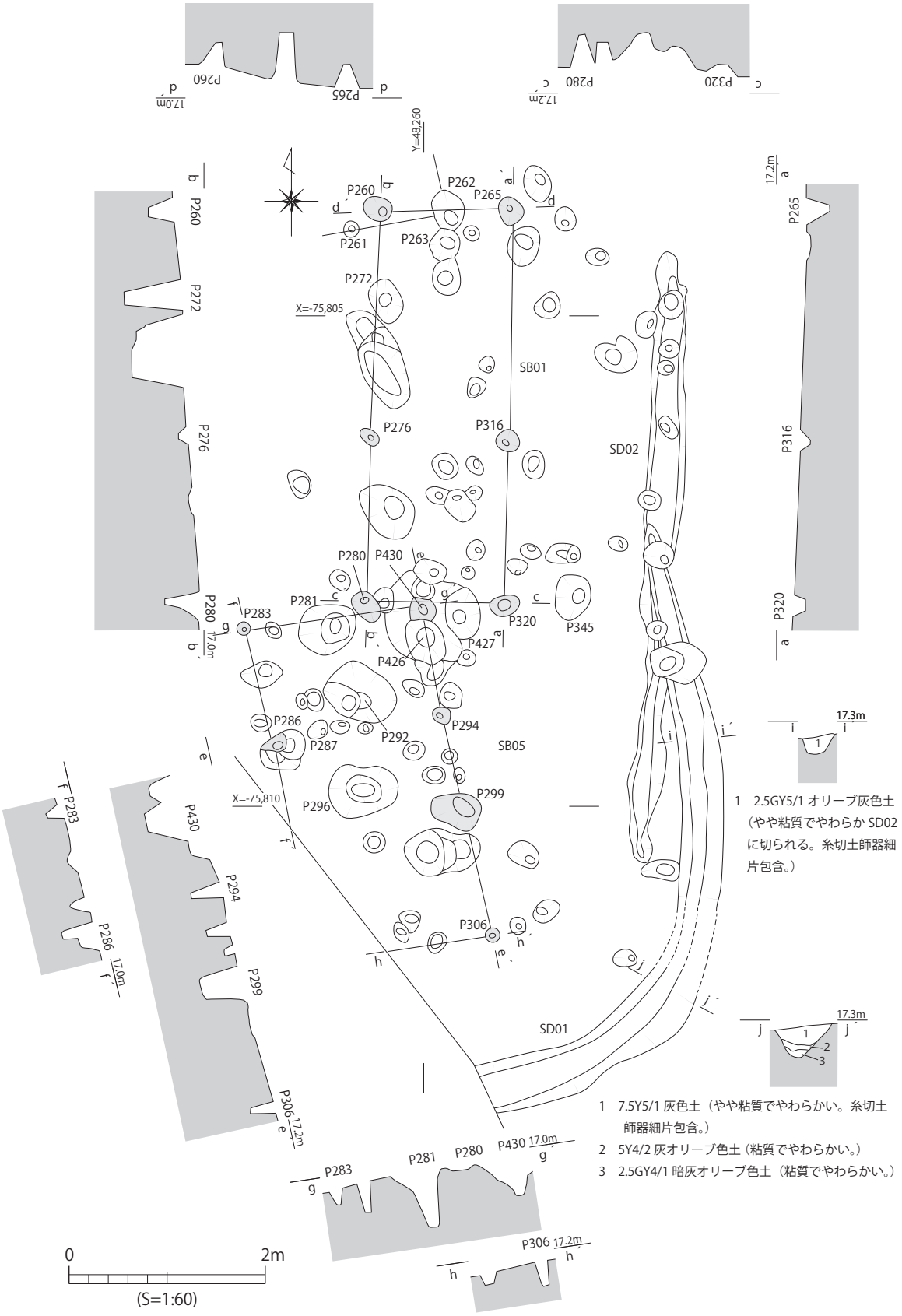


第 98 図　斜面ピット列断面図 (1/60)

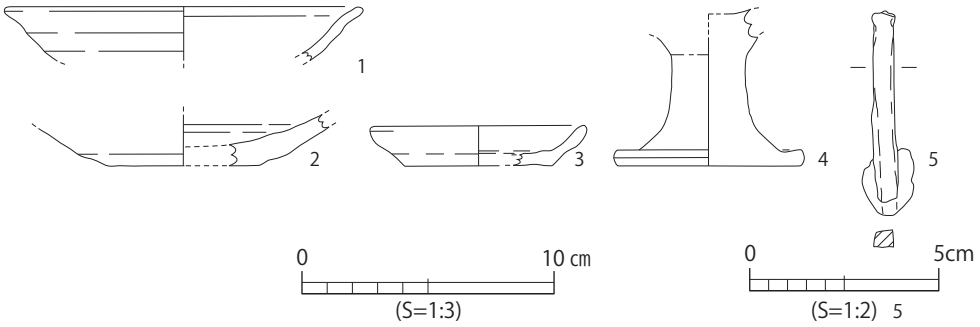


第 99 図　P123 出土土師器実測図 (1/3)

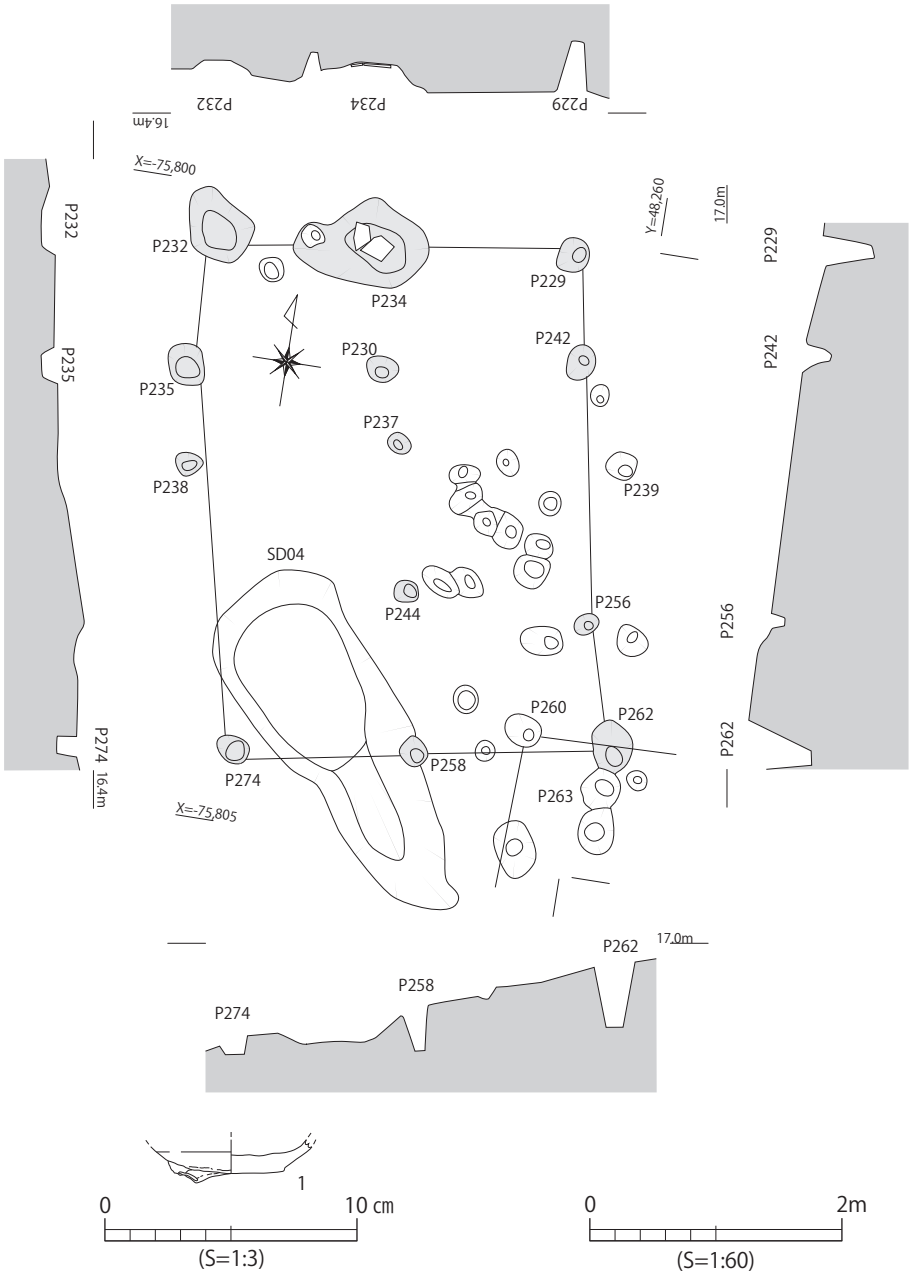
第 100 図　平坦面遺構配置図 (1/100)



第 101 図　SB01・05 実測図 (1/60)



第 102 図　SB01・05 周辺ピット出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第 103 図　SB06、SD04 出土遺物実測図 (1/3・1/60)

(2)SB06(第 103 図)

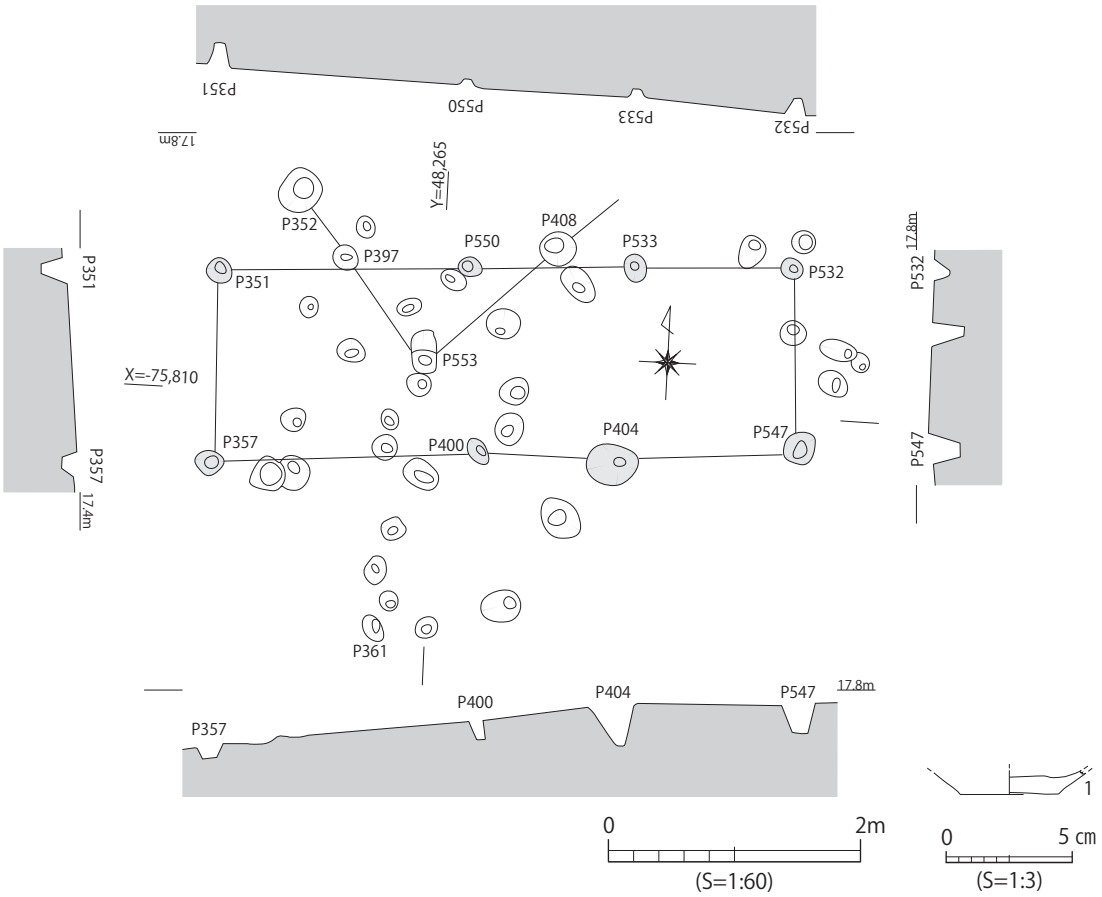
SB01 と重複する位置にあり、SB05 と同じく、主軸をやや西に振る建物跡である。梁行２間、桁行は３間とみられ、桁行の柱間は不規則である。建物規模は、梁行３m、桁行４m である。梁行の柱間は、P274-P258 で 1.5m、P258-P262 で 1.6m、P229-P234 で 1.6m、P234-P232 で 1.3m を測る。桁行の柱間は、P262-P256 で 1.1m、P256-P242 で 2.1m、P242-P229 で 0.85m、P274-P235 で 3.05m、P235-P232 で 1.1 を測る。P230・P237・P244 は棟の通りに位置することから建物を構成する可能性がある。P238 も P237 との位置関係から関連する可能性があるが、東側に対応する柱穴は確認できなかった。柱穴は、長径 20 ～ 70㎝、深さは 10 ～ 50㎝でとまちまちで、最大の掘り方をもつ P234 の底部からは礎板とみられる板石が２枚確認された。

出土遺物（第 103 図）　建物を構成する柱穴からの出土遺物はないが、建物と重複する SD04 から土師器坏が１点出土している。

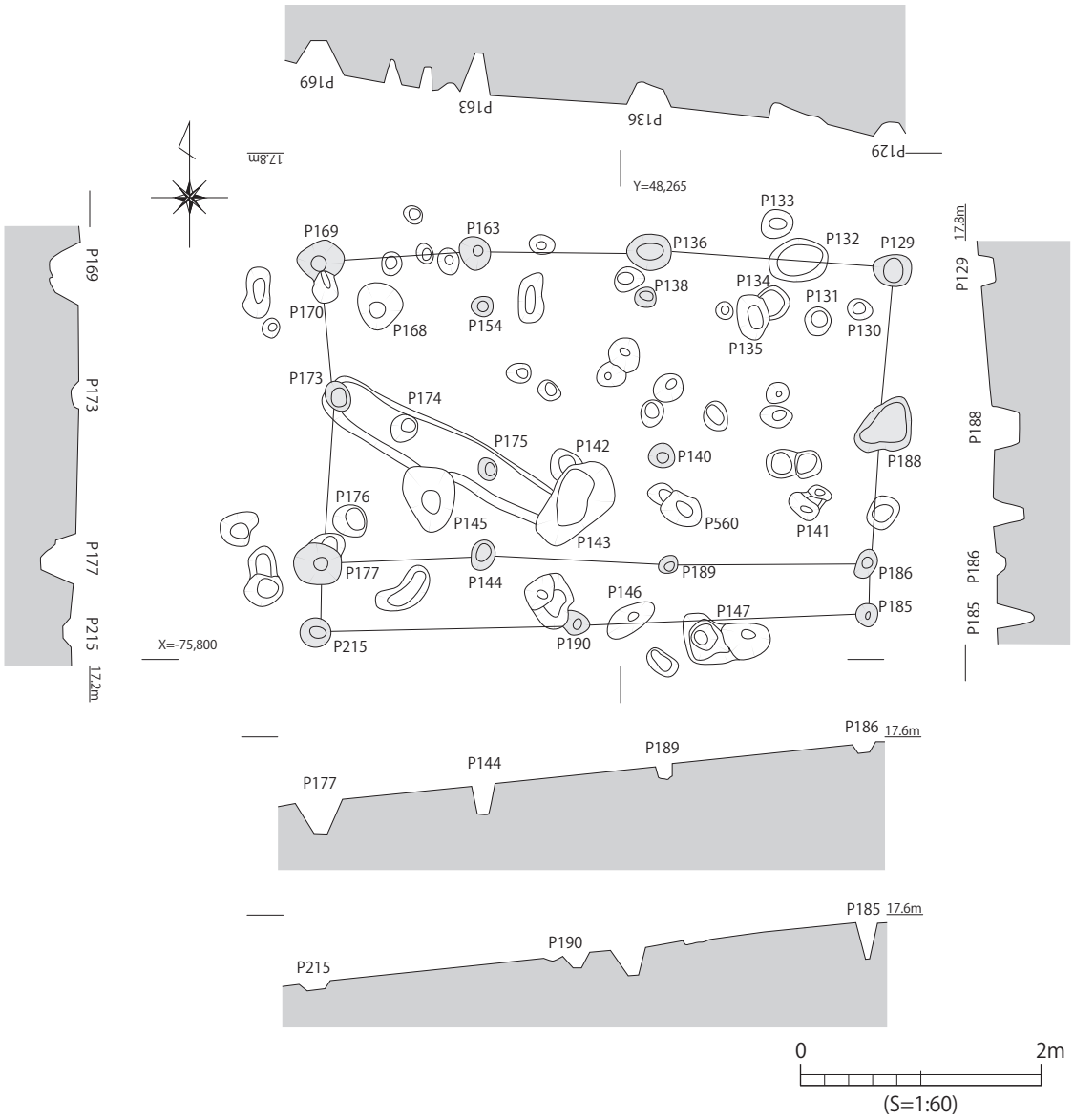
遺構の時期　SB05 との位置関係や、これと主軸を揃えている点などから、SB05 と同時期に存在した可能性が高いと考えられる。

(3)SB03(第 104 図)

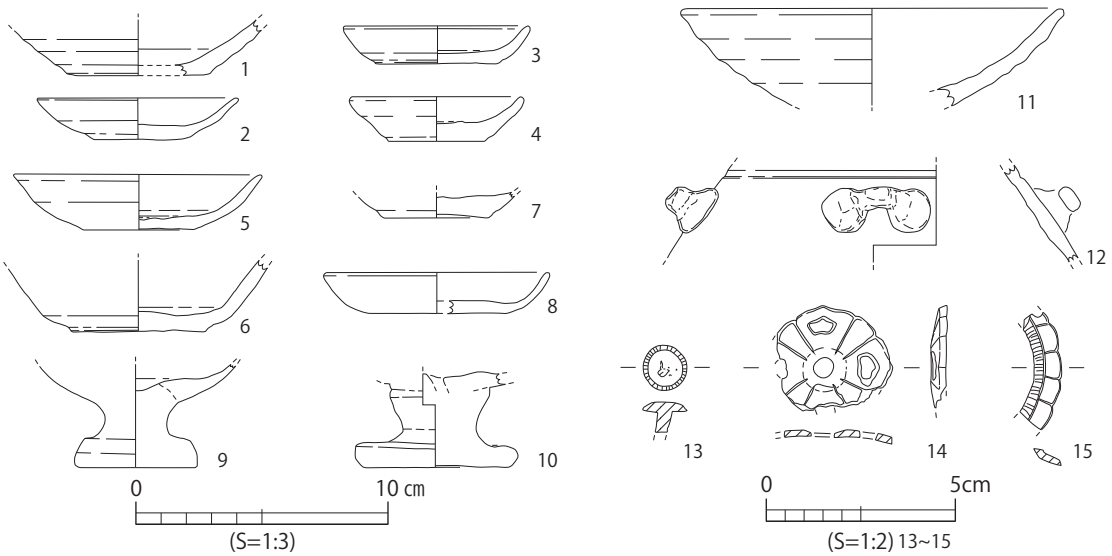
SB05 の東側に位置する、１間×３間の建物跡である。主軸はほぼ東西方向で、SB05 との関連性が考えられる溝 SD01 とは近接した位置関係にある。建物規模は、梁行 1.5m、桁行 4.6m を測る。桁行の柱間は、P357-P400 で 2.15m、P400-P404 で 1.1m、P404-P547 で 1.4m、P351-P550 で２m、P550-P533 で 1.35m、P533-P532 で 13m となっている。柱穴は長径 15 ～ 40㎝、深さ



第 104 図　SB03、周辺ピット出土遺物実測図 (1/3・1/60)



第 105 図　SB02 実測図 (1/60)

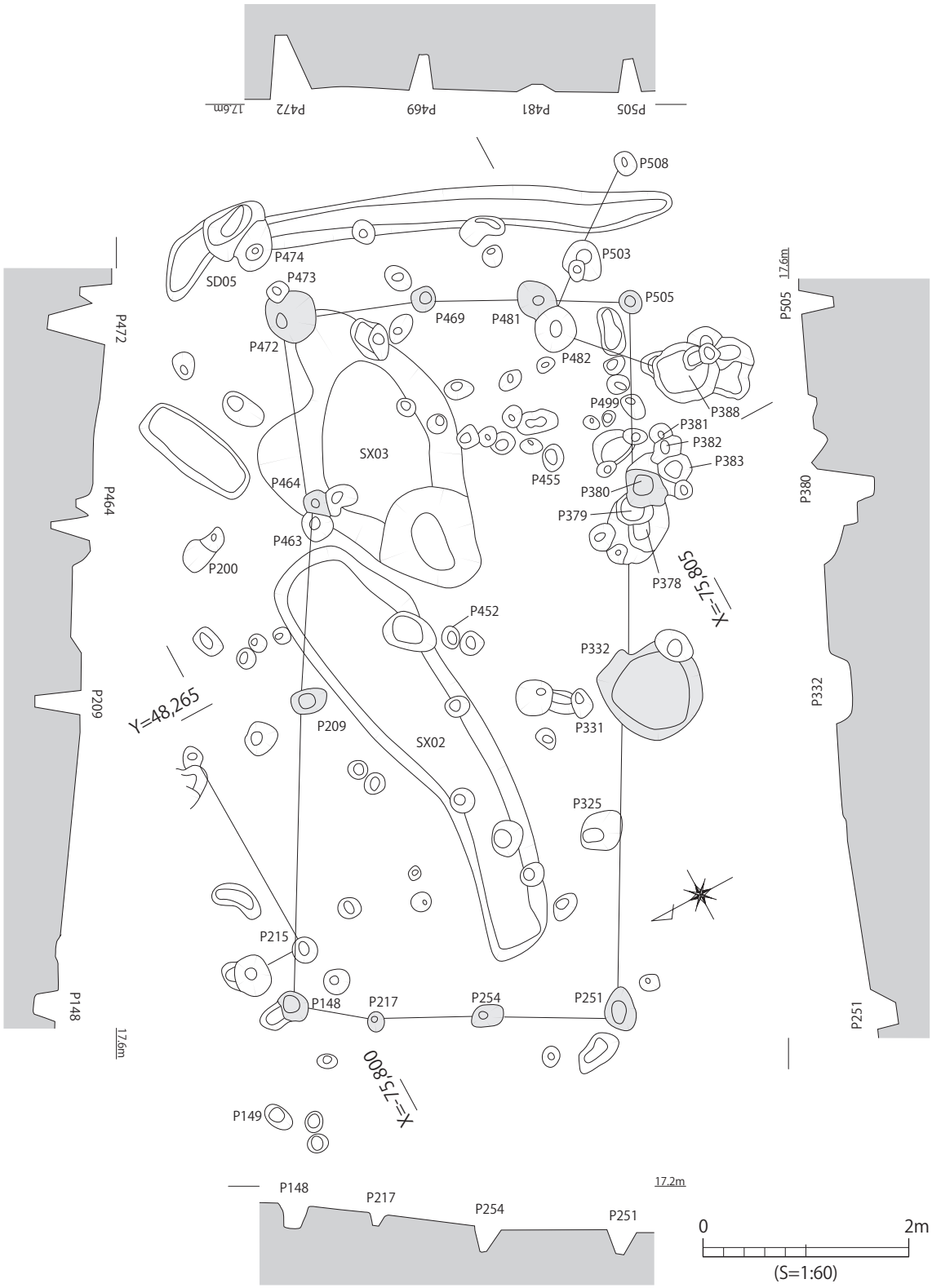


第 106 図　SB02・周辺ピット出土遺物実測図 (1/2・1/3)

は５～ 40㎝ほどである。

出土遺物 (第 104 図)　建物を構成する柱穴からの出土遺物はないが、建物南側の P361 から土師器坏が１点出土している。

遺構の時期　溝 SD01 と近接し過ぎるという位置関係から、SB05 と併存した可能性は低くいと推測される。一方、溝 SD02 との距離は許容範囲といえ、SB01 と同時期である可能性が高い。



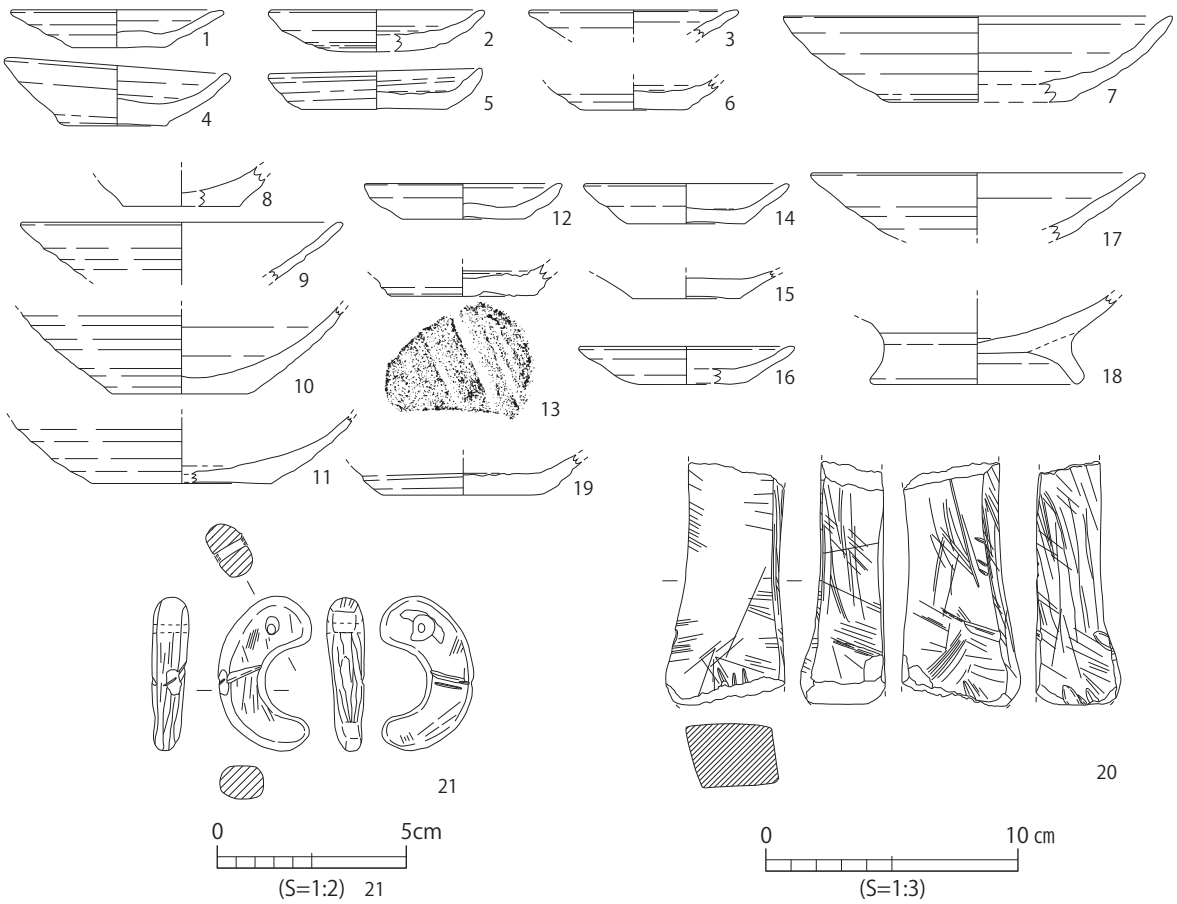
第 107 図　SB07 実測図 (1/60)

(4)SB02（第 105 図）

平坦部北端に位置する 2 間× 3 間の建物跡で、東西に主軸をもつ。南側には庇がとり付くほか、P140・P138・P175・P154 は、それぞれ P189-P136・P144-P163 の筋にあり、SB02 を構成する柱穴である可能性がある。付近にはこのほか多数の柱穴が密集しており、関連のある柱穴や、別の建物が存在した可能性があるが、復元することはできなかった。建物規模は、庇を含めると梁行 3.1m、桁行 4.6m である。梁行の柱間は、P169-P173 で 1.15m、P173-P176 で 1.4m、P186-P188 で 1.1m、P188-P129 で 1.3m である。桁行の柱間は、P177-P144 で 1.35m、P144-P189 で 1.55m、P189-P186 で 1.65m、P169-P163 で 1.33m、P163-P136 で 1.4m、P136-P129 で 2.1m を測る。庇は、P177-P215 で 0.6m、P215-P190 で 2.15m、P190-P185 で 2.45m、P185-P186 で 0.45m である。柱穴は、長径 15 ～ 40㎝、深さ 10 ～ 30㎝程度である。

出土遺物 (第 106 図)　1 ～ 3 ・ 7 は SB02 から出土した土師器の坏皿で、底径に対して口縁が大きく曲線的に開くタイプである。12 は SB02P136 と周辺の P141 から出土した褐釉陶器四耳壷で、接合する。このほか、周辺の柱穴から土師器坏皿 (4 ～ 8 ・ 11)、柱状高台皿 (9 ・ 10) が出土している。P141 からは 11・12 のほか、釘隠し様の銅製飾金具も出土している。金具は、鋲 (13) と四葉の台座 (14) からなり、15 は部位は不明だが一連のものとみられる。

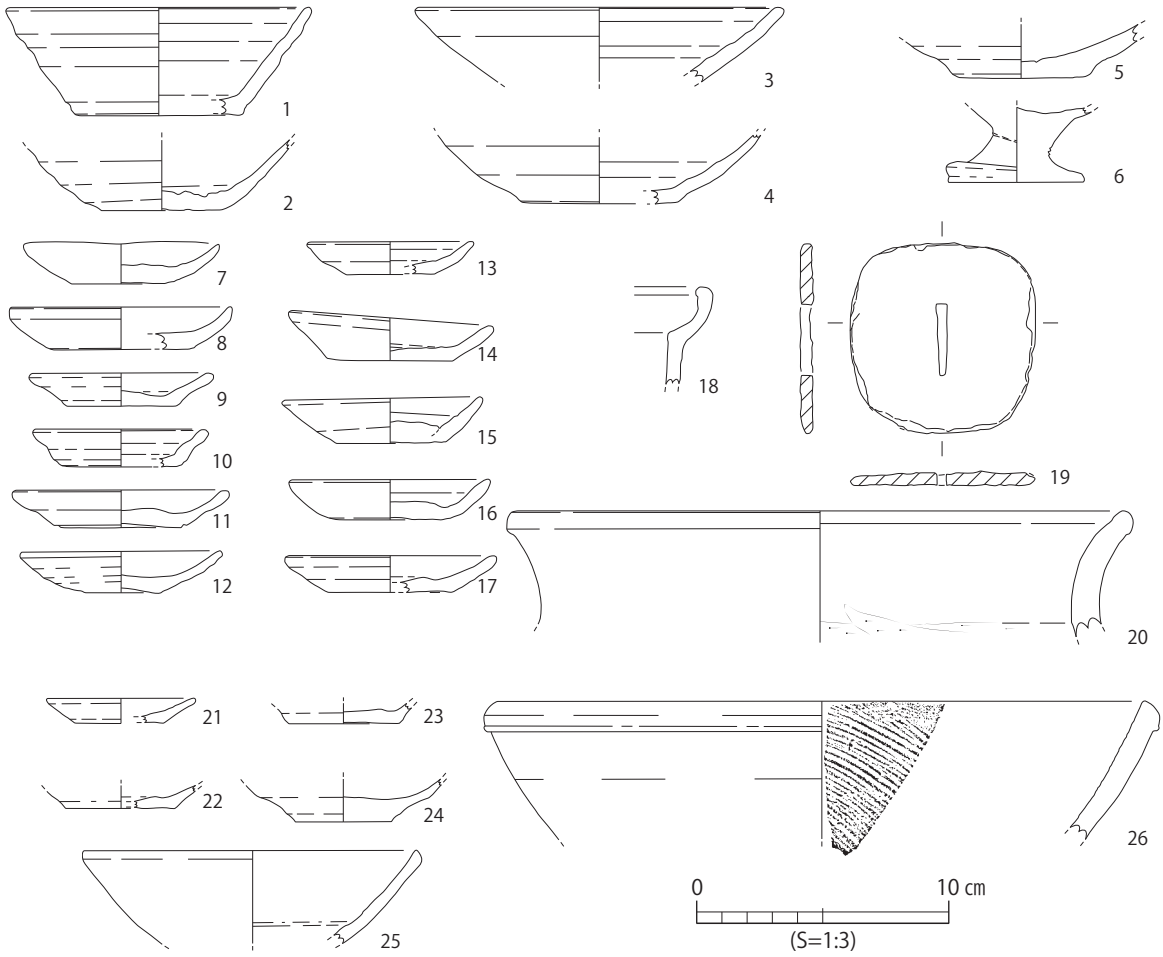
遺構の時期　遺物は概ね 12 世紀頃のもので、直交する主軸方向の SB01 出土遺物の年代とも一致する。SB01・03 と併存した可能性が高いといえる。SB02 は、庇付であることや、褐釉陶器、飾り金具が出土している点で他とは異なる性格を持った建物として注意される。



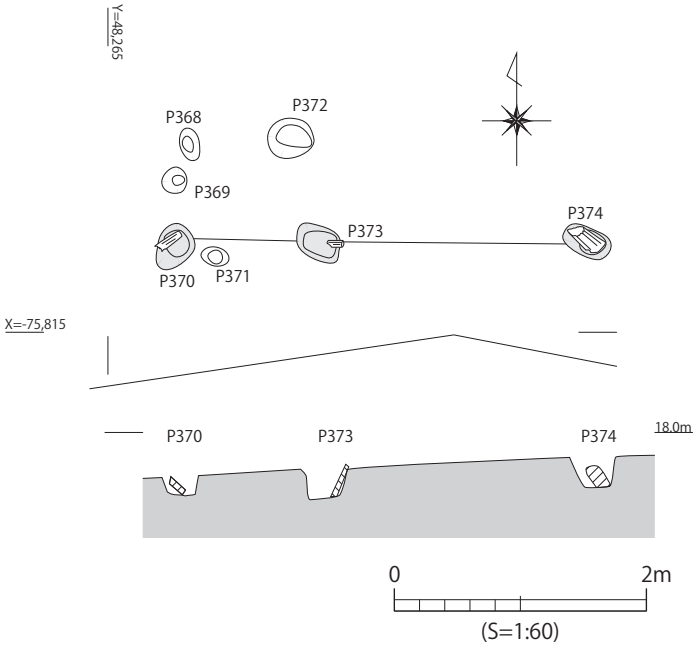
第 108 図　SB07・周辺ピット出土遺物実測図 (1/2・1/3)

(5)SB07・SX02・SX03(第 107 図)

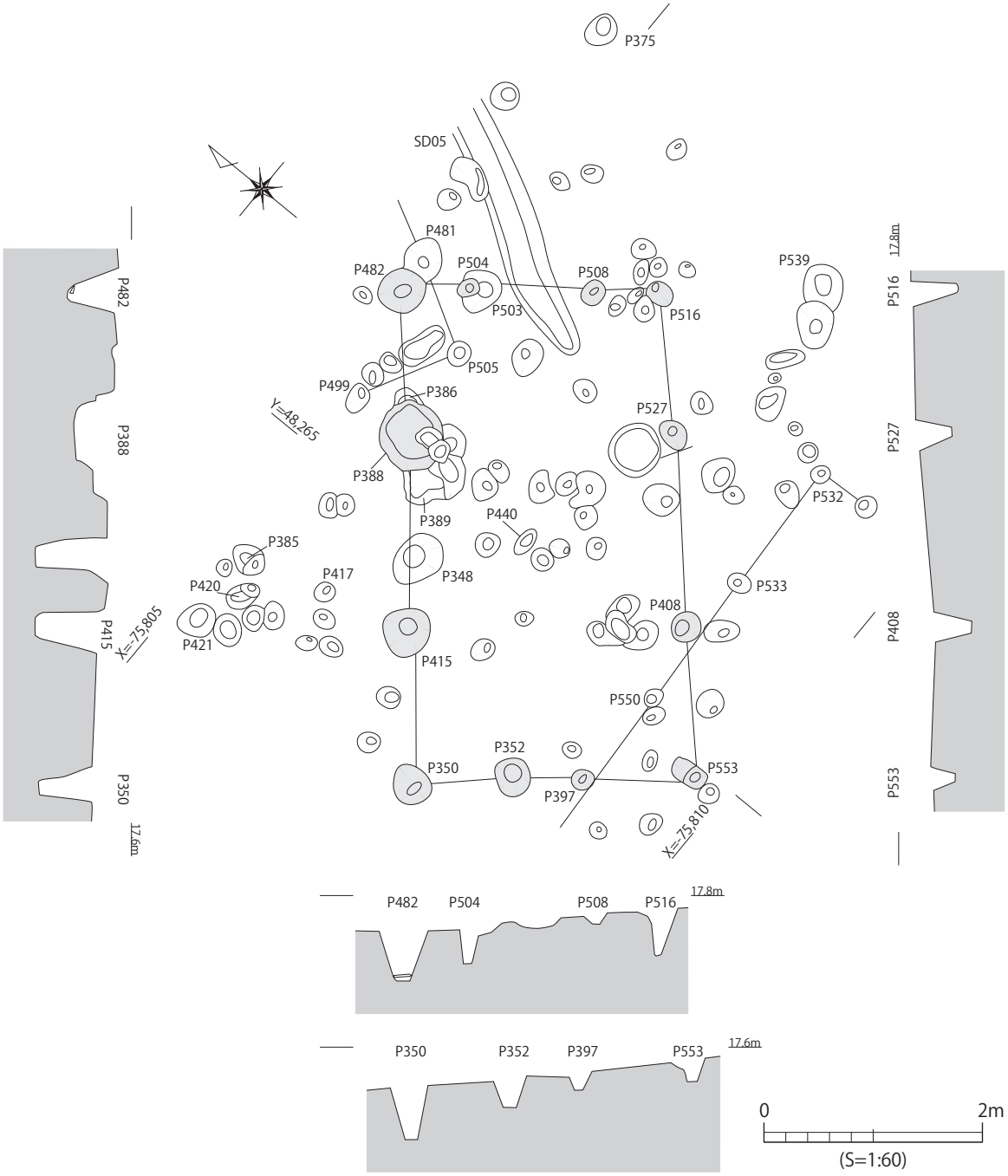
SB02 の南側で重複する位置にある、３間×３間の建物跡である。主軸は他の何れとも異なる。建物の南東側 70㎝のところで、長さ５m、幅 40㎝、深さ 10㎝足らずの浅い溝 SD05 を検出し



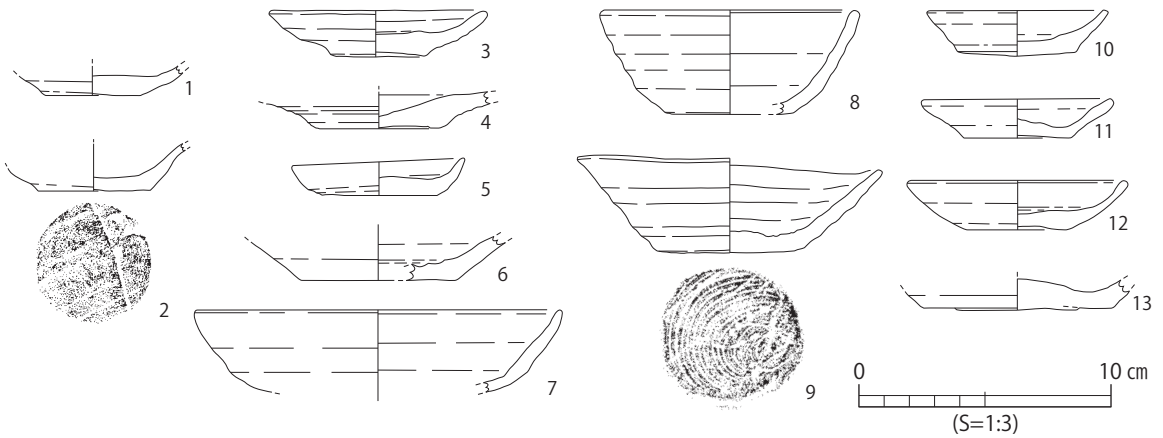
第 109 図　SX02・03 出土遺物実測図 (1/3)



第 110 図　SB04 実測図 (1/60)



第 111 図　SB08 実測図 (1/60)



第 112 図　SB08・周辺ピット出土遺物実測図 (1/3)

た。建物に伴う溝と考えられる。建物規模は梁行 3.2 ～ 3.4m、桁行は 6.7 ～ 7 m ほどである。梁行の柱間は、P148-P217 で 0.8m、P217-P254 で 1.1m、P254-P251 で 1.3m、P473-P469 で 1.4m、P469-P481 で 1.1m、P481-P505 で 0.9m を測る。桁行きの柱間は、P251-P332 で 3.2m、P332-P380 で 2 m、P380-P505 で 1.8m、P148-P209 で 3 m、P209-P464 で 1.95m、P464-PP472 で 1.8m を測る。柱穴は、長径 50 ～ 25㎝、深さ 60 ～ 10㎝である。

SX02・03 は溝状の浅い土器溜りで、内部から比較的にまとまって遺物が出土した。

出土遺物 (第 108・109 図)　建物跡及び周辺のピットから遺物が出土している。 1 ～ 7 は SB07 出土の土師器皿で、大小みられる。P331 から出土した 18 は有高台の坏、20 は P383 から出土した砥石である。土師器は足高高台や内湾気味に大きく開き、器高が低いものなど概ね 11 ～ 12 世紀におさまるものと考えられる。また、P200 からは滑石製の勾玉が 1 点出土している。

109-1 ～ 20 は SX02 出土遺物で、土師器のほか瓦質土器の鍋、鍔が出土している。109-21 ～ 26 は SX03 出土遺物で、土師器、瓦質土器鉢が出土してる。

遺構の時期　建物からは 12 世紀頃の土器が出土しているが、SB02 とは重複していることから、周辺のピットから出土した遺物の様相から見て、SB07 がやや先行すると推定される。

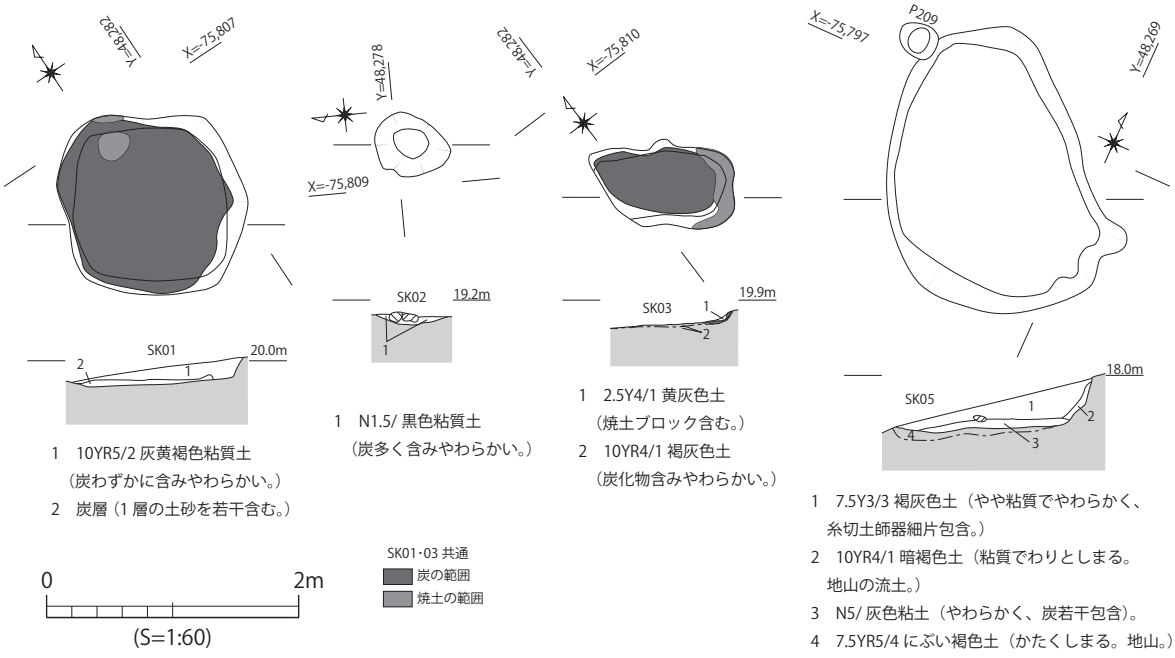
SX02・03 出土遺物はやや新しく、12 ～ 13 世紀頃とみられる。

(6)SB04(第 110 図)

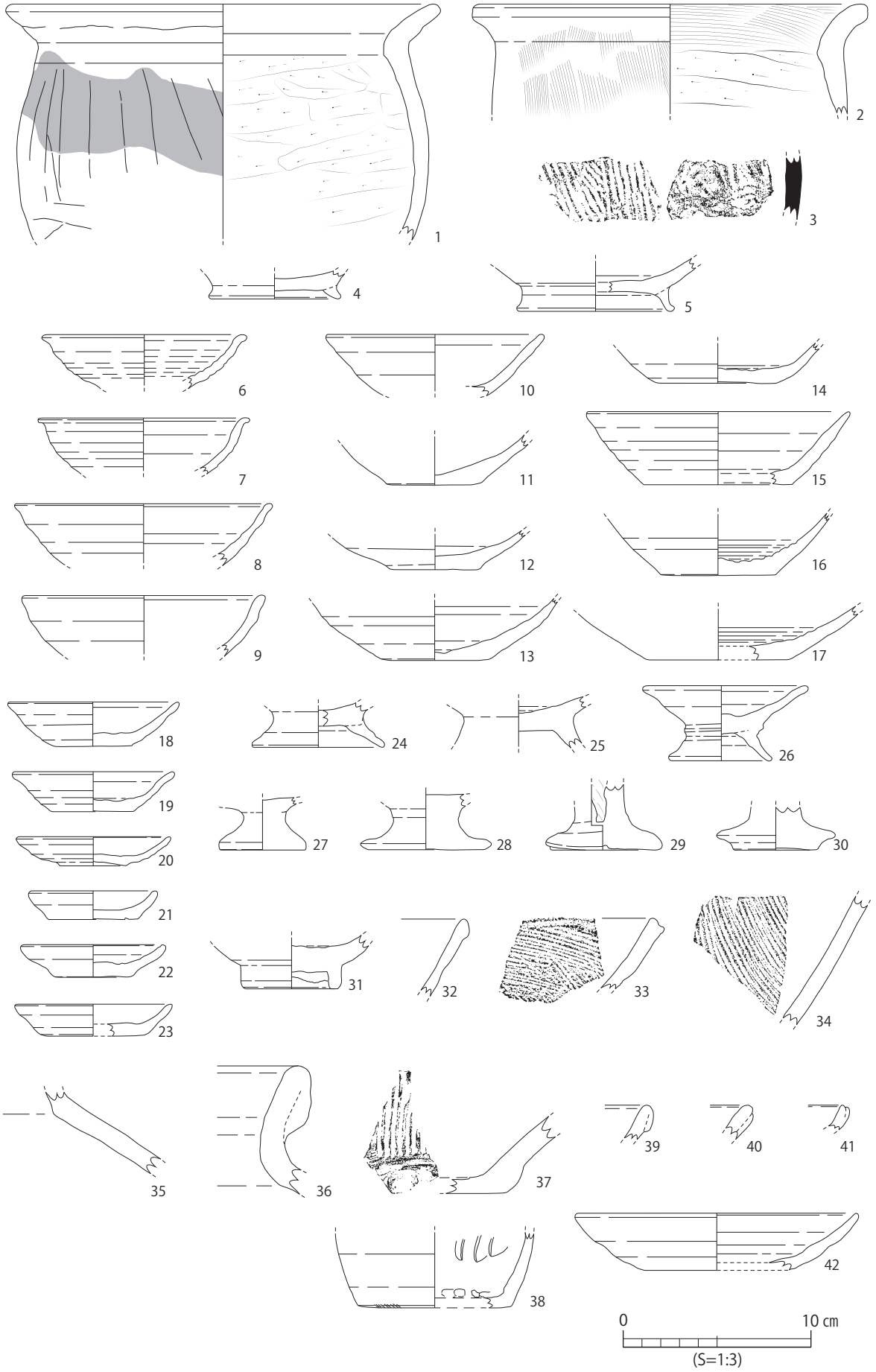
平坦部南端で検出した柱列である。ピット内には木材が残存していた。北側には対応する柱穴がなく、南側は調査区外になるため全容は不明と言わざるを得ない。南側は遺構の密度が疎らとなり、試掘確認調査でも調査区外では遺構は確認されていないことから、集落を区画する柵列の可能性もある。規模は、P370-P373 で 1.3m、P373-P374 で 2.2m である。柱穴は長径 40㎝、深さ 20㎝である。

(7)SB08(第 111 図)

SB07・03 と重複する位置にある 3 間 3 間の建物跡である。主軸は北東－南西方向である。規模は梁行が 2.6m と 2.3m、桁行 4.6m で、柱間にはばらつきがある。柱穴は長径 20 ～ 50㎝、深さは 10 ～ 60㎝とまちまちである。



第 113 図　SK01 ～ 03・05 実測図 (1/60)



第 114 図　Ⅲ層出土遺物実測図 1 (1/3)

出土遺物 (第 112 図)　建物跡出土は１・２の土師器のみで、３～ 13 は周辺のピットから出土した土師器の坏皿である。周辺出土土器は概ね 13 ～ 14 世紀頃を中心とする時期のものと考えられる。

遺構の時期　出土している土器の様相や建物の重複関係から、SB03 → SB07 → SB08 の前後関係が推定される。

３．土坑 (第 113 図)

SK01　包含層中で検出した小炭窯である。平面隅丸方形で、一辺 140㎝、深さ 15㎝を測る。掘り方内部炭層が薄く堆積し、焼土が部分的に認められた。

SK02　包含層中で検出した、平面不整円形の土坑である。長径 60㎝、深さ 10㎝で、炉壁・鉄滓が出土した。掘り方自体は被熱しておらず性格は不明である。

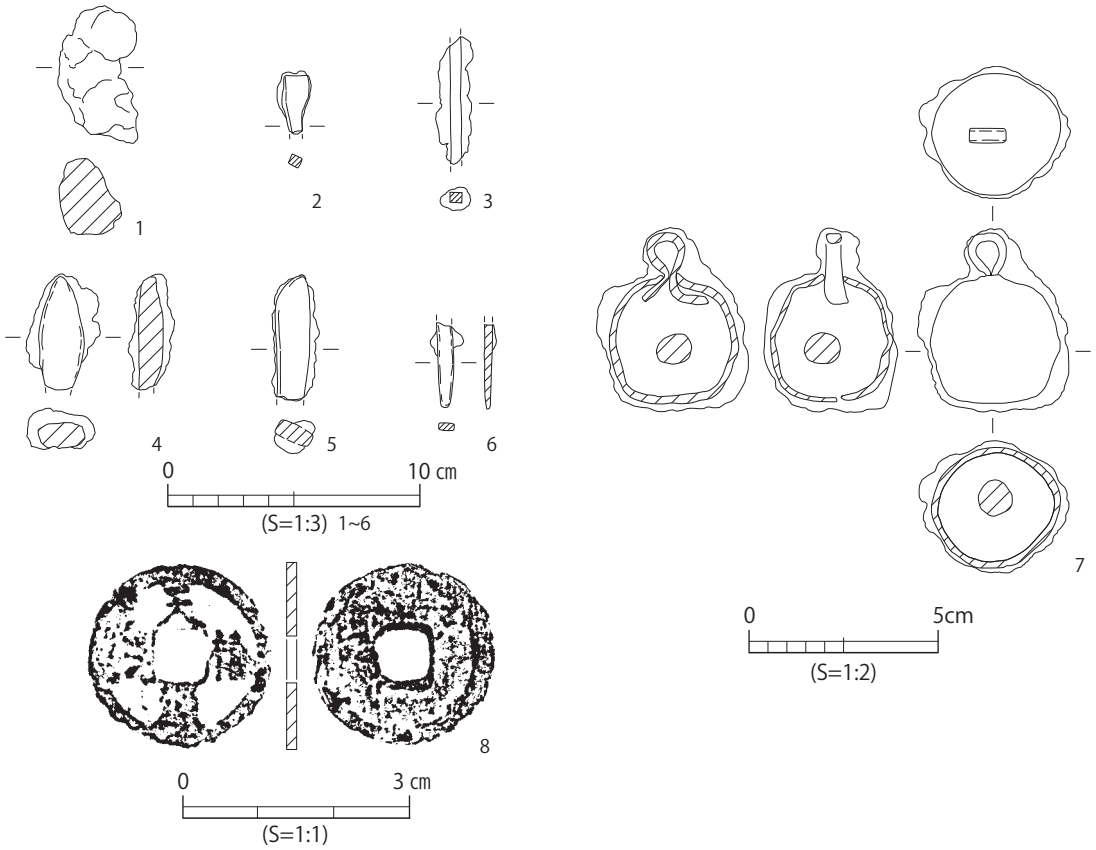
SK03　包含層中で検出した、平面隅丸長方形の土坑である。長辺 120㎝、短辺 70㎝、深さは 10㎝弱である。掘り方の小口がよく被熱し、炭化物を多く含む土砂が堆積する。鉄滓等は出土しておらず、小炭窯と考えられる。

SK04　地山上面で検出した長楕円形の土坑で、長径 2.2m、短径 1.6m、深さは 40㎝を測る。

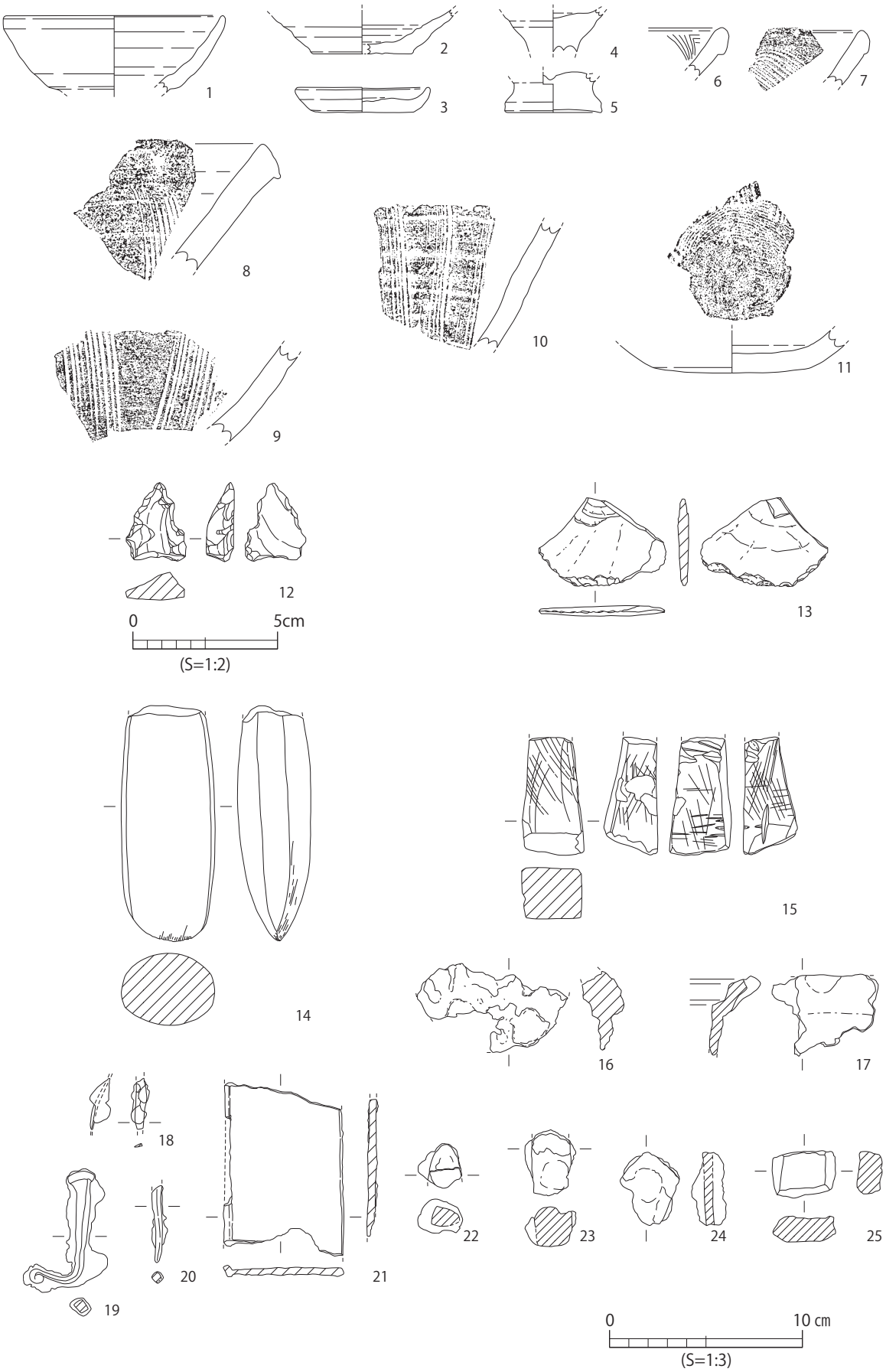
４．遺構外出土遺物 (第 114 ～ 116 図)

Ⅲ層からは須恵器・土師器・瓦質土器・陶磁器が出土している。中世土師器は足高高台坏皿や柱状高台皿など 10 ～ 12 世紀にかけてのものが主体的である。一方、陶磁器は白磁Ⅳ類、龍泉窯系青磁、備前焼など 12 世紀～ 15 世紀頃まで幅が見られる。土器以外では、7 の鉄鈴や 8 の天禧通宝がある。

Ⅰ・Ⅱ層からは 12・13 世紀頃の土師器 (1 ～ 5)、瓦質土器 (7)、在地系陶器 (6・10・11)、備前焼きのほか、椀形滓 (16)、鉄鍋 (17)、釘 (19・20)、不明鉄器 (21 ～ 25) などが出土している。



第 115 図　Ⅲ層出土遺物実測図２(1/1・1/2・1/3)



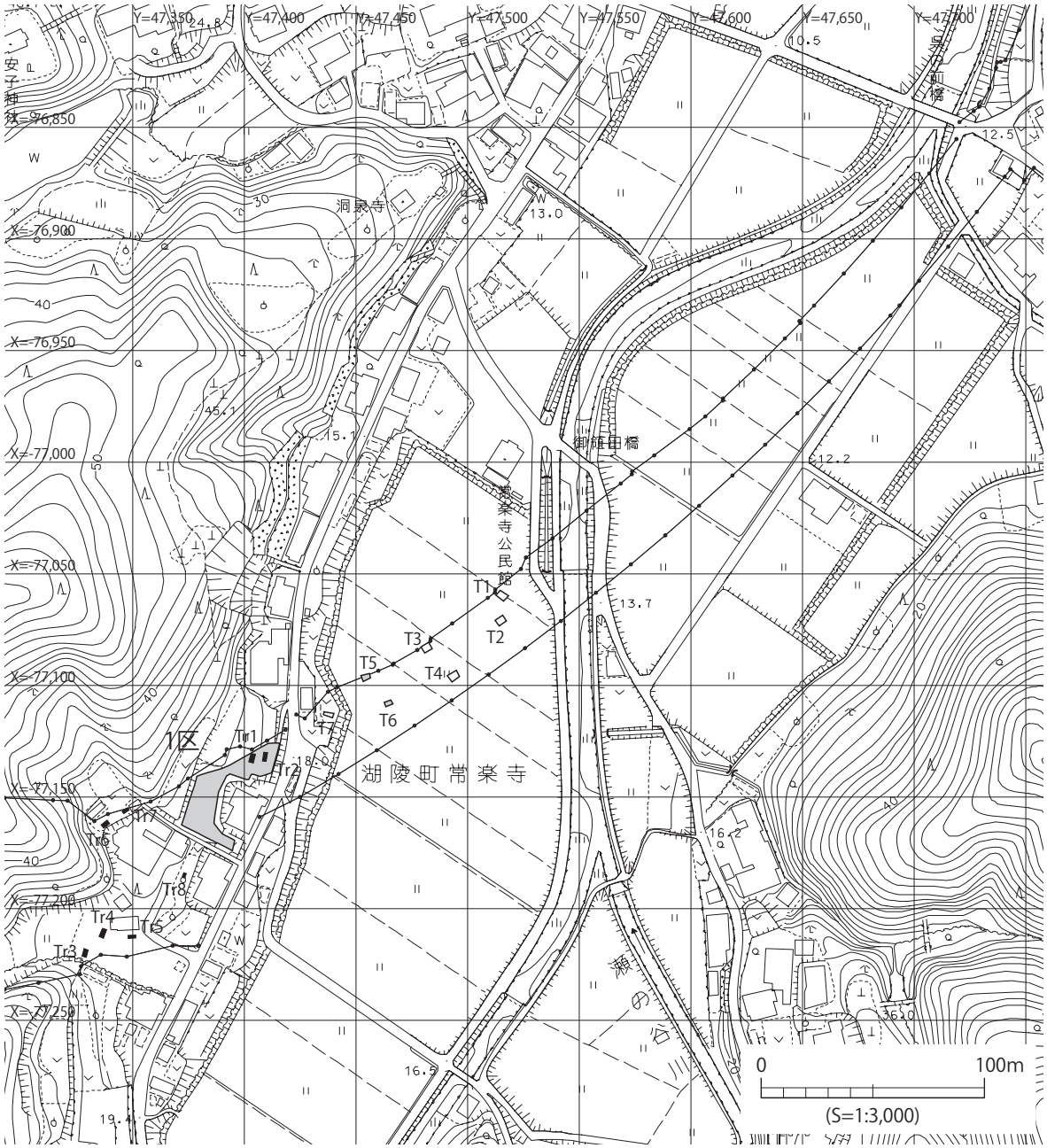
第 116 図　Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図 1 (1/2・1/3)

第 5 章　京田遺跡の調査成果

第 1 節　調査の方法

1．発掘調査区とグリッドの設定 (第 117・118 図)

調査対象地は、常楽寺川左岸丘陵東斜面の橋台・盛土工事予定地で、調査面積は 640㎡である。事前に行った試掘確認調査結果に基づき調査区を設定した。調査にあたり、世界測地系の第Ⅲ座標系に基づき座標軸を合わせた 5 m四方のグリッドを設定した。X=-77,120、Y=47,370 を原点とし、南に向けてアルファベット順、東に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は各交点の北西隅をもってグリッド名称とし、遺構等に伴わない遺物はこのグリッドで取り上げ等



第 117 図　調査区配置と周辺地形 (1/3,000)

を行った。家屋移転前であったため、廃土置場を用地内に確保することが難しく、調査区北側斜面を借地して廃土置場とした。

２．表土・包含層掘削と遺構の検出

表土・造成土掘削は、バックフォーを用いた。バケットには平爪を装着して、漉き取るように掘削を行った。丘陵部の試掘確認調査は北側斜面しか行っていなかったため、西側平坦部はやや厚めに造成土を残した。重機掘削の後は、グリッド及び土層観察用のベルトを設定し、スコップ・鋤簾を用いた人力によって造成土の二次掘削を行った。調査区南側については、段状の地形に改変されており、重機を使用することができなかったことから、すべて人力により掘削作業を行った。

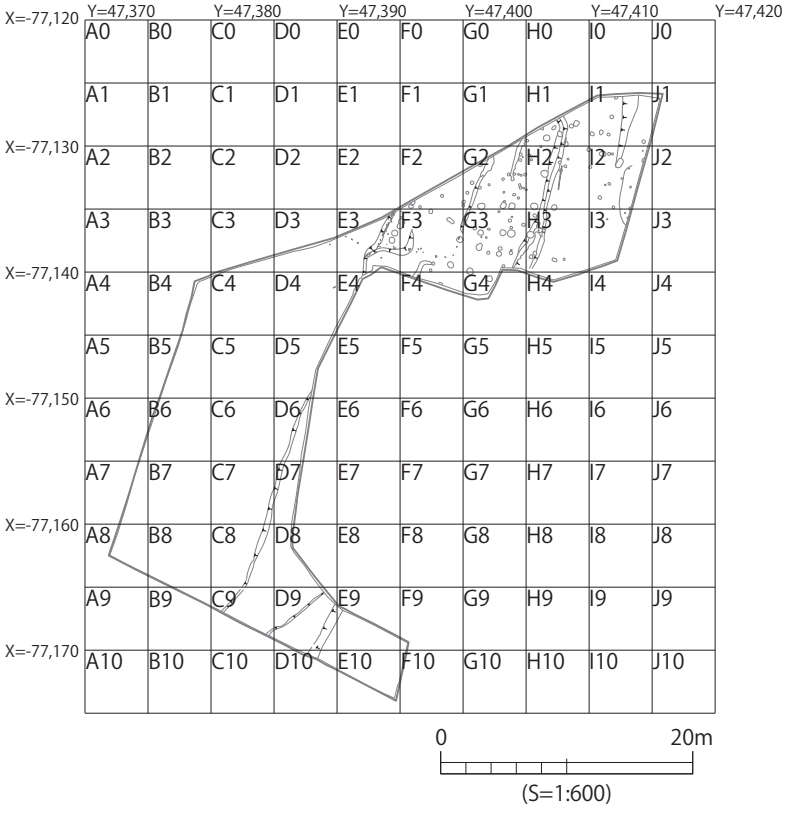
遺構検出作業は草削りや鋤簾を用いて行った。

３．遺構掘削

遺構掘削等の精査には草削り・移植ゴテなどを使用した。掘削に際しては、基本的に土層観察用のベルトを設定するか、半裁し、堆積状況の写真撮影後に必要に応じて土層断面図を作成、埋土完掘と完掘状況の写真撮影を実施するという手順をとった。

４．記録の作成

遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは６×７判フィルム (モノクロネガ･カラーポジフィルム) による撮影を行い、それ以外は 35㎜フィルムカメラ (モノクロネガ) 及びデジタルカメラで撮影した。



第 118 図　調査区割図 1 (1/600)

５．整理等作業

出土した遺物は分類作業を行った上で遺跡の総体が把握できるよう重量を記録した。遺物の実測は、全体量があまり多くなかったため、実測に耐えうるものは極力図化し、掲載することとした。

本書の編集にあたっては DTP 方式を採用し、Adobe 社の Illustrator CS5、Photoshop CS5 を用いてトレース・画像処理等を行い、InDesign CS5 で編集を行った。

第２節　調査区の概略と層序

１．試掘確認調査 (第 117 図)

試掘確認調査は、平成 27 年５月に丘陵部を、同年 11 月に水田部を対象に実施した。丘陵緩斜面８か所 (Tr1 ～ 8)、水田部７か所 (T1 ～ 7) の計 15 か所のトレンチを設定し、丘陵部は人力掘削によって、水田部は重機を用いて調査を行った。その結果、先行して実施した丘陵部については、斜面上方の T1 で表土・耕作土下 20㎝で鉄滓や羽口片を含む２層、須恵器甕辺や土師器を含む３層を確認し、地山上面でピット・溝を検出している。Tr1 下方の Tr2 では包含層２層とピットを検出した。Tr1・Tr2 において遺構・遺物が確認されたことから、遺跡の拡がりが推定される東斜面を１区として、当該年度に本発掘調査を実施することとなった。水田部については、遺構は確認されなかったものの、T5・T6 で縄文時代後期の土器が数多く出土したことから、橋脚工事予定地について、平成 28 年度に本発掘調査を実施することとなった (３区)。丘陵から水田にかけては遺跡が拡がることが明らかとなり、１区と３区の間の丘陵縁辺部は２区として今後発掘調査を実施する計画となっている。

２．発掘調査の概略

遺跡は、神西湖の南方、常楽寺川左岸の谷底平野から丘陵裾一帯に広がる。発掘調査対象となった１区は、試掘確認調査に基づいて設定された標高 20 ～ 30m 付近の丘陵東斜面 640㎡である。調査地の現況は、住宅地造成によって C 字状に地形改変され、住宅を取り囲むように、耕作地として利用されていた。斜面は住宅地の北側が最も旧地形を残し、西側及び南側は大きく削平された様子であった。

層序 (第 120 ～ 121 図)　土層の堆積状況は、各グリッドの壁面を観察しながら、最終的には調査区北壁、調査区中央ベルト、調査区南壁で確認・記録を行った。

基本層序は、Ⅰ表土・耕作土・造成土 - Ⅱ暗褐色系土砂 (包含層)- Ⅲ褐色系砂質土・粘土 (地山) と続く。丘陵部の試掘確認調査で検出した包含層２・３層は、それぞれ本発掘調査のⅠ・Ⅱ層に対応する。

調査区には平坦面が造り出されており、地山を削平して、その土砂を客土することで数次に亘って平坦面を拡張している様子が確認できた。Ⅰ層はこの平坦面造成の際の盛土及びその後の耕作土等である。Ⅰ層からは土器はほとんど出土していないが、鉄滓や炉壁片がコンテナ３箱分程度出土している。

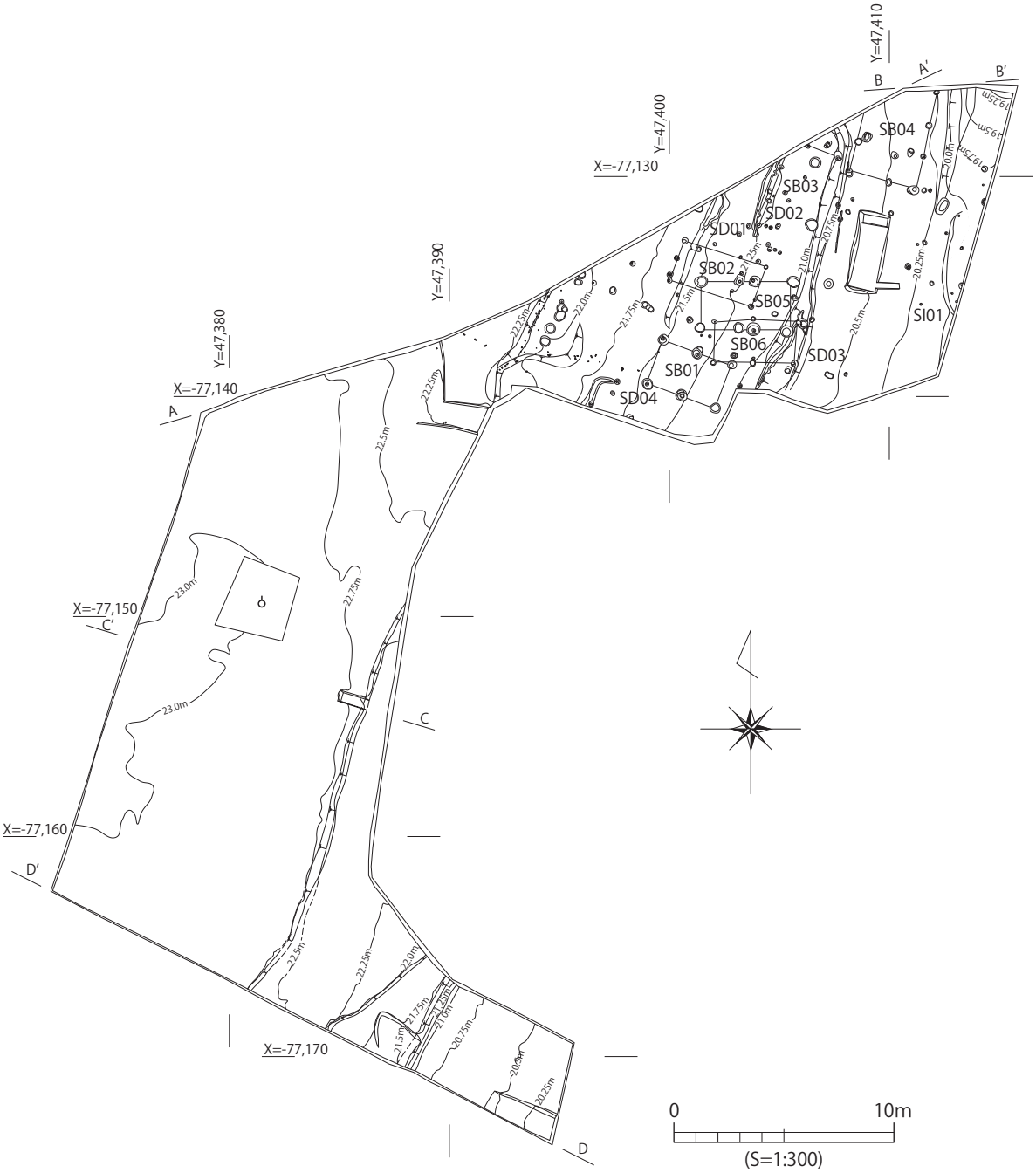
Ⅱ層は、グリッド４ラインより南側は大規模な削平を受けているために残存しておらず、調査区北側においてもごく一部に、最大で層厚６㎝程度しか堆積していない状況であった。出土遺物は土師器・須恵器が少量出土しており、地山上面で検出した遺構の埋土と類似する。

Ⅲ層は地山で、地点によって土質は異なるが、基本的には堅固な粘質土に風化礫や砂礫が混在するこの地域の丘陵地に通有のものである。

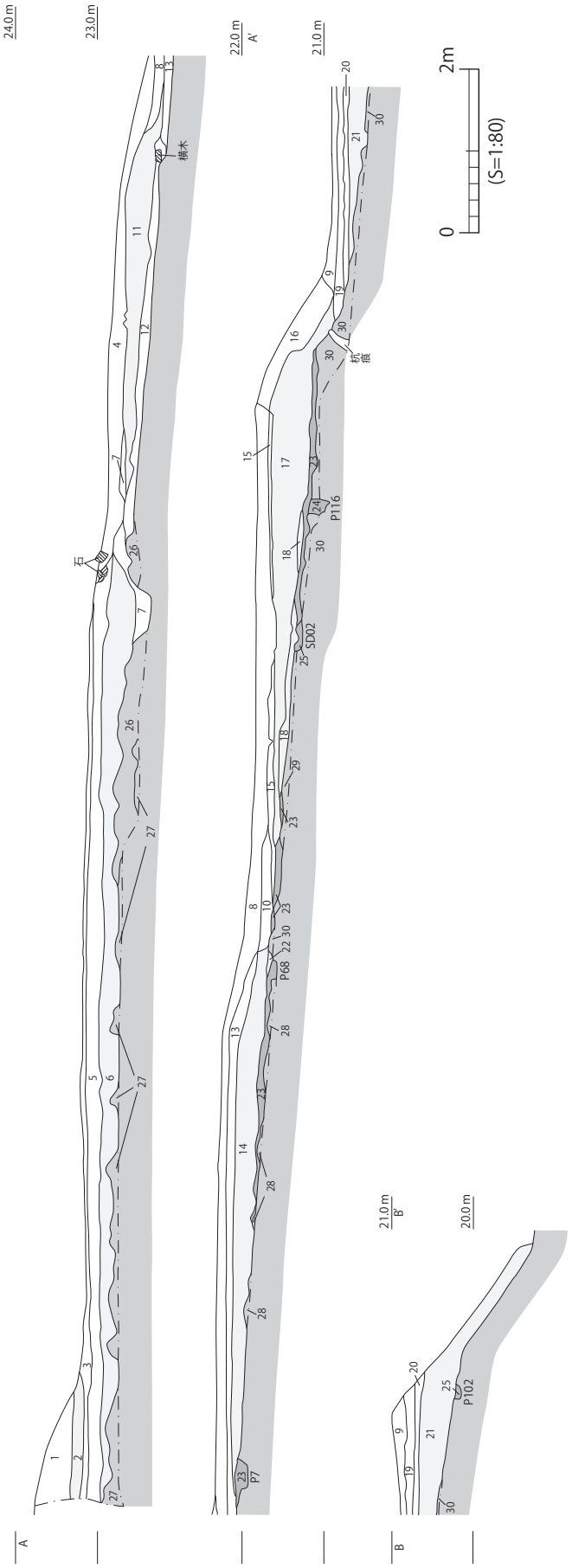
発掘作業と検出遺構 (第 119・123 図)　重機による表土掘削は、調査区中央部の広い平坦部から開始し、次いで北側を行った。調査区の南側は段差が大きいため重機は用いず、人力掘削を行った。重機掘削が終了したところで、グリッド設定とベルトコンベアーの配置を行い、土層観察用ベルト

を残しつつ盛土の残りと包含層掘削を行った。調査区中央部の平坦部及び南側は、削平により遺存状態が悪く、遺構はごくわずかであろうことは当初から明らかであったが、結果、遺構を検出することはできなかった。斜面北側では盛土下に広範囲に包含層が堆積しているものと推定していたが、G・H グリッドの一部に堆積しているに過ぎなかった。盛土・包含層を除去し、地山上面で精査したところ、竪穴建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 6 棟、溝跡を 4 条を確認した。遺構の分布状況から、集落跡は谷に面した東側斜面に広範に存在したものと推測される。

調査の完了状況　狭小な遺構以外は、すべて半裁後に写真・図面等の記録作成を行って完掘した。また、航空写真撮影を終えた後に地形測量を実施し、北壁・南壁の土層断面実測並びに遺構の平面測量を経て現地調査を完了した。調査完了後は、搬出した排土で埋め戻しを行い、すべての作業を終了した。

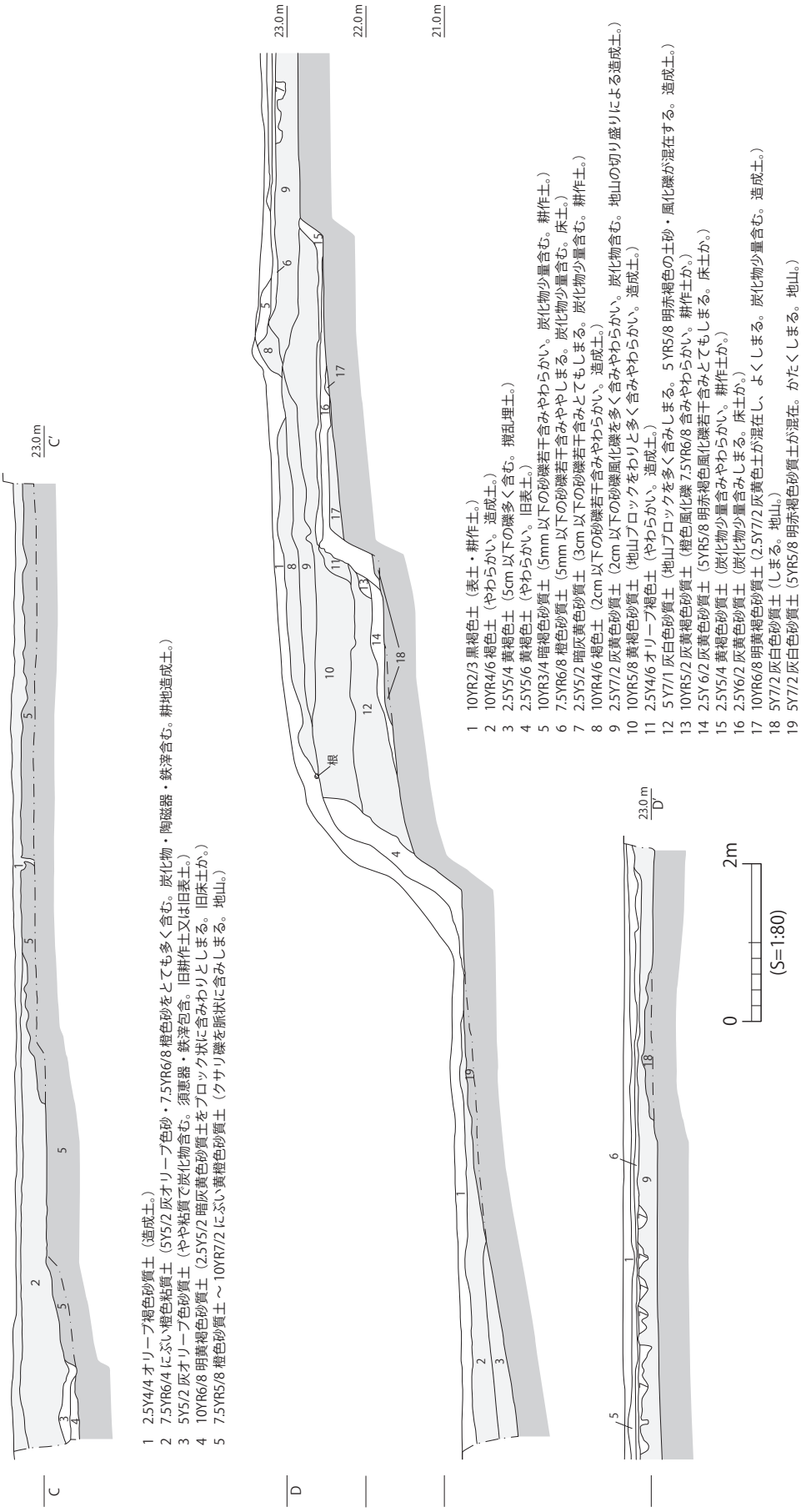


第 119 図　1 区遺構配置図 (1/300)



1　10YR4/6 褐色土（やや砂質でやわらかい。表土。耕作土。）
2　2.5Y6/2 灰黄色砂質土（中粒～粗粒砂多く含み、やや粘質でやわらかい。地山の切り盛りによる造成土。）
3　10YR2/2 黒褐色土（表土。一部旧表土。）
4　10YR3/2 黒褐色土（表土。耕作土。）
5　2.5Y5/2 暗灰黄色土（粗粒砂若干含みやわらかい。耕作土。）
6　2.5Y6/2 灰黄色砂質土（5YR5/8 明赤褐色土が多く混在。炭化物・鉄滓を多く含む。造成土。）
7　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（5YR5/8 明赤褐色土を斑状に多く含む。耕作土。）
8　10YR3/3 暗褐色土（やや砂質でやわらかい。表土・耕作土。）
9　10YR3/3 暗褐色土（やわらかい。表土。耕作土。）
10　2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土（やわらかい。耕作土。）
11　2.5Y6/2 灰黄色砂質土（5YR5/8 明赤褐色のカナケを斑状に含みやわらかい。炭化物・鉄滓を多く含む。造成土。）
12　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（5YR5/8 明赤褐色のカナケを斑状に含みしまりある。炭化物含む。耕作土か。）
13　7.5YR6/8 橙色砂質土（炭化物若干含みややしまる。床土。）
14　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（7.5YR6/8 橙色のカナケを斑状に含む。やや粘性が強くやわらかい。炭化物・鉄滓・土器包含。造成土。）
15　15　7.5YR6/8（橙色砂質土炭化物少量含みかたくしまる。床土。）
16　16　暗灰黄色砂質土 2.5Y5/2　やわらかい。畦畔及びその流土。）
17　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（7.5YR6/8 橙色のカナケを多く含みやわらかい。炭化物・鉄滓わりと多く包含。造成土）
18　10YR4/6 褐色砂質土（5mm 以下の風化礫を含み、やや粘質でわりとしまる。炭化物・鉄滓若干包含。造成土。）
19　2.5Y4/2 暗灰黄色土（7.5YR6/8 橙色のカナケをわずかに含みやわらかい。耕作土。）
20　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（7.5YR6/8 橙色のカナケをとても多く含む。やや粘質でわりとしまる。床土。）
21　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土（7.5YR5/8 明褐色土が多く混在しわりとしまる。炭化物・鉄滓包含。造成土。）
22　7.5YR5/8 明褐色土（やや粘質でやわらかい。造成土又は地山流土。）
23　10YR3/4 暗褐色土（5mm 以下の風化礫を含みわりとしまる。炭化物を多く含み遺物包含。ピット 68 覆土と同じ。）
24　10YR3/4 暗褐色土（23 層に近似。やや暗く風化礫を含まない。ピット 116 覆土。）
25　2.5Y3/2 黒褐色土（2cm 以下の風化礫を含みわりとしまる。炭化物多く含み、土器小片包含。SD02・ピット覆土。）
26　2.5Y7/2 灰黄色粘土（粘土ブロックを若干含みとてもしまる。）
27　2.5Y7/2 灰黄色砂質土（やや粘質で 3cm 以下の風化礫多く含む。）
28　7.5YR6/6 橙色土（風化礫多く含みしまる。）
29　10YR4/6 褐色土（やや粘質でしまる。）
30　7.5YR5/8 明褐色土（やや粘質でしまる。）
Ⅰ　表土・耕作土、造成土（1~22）
Ⅱ　包含層（23）
Ⅲ　地山（26~30）

第 120 図　北壁土層断面図 (1/80)



第 121 図　中央ベルト・南壁土層断面図 (1/80)

第 122 図　北側遺構配置図 (1/100)

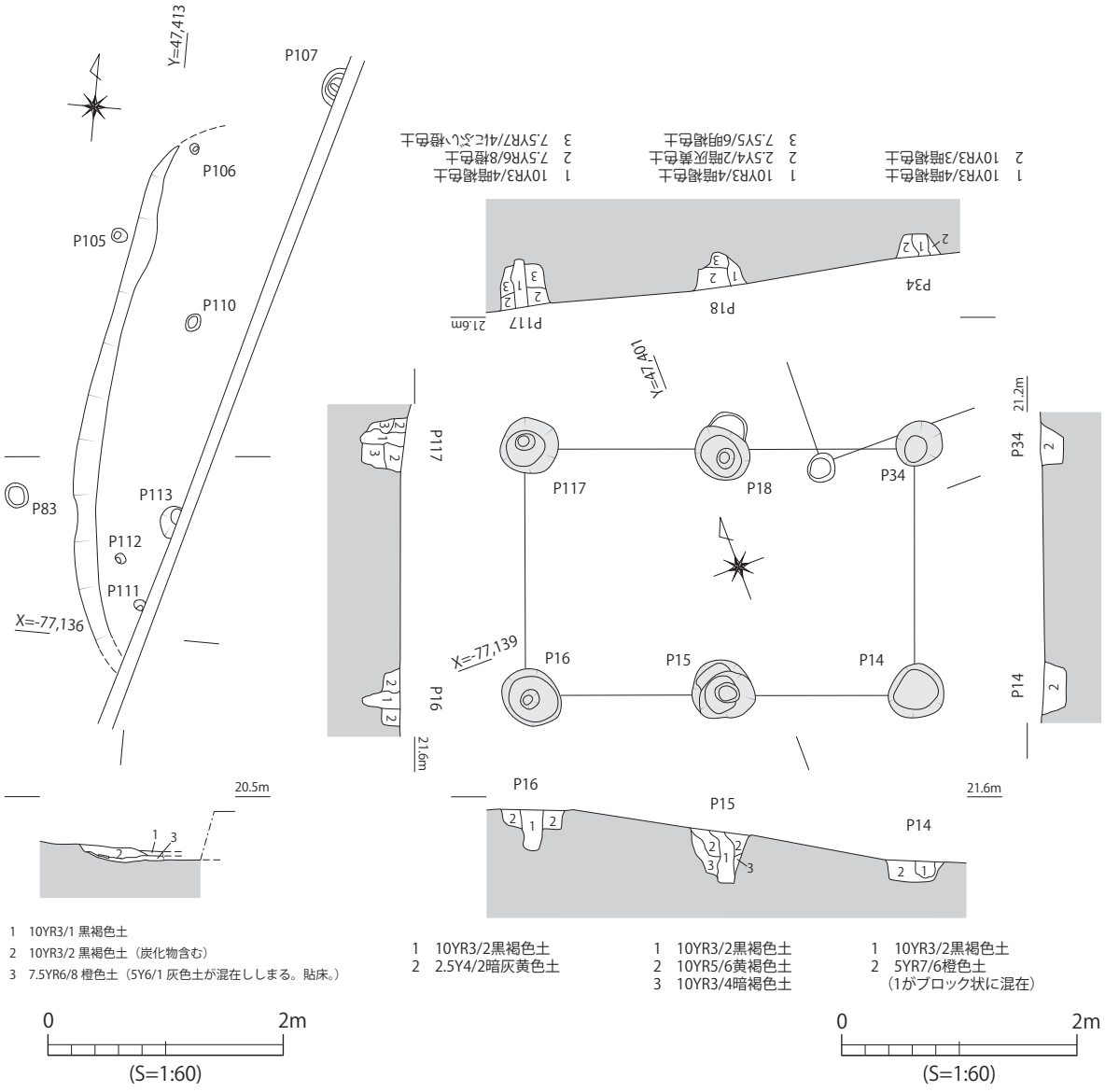
第３節　遺構と遺物

１．建物跡

(1)SI01（第 122・123 図）

形態と規模　調査区の北東端で検出した浅い竪穴建物跡である。東側は、調査区外において道路建設によって既に失われており、全容は分からないが、平面形態は隅丸方形乃至は円形とみられる。残存部の規模は、長さ約 4.5m、深さは 10㎝前後である。埋土は炭化物を含む黒褐色土で、その下には貼床と考えられる締まりのある橙色土が薄く堆積していた。建物内部の床面から地山上面にかけてで、ピットを検出しているが、P113 以外はいずれも小さく、建物に伴うものではないと考えられる。

出土遺物　実測に堪えるものではないため掲載はしていないが、貼床上面から弥生土器の甕胴部片２点を採取している。詳細な時期は不明である。



第 123 図　SI01 実測図 (1/60)　　第 124 図　SB01 実測図 (1/60)

(2)SB01（第 122・124 図）

形態と規模　斜面に対して直交配置された、1 間× 2 間の掘立柱建物跡である。規模は、梁行 2.2m、桁行 3.3m である。面積は約 16㎡を測る。柱穴は、凡そ 50㎝内外の不整円形を呈し、深さは 20 ～ 40㎝ほどである。P14・34 を除く柱穴では、埋土上面で柱痕を確認することができ、底部では柱の据付掘り方が認められた。

堆積状況　P14 ～ 18 においては、土層断面で径 10 ～ 20㎝の柱痕を確認している。

出土遺物　柱穴からは遺物は出土していない。

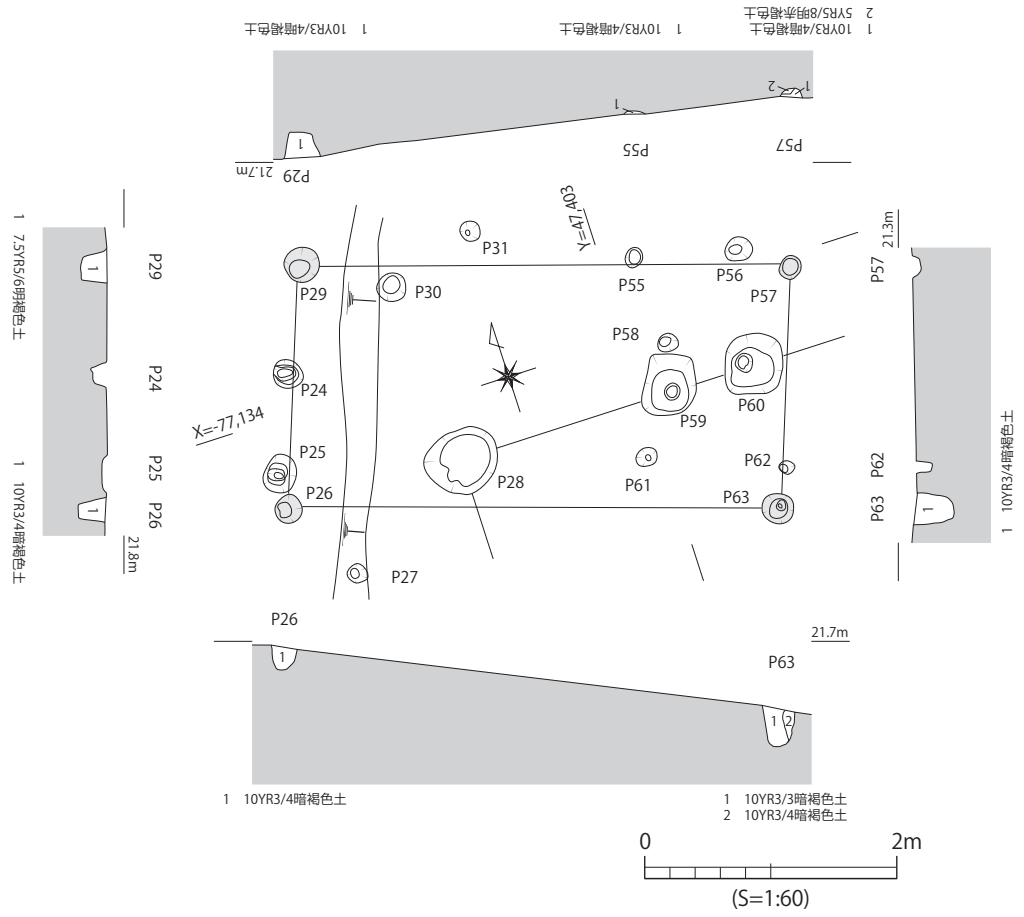
(2)SB02(第 122・125 図)

形態と規模　SB01 から北に 2.5m ほどの位置にあり、斜面に対して直交配置された、 1 間四方の掘立柱建物跡である。規模は、梁行 1.9m、桁行 3.9m で、桁間が大きくとられている。中間で柱穴を探したものの、検出することはできなかった。面積は約 7.4㎡を測る。柱穴は、15 ～ 30㎝の円形で、深さは 10 ～ 30㎝である。

堆積状況　埋土は基本的に単層で、断面でも柱痕を確認することはできなかった。

出土遺物　柱穴からの出土遺物はない。

遺構の時期　SB05 と重複する位置にあり、これとは前後する関係にあるが、SB01 とは位置や建物主軸と規模などから同時期である可能性が高い。

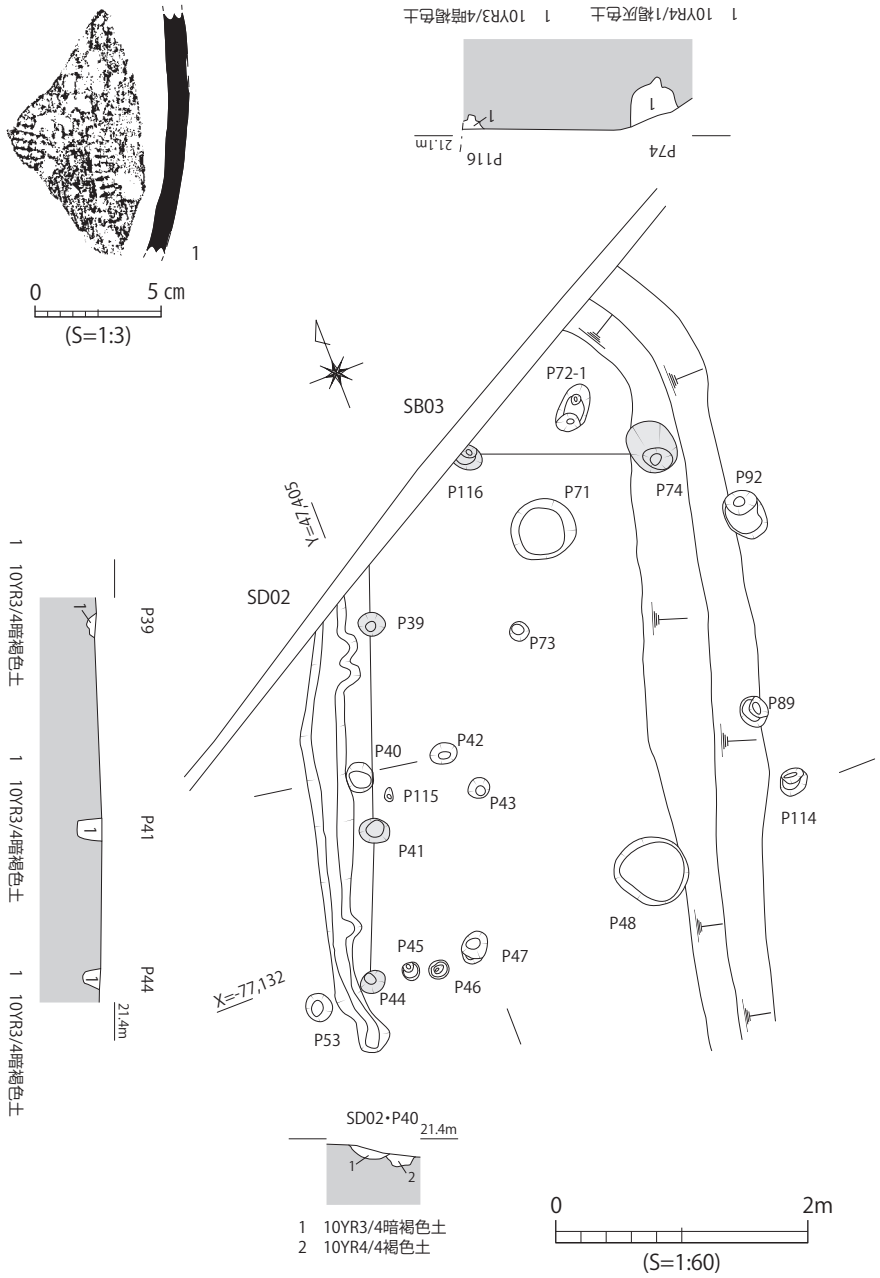


第 125 図　SB02 実測図 (1/60)

(3)SB03(第 122・126 図)

形態と規模　SB02 から北に 1.7m ほどの位置にあり、斜面に対して平行配置された掘立柱建物跡で、西側に並行する SD02 は建物に関連する溝と考えられる。建物と溝は調査区外へと続いており、全容は不明であるが、梁行 1 ～ 2 間、桁行 3 間の建物を復元した。南側の梁筋の柱穴が確認できなかったため、P74・116 が建物を構成する柱穴として妥当か否かについては、検討の余地が残るが、桁筋の P39・41・44 は溝の方向と整合する。柱間は、P74-P116 で 1.5m、P39-P41 で 1.6m、P41-P44 で 1.2m となっている。柱穴は 20 ～ 40㎝の不整円形で、深さは 10 ～ 40㎝を測る。溝は、長さ 3.6m、深さ 10㎝弱で、建物と近接していることから雨落溝ではなく、斜面上方からの水を切るためのものと考えられる。

堆積状況　埋土は基本的に単層で、断面でも柱痕を確認することはできなかった。



第 126 図　SB03、周辺ピット出土遺物実測図 (1/3・1/60)

出土遺物　P74 及び SD02 から土師器小片が出土しているが、実測に堪えるものではなく、時期も不明である。建物を構成する柱穴ではないが、周辺にある P71 からは須恵器甕片が 1 点出土している。

遺構の時期　遺物がないため年代は不明と言わざるを得ない。他の建物跡との新旧関係では、後述する SB04 とは主軸の指向を同じくするが、軒が重なるため、同時存在は考えられない。一方、直交する向きにあるが、SB01・02 とは位置的にも同時期に存在した可能性がある。

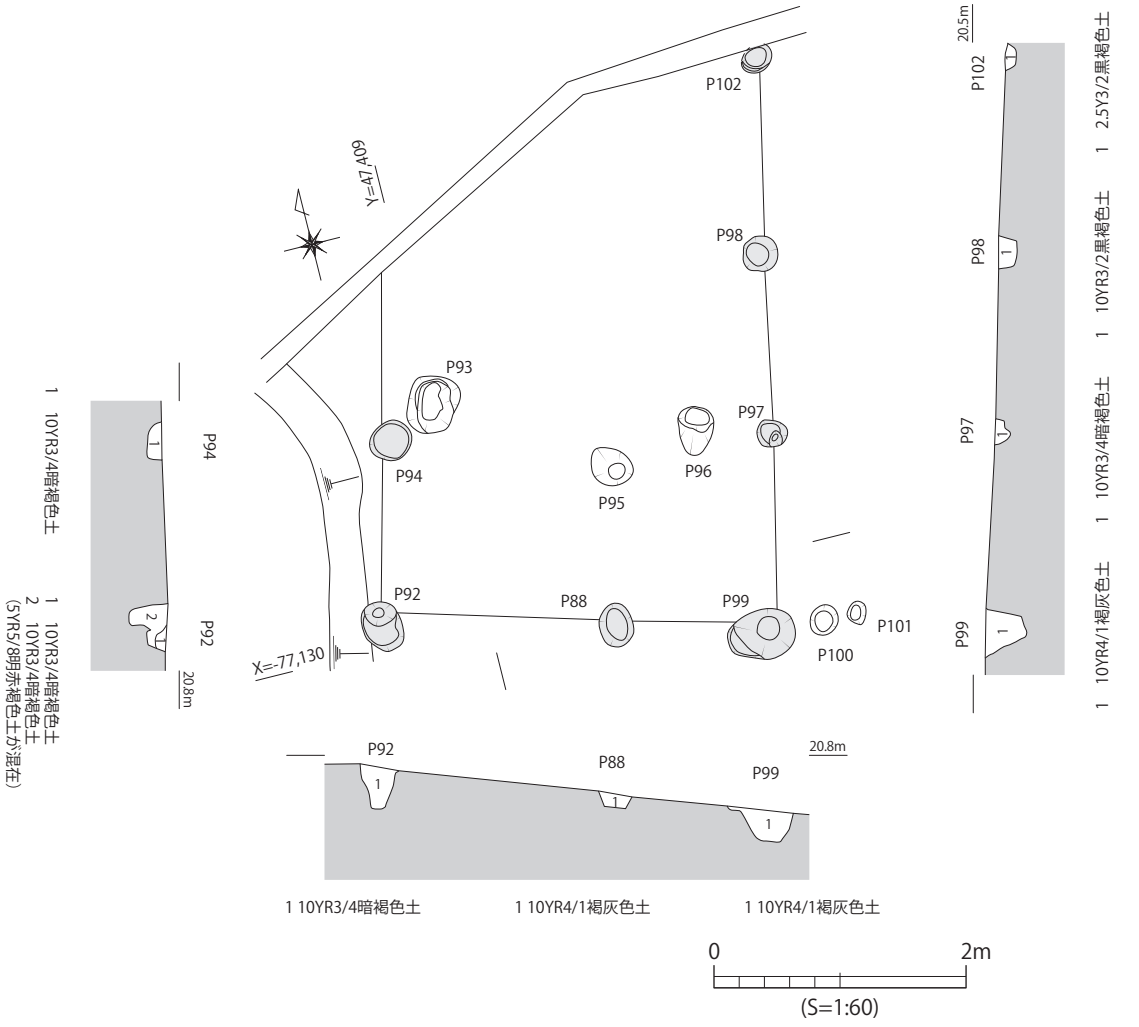
(4)SB04(第 122・127 図)

形態と規模　SB03 の北東に近接する位置にあり、斜面に対して平行配置された掘立柱建物跡である。建物の北側は調査区外へと続いており、全容は不明であるが、梁行２間、桁行３間以上の建物てある。規模は現況で、梁行 3.1m、桁行 4.5m を測る。柱間は、P92-P88 で 1.9m、P88-P99 で 1.2m、桁筋は 1.4 ～ 1.5m 間隔となっている。P95 も建物を構成する可能性がある。柱穴は 20 ～ 50㎝の不整円形で、深さは 10 ～ 30㎝を測る。

堆積状況　埋土は基本的に単層で、断面でも柱痕を確認することはできなかった。

出土遺物　P94 から土師器小片が出土しているが、実測に堪えるものではなく、時期も不明である。

遺構の時期　時期を判定しうる遺物がないため年代は不明と言わざるを得ない。前述の SB03 とは



第 127 図　SB04 実測図 (1/60)

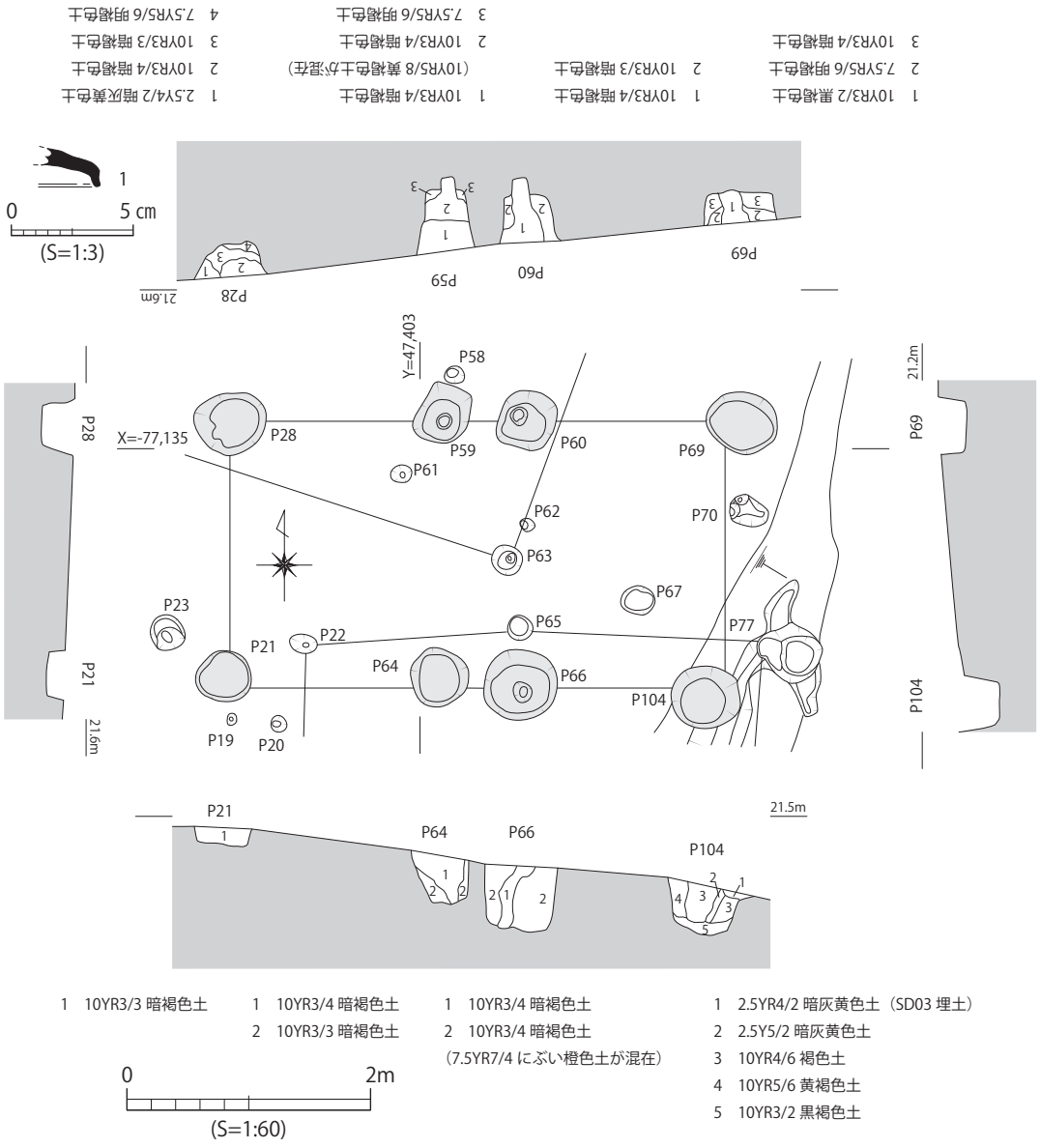
主軸の指向を同じくするが、軒が重なるため、同時存在は考えられない。一方、直交する向きにあるが、SB01・02 と同時期に存在した可能性は残る。

(5)SB05(第 122・128 図)

形態と規模　SB01 の北側に位置する 1 間× 3 間の掘立柱建物である。斜面に対しては斜行する配置であるが、建物主軸は真北方向を指向している。規模は、梁行 2.1 ～ 2.2m、桁行 4 ～ 4.1m、面積は約 8 ㎡ほどである。桁筋のうち、中二つの柱穴間隔は南北ともに非常に狭く、60 ～ 70㎝程度しかない。柱穴は不整円形で、長径 50 ～ 60㎝と比較的に大きなものでまとまる。深さは 10㎝と浅い P21 以外は 30 ～ 60㎝を測る。P59・60・66 の柱穴底部で柱の据付掘り方を確認した。

堆積状況　断面では据付掘り方の残る柱穴以外に、P69・104 でも柱痕を確認することができた。P59・64 は抜き取り痕と考えられる攪乱が認められた。また、南東隅の P104 と溝 SD03 との切り合いで、SB05 が先行することが確認できた。

出土遺物　1 は P28 から出土した須恵器坏蓋の口縁部である。口縁端部がしっかりと垂下するも



第 128 図　SB05・出土遺物実測図 (1/3・1/60)

ので、輪状つまみの蓋とみられる。

遺構の時期　時期を判断できるものは須恵器１点のみだが、凡そ７世紀末～８世紀初頭頃の所産と考えられる。

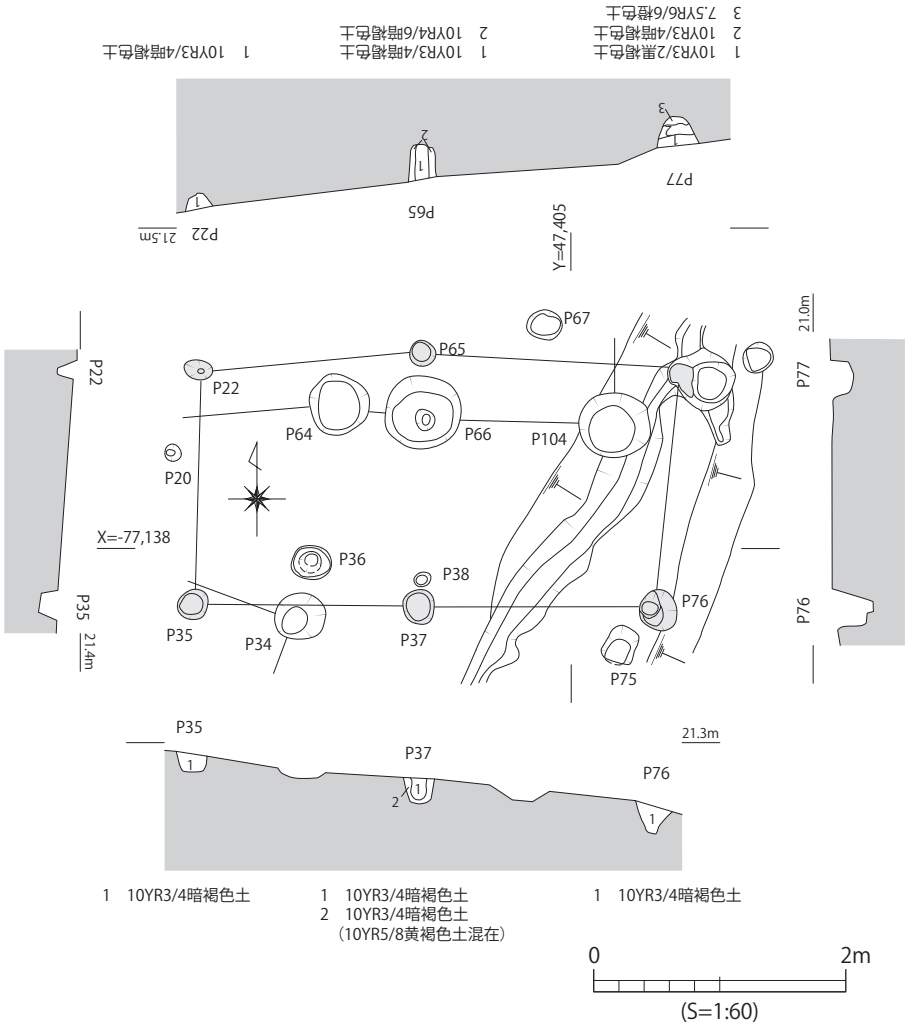
(6)SB06（第 122・129 図）

形態と規模　SB05 と重複する、１間×２間の掘立柱建物である。SB05 と同様に、斜面に対しては斜行する配置であるが、建物主軸は真北方向を指向している。規模は、梁行 1.8 ～ 1.9m、桁行 3.7 ～ 3.8m、面積は約 6.5㎡ほどである。柱間は、P35-P37 で 1.9m、P37-P76 で 1.8m、P22-P65 で 1.8m、P65-P77 で 2m を測る。柱穴は不整円形で、長径 20 ～ 30㎝、深さは 15 ～ 30㎝である。P37 は検出面で柱痕を確認することができた。

堆積状況　断面では P37・65 で幅 10 ～ 15㎝程度の柱痕を確認することができた。また、北東隅の P77 については、溝 SD03 の完掘後に検出していることから、SB06 が SD03 より先行することが明らかである。

出土遺物　柱穴からの出土遺物はない。

遺構の時期　時期を判定しうる遺物がないため、切り合い関係から SD03 より古いということ以外は不明と言わざるを得ない。前述の SB05 とは主軸の指向を同じくする。重複しているため、同時



第 129 図　SB06 実測図 (1/60)

存在は考えられないが、SD03 が掘削されるまでの間に前後して建て替えられたものと推定できる。凡そ 7 世紀末～ 8 世紀初頭頃の所産と考えられる。

2．溝跡 (第 122・130 図)

(1)SD01

形態と規模　SB02 の北側に位置する南北方向の溝で、北側は調査区外へと続く。現況で長さ 1.9m、幅 50㎝、深さは 10㎝を測る。

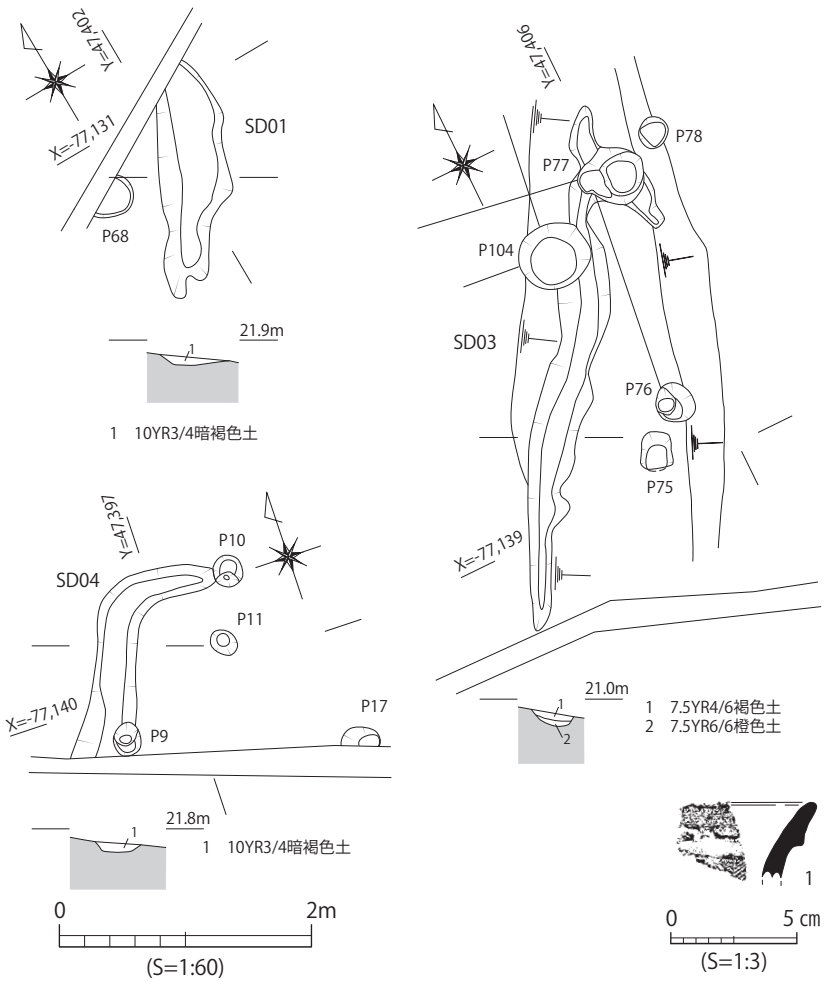
出土遺物　埋土は、包含層と同じ土砂で、須恵器と土師器の細片が出土しているが、詳細は不明である。

遺構の性格　全容が不明で、周辺遺構との関係も判然としない。少なくとも、SB03 に伴う SD02 までの溝の東側スペースには、建物を構成する柱穴を検出していないため、建物に関係する溝ではないと考えられる。

(2)SD03

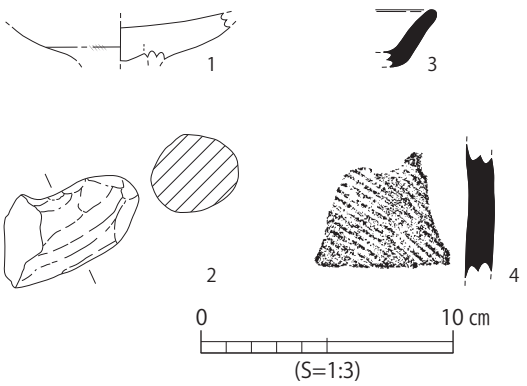
形態と規模　SB05・06 と切り合う溝で、規模は長さ 4.1m、幅 40㎝、深さ 10㎝を測る。

堆積状況　SB05 を切っている様子が建物柱穴の断面で確認できた。また、SB06 は、溝を完掘した後に検出している。



第 130 図　SD01・03・04、SD04 周辺ピット出土遺物実測図 (1/3・1/60)

遺構の時期と性格　遺物が出土していないことから時期は特定できないが、SB05 が７世紀末～８世紀初頭ごろと推定され、当該期以降ということになる。溝の東側には、建物を構成する柱穴を検出していないため、建物に関係する溝ではないと考えられる。



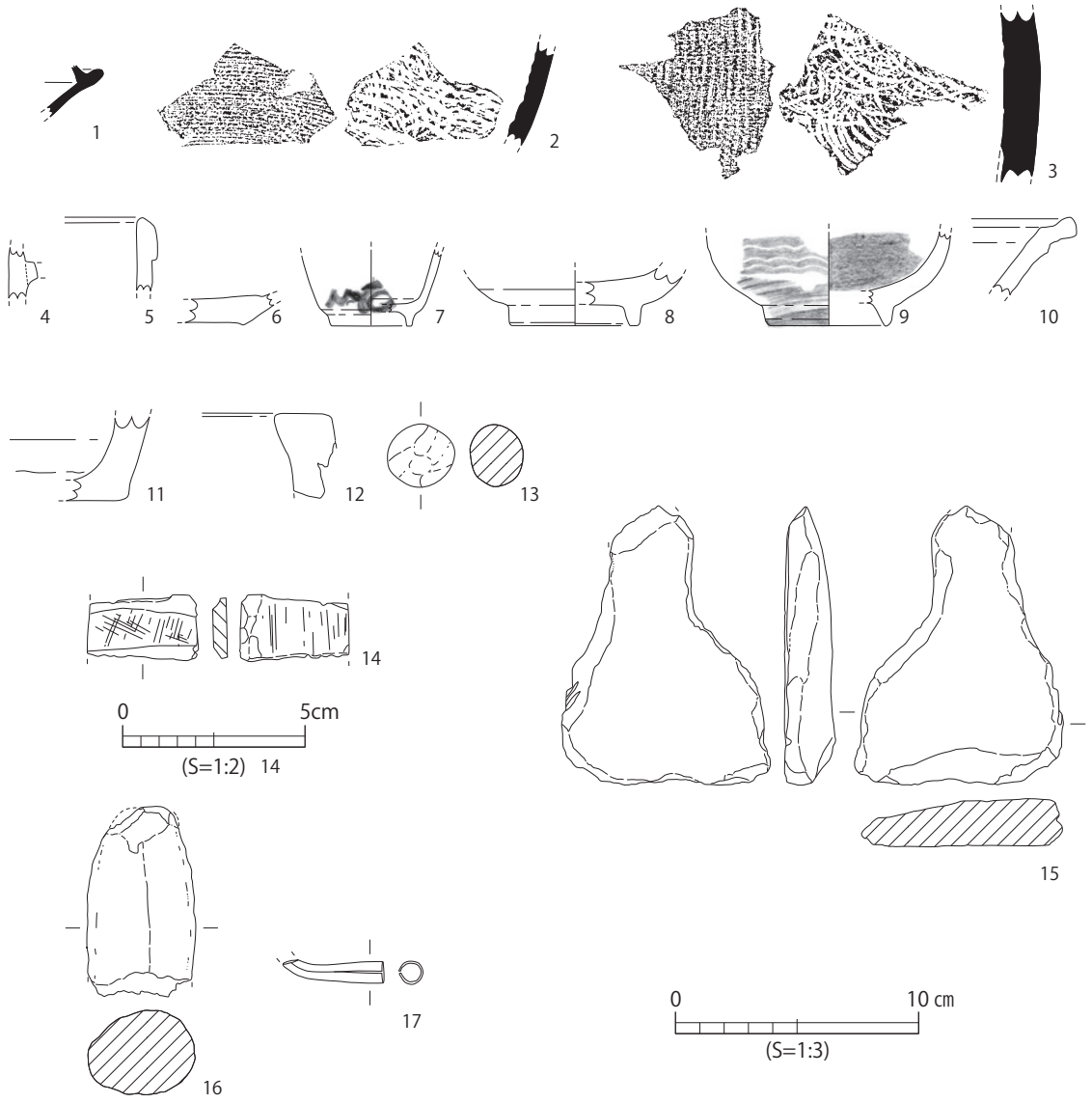
第 131 図　II 層出土遺物実測図 (1/3)

(3)SD04

形態と規模　SB01 の西側に位置する溝で、南側は調査区外へと続く。現況で長さ 1.5m、幅 40㎝、深さは 10㎝を測る。地形に沿って延びた後、端部が斜面下方に折れ曲がる。

出土遺物　埋土から土器片が出土しているが、細片のため詳細は不明である。なお、周辺の P11 からは須恵器壺の口縁部が出土している。

遺構の性格　溝の端部が下方に屈曲している点は、建物に伴う溝 SD02 と共通している。また、溝の下



第 132 図　I 層出土遺物実測図 (1/2・1/3)

方には P9 ～ 11 があり、これらは建物を構成する可能性がある。全容がわからないため、断定はできないが、建物に伴う溝として理解しておきたい。

３．遺構外出土遺物 (第 131・132 図)

(1) 包含層出土遺物 (第 131 図)

１～４はⅡ層から出土した土器である。１は土師器高坏で、内面は風化が著しく調整は不明だが、外面にはハケメが残る。２は甑の把手である。３は須恵器の皿、４は甕の小片である。

このほか、図化はしていないが、鉄滓と炉壁片が 600g 余り出土しているが、今回の調査では炉跡や焼土面は検出していない。一方、製鉄関連遺物は表土・造成土を主体に相当数出土しており、調査時にこれらが混入した可能性が高い。

(2) Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 (第 132 図)

１は坏身、２・３は甕の胴部小片である。

４・５は瓦質土器の鍋と鉢である。６は白磁碗の底部資料である。

７～ 10 は近世陶磁器で、７は猪口、８・９は碗、10 は鉢である。

11 は備前焼の甕、12 は火鉢、13 は土製品の土玉で直径 2.7㎝、厚みは 2.2㎝とやや扁平気味を呈す。

14 は頁岩製の硯であろうか、２面に擦痕が残る。15 は風化して灰白色を呈す、不明石器である。石材は安山岩系で、打製土掘具の可能性もある。16 は磨製石斧の基部であるが、風化が著しい。石材は塩基性片岩とみられる。

17 は煙管の雁首である。

このほか、図化はしていないが、金属滓が 4kg余り出土している。滓はいずれも表面が風化し、軟質な質感を有すもので、光沢のある結晶が顕著な点が特徴的なものである。管見によれば通有の鉄滓にない特徴と思われ、当初は非鉄金属滓と考えたが、調査の結果、鉄滓であることが判明した。[1]

1　穴澤義功氏のご教示による

第 6 章　自然科学分析

第 1 節　麓Ⅱ遺跡から出土した動物遺存体

石丸恵利子 (広島大学総合博物館)

1　はじめに

麓Ⅱ遺跡は、出雲平野南西部の島根県出雲市東神西町に所在する。標高約 8 m前後の平地に位置し、現在の海岸線から直線距離で約 4㎞離れた場所にあたる。西方の汽水湖である神西湖は、縄文時代後期から弥生時代においては海につながっており、この地で人々が生活を開始した当時は、湾奥部という海に近い立地環境であったと考えられている（高安・徳岡 1993)。

一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴って、試掘および発掘調査が行われ、古代から中世の遺物に加え、縄文時代後期末から晩期初頭の土器が出土している。また、縄文時代の包含層からは、動物遺存体も検出されており、本稿ではそれらの動物遺存体について報告する。

2　出土した動物の種類と部位

取り上げられた資料は、接合するものや、接合はしないが同一個体と考えられるものも含めて、破片数にして約 30 点を数える。確認された種は、表 1 に示した 4 つの分類群に属するもので、各資料の部位や計測値などについては、表 2 に記した。以下、種類ごとに各資料の特徴を述べる。

(1)　ニホンジカ

1 区の 1 層と 4 層および 3 区のⅣ層においてニホンジカの各部位が確認された。1 区 1 層では、棘突起や横突起が欠損した腰椎の椎体が出土している。椎骨板は前後ともに化骨済で癒合しており、成獣個体のものであることがわかる。左側面の後方部分に、斜め方向の切創が 1 本認められた。また、切創より約 1㎝中心寄りの後方面には石器などの工具の刃が当たったことによって欠けたような状態の痕跡も認められた。火は受けていないが、全体的に暗い褐色を呈する。

1 区の 4 層からは、上腕骨の遠位と鹿角が出土している。上腕骨は、遠位端が化骨した成獣のものである。骨幹部の後方面が割れているが、割れ口が新しいことから、取り上げの際に割れた部分があると考えられる。一部接合できる破片も存在したが、完全には復元できず、意図的に打ち割られたかどうかは明らかにできなかった。遠位端の内側後方面に、横方向の複数の切創を確認することができた。また、鹿角と考えられる資料は、内側が一部削られて表面が平滑に調整されているよ

表 1　出土動物遺存体種名表

門	綱	目	科	属 / 種
脊椎動物門 Vertebrata	哺乳綱 Mammalia	霊長目 Primates	ヒト科 Hominidae	ヒト *Homo sapience*
		偶蹄目 Artiodactyla	イノシシ科 Suidae	イノシシ *Sus scrofa*
			シカ科 Cervidae	ニホンジカ *Cervus nippon*
		クジラ目の一種 Cetacea, fam., gen. et sp. indet.		

＊種名については、阿部ほか（2008）に従った。

うに見えるが、経年劣化に伴って分離した可能性もある。そのほか、擦痕などの明瞭な人為的な加工の痕跡を確認することはできなかった。

また、３区Ⅳ層において、ニホンジカの上腕骨遠位部の破片を１点確認した。内側面から前方面の破片で、前方面には擦痕が多く観察でき、骨幹部側の端部も擦られたことにより面取りされたような状態となっている。意図的な加工であるかどうかは不明である。

上記以外に、イノシシもしくはニホンジカの四肢骨の骨幹部を打ち割って得た破片を加工したと考えられる資料を１点確認した。形状から、ニホンジカの中手骨もしくは中足骨の骨幹部だと考えられる。両端部が欠損しているが、一端がやや先細りの形態をしている。外側面には斜め方向の切創が複数確認でき、もう一方の端部の内側面には、縦方向に複数の擦痕が認められる。表面を平滑に整えた痕跡だと考えられる。機能は不明であるが、何らかの製品の一部であった可能性がある。

（２）　クジラ類

３区Ⅳ層およびSK02より、クジラ類のものと考えられる骨片が出土している。種は不明であるが、非常に大きな破片であることから、ヒゲクジラ類のものと考えられる。残存する破片の中には、上顎骨に形態が似る破片が認められる。ほとんどの破片が火を受けておらず、火を受けたと考えられるものは小破片１点のみで、全体的に白色を呈する。この小破片は、被熱により変形している可能性もあるが、指骨の一部と考えられる。クジラ類の獲得方法については、調査面積の狭さや出土遺物の内容や量から言及することは難しいが、漂着あるいは座礁した個体のものを利用したと推測される。破片の一端に面取りをしたような加工の痕跡が認められることから、当時道具の素材として利用されていた可能性が示唆される。陸生哺乳類だけでなく、海生哺乳類のクジラ類も利用していたことをうかがうことができる。

（３）　ヒト

３区Ⅳ層より、ヒトの大腿骨が３点出土している。いずれも骨幹部の破片で、うち２点は右肢で、大きさ的には同一個体のものと考えられるが、接合はしない部分であった。骨幹部中央あたりの破片と近位部に近い部分である。残りの１点は左肢の骨幹部で、右肢の資料と同じ近位部に近い破片である。右肢と左肢資料の大きさは同程度で、同一個体である可能性が高い成人のものである[(1)]。

表２　麓Ⅱ遺跡出土動物遺存体観察一覧

No.	調査区	遺構/位置	層位	分類群	種名	部位	部分	左右	観察	計測値（mm）*	写真図版
1	1		1	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	椎体、腰椎		椎骨板化骨済、成獣、左側面後方に切創か		58
2	1	斜面南半	4	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	骨幹部～遠位	左	遠位化骨済、接合あり	Bd:40.45, BT:37.66	58
3	1	斜面南半	4	哺乳類	ニホンジカ	鹿角？			接合あり		58
4	3		Ⅳ	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	遠位部内側破片か	右			
5	3		Ⅳ	哺乳類	イノ/シカ	四肢骨	骨幹部		ニホンジカ中手/中足骨の骨幹部か		
6	3		Ⅳ	海棲哺乳類	クジラ類						
7	3		Ⅳ	海棲哺乳類	クジラ類				接合あり、加工あり？		58
8	3		Ⅳ	海棲哺乳類	クジラ類	指骨？			焼け（白色）		
9	3	SK02		海棲哺乳類	クジラ類	不明			大型		
10	3		Ⅳ	哺乳類	ヒト	大腿骨	骨幹部	左右	成人、右：骨幹部と近位部、接合はしない、左：近位部		58
11	4		Ⅲ	哺乳類	イノシシ	第４中手骨	近位	右	化骨済、焼け（白色）	Bp:13.51	58

* 計測は Driesch(1976) に従った。

（4）　イノシシ

4 区Ⅲ層より、イノシシの第 4 中手骨が 1 点出土している。近位側（四肢骨の体の中心に近い方）の破片で、端部は化骨済の成獣個体のものである。火を受けて全体的に白色を呈する。解体痕は確認できなかったが、骨幹部側はスパイラル状に割れており、火を受ける前に骨幹部が打ち割られた可能性が高い。

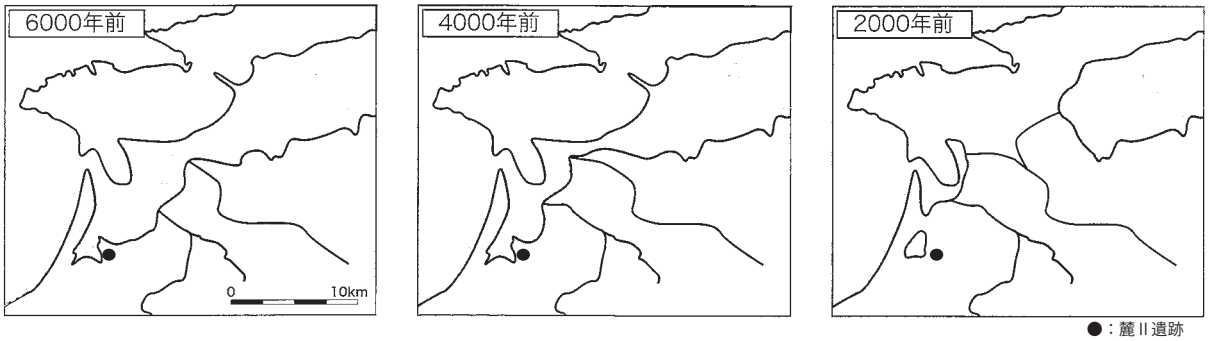
3　出雲平野における縄文時代の動物資源利用

以上のように、麓Ⅱ遺跡からは、当時の動物資源利用についてうかがい知ることができる資料として、少量ながらイノシシとニホンジカ、クジラ類を確認することができた。本遺跡の所在する出雲平野周辺では、動物遺存体の出土例として、縄文時代早期末から前期初頭の菱根遺跡の報告がある。ニホンジカやイノシシなどの哺乳類、ハクチョウやカモなどの鳥類、タイ科とフグ科、クジラ類が出土している（酒詰　1959）。

縄文時代の遺跡からの報告例は少ないものの、その後の弥生時代になると矢野遺跡や多聞院遺跡、姫原西遺跡などで、当時の動物資源利用の様子をうかがい知ることができる。弥生時代を主体とする矢野遺跡では、複数回の発掘調査が行われた結果、哺乳類はニホンジカとイノシシが、また魚類はフグ科やサメ類、鳥類はキジ科が確認されている（池田 1956、山本 1987、石丸 2010）。貝類は、汽水域に生息するヤマトシジミを主体に、マガキやサザエ、アワビなどの多様な海産貝類も確認されている。また、弥生時代から古墳時代前期の多聞院遺跡では、哺乳類はニホンジカが、貝類はヤマトシジミやサザエ、アワビ、テングニシ、サルボウなどの複数種が報告されている（大谷ほか 1950、大塚 1963）。さらに、姫原西遺跡では、弥生時代後期の貝層からヤマトシジミやサザエ、アカニシ、サルボウ、チョウセンハマグリなどが報告されている（高安 1999）。

また、当該地域におけるボーリングコアの解析によって、出雲平野の古地理変遷が推定されている（中村 2010）。縄文時代前期の 6000 年前頃は、大社湾から出雲平野、宍道湖へと続く大きな湾が形成されており、これらのデータから、麓Ⅱ遺跡は当時、海に面する場所にあったと考えられる（第 133 図）。その後、縄文時代後期の 4000 年前頃になると、三角州の前進によって海が狭められ、さらに 2000 年前になると、三角州の拡大によって大社湾と宍道湖とが分断したとされる。神西湖もこの頃に形成されたと推定されている。

以上のような各遺跡の出土動物遺存体と当時の地理から、出雲平野の生業の特徴をまとめてみたい。縄文時代においては、菱根遺跡や麓Ⅱ遺跡のように外洋に近い立地ではあるが貝類利用の痕跡が認められず、陸生哺乳類と海生哺乳類を利用していたことがうかがえる。その後、弥生時代にな



第 133 図　出雲平野周辺の古地理変遷　　中村（2010）を一部改変

ると、斐伊川や神戸川などの大型河川によって形成された沖積低地に多くの遺跡が営まれ、汽水性の貝を主体に多様な海産貝類も利用し、海産魚類や陸生哺乳類も獲得して生活していた様子を読み取ることができる。

麓Ⅱ遺跡の調査によって、これまであまり明らかになっていなかった当地域の縄文時代の動物資源利用の様相を知るうえでの貴重な資料が得られたといえる。現地形では丘陵の麓部であるが、縄文時代においては沿岸域であった場所で生活が営まれ、陸生哺乳類を中心とした狩猟活動が行われていたことを知ることができた。また、漂着あるいは座礁した可能性が高いクジラ類を利用していた様相を読み取ることもできた。

本地域周辺においては、縄文時代の動物遺存体資料が発見される可能性が高く、今後の発掘調査に期待したい。

謝辞

本報告執筆においては、島根県埋蔵文化財センターの勝部智明氏より分析の機会をいただき、遺跡の調査特徴についてもご教示いただきました。また、土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアムの大藪由美子氏には、人骨資料について有益な情報をご教示いただきました。記して、厚く感謝いたします。

注

（１）　人骨資料の詳細な同定および観察事項については、土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアムの大藪由美子氏による。

参考文献

池田満雄 1956「矢野貝塚出土品県 石丸恵利子 2010「矢野遺跡における動物資源の利用」『矢野遺跡』自然科学分析・考察編（第 4 分冊）出雲市の文化財報告 10 新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会 149 ～ 157 頁

大谷従二・大國一雄・廣瀬信憲 1950「多聞院貝塚の発掘」『貝塚』30 1 ～ 3 頁

大塚初重 1963「島根県出雲市地井宮遺跡の調査」『考古学集刊』2-1 67 ～ 91 頁

酒詰仲男 1959『日本貝塚地名表』日本科学社

高安克巳・徳岡隆夫 1993「海跡湖の地史－ 1　中海・宍道湖」『URBAN KUBOTA』32 38 ～ 47 頁

高安克巳 1999「出雲市姫原西遺跡出土の貝類について」『姫原西遺跡―一般国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告 1』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 155 ～ 166 頁

中村唯史 2010「矢野遺跡の立地と古地理」『矢野遺跡』自然科学分析・考察編（第 4 分冊）出雲市の文化財報告 10 新内藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会 1 ～ 5 頁

山本　清 1987「島根県出雲市矢野町貝塚発掘調査概報」（田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本　清・磯田由紀子・鈴木岩弓「出雲市矢野遺跡の研究Ⅰ」所収）『山陰地域研究』3 島根大学山陰地域研究総合センター 35 ～ 37 頁

Driesch, Angela Von Den 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins 1, Peabody Museum Press, Cambridge 137pp.

第２節　出雲湖陵道路発掘調査における樹種同定

一般社団法人　文化財科学研究センター

１．はじめに

本報告では、出雲湖陵道路発掘調査により出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

２．試料

試料は、出雲湖陵道路発掘調査により出土した農耕具、容器などの木製品№１から９の計９点である。試料の詳細は結果表に記す。

３．方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表３に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

１）スギ　***Cryptomeria japonica*** D.Don　スギ科　　№１(83-2)、３(80-4)、４(80-3)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～ 14 細胞高ぐらいである。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ 40 m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

２）ヒノキ科　Cupressaceae　　№９(89-1)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は極めて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は腐朽のため観察できない。放射組織は単

表３　出雲湖陵道路発掘調査における樹種同定結果

No.	挿図番号	結果（学名／和名）		遺物名	種別
1	83-2	***Cryptomeria japonica*** D.Don	スギ	板状木製品	建築材か
2	80-2	***Castanopsis sieboldii*** Hatusima	スダジイ	反柄	農耕具
3	80-4	***Cryptomeria japonica*** D.Don	スギ	容器	容器
4	80-3	***Cryptomeria japonica*** D.Don	スギ	槽	容器
5	87-5	***Quercus*** subgen. ***Cyclobalanopsis***	コナラ属アカガシ亜属	直柄平鍬	農耕具
6	87-3	***Quercus*** subgen. ***Cyclobalanopsis***	コナラ属アカガシ亜属	不明木製品	農耕具
7	85-4	***Quercus*** subgen. ***Cyclobalanopsis***	コナラ属アカガシ亜属	板状木製品	農耕具
8	80-1	***Quercus*** subgen. ***Cyclobalanopsis***	コナラ属アカガシ亜属	反柄平鍬	農耕具
9	89-1	Cupressaceae	ヒノキ科	容器底板	容器

列の同性放射組織型で、１～ 15 細胞高を示す。

以上の特徴からヒノキ科に同定される。ヒノキ科にはヒノキ、サワラ、アスナロ属などが含まれる。本州、四国、九州、屋久島に分布する。大木になるものが多く通常高さ３～ 40 m、径１mに達する。材は木理通直かつ強靭で、耐朽性・耐湿性も高く、建築など広く用いられる。

３）スダジイ　***Castanopsis sieboldii*** Hatusima　ブナ科　　№２(80-2)

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ 20 m、径 1.5 mに達する。材は耐朽性・保存性がやや低いが、建築、器具などに用いられる。

４）コナラ属アカガシ亜属　***Quercus*** subgen. ***Cyclobalanopsis***　ブナ科　　№５(87-5)、№６(87-3)、№７(85-4)、№８(80-1)

中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30 m、径 1.5 m以上に達する。材は堅硬かつ強靭で耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

５．所見

同定の結果、出雲湖陵道路発掘調査により出土した木製品はスギ３点、ヒノキ科１点、スダジイ１点、コナラ属アカガシ亜属４点であった。

スギは板状木製品（№１(83-2)、建築材か）、容器（№３(80-4)、容器）、槽（№４(80-3)、容器）に使われていた。材は木理直通で加工工作が容易なうえ、大きな材がとれる良材であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。日本海側では、地域的な森林要素からヒノキよりもスギの供給が多く、古くから曲物、槽、桶などの容器によく利用された。島根県では田中谷遺跡（弥生時代後期から古墳時代初頭）や五反配遺跡（古墳時代前期から古墳時代中期）などからスギの容器が多く出土している。ヒノキ科は容器底板（№９(89-1)、容器）に使われていた。ヒノキ科にはヒノキ、サワラ、アスナロ属などがあり、材は木理通直かつ強靭で、耐朽性・耐湿性も高く、曲物や桶などの底板によく利用される。スダジイは反柄（№２(80-2)、農耕具）に使われていた。材はやや重硬で耐朽性・保存性が低い材であるが、杭材や板材などの土木材によく利用され、鍬や鋤などの農耕具に使われることもある。コナラ属アカガシ亜属は直柄平鍬（№５(87-5)、農耕具）、不明木製品（№６(87-3)、農耕具）、板状木製品（№７(85-4)、農耕具）、反柄平鍬（№８(80-1)、農耕具）に使われていた。材は堅硬かつ強靭であり、弥生時代以降、農耕具として多用され、西部日本海側でも多く出土している。

本遺跡において同定された樹種はいずれも温帯や温帯下部の暖温帯に広く分布する樹木ばかりである。スギは特に温帯中間域の多雨・積雪地帯で純林を形成する針葉樹で、ヒノキ科は温帯中部に多

い針葉樹である。また、スダジイとコナラ属アカガシ亜属は温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。いずれも当時の遺跡周辺から比較的容易にもたらすことができる樹種であったと考えられる。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学．出土木製品用材データベース．海青社，449p.

京都科学（2004）五反配遺跡．古代出雲歴史博物館建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書，島根県教育委員会，p.33-40.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別第１号．植生史研究会，242p.

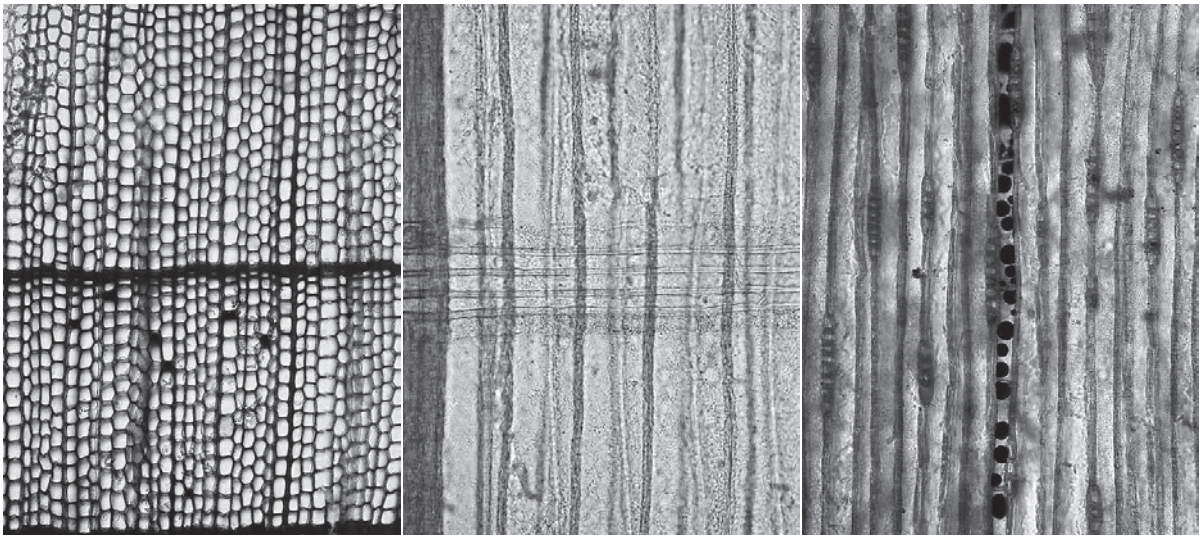
吉田生物研究所（2002）田中谷遺跡　塚山古墳　下がり松遺跡　角谷遺跡．法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，島根県教育委員会，p.319-339.

横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

スギ　試料No.３　挿図番号80-4　遺物名容器　種別容器

横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

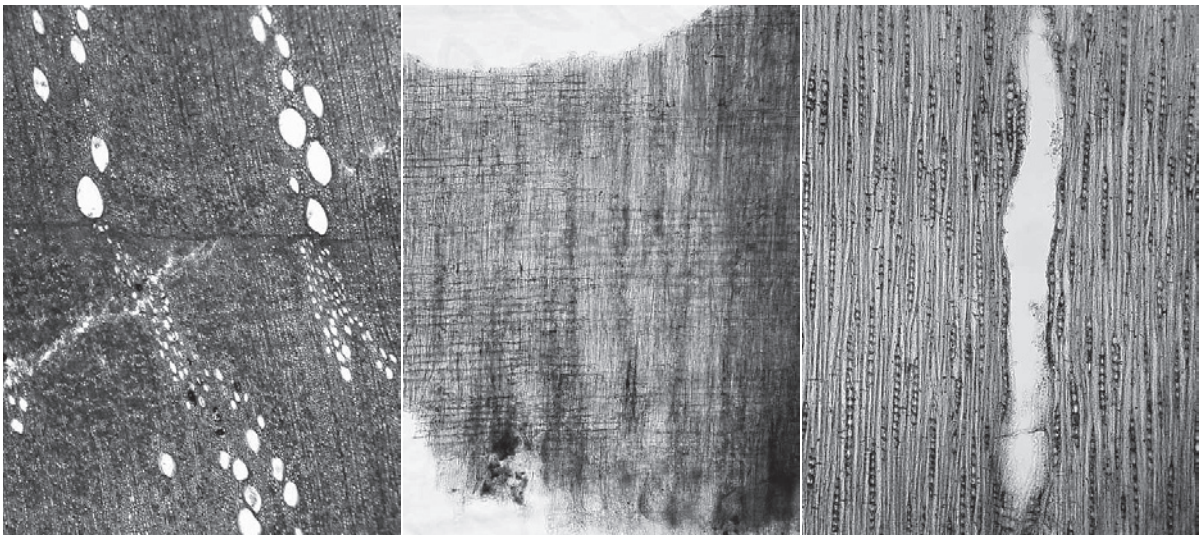
スギ　試料No.４　挿図番号80-3　遺物名槽　種別容器



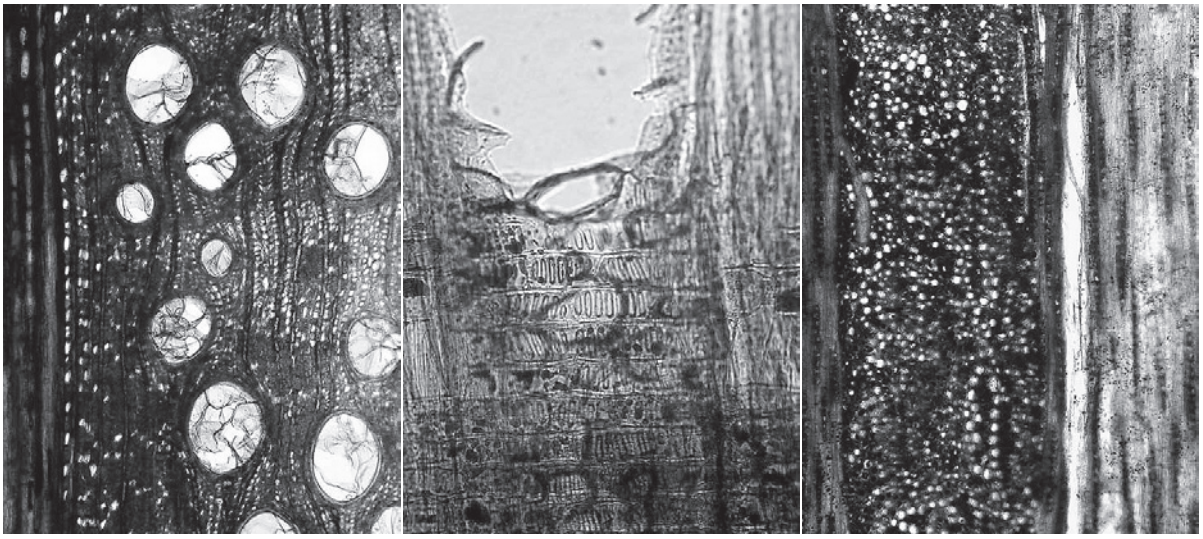
横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

ヒノキ科　試料No.９　挿図番号89-1　遺物名容器底板　種別容器

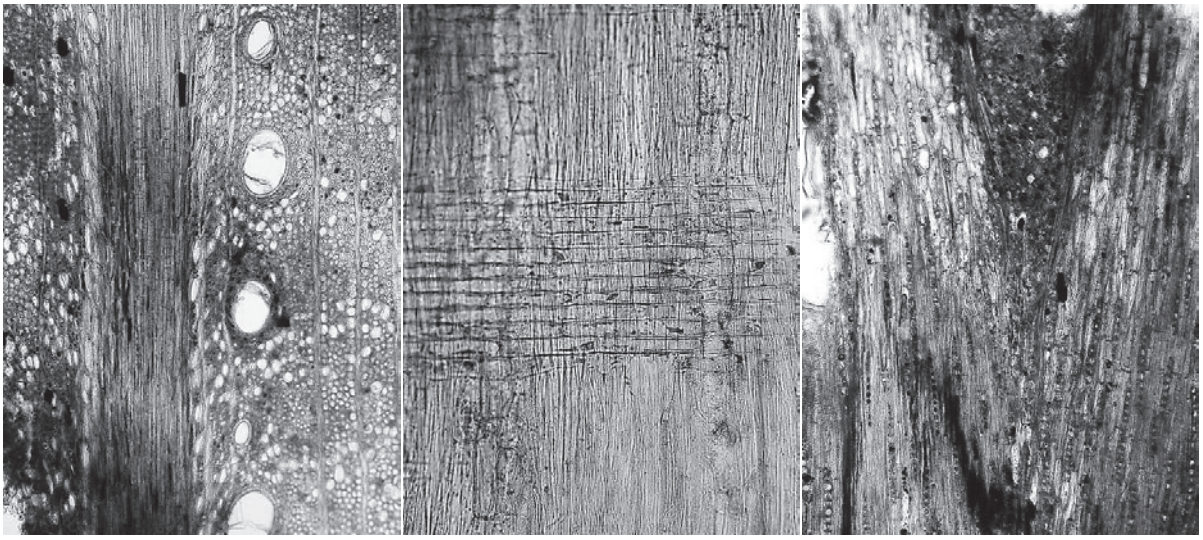
写真５　木材顕微鏡写真Ⅰ



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm
スダジイ　試料№２　挿図番号80-2　遺物名反柄　種別農耕具



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm
コナラ属アカガシ亜属　試料№５　挿図番号87-5　遺物名直柄平鍬　種別農耕具



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm
コナラ属アカガシ亜属　試料№７　挿図番号85-4　遺物名板状木製品　種別農耕具

写真６　木材顕微鏡写真Ⅱ

第３節　麓Ⅱ遺跡３・５区発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳 (文化財調査コンサルタント (株))

はじめに

麓Ⅱ遺跡は、島根県中央部、出雲市東神西町に位置し、中国山地縁辺の小盆地内に立地する。また、この小盆地は、かつて出雲平野西部に広がっていた「神門水海」に、九景川を介して繋がっていたものと考えられる。

当委託業務は、文化財調査コンサルタント株式会社が、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターから下記の目的で受託・実施した花粉分析、軟Ｘ線観察調査報告書の概報である。

1) ３区発掘調査により検出された、３層の暗色帯の堆積時期を明らかにする。

2) ５区を横切る河川の形成時期を明らかにする。

3) 遺跡周辺地域の古環境変遷を明らかにする。

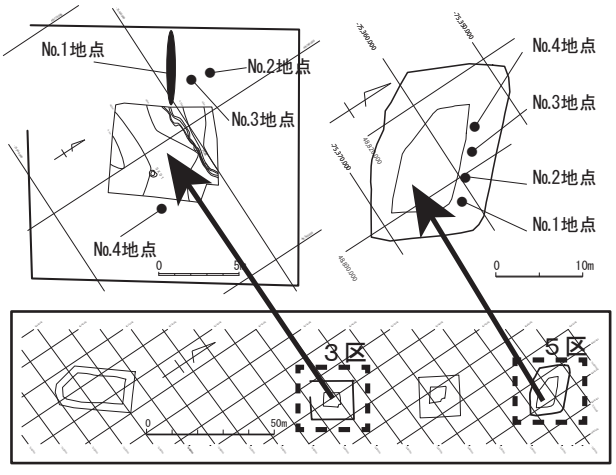
分析試料について

調査区の配置、及び各調査区での試料採取地点を、図 134 に示す。更に、各地点での試料採取位置を、3 区の断面図（図 135、136）及び、5 区の断面図（図 137、138）に示した。微化石概査、花粉・植物珪酸体分析試料を①～⑳（3 区試料№ 12 ～ 15、№ 4 地点の各試料は軟Ｘ線写真観察試料から分取。5 区№ 3 地点試料№ 3 ～ 5 は、□囲い。）で、軟Ｘ線写真観察試料を「□」で示した。年代測定試料について、3 区では 9 層、12 層、14 層を対象に軟Ｘ線写真観察試料から分取した。5 区では図 137 中「年代測定試料」を対象としている。240 年輪を数えることができたことから、内側から 1、134、236-240 年輪を切り出し、ウイグルマッチングを行った。また、この試料を樹種同定試料としている。

分析方法

(1) 軟Ｘ線写真観察

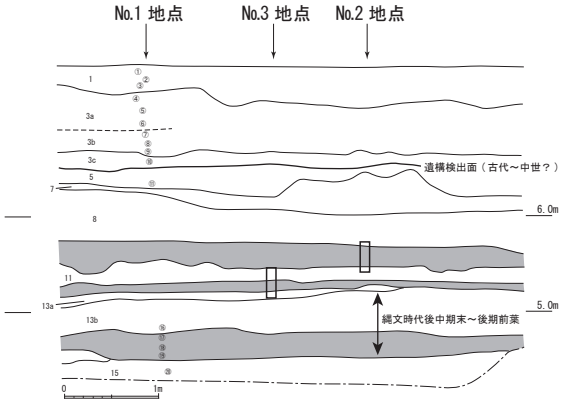
発掘現場にて採取したブロック試料を実験室内にて調整し、25cm × 10cm × 1cm の透明アクリルケースに入れ、軟Ｘ線写真撮影試料とした。 軟Ｘ線撮影は、増感紙を挟んだ印画紙に 40 ～ 45kVp・30mA の電流で 50 秒～ 1 分 20 秒の間、軟Ｘ線を照射した（観察した軟Ｘ線写真は、ネガ画像である。）。記載は、「土壌記載薄片ハンドブック（久馬・八木：訳監修，1989）」に準じて行った。また、併せて分析試料を分取した。



第 134 図　試料採取地点

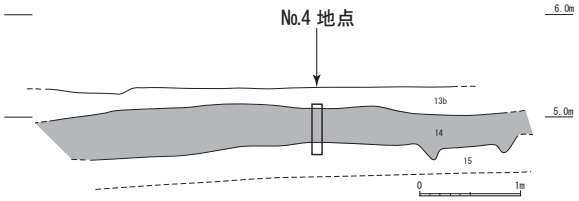
(2) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を観察し、花粉（胞子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、５段階で示した。



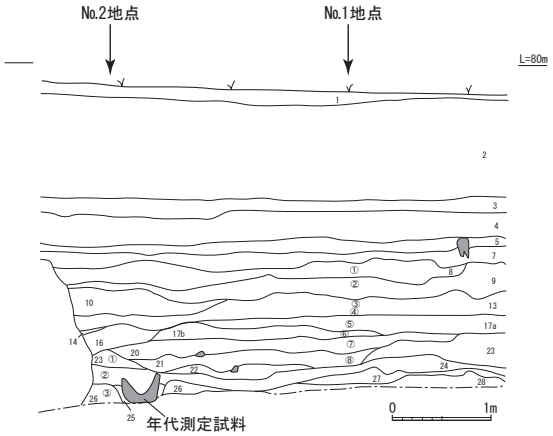
1：褐色粘質土（耕作土及び床土）3a：褐灰色粘土（礫ほとんど含まない）3b：灰黄褐色粘土（1 cm以下の白色礫含む）
3c：暗褐色粘土（1 cm以下の白色礫とても多く含む）5：暗緑灰色粘土（1 cm以下の白色礫若干含みしまる）
7：淡黄色細砂（粘質でやわらかい）8：にぶい黄色細砂（やや粘質でやわらかい）
9：褐灰色粘質土（やや砂質でやわらかい）11：黄褐色細砂（5 mm以下のクサリ礫若干含みやわらかい）
12：暗灰黄色粘質土（10 cm以下の粘土・砂をブロック状に含み、わりとしまる）13a：青灰色砂質土（粘性強い）
13b：青灰色砂質土（微細な炭化物・骨片・縄文土器を若干包含）
14：黒色粘質土（北西側に比べ土壌化顕著で遺物量も多い）
15：緑灰色細砂（やや粘質で締まる、無遺物で縄文のベース層）

第 135 図　3 区北西壁断面図（試料採取層準）



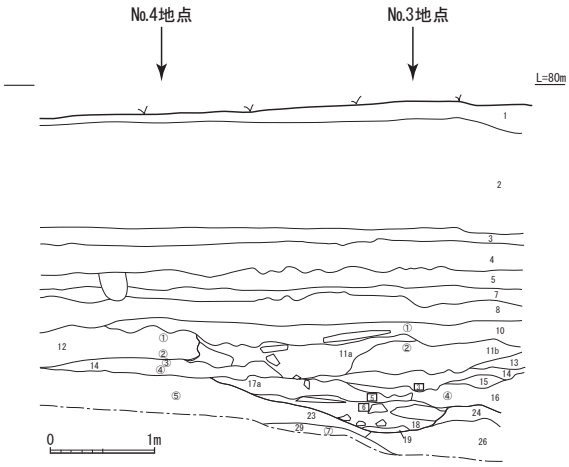
13b：青灰色砂質土（微細な炭化物・骨片・縄文土器を若干包含）
14：黒色粘質土（北西側に比べ土壌化顕著で遺物量も多い）
15：緑灰色細砂（やや粘質で締まる、無遺物で縄文のベース層）

第 136 図　3 区南東壁断面図（試料採取層準）



1:灰黄褐色土(表土、耕作土) 2:黄橙色粘質土(客土、30cm以下の粘土ﾌﾞﾛｯｸ、真砂含む)
3:黒色粘質土(耕作土、炭化物多く含み、陶磁器、土師器、須恵器を少量包含)
4:ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土(床土、耕作土、炭化物、白色風化礫ﾌﾞﾛｯｸを含みややしまる、遺物少量含む)
5:ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土(床土、細砂～中粒砂多く含み、斑状にｶｻﾌﾞ多く含む、炭化物、弥生～須恵器少量含む)
7:黒褐色粘土(細粒砂や中粒砂を斑状に含み弥生～須恵器少量包含、上部は粘性が強く下部はやや砂質)
8:暗灰黄色砂質ｼﾙﾄ(極細粒～細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に多く含む、木片多く含み、土器包含) 9:黒褐色粘土(部分的に細粒砂多く含む)
10:黒褐色ｼﾙﾄ(炭化物、木片若干含み、弥生～土師器を少量包含、SD01新最終埋土)
13:ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質粘土(わりとしまる、極細砂～細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含み遺物ほとんど包含しない)
16:黒色砂質ｼﾙﾄ(細砂～中粒砂をﾗﾐﾅ状、ﾌﾞﾛｯｸ状に多く含む、木質、土器を少量包含)
17a:ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘土(細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含む、弥生～土師器、木器包含) 17b:黒褐色砂質粘土(細砂を多く含む、木片、遺物を包含しない)
20:暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色ｼﾙﾄ質細砂(木片、炭化物多く含むSD02最終埋土) 21:ｵﾘｰﾌﾞ黒色ｼﾙﾄ(細粒砂～中粒砂含む、木片、木器、土器少量包含)
22:灰色砂(中粒～粗砂、木片、土器若干包含)
23:灰色粘質砂～砂質ｼﾙﾄ(ｼﾙﾄ～中粒砂、部分的に粘土を含む、遺物ほとんど包含せず、腐植物わりと含む)
24:ｵﾘｰﾌﾞ黒色・灰色砂(細砂～粗粒砂にｼﾙﾄを含み、ﾗﾐﾅ見られる、木質、腐植物多く含む) 25:灰色粘土(炭化物、木質含む)
26:灰色砂(極細粒砂～極粗粒砂のﾗﾐﾅ見られる、木質、腐植物とても多く含む)
27:ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂礫(中粒～1cm以下の礫多く含み、やや粘質) 28:灰色砂質粘土(細粒砂多く含みｸﾞﾗｲｱ、炭化物若干含む)

第 137 図　5 区北東壁東側断面図（試料採取層準）



1：灰黄褐色土（表土、耕作土）2：黄橙色粘質土（客土、30cm以下の粘土ﾌﾞﾛｯｸ、真砂含む）
3：黒色粘質土（耕作土、炭化物多く含み、陶磁器、土師器、須恵器を少量包含）
4：ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土（床土、耕作土、炭化物、白色風化礫ﾌﾞﾛｯｸを含みややしまる、遺物少量含む）
5：ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土（床土、細砂～中粒砂多く含み、斑状にｶｻﾌﾞ多く含む、炭化物、弥生～須恵器少量含む）
7：黒褐色粘土（細粒砂や中粒砂を斑状に含み弥生～須恵器少量包含、上部は粘性が強く下部はやや砂質）
8：暗灰黄色砂質ｼﾙﾄ（極細粒～細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に多く含む、木片多く含み、土器包含）
10：黒褐色ｼﾙﾄ（炭化物、木片若干含み、弥生～土師器を少量包含、SD01新最終埋土）
11a：ｵﾘｰﾌﾞ黒色ｼﾙﾄ質細砂（ｼﾙﾄ多く含みﾗﾐﾅ見られる、木片多く含むが、土器、木器は少量包含）
11b：黒褐色ｼﾙﾄ質細砂（ｼﾙﾄ多く含みﾗﾐﾅ見られる、木片、遺物ともに少量）
12：暗緑灰色砂礫（極細砂～中粒砂に風化礫、ｼﾙﾄを部分的にﾌﾞﾛｯｸ状に含み、遺物はほとんど包含しない）
13：ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質粘土（わりとしまる、極細砂～細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含み遺物ほとんど包含しない）
14：ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂礫（細砂～3cm以下の礫、風化礫を含み、ﾗﾐﾅ見られる、弥生後期～土師器の土器小片ともに多く包含）
15：ｵﾘｰﾌﾞ黒色ｼﾙﾄ（細砂多く含み、木片、木器包含）
16：黒色砂質ｼﾙﾄ（細砂～中粒砂をﾗﾐﾅ状、ﾌﾞﾛｯｸ状に多く含む、木質、土器を少量包含）
17a：ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘土（細砂をﾌﾞﾛｯｸ状に含む、弥生～土師器、木器包含）
18：ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質ｼﾙﾄ（細砂多く含む、木片、木器、土器包含） 19：灰色砂（極粗砂の粗砂、SD01新、最下層）
23：灰色粘質砂～砂質ｼﾙﾄ（ｼﾙﾄ～中粒砂、部分的に粘土を含む、遺物ほとんど包含せず、腐植物わりと含む）
24：ｵﾘｰﾌﾞ黒色・灰色砂（細砂～粗粒砂にｼﾙﾄを含み、ﾗﾐﾅ見られる、木質、腐植物多く含む）
26：灰色砂（極細粒砂～極粗粒砂のﾗﾐﾅ見られる、木質、腐植物とても多く含む）
29：灰色極細砂～細粒砂（やや粘質で炭化物多く含む）

第 138 図　5 区北東壁西側断面図（試料採取層準）

(3) 花粉分析

渡辺（2010a）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科 (40 ミクロン未満) に細分している。

(4) 植物珪酸体分析

藤原（1976）のグラスビーズ法に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。同定に際して、母植

表 4　植物珪酸体と母植物

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物
1	1	イネ	イネ
3 栽培植物との対応が明らかな分類群	3	イネ籾殻（穎の表皮細胞）	イネ
	21	ムギ類（穎の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
	41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
	61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ族 B	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	ジュズダマ属型	ハトムギ
4 母植物との対応が明らかな分類群	11	サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・アシカキ
	13	マコモ属	マコモ
	31	ヨシ属	ヨシ
	33	ダンチク属	ダンチク
	35	ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
	51	シバ属型	シバ属
	71	トダシバ属	トダシバ属
	81	ススキ属型	ススキ属
	83	ウシクサ族 A	チガヤ属など
	201	メダケ節型	メダケ節
	203	ネザサ節型	ネザサ節
	205	チマキザサ節型	チマキザサ節・チシマザサ節
	207	ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節
	209	マダケ属型	マダケ属
	350	カヤツリグサ科（スゲ属など）	スゲ属
	390	シダ類	シダ類
	501	ブナ科（シイ属）	シイ類
	503	ブナ科（アカガシ亜属）	カシ類
	510	クスノキ科	バリバリノキなど（クスノキ以外）
	520	マンサク科（イスノキ属）	イスノキ属
	530	アワブキ科	アワブキ科
	540	モクレン属型	モクレン属
	570	マツ科型	マツ科
	580	マツ属型	マツ属

物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群（表 4）を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスビーズの個数が 300 を超えるまで計数を行った。

(5) 樹種同定

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2010b）に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント株式会社にて保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で 4 倍～ 600 倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

(6) 14C 年代（AMS）測定

前処理（表 6）後二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。14C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.2（Bronk Ramsey, 2009）を用い、INTCAL13（Reimer et al., 2009）を利用した。また、ウイグルマッチングにも OxCal ver. 4.2 、INTCAL13 の組み合わせを利用し、D_Sequence() 関数 (Bronk Ramsey et al., 2001) を使用した。

分析結果

(1) 軟Ｘ線写真観察

図 139 ～ 141 に実視写真、軟Ｘ線写真、解析結果を示し、以下に層ごとの記載を行う。

① №2 地点（図 135、139）

1) 8 層

細～中粒砂混じり粘土からなる。全体に酸化鉄が検出され、黄褐色を呈す。軟Ｘ線写真観察では、全体に中～強度に発達した中粒～粗粒の小粒状ペッドが認められる。また、暗色を示し、ペッドが特に発達する部分は根跡と考えられる。更に直線的なチャンネルが認められ、根跡と考えられる。さらに、チャンネルを酸化鉄が準被膜するペドフューチャーも認められる。

2) 9 層

やや暗色を呈す、腐植質細砂混じり粘土からなる。軟Ｘ線写真観察で認められる直線的なチャンネルや根跡に沿って酸化鉄が検出され、実視では黄褐色を呈す。軟Ｘ線写真観察では、全体に弱～中度に発達した中粒の小粒状ペッドが認められる。これらの小粒状ペッドが幾つか集まって、中度に発達した粗粒の二次ペッドを成している。また、根跡と考えられる、暗色を示しペッドが特に発

達する部分が認められるほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルも認められる。さらに、チャンネルを酸化鉄が準被膜するペドフューチャーも認められる。

3) 11 層

細砂質粘土からなる。軟Ｘ線写真観察で認められる直線的なチャンネルや根跡に沿って酸化鉄が検出され、実視では黄褐色を呈す。軟Ｘ線写真観察では、全体に弱～中度に発達した中粒の小粒状ペッドが認められるほか、これらの小粒状ペッドが幾つか集まって、中度に発達した粗粒の二次ペッドを成している。また、根跡と考えられる、暗色を示しペッドが特に発達する部分が認められるほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルも認められる。さらに、チャンネルを酸化鉄が準被膜するペドフューチャーも認められる。

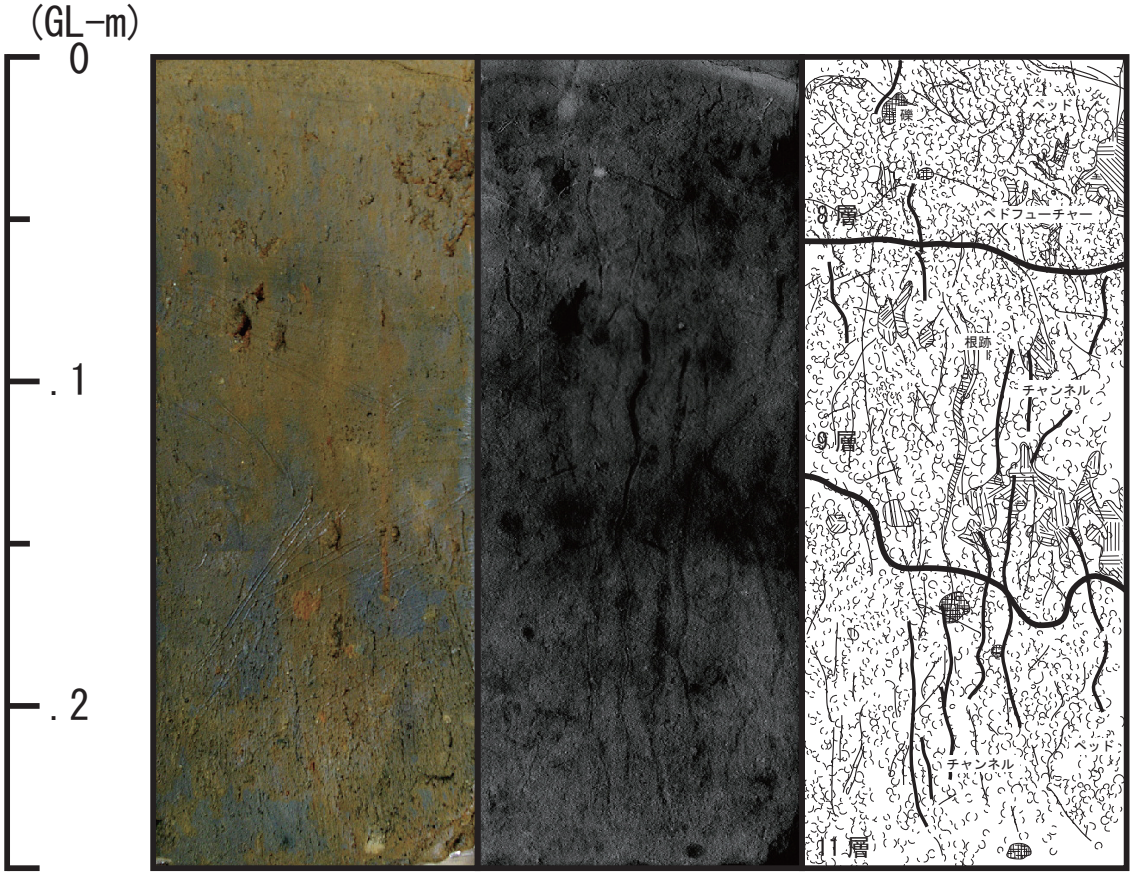
② №３地点（図 135、140）

1) 11 層

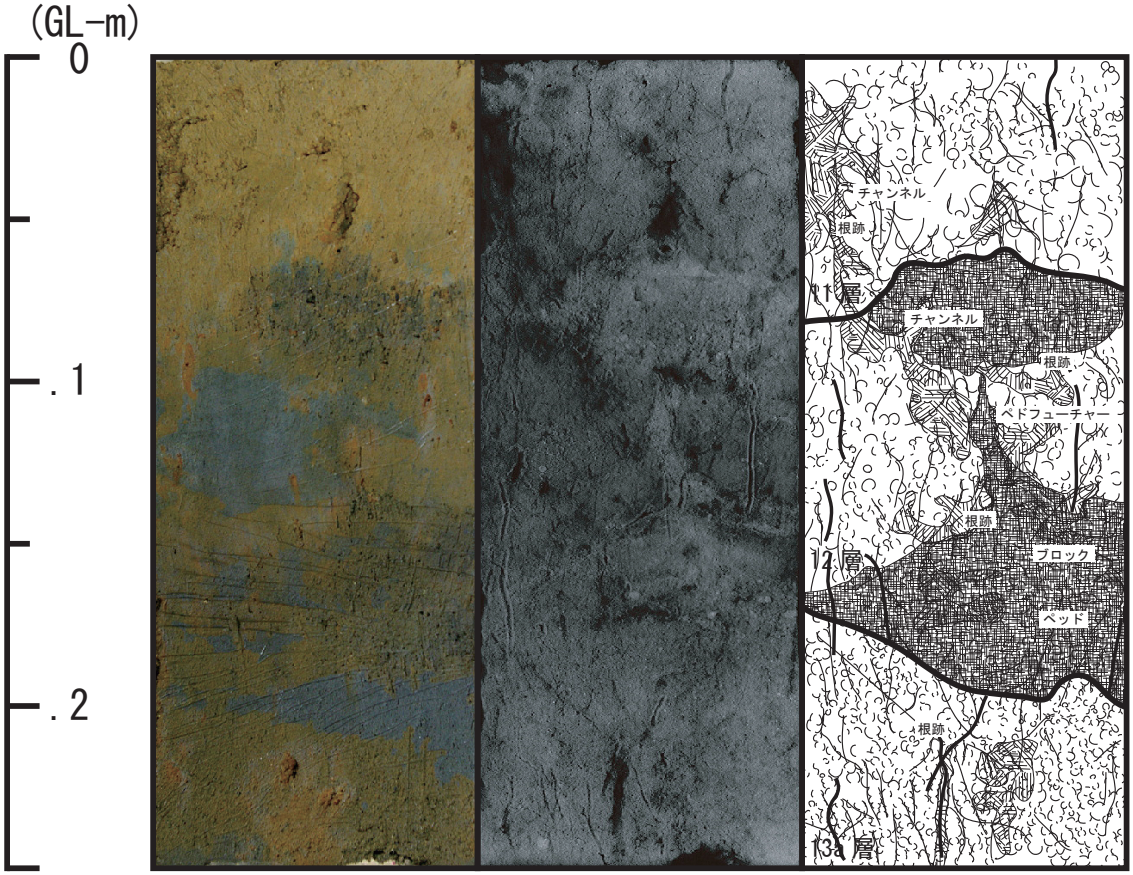
シルト質細～中粒砂からなる。全体に酸化鉄が検出され、黄褐色を呈す。軟Ｘ線写真観察では、全体に弱～中度に発達した中粒～粗粒の小粒状ペッドが認められる。また、根跡と考えられる、暗色を示しペッドが特に発達する部分が認められるほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルも認められる。

2) 12 層

細砂質粘土中に腐植質細～中粒砂質シルトのブロックを含む。このブロックは、実視では暗色を呈している。また、根跡に沿うように酸化鉄が検出され、黄褐色を呈す。軟Ｘ線写真観察では、全体に弱～中度に発達した中粒～粗粒の小粒状ペッドが認められる。また、根跡と考えられる、暗色



第 139 図　3 区№２地点軟Ｘ線写真観察結果（左：実視　中：軟Ｘ線　右：解析結果）



第 140 図　3 区№3 地点軟Ｘ線写真観察結果（左：実視　中：軟Ｘ線　右：解析結果）

を示しペッドが特に発達する部分が認められるほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルも認められる。さらに、チャンネルを酸化鉄が準被膜するペドフューチャーも認められる。

3) 13a 層

シルト質細砂からなる。全体に酸化鉄が検出され、黄褐色を呈す。軟Ｘ線写真観察では、全体に細粒～中粒の小粒状ペッドが中～強度に発達しており、これらが集まって中度に発達した粗粒の二次ペッドを成している。また、根跡と考えられる、暗色を示しペッドが特に発達する部分が認められるほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルも認められる。

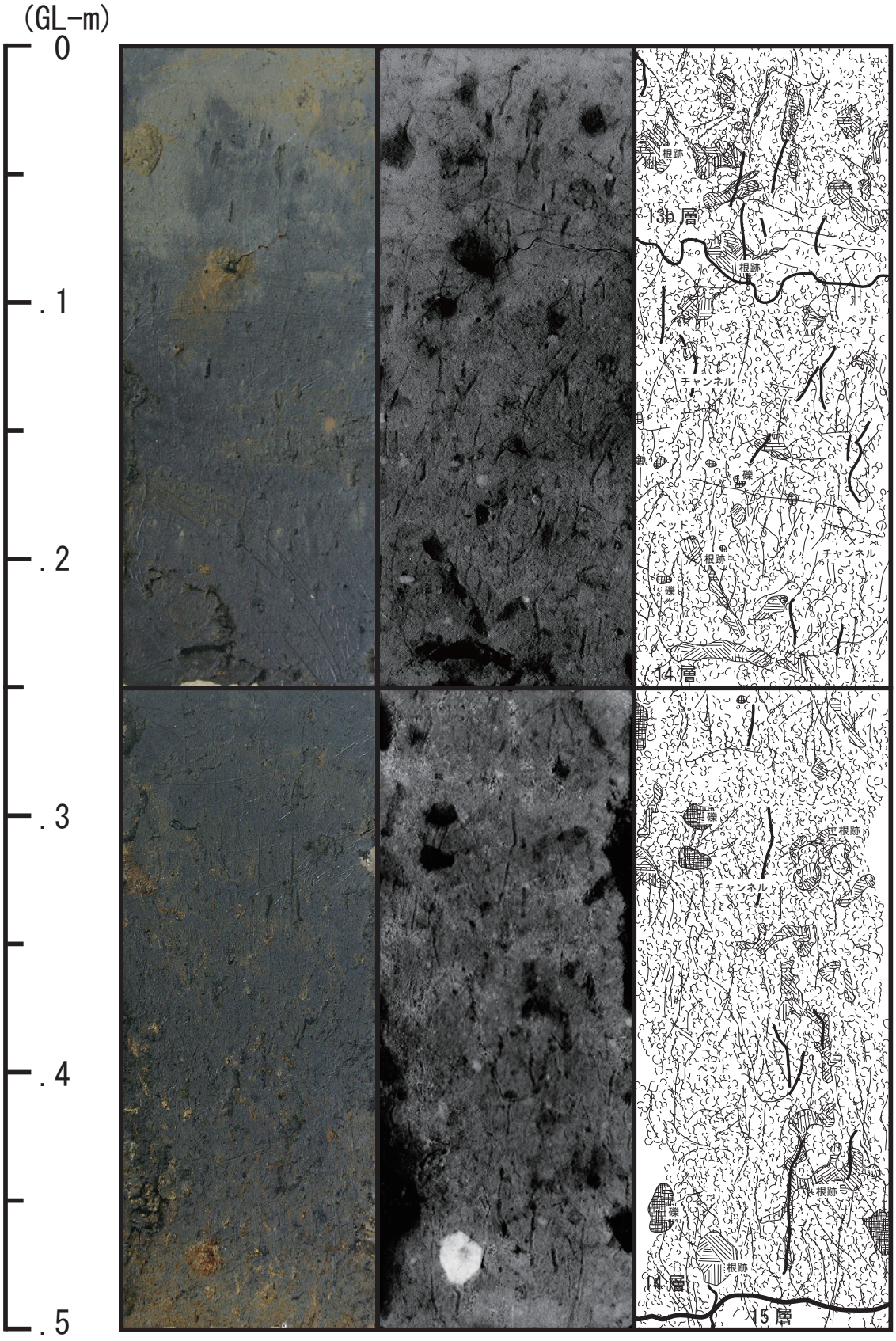
③ №4 地点（図 136、141）

1) 13b 層

腐植質粘土のブロックを含むシルト質細砂からなる。堆積時の巻き上げ、あるいは生物擾乱によって、下位の腐植質粘土が黒褐色のブロック状に含まれる。シルト質細砂には酸化鉄が検出されており、やや褐色を帯びる。軟Ｘ線写真観察では、シルト質細砂の部分の色調がやや明るく写っている。暗色を呈す腐植質粘土のブロック（根跡）が点在するほか、全体に弱～中度に発達した中粒～粗粒の小粒状ペッドが認められ、更に幾つかが集まって中度に発達した粗粒の二次ペッドを成す。このほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルも認められる。

2) 14 層

細粒砂～礫混じり腐植質粘土からなり、炭片を多く含む。局所的に酸化鉄が検出され、実視では黄褐色の部分が点在する。軟Ｘ線写真観察では礫が明色を、炭片及び礫の抜け跡が暗色を呈す。また、根跡の多くは暗色の帯状を呈す。全体に中～強度に発達した細～中粒の小粒状ペッドが認められ、



第 141 図　3 区№4 地点軟Ｘ線写真観察結果（左：実視　中：軟Ｘ線　右：解析結果）

幾つかが集まって中度に発達した粗粒の二次ペッドを成す。このほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルも認められる。さらに、チャンネルを酸化鉄が準被膜するペドフューチャーも認められる。

3) 15 層

シルト質細砂からなる。酸化鉄が検出され、黄褐色を呈す。中～強度に発達した中～粗粒の小粒状ペッドが認められる。

(2) 微化石概査

①３区

花粉は上部では多かったが、下部ではほとんど検出でされない試料もあった。炭は、花粉が多い試料で少なく、花粉が少ない試料で多い傾向にあった。植物片が多量に検出された試料はなかったが、上部で比較的多く､下部では少なかった。珪藻は、全体に少なかった。特に下部では全く検出できない試料も多くあった。火山ガラスは全体に少なかったが、下部では多い傾向にあった。プラント・オパールは、上部では多く、下部では少ない傾向にあった。

表５　微化石概査結果

地点			試料No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ｶﾞﾗｽ	ﾌﾟﾗﾝﾄ・ｵﾊﾟｰﾙ
３区	北西壁	No.１地点	1	◎	△×	△×	△	×	○
			2	◎	△×	△×	△	△×	◎
			3	◎	△×	△	△×	△×	○
			4	◎	△	○	×	△×	△
			5	◎	△	○	×	△×	△
			6	◎	△×	△	×	△	○
			7	◎	△×	○	△×	△	○
			8	◎	△×	○	△	△×	○
			9	◎	△×	○	△×	△	○
			10	◎	△×	○	△×	△	△
			11	○	○	△	×	△	△
		No.２地点	12	△×	◎	△×	×	△	△
			13	△×	◎	△×	×	△	△
			14	△	◎	△×	×	△	△
		No.３地点	15	△	○	△	×	△	△
		No.１地点	16	△	◎	△	×	○	△
			17	△×	◎	△×	×	△	△
			18	△	◎	△×	×	○	○
			19	△×	◎	△×	×	△	△
			20	△×	○	△×	×	△	△
	南東壁	No.４地点	1	△	◎	△	×	○	△
			2	△	◎	△×	△×	△	△
			3	△	◎	△×	△×	△	△
			4	△	◎	△×	△	△	△
５区	北東壁	No.１地点	1	◎	○	◎	×	△	◎
			2	◎	○	◎	△	△	◎
			3	◎	○	◎	△	△	○
			4	◎	○	○	△	△	○
			5	◎	◎	△	×	△	○
			6	◎	○	△	△×	○	○
			7	◎	○	○	△×	△	△
			8	○	△	◎	△×	△	△
		No.２地点	1	◎	△	○	×	○	△
			2	○	△×	◎	×	△	△
			3	○	△×	◎	△×	△	△
		No.３地点	1	◎	△	△	△	△	◎
			2	◎	△	△	△	○	◎
			3	○	△	△	△×	◎	○
			4	○	○	△	△	△	○
			5	◎	○	○	△	△	◎
			6	○	△	◎	△	△	○
			7	◎	△×	◎	△×	△	△
		No.４地点	1	○	○	○	△×	△	◎
			2	◎	○	○	△×	○	◎
			3	◎	△	△	△	△	△
			4	◎	△×	○	△×	△	◎
			5	△	△×	◎	×	△	△

凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×：検出できない

②５区

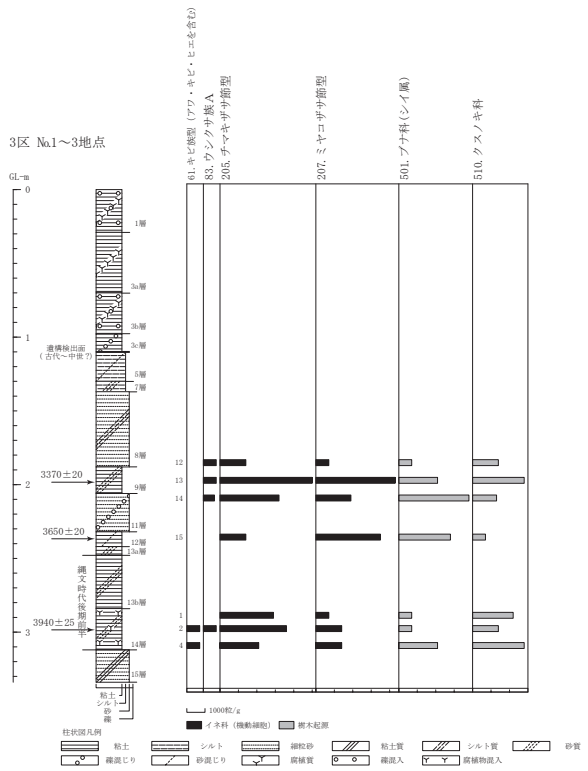
花粉、植物片、プラント・オパールは、全体に多量に検出された。炭は上部で比較的多量に検出されたが、下部では少なかった。珪藻は、全体に少なかく、全く検出できない試料もあった。火山ガラスは全体に少なかったが、No.３地点試料No.３では多量に検出された。

(3) 花粉分析

分析結果を図 146 ～ 151 の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本 (針葉樹）花粉、木本（広葉樹)、草本・藤本花粉、胞子の区分でスペクトルの色を変えて示した。また、花粉総合ダイアグラムとして区分ごとの累積百分率を示したほか､1g 当たりの花粉と胞子の含有量を含有量グラフでとして､対数目盛りで示した。

(4) 植物珪酸体分析

分析結果を図 142 の植物珪酸体ダイアグラムに示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、検出量を 1g あたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。



第 142 図　植物珪酸体ダイアグラム

いずれの試料からも、タケ亜科クマザサ属であるチマキザサ節型、ミヤコザサ節型が 700 ～ 5000 粒 /g の検出密度を示すほか、木本由来のブナ科（シイ属）、クスノキ科が 700 ～ 3800 粒 /g の検出密度を示した。このほか、下位の２試料からキビ属型が、９層の３試料 14 層中位からウシクサ族Ａが 600 ～ 700 粒 /g の検出密度を示した。

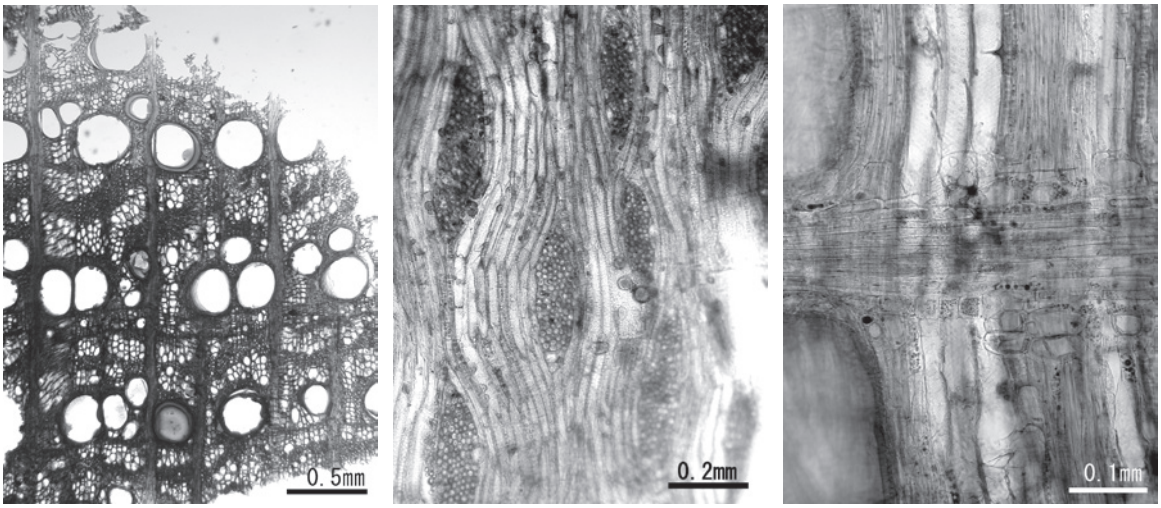
(5) 樹種同定

分類ごとに特徴的な試料（下線試料）の記載を行い、顕微鏡写真を図 143 に示した。

① ケヤキ Zelkova serrata (Thunb.) Makino

試料名：W1(W15082001)

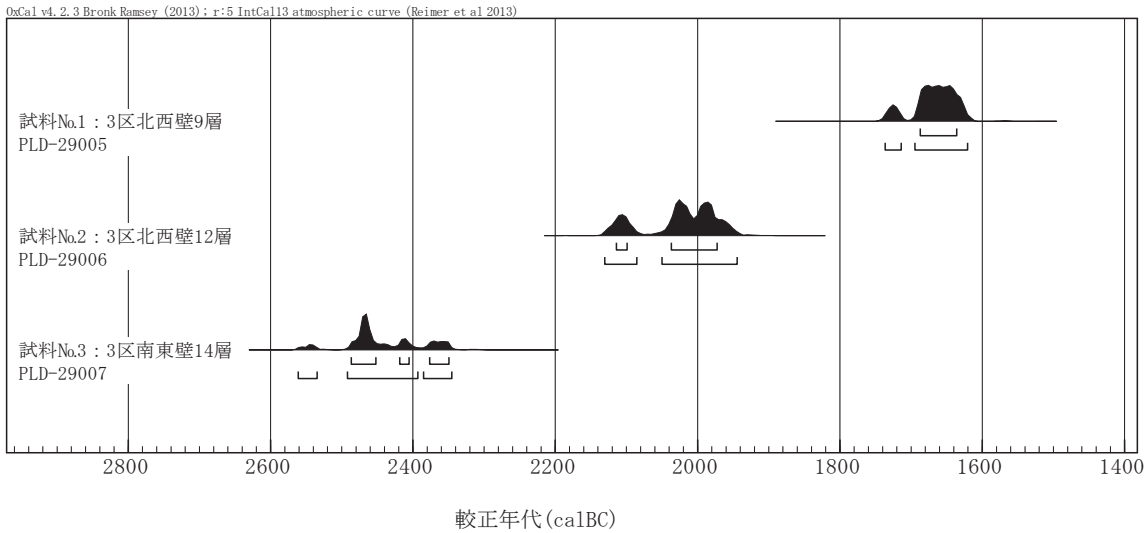
記載：環孔材で大きく円形ないし楕円形の道管が単独でほぼ１列に配列する。孔圏外には小さく角張った道管が多数房状に集合し、接線状～斜状に配列する。道管せん孔は単せん孔で、小



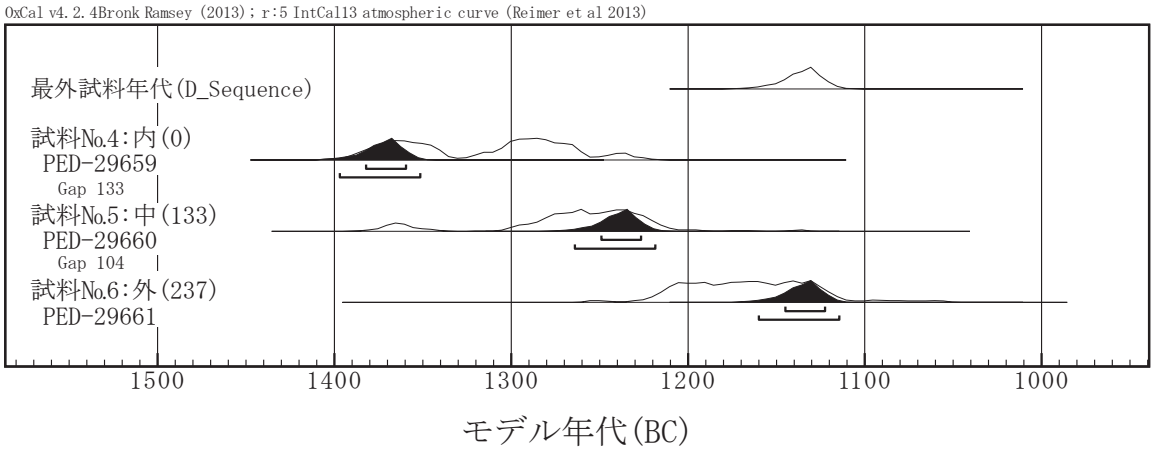
第 143 図　樹種同定顕微鏡写真 (左：横断面　中：接線断面　右：放射断面)

表 6　AMS 年代測定結果

試料No.	出土遺構ほか	種類	重量 (g)	前処理	δ１３C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	補正年代＊1 (yrBP ± 1σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲		測定番号
								1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	(PLD)
1	3 区北西壁 9 層 (No. 2 地点)	腐植土	498	湿式篩分 :106 μm 以下 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)	-17.74 ± 0.19	3372 ± 21	3370 ± 20	BC1688-1637(68.2%)	BC1737-1715(10.9%) BC1695-1621(84.5%)	29005
2	3 区北西壁 12 層 (No. 3 地点)	腐植土	443		-23.08 ± 0.19	3650 ± 22	3650 ± 20	BC2115-2100(9.8%) BC2038-1973(58.4%)	BC2131-2086(20.2%) BC2051-1945(75.2%)	29006
3	3 区南東壁 14 層 (No. 4 地点)	炭	0.159	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)	-26.30 ± 0.14	3942 ± 23	3940 ± 20	BC2487-2453(44.2%) BC2419-2406(8.7%) BC2377-2350(15.3%)	BC2562-2535(6.7%) BC2493-2394(69.7%) BC2386-2346(19.0%)	29007
4	内 (0) (ROK-1)	生材 (ケヤキ)	0.010		-28.94 ± 0.20	3047 ± 20	3045 ± 20	BC1378 － 1345(29.4%) BC1305 － 1265(38.8%)	BC1394 － 1335(40.2%) BC1324 － 1257(49.7%) BC1251 － 1231(5.5%)	29659
5	中 (133) (ROK-2)		0.019		-28.55 ± 0.23	3017 ± 19	3015 ± 20	BC1282 － 1223(68.2%)	BC1381 － 1345(10.2%) BC1305 － 1207(85.2%)	29660
6	外 (237) (ROK-3)		0.008		-30.60 ± 0.18	2954 ± 19	2955 ± 20	BC1209 － 1128(68.2%)	BC1256 － 1251(0.5%) BC1231 － 1109(93.9%) BC1099 － 1088(1.1%)	29661
ウィグルマッチング結果						最外試料年代		BC1146 － 1123(68.2%)	BC1161 － 1115(95.4%)	
＊１δ１３C補正年代										



第 144 図　AMS 年代測定結果 (3 区試料№ 1 ～ 3)



第 145 図　ウイグルマッチング結果 (5 区試料№ 4 ～ 6)

道管にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で、単列の小型のものの他に、５～８細胞幅の紡錘型放射組織が目立つ。また、上下の縁辺に結晶細胞が存在するものもが多くある。以上の組織上の特徴からケヤキと同定した。

(6) 14C 年代（AMS）測定

年代測定結果を表６及び図 144、145 に示す。表６には、試料ごとに試料の詳細、前処理方法、δ 13 C 値と測定年代など３種類の年代を示しているほか、試料№４～６を対象としたウイグルマッチング結果（最外年輪の年代）を示している。図 144 には、試料№１～３の確率分布とσ、２σの較正範囲を一覧形式で示した。図 145 には、試料№４～５の確率分布と、ウイグルマッチング結果を一覧形式で示した。ただし、ここで示した「最外試料年代」は、238 年輪目の年代値である。最外試料が５年輪からなることから、「最外年輪年代」は、これに２年を加えたものである。

花粉分帯

花粉分析結果を基に、区ごとに局地花粉帯を設定した。以下に、下位から上位に向けて、各局地花粉帯の記載を行う。

(1) ３区

① 3- Ⅴ帯（北西壁試料№ 20 ～ 14、南東壁試料№ 4 ～ 1）

年代測定結果及び後述の様 JZ01 との比較から、縄文時代後期の植生を示していると考えられる。

花粉化石の含有量が少なく、統計処理に十分な量の木本花粉が検出できなかった。また、胞子が全体の 95％以上を占めている。木本花粉ではアカガシ亜属と、マキ属、モミ属、マツ属（複維管束亜属）、スギ属などの針葉樹種が高率を示す傾向にある。

② 3- Ⅳ帯（北西壁試料№ 13、12）

年代測定結果から、縄文時代後期の植生を示していると考えられる。

花粉化石の含有量が少なく、統計処理に十分な量の木本花粉が検出できなかった。また、胞子が全体の 97％以上を占めている。木本花粉の検出量が少なく、傾向がつかめなかった。

③ 3- Ⅲ帯（北西壁試料№ 11 ～ 4）

出土遺物や遺構の特徴から「古代から中世」頃の植生を示すと考えられている。また５区や JZ01 との比較から、やや広い「縄文時代晩期から中世」頃の植生を示している可能性もある。

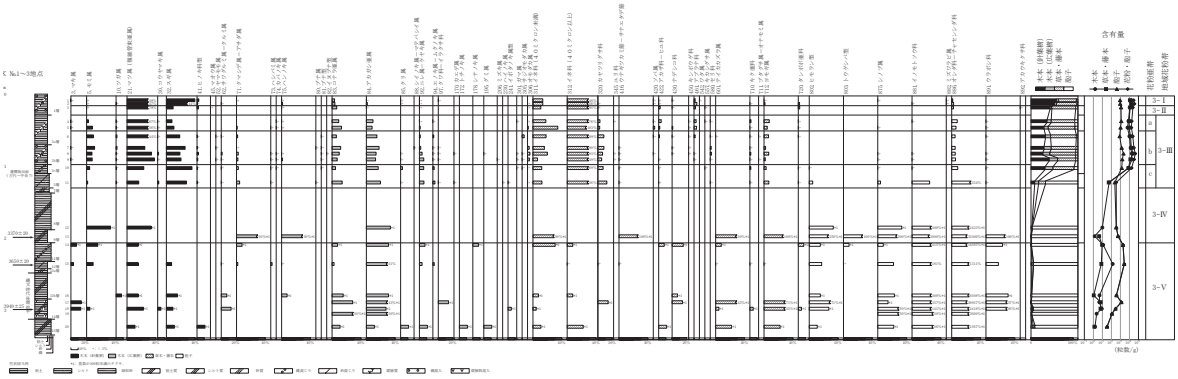
Ⅴ帯、Ⅳ帯に比べ胞子の割合が低下し、試料№ 11 では 69％と高いものの、試料№ 10 より上位では数％を示すようになる。また木本花粉の割合は、草本花粉と同程度で推移する。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属が特徴的に検出され、その変遷から c 亜帯（試料№ 11、10）、b 亜帯（試料№ 9 ～ 6）、a 亜帯（試料№ 5、4）に細分した。それぞれの特徴は、以下のようである。

1) c 亜帯（試料№ 11、10）

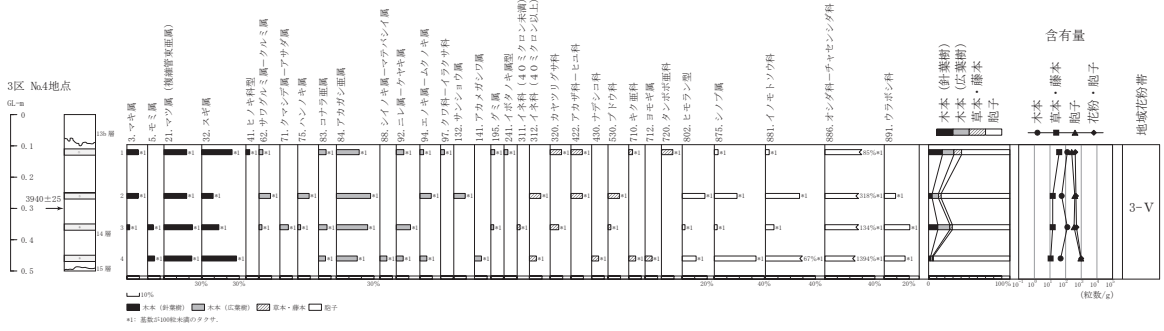
スギ属が最も高率で、アカガシ亜属、マツ属（複維管束亜属）が続く。更にコナラ亜属も、その他の種類に比べ高率を示す。

2) b 亜帯（試料№ 9 ～ 6）

マツ属 (複維管束亜属)、スギ属が高率を示し、アカガシ亜属が続く。また、スギ属の減少傾向



第 146 図　3 区北西壁 (№１～３地点) の花粉ダイアグラム



第 147 図　3 区南東壁 (№４地点) の花粉ダイアグラム

が顕著である。このほか低率であるが、モミ属、コナラ亜属が増加傾向を示す。

3) a 亜帯（試料№ 5、4）

マツ属 (複維管束亜属) が高率を示し、更に増加傾向を示す。また、モミ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属がその他の種類に比べ高率で出現するが、何れも減少傾向を示す。

④ 3- Ⅱ帯（北西壁試料№ 3）

後述の様に、JZ01 との比較から、中世から近代の植生を反映していると考えられる。

草本花粉の割合が 51％、木本花粉が 44％を占める。木本花粉ではマツ属 (複維管束亜属) が高率を示す。その他の種類はスギ属、コナラ亜属が数％の出現率を示すに止まる。

⑤ 3- Ⅰ帯（№ 1 地点試料№ 2、1）

後述の様に、JZ01 との比較から、近・現代の植生を反映していると考えられる。

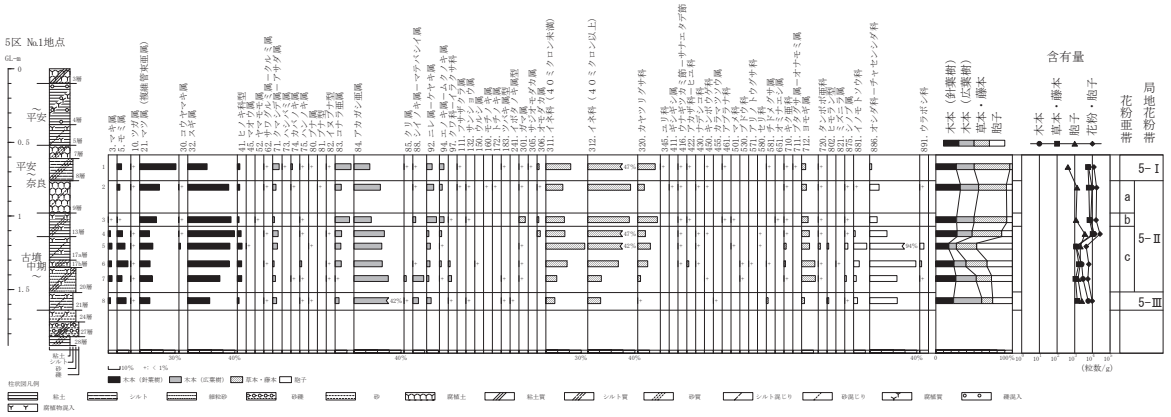
木本花粉の割合が 50％を超え、草本花粉は 40％程度へと減少する。木本花粉ではマツ属 (複維管束亜属) が減少する一方、スギ属が急増し、同程度の出現率になる。

(2) 5 区

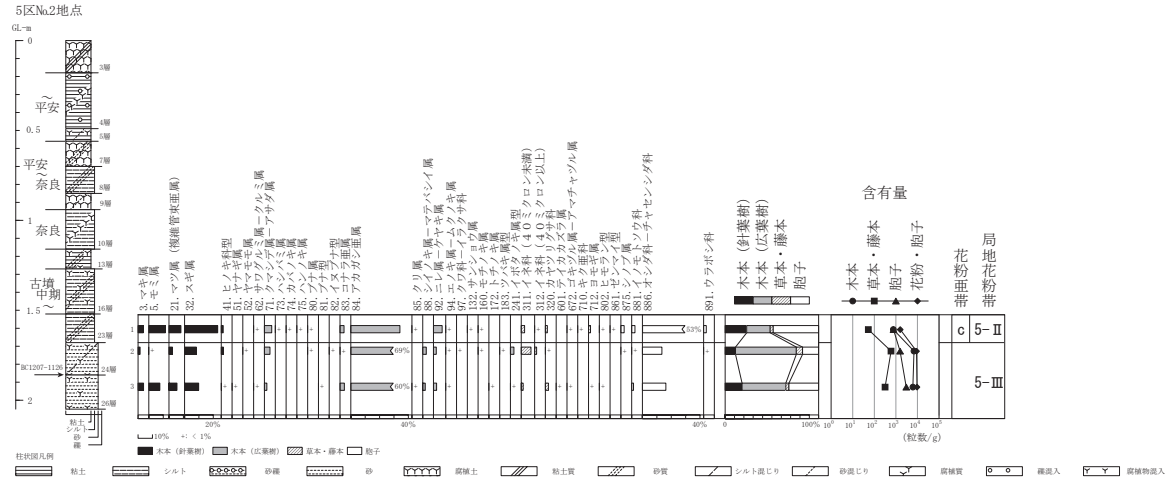
① 5- Ⅲ帯（№ 1 地点試料№ 8、№ 2 地点試料№ 2、3、№ 3 地点試料№ 7、№ 4 地点試料№ 5）

年代測定値が得られ、縄文時代晩期初頭の植生を示していると考えられる。

アカガシ亜属が特に高率で出現し、スギ属がその他の種類に比べやや高率を示す。この外、マキ属、モミ属、マツ属 (複維管束亜属)、ヒノキ科型などの針葉樹種、クマシデ属 - アサダ属、コナラ亜属、



第 148 図　5 区№ 1 地点の花粉ダイアグラム



第 149 図　5 区№ 2 地点の花粉ダイアグラム

シイノキ属 - マテバシイ属、ニレ属 - ケヤキ属などの広葉樹種も検出される。また草本花粉は、ほとんど検出されない。

② 5- Ⅱ帯（No. 1 地点試料No. 7 ～ 2、No. 2 地点試料No. 1、No. 3 地点試料No. 6 ～ 1、No. 4 地点試料No. 4 ～ 1）

後述のように、出土遺物及び年代測定結果から縄文時代晩期から平安時代頃の植生を示していると考えられる。

スギ属とアカガシ亜属で大半を占める。さらに、これらの増減に伴って、その他の種類も増減を示す。このことから 5- Ⅱ帯を、下位から c ～ a 亜帯の３つに細分した。

1) c 亜帯（No. 1 地点試料No. 7 ～ 4、No. 2 地点試料No. 1、No. 3 地点試料No. 6 ～ 3、No. 4 地点試料No. 4 ～ 2）

出土遺物及び年代測定結果から縄文時代晩期～古墳時代中期頃の植生を示していると考えられる。

スギ属が増加傾向を示すが、アカガシ亜属には顕著な増減はない。一方、スギを除く針葉樹種が、全般に高い出現率を示す。

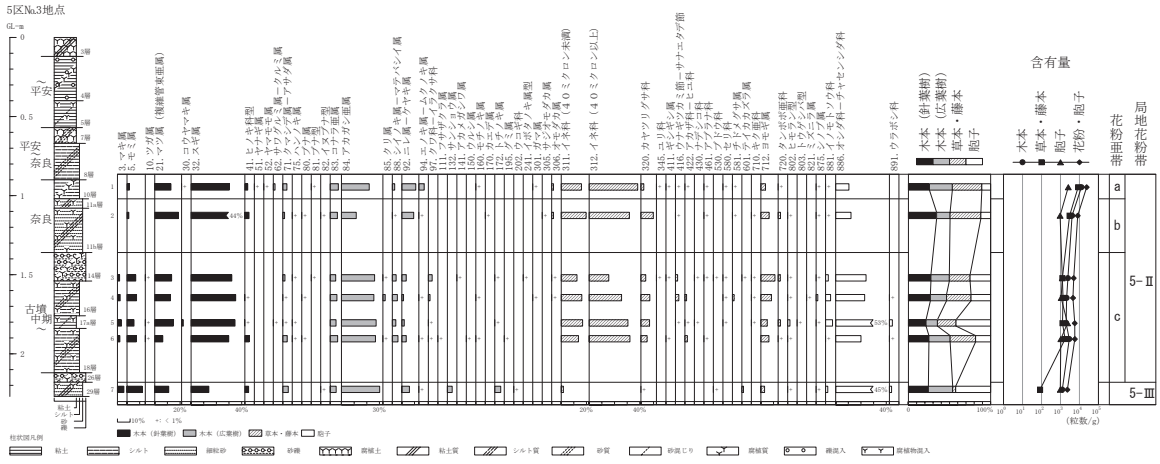
2) b 亜帯（No. 1 地点試料No. 3、No. 3 地点試料No. 2）

出土遺物から、古墳時代中期～奈良時代頃の植生を示していると考えられる。

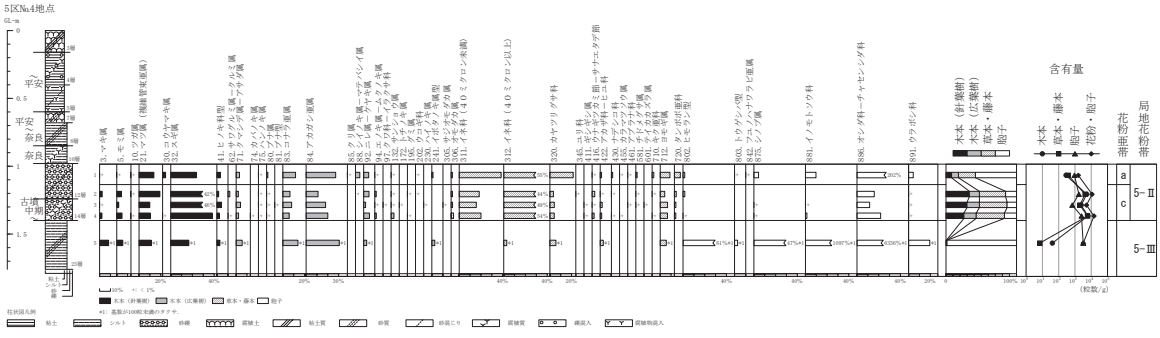
アカガシ亜属のほか、マキ属、モミ属，ヒノキ科型の出現率が低下する。一方コナラ亜属は増加する。

3) a 亜帯（No. 1 地点試料No. 2、No. 3 地点試料No. 1、No. 4 地点試料No. 1）

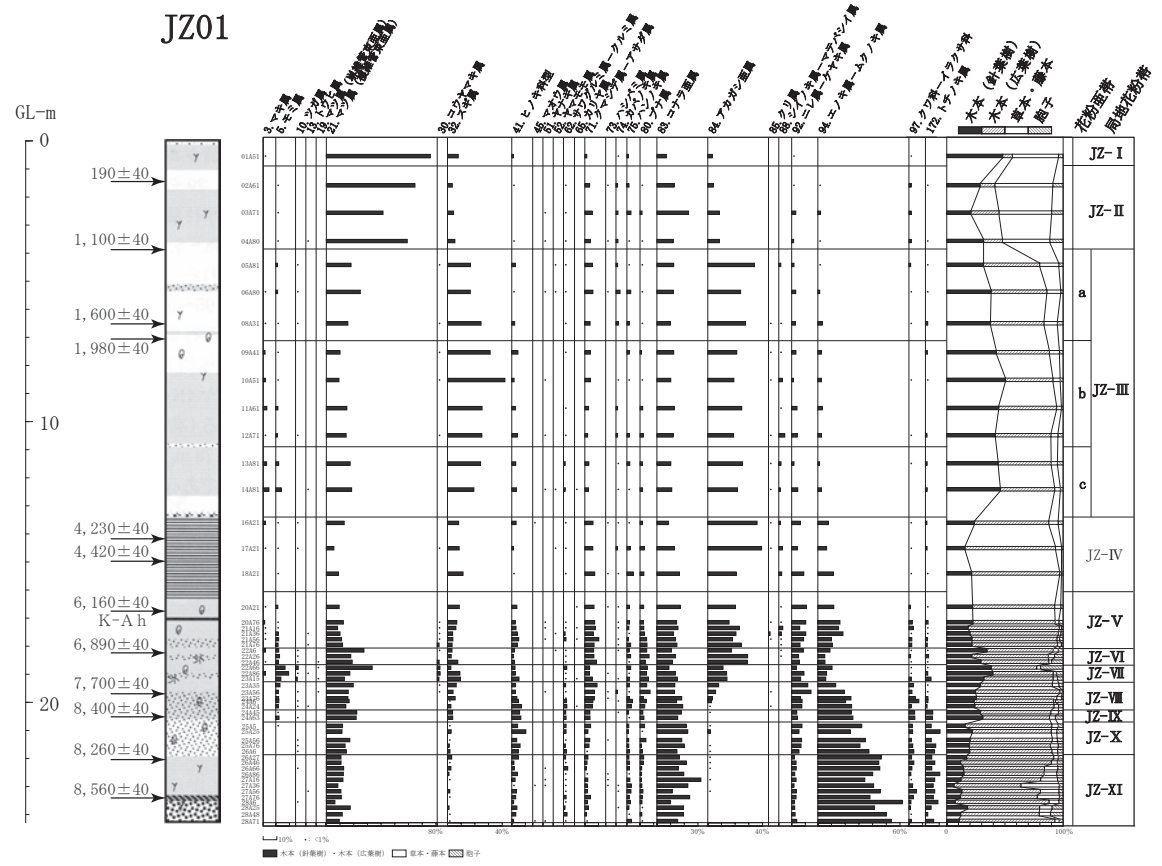
出土遺物から、奈良時代～平安時代頃の植生を示していると考えられる。



第 150 図　5 区No. 2 地点の花粉ダイアグラム



第 151 図　5 区No. 2 地点の花粉ダイアグラム



第 152 図　JZ01 の花粉ダイアグラム：主な分類群のみ示す　（渡辺，未公表）

アカガシ亜属が顕著に増加し､モミ属、ヒノキ科型は微増する。一方、コナラ亜属は減少する。また、マキ属はほとんど検出されなくなる。

③ 5- Ⅰ帯（№ 1 地点試料№ 1）

出土遺物から、奈良時代～平安時代頃の植生を示していると考えられる。

5- Ⅱ帯から、マツ属 (複維管束亜属)、コナラ亜属が増加する。一方、スギ属、アカガシ亜属が減少する。

表 7　調査区間及び JZ01 との対比

麓Ⅱ遺跡						JZ01		
3 区			5 区					
3- Ⅰ						JZ- Ⅰ		190 ± 40
3- Ⅱ						JZ- Ⅱ		1100 ± 40
3- Ⅲ	a							
	b		5- Ⅰ		奈良～平安時代			
	c	古代～中世	5- Ⅱ	a	奈良時代～	JZ- Ⅲ	a	1600 ± 40
				b	～奈良時代		b	1980 ± 40
				c	～古墳時代中期			
			5- Ⅲ		縄文時代晩期			
3- Ⅳ		縄文時代後期					c	
3- Ⅴ								

(3) 調査区間の対比

低い稜線を挟んで、調査地の北東から北西にかけて「神門水海」が広がっていたと考えられる。また､「神門水海」は面積を徐々に縮小し､「神西湖」として当時の南西端に残存している。「神西湖」では、完新世初頭以降の湖底堆積物が採取され（JZ01）、14C 年代測定試料、花粉分析が行われている（渡辺、未公表)。ここでは、花粉化石群集の比較・対比結果（表 7）から、花粉化石群集の示す時期について考察する。

① 3- Ⅴ帯

3- Ⅴ帯では、統計処理に十分な量の木本花粉化石検出できた試料が僅かであったが、アカガシ亜属が特に高率を示す傾向にあり、マキ属、モミ属、マツ属（複維管束亜属)、スギ属などの針葉樹種が数～ 20％程度の出現率を示した。また、縄文時代後期を示す年代測定値が得られている。

一方 JZ01 では、縄文時代後期～晩期を示す年代測定値は得られていないが、堆積速度計算と宍道湖湖底コア SB01 との比較から、JZ-Ⅲ帯ｃ亜帯が、おおよそ縄文時代後期を示していると考えられている。JZ-Ⅲ帯ｃ亜帯では、アカガシ亜属が 20 ～ 30％であり、マツ属（複維管束亜属）が 20％、スギ属が 20 ～ 30％で、その他の針葉樹種は数％の出現率を示す。大きな傾向で両者は類似するが、アカガシ亜属とスギ属の割合が大きく異なる。このことは、今回の調査地が周囲を丘陵で囲まれる小盆地内にあり、周囲に平野を伴う湖沼で堆積した JZ01 に比べ、丘陵の植生であったカシ林の影響をより強く受けたものと考えられる。以上の事柄から、両花粉帯の対比は可能と考える。

② 3-Ⅳ帯

出土遺物等からの堆積時期の推定が成されていないが、縄文時代後期の年代測定結果が得られている。また、花粉含有量が極めて少なく、花粉層序学的な比較・対比ができなかった。

③ 5-Ⅲ帯

アカガシ亜属が特に高率を示す傾向にあり、マキ属、モミ属、マツ属（複維管束亜属）などの針葉樹種が数～ 10％、スギ属が 10 ～ 20％程度の出現率を示した。また、縄文時代晩期の初期を示す年代測定値が得られている。前述の様に JZ01 では、縄文時代後期～晩期を示す年代測定値は得られていないが、堆積速度計算と宍道湖湖底コア SB01 との比較から、JZ-Ⅲ帯ｂ亜帯下部が、おおよそ縄文時代晩期を示していると考えられる。JZ-Ⅲ帯ｂ亜帯下部では、スギ属が 25％、アカガシ亜属が 20％、マツ属（複維管束亜属）が 15％程度で、その他の針葉樹種は数％の出現率を示す。3-Ⅴ帯同様に、5-Ⅲ帯でも JZ01 に比べアカガシ亜属が高い出現率を示している。一方で、マツ属（複維管束亜属）とスギ属の割合では、スギ属が高率になる点で一致する。前述の様に、今回の調査地と JZ01 の地形的な要因から、5-Ⅲ帯でアカガシ亜属が高率を示している可能性もある。以上の事柄から、両花粉帯の対比は可能と考えられる。

④ 3-Ⅲ帯、5-Ⅱ帯

1) 3-Ⅲ帯ｃ亜帯、5-Ⅱ帯

麓Ⅱ遺跡３区では、3-Ⅲ帯でスギ属の出現率が高率になるものの、下部のｃ亜帯で 30％を超える程度である。さらに、3-Ⅲ帯ｃ亜帯中部に古代～中世頃の遺構面が検出されている。一方５区では、5-Ⅱ帯全体でスギ属の出現率が高く、特にｃ、ｂ亜帯でスギ属が 40％を超える。出土遺物などから、5-Ⅱ帯ｃ亜帯は縄文時代晩期～古墳時代中期頃、ｂ亜帯は古墳時代中期～奈良時代頃、ａ亜帯は奈良～平安時代頃の植生を示すと考えられる。これらのことから、3-Ⅲ帯ｃ亜帯に、5-Ⅱ帯の全体（あるいはｃ、ｂ亜帯）が含まれていると考えられる。

2) 3-Ⅲ帯ｂ亜帯、5-Ⅱ、Ⅰ帯

3-Ⅲ帯ｂ亜帯は、マツ属（複維管束亜属）の増加と、スギ属の減少が特徴である。下位のｃ亜帯中部に古代～中世頃の遺構面が検出され、花粉石群集には大きな変化がないことから、引き続き古代～中世頃の植生を示すと考えられる。５区では、5-Ⅱ帯ｃ～ｂ亜帯でスギ属の出現率ピークがあり、ａ亜帯では減少傾向が認められる（スギ属の減少傾向は、上位の 5-Ⅰ帯でより顕著になる。）。また、5-Ⅰ帯は奈良時代～平安時代頃の植生を示していると考えられている。これらのことから、3-Ⅲ帯ｂ亜帯と 5-Ⅰ帯（あるいはⅡ帯ａ亜帯も）が対比できる。

3) 3-Ⅲ帯ａ亜帯

3- Ⅲ帯 b 亜帯から続くマツ属（複維管束亜属）の増加が続き、40％を超える。この結果、他の分類群は 10％程度までに止まる。また、3- Ⅲ帯 b 亜帯に対比した 5- Ⅰ帯では、マツ属（複維管束亜属）が顕著な増加を始めるが 30％に止まり、3- Ⅲ帯 a 亜帯に対比される可能性は低い。

4)　JZ01 との対比

3- Ⅲ帯及び、5- Ⅲ～Ⅰ帯で認められるスギ属の増加減少と、並行して認められるマツ属（複維管束亜属）の微増から急激な増加までを JZ01 に比較すると以下の様に対比できる。

前述の様に、5- Ⅲ帯が JZ- Ⅲ帯 b 亜帯下部に対比できる。

スギ属がピークを成すのは 3- Ⅲ帯 c 亜帯、5- Ⅱ帯 c ～ b 亜帯であり、JZ01 では JZ- Ⅲ帯 b 亜帯上部である。5- Ⅱ帯 c ～ b 亜帯が示す時期は縄文時代晩期～奈良時代頃で、3- Ⅲ帯 c 亜帯、JZ- Ⅲ帯 b 亜帯上部は、この時期を含むことから、JZ- Ⅲ帯 b 亜帯上部に 3- Ⅲ c 亜帯、5- Ⅱ帯 c、b 亜帯が対比できる。

5- Ⅱ帯 a 亜帯では b 亜帯に比べマツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属がやや増加し、スギ属がやや減少する。同様の傾向は JZ- Ⅲ帯 a 亜帯で認められるが、3- Ⅲ帯 c 亜帯から b 亜帯ではこの傾向は認められない。時期的には JZ- Ⅲ帯 a 亜帯と 5- Ⅱ帯 a 亜帯、3- Ⅲ帯 c 亜帯から b 亜帯が対応するが、3 区ではこの層準が欠如している可能性もある。

マツ属（複維管束亜属）の増加と、スギ属の減少が顕著に認められるのは、3- Ⅲ帯 b、a 亜帯、5- Ⅰ帯である。5- Ⅰ帯が示す時期は奈良時代～平安時代頃で、3- Ⅲ帯 b 亜帯は、この時期を含む。一方、JZ01 では JZ- Ⅲ a 亜帯帯～Ⅱ帯が同時期に相当する。前述の様に JZ- Ⅲ帯 a 亜帯ではアカガシ亜属が増加しており、3- Ⅲ帯 b、a 亜帯、5- Ⅰ帯とは様子が異なる。更に JZ- Ⅱ帯では後述の様に、既にマツ属 (複維管束亜属）が高率になり、スギ属は低率である。これらのことから、JZ01 では 3- Ⅲ帯 b 亜帯、5- Ⅰ帯に対応する層準が欠如していると考えられる。

3- Ⅲ帯 a 亜帯では、マツ属（複維管束亜属）が高率を示すが、コナラ亜属、アカガシ亜属などが 10％程度残存する。時期的には JZ- Ⅱ帯が対応するが、JZ- Ⅱ帯ではマツ属（複維管束亜属）の出現率が 3- Ⅲ帯 a 亜帯に比べ、更に高率を示す。このことから、3- Ⅲ帯 a 亜帯が JZ- Ⅱ帯下部に対比できる。

⑤ 3- Ⅱ帯

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、その他の分類群は数％以下に止まる。JZ01 ではコナラ亜属の出現率がやや高いものの、JZ- Ⅱ帯で同様の特徴が認められる。JZ- Ⅱ帯は、その下位境界で古代頃、上位境界で近世の年代測定結果が得られている。また JZ- Ⅱ帯は、広域には中世～近代のイネ科帯マツ属亜帯（渡辺・中川，2013）に対比されている。

⑥ 3- Ⅰ帯

マツ属（複維管束亜属）の卓越に加え、スギ属の増加が認められる。JZ01 では JZ- Ⅰ帯で同様の特徴が認められる。JZ- Ⅰ帯は、その下位境界で近世の年代測定結果が得られている。また JZ- Ⅰ帯は、広域には近・現代のイネ科帯マツ属・スギ属亜帯（渡辺・中川，2013）に対比されている。

古環境（堆積環境、古植生）の推定

花粉帯ごとに堆積環境、古植生を推定する。植生の変化を時間軸に沿って、古い時期から新しい時期へと示すために、ここでは下位の 3- Ⅴ帯から示す。

(1) 3- Ⅴ帯（縄文時代後期前半）

① ３区での暗色帯の成因

調査地点は九景川中流域の山間盆地である。堆積物の分布する標高から、この時期に、下流に存在した「神門水界」の一部であった可能性はない。また試料を採取した 15 層から 11 層にかけては砂泥互層であり、粘土の堆積する沼沢湿地に、砂礫が流入したものと考えられる。

また、軟Ｘ線写真観察ではブロックや根跡と考えられる直線的なチャンネルが顕著に認められるものの、ペッドの発達はさほど強くないことから、土壌化を受けているものの、さほど強くなかったと考えられる。

微化石概査では炭片の含有量が多く、花粉、植物片、珪藻、植物珪酸体がほとんど含まれていないことが明らかになった。花粉化石の含有量が少ない原因について、一般には以下のようなことが考えられている。今回の微化石検出傾向と比べると、以下のようになる。

1．堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石の含有量が少ない。

堆積速度が速い場合、花粉化石に限らず、全ての微化石の含有量が少なくなる。一方、今回の分析では炭片が多量に検出され、状況が異なる。ただし、火砕流堆積物（あるいは火砕流堆積物の二次堆積物）では（供給量が圧倒的に多いことから）多量の炭片が含まれることから、15 層から 11 層が出雲平野西部に分布する、三瓶火山起源の火砕流に関連した堆積物である可能性がある。

2．堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。

花粉化石と動態の似た炭片が多量に含まれる。また粘土～シルトが主体であり、状況が異なる。

3．土壌生成作用に伴う堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。

土壌化の下では、花粉化石に限らず植物片も消滅する。また、陸上での堆積（土壌化）が前提になるので、珪藻が含まれないことも多い。一方で炭片が多量に含まれ、植物珪酸体の含有量も多い。今回の各層では植物珪酸体の含有量が少なく、状況が異なる。

4．花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。

花粉粒や植物片などの有機物、珪藻や植物珪酸体など鉱物質のものも、堆積後の堆積物のグライ化などの化学変化に伴い（程度に差があるものの）分解してしまう。一方炭片は化学的に安定しており、堆積後に消滅することがない。炭片のみが多量に認められる今回の状況と一致し、15 層から 11 層も堆積後になんらかの化学変化を受けた可能性がある。

5．有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

有機物を除去した、珪藻や植物珪酸体ではあてはまらない。今回は珪藻、植物珪酸体も少なく、状況が異なる。

以上のことを整理すると、該当層準が火砕流堆積物の二次堆積（縄文時代後期前半の三瓶火山の活動で火砕流などが発生し、神戸川流域に多量の堆積物をもたらしている。）であった可能性が指摘できる。また、近辺で大規模な森林火災が発生しても多量の炭片が生成され、今回と同様の状況が起こる可能性が指摘できる。一方該当層準には青～緑灰色を呈す「グライ土壌」が発達しており、調査時に酸化され赤褐色に変色している様子が観察された。このように堆積後に化学変化を受けた

ことは確かである。

したがって、今回認められた暗色帯は、土壌化が主因で炭片が濃集したのではなく、本質的に炭片を多く含む（三瓶火山起源の）火砕流二次堆積物、あるいは近辺での森林火災の影響下で短期間に堆積したもので、堆積後に受けたグライ化などの化学反応によって、有機物が溶解して形成されたものと考えられる。

② 古植生の推定

1) 沼沢湿地内の植生

花粉化石ではイネ科（40 ミクロン未満）、イネ科（40 ミクロン以上）などか検出され、ヨシやマコモなどの湿性植物由来の植物珪酸体が検出されることが期待されたが、全く検出されなかった。このことから、湿地内にはカヤツリグサ科由来の湿性植物であるウキヤガラなどのホタルイ類（カヤツリグサ科）が主に生育していたと考えられる。

2) 森林植生

JZ01 では JZ-Ⅲ帯 c 亜帯が対応し、アカガシ亜属の卓越と、針葉樹種の増加で特徴付けられている。Ⅴ帯ではほとんどの試料で木本花粉含有量が少なかったが、試料№ 15 では唯一 107 粒 /g の含有量を示し、110 粒の木本花粉が検出できた。ここでは、アカガシ亜属が特に高率で出現するほか、マキ属、モミ属、マツ属（複維管束亜属）、スギ属などの針葉樹種が高率を示す傾向にあり、JZ01 と類似した。このことから、3- Ⅴ帯とした花粉化石群種は、木本花粉含有量が少なく、検出量も少ないものの、植生解析に十分利用可能と考えられる。

検出した花粉化石群集から、調査地周囲の丘陵はカシ類を主要素として、モミやイヌマキ（マキ属）、アカマツなどの針葉樹を混淆する照葉樹林で覆われていたと考えられる。また、シイノキ属やクスノキ科の植物珪酸体が検出されており、シイノキやクスノキ類も、周囲の照葉樹林を構成する要素であったと考えられる。一方、谷筋にはスギ林が成立していたと考えられる。また、花粉分析で検出量が飛び抜けて多いオシダ科 - チャセンシダ科胞子は、林床に生育するイノデなどに由来すると考えられる。さらに、籐本のテイイカカズラが照葉樹林やスギ林内で樹木に巻き付いていたと考えられる。一方、林縁から沼沢湿地にかけての草地には、アカザ科−ヒユ科、ヨモギ類（キク科）の草本や、植物珪酸体が検出されたササ類、チガヤ（イネ科）が生育していたと考えられる。

(2) 3-Ⅳ帯（縄文時代後期）

① 堆積環境の推定

3- Ⅴ帯とした 3 区 11 層から 15 層に掛けての層準同様に、9 層から 8 層に掛けても砂泥互層が続いている。堆積相から、粘土の堆積する沼沢湿地に、砂礫が流入したものと考えられる。また、軟Ｘ線写真観察では中〜強度にペッドが発達するほか、根跡と考えられる直線的なチャンネルやブロックが顕著に認められ、強く土壌化を受けていたことが示唆される。更に微化石概査の状況も 3- Ⅴ帯とした試料と大差ないことから、9 層から 8 層についても「火砕流堆積物の二次堆積である。」、「近辺で大規模な森林火災が発生していた。」などの可能性が指摘できる。また、堆積後にグライ化などの化学変化を受けたことが分かる。

② 古植生の推定

1) 沼沢湿地内の植生

湿性植物由来の花粉では、イネ科（40 ミクロン未満）、ウナギツカミ節 - サナエタデ節（イヌタデ属）が僅かに検出される。植物珪酸体では湿性植物に由来する種類が検出されなかったことから、湿地内ではウナギツカミ（あるいはサナエタデ）などが生育していたと考えられる。また、木本花粉では下位の９層からハンノキ属が僅かに検出されており、湿地林を形成していた可能性がある。

2) 森林植生

前述のように花粉化石の含有量が少なく、検出花粉化石からの植生復元はできなかった。JZ01 では、3- Ⅴ帯同様に JZ- Ⅲ帯 c 亜帯が対応し、花粉分析結果や、植物珪酸体分析結果から、調査地周囲の丘陵は、カシ類、シイノキ属、クスノキ科を主要素として、モミやイヌマキ（マキ属）、アカマツなどの針葉樹を混淆する照葉樹林で覆われていたと考えられる。また JZ01 では、JZ- Ⅲ帯 c 亜帯から上位の b 亜帯にかけてスギ属花粉が増加しており、ここでも同様の現象が起こった可能性がある。スギ属の増加は、一般には気温の低下や降水量の増加に起因するとされる。3- Ⅴ～Ⅳ帯の時期には砂質堆積物が多く、層厚も厚いことから、降水量の増加により斜面崩壊等に伴う沖積作用の活発化し、平野が拡大したことで、スギの生育に適した低湿な環境が広がり、スギ林が拡大したと考えられる。今回の分析で僅かにハンノキ属やクマシデ属 - アサダ属が検出されたことから、斜面崩壊に伴う裸地にはクマシデ類やヤシャブシ類（ハンノキ属）を要素とする二次林が侵入した可能性も指摘できる。また、3- Ⅴ帯同様に花粉分析で検出量が飛び抜けて多いオシダ科 - チャセンシダ科胞子は、林床に生育するイノデなどに由来し、籐本のテイイカカズラが照葉樹林やスギ林内で樹木に巻き付いていたと考えられる。

一方、林縁から沼沢湿地にかけての草地には、ヨモギ類（キク科）の草本や、植物珪酸体が検出されたササ類、チガヤ（イネ科）が生育していた。

(3) 5- Ⅲ帯（縄文時代晩期初頭）

① 堆積環境の推定

先立つ縄文時代後期には比較的厚い水平堆積物が認められる（３区）ことから、前述の様に調査地周辺には沼沢地が広がっていたと考えられる。一方縄文時代晩期には水位が下がり、縄文時代後期の堆積物は河川によって浸食され、河川成堆積物で充填された。

② 古植生の推定

1) 河川周辺（低地）の植生

草本花粉の割合が低く、イネ科、カヤツリグサ科などか低率で検出されるのみであり、河川内や周辺の湿地には、アシ（イネ科）、ホタルイ類（カヤツリグサ科）が生育していたと考えられる。また、河川周辺のやや乾燥した場所には、テイカカズラ類やヨモギ類などが生育していたと考えられる。

一方、年代測定にも用いられた倒木は、ケヤキであった。根張りも検出されていたことから、調査地に生育していたことは明らかである。ただし花粉分析では、ケヤキが含まれた層準の分析をしていないこともあり、ニレ属 - ケヤキ属の出現率はさほど高くなかった。

2) 森林植生

前述の様に、花粉化石群集はやや異なるが、推定年代で JZ01 では JZ- Ⅲ帯 b 亜帯下部が対応する。

両地域の最も異なる点は、アカガシ亜属と、マツ属（複維管束亜属）、スギ属の割合であった（ただし、マツ属（複維管束亜属）とスギ属の割合に視点を置くと、両地域のデータともスギ属が上回っ

ている。）このことは、JZ01 で得られた花粉化石群集が出雲平野南西部の平均的な植生を表していると考えられることに対し、麓Ⅱ遺跡は小盆地内に位置し、得られた花粉化石群集には局所的な植生の影響が強く表れているためと考えられる。したがって、検出した花粉化石群集から、調査地周囲の丘陵はカシ類を主要素として、モミやイヌマキ（マキ属）、アカマツなどの針葉樹を混淆する照葉樹林で覆われていたと考えられる。一方、スギは出雲平野南西部では既に大規模な林を成していたと考えられるが、この盆地内では、谷筋に小規模なスギ林を成していた程度であったと考えられる。また、根張りを持つ倒木として検出されたケヤキは自然堤防林の要素であり、出現率が低いものの河川の周囲に生育していた可能性が、指摘できる。

(4) 3-Ⅲ帯 c 亜帯、5-Ⅱ帯（古代（あるいは縄文時代晩期）から中世頃）

① 堆積環境の推定

３区：最下位の５層（試料№ 11）は色調が暗緑灰色で、グライ化を受けていることが分かる。微化石概査結果は、炭片の含有量が下位のグライ層（15 層～８層）に比べやや少なかったが、その他については大差ない結果であった。また、十分な量の木本花粉化石が検出されたものの、含有量は少なかった。これらのことから５層は下位の 15 層から７層と同様な堆積環境で、堆積後の履歴も大差なかったものと考えられる。一方 3c 層から 3a 層、Ⅲ帯 b 亜帯、a 亜帯に対応する層準では、グライ化もさほど顕著でなく、木本花粉化石の検出量も含有量も多かった。

５層（試料№ 11）に対し上位の 3c 層（試料№ 10）の含有量は 17215 粒 /g と、一般的な堆積物で認められる量であった。また、５層で得られた花粉化石群集（Ⅲ帯 c 亜帯）は、コナラ亜属の出現率がやや異なるものの、その他の種類については上位の試料（Ⅲ帯 b 亜帯）と類似した傾向を示した。このようなことから５層に本来含まれていた花粉化石のほとんどは既に消滅しており、検出された花粉化石のほとんどは、生物擾乱によって上位の 3c 層から混入したものである可能性が指摘できる。一方 3c 層から 3a 層（3-Ⅲ帯 b 亜帯：試料№９～６、a 亜帯：試料№５、４）ではイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるガマ属、サジオモダカ属、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、キカシグサ属、栽培されていた可能性もあるオモダカ属やセリ科、栽培種のソバ属が検出され、水田環境で堆積したものと考えられる。

５区：北東壁西側では８層から上位で水平堆積を示し、それより下位では、ラミナが顕著な河川成の砂礫が卓越する。一方、北東壁東側では 17a 層（5-Ⅱ帯 c 亜帯上部）、13 層（5-Ⅱ帯 b 亜帯）、９層（5-Ⅱ帯 a 亜帯）、８層（5-Ⅰ帯）及びこれらの上位が水平堆積を示し、17b 層れより下位では、ラミナが顕著な河川成の砂礫が卓越する。東側で認められる 17a ～９層について、水田雑草であるガマ属、サジオモダカ属、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、栽培されていた可能性もあるオモダカ属やセリ科も検出されるが、イネ科（40 ミクロン以上）の出現率が３区に比べ低くい。これらのことから、17a 層、13 層、９層が水田環境で堆積した可能性が指摘できるが、可能性はやや低い。

② 古植生の推定

1) 河川周辺（低地）の植生

５区では 5-Ⅱ帯 c 亜帯（縄文時代晩期～古墳時代中期頃）の時期には、後半に向かいイネ科（40 ミクロン以上）が高率になる。このことから、開発とともにこの山間の小盆地でも稲作が行われるよう

になり、徐々に水田の面積が増えていったものと考えられる（調査地を流れる河川に水田が迫ってきた可能性や、前述の様に 17a 層が水田耕作土であった可能性も指摘できる。）。河川周辺の沼沢湿地にはアシ（イネ科）、ホタルイ類（カヤツリグサ科）のほか、オモダカ類、ウナギツカミ（あるいはサナエタデ）、セリ類などが生育していたと考えられる。また、水田の畦や河川周辺のやや乾燥した場所には、ヨモギ類やアカザ類（ヒユ類）、ナデシコ類などが生育していたと考えられる。これらの分類群の一部には栽培種が含まれることから、食用に小規模な畑作が営まれたり、あるいは野生のものを食用にしていたりした可能性も指摘できる。

5- Ⅱ帯 b 亜帯（古墳時代中期～奈良時代頃）、a 亜帯（奈良～平安時代頃）の時期には、5 区周辺の低地では水田が存在したと考えられる。また、5 区 13 層、9 層が水田耕作土であった可能性も指摘できる。一方 3 区では、5- Ⅱ帯 b 亜帯と時期の重なる 3- Ⅲ帯 c 亜帯上部の 3c 層が、水田耕作土と考えられている。水田の畦などでは、ヨモギ類やアカザ類（ヒユ類）、ナデシコ類などが生育して食用にされたり、小規模な畑作が営まれ、これらが栽培されていた可能性も指摘できる。河川周辺の沼沢湿地や水田には、アシ（イネ科）、ホタルイ類（カヤツリグサ科）のほか、オモダカ類、ウナギツカミ（あるいはサナエタデ）、セリ類などが生育していたと考えられる。

2) 森林植生

今回の 5- Ⅱ帯 c 亜帯でも、JZ01 の JZ- Ⅲ帯 b 亜帯でも、スギ属の増加傾向が顕著であった。このことは、遺跡周辺のみならず、出雲平野南西部でのスギ林の拡大を示唆する。一方、3- Ⅲ帯 c 亜帯後半（5- Ⅱ帯 b､a 亜帯）頃にはスギ属の出現率が頭打ちになる。これに対し､栽培種の「イネ」を含むイネ科（40 ﾐｸﾛﾝ以上）の出現率が増加する。このことから､3- Ⅲ帯 c 亜帯前半（5- Ⅱ帯 c 亜帯）には調査地周辺の低地や谷筋を中心にスギ林が拡大したと考えられるが、低地での水田開発が始まると、スギ林の分布域やスギ林が拡大すべき場所にも開発が及ぶようになり、低地でのスギ林の拡大傾向が止まった可能性が指摘できる。

5- Ⅲ帯で卓越したアカガシ亜属の出現率は、5- Ⅱ帯 c、b 亜帯で段階的に減少する。また、5- Ⅱ帯 b 亜帯以降マキ属やモミ属などの針葉樹種の出現率も減少する。これらのことと先のスギの分布域拡大から、スギの生育環境に適した谷斜面で、照葉樹林からスギ林への変化が起こったと考えられる。このことは、それぞれの生育気候環境から、多雨化（あるいは寒冷化）に起因すると考えられる。また、5- Ⅱ帯 c 亜帯初期にシイノキ属 - マテバシイ属やクリ属が、中半以降、コナラ亜属の出現率が微増することは、カシ林からスギ林への遷移植生として小規模なクリ林やシイ林、コナラ林が形成されたことを示唆する。

5- Ⅱ帯 a 亜帯では、5- Ⅱ帯 c、b 亜帯間で減少傾向を示したアカガシ亜属の出現率が一転して増加し、同時にスギ属やコナラ亜属が減少する。一方、JZ01 の JZ- Ⅲ帯 a 亜帯でもアカガシ亜属の増加とスギ属、マツ属 (複維管束亜属）の減少が認められた。スギの減少は、照葉樹林への遷移と捉えるよりも、低地の開墾による伐採の影響が強いと考えられる。出雲平野南西部では、マツ林から極相林である照葉樹林への遷移が起こり、調査地周辺ではコナラ林から照葉樹林への遷移が起こったものと考えられる。

(5) 3- Ⅲ帯 b 亜帯、5- Ⅰ帯（奈良時代～平安時代頃）

① 堆積環境の推定

３区：前述の様に、3b、3a 層下部（試料№９～６）ではイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるガマ属、サジオモダカ属、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、栽培されていた可能性もあるオモダカ属やセリ科、栽培種のソバ属が検出され、水田環境で堆積したものと考えられる。

５区：北東壁全面で、８層から上位が水平堆積を示す。８層が 5- Ⅰ帯に対応し、水田雑草であるガマ属、サジオモダカ属、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、栽培されていた可能性もあるオモダカ属やセリ科も検出されるが、イネ科（40 ミクロン以上）の出現率が３区に比べ低くい。これらのことから、８層が水田環境で堆積した可能性が指摘できるが、３区に比べ可能性はやや低い。

② 古植生の推定

1) 調査地近辺の植生

３区ではイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるガマ属、サジオモダカ属、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、ウナギツカミ節 - サナエタデ節、キカシグサ属、栽培されていた可能性もあるオモダカ属やセリ科、栽培種のソバ属が検出され、水田が広がっていたと考えられる。また、クワイ（オモダカ属）、セリの栽培が行われていた可能性も指摘できる。一方、５区ではイネ科（40 ミクロン以上）が高率を示すものの３区に比べ低率で、水田が３区から続いていた可能性もあるが、試料採取地が水田に隣接した沼沢湿地であった可能性もある。

沼沢湿地や水田にはアシ（イネ科）、ホタルイ類（カヤツリグサ科）のほか、ガマ類、サジオモダカ類、オモダカ類、ウナギツカミ（あるいはサナエタデ）などが生育していたと考えられる。また、水田の畦や河川周辺のやや乾燥した場所には、ヨモギ類やアカザ類（ヒユ類）などが生育していたと考えられる。これらの分類群の一部には栽培種が含まれることから、食用に小規模な畑作が営まれ、ソバ、アカザ、ヒユ、ハコベ、ナタネなどが近辺で栽培されていた可能性も指摘できる。

2) 森林植生

マツ属（複維管束亜属）が高率で出現し、停滞する時期もあるが、全体としては増加傾向を示す。また、コナラ亜属も少なからず検出される。これらのことから、調査地周囲の丘陵では、照葉樹林が、アカマツを主体とし、コナラ類を伴う「里山（薪炭林）」に変わっていったと考えられる。またスギ林は伐採され、水田へと開墾されていったが、谷筋に残存していたと考えられる。更に周囲の丘陵から中国山地にかけては、カシ類を主要素とし、モミ属などの針葉樹を混淆する照葉樹林が広がっていたと考えられる。

(6) 3- Ⅲ帯 a 亜帯

① 堆積環境の推定

前述の様に、3a 層上部（試料№５、４）ではイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるガマ属、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、キカシグサ属、栽培されていた可能性もあるオモダカ属やセリ科、栽培種のソバ属が検出され、水田環境で堆積したものと考えられる。

② 古植生の推定

1) 調査地近辺の植生

イネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるガマ属、イネ科（40 ミクロン未満）、

カヤツリグサ科、キカシグサ属、栽培されていた可能性もあるオモダカ属やセリ科、栽培種のソバ属が検出され、水田が広がっていたと考えられる。また、クワイ（オモダカ属）、セリの栽培が行われていた可能性も指摘できる。

水田内や周囲の水路、沼沢湿地にはアシ（イネ科）、ホタルイ類（カヤツリグサ科）のほか、ガマ類、サジオモダカ類、オモダカ類などが生育していたと考えられる。また、水田の畦や河川周辺のやや乾燥した場所には、ヨモギ類やアカザ類（ヒユ類）などが生育していたと考えられる。これらの分類群の一部には栽培種が含まれることから、食用に小規模な畑作が営まれ、ソバ、アカザ、ヒユ、ハコベ、ナタネなどが近辺で栽培されていた可能性も指摘できる。

2) 森林植生

マツ属（複維管束亜属）が高率で出現し、コナラ亜属も 10％程度で検出される。このことから、調査地周囲の丘陵にはアカマツを主要素とし、ナラ類を混淆する「里山（薪炭林）」が広がっていたと考えられる（あるいはアカマツ林とコナラ林が別々に管理されていたかもしれない。）。一方 JZ01（JZ-Ⅱ帯）では、３区（3-Ⅲ帯 a 亜帯）に比べコナラ亜属の割合が高く、出雲平野南西部では、調査地周辺に比べ「里山（薪炭林）」に占めるコナラ類の割合が高かったと、考えられる。マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を示すことから、調査地周辺の照葉樹林が伐採され、「里山（薪炭林）」への変化が急速に進んだと考えられる。一方、スギ属、アカガシ亜属も 10％程度の出現率を示すことから、この時期にもスギ林が僅かに谷筋に残存し、周囲の丘陵から中国山地にかけてはカシ類を主要素とし、モミ属などの針葉樹を混淆する照葉樹林が広がっていたと考えられる。ただし、JZ01（JZ-Ⅱ帯）では、スギ属以外の針葉樹種はほとんど検出されないことから、針葉樹が照葉樹林に混淆する割合が、遺跡周辺の丘陵で特に高かった可能性もある。

(7) 3-Ⅱ帯（中世から近世）

① 堆積環境の推定

Ⅲ帯同様にイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるイネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、キカシグサ属、栽培されていた可能性もあるオモダカ属が検出され、水田域が広がっていたと考えられる。

② 古植生の推定

1) 調査地近辺の植生

前述のようにイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるオモダカ属、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、キカシグサ属が検出され、水田環境が広がっていたと考えられる。また、クワイ（オモダカ属）のほか、アカザ、ヒユ、ハコベ、ナタネなどが近辺で栽培されていた可能性がある。

2) 森林植生

マツ属（複維管束亜属）が高率で出現し、その他の種類はほとんど検出されなかった。このことから、調査地周囲の丘陵は里山（薪炭林）としてのアカマツ林で覆われ、僅かにスギやナラが生育していたと考えられる。一方 JZ01（JZ-Ⅱ帯）では、コナラ亜属が 10％以上、クマシデ属 - アサダ属も数％の出現率を示す。従って出雲平野南西部では、調査地周辺に比べ「里山（薪炭林）」に占めるコナラ類などの割合が、前の時期同様に高かった（アカマツの割合が低かった）と考えられる。

(8) 3- Ⅰ帯（近代から現代以降）

① 堆積環境の推定

Ⅲ帯、Ⅱ帯同様にイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるイネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、栽培されていた可能性もあるオモダカ属が検出され、水田域が広がっていたと考えられる。

② 古植生の推定

1) 調査地近辺の植生

前述のようにイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出されるほか、水田雑草であるイネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、オモダカ属が検出され、水田環境が広がっていたと考えられる。また、クワイ（オモダカ属）のほか、アカザ、ヒユ、ハコベ、ナタネなどが近辺で栽培されていた可能性がある。更に栽培種のソバ属やワタ属も検出されており、調査地近辺でソバやワタが栽培されていたと考えられる。

2) 森林植生

スギ属が 3- Ⅱ帯から急増し、同時にマツ属（複維管束亜属）が急減する。調査地周囲の丘陵ではアカマツ林が伐採され、スギが植林されていったと考えられる。調査地近辺では、スギ植林が現在も分布しており、現在に近い、あるいはもう少しスギ植林の範囲が広かった可能性もある。一方 JZ01（JZ- Ⅰ帯）では、スギ属の出現率は 10％程度と 3- Ⅰ帯に比べ低率である。現在の出雲平野西部では、神西湖西部の神西砂丘～上園砂丘、更に海岸砂丘や内陸の浜山砂丘にかけて、クロマツ林が特徴的に分布する。両地点の分析結果が時期的に前後する可能性もあるが、現状の植生を良く反映していると考えられる。このためにスギ植林の分布域が狭く、低率を示すと考えられる。

まとめ

麓Ⅱ遺跡の発掘調査に伴、堆積物の軟Ｘ線写真観察、微化石概査、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定、14C 年代（AMS）測定を実施して、以下の事柄を考察した。

(1) 暗色帯の成因：調査トレンチ下部に分布する暗色帯（9、12、14 層）の軟Ｘ線写真観察で、土壌構造は認められたが、その強度はさほど強くなかった。微化石概査で、暗色帯では炭片が多く含まれ、花粉、珪藻のほか、植物珪酸体どの微化石や植物片もほとんど含まれなかった。これらのことから、暗色帯は、本質的に炭片を多く含む（三瓶火山起源の）火砕流二次堆積物、あるいは近辺での森林火災の影響下で短期間に堆積したもので、堆積後に受けたグライ化などの化学反応によって、有機物が溶解して形成されたものと考えられる。

(2) 暗色帯の形成時期：年代測定結果から、3 層とも縄文時代後期に形成されたものと考えられる。また、この時期は、三瓶小豆原埋没林を形成した、三瓶火山Ⅶ期の活動期と重なっている。

(3) 樹種同定の結果、5 区埋没河川 (SD01) 底での倒木は、ケヤキ属と判定できた。年代測定およびウイグルマッチングによる解析の結果、縄文時代晩期初頭の値が得られた。

(4) 花粉分析結果を基に、3 区では 3- Ⅰ～Ⅴ帯の 5 局地花粉帯、5 区では 5- Ⅰ～Ⅲの 3 局地花粉帯を設定した。また、出土遺物の年代観や年代測定結果、更に神西湖湖底で得られた JZ01 での局地花粉帯との比較・対比から、それぞれの花粉帯の示す時期を推定した。

(5) 局地花粉帯毎に調査地近辺から周囲の丘陵にかけての古植生を推定した。特筆すべき事柄を以下に示す。

① ３区では、古代～中世の遺構面を覆う 3c 層（3- Ⅲ帯 c 亜帯上部）から上位が、水田耕作土の可能性が指摘できる。更に 3b 層（3- Ⅲ帯 b 亜帯：奈良～平安時代）より上位は、水田耕土であ可能性が高い。また５区では、17a 層（5- Ⅱ帯 c 亜帯上部）より上位に水田耕土の可能性が指摘できた。遺跡内では現在までの間に、ソバやワタが栽培されたほか、クワイ、アカザ、ヒユ、ハコベ、ナタネなどが栽培されていた可能性がある。

② 周囲の丘陵では、3- Ⅴ帯：縄文時代後期には、針葉樹を混淆した照葉樹林が分布していた。その後、3- Ⅲ帯 b、a 亜帯（奈良時代から古代（あるいは弥生時代中期）から中世頃（Ⅲ帯）には、アカマツ林やコナラ林（里山）が広く分布するようになる。更に 3- Ⅱ：中世から近世以降には、アカマツ林が主となり、3- Ⅰ帯：近代から現代以降では、スギ植林が顕著になった。

③ 5- Ⅱ帯（3- Ⅲ帯 c 亜帯）：縄文時代晩期以降、古墳時代以前から奈良時代以降（平安時代まで）、を中心に、スギ林が調査地周辺の谷筋に分布した。

引用文献

久馬一剛・八木久義訳監修（1989）土壌記載薄片ハンドブック．p.176，博友社，東京.

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p.，文永堂，東京.

中村　純（1974）イネ科花粉について , とくにイネを中心として . 第四紀研究 , 13,187-197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29

渡辺正巳（未公表）JZ01 の花粉分析.

渡辺正巳（2010a）花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法，174-177. ニュー・　　サイエンス社.

渡辺正巳（2010b）木質遺物（埋没樹木）樹種同定．必携 考古資料の自然科学調査法，194 － 198. ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳・中川　寧（2013）山陰の木製品の樹種と植生について．木製品から見た古代のくらし，37-48，島根県古代文化センター.

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., & Weninger, B. (2001). 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43(2A), 381-389.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第 4 節　坂本谷遺跡発掘調査に伴う AMS 年代測定

渡辺正巳 (文化財調査コンサルタント (株))

はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、遺構の年代を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターから委託を受け実施・報告した AMS 年代測定業務報告書を再編したものである。

坂本谷遺跡は島根県中央部、出雲市西神西町の丘陵上に立地する遺跡である。

分析試料について

分析試料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにより採取・保管中の試料から御提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

(1) 遺構の配置

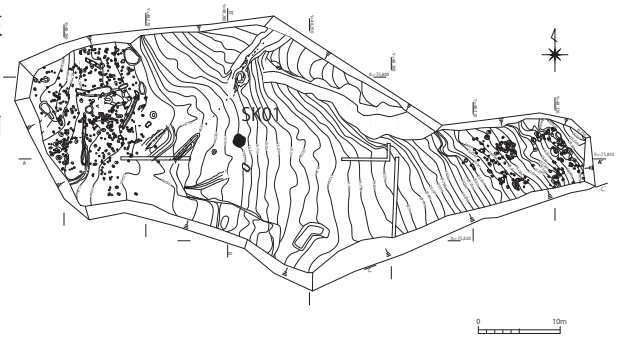
平面図（図 1）中に、試料が採取された遺構（SK01）の位置を示す。また、試料の詳細を、表 1 に示した。

(2) 試料採取位置

SK01 の断面図を、図 2 に示す。2 層（炭層）から一括して炭片が採取され、保管してあった。この中から状態の良いものを、分析試料（試料№ 1）として分取した。

AMS 年代測定方法

前処理方法を表 8 に示した。前処理後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14} C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.2.4（Bronk Ramsey, 2009）を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013) を利用した。



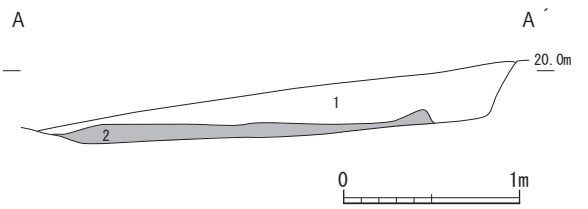
第 153 図　遺跡平面図 （試料採取遺構：SK01 の位置）

AMS 年代測定結果

年代測定結果を図 1 及び表 1 に示す。図 1 には、OxCal ver. 4.2（Ramsey, 2009）による暦年較正図を示した。表 1 には、試料の詳細、前処理方法、δ^{13} C 値と測定年代など 4 種類の年代を示している。

年代測定結果について

13C 後半～ 14C 後半という値が、得られた。出土遺物から、遺構の時期は推定できなかったが、13C 後半～ 14C 後半、あるいはこれ以降の遺構と考えられる。



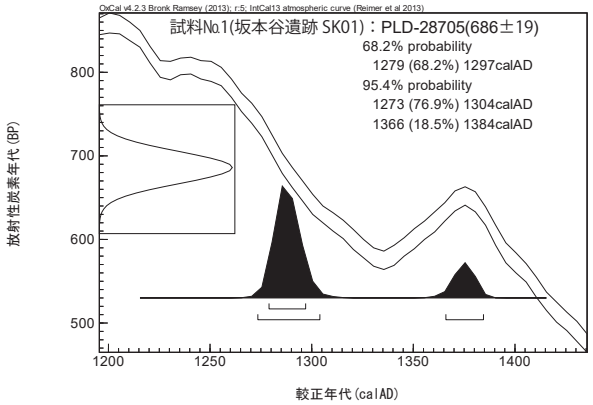
1:灰黄褐色粘質土（炭わずかに含みやわらかい）
2:炭層（1層を若干含む）

第 154 図　SK01 断面図（試料採取層準）

表 8　AMS 年代測定結果

№	遺跡名	種類	出土遺構ほか	重量 (g)	推定年代	前処理	δ１３C (‰)	測定年代 ＊1 (yrBP ± 1 σ)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	補正年代 ＊2 (yrBP ± 1 σ)	暦年較正年代		測定番号
											1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲	(PLD)
1	坂本谷遺跡	炭	SK01　141121	5.8936	不明	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)	-25.91 ± 0.12	702 ± 20	686 ± 19	685 ± 20	AD1279-1297(68.2%)	AD1273-1304(76.9%) AD1366-1384(18.5%)	28705

＊1　δ１３C補正無年代　　＊2　δ１３C補正年代



第 155 図　暦年較正図

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第７章　総括

第１節　麓Ⅱ遺跡

麓Ⅱ遺跡の丘陵裾及び水田部の調査で検出した主な遺構は、縄文後期初頭の土坑６基、弥生・古墳時代の堰・護岸施設 SD01(古) や水路 SD02、中世と考えられる建物跡 16 棟と、丘陵斜面で確認したピット列が挙げられる。各調査区の遺構・包含層から出土した土器類については、分類のうえ、可能な限り図化して掲載しているが、遺跡全体での出土量については時期別・器種別に重量で示した (表９・10)。

縄文時代　土坑は、３・４区の標高 4.5 ～ 5m の低地（第２遺構面）で確認した。西側の２区では、標高 7m 付近に後期中葉の包含層があったものの、遺構を確認することはできなかった。東側の５区においては標高５m まで掘削を行ったが、包含層・遺構を検出するには至っていない。５区付近は谷が狭く、地形も低くなっており、安全確保のために当該レベルまでの深掘・確認を行っていないが、該期の層準は更に深い位置にあるものと推定される。

３区の SK02 は１基単独で検出したもので、坑内からクジラの骨が出土している。遺構面を被覆する包含層には土器片以外に微細な動物遺存体が多く含まれており、居住生業に伴うゴミ穴の可能性も考えられるが、単独で存在し、出土した骨も包含層中のものと比して大きい点や、埋土の断面で認められた立ち上がりを標識等の痕跡と捉えれば、祭祀土坑の可能性も排除できない。一方、４区では少なくとも５基の土坑が狭い範囲に分布しており、３区の様相とは異なる。これらは、墓や貯蔵穴などの性格が想定されるものの、配石や集石を伴わない点や、平面形態・規模

表９　麓Ⅱ遺跡出土土器類時期別計量表

単位：g

区	出土位置	縄文				晩期～弥生Ⅰ	弥生					弥生～古墳	古墳					古墳～古代	古代	中世	中近世以降	近世	不明
		中期末～後期初頭	後期初頭	後期中葉	後期		Ⅱ	Ⅳ	Ⅳ・Ⅴ	Ⅴ	不詳		前期	前～中期	中期	後期	中・後						
1	表土・造成土											8.6								44.6		124.5	
	黒褐色											70.6	95.2		348.7	38.2				116.1			
	土器溜																			283.0			
	Pit									153.4										21.1			
	SK									153.4										21.1			
	川埋土							25.1	106.8			51.4						120.5	4.6				
2	Ⅰ																			8.8			79.7
	Ⅱ			32.7															78.6				6.1
	Ⅲ		72.5	674.6	8249.9																		
	Ⅳ				337.6																		
3	Ⅰ																		10.1				
	Pit																						16.4
	Ⅱ																						
	Ⅲ																						
	Ⅳ	301	2121.2		30313.9																		
	SK02				92.5																		
	Ⅴ																						
4	Ⅰ																		8.4	22.2	97.0		3.2
	Pit																						17.0
	Ⅱ																						
	Ⅲ	71.7	134.8		2596.7																		
	SK・落込・河道	45.4	41.5		3790.5																		
	Ⅳ																						
5	Ⅰ											72.0						37.2	17.8	9.8	13.4		57.2
	Ⅱ									45.0		1277.2				56.6		1528.5	1152.7	404.8	382.2		137.8
	Ⅲ									344.6	59.9	1402.2	67.6	312.99	171.9		97.3	790.3	1373.0	7.5			
	Ⅳ					42.7																	
	Ⅴ						126.3	10.1		8866.7	530.5	18371.9	215.8		5784.6		1182.9	140.3	121.6				
	Ⅵ					63.9																	
	Ⅶ																						

の点で墓として積極的には認定し難いところもあり (柳浦 2009)、また、湧水があるにも拘わらず堅果類が一切出土していない点でも貯蔵穴である可能性は低いといえる。調査が間隔を置いた狭い範囲に限られているため、今回検出した遺構の性格についてはなお検討の余地があるが、２～４区では後期初頭・中葉の土器が比較的にまとまって出土しており、谷底の旧九景川の縁辺から丘陵裾部にかけての安定した地点を中心に該期の集落が営まれたものと考えられる。

前述のとおり、時期別では、２区は縄文後期中葉、３・４区は後期初頭の土器がまとまって出土している。縄文土器の組成は、無文に分類したものには有文土器の無文部位も含まれるので単純に個体の比率を反映するものではないが、２区では有文９％・無文 91％、３・４区も有文

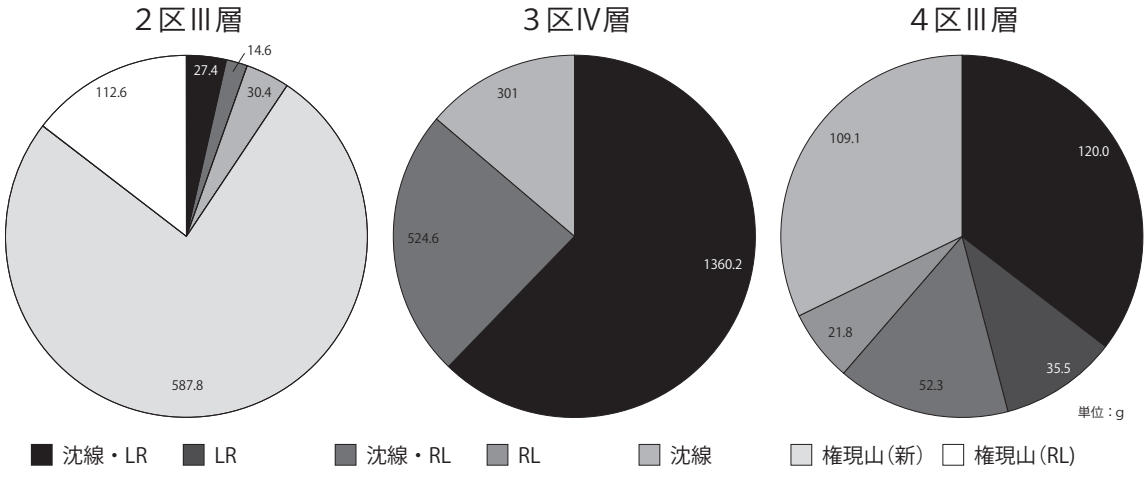
表 10　麓Ⅱ遺跡出土土器類器種別計量表

単位：g

区	出土位置	土器																													
		縄文						弥生						弥生～古墳					古墳			古代				古代～中世	中世		中近世		不明
		有文	無文	凹底	平底	丸底	不明	壺甕	鉢	高坏	低脚坏	鼓形器台	不明	壺甕	高坏	低脚坏	鼓形器台	不明	壺甕	高坏	不明	有高台坏皿	無高台坏皿	坏皿	不明	坏皿	無高台坏皿	坏皿	不明	
1	表土・造成土													8.6						327.1						44.6		22.1		
	黒褐色													70.6						116.8						116.1				
	土器溜り																									283.0				
	Pit																									20.5				
	SK							153.4																						
	川埋土							131.9						38.5				122.9	120.5											
2	I																									8.8				70.9
	II	32.7																												6.1
	III	747.1	7933.2	109.2	88.5	38.9																								
	IV		337.6																											
3	I																										10.1			
	Pit																													16.4
	II																													
	III																													
	IV	2456.9	21399.6	1378.6	426.6		7112.5																							
	SK02		60.1			32.5																								
	V																													
4	I																													3.2
	Pit																													17
	II																													
	III	241.9	1657.0	19.8	80.9		803.5																							
	SK・落込・河道	96.8	3204.8				595.7																							
	IV																													
5	I																	72.0							9.8			13.4	57.2	
	II							19.1					25.9	112.7				1164.5	408.8				127.3	10.1		246.8			90.8	127.2	
	III							274.6					129.9	1062.1				340.1	269.2	428.6		50.1	200.8	96.5		7.5				
	IV																													
	V								12.5	67.9	252.4	234.5	1123.9	9398.5	209.4	298.6	760.1	8654.8	4861.8	1108.0	214.5	49.0		72.7						
	VI		106.6																											
	VII																													

単位：g

区	出土位置	須恵器								中世				近世				中近世以降	不明
		蓋坏 (H・G)	蓋 (B)	有高台坏・皿	無高台坏・皿	坏・皿	高坏	壺・甕・鉢	不明	須恵器	瓦質土器	龍泉窯系青磁	擂鉢	肥前系	布志名	石見	不明	瓦質土器	陶器
1	表土・造成土														122.4				
	黒褐色	38.2																	
	土器溜り																		
	pit																		
	SK																		
	川埋土					4.6													
2	I																		8.9
	II							74.1	4.5										
	III																		
	IV																		
3	I																		
	Pit																		
	II																		
	III																		
	IV																		
	SK02																		
	V																		
4	I					8.4						22.2	97.0						
	Pit																		
	II																		
	III																		
	SK・落込・河道																		
	IV																		
5	I								55.0										
	II	33.1	165.3	541.4	271.8	12.2	140.0	940.5	210.2	67.9	90.1			87.0		13.6	13.4	177.5	
	III	6.3	443.5	66.2	137.8	97.8		638.3	121.6										
	IV																		
	V																		
	VI																		
	VII																		



第 156 図　麓Ⅱ遺跡出土縄文土器 (有文) の組成

表 11　麓Ⅱ遺跡出土縄文土器 (無文) の調整

【2区】　単位：g

外面＼内面	ミガキ	ナデ	ケズリ	二枚貝条痕	巻貝条痕	不明	計
ミガキ		77.1			245.2		322.3
ナデ		1541.7			24.3	206.9	1772.9
ケズリ		387.0	142.1		93.1		622.2
二枚貝条痕		46.2		158.3			204.5
巻貝条痕		35.9	7.9		1048.5	60.1	1152.3
不明		195.6		176.5	57.3	2409.6	2838.9
計	0	2283.4	150.0	334.8	1468.3	2676.5	6913.1

【3・4区】　単位：g

外面＼内面	ミガキ	ナデ	ケズリ	二枚貝条痕	巻貝条痕	不明	計
ミガキ	372.8	25.6					398.4
ナデ		1559	38.0	1294.4	18.1	320.5	3230.0
ケズリ		371.0	101.7	202.9	10.8		686.4
二枚貝条痕		1568.1	279.3	16217.9	1428.6	417.4	19911.3
巻貝条痕		59.5		608.2	213.3	37.9	918.8
不明		190.2		1231.1	33.1	187.6	1642.0
計	372.8	3773.3	419.0	19554.4	1703.9	963.4	26786.7

9％・無文 91％で、有文土器の占める割合は 1 割に満たない。有文土器を文様や施文の違いで見ると、中期末まで遡る可能性のあるものも含めた後期初頭の磨消縄文土器は、3 区では LR が 72％、RL が 28％、4 区では LR が 68％、RL が 32％となり、総じて LR が 7 割を占めていることが明らかとなった。

2 区の縁帯文土器は、末端刺突沈線・沈線内連続刺突文・刻目文や沈線区画内の擬縄文施文が特徴で、権現山式新段階に相当する。結節縄文や貝殻腹縁刺突のあるものは出土していないが、RL 縄文を施すものが少量認められ、これらが新段階の組成をなすものか、権現山式の古段階に併行するものかは、周辺遺跡の資料の増加を待って検討する必要がある。

9 割以上を占める無文土器 (無文部位を含む) は有文土器が時期的にまとまっていることから、これらに伴うものと考えられる。内外面の調整の組み合わせは表 11 のとおりである。これを見ると、後期初頭の 3・4 区資料では、内外面ともに二枚貝条痕が群を抜いて多く、次いでナデ、巻貝が多い。一次調整に条痕、二次調整にナデを施したり、部位によって調整を使い分けているものもあるが、大まかな傾向として捉えることができる。北浦松ノ木遺跡 (松江市) では、中期後葉～末の土器が出土しており、内外面調整について報告されている (松江教育委員会 2016)。これによると、外面は巻貝が最も多く、撚糸文が次に続く、一方内面は、ナデに続いて巻貝が多用されており、中期後葉～末と後期初頭では条痕原体が異なる。後期中葉では、再び調整の主体はナデとなり、二枚貝に比べて巻貝が増える。ナデが主体となるのは、ナデが比較的に丁寧なため、一次調整の条痕が残りにくいのも要因の一つと考えられる。

弥生・古墳時代　当該期の遺構としては 5 区で検出した SD01(古)・SD02 のみである。

SD01(古) は、杭や矢板を両岸に打設して縦木を配した護岸施設と、下流側に杭と横木からなる堰状の施設を備えていた。SD01(古) 自体は自然流路の可能性もあるが、土器以外に建築材・施設

材･器具材が多く出土し､農具も若干出土している｡枝のような自然木や根付きの木はあったものの、加工用の材木・未成品は見られないことから、この遺構は貯木施設ではなく、建築材や施設材・器具材を再利用した導水施設と考えられる。SD02 は杭列を伴うもので、調査では横木・縦木等は検出していない。時期は、SD02 が弥生時代後期後半から SD01(古) で切られるまでで、SD01(古) の使用から埋没までの時期は、土器や建築材・農具[1]からおよそ古墳時代中期の前半～中頃と考えられる。両者については時期差があるものとみているが、堰止めることで SD02 と一体的に使用した可能性も考えられる。

出土遺物は、弥生時代以降はⅤ -3 様式～古墳前期前半の出土量が最多だが、これらのほとんどは小片で、河川や氾濫によって上流部や周辺からもたらされたものと考えられる。次いで古墳時代中期の土師器出土量が多い。これらは総じて九景川遺跡様相２～３に相当するものである (池淵 2008)。近隣の当該期の遺跡としては、九景川遺跡・玉泉寺裏遺跡・御崎谷遺跡・間谷西遺跡など、丘陵やその裾部で多く確認されており、当遺跡についても集落本体は丘陵裾部の安定したところに存在しているものと推察される。５区で検出した建築材・施設材等を転用した護岸・堰を伴う導水施設や農具の出土は、集落の担い手による谷底平野の水田利用を示唆するものといえよう。

古代・中世　１区で検出したピット列は、標高９～ 11m の斜面に平坦面を作ることなく掘り込まれていた。掘り方は粗雑で、斜め方向に掘り込まれているものが多い。ピットの間隔は規則的ではないが、概ね１～２ｍの間隔で並び、少なくとも４列を確認しており、一部にはピット列に並行する溝も検出している。これらは、神西城の丘陵縁辺に設けられた、逆茂木や柵列といった防御施設と考えられる。溝はないが、同様の遺構は後述する坂本谷遺跡でも検出しており、神西城との関連については第２節でまとめて述べることとする。

建物は３・４区の第１遺構面で検出している。いずれも標高 6.5m 付近で、同一遺構面と推定される。「麓」の字名から、神西氏の居館の存在が想定されたが、確認した建物やピットはいずれも小規模なもので、出土品は皆無であった。年代は特定できないが、遺構面を被覆するⅠ層から出土した銭貨や、柱穴形態、柱穴配列が不揃いな点などから、中世の農村集落の建物群と推定される。

古代の遺物は５区のⅡ・Ⅲ層から一定量出土している。器種は須恵器・土師器ともに坏皿が中心で、須恵器は壺甕類も認められるが、遺構は確認できておらず、土器類の供給源は丘陵裾部にあると推定される。中世の遺物は１区と５区で土師器が少量出土し、４区表土で青磁１点を確認しているに過ぎない。

第２節　坂本谷遺跡

主な遺構は、標高 25 ～ 30m の比較的急な斜面で検出したピット列と、標高 16 ～ 18m の平坦地で検出した掘立柱建物跡で、いずれも中世の遺構と考えられる。

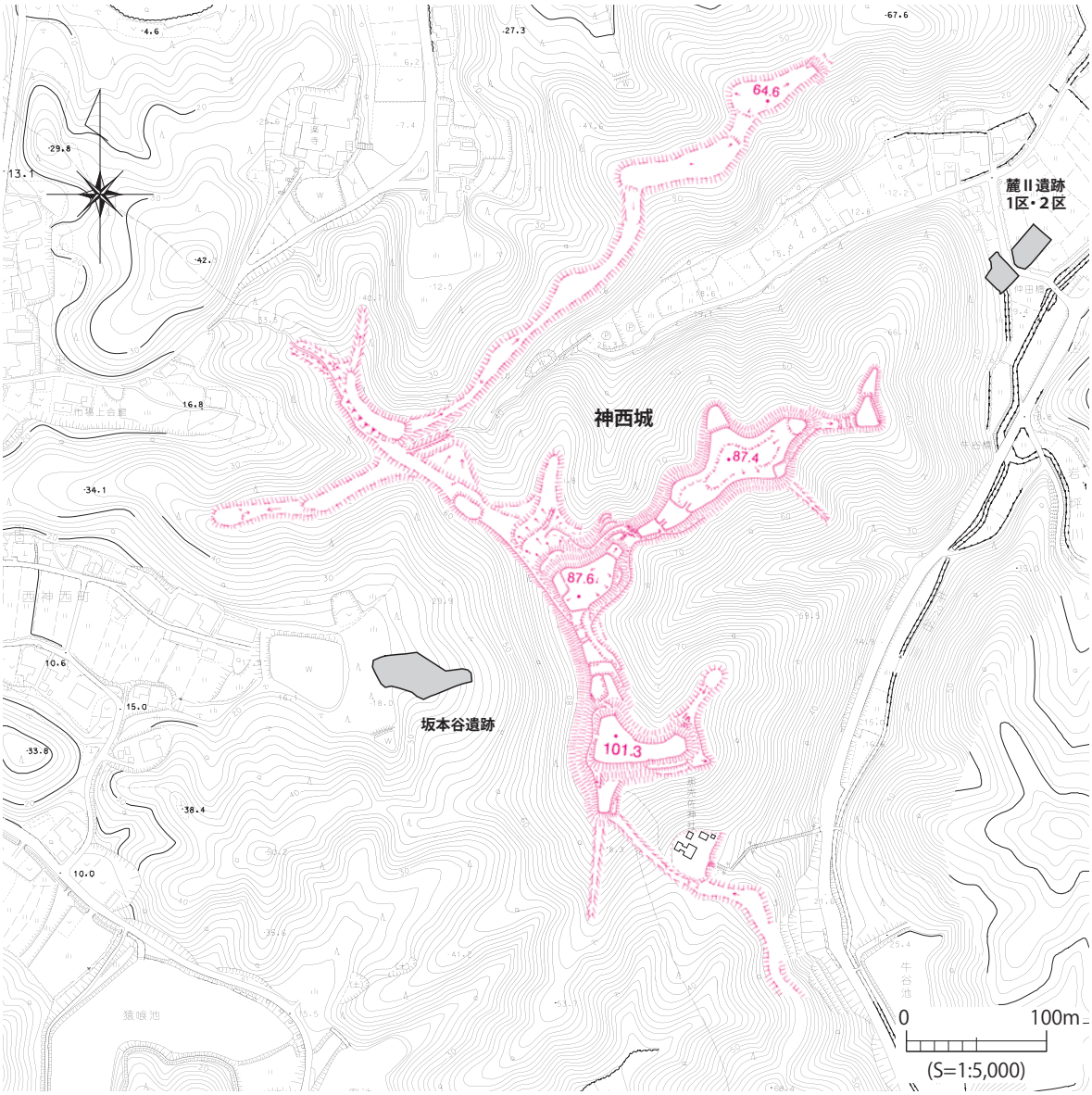
ピット列は、前述した麓Ⅱ遺跡１区のそれと同様で、斜面を平坦に加工することなく、歪な掘り方を持つピットが４～５列並ぶもので、柵列または逆茂木のような神西城の防御施設であったと推

1　木製品分類・分析については中川 寧氏の協力を得た

定される。麓Ⅱ遺跡 1 区はちょうど丘陵の裾にあたり、平坦地からの傾斜変換点にピット列を配していた。坂本谷遺跡では、掘立柱建物跡を検出した下方平坦部とピット列との間に遺構の空白地が存在し、ピット列は、その遺構空白地の斜度が緩やかなところから急に変換した地点で確認しており、立地的にも両者は共通する特徴を持っている。他の城跡にこのような類例を求めると、池平山城跡 (松江市) の逆茂木や柵、藤ケ谷遺跡 (松江市) の柵、尼子陣所跡 (美郷町) の柵列などが挙げられる。

池平山城跡では、斜面で間隔や配列が不規則なピットが多数検出されており、枝木を反斜面に立てて柵とした逆茂木の類として理解されている。今回の調査で確認したピット列やピット群も掘り方や配置の不規則性など共通点が多く、池平山の例と同様のものとして捉えて大過はないと考えられる。また、藤ケ谷遺跡や尼子陣所跡の柵は、尾根筋や斜面に数段にわたって溝を掘って設けたもので、ピットを伴うものとそうでないものがあるが、麓Ⅱ遺跡のピット列付近で検出した浅い溝も、同様の遺構と理解するのが妥当であろう。

遺構の時期は、出土遺物に乏しく判然としないが、設置された位置と機能を勘案すると、当地が



第 157 図　神西城縄張り・発掘調査区配置図 (1/5,000)

表 12　坂本谷遺跡出土土器類時期別計量表

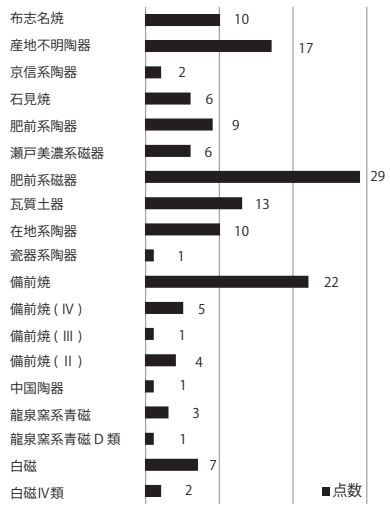
単位：g

出土位置	弥生～古墳	古墳中・後	古墳	古墳～古代	古代	古代～中世	中世	中世以降	近世以降	不明
I			158.23	160.18		147.39	301.22	1,476.33	18.60	750.60
II	53.57		36.32	183.80		11.32		2,692.25		1,393.87
III	2,398.66		474.66	4,257.56	324.78	7,965.94	241.02			7,437.77
Pit・SK・SD・SX	34.28	356.88	202.69	25.04			3,354.10			133.81
IV										

表 13　坂本谷遺跡出土土器類器種別計量表

単位：g

出土位置	土師器								須恵器		
	高坏	坏・皿	高台坏・皿	柱状高台	甕	不明		焙烙	坏	壺・甕	不明
I		1,499.0		90.2	64.6	1,088.6	294.0	18.6		149.8	10.4
II		1,792.9			36.3	2,150.1				97.8	
III	149.0	7,207.7	166.0	122.5	4,617.2	10,442.7			3.9	350.3	6.8
Pit・SK・SD・SX		2,937.8		248.00	556.8	562.40				25.0	
IV											



第 158 図　中近世陶磁器類の組成

緊迫した時期のものと推察される。神西城での戦闘は文明元年 (1469) の石見国勢力との戦、雲芸攻防戦 (1562-1566) があり、いずれかの時期に神西氏によって普請されたものと考えられる。

近年の踏査・研究では、神西城の郭群が 157 図の周辺の丘陵にも確認されており、城域は図示した範囲以上に拡がっていたことが分かってきている (山根 2013)。尾根上の郭などは地形からある程度の確認はできるが、今回のような地形改変をほとんど伴わない防御施設が、低位の丘陵裾や傾斜変換地点にまで及ぶことは、城域の把握をする上で今後注意が必要である。

平坦部にはピットが 400 以上群集していたが、建物として復元できたのは８棟である。復元した建物は、大規模なものとは言えないが、少なくとも麓Ⅱ遺跡３・４区の農村集落的な建物とは様相が全く異なるのは一目瞭然であり、このことは褐釉陶器や土器以外に、飾金具や鍔・鈴などの出土遺物からも確認できる。

出土した土器類については表 12・13、158 図に示したとおりである。中世土師器については柱状高台が一定量出土しており 12 世紀～ 13 世紀後半頃の年代が中心と考えられる。神西城は、貞応二年 (1223) に以降に新補地頭として当地を領した小野 (古荘) 高通が、築城したものとされていることから、これらの建物は、神西城築城の前には既に存在したと考えられる。神西城の西側には、「市場」「鋳物屋」の地名が残っており、建物群は、こうしたエリアに含まれていた可能性が高い。神西城は、この一帯と東・北麓や常楽寺川周辺の水田地帯とを結ぶ交通の要衝にあり、当地を掌握するのに最適地であったと考えられる。

表 14　京田遺跡出土遺物種別計量表

単位：g

出土位置	土器				須恵器						近世以降			製鉄関連		
	弥生	古代～中世	中近世	不明	蓋坏 (H・G)	蓋 (B)	有高台坏皿	坏皿	壺甕鉢	不明	陶磁器	燻瓦	釉薬瓦	鉄塊系 (L)	炉壁	鉄滓
	不明	坏皿	坏皿													
I		40.1	11.6	1011.3	211.4	12.4	6.2	12.0	701.6	175.8	528.8	393.3	103.3	12.8	821.8	30674.3
II				274.0	28.8		7.5		27.2	77.5				128.9	49.4	449.2
Pit				80.3												
SD01				13.1						5.7						
SD02				35.6												
SD04	239.3			22.7												

第 3 節　京田遺跡

検出した主な遺構は、竪穴建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 6 棟である。竪穴建物は良好な床面出土遺物がないが、平面形態から弥生時代後期のものと推測される。掘立柱建物跡は遺物を伴う柱穴が少なく、時期が推定できるのは SB05・06 のみである。これらは、7 世紀末～ 8 世紀の須恵器小片が出土しており、建物の主軸は真北を意識した配置となっている。両者は重複していることから、相前後して存在したと考えられる。

包含層は大半が削平によって失われており、遺物はほとんど出土していない。耕作地造成土からは古代の須恵器のほか、古墳時代の蓋坏なども少量出土しており、本来はこうした時期の包含層が存在した可能性がある。土器以外では、造成土からではあるが、鉄塊系遺物と鉄滓を採取している。鉄滓は光沢のある結晶を非常に多く含むもので、しかも総じて軟質なものであった。少なくとも近世以降の滓ではあまり見かけないものである。遺構が見つかっていないため不確かであるが、仮に古代から中世の製鉄関連遺物であれば、建物群との関連を考慮する必要がある。

【参考文献】

柳浦俊一 2009「山陰地方における縄文時代後・晩期の集落景観」『考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会

池淵俊一 2008「総括」『九景川遺跡 一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』島根県教育委員会

松江市教育委員会 (公財) 松江市スポーツ振興財団 2016『北浦松ノ木遺跡　松江鹿島美保関線 (北浦工区) 防災安全交付金 (交通安全) 工事に伴う発掘調査報告書』

島根県古代文化センター 2014『山陰地方の縄文文化』

幡中光輔 2011「山陰地方山間部の縄文遺跡群と地域社会の変容」『島根考古学会誌 第 28 集』

松江市教育委員会 (財) 松江市教育文化振興事業団　2009『池平山城跡　松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築 (改良) 工事に伴う発掘調査報告書』

松江市教育委員会 (財) 松江市教育文化振興事業団　1999『ソフトビジネスパーク建設に伴う大佐遺跡群発掘調査報告書』

大和村教育委員会 1992『尼子陣所跡発掘調査報告書』

島根県教育委員会 1998『出雲・隠岐の城館跡』

山根正明 2013「神西城跡」『出雲の山城』ハーベスト出版

島根県古代文化センター　2013『出雲国風土記の研究Ⅳ 神門水海南辺の研究 (論考編)』

島根県古代文化センター　2012『出雲国風土記の研究Ⅳ 神門水海南辺の研究 (資料編)』

表 15　麓Ⅱ遺跡土器観察表

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
20	1	28	1区 SK02	1	弥生 土器	甕	口縁～ 肩部 1/3 以下	(14.4)	-	(7.0)	外：灰黄色～にぶい 橙色 内：灰黄色～にぶい 橙色	2.5Y6/2～ 5YR6/4 2.5Y6/2～ 5YR6/4	やや粗（1～ 3mmの砂粒多く 含む）	良	外：ハケ又は板小口による刺突文　横ナデ 内：横ナデ　ケズリ　ミガキ
23	1	28	1区 斜面 岩土器 溜り		土師器	坏	3/4	(14.2)	5.6	4.0	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR6/4 7.5YR6/4	密（0.5mmの砂 粒少量含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切（右回転） 内：回転ナデ
23	2	28	1区 斜面 岩土器 溜り		土師器	坏	底部 2/3	-	(5.8)	(1.6)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/4 10YR8/4	密（0.5mmの砂 粒少量含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
23	3	28	1区 岩土器 溜り		土師器	坏	底部 1/2 以下	-	(6.6)	(1.5)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR6/4 7.5YR6/4	密（0.5mmの砂 粒少量含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切（右回転） 内：回転ナデ
23	4	28	1区 Pit5		土師器	皿	底部 小片	-	(6.4)	(1.5)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/4	やや粗（1～ 3mmの砂粒多く 含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
23	5	28	1区 Pit5		土師器	皿	底部 小片	-	(4.6)	(1.0)	外：褐灰色 内：にぶい橙色	10YR4/1 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂 粒微量含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
24	1	28	1区 斜面	1	土師器	高坏	坏部 1/3 以下	(27.2)	-	(11.8)	外：にぶい橙色 内：橙～灰褐色	7.5YR6/4 5YR6/6～ 7.5YR4/2	密（1～2mmの 砂粒少量含む）	不良	外：ハケ目　突帯貼り付け 内：不明
24	2	28	1区 斜面	粘土	土師器	坏	口縁部 小片	(13.2)	-	(3.6)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂 粒微量含む）	良	外：回転ナデ 内：横ナデ　ケズリ　ミガキ
24	3	28	1区 斜面	1	土師器	皿	口縁部 小片	(8.7)	-	(0.9)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂 粒微量含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
24	4	28	1区 斜面	1	土師器	皿	口縁部 小片	(11.6)	-	(11.6)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂 粒少量含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
24	8	28	1区	表土	土師器	皿	底部 のみ	-	3.4	(1.4)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	10YR7/4 10YR7/4	密（0.5mmの砂 粒微量含む）	不良	外：回転ナデ　底部磨滅 内：回転ナデ
24	9	28	1区 斜面	表土	土師器	皿	1/3	(9.8)	(6.8)	2.0	外：灰黄～黄灰色 内：灰黄～黄灰色	2.5Y7/2～ 2.5Y1/4 2.5Y7/2～ 2.5Y1/4	密（0.5mmの砂 粒微量含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 外反気味に立ち上がり口縁にやや内湾 一部：黒褐色に変色 内：回転ナデ　一部スス付着
24	10	8	1区 斜面	表土	陶器	碗	体部 下半 ～底部	-	5.0	(4.8)	外：灰白色 内：灰黄色	5Y8/1 2.5Y7/2	密（砂粒含まない）	良	被熱　施釉 外：畳付　露体 やや撥形の高い高台
25	1	29	2区 Tr1	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	口縁部 小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR8/2	2mm以下の砂粒 多く含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：幅4mmの太い2条の沈線　区画内にRL縄文　波状口縁頂部にJ字文ナデか 内：ナデか
25	2	29	2区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄褐色	10YR6/3 10YR5/4	1mm以下の砂粒 多く含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：LR縄文　幅4.5mmの太い沈線文（J字文）　ナデか 内：ナデか
25	3	29	2区 Tr1	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：淡黄色	10YR6/4 2.5Y8/3	3mm以下の砂粒 多く含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：幅5mmの太い2条沈線間にLR縄文　ナデか 内：ナデか
25	4	29	2区 Tr1	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	口縁部 小片	-	-	-	外：浅黄色 内：浅黄色	2.5Y7/3 2.5Y7/3	3mm以下の白色 砂粒多く含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：3条の沈線　ナデか 内：ナデか
25	5	29	2区 Tr1	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/4	2mm以下の砂粒 多く含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：2条の沈線　ナデか 内：ナデか
25	6	29	2区	Ⅲ	縄文 土器	有文深鉢	口縁部 小片	(20.8)	-	(4.9)	外：黒褐色 内：黒色	10YR3/1 10YR2/1	1mm以下の砂粒 含む	良	外：口縁端部刻目　2条の末端刺突沈線　1条の沈線　上部にRL縄文　波底部に垂下隆帯とRL縄文　ミガキ 内：ミガキ
25	7	29	2区 側溝	Ⅲ	縄文 土器	有文深鉢	口縁部 1/5	(23.7)	-	(3.6)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR6/3 10YR6/4	1mm以下の白色 砂粒含む	良	外：波頂部二股に分かれる ミガキ　ナデ 末端刺突沈線区画 楕円形沈線区画 刻目文　垂下隆帯貼付け 内：波頂部円形刺突文 ミガキ
25	8	29	2区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	小片	-	最大径 (25.6)	(8.4)	外：黄褐色 内：黒褐色	2.5Y5/3 2.5Y3/1	1mm以下の白色 砂粒若干含む	良	外：丁寧なナデ 2条横走沈線文間に左上りの刻目文 沈線クランク文内に単節縄文（RL） 内：縦位巻貝条痕のち丁寧なナデ
25	9	29	2区 側溝	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	小片	-	最大径 (22.6)	(7.8)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR6/3	3mm以下の砂粒 多く含む	良	外：ミガキ　ナデ 2条横走沈線文間に貝殻腹縁による右上りの刻目文 変形長方形沈線区画文内に巻貝擬縄文 内：巻貝条痕、ナデ
25	10	29	2区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	小片	-	最大径 (24.9)	(7.4)	外：黒褐色　浅黄色 内：黒色	10YR3/1 2.5Y7/3 10YR2/1	1mm以下の砂粒 含む	良	外：2条横走沈線間に左上りの刻目文 ミガキ 末端刺突沈線内に巻貝擬縄文 内：ミガキ
25	11	29	2区	Ⅲ	縄文 土器	有文浅鉢	小片	-	-	-	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	10YR5/3 10YR4/3	1mm以下の砂粒 多く含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：2条の沈線　垂下隆帯貼付け　ナデか 内：ナデか
25	12	29	2区 側溝	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	10YR4/1 10YR6/3	1mm以下の砂粒 多く含む	良	外：ノの字状垂下隆帯貼付け 沈線4条 鋸歯状の沈線文2条 内：ミガキ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
25	13	29	2区	Ⅲ	縄文土器	有文深鉢	小片	-	-	-	外：黒褐色 内：褐灰色	10YR3/2 10YR5/1	3mm以下の砂粒多く含む	良	外：巻貝条痕のちナデ　横走沈線と連弧文 一部：スス痕あり 内：丁寧なナデ
25	14	29	2区	Ⅲ	縄文土器	有文浅鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	10YR4/2 10YR5/3	1mm以下の砂粒若干含む	良	外：ミガキ　対向連弧文を縦走する2条の沈線で連結　下段連弧文内に刻目を入れてすり消す スス痕あり 内：ミガキ
25	15	29	2区	Ⅲ	縄文土器	有文無頸の壺（注口土器）	口縁部小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：暗灰黄色	10YR5/2 2.5Y5/2	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：口縁部：隆帯状の突起、ノの字状垂下隆帯貼付け　隆帯に沿って沈線文 ナデ 内：ナデ
25	16	29	2区	Ⅲ	縄文土器	有文壺（注口土器）	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR7/2 10YR6/2	1mm以下の砂粒少量含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：刺突文　沈線内連続刺突文　沈線区画内に擬縄文　ミガキか 内：ミガキか
26	1	30	2区200-280下Tr1	Ⅲ	縄文土器	無文浅鉢	1/4以下	(18.1)	(5.0)	(8.0)	外：灰黄色 内：にぶい黄橙色	2.5Y6/2 10YR7/3	4mm以下の白色砂粒多く含む	良	磨滅し詳細不明 口頸部：外反し口唇端部に面を作る 外：口頸部ナデのち巻貝条痕 底部：指頭圧痕 内：（巻貝条痕のち？）丁寧なナデ
26	2	30	2区Tr1	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	1/5以下	(17.4)	-	(8.9)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい褐色	10YR7/3 7.5YR5/3	3mm以下の砂粒多く含む	良	口縁端部外側に肥厚し面を作る 外：一部ナデのち巻貝？条痕状の雑なミガキ 一部スス痕あり 内：ナデ
26	3	30	2区Tr1	Ⅲ	縄文土器	無文浅鉢	口縁部小片	(34.4)	-	(3.5)	外：にぶい黄橙色 内：褐灰色	10YR6/3 7.5YR4/1	1mm以下の砂粒多く含む	良	磨滅のため器面が荒れ調整不明 外：口縁外側にやや肥厚して丸みもつ 内：二枚貝条痕か
27	1	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	1/3以下	(33.0)	-	(19.9)	外：褐灰色～にぶい黄橙色 内：暗灰黄色　黄灰色	10YR5/1 10YR6/3 2.5Y5/2 2.5Y4/1	3mm以下の砂粒多く含む	良	口縁端部に面を作る 外：横位の巻貝条痕 内：横位の巻貝条痕
27	2	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文鉢	口縁部小片	-	-	-	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色 褐灰色	10YR4/1 10YR7/4 10YR4/1	1mm以下の砂粒含む	良	外：巻貝条痕のち丁寧なナデ 内：巻貝条痕のちナデ
27	3	30	2区北側	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：黒褐色	10YR4/2 10YR3/1	4mm以下の白色砂粒多く含む	良	口縁外反し端部に面をつくる 外：巻貝条痕のちナデ 内：巻貝条痕のちナデ
27	4	30	2区北側	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	胴部上半1/4以下	(30.4)	-	(17.0)	外：にぶい黄橙色 内：淡黄色	10YR7/3 2.5Y7/3	2mm以下の砂粒若干含む	良	外：丁寧なナデのち巻貝条痕 内：横位の巻貝条痕
27	5	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/4	2mm以下の砂粒含む	良	外：巻貝条痕のちナデか 内：巻貝条痕
27	6	30	2区側溝	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	胴部1/4以下	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：淡黄色　黄灰色	10YR7/4 2.5Y8/3 2.5Y4/1	1mm以下の砂粒少量含む	良	外：縦位の巻貝条痕　ナデ 内：横位の巻貝条痕　ナデ
28	1	30	2区200-280下Tr1	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	10YR5/3 10YR5/3	4mm以下の白色砂粒含む	良	口縁部やや内湾 外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
28	2	30	2区Tr1	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：浅黄色	10YR6/3 2.5Y7/3	1mm以下の砂粒少量含む	良	口縁部わずかに外反 外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
28	3	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	小片	-	-	-	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	10YR6/1 10YR7/4	2mm以下の砂粒若干含む	良	外：二枚貝条痕 内：ナデ
28	4	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	小片	-	-	-	外：橙色 内：灰黄褐色	5YR7/2 10YR6/2	2mm以下の白色砂粒多く含む	良	外：巻貝条痕のちナデか 内：二枚貝条痕
28	5	30	2区	Ⅲ	縄文土器	深鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 褐灰色 内：にぶい黄色	10YR5/2 10YR4/1 2.5Y6/3	2mm以下の砂粒若干含む	良	外：上部巻貝？によるやや雑なミガキ 下部丁寧なナデ 内：横位の巻貝条痕のちナデ
28	6	30	2区北側	Ⅲ	縄文土器	深鉢	小片	-	-	-	外：黒褐色 内：にぶい黄橙色	10YR3/1 10YR7/3	2mm以下の砂粒若干含む	良	外：黒色を呈す 幅1.5mm程の巻貝によるミガキ 内：横位の巻貝条痕
28	7	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	10YR4/2 10YR5/3	1mm以下の砂粒少量含む	良	外：粗いナデ、スス付着 内：縦位？の巻貝条痕
28	8	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：暗灰黄色	10YR5/3 2.5Y5/2	3mm以下の砂粒多く含む	良	外：ケズリのちナデ 内：条痕（巻貝か）
28	9	30	2区	Ⅲ	縄文土器	深鉢	口縁部小片	(24.1)	-	(6.7)	外：淡黄色～灰黄褐色 内：淡黄色～黒褐色	2.5Y8/4～ 10YR4/2 2.5Y8/4～ 10YR4/1	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：巻貝条痕又は縄文（LL又はL） 内：ナデ
28	10	30	2区Tr1	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	10YR4/1 10YR7/3	3mm以下の白色砂粒含む	良	外：横位の巻貝条痕 内：ナデ
28	11	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	10YR5/2 10YR5/3	2mm以下の砂粒含む	良	外：巻貝？条痕のち丁寧なナデ スス付着 内：丁寧なナデ
28	12	30	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/3	2mm以下の砂粒多く含む	良	磨滅のため調整の詳細不明 外：上部ナデか 下部巻貝条痕か 内：ナデか
29	1	31	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部1/2	(26.6)	-	(15.5)	外：にぶい橙色～灰白色 内：にぶい黄橙色～褐灰色	7.5YR7/3～ 2.5Y8/2 10YR7/3～ 10YR6/1	3mm以下の砂粒多く含む	良	外：ナデ 内：ナデ
29	2	31	2区側溝	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	(24.2)	-	(13.1)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい褐色	10YR7/4 7.5YR5/4	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：丁寧なナデ　スス付着 植物（モミ）の圧痕か 内：丁寧なナデ
29	3	31	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/3	2mm以下の砂粒多く含む	良	外：ナデ 内：ナデか　磨滅により詳細不明
29	4	31	2区北側	Ⅲ	縄文土器	深鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：浅黄色	10YR4/2 2.5Y7/4	2mm以下の砂粒多く含む	良	外：粗いナデ 内：丁寧なナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
29	5	31	2区	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	口縁部小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：浅黄色	10YR5/2 2.5Y7/3	2mm以下の砂粒多く含む	良	外：ケズリ 内：ナデ
29	6	31	2区北側	Ⅲ	縄文土器	無文深鉢	小片	-	-	-	外：灰白色 内：淡黄色	10YR8/2 2.5Y8/3	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：ケズリ 内：ナデ
30	1	31	2区	Ⅲ	縄文土器	深鉢	底部2/3	-	(7.0)	(3.9)	外：灰白色 内：浅黄色	10YR8/2 2.5Y7/4	1mm以下の白色砂粒多く含む	良	外：ナデ　凹底部同心円状にナデ 内：磨滅し詳細不明　ナデか
30	2	31	2区	Ⅲ	縄文土器	鉢	底部1/2	-	(7.3)	(2.1)	外：灰黄色 内：浅黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/3	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：ナデ 内：ナデ
30	3	31	2区北側	Ⅲ	縄文土器	鉢	底部1/4以下	-	(7.8)	(2.2)	外：橙色 内：黒褐色	5YR6/6 10YR3/1	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：ナデか　磨滅により詳細不明 内：二枚貝条痕のちナデ
30	4	31	2区	Ⅲ	縄文土器	鉢	底部1/2	-	(4.2)	(2.8)	外：淡黄色 内：褐灰色	2.5Y8/3 10YR4/1	2mm以下の砂粒若干含む	良	外：ナデか 内：ナデか
32	1	31	2区Tr1	I	土製品	炉壁？	小片	-	-	-	外：橙色	7.5YR6/6	3mm以下の砂粒含む	良	よく焼けている ナデ
32	2	31	2区	Ⅱ	須恵器	鉢（甕）	小片	-	-	-	外：灰白色～浅黄橙色 内：灰白色	10YR8/2 7.5YR8/4 2.5Y8/2	1mm以下の砂粒ごく少量含む	生焼け	外：ハケ目 内：不明
32	3	31	2区	Ⅱ	縄文土器	有文深鉢	口縁部小片	(30.4)	-	(6.9)	外：黒褐色 内：黒色	7.5YR3/1 7.5YR2/1	2mm以下の砂粒多く含む	良	頸部外反のち口縁内屈する 器面荒れている 外：巻貝による沈線　ナデか 内：ナデか
34	1	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	(24.2)	-	(6.5)	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	10YR6/2 10YR7/2	粗（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 幅5㎜の横走沈線 連続刺突文 縄文（LR） 内：ナデ
34	2	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁～肩	(26.4)	-	(12.2)	外：にぶい褐色 内：黄灰色	7.5YR5/3 2.5Y4/1	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：口縁端部に浅い刻み ナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
34	3	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(4.8)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	粗（0.5～1mmの砂粒少し含む）	やや不良	波状口縁 外：丁寧なナデ 口縁端部に浅い刻み、細密条線 外：丁寧なナデ
35	1	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(5.0)	外：にぶい橙色～黒褐色 内：黒色	7.5YR6/4～10YR3/1 2.5Y2/1	密（1mmの砂粒少し含む）	良	外：細密条痕のちナデ 幅2～3㎜の沈線区画文 円形刺突文 縄文（LR） 内：細密条痕
35	2	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.5)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：幅4㎜の深い沈線区画文に縄文(LR) 刺突文 無文部ナデ 内：二枚貝条痕
35	3	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(5.7)	外：褐灰色 内：褐灰色	7.5YR4/1 10YR4/1	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	内湾口縁 外：二枚貝条痕のちナデ 幅2～3㎜の沈線区画文　渦巻文 内：二枚貝条痕
35	4	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/3 7.5YR7/3	粗（1mmの砂粒多く含む）	不良	外：ナデ 幅3～4㎜の沈線区画文 内：ナデか
35	5	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR7/2 10YR6/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	不良	外：二枚貝条痕のち粗いナデ 幅3㎜の横走沈線2条 内：二枚貝条痕
35	6	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.6)	外：褐灰色 内：灰黄色	10YR5/1 2.5Y7/2	粗（0.5～3mmの砂粒多く含む）	良	外：幅5㎜の横走沈線　縄文（LR） 無文部ナデ 内：二枚貝条痕
35	7	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.3)	外：灰黄色 内：にぶい黄橙色	2.5Y7/2 10YR7/3	粗（1～5mmの砂粒多く含む）	良	内湾口縁 外：幅4㎜の横走沈線 縄文（LR） 内：丁寧なナデ
35	8	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.1)	外：灰黄褐色 内：灰黄色	10YR5/2 2.5Y7/2	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 幅2～3㎜の沈線で小さいJ字文 縄文（RL） 内：二枚貝条痕のちナデ
35	9	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	波頂部小片	-	-	(3.6)	外：褐灰色 内：褐灰色	10YR4/1 10YR4/1	密（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良	波状口縁 外：幅3～4㎜の沈線で小さいJ字文 縄文（LR） 無文部ナデ 内：二枚貝条痕
35	10	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.1)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	内湾口縁 外：幅3㎜の沈線区画文 縄文（LR） 無文部ミガキ 内：ミガキ又は丁寧なナデ
35	11	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.4)	外：にぶい褐色 内：黄灰色	7.5YR5/3 2.5Y4/1	粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 幅3㎜の沈線区画文　J字文 縄文（LR） 内：二枚貝条痕のちナデ
35	12	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.5)	外：暗灰黄色 内：黄灰色	2.5Y5/2 2.5Y4/1	やや粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：幅5㎜の沈線区画文 口縁端面、沈線間に縄文（LR） 無文部ナデ 内：ミガキ
35	13	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	(13.7)	-	(2.9)	外：黄灰色 内：黄灰色	2.5Y5/1 2.5Y5/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：幅2～3㎜の沈線文 縄文（RL） 無文部ナデ 内：ナデ
35	14	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.6)	外：黄灰色～灰黄褐色 内：黄褐色	2.5Y4/1～10YR5/2 2.5Y4/1	やや粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：幅5㎜の沈線 縄文（LR） 無文部ナデ 内：巻貝条痕のちナデ
35	15	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文深鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	10YR5/2 10YR7/2	粗（1～5mmの砂粒多く含む）	良	外：幅4～5㎜の波状沈線・N字状沈線区画文 縄文（RL） 無文部ナデ 内：巻貝条痕のちナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
35	16	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	2.5Y7/1 2.5Y7/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 幅4㎜の沈線によるJ字文 縄文（RL） 内：巻貝条痕のちナデ
35	17	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文深鉢	小片	-	-	-	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（1mmの砂粒少し含む）	不良	外：幅5㎜の沈線区画文 縄文（RL） 無文部ナデ 内：二枚貝条痕　ナデ
35	18	32	3区	Ⅳ	縄文土器	有文壺	小片	-	最大径(9.8)	(4.4)	外：黄褐色 内：黄褐色	2.5Y5/3 2.5Y5/3	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 2条の垂下隆帯　楕円文 縄文（LR） 内：ナデ
36	1	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(6.0)	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	7.5YR6/4 10YR6/3	密（1mmの砂粒少し含む）	良	波状口縁 外：ナデ 幅3～6㎜の沈線区画文 縄文（LR） 内：二枚貝条痕
36	2	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(5.2)	外：にぶい橙色 内：黒色	5YR6/4 2.5Y2/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	やや不良	外：幅4～5㎜の沈線でJ字文 縄文（LR） 無文部ナデ 内：ナデ スス付着
36	3	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(4.2)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	波状口縁 外：幅4㎜の沈線でJ字文 縄文（LR） 無文部二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕
36	4	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(4.5)	外：にぶい黄橙色 内：黒褐色	10YR6/3 2.5Y3/1	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：幅4㎜の沈線区画文 縄文（LR） 無文部ナデ、二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕
36	5	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.8)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 幅3～4㎜の沈線区画文 縄文（LR） 内：二枚貝条痕のちナデ
36	6	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(4.0)	外：にぶい黄橙色 内：褐灰色	10YR7/2 10YR4/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：幅3㎜の横走沈線　区画文 縄文（LR） 無文部二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
36	7	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.7)	外：にぶい黄橙色 内：浅黄色	10YR7/3 10YR8/3	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：幅3㎜の沈線区画文、J字文 縄文（RL） 無文部ナデ 内：ナデ
36	8	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.7)	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	7.5YR7/4 10YR7/3	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：幅2～3㎜の沈線区画文 縄文（RL） 内：ナデ
36	9	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.2)	外：にぶい黄橙色 内：黒褐色	10YR6/3 10YR3/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：幅4.5㎜の横走沈線 縄文（LR） 無文部ナデ 内：二枚貝条痕（のちナデ？）
36	10	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(2.7)	外：にぶい橙色 内：褐灰色	7.5YR7/4 10YR4/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：ナデ 幅3～4㎜の沈線区画文 縄文（LR） 内：二枚貝条痕
36	11	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.7)	外：灰黄褐色 内：黒褐色	10YR5/2 2.5Y3/1	密（1mmの砂粒少し含む）	良	外：幅2～5㎜の沈線 縄文（LR） 無文部ナデ 内：二枚貝条痕
36	12	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.3)	外：褐灰色 内：褐灰色	10YR4/1 10YR4/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：幅4～5㎜の沈線 縄文（RL） 無文部ナデ 内：ナデ
36	13	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(5.2)	外：褐灰色 内：灰黄色	10YR5/1 2.5Y7/2	粗（1～5mmの砂粒多く含む）	良	外幅3～5㎜の横走沈線　垂下沈線 縄文（LR） 無文部二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕
36	14	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(6.0)	外：灰白色 内：灰白色	2.5Y8/2 2.5Y8/2	粗（1～4mmの砂粒多く含む）	不良	外：幅3～4㎜の横走沈線 縄文（RL） 無文部ナデ 内：ナデ
36	15	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.1)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/2	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	外：幅2㎜の沈線区画文 縄文（LR） 無文部ナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
36	16	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい橙色 内：にぶい黄褐色	7.5YR6/4 10YR5/3	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：幅2㎜の垂下沈線2条 二枚貝条痕のち縦位の縄文（LR） 内：条痕（巻貝か）　ナデ
36	17	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：暗灰黄色 内：褐灰色	2.5Y5/2 10YR4/1	密（0.5～1mmの砂粒少し、金雲母多く含む）	良	外：幅4～5㎜の沈線による綾形文 縄文（RL） 無文部ナデ 内：巻貝条痕　ナデ
36	18	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 幅4㎜の沈線 縄文（LR） 内：二枚貝条痕
36	19	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR6/3 10YR5/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 幅3㎜の横走沈線 縄文（LR） 内：ナデ
36	20	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：浅黄色	10YR6/2 2.5Y8/3	やや粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 幅2～3㎜の沈線区画文 縄文（RL） 内：二枚貝条痕
36	21	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	小片	-	-	-	外：黄灰色 内：灰黄色	2.5Y5/1 2.5Y7/2	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 縄文（LR） 内：二枚貝条痕

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
36	22	33	3区	Ⅳ	縄文土器	有文深鉢	口縁部1/6	(37.6)	-	(17.7)	外：灰黄褐色～黒褐色 内：褐灰色	10YR6/2～2.5Y3/2 10YR4/1	粗（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良	波状口縁 外：二枚貝条痕のちナデ 沈線区画文　渦巻文　刺突文 縄文（LR） 内：二枚貝条痕のちナデ
37	1	34	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部1/4以下	(27.6)	-	(5.2)	外：にぶい黄橙色～黄灰色 内：にぶい黄橙色～黄灰色	10YR7/2～2.5Y4/1	やや粗（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良	波状口縁 外：ミガキ 幅5㎜の横走沈線　沈線区画文 縄文（LR） 内：ナデ
37	2	34	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(4.3)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	波状口縁 外：丁寧なナデ 幅5㎜の沈線区画文 縄文（LR） 外：丁寧なナデ
37	3	34	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	口縁部小片	-	-	(3.8)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：幅4㎜の沈線区画文 縄文（RL） 無文部ミガキ 内：ミガキ
37	4	34	3区	Ⅳ	縄文土器	有文鉢	波状口縁突起小片	-	-	-	外：灰黄色 内：黄灰色	2.5Y6/2 2.5Y4/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	波頂部：突起 外：ミガキ　沈線 内：ミガキ
38	1	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	-	-	(8.9)	外：灰黄褐色～黒色 内：にぶい黄橙色	10YR5/2～2.5Y2/1 10YR7/2	密（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良	波状口縁 一次調整はケズリ 外：ミガキ 内：ミガキ
38	2	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	10YR5/2 10YR6/3	やや粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	波状口縁 外：二枚貝条痕、ナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
38	3	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	(9.7)	-	(4.0)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/2	密（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
38	4	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	(30.6)	-	(6.5)	外：褐灰色 内：褐灰色	10YR5/1 10YR5/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	内湾口縁 口縁端部に面を作る 外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
38	5	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	(21.8)	-	(9.4)	外：にぶい黄橙色 内：浅黄色	10YR7/3 2.5Y7/4	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	内湾口縁 外：二枚貝条痕のちナデ 一部スス付着 内：二枚貝条痕
38	6	34	3区	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	口縁部小片	(17.6)	-	(5.1)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR6/2	粗（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
38	7	35	3区 西溝	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	(32.4)	-	(14.2)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR5/2	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	内湾口縁 口縁端部に面を作る 外：二枚貝条痕 一部スス付着 内：二枚貝条痕 黒色付着物有
38	8	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	-	-	(3.0)	外：黄灰色 内：黒褐色	2.5Y6/1 2.5Y3/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
38	9	35	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	小片	(32.4)	-	(24.3)	外：にぶい赤褐色 内：灰黄褐色	5YR5/4 10YR5/2	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕のち一部ナデ
38	10	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	-	-	(4.2)	外：黄灰色 内：にぶい黄橙色	2.5Y5/1 10YR7/2	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のち丁寧なナデ 内：ナデ
38	11	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	-	-	(5.5)	外：暗灰黄色～にぶい赤褐色 内：暗灰黄色～にぶい赤褐色	2.5Y5/2～5YR5/4 2.5Y5/2～5YR5/4	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：粗いナデ（一次調整は巻貝条痕か？） 内：ナデ
38	12	34	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	-	-	(3.6)	外：黄灰色 内：黄灰色	2.5Y4/1 2.5Y4/1	粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 内：二枚貝条痕
39	1	35	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	(20.6)	-	(7.2)	外：にぶい黄橙色 内：灰黄色	10YR7/3 2.5Y7/2	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	内湾波状口縁 外：巻貝条痕のちナデ 内：巻貝条痕のちナデ
39	2	36	3区 南側溝	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	(25.6)	最大径(26.4)	(23.6)	外：黄灰色 内：黄灰色	2.5Y5/1 2.5Y5/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	内湾口縁 外：口縁端部ナデ 二枚貝条痕 内：口縁端内面肥厚 二枚貝のち巻貝条痕
39	3	35	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	小片	(16.4)	-	(9.2)	外：にぶい黄橙色 内：褐灰色	10YR7/2 10YR5/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
39	4	35	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	(18.2)	最大径(22.0)	(22.7)	外：にぶい橙褐色 内：にぶい橙褐色～褐灰色	10YR7/3 10YR7/3～10YR4/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
40	1	36	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁部小片	(24.5)	-	(8.5)	外：褐灰色 内：黒色	10YR4/1 2.5Y2/1	やや粗（1～2mmの砂粒少し含む）	良	外反口縁 外：口縁部ナデ 二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕 口縁部スス付着
40	2	36	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	(25.4)	-	(11.0)	外：にぶい橙色 内：灰黄色	7.5YR6/4 2.5Y6/2	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外反口縁 外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
40	3	36	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	(26.2)	-	(11.2)	外：灰黄褐色 内：褐灰色	10YR5/2 10YR4/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外反口縁 外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
40	4	36	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁部小片	(29.2)	-	(13.5)	外：にぶい橙色 内：黄灰色	5YR7/4 2.5Y6/1	粗（1～4mmの砂粒多く含む）	良	外反口縁 外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
40	5	36	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	口縁部小片	-	-	(7.8)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：口縁部ナデ 二枚貝条痕
40	6	36	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	口縁部小片	-	-	(6.1)	外：にぶい橙色～黄灰色 内：灰黄褐色	5YR6/4～2.5Y5/1 10YR5/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：巻貝条痕 （一次調整はケズリか）
41	1	37	3区	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	1/2以下	-	-	(5.4)	外：にぶい黄橙色～黄灰色 内：にぶい黄橙色～黄灰色	10YR6/3～2.5Y4/1 10YR6/3～2.5Y4/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	不良	外：ナデ 太い沈線2条 内：丁寧なナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
41	2	37	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	(3.5)	外：黄灰色 内：にぶい黄橙色	2.5Y4/1 10YR7/2	密（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 内：二枚貝条痕 底部ケズリ
41	3	37	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	底部1/2以下	-	(8.5)	(6.0)	外：灰黄褐色 内：黒色	10YR5/2 2.5Y2/1	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕 底部ナデ
41	4	37	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	底部1/2以下	-	(9.4)	(3.8)	外：にぶい黄橙色 内：黄灰色	10YR7/3 2.5Y4/1	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	不良	外：ナデ 内：器面荒れ調整不明
41	5	37	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	底部1/4以下	-	(10.0)	(4.5)	外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR8/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	不良	外：底部ナデ 内：二枚貝条痕
41	6	37	3区 南側溝	Ⅳ	縄文土器	深鉢	1/3以下	-	11.8	(16.6)	外：にぶい橙色 内：灰黄色～褐灰色	7.5YR7/4 2.5Y6/2～ 10YR5/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕 底部ナデ
41	7	37	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	1/3以下	-	(10.6)	(14.3)	外：にぶい橙色 内：灰黄色	7.5Y7/4 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	やや不良	外：二枚貝条痕のち一部ナデ 内：二枚貝条痕
41	8	37	3区	Ⅳ	縄文土器	深鉢	底部1/4以下	-	(11.4)	(11.0)	外：暗灰黄色 内：浅黄色～黒褐色	2.5Y5/2 2.5Y7/3～ 2.5Y3/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：ヘラケズリのち一部ナデ
41	9	37	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	底部1/2	-	(10.0)	(6.9)	外：明黄褐色 内：黄褐色	10YR7/6 2.5Y5/3	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	不良	高台状底部 外：二枚貝条痕のちナデ 内：ナデ
41	10	37	3区 西溝	Ⅳ	縄文土器	深鉢	底部1/2以下	-	(5.4)	(8.9)	外：橙色 内：浅黄色	7.5YR6/6 2.5Y7/3	やや粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
42	1	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	精製 外：巻貝によるミガキ 内：ナデ
42	2	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄色 内：にぶい黄橙色	2.5Y6/2 10YR6/3	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：丁寧なナデ
42	3	38	3区 西溝	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：にぶい黄色 内：黄灰色	2.5Y6/3 2.5Y5/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：ナデ
42	4	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：褐灰色	10YR6/2 10YR5/1	密（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 種子圧痕か 内：ナデ
42	5	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：浅黄橙色 内：黄灰色	10YR8/3 2.5Y4/1	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	外：ケズリ 内：ナデ
42	6	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	(9.4)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR6/2	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：ナデ 内：二枚貝条痕
42	7	38	3区	Ⅳ	縄文土器	浅鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：暗灰黄色	10YR5/2 2.5Y5/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕
42	8	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：浅黄色 内：浅黄色	2.5Y7/3 2.5Y7/3	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：ケズリ 内：二枚貝条痕
42	9	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：黄灰色 内：黄灰色	2.5Y4/1 2.5Y4/1	粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：ケズリ
42	10	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄色 内：浅黄色	2.5Y6/2 2.5Y7/3	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 内：巻貝条痕
42	11	38	3区 南側溝	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：黄灰色 内：黄灰色	2.5Y4/1 2.5Y6/1	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：巻貝条痕
42	12	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：巻貝条痕 内：巻貝条痕
42	13	38	3区	Ⅳ	縄文土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：橙色	10YR5/2 7.5YR6/6	粗（0.5～2mmの砂粒多く含む）	良	外：巻貝条痕のちナデ 内：巻貝条痕（一次調整は二枚貝か）
43	1	38	3区	Ⅳ	土製品	耳栓		-	3.6	(1.3)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR6/3 10YR6/3	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	不良	片面凹形 ナデ
43	2	38	3区	Ⅳ	土製品	管状耳飾	完形	長さ2.1	最大幅1.0	最大厚1.0	外：灰黄色	2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	やや不良	磨滅のため調整不明
57	1	41	4区 SK01		縄文土器	無文鉢		-	-	(3.5)	外：にぶい黄橙色 内：灰黄色	10YR7/3 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ　二枚貝条痕 内：ナデ
57	2	41	4区 SK02		縄文土器	無文鉢		-	-	(4.9)	外：黄灰色 内：暗灰黄色	2.5Y4/1 2.5Y5/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	やや不良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
57	3	41	4区 SK04		縄文土器	無文深鉢		(27.4)	-	(8.7)	外：にぶい橙色～黄灰色 内：灰黄色	7.5YR7/4～ 2.5Y5/1 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	不良	外：条痕（二枚貝と巻貝によるものか） 内：二枚貝条痕
57	4	41	4区 SK04		縄文土器	無文深鉢		(30.5)	-	(7.8)	外：灰黄褐色 内：灰黄色	10YR5/2 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	不良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
57	5	41	4区 SK04		縄文土器	無文深鉢		-	-	(10.9)	外：暗灰黄色 内：灰黄色	2.5Y5/2 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕、ナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
57	6	41	4区 SK05		縄文土器	有文鉢		-	-	(7.0)	外：灰黄色～灰白色 内：浅黄橙色～にぶい橙色	2.5Y5/1～ 10YR8/2 10YR8/3～ 5Y7/4	粗（2～3mmの砂粒多く含む）	不良	外：幅4～5㎜の横走沈線 楕円形区画文 無文部二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
57	7	41	4区 SK05		縄文土器	無文深鉢		-	-	(6.8)	外：黄灰色 内：黄灰色	2.5Y4/1 2.5Y4/1	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 内：丁寧なナデ
57	8	41	4区 落ち込み1	1	縄文土器	有文鉢		-	-	(6.1)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：幅3～4㎜の横走沈線 楕円形区画文 無文部二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
57	9	41	4区 落ち込み1	1	縄文土器	有文鉢		-	-	(2.6)	外：にぶい褐色 内：にぶい橙色	7.5YR/3 7.5YR6/4	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：波状口縁 幅2～3㎜の沈線区画文 縄文（LR） 無文部ナデ 内：細密条痕
57	10	41	4区 落ち込み1	1	縄文土器	有文鉢		-	-	(2.3)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR5/2	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 縄文（RL） 内：ナデ 細密条痕
57	11	41	4区 落ち込み1	1	縄文土器	無文鉢		-	-	(4.8)	外：褐灰色 内：黒褐色	5YR5/2 2.5Y3/1	粗（1mmの砂粒多く含む）	良	外：巻貝条痕 内：巻貝条痕
57	12	41	4区 流路跡	砂	縄文土器	無文鉢		-	-	(3.9)	外：暗灰黄色 内：黄灰色	2.5Y5/2 2.5Y4/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 内：ナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
57	13	41	4区 流路跡	砂	縄文 土器	無文鉢		-	-	(4.1)	外：灰黄褐色 内：灰黄色	10YR6/2 2.5Y7/2	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕
57	14	41	4区 流路跡	砂	縄文 土器	無文鉢		-	-	(7.4)	外：暗灰黄色 内：灰黄色	2.5Y5/2 2.5Y7/2	粗（1～4mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕（2種類の貝使用）
58	1	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢	口縁部 小片	-	-	(5.8)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色～褐灰色	10YR7/2 10YR7/2～ 10YR4/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：幅3mmの沈線による横走沈線　区画文 区画内に縄文(LR) 無文部ミガキ 内：条痕のちミガキ
58	2	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢		-	-	(5.2)	外：黄灰色 内：灰黄褐色	2.5Y4/1 10YR6/2	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	やや不良	外：幅4mmの沈線による楕円形区画文 縄文(RL) 無文部ナデ 内：条痕（二枚貝か）のちナデ
58	3	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢		-	-	-	外：灰黄褐色 内：灰黄色	10YR6/2 2.5Y7/2	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：4～5mmの横走沈線 縄文(LR) 無文部二枚貝条痕のちナデ 内：二枚貝条痕
58	4	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢		-	-	-	外：黄灰色 内：灰黄色	2.5Y5/1 2.5Y7/2	やや粗（2～3mmの砂粒多く含む）	良	外：幅5mmの横走沈線 縄文(LR) 内：条痕（巻貝か）
58	5	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢		-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR8/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	不良	外：ナデ 2～5mmの沈線による楕円形区画文 内：不明
58	6	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢		-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄色	10YR6/4 2.5Y6/3	粗（2～4mmの砂粒多く含む）	良	外：全面縄文(RL) 内：巻貝条痕
58	7	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	有文鉢		-	-	(3.3)	外：にぶい褐色 内：にぶい橙色	7.5YR5/4 7.5YR6/3	粗（1～4mmの砂粒多く含む）	良	外：幅3～4mmの沈線による渦巻文 縄文(RL) 無紋部ナデ 内：二枚貝条痕のちナデ
58	8	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文深鉢		-	-	(6.1)	外：橙色～灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	5YR6/6～ 10YR4/2 10YR5/3	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：巻貝条痕 内：二枚貝条痕
58	9	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文鉢		-	-	(4.2)	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	10YR7/2 2.5Y8/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：条痕（二枚貝か） 内：条痕（巻貝か）
58	10	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文浅鉢		-	-	(3.7)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/2	密（0.5～1mmの砂粒少量含む）	良	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ
58	11	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文鉢		-	(13.1)	(3.3)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：巻貝条痕 内：二枚貝条痕
58	12	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文鉢		-	-	(4.1)	外：浅黄色 内：浅黄色	2.5Y7/3 2.5Y7/3	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕　ナデ 内：ナデ
58	13	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文鉢		-	(9.1)	(3.3)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 内：ナデ
58	14	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文深鉢		-	-	-	外：灰黄色 内：浅黄色	2.5Y6/2 2.5Y7/3	やや粗（0.5～3mmの砂粒少量含む）	良	外：ケズリ 内：ナデ
58	15	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文鉢		-	-	-	外：橙色 内：黒色	5YR6/6 10Y2/1	やや粗（1～2mmの砂粒少し含む）	良	外：細密条痕 内：ナデか スス付着
58	16	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文鉢		-	-	(5.5)	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR6/4 10YR5/2	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：ナデ 内：二枚貝条痕
58	17	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文深鉢		-	-	(5.9)	外：黄灰色 内：暗灰黄色	2.5Y4/1 2.5Y5/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
58	18	42	4区	Ⅲ	縄文 土器	無文鉢		-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：黄灰色	10YR5/3 2.5Y4/1	粗（1～3mmの砂粒多く含む）	良	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕
70	1	40	4区	I	青磁	盤	口縁部 小片	-	-	(2.2)	断面：灰白色 釉：ｵﾘｰﾌﾞ灰色	7.5Y7/1 10Y6/2	緻密	良	施釉 貫乳
74	1	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	甕	口縁部 小片	(21.4)	-	(4.7)	外：にぶい黄橙色～黒褐色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2～ 2.5Y3/2 10YR7/2	やや粗（1～2mmの砂粒少し含む）	良	外：横ナデ　ハケメのち口縁端部にキザミ　櫛描直線文　刺突文 一部スス付着 内：ナデ
74	2	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	甕	口縁部 小片	（13.0）	-	（1.8）	外：褐灰色 内：褐灰色	10YR5/1 10YR5/1	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：凹線文　刺突文　横ナデ 内：横ナデ　ハケメ
74	3	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	甕	口縁部 小片	-	-	(5.9)	外：浅黄色 内：にぶい黄橙色	10YR8/3 10YR7/2	2mm以下の砂粒多く含む	良	外：凹線　肩部に5～6条の波状文 ナデ　ハケメ 内：横ナデ　ケズリ
74	4	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	甕	底部	-	7.7	(6.2)	外：橙～にぶい褐色 内：灰黄褐色	7.5YR7/6～ 7.5YR6/3 10YR5/2	密（3mm程度の砂粒若干含む）	良	磨滅ひどく詳細不明
74	5	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	低脚坏		(11.0)	-	(3.8)	外：にぶい橙色～にぶい黄橙色 内：にぶい褐色～にぶい橙色	5YR6/3～ 10YR7/2 7.5YR6/3～ 5YR6/4	1mm以下の砂粒多く含む	良	器面荒れにより詳細不明
74	6	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	高坏（鉢）	口縁部 小片	(15.4)	-	(3.8)	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR7/2 10YR6/2	1mm以下の砂粒若干含む	良	磨滅ひどく詳細不明
74	7	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	高坏（鉢）	口縁部 小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR7/2 10YR6/2	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：横ナデか 内：横ナデ　ミガキ
74	8	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	鉢	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	1mm以下の砂粒含む	良	外：横ナデ 内：横ナデ
74	9	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	加飾壺	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR6/3 10YR6/3	2mm以下の砂粒含む	良	外：4条の平行沈線文　鋸歯文 貼付突帯に半裁竹管刺突文 内：ケズリ
74	10	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	短頸壺	口縁部 小片	(6.5)	-	(2.4)	外：黒褐色～灰黄褐色 内：黒褐色	10YR3/1～ 10YR4/2 10YR3/2	砂粒をほとんど含まない	良	口縁部円孔2か所 外：横ナデ 内：横ナデ
74	11	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	台付直口壺		-	-	-	外：灰黄色 内：灰黄褐色	2.5Y7/2 10YR5/2	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：横ナデ　ハケメ 肩部平行沈線文 内：横ナデ　指頭圧痕　ケズリ
74	12	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	台付直口壺	脚部	-	(11.4)	(2.7)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：横ナデ 内：横ナデ　ケズリ
74	13	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	注口土器	注口部	長さ 4.8	幅 1.6	-	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR4/2 10YR4/2	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：ハケメ　ナデ 内：ケズリ
74	14	43	5区 SD01古	V	弥生 土器	甕	口縁部 小片	(15.4)	-	(4.0)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR6/2	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：ナデ　擬凹線文 内：横ナデ　ケズリ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
74	15	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(15.4)	-	(3.6)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	2mm 以下の砂粒含む	良	外：貝殻復縁による擬凹線文 横ナデ 内：横ナデ　ケズリ
74	16	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(19.3)	-	(5.3)	外：黄灰色 内：暗灰黄色	2.5Y5/1 2.5Y5/2	1mm 以下の砂粒多く含む	良	外：口縁部にモミ痕？　擬凹線文 横ナデ 内：横ナデ　ケズリ
74	17	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(17.0)	-	(4.1)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR6/2	2mm 以下の砂粒含む	良	外：横ナデ　擬凹線文 スス付着 内：横ナデ　ケズリ
74	18	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(23.4)	-	(4.9)	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	10YR6/2 10YR7/3	1mm 以下の砂粒少し含む	良	外：口縁部波状文 横ナデ 内：横ナデ
74	19	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(14.6)	-	(5.2)	外：褐灰色 内：灰黄褐色	10YR5/1 10YR6/2	2mm 以下の砂粒若干含む	良	外：肩部擬凹線文 横ナデ　スス付着 内：横ナデ　ケズリ
74	20	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(15.8)	-	(5.4)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	1mm 以下の砂粒若干含む	良	外：肩部：貝殻復縁刺突 横ナデ 内：横ナデ　ケズリ
74	21	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(16.4)	-	(6.9)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（0.5 ～ 1mm の砂粒少し含む）	良	外：横ナデ 貝殻復縁刺突文 内：横ナデ　ケズリ
74	22	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(17.6)	-	(4.3)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	1mm 以下の砂粒少し含む	良	外：横ナデ 内：横ナデ
74	23	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(19.8)	-	(6.5)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	密（0.5 ～ 1mm の砂粒多く含む）	良	外：横ナデ　ハケメ 内：横ナデ　ケズリ
74	24	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	壺（甕）	小片	-	-	-	外：灰黄色 内：灰黄色	10YR5/2 10YR5/2	1mm 以下の砂粒若干含む	良	外：刺突文　平行沈線文 横ナデ 内：ケズリ
74	25	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	壺（甕）	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	1mm 以下の砂粒少量含む	良	外：平行沈線文　連弧文？ 内：ケズリ
74	26	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/2	1mm 以下の砂粒含む	良	刺突文　平行沈線文 外：横ナデ 内：ケズリ
74	27	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	3mm 以下の砂粒多く含む	良	外：横ナデ 貝殻復縁による羽状文 内：ケズリ
74	28	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	2mm 以下の砂粒多く含む	良	羽状文 外：横ナデ 内：横ナデ　ケズリ
74	29	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	小片	-	-	-	外：淡黄色 内：淡黄色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	1mm 以下の砂粒多く含む	良	羽状文 外：横ナデ 内：ケズリ
74	30	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	壺（甕）	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR5/2	2mm 以下の砂粒含む	良	外：刺突文　平行沈線文　ハケメ スス付着 内：ケズリ
74	31	43	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	小片	-	-	-	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR6/2	3mm 以下の砂粒含む	良	外：横ナデ　刺突文 内：ケズリ
75	1	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	低脚坏	脚部	-	4.0	(1.5)	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	10YR6/2 10YR7/3	2mm 以下の砂粒若干含む	良	外：横ナデ 内：ナデか
75	2	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	低脚坏	脚部	-	5.3	(2.4)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR5/2	2mm 以下の砂粒若干含む	良	外：横ナデ 内：ナデか
75	3	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	低脚坏	脚部	-	6.7	(2.2)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/2	1mm 以下の砂粒多く含む	良	外：横ナデ 内：横ナデ　ミガキか
75	4	44	5区 SD01 古	V	土師器	低脚坏	1/2 以下	-	(8.6)	(3.7)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（0.5mm の砂粒多く含む）	良	外：横ナデ 内：坏部ハケメ 脚部ユビナデ　横ナデ
75	5	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	低脚坏	1/3	-	7.5	(2.3)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	密（0.5mm の砂粒多く含む）	良	径 5mm の円孔 1 か所 外：横ナデ 内：坏部調整不明 脚部横ナデ
75	6	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	鼓形器台		-	-	-	外：淡黄色 内：にぶい黄橙色	2.5Y8/3 10YR7/3	2mm 以下の砂粒多く含む	良	外：横ナデ 内：ミガキ　ナデ　ケズリ
75	7	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	鼓形器台	脚部小片	-	(19.6)	(6.0)	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR7/2 10YR6/2	1mm 以下の砂粒多く含む	良	外：擬凹線様の痕跡残る 横ナデ 内：ケズリ　ナデ
75	8	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	鼓形器台	口縁部小片	(23.8)	-	(7.7)	外：灰白色 内：灰白色	2.5Y8/2 10YR8/2	2mm 以下の砂粒多く含む	良	磨滅のため調整不明
75	9	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	鼓形器台	脚部小片	-	(19.2)	(4.4)	外：灰白色 内：淡黄色	2.5Y8/2 2.5Y8/3	2mm 以下の砂粒多く含む	良	外：横ナデ 内：ケズリ　横ナデ
75	10	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	甕	口縁部小片	(15.6)	-	(6.1)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y7/2	1mm 以下の砂粒多く含む	良	口縁端部面を作り外面に肥厚 外：横ナデ 肩部波状文　平行沈線文 内：横ナデ　ケズリ
75	11	44	5区 SD01 古	V	土師器	甕	口縁部小片	(18.2)	-	(5.3)	外：黄灰色 内：黒褐色	2.5Y4/1 2.5Y3/1	1mm 以下の砂粒若干含む	良	外：ナデ　ハケメ 内：ナデ　ケズリ
75	12	44	5区 SD01 古	V	土師器	甕	口縁部小片	(17.4)	-	(4.4)	外：灰黄色 内：灰黄色	10YR5/2 10YR5/2	1mm 以下の砂粒若干含む	良	外：横ナデ 内：横ナデ　ケズリ
75	13	44	5区 SD01 古	V	弥生土器	脚付甕	1/3	-	-	(5.5)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	やや粗（1 ～ 2mm の砂粒多く含む）	良	外：磨滅のため調整不明 内：ケズリ
76	1	44	5区 SD01 古	V	土師器	高坏	1/2 以下	(15.2)	-	(4.9)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR5/2	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：横ナデのちミガキ 坏底部ハケメのちナデ 内：ミガキ 一部赤彩か
76	2	45	5区 SD01 古	V	土師器	高坏	1/3	-	-	(9.3)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（0.5 ～ 1mm の砂粒少し含む）	良	接合部円盤充填（α） 外：細かいハケメのちミガキ 内：坏部ミガキ 脚部ナデ　ケズリ
76	3	44	5区 SD01 古	V	土師器	高坏		-	-	-	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	1mm 以下の砂粒多く含む）	良	接合部に円盤充填（刺突痕α） 外：横ナデ 内：ナデか
76	4	44	5区 SD01 古	V	土師器	高坏	1/2	17.4	9.2	(6.6)	外：橙色～にぶい黄橙色 内：橙色～にぶい黄橙色	7YR7/6 ～ 10YR7/2 7YR7/6 ～ 10YR7/2	密（0.5 ～ 1mm の砂粒多く含む）	良	刺突痕のない厚めの円盤充填（接続β） 坏底部に段あり 外：横ナデ　縦ハケメ 内：横ナデのちヘラミガキ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
76	5	45	5区 SD01古	V	土師器	高坏	1/2 以下	-	8.5	(7.4)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（0.5～1mm の砂粒少し含む）	良	外：脚柱部縦ハケメのち縦ナデ 脚裾部縦ハケメのち横ナデ 内：横ナデ　ヘラケズリ
76	6	44	5区 SD01古	V	土師器	高坏		(15.2)	-	(5.0)	外：黄灰色 内：暗灰黄色	2.5Y5/1 2.5Y4/2	1mm以下の白色 砂粒多く含む	良	接合部に円盤充填 外：横ナデ　ハケメ 内：横ナデ　ナデ
76	7	44	5区 SD01古	V	土師器	高坏	脚部 小片	-	(10.4)	(3.7)	外：灰黄色～黒褐色 内：灰黄色	2.5Y6/2～ 10YR3/1 2.5Y6/2	1mm以下の砂粒 多く含む	良	外：ケズリ　横ナデ 内：ケズリ　ハケメのち横ナデ
76	8	45	5区 SD01古	V	土師器	小型丸底壺	1/2	-	最大径 8.8	(7.0)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（0.5mmの砂 粒少し含む）	良	手づくね成形 外：横ナデ 肩部縦ハケメか　のちナデ 接合部指頭圧痕 内：横ナデ 胴部ヘラケズリ　ナデ 底部指頭押圧
76	9	45	5区 SD01古	V	土師器	小型丸底壺	3/4	(10.4)	最大径 11.8	10.4	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	やや粗（1～ 8mmの砂粒少し 含む）	良	外：口縁部横ナデ 胴部粗い縦ハケメ 内：口縁部横ハケメのち横ナデ 胴部ヘラケズリ
76	10	45	5区 SD01古	V	土師器	直口壺	2/3 以下	(12.0)	-	(6.7)	外：にぶい黄褐色～ にぶい褐色 内：にぶい黄褐色～ にぶい褐色	10YR5/3～ 7.5YR5/4 10YR5/3～ 7.5YR5/4	密（0.5mmの砂 粒少し含む）	良	外：口縁端部横ナデ 口縁部ハケメのち横ナデ 胴部横ハケメ 底部ハケメのちナデ スス付着 内：口縁部横ナデ 胴部ナデ　ヘラケズリ 底部ヘラケズリのち指頭による調整
76	11	45	5区 SD01古	V	土師器	壺	3/4	(12.4)	最大径 16.5	17.5	外：灰黄色～黒色 内：灰黄色～黒色	2.5Y7/2～ 2.5Y2/1 2.5Y7/2～ 2.5Y2/1	密（0.5～1mm の砂粒少し含む）	良	外：口縁部横ナデ 肩から下部ハケメ スス付着 内：口縁部ハケメ　横ナデ 胴部ナデ　ヘラケズリ
77	1	47	5区 SD01古	V	土師器	甕	口縁部 小片	(13.1)	-	(3.6)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR5/2 10YR5/2	密（0.5mmの砂 粒多く含む）	良	外：横ナデ 内：横ナデ　ナデ　ヘラケズリ
77	2	47	5区 SD01古	V	土師器	甕	口縁部 小片	(16.0)	-	(4.4)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	やや粗（1mmの 砂粒多く含む）	良	外：口縁部横ナデ 胴部不明 内：口縁部横ナデ 胴部ケズリ
77	3	47	5区 SD01古	V	土師器	甕	口縁部 小片	(14.3)	-	(5.2)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	3mm以下の砂粒 少し含む	良	退化した二重口縁 外：ハケメのち横ナデ　横ナデ　粗いハケメ 内：ハケメのち横ナデ
77	4	47	5区 SD01古	V	土師器	甕	口縁部 小片	(16.0)	-	(5.1)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	1mm以下の砂粒 多く含む	良	退化した二重口縁 外：口縁部横ナデ 肩部ハケメ 内：口縁部横ナデ 肩部ケズリ
77	5	47	5区 SD01古	V	土師器	甕	口縁～ 肩部	(14.8)	-	(8.7)	外：暗灰黄色 内：暗灰黄色	2.5Y5/2 2.5Y5/2	密（0.5mmの砂 粒少し含む）	良	退化した二重口縁 外：口縁部横ナデ 胴部横のち縦の粗いハケメ 内：口縁部横ナデ　粗いハケメ 体部ケズリ
77	6	46	5区 SD01古	V	土師器	甕	ほぼ 完形	14.1	最大径 18.4	(18.6)	外：黄灰色 内：灰黄色	2.5Y4/1 2.5Y6/2	密（0.5～1mm の砂粒多く含む）	良	外：口縁部横ナデ 肩部斜めのち縦のハケメ 胴部以下斜めハケメ スス付着 内：口縁部粗い横ナデ 胴部ヘラケズリ　下半に指頭圧痕
77	7	46	5区 SD01古	V	土師器	甕	2/3	(14.5)	最大径 (17.2)	19.3	外：灰黄褐色～暗灰 黄色 内：灰黄褐色～暗灰 黄色	10YR5/2～ 2.5Y5/2 10YR5/2～ 2.5Y5/2	密（0.5mm以下 の砂粒少し含む）	良	外：口縁部横ナデのち縦ハケメ 肩部ハケメ後ナデ 肩部以下ナデ スス付着 内：口縁部横ナデのち横ハケメ 指頭圧痕 胴部ケズリ
77	8	46	5区 SD01古	V	土師器	甕	ほぼ 完形	12.8	最大径 18.0	15.7	外：灰黄色～黒色 内：灰黄色～黒褐色	2.5Y6/2～ N2/ 2.5Y6/2～ 2.5Y3/1	密（0.5～1mm の砂粒多く含む）	良	外：口縁部横ナデ 肩部縦ハケメのち横ナデ 体部斜めハケメ　指頭圧痕 スス付着　被熱剥離 内：口縁部横ナデ 体部ナデ　ケズリ　指頭圧痕 コゲ付着
77	9	47	5区 SD01古	V	土師器	甕	1/4 以下	(15.2)	-	(6.1)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	密（0.5～1mm の砂粒少し含む）	良	外：口縁部横ナデ 胴部ハケメ スス付着 内：口縁部ハケメのち横ナデ 体部ヘラケズリ
77	10	47	5区 SD01古	V	土師器	甕	口縁部 1/3	(15.2)	-	(5.3)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y6/2 2.5Y6/2	密（0.5～1mm の砂粒少し含む）	良	外：口縁部横ナデ 一部スス付着 肩部ハケメ 内：横ナデ 胴部ナデ　ヘラケズリ
77	11	47	5区 SD01古	V	土師器	甕		-	-	-	外：褐灰色～黒色 内：褐灰色	10YR5/1～ N2/ 10YR5/1	1mm以下の砂粒 若干含む	良	外：横ナデ　粗いハケメ 内：ケズリ　横ナデ　ハケメ
77	12	47	5区 SD01古	V	土製品	焼成粘土塊		-	-	-	にぶい橙色	7.5YR6/4	3mm以下の砂粒 含む	良	全面破面　被熱
87	1	54	5区 SD02	Ⅵ	縄文 土器	鉢	小片	-	-	-	外：黒褐色 内：にぶい黄橙色	10YR3/2 10YR6/3	3mm以下の砂粒 多く含む	良	外：ナデ 内：ナデ
88	1	55	5区 側溝	Ⅲ	土師器	小型丸底壺		(6.7)	-	(5.7)	外：にぶい褐色 内：にぶい黄橙色	7.5YR5/3 10YR6/3	3mm以下の砂粒 多く含む	良	手づくね成形 外：ナデ 内：ナデ　ケズリ
88	2	55	5区	Ⅲ	土師器	高坏	小片	-	-	-	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	7.5YR7/4 10YR7/3	1mm以下の砂粒 含む	良	接合部：円盤充填（α） 外：ナデ 内：ナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
88	3	55	5区	Ⅲ	土師器	高坏		-	-	-	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	1mm以下の砂粒若干含む	良	接合部円盤充填（β） 外：ハケメ　ナデ　ミガキ 内：横ナデ
88	4	55	5区	Ⅲ	土師器	高坏	口縁部1/4	(17.0)	-	(4.3)	外：にぶい赤褐色～にぶい黄橙色 内：にぶい赤褐色～にぶい黄橙色	2.5YR4/4～10YR7/2 2.5YR4/4～10YR7/2	1mm以下の砂粒多く含む	良	内外面赤彩 外：横ナデ 内：横ナデ
88	5	55	5区側溝	Ⅲ	土師器	高坏	1/4以下	-	(9.2)	(5.9)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	円盤充填接合β 内外面とも磨滅で調整不明 内：脚部ケズリか
88	6	55	5区	Ⅲ	土師器	甕	1/4以下	(15.8)	-	(6.5)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	やや粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	良	外：横ナデ　ハケメ 内：横ナデ　ケズリ
88	7	55	5区	Ⅲ	土師器	甕	口縁部小片	-	-	-	外：褐灰色 内：灰黄褐色	10YR5/1 10YR6/2	1mm以下の砂粒多く含む	良	外：横ナデ 内：横ナデ　ケズリ
88	8	55	5区	Ⅲ	土師器	坏	底部小片	-	(8.2)	(1.2)	外：灰白色～にぶい赤褐色 内：灰白色～にぶい赤褐色	2.5Y8/2～5YR5/4 2.5Y8/2～5YR5/4	1mm以下の砂粒少し含む	良	内外面赤彩 外：回転ナデ 内：回転ナデ　ナデ
88	9	55	5区	Ⅲ	須恵器	坏蓋	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	7.5Y6/1 N6/	密	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
88	10	55	5区	Ⅲ	須恵器	坏蓋		(15.1～17.6)	摘径(5.5)	(2.7)	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	密（1mm以下の砂粒少し含む）	良	外：ナデ　回転ナデ 内：ナデ　回転ナデ 天井部に使用痕
88	11	55	5区	Ⅲ	須恵器	坏蓋	小片	(14.7)	-	(1.6)	外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
88	12	55	5区	Ⅲ	須恵器	坏蓋	1/3以下	(16.0)	摘径2.4	1.5	外：灰色 内：灰色	N7/ N7/	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：ボタン状摘貼付け 回転ナデ 内：回転ナデ
88	13	55	5区	Ⅲ	須恵器	坏蓋	1/2	-	摘径3.3	(2.3)	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	密（0.5mm以下の砂粒微量含む）	良	外：回転ヘラ切のち粗い回転ナデ 板目状圧痕 回転ヘラケズリ　回転ナデ 内：回転ナデ
88	14	55	5区	Ⅲ	須恵器	坏蓋	摘部	-	摘径2.7	(1.7)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	1mm以下の砂粒含む	良	ボタン状摘み 外：回転ナデ 内：回転ナデ
88	15	56	5区	Ⅲ	須恵器	坏	底部	-	(6.4)	(1.8)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/4	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転糸切　回転ナデ 内：回転ナデ
88	16	56	5区側溝	Ⅲ	須恵器	坏		(13.5)	-	(3.8)	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ
88	17	56	5区	Ⅲ	須恵器	坏	底部	-	(6.6)	(1.2)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転糸切　回転ナデ 内：回転ナデ
88	18	56	5区	Ⅲ	土師器	坏		(13.4)	-	(3.9)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/3	1mm以下の砂粒少し含む	良	内面付着物 外：回転ナデ 内：回転ナデ
88	19	56	5区	Ⅲ	土師器	坏		17.0	-	(3.9)	外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR8/2	1mm以下の砂粒若干含む	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
88	20	56	5区	Ⅲ	土師器	坏	底部	-	(6.8)	(2.5)	外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR8/2	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転糸切　回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ
88	21	56	5区	Ⅲ	土師器	坏		-	(6.8)	(3.4)	外：にぶい橙色 内：黒褐色	2.5YR6/4 10YR3/1	2mm以下の砂粒若干含む	良	内面付着物 外：回転糸切　回転ナデ 内：回転ナデ
88	22	56	5区	Ⅲ	須恵器	壺	小片	-	-	-	外：青灰色 内：灰色	5B5/1 N6/	1mm以下の砂粒少量含む	良	外：平行文タタキ 内：ナデ
88	23	56	5区	Ⅲ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒含む	良	外：平行文タタキ 内：青海波当具痕
88	24	56	5区	Ⅲ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	5Y7/1 5Y7/1	1mm以下の砂粒少し含む	生焼け	外：平行文タタキ 内：青海波当具痕
88	25	56	5区	Ⅲ	土製品	土錘	ほぼ完形	長さ6.1	幅3.2	厚み3.2	灰白色	2.5Y7/1	密（1mmの砂粒多く含む）	良	磨滅のため調整不明
90	1	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏	口縁部小片	(9.8)	-	(1.5)	外：灰色 内：灰色	10Y5/1 7.5Y6/1	密	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
90	2	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏	1/3以下	-	-	(3.1)	外：灰色 内：灰色	N5/ N6/	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　貼付け高台 内：回転ナデのち定方向の静止ナデ
90	3	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏蓋	摘部	-	摘径2.7	-	外：灰色 内：灰白色	N6/ N7/	1mm以下の砂粒少し含む	良	ボタン状摘み 外：回転ナデ 内：ナデ
90	4	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏蓋		(14.6)	-	(1.45)	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ　ナデ
90	5	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏	底部	-	(8.4)	(1.0)	外：灰白色 内：灰黄色	N7/ 2.5Y7/2	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ　ナデ
90	6	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏	底部	-	(7.0)	(1.6)	外：灰白色 内：灰白色	5Y7/1 5Y7/1	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ　ナデ
90	7	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏（Ⅲ）	底部	-	(12.6)	(0.9)	外：灰色 内：灰色	N7/ N7/	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ　ナデ 内：回転ナデのちナデ
90	8	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏		(13.4)	-	(3.4)	外：明オリーブ灰色 内：オリーブ灰色	2.5GY7/1 2.5GY6/1	1mm以下の砂粒若干含む	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
90	9	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏		13.4	-	(3.5)	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	2mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ
90	10	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏		-	(8.6)	(3.2)	外：灰色～灰白色 内：灰色	N6/～7.5Y7/1 N6/	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転糸切　回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ　ナデ
90	11	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏	底部	-	-	-	外：明オリーブ灰色 内：明オリーブ灰色	2.5GY7/1 2.5GY7/1	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転糸切　回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ　ナデ
90	12	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏		(13.0)	(8.2)	(3.0)	外：灰白色 内：灰白色	N8/ N8/	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
90	13	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏		-	(7.2)	(1.0)	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒少し含む	良	外：回転糸切　回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ　ナデ
90	14	57	5区	Ⅱ	須恵器	Ⅲ		(13.4)	(11.0)	(2.2)	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	1mm以下の砂粒含む	良	外：回転糸切　回転ナデ　ナデ 底部：外面スノコ状圧痕 内：回転ナデ　ナデ
90	15	57	5区壁溝	Ⅱ	須恵器	Ⅲ		(15.4)	(13.1)	(2.1)	外：灰白色～灰色 内：灰白色	N7/～N6/ N7/	1mm以下の砂粒含む	良	外：回転ナデ　切り離しのちナデ 内：回転ナデ　ナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
90	16	57	5区	Ⅱ	須恵器	坏		(17.2)	-	(5.1)	外：灰色 内：明青灰色	N6/ 5PB7/1	1mm以下の砂粒 若干含む	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
90	17	57	5区	Ⅱ	須恵器	壺	口縁部小片	(10.4)	-	(3.0)	外：灰色 内：灰色	5Y6/1 7.5Y6/1	密	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
90	18	57	5区	Ⅱ	土師器	皿	2/3	(10.0)	4.4	3.8	外：浅黄橙色～浅橙色 内：浅黄橙色～浅橙色	10YR8/3～5YR8/4 10YR8/3～5YR8/4	密（0.5mmの砂粒含む）	良	外：回転糸切　強い回転ナデ 内：回転ナデ
90	19	57	5区	Ⅱ	土師器	皿		(14.0)	(7.8)	(2.1)	外：灰白色～にぶい褐色 内：灰白色～にぶい褐色	2.5Y8/2～7.5YR5/4 2.5Y8/2～7.5YR5/4	1mm以下の砂粒含む	良	内外面赤彩 外：ナデ 内：ナデ
90	20	57	5区	Ⅱ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	密	良	外：波状文２段　沈線２条　ナデ 内：ナデ
90	21	57	5区	Ⅱ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N5/ N5/	3mm以下の砂粒 少し含む	良	外：カキメ　平行文タタキ 内：青海波当具痕
90	22	57	5区	Ⅱ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	10Y5/1 N6/	密	良	外：カキメ　平行文タタキ 内：青海波当具痕
90	23	57	5区	Ⅱ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N5/ N6/	1mm以下の砂粒 少し含む	良	外：カキメ　平行文タタキ 内：青海波当具痕
90	24	57	5区	Ⅱ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰白色	N6/ N8/	密	良	外：平行文タタキ 内：粗い青海波当具痕
90	25	57	5区	Ⅱ	中世須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	7.5Y8/1 7.5Y8/1	密	良	外：格子文タタキ 内：ナデ
90	26	57	5区 壁溝	Ⅱ	中世須恵器	鉢	小片	-	-	-	外：にぶい橙色 内：灰白色	7.5YR7/3 7.5YR8/1	1mm以下の砂粒 含む	良	外：ハケメ 内：ナデ
90	27	57	5区	Ⅱ	瓦質土器	火鉢		(34.4)	-	(11.5)	外：灰色 内：灰白色～黄灰色	N6/ 2.5Y8/2～2.5Y6/1	1mm以下の砂粒 含む	良	外：ナデ 内：ナデ
90	28	57	5区	Ⅱ	瓦質土器	鉢	底部	-	(10.4)	(1.6)	外：灰白色 内：灰色	10Y8/1 N5/	密	良	外：磨滅により詳細不明　ナデか 内：ハケメ　擦り目
90	29	57	5区	Ⅱ	瓦質土器	鉢	底部	-	(8.6)	(1.5)	外：灰白色 内：灰白色	2.5Y7/1 7.5Y7/1	密	不良	外：ナデ 内：ハケメ　ナデ
-	-	56	5区	Ⅱ	白磁	碗	小片	-	-	-	-	-	-	良	福建省系

表16　麓Ⅱ遺跡石器観察表

図	番号	写真	地点	層位	器種	石材	計測値（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
24	7	29	1区 斜面南半	1	剥片	安山岩か	4	4	0.6	13.71	微細な剥離あり　側面２次的な折れ
31	1	31	2区	Ⅲ	スクレイパー	安山岩	8.8	4.05	0.8	28	
31	2	31	2区　側溝	Ⅲ	剥片		6.5	3.3	0.8		
31	3	31	2区　北側	Ⅲ	剥片	安山岩	3.15	2.8	0.6	6	
31	4	31	2区	Ⅲ	剥片	流紋岩？	2.95	4.95	0.9	12	
31	5	31	2区	Ⅲ	叩石		8.7	5.3	4.6	338	敲打痕残る
31	6	31	2区　側溝	Ⅲ	叩石		9.2	6.4	5.6	454	
44	1	39	3区	Ⅳ	磨製石斧		5.1	3.9	3.1	78.48	刃部欠損
44	2	39	3区	Ⅳ	磨製石斧		10.0	6.7	4.2	441.77	刃部欠損
44	3	39	3区	Ⅳ	打製石斧		10.0	10.1	3.2	621.1	磨滅・風化顕著
44	4	39	3区	Ⅳ	石錘	河原石	5.1	4.9	1.4	48.17	打欠
44	5	39	3区	Ⅳ	石錘	河原石	5.6	4.2	1.9	60.48	打欠
44	6	39	3区	Ⅳ	石錘	河原石	7.8	5.3	2.3	78.4	打欠
44	7	39	3区	Ⅳ	石錘	河原石	6.7	4.8	1.9	78.76	打欠
44	8	39	3区	Ⅳ	石錘	河原石	7.2	5.5	1.7	86.33	打欠
45	1	39	3区	Ⅳ	磨石	河原石	7.0	4.8	4.3	198.94	石皿の可能性
45	2	39	3区	Ⅳ	磨石	河原石	9.1	7.9	4.4	438.4	敲石兼用
45	3	39	3区	Ⅳ	敲石	河原石	5.5	4.1	3.0	122.3	敲打痕あり
45	4	39	3区	Ⅳ	敲石	河原石	6.4	5.2	3.7	207.8	
45	5	39	3区	Ⅳ	凹石	河原石	9.5	7.1	4.9	291.66	擦り面あり　磨石兼用
45	6	39	3区	Ⅳ	凹石	河原石	9.0	8.8	5.5	647.65	擦り面あり　磨石兼用
45	7	39	3区	Ⅳ	石皿	河原石	9.8	9.5	4.6	475.52	両面使用
45	8	39	3区	Ⅳ	石皿	河原石	8.9	12.8	4.5	639.97	片面使用　磨面に擦痕
46	1	40	3区	Ⅳ	楔形石器か	黒曜石	2.8	1.2	0.8	2.64	
46	2	40	3区	Ⅳ	石鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.7	0.6	未成品
46	3	40	3区	Ⅳ	剥片		3.4	3.9	0.8	9.61	二次加工？の剥離あり
46	4	40	3区	Ⅳ	剥片	安山岩	5.2	4.1	1.1	26.44	石核残欠の可能性
46	5	40	3区	Ⅳ	剥片	黒曜石	2.2	1.5	0.6	1.38	
46	6	40	3区	Ⅳ	剥片	玉髄	2.5	1.7	0.5	1.27	
46	7	40	3区	Ⅳ	剥片		3.8	4.4	1.3	18.44	
46	8	40	3区	Ⅳ	剥片		3.8	4.2	0.9	12.22	
46	9	40	3区	Ⅳ	剥片		4.1	3.0	1.0	11.71	
46	10	40	3区	Ⅳ	剥片		2.9	1.6	0.4	1.02	
46	11	40	3区	Ⅳ	剥片	安山岩	2.9	2.3	0.6	3.30	
46	12	40	3区	Ⅳ	剥片		2.6	1.7	0.4	1.34	
46	13	40	3区	Ⅳ	剥片		3.3	1.7	0.9	4.24	
46	14	40	3区	Ⅳ	剥片		4.3	2.4	0.9	6.65	
47	1	40	3区	Ⅳ	石核		13.3	9.2	4.4	660.55	
47	2	40	3区	Ⅳ	板状素材か		8.8	5.8	1.1	50.17	
47	3	40	3区	Ⅳ	石核か		7.5	6.1	2.8	78.38	

図	番号	写真	地点	層位	器種	石材	計測値（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
59	1	42	4区	Ⅲ	石皿		(15.9)	(5.1)	4.2	475	
59	2	42	4区	Ⅲ	磨石		9.8	4.6	4.3	293	
59	3	42	4区	Ⅲ	剥片	安山岩	2.7	1.4	0.5	1.69	石鏃未成品の可能性
59	4	42	4区	Ⅲ	剥片	安山岩	3.6	5.1	0.9	16.12	
59	5	42	4区	Ⅲ	石核	流紋岩？	9.6	8.9	3.3	323	
59	6	42	4区	Ⅲ	原石	軽石	(7.0)	(7.3)	2.2	16.60	風化により出来た小さなくぼみが多数有り
78	1	47	5区 SD01古	Ⅴ	磨製石斧		(6.8)	(5.85)	(4.5)	226.14	太形蛤刃石斧
78	2	47	5区 SD01古	Ⅴ	剥片	黒曜石	3.35	2.35	1.15	8.01	石鏃未成品か
78	3	47	5区 SD01古	Ⅴ	剥片	黒曜石	2.0	1.95	0.5	3.29	石鏃未成品か
78	4	47	5区 SD01古	Ⅴ	剥片	黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.46	石鏃未成品か
78	5	47	5区 SD01古	Ⅴ	剥片	黒曜石	2.05	3.4	1.0	5.82	
78	6	47	5区 SD01古	Ⅴ	楔形石器か	黒曜石	1.15	2.25	1.0	3.74	
87	2	54	5区 SD02	Ⅵ	磨製石斧	塩基性片岩	(15.0)	4.5	3.2	366.98	両刃
88	26	56	5区	Ⅲ	剥片	玉髄	2.85	2.0	1.9	8.59	
90	30	57	5区	Ⅱ	打製石斧		10.6	7.8	2.5	216.44	

表17　麓Ⅱ遺跡金属器観察表

図	番号	写真	地点	層位	器種	計測値（cm・g）				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
24	5	29	1区 平坦部	8	和鉄釘	7.4	0.6	0.5	9.78	

表18　麓Ⅱ遺跡銭貨計測表

図	番号	写真	地点	層位	名称	初鋳年	計測値（mm・g）					備考
							銭径(A)/銭径(B)	内径(C)/内径(D)	孔径	銭厚	量目	
24	6	29	1区	8	元祐通寶	1086	24.05/24.40	19.49/19.01	6.7～6.80	1.47	2.76	
55	1	40	3区	Ⅰ	元祐通寶	1086	24.47/24.15	20.17/20.14	6.9～7.11	1.37	3.27	

表19　麓Ⅱ遺跡木製品観察表

図	番号	写真	地点	層位	品目	計測値（cm）（）内残部				木取り	樹種	備考
						長さ	幅	厚さ	その他の寸法			
79	1	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 堰材（杭）	(37.9)	4.2	4.0		芯持		先端を斜めに切って尖らせている
79	2	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 堰材（杭）	(53.9)	6.9	5.7		芯持		先端を削って尖らせている
79	3	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（杭）	(41.6)	9.5	5.0		分割		先端を削って尖らせている
79	4	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（杭）	(44.3)	6.7	5.8		分割		先端を削って尖らせている
79	5	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（杭）	50.0)	5.3	3．4		分割		先端を削って尖らせている
79	6	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（杭）	(40.7)	7.8	6.8		分割		先端を削って尖らせている
79	7	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（矢板）	(46.4)	15.0	3.8		板目		先端を削って尖らせている　木取りのままのカーブが残る
79	8	48	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（矢板）	(49.4)	16.4	3.5		板目		先端を削って尖らせている　板目材のカーブそのまま残る
79	9	49	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（矢板）	(48.0)	7.8	2.8		板目		先端を削って尖らせている
79	10	49	5区 SD01	Ⅴ	施設材 護岸材（矢板）	(50.2)	8.8	3.9		板目		先端を削って尖らせている
80	1	49	5区 SD01	Ⅴ	農耕 土木具 鍬（曲柄鍬身-平鍬）	(31.3)	18.9	1.3		柾目	コナラ属アカガシ亜属	表面に加工痕あり 2とセットか

図	番号	写真	地点	層位	品目	計測値（cm） () 内残部				木取り	樹種	備考
						長さ	幅	厚さ	その他の寸法			
80	2	49	5区 SD01	V	農耕土具 曲柄鍬柄 (反柄)	(43.7)	3.6 ～ 5.2	2.3 ～ 3.0		芯去	スダジイ	表面は平滑に仕上げられる　鍬台の装着面に溝が施される
80	3	49	5区 SD01	V	容器 槽 (剳物)	(86.7)	(21.8)	7.2		横木	スギ	
80	4	49	5区 SD01	V	容器 その他 不明	口径： (15.0 × 12.3)	器高： 3.4			横木	スギ	
81	1	51	5区 SD01	V	建築部材 垂木	199.3	5.0	2.5		分割材		段あり　表面を整えた加工痕あり
81	2	49	5区 SD01	V	建築部材 垂木	105.2	3.9	2.1		柾目		
81	3	50	5区 SD01	V	建築部材 桁	80.6	12.9	5.0		柾目		柱を受ける枘孔 1　垂木を接合する貫通孔 2　本来の半分 (半間分) が残存か
81	4	50	5区 SD01	V	建築部材 柱 (竪穴建物・その他)	24.6	18.3	8.9		芯持		水平構造材の受部 (輪ナギ込)　受部は角材の受けにしてはつくりがあまいので掘立ではなく竪穴もしくは施設の柱のようなものか
82	1	50	5区 SD01	V	建築部材 壁	(99.2)	18.9	3.2		板目		長辺端部に丸み　短辺小口も雑で二次的に短くされた可能性　孔はｵﾘｼﾞﾅﾙかどうか不明　広い範囲が炭化している
82	2	50	5区 SD01	V	建築部材 壁	(96)	(18.5)	(3)		追柾目		短辺両端部に丸み　表面に加工痕あり　一部炭化する
82	3	50	5区 SD01	V	建築部材 床	123.2	20.8	4.5		追柾目		先端の貫通孔は固定用のくさびが入る　一部変色が認められる
82	4	50	5区 SD01	V	建築部材 水平構造材 (床か)	(115)	13.5	5		板目		両端部欠損
83	1	50	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段有り)	(32.1)	(6.9)	2.0		柾目		方形の孔あり　孔周辺が窪んでおり他の材と組まれた痕跡か　表裏で表面の仕上げの精度が異なる
83	2	51	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (段有り)	(9.0)	4.7	1.0		柾目	スギ	加工痕あり
83	3	51	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (段有り)	(30.4)	12.7	2.7		板目		
83	4	51	5区 SD01	V	施設材・器具材 棒 (段有り)	(93.4)	7.9	3.4		分割		両端部に加工が施されている
83	5	51	5区 SD01	V	施設材・器具材 棒 (段有り)	(33.3)	3.7	3.8		芯去		
83	6	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段なし)	(75.8)	13.9	3.7		板目		一部黒褐色に変色し反る
83	7	51	5区 SD01	V	施設材 板 (孔段なし)	(268.8)	20.3	4.8		板目		一部炭化
83	8	51	5区 SD01	V	施設材 板 (孔段なし)	173.2	10.0	1.8		板目		斜行する傷が一部に認められる
84	1	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段なし)	(116.1)	(11.2)	2.0		板目		
84	2	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段なし)	(52.3)	7.7	1.6		板目		
84	3	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段なし)	(46.3)	4.6	1.5		板目		
84	4	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段なし)	53.3	6.7	0.8		追柾目		
84	5	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段なし)	37.2	11.0	2.5		追柾目		
84	6	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板 (孔段なし)	(28.4)	(5.1)	1.2		追柾目		

図	番号	写真	地点	層位	品目	計測値（cm） () 内残部				木取り	樹種	備考
						長さ	幅	厚さ	その他の寸法			
84	7	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	25.7	9.9	2.6		追柾目		先端を削って尖らせている
84	8	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	(15.9)	(7.9)	1.3		追柾目		片面炭化
84	9	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	(10.1)	3.5	1.0		分割		加工痕あり
84	10	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	(37.3)	4.8	0.9		柾目		緻密な年輪の材使用
84	11	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	44.7	8.5	1.5		柾目		
84	12	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	(61.3)	5.5	1.3		柾目		径5㎜程の小孔の痕跡あり
84	13	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	(33.0)	(5.8)	1.5		柾目		
84	14	52	5区 SD01	V	施設材・器具材 板(孔段なし)	34.6	(4.6)	1.5		柾目		
84	15	53	5区 SD01	V	施設材・器具材 その他・不明	(49.8)	(29.1)	1.8 ～ 2.6		芯持		人為的に変形されている
85	1	53	5区 SD01	V	土木材 杭	88.9	5.3	3.3		芯去材		変形は土圧など二次的な要因
85	2	53	5区 SD01	V	土木材 杭	(65.7)	4.3	3.6		芯持		先端を斜めに切って尖らせている
85	3	53	5区 SD01	V	用途不明品 その他不明	(74.7)	(32.2)	4.2		芯持		先端がJ字状に曲がる
85	4	53	5区 SD01	V	用途不明品 その他不明	36.4	15.5	0.8		柾目	コナラ属アカガシ亜属	補修孔2孔あり　先端なし　カサがはっきりしない　曲柄Dを二次加工し別の用途に転用したものとみられる
85	5	53	5区 SD01	V	その他加工材	(18.6)	10.9	10.6		芯持		端部を削って尖らせている　一部に小さな傷多数
85	6	53	5区 SD01	V	その他加工材	(30.5)	3.5	2.7		芯持		一部に加工痕あり
87	3	54	5区 SD02	Ⅵ	施設・器具材 板(孔有り)	9.8	5.6	1.6		柾目	コナラ属アカガシ亜属	表面は丁寧に加工され平滑に整えられている　径3.5cm程の孔あり
87	4	54	5区 SD02	Ⅵ	施設材・器具材 板(孔段なし)	54.6	9.8	2.5		追柾目		表面に加工痕あり　片面に小さな傷多数　両端とも切断された痕跡あり
87	5	54	5区 SD02	Ⅵ	農耕土木具 鍬(直柄鍬身-平鍬)	(24.6)	20.4	1.0		柾目	コナラ属アカガシ亜属	柄孔の他端部に2カ所径2㎜程の小孔あり
89	1	56	5区	Ⅲ	容器 底板・蓋板(曲物)	直径：14.0		0.6		柾目	ヒノキ科	
89	2	56	5区	Ⅲ	容器 底板(曲物)	(8.6)	(2.9)	0.7		柾目		木釘あり
-	1	-	5区 SD01	V	土木材 杭	(23.6)	4.6	4.5		芯持材		
-	2	-	5区 SD01	V	土木材 杭	17.5	6.9	4.6		放射状		
-	3	-	5区 SD01	V	板状燃えさし	18.9	1.6	0.9		板目		板材
-	4	-	5区 SD01	V	棒状燃えさし	13.5	1.0	0.8		芯去材		角材
-	5	-	5区 SD01	V	棒状燃えさし	21.6	0.9	1.1		芯なし		
-	6	-	5区 SD01	V	棒状燃えさし	32.0	2.4	1.4		芯なし		角材
-	7	-	5区 SD01	V	棒状角柱不明 木製品燃えさし	34.0	2.2	1.5		芯去材		
-	8	-	5区 SD01	V	棒状角柱不明 木製品燃えさし	24.3	2.0	2.4		芯去材		

図	番号	写真	地点	層位	品目	計測値（cm）（）内残部				木取り	樹種	備考
						長さ	幅	厚さ	その他の寸法			
-	9	-	5区 SD01	V	棒状丸太 燃えさし	(19.8)	3.3	1.8		芯去材		4分割
-	10	-	5区 SD01	V	自然木 根株 伐採痕 あり	(86.0)	22.0	12.0				5分割
-	11	-	5区 SD01	V	板状不明 木製品	(32.1)	8.5	1.3		板目		
-	12	-	5区 SD01	V	板状不明 木製品	(18.7)	5.5	1.8		板目		
-	13	-	5区 SD01	V	板状不明 木製品	(32.9)	7.5	1.9		板目		84-1と同一個体の可能性あり
-	14	-	5区 SD01	V	板状不明 木製品	(17.3)	5.5	1.2		板目		84-1と同一個体の可能性あり
-	15	-	5区	Ⅲ	棒状角柱 不明 木製品 燃えさし	25.7	2.0	1.3		芯去材		

表20　坂本谷遺跡土器観察表

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
99	1	69	P123		土師器	甕	口縁～肩部小片	(19.6)	-	(5.3)	外：灰黄褐色 内：橙色～灰黄褐色	10YR4/2 5YR6/6～10YR4/2	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	外反口縁・古墳後期～ 外：横ナデ 体部は剝離により調整不明 内：横ナデ　ナデ
102	1	69	P426		土師器	皿	口縁部小片	(14.2)	-	(2.1)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/4 10YR8/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
102	2	69	P263		土師器	坏	小片	-	(6.0)	(2.1)	外：灰黄褐色 内：橙色	10YR5/2 7.5YR7/6	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
102	3	69	P287		土師器	皿	小片	(8.4)	(5.9)	1.6	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	密（2mm以下の白色、赤色砂粒含む）	良	外：底部：回転糸切か 内：磨滅のため調整不明
102	4	69	P287		土師器	柱状高台皿	1/3	-	7.2	(6.2)	外：橙色 内：橙色	5YR7/6 5YR7/6	密（1mm以下の石英、白色砂粒含む）	良	外：胴部：ヘラ描きか 底部：回転糸切か 内：磨滅のため調整不明
103	1	69	SD04		土師器	皿	1/2以下	-	(4.2)	(1.3)	外：淡橙色～浅黄橙色 内：淡橙色～浅黄橙色	5YR8/4～10YR8/3 5YR8/4～10YR8/3	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
104	1	69	P361		土師器	皿	底部	-	3.7	(0.9)	外：橙色 内：にぶい橙色	5YR7/6 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
106	1	69	P144		土師器	坏	小片	-	(5.8)	(2.2)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
106	2	69	P136		土師器	皿	4/5	8.0	3.7	(1.7)	外：橙色 内：橙色	5YR6/6 5YR6/6	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切か 内：回転ナデ
106	3	69	P140		土師器	皿	1/3以下	(7.2)	(4.8)	1.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
106	4	69	P143		土師器	皿	1/3	(6.7)	3.9	(1.8)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（1mm以下の砂粒多く含む）	良	外：底部回転糸切 内：磨滅のため調整不明
106	5	69	P147		土師器	坏	1/6以下	-	(4.4)	(2.2)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
106	6	69	P147		土師器	坏	1/2	-	5.4	(2.5)	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	10YR6/1 10YR6/3	やや粗（0.5～1mmの砂粒多く含む）	不良	外：回転ナデ 底部：回転糸切か 内：回転ナデ
106	7	69	P138		土師器	皿	底部	-	(4.1)	(1.0)	外：橙色 内：橙色	5YR6/6 5YR6/6	密（0.5mmの砂粒微量含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
106	8	69	P134・138		土師器	皿	1/2以下	(9.0)	5.4	1.6	外：明黄褐色～黄灰色 内：明黄褐色～黄灰色	10YR7/6～2.5Y4/1 10YR7/6～2.5Y4/1	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
106	9	69	P132		土師器	柱状高台皿	4/5	(7.1)	4.7	(3.9)	外：橙色 内：褐灰色	5YR7/6 10YR4/1	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
106	10	69	P133		土師器	柱状高台	1/2	-	5.8	(3.3)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/4 10YR8/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	磨滅のため調整不明
106	11	69	P141		土師器	坏	1/5以下	(15.6)	-	(4.6)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
106	12	69	P136 P141 SX02		褐釉陶器	四耳壺	小片	-	-	-	外：黄褐色 内：黄褐色	2.5Y5/3 2.5Y5/3	密（混入物は認められない）	良	外：回転ナデ　耳部貼付け　施釉 内：回転ナデ　施釉
108	1	70	P332		土師器	皿	2/3	(8.4)	3.8	(1.5)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂粒微量含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
108	2	70	P332		土師器	皿	3/4	(8.6)	(4.0)	(1.7)	外：橙色 内：橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
108	3	70	P332		土師器	皿	口縁部小片	(8.2)	-	(1.1)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mm以下の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
108	4	70	P481		土師器	皿	2/3	(9.5)	4.3	(2.5)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
108	5	70	P251		土師器	皿	4/5	8.3	5.8	3.4～3.6	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（1mm以下の石英、白色砂粒含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
108	6	70	P251		土師器	坏・皿	底部	-	(4.3)	(1.3)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	密（0.5mmの砂粒多く含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
108	7	70	P148		土師器	皿	小片	(15.2)	(7.0)	3.5	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
108	8	70	P382		土師器	皿	1/6	-	(4.6)	(1.1)	外：橙色～浅黄橙色 内：にぶい橙色	2.5YR6/6～7.5YR8/4 5YR7/3	密（2mm以下の砂粒含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
108	9	70	P382		土師器	皿	口縁部小片	(11.7)	-	(2.3)	外：褐灰色～浅黄橙色 内：褐灰色～浅黄橙色	10YR4/1～7.5YR8/4 10YR4/1～7.5YR8/4	密（0.5mm 以下の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
108	10	70	P382		土師器	坏	1/2以下	-	5.3	(3.2)	外：灰白色～赤橙色～灰黄褐色 内：橙色～灰黄褐色	10YR8/2～10R6/8～10YR4/2 5YR7/6～10YR4/2	密（2mm 以下の石英、白色砂粒含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデ
108	11	70	P382		土師器	皿	1/3以下	-	(7.0)	(2.5)	外：橙色 内：橙色	5YR7/6 5YR7/6	密（2mm 以下の砂粒含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデ
108	12	70	P148		土師器	皿	5/6	(7.8)	(4.8)	(1.4)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5～1mm の砂粒多く含む）	良	磨滅のため調整不明
108	13	70	P149		土師器	坏・皿	底部	-	(5.8)	(1.3)	外：浅黄色 内：浅黄橙色	2.5Y7/3 10YR8/3	密（0.5mm の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
108	14	70	P452		土師器	皿	3/5	(7.9)	4.6	1.6	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色～橙色	7.5YR7/3 7.5YR7/3～2.5YR7/8	密（0.5mm 以下の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデ
108	15	70	P452		土師器	皿	1/2以下	-	4.1～4.5	(0.9)	外：黒褐色～明褐灰色 内：黒褐色～明褐灰色	7.5YR4/1～7.5YR7/2 7.5YR4/1～7.5YR7/2	密（0.5mm 以下の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデか
108	16	70	P455		土師器	皿	1/3	(8.6)	(4.9)	(1.5)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
108	17	70	P474		土師器	皿	1/5以下	(13.2)	-	(2.7)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	密（0.5mm の砂粒微量含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
108	18	70	P331		土師器	坏	1/2	-	8.1	(2.7)	外：橙色 内：橙色	2.5YR7/8 2.5YR7/8	密（2mm 以下の砂粒含む）	やや不良	有高台 磨滅のため調整不明 外：高台部：横ナデ 内：高台部：横ナデ
108	19	70	P383		土師器	皿	1/2	-	6.4	(1.3)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	1	71	SX02		土師器	坏	1/3以下	(12.0)	(6.4)	(4.3)	外：にぶい橙色～褐灰色 内：にぶい橙色～褐灰色	10YR7/2～10YR5/1 10YR7/2～10YR5/1	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	2	71	SX02		土師器	坏	1/2	-	4.8～5.3	(3.5)	外：灰白色～灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	10YR8/2～10YR5/2 10YR7/2	密（0.5mm 以下の砂粒少し含む）	良	外：ナデ　底部：静止糸切のちナデか 内：ナデ　底部：ナデのちカキメ
109	3	71	SX02		土師器	坏？	口縁部小片	(14.2)	-	(3.0)	外：橙色 内：橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	密（0.5mm の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
109	4	71	SX02		土師器	坏	1/6以下	-	(6.2)	(2.9)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	5YR7/4 5YR7/4	密（0.5mm の砂粒多く含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	5	71	SX02		土師器	皿	1/2	-	5.0	(1.5)	外：にぶい黄橙色 内：浅黄色	10YR7/4 2.5Y7/3	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：磨滅のため調整不明 底部：回転糸切 内：工具によるナデ
109	6	71	SX02		土師器	柱状高台	1/2	-	5.3	(2.8)	外：淡橙色 内：淡橙色	5YR8/4 5YR8/4	密（0.5mm 以下の砂粒、2mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデか　回転糸切 高台部に沈線 内：回転ナデか
109	7	71	SX02		土師器	皿	4/5	7.7	3.7	1.6	外：灰白色～褐灰色 内：灰白色～褐灰色～淡橙色	10YR8/1～7.5YR4/1 10YR8/1～7.5YR4/1～5YR8/3	密（1mm 以下の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：磨滅のため調整不明
109	8	71	SX02		土師器	皿	1/4以下	(8.8)	(5.6)	(1.7)	外：橙色 内：にぶい橙色	5YR7/6 7.5YR7/4	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	9	71	SX02		土師器	皿	2/3	7.0	4.0～4.3	1.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	密（2mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	10	71	SX02		土師器	皿	小片	(6.8)	(4.7)	(1.5)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/3 7.5YR7/3	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	11	71	SX02		土師器	皿	1/2以下	(8.4)	(4.8)	(2.0)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	12	71	SX02		土師器	皿	3/5	7.9	3.1	1.7	外：淡橙色～橙色 内：淡橙色	5YR8/3～2.5YR7/6 5YR8/4	密（1mm の砂粒2,3 ケ含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	13	71	SX02		土師器	皿	小片	(6.7)	(2.4)	(1.3)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/6 7.5YR8/6	密（0.5mm の砂粒少し含む）	不良	磨滅のため調整不明
109	14	71	SX02		土師器	皿	ほぼ完形	7.6～7.8	5.0	1.4～2.0	外：橙色 内：橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	密（1mm 以下の白色砂粒多く含む）	良	外：磨滅のため調整不明 底部：回転ナデ 内：磨滅のため調整不明
109	15	71	SX02		土師器	皿	5/6	7.2～8.0	4.0～4.4	1.7～1.85	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	密（2mm の砂粒少し含む）	良	外：磨滅のため調整不明 底部：回転ナデ 内：磨滅のため調整不明
109	16	71	SX02		土師器	皿	1/2以下	(7.9)	(4.0)	1.6	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR8/6 7.5YR8/6	密（0.5mm の砂粒少し含む）	不良	磨滅のため調整不明
109	17	71	SX02		土師器	皿	小片	(8.3)	(5.0)	(1.5)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR6/4 7.5YR6/4	密（0.5mm の砂粒微量含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	18	71	SX02		瓦質土器	鍋	口縁部小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	7.5YR8/1 10YR8/1	密（混入物は認められない）	良	外：口縁部：横ナデ 体部：ナデ 内：横ナデ
109	20	71	SX02		土師器	甕	口縁部小片	(24.2)	-	(4.5)	外：黒褐色 内：橙色～黒褐色	10YR3/2 5YR7/6～10YR3/2	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外反口縁・古墳後期～ 外：横ナデ　ケズリ 内：横ナデ 一部スス付着
109	21	71	SX03		土師器	皿	小片	(5.8)	(3.5)	(1.0)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mm の砂粒含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
109	22	71	SX03		土師器	皿	1/4以下	-	(4.4)	(0.7)	外：橙色 内：橙色	5YR7/6 5YR7/6	密（0.5mm の砂粒多く含む）	良	外：磨滅のため調整不明 底部：回転糸切 内：磨滅のため調整不明
109	23	71	SX03		土師器	皿	1/4以下	-	4.4	(0.6)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（1mm 以下の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：ナデ　回転ナデ
109	24	71	SX03		土師器	皿	1/2以下	-	3.8	(1.5)	外：浅黄色 内：灰白色	7.5YR8/4 10YR8/2	密（2mm 以下の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：ナデ　回転ナデ
109	25	71	SX03		土師器	坏	口縁部小片	(13.4)	-	(3.7)	外：橙色 内：橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	密（1mm の白色砂粒少し含む）	良	外：磨滅のため調整不明 内：回転ナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(㎝)	底径(㎝)	器高(㎝)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
109	26	71	SX03		瓦質土器	鉢	口縁部小片	(25.6)	-	(5.5)	外：灰白色 内：灰白色	2.5Y8/1 2.5Y8/1	密（2mmの砂粒1ケ含む）	良	外：回転ナデ　ナデ 内：カキメ
112	1	71	P527		土師器	皿	1/2以下	-	3.9	(1.2)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	2	71	P388		土師器	坏	1/2以下	-	6.1～6.4	(2.2)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	密（2mm以下の砂粒多く、7mmの石粒1ケ含む）	良	外：回転ナデ 底部：回転糸切のち数条の同一方向への凹線 内：ナデか
112	3	71	P417		土師器	皿	ほぼ完形	8.5	3.6	1.9	外：灰黄褐色～黄灰色 内：灰黄褐色～黄灰色	10YR6/2～2.5Y4/1 10YR6/2～2.5Y4/1	密（0.5mmの砂粒微量含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	4	71	P417		土師器	皿	1/2以下	-	(5.0)	(1.5)	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	10YR6/2 10YR7/3	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	5	71	P539		土師器	皿	4/5	6.9	4.5	1.2～1.5	外：橙色 内：橙色	5YR7/6 5YR7/6	密（1mm以下の砂粒含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	6	71	P539		土師器	皿	1/5以下	-	(6.2)	(1.5)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（1mm以下の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	7	71	P539		土師器	皿	1/6	(14.6)	-	(2.8)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（1mm未満の砂粒微量含む）	良	磨滅のため調整不明 外：回転ナデか 内：回転ナデか
112	8	71	P385		土師器	坏	1/6以下	(10.0)	(5.6)	(3.4)	外：灰黄色 内：灰黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/2	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
112	9	71	P348		土師器	坏	完形	12.2	6.0	3.9	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mm以下の砂粒少し、金雲母少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	10	71	P421		土師器	皿	1/3以下	(6.8)	(4.8)	1.8	外：淡橙色 内：淡橙色	5YR8/4 5YR8/4	密（1mm以下の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：ナデ 底部：指頭圧痕
112	11	71	P440		土師器	皿	1/2以下	(7.4)	(4.2)	1.6	外：浅黄橙色 内：褐灰色～灰白色	7.5YR8/4 7.5YR6/1～7.5YR8/2	密（1mm以下の砂粒含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	12	71	P375		土師器	皿	3/4	(8.5)	3.8	1.9	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
112	13	71	P420		土師器	坏・皿	1/3以下	-	(5.6)	(1.3)	外：浅黄橙色 内：灰黄褐色	10YR8/4 10YR6/2	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 底部：工具による切り離し 内：回転ナデ
114	1	72	B2	Ⅲ	土師器	甕	1/3以下	(22.4)	-	(12.7)	外：黒褐色 内：橙色～黒褐色	10YR3/1 7.5YR7/6～10YR3/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	口縁外反・古墳後期～ 外：横ナデ　ナデか 内：横ナデ　ケズリ
114	2	72	B2	Ⅲ	土師器	甕	口縁部小片	(20.4)	-	(5.8)	外：にぶい黄橙～褐灰色 内：にぶい黄橙～褐灰色	10YR7/4～10YR5/1 10YR7/4～10YR5/1	粗（1～2mmの砂粒多く含む）	良	口縁外反 外：横ナデ　ハケメ 内：横ナデ　ケズリ　ハケメ
114	3	72	B1	Ⅲ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	5Y6/1 5Y7/1	密（1mmの砂粒微量含む）	良	外：ハケメのち平行タタキ 内：青海波当具痕
114	4	72	A1	Ⅲ	土師器	坏	底部	-	(6.8)	(1.5)	外：橙色 内：浅黄橙色	2.5YR7/6 10YR8/3	密（0.5mmの砂粒微量含む）	不良	外：糸切　回転ナデ　高台貼付け 内：磨滅　回転ナデ
114	5	72	B2	Ⅲ	土師器	坏	高台部小片	-	(8.2)	(2.8)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	不良	有高台 外：回転ナデ　回転糸切　高台貼付け 内：回転ナデ
114	6	72	C2	Ⅲ	土師器	坏	口縁部小片	(10.6)	-	(2.9)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	密（0.5mm以下の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	7	72	B1	Ⅲ	土師器	坏	口縁部小片	(9.2)	-	(3.0)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（1mmの砂粒微量含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	8	72	C2	Ⅲ	土師器	坏	口縁部小片	(13.6)	-	(3.3)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/4 10YR8/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	9	72	B1	Ⅲ	土師器	坏	口縁部小片	(13.6)	-	(3.2)	外：にぶい黄橙色 内：黄灰色	10YR7/2 2.5Y5/1	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	10	72	B3	Ⅲ	土師器	坏	1/6以下	(10.6)	-	(3.3)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5mm以下の砂粒微量含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	11	72	C1	Ⅲ	土師器	坏	1/2	-	5.0	(2.7)	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	10YR7/3 10YR8/3	やや粗（1mmの砂粒多く含む）	不良	磨滅のため調整不明
114	12	72	C2	Ⅲ	土師器	坏	1/2	-	(4.8)	(2.2)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
114	13	72	C2	Ⅲ	土師器	坏	1/5以下	-	(5.8)	(3.4)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/4 10YR8/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	14	72	C2	Ⅲ	土師器	坏	1/2	-	(6.4)	(2.2)	外：にぶい黄橙色 内：黄灰色	10YR7/2 2.5Y6/1	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
114	15	72	C2	Ⅲ	土師器	坏	1/6	(13.9)	(7.8)	(3.9)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	16	72	B1	Ⅲ	土師器	坏	1/2以下	-	(6.0)	(3.3)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	密（0.5～1mmの砂粒少し含む）	不良	外：糸切　回転ナデ 内：回転ナデ
114	17	72	C1	Ⅲ	土師器	坏	1/5以下	-	(9.8)	(2.9)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	5YR6/4 5YR6/4	密（0.5mmの砂粒少し含む）	不良	磨滅のため調整不明
114	18	72	B2	Ⅲ	土師器	皿	3/4	9.2	4.2	2.4	外：灰白色 内：灰白色	10YR8/2 10YR8/2	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：糸切り　回転ナデ 内：回転ナデ
114	19	72	B1	Ⅲ	土師器	皿	1/2	(8.6)	4.2	2.1	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	10YR7/3 2.5Y8/2	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：糸切　回転ナデ 内：回転ナデ
114	20	72	B2	Ⅲ	土師器	皿	2/3	(8.0)	3.6	2.1	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5mmの砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	21	72	B1	Ⅲ	土師器	皿	1/2	(6.6)	4.8	2.0	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5～1mmの砂粒多く含む）	やや不良	外：糸切　回転ナデ 内：回転ナデ
114	22	72	B1	Ⅲ	土師器	皿	1/3	(7.6)	(4.1)	1.8	外：にぶい橙色 内：灰黄褐色	7.5YR6/4 10YR5/2	密（0.5mmの砂粒少し含む）	良	外：糸切　回転ナデ 内：回転ナデ
114	23	72	B1	Ⅲ	土師器	皿	1/3	(8.2)	(4.5)	1.7	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	10YR7/2 10YR6/2	密（0.5mmの砂粒多く含む）	不良	磨滅のため調整不明
114	24	72	B4	Ⅲ	土師器	高台皿	高台部	-	(6.8)	(2.4)	外：浅黄橙色 内：橙色	7.5YR8/6 7.5YR7/6	密（0.5mmの砂粒少し含む）	やや不良	外：回転ナデ　高台貼付け 内：磨滅のため調整不明
114	25	73	B2	Ⅲ	土師器	高台皿・坏	1/2以下	-	-	(3.7)	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	密（0.5mmの砂粒微量含む）	不良	磨滅のため詳細不明 外：回転ナデ 内：回転ナデ

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
114	26	73	C3	Ⅲ	土師器	高台皿	3/4	(8.6)	5.3	4.0	外：灰黄褐色～灰白色 内：灰黄褐色～灰白色	10YR5/2～2.5Y8/2 10YR5/2～2.5Y8/2	密（0.5mm 以下の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	27	73	B1	Ⅲ	土師器	柱状高台皿	高台部	-	4.5	(2.8)	外：浅黄橙色	10YR8/3	密（0.5mm の砂粒多く含む）	良	磨滅のため調整不明
114	28	73	C3	Ⅲ	土師器	柱状高台皿	高台部	-	(6.2)	(3.0)	外：橙色 内：橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	密（0.5mm の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
114	29	73	C1	Ⅲ	土師器	柱状高台皿	高台部	-	6.1	(3.5)	外：にぶい橙色	7.5YR7/4	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：ナデか　回転糸切
114	30	73	C3	Ⅲ	土師器	柱状高台皿	高台部	-	4.4	(2.3)	外：灰黄褐色	10YR6/2	密（0.5～1mm の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切
114	31	73	B3	Ⅲ	龍泉窯系青磁	碗	1/5	-	(4.9)	(2.4)	外：明オリーブ灰色～にぶい橙色 内：明オリーブ灰色	5GY7/1～5YR7/4 5GY7/1	密（0.5mm の砂粒微量含む）	良	外：施釉 内：施釉
114	32	73	A1	Ⅲ	白磁	碗	口縁部小片	-	-	-	外：浅黄色 内：浅黄色	5Y7/3 5Y7/3	緻密	良	貫乳 外：施釉 内：施釉
114	33	73	B1	Ⅲ	瓦質土器	鉢	口縁部小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	5Y6/1 5Y6/1	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：ナデ　ミガキか 内：工具による調整
114	34	73	C2	Ⅲ	瓦質土器	鉢	胴部小片	-	-	-	外：灰色～黒色 内：灰色～黒色	N6/～7.5Y2/1 N6/～7.5Y2/1	密（0.5mm の砂粒微量含む）	良	外：ナデ 内：工具による調整
114	35	73	B1	Ⅲ	常滑焼？	甕	肩部小片	-	-	-	外：灰オリーブ色 内：にぶい褐色	5Y5/3 7.5YR5/2	密（1mm の砂粒多く含む）	良	外：ナデ　施釉 内：ナデ
114	36	73	B2	Ⅲ	備前焼	甕	口縁部小片	-	-	-	外：にぶい赤褐色 内：にぶい赤褐色	5YR5/4 5YR5/4	密（1～2mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	37	73	C2	Ⅲ	備前焼	擂鉢	底部小片	-	-	(3.0)	外：橙色 内：橙色	2.5YR6/6 2.5YR6/6	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ　擂目
114	38	73	C3	Ⅲ	備前焼	壺	底部小片	-	(8.2)	(4.0)	外：褐色 内：灰黄色	7.5YR4/3 2.5Y6/2	密（1mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデのち工具による調整
114	39	73	C2	Ⅲ	在地系陶器	鉢	口縁部小片	-	-	-	外：橙色 内：橙色	7.5YR6/6 7.5YR6/6	密（0.5mm の砂粒微量含む）	不良	玉縁口縁 外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	40	73	C1	Ⅲ	在地系陶器	鉢	口縁部小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mm の砂粒微量含む）	良	玉縁口縁 外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	41	73	B1	Ⅲ	在地系陶器	鉢	口縁部小片	-	-	-	外：淡黄色 内：淡黄色	2.5Y8/2 2.5Y8/2	密（0.5mm 以下の砂粒微量含む）	良	玉縁口縁 外：回転ナデ 内：回転ナデ
114	42	73	C1	Ⅲ	土師器	坏（皿？）	小片	(14.8)	(7.8)	(3.1)	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/4	密（0.5～1mm の砂粒多く含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
116	1	74		Ⅱ	土師器	坏	小片	(11.3)	-	(4.0)	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR6/3 10YR6/3	密（0.5mm の砂粒多く含む）	不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
116	2	74	C5	Ⅱ	土師器	坏	1/4以下	-	(5.1)	(2.4)	外：橙色 内：橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	密（0.5mm の砂粒微量、金雲母少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
116	3	74	C3	Ⅱ	土師器	皿	ほぼ完形	6.8	5.2	1.3	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
116	4	74	B4	Ⅱ	土師器	柱状高台皿	小片	-	-	(2.2)	外：橙色 内：橙色	5YR7/6 5YR7/6	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
116	5	74	B3	Ⅰ・Ⅱ	土師器	柱状高台皿	高台部	-	(4.8)	(2.1)	外：橙色 内：橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	密（0.5mm の砂粒、金雲母多く含む）	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ
116	6	74	B3	Ⅰ・Ⅱ	陶器	擂鉢	口縁部小片	-	-	-	外：橙色 内：橙色	7.5YR6/6 7.5YR6/6	密（0.5mm 以下の砂粒微量含む）	良	外：回転ナデ 内：擂目
116	7	74	B4	Ⅱ	瓦質土器	鉢	口縁部小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N5/ N5/	密（0.5mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ　工具による調整
116	8	74	B4	Ⅱ	備前焼	擂鉢	口縁部小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	5Y5/1 5Y5/1	密（1mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ　擂目
116	9	74	B4	Ⅱ	備前焼	擂鉢	胴部小片	-	-	(5.1)	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	10YR4/2 10YR4/2	密（1～2mm の砂粒多く含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデのち擂目
116	10	74	C4	Ⅱ	陶器	擂鉢	胴部小片	-	-	-	外：橙色 内：にぶい黄橙色	7.5YR6/6 10YR7/3	密（1mm の砂粒多く含む）	良	外：横ナデ 内：横ナデ　擂目
116	11	74	B3	Ⅰ・Ⅱ	陶器	擂鉢	底部	-	(8.2)	(2.2)	外：灰黄色 内：にぶい黄橙色	2.5Y6/2 10YR7/4	密（0.5mm 以下の砂粒少し含む）	良	外：ケズリか 内：擂目

表 21　坂本谷遺跡石器観察表

図	番号	写真	出土地点	層位	器種	石材	計測値（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
108	20	70	P383	-	砥石	凝灰岩	(9.6)	最大幅 4.7	最大厚 3.3	196.13	使用され表面が滑らかになっている
108	21	70	P200	-	勾玉	滑石（非出雲産）	4.1		最大厚 1.0	12.08	両面穿孔　両面にミガキキズと後行の溝（施工分割溝ではない）　溝の中細かな線状痕　アゴがとがり断面楕円（出雲に特徴的な形態）
116	12	75	B4	Ⅱ	石鏃	玉髄	2.7	2.1	0.9	4.73	未成品
116	13	75	B4	Ⅱ	ｽｸﾚｰﾊﾟｰ		4.6	6.6	0.6	18.29	
116	14	75	B4	Ⅱ	磨製石斧	塩基性片岩か	(12.3)	4.9	3.8	394.45	
116	15	75	B4	Ⅱ	砥石	凝灰岩	(6.2)	2.8	2.8	68.69	使用され表面が滑らかになっている

表 22　坂本谷遺跡金属器観察表

図	番号	写真	地点	層位	器種	計測値（cm・g）				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
102	5	69	P272	-	鉄釘	5.1	0.5	0.4	5.91	保存処理番号 :S11
106	13	69	P141	-	飾金具鋲	径 1.2	高さ (0.8)	茎厚 0.3	1.83	保存処理番号 :S2
106	14	69	P141	-	飾金具	径 (3.6)	高さ 0.4	0.15	5.81	保存処理番号 :S1
106	15	69	P141	-	飾金具	外径 (5.6)	内径 (4.2)	高さ 0.5	1.53	保存処理番号 :S3
109	19	70	SX02	-	鍔	7.55	7.35	0.5	89.40	保存処理番号 :S5
115	1	73	B3	Ⅲ	不明鉄器	5.7	3.3	3.0	60.83	保存処理番号 :S19　メタル度 M(◎)
115	2	73	B3	Ⅲ	不明鉄器	2.5	1.4	1.2	5.14	保存処理番号 :S18　銹化してメタル度なし
115	3	73	A2	Ⅲ	鉄釘	(5.0)	1.4	1.0	3.89	保存処理番号 :S12　メタル度なし
115	4	73	C2	Ⅲ	不明鉄器	4.6	2.8	1.7	14.56	保存処理番号 :S13　メタル度 H(○)
115	5	73	B3	Ⅲ	不明鉄器	5.0	1.9	1.3	20.09	保存処理番号 :S17
115	6	73	岩付近	地山 上層	鉄釘	(3.4)	1.4	0.3	1.78	保存処理番号 :S8　メタル度なし
115	7	74	C7	Ⅲ	鈴	高さ 4.6	最大幅 3.5	3.2	52.68	保存処理番号 :S4
116	16	75	B3	Ⅱ	鍛冶滓	7.6	4.1	2.1	45.13	流動状　部分的に M(◎) 反応あり
116	17	75	B4	Ⅱ	鉄鍋	(4.1)	(4.4)	(2.9)	29.38	保存処理番号 :S7
116	18	75	B4	Ⅱ	刀子？	(2.6)	0.4	0.1	2.10	保存処理番号 :S20　メタル度なし
116	19	75	B4	Ⅱ	鉄釘	6.4	2.2	1.4	13.87	保存処理番号 :S9
116	20	75	C5	Ⅱ	鉄釘	(4.0)	0.8	0.9	2.46	保存処理番号 :S10
116	21	75	B5	Ⅱ	不明鉄器	(9.0)	(6.3)	最大厚 0.5	87.14	保存処理番号 :S6
116	22	75	B4	Ⅱ	不明鉄器	2.35	2.3	2.8	7.53	保存処理番号 :S21　メタル度なし
116	23	75	B3	Ⅰ・ Ⅱ	不明鉄器	3.4	2.7	2.2	21.34	保存処理番号 :S15　メタル度なし
116	24	75	B3	Ⅰ・ Ⅱ	不明鉄器	3.8	3.1	1.7	17.31	保存処理番号 :S14　メタル度 H(○)
116	25	75	B3	Ⅰ・ Ⅱ	不明鉄器	3.3	2.4	1.3	24.58	保存処理番号 :S16　メタル度 L(●)

表 23　坂本谷遺跡銭貨計測表

図	番号	写真	地点	層位	名称	初鋳年	計測値（㎜・g）					備考
							銭径(A)/ 銭径(B)	内径(C)/ 内径(D)	孔径	銭厚	量目	
115	8	74	C1	Ⅰ	天禧通宝	1017	24.77/24.85	19.71/19.79	6.58 ～ 6.8	1.16	2.07	北宋

表 24　京田遺跡土器観察表

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色　調		胎土	焼成	調整・文様・備考
126	1	84	P71		須恵器	甕	胴部 小片	-	-	-	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	10YR7/2 10YR8/2	密（0.5 ～ 1mm の砂粒少し含む）	不良	外：格子目タタキ 内：青海波当具痕
128	1	84	P28		須恵器	蓋	口縁部 小片	-	-	(1.6)	外：灰白色～灰色 内：灰白色	N7/ ～ N6/ N7/	密（0.5mm の砂 粒微量含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
130	1	84	P11		須恵器	壷	口縁部 小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N6/ N6/	密（0.5mm の砂 粒少し含む）	良	外：回転ナデ　波状文 内：回転ナデ
131	1	84	G2	Ⅱ	土師器	高坏	坏部	-	-	(2.7)	外：にぶい黄橙色 内：淡黄色	10YR6/4 2.5Y8/3	粗（1 ～ 2mm の 砂粒多く含む）	不良	外：ハケメ 内：磨滅のため調整不明
131	2	84	G3	Ⅱ	土師器	甑	把手部	-	-	-	外：淡黄色	2.5Y7/3	やや粗（1 ～ 2mm の砂粒多く 含む）	良	外：指頭圧痕　ナデ
131	3	84	H2	Ⅱ	須恵器	皿	口縁部 小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	5Y8/1 5Y8/1	密（0.5mm の砂 粒多く含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
131	4	84	H2	Ⅱ	須恵器	甕	胴部 小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	7.5Y7/1 7.5Y7/1	密（0.5 ～ 1mm の砂粒多く含む）	不良	外：平行文タタキ 内：青海波当具痕
132	1	85	B4	Ⅰ	須恵器	坏	口縁部 小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/	密（0.5mm 以下 の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ
132	2	85	-	Ⅰ	須恵器	甕	小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	N7/ N7/	密（0.5mm 以下 の砂粒微量含む）	良	外：カキメ 内：青海波当具痕
132	3	85	F3	Ⅰ	須恵器	甕	胴部 小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	N7/ N8/	密（0.5mm の砂 粒微量含む）	良	外：カキメのち平行文タタキ 内：青海波当具痕
132	4	85	G3	Ⅰ	瓦質 土器	鍋	小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N5/ N5/	密（0.5 ～ 1mm の砂粒少し含む）	不良	外：磨滅のため調整不明 内：磨滅のため調整不明
132	5	85	G3	Ⅰ	瓦質 土器	鉢	口縁部 小片	-	-	-	外：灰色 内：灰色	N4/ N4/	密（0.5mm の砂 粒微量含む）	不良	外：磨滅のため調整不明 内：カキメ
132	6	85	I3	Ⅰ	白磁	碗	小片	-	-	-	外：灰白色 内：灰白色	5Y8/2 5Y8/2	緻密	良	外：施釉 内：施釉
132	7	85	F3	Ⅰ	磁器	小坏	胴～ 高台部	-	(3.4)	(3.2)	外：灰白色～暗青灰 色 内：灰白色	2.5GY8/1 ～ 10BG4/1 7.5Y8/1	緻密	良	外：施釉　畳付露胎　染付 内：施釉
132	8	85	H1	Ⅰ	陶器	碗	高台部 小片	-	(5.2)	(2.4)	外：灰白色～褐色 内：灰白色	7.5Y7/1 ～ 7.5YR4/6 7.5Y7/1	緻密	良	外：施釉 内：施釉
132	9	85	H1	Ⅰ	陶器	碗	胴～ 高台部	-	(4.8)	(3.9)	外：灰オリーブ色～ 灰白色 内：灰オリーブ色	5Y4/1 ～ 5Y8/2 5Y4/1	緻密	良	外：施釉 内：施釉

図	番号	写真	地点	層位	種別	器種	遺存	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		胎土	焼成	調整・文様・備考
132	10	85	F3	I	陶器	鉢	口縁部小片	-	-	-	外：灰白色～灰褐色 内：灰白色～灰黄褐色	2.5Y8/2～5YR4/2 2.5Y8/2～10YR6/2	密（0.5mm 以下の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　施釉 内：回転ナデ　施釉
132	11	85	F4	I	陶器 備前焼	甕	小片	-	-	-	外：灰褐色 内：灰色	7.5Y6/2 N5/	密（0.5～1mm の砂粒少し含む）	良	外：回転ナデ　ナデ 内：回転ナデ
132	12	85	D5	I	土師器	火鉢	口縁部小片	-	-K6	-	外：浅黄橙色 内：灰色	10YR8/3 7.5Y4/1	粗（1mm の砂粒多く含む）	良	外：ナデか 内：ナデか
132	13	85	H2	I	土製品	土玉	完形	直径 2.7×2.8	-	厚み 2.2	外：にぶい黄色～にぶい橙色	2.5Y6/4～7.5YR6/4	密（0.5～1mm の砂粒少し含む）	良	外：ナデ　球状に整える

表 25　京田遺跡石器観察表

図	番号	写真	出土地点	層位	器種	石材	計測値（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
132	14	85	D6	I	磨か	頁岩	3.0	1.8	0.4	3.21	2 面に使用痕 (擦痕)　3 面に階段状に剥離
132	15	85	B9	I	不明石器	安山岩か	11.5	8.6	2	206.46	風化して灰白色を呈す　二次加工は不明瞭
132	16	85	F3	I	磨製石斧	塩基性片岩か？	(7.8)	4.5	3.5	118.07	風化が著しい

表 26　京田遺跡金属器観察表

図	番号	写真	地点	層位	器種	計測値（cm・g）				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
132	17	85	F3	I	煙管	4.2	1.0	0.9	3.80	重量は管内に詰まる土を含む

写真図版

1．神西城・1 区遠景（上空：南から）

2．1 区北壁土層堆積状況 (南から)

図版 2

1．1区中央ベルト土層堆積状況 (北から)

2．1区中央ベルト土層堆積状況 (北から)

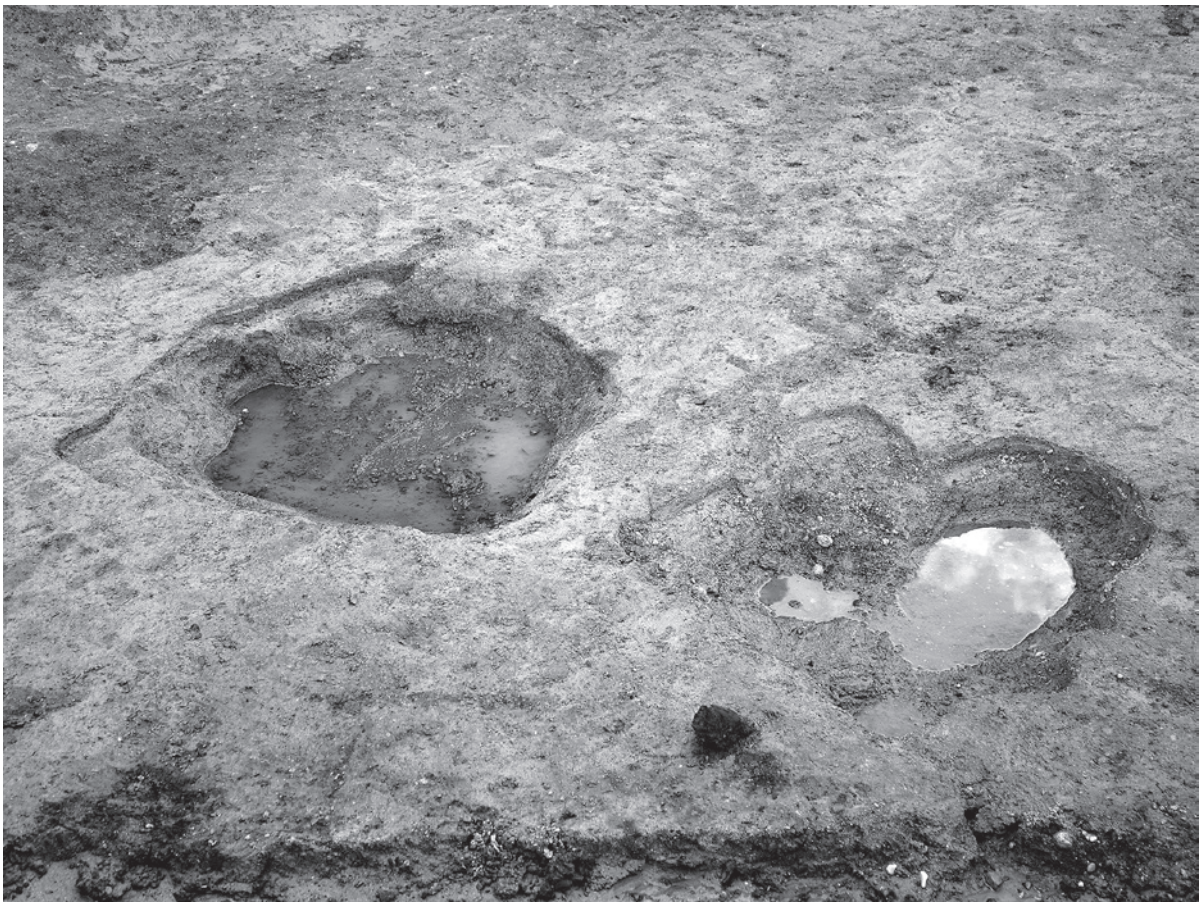
1．1 区南壁土層堆積状況 (北から)

2．1 区南壁土層堆積状況 (北西から)

図版 4

1．1 区 SK01・02 検出状況 (南東から)

2．1 区 SK01 土層堆積状況 (南から)



1．1 区 SK01・02 完掘状況 (南東から)

2．1 区平坦部完掘状況 (北東から)

図版 6

1．1 区岩塊土器溜り遺物出土状況 (北西から)

2．1 区斜面完掘状況 (東から)

1．1区完掘状況 (東から)

図版 8

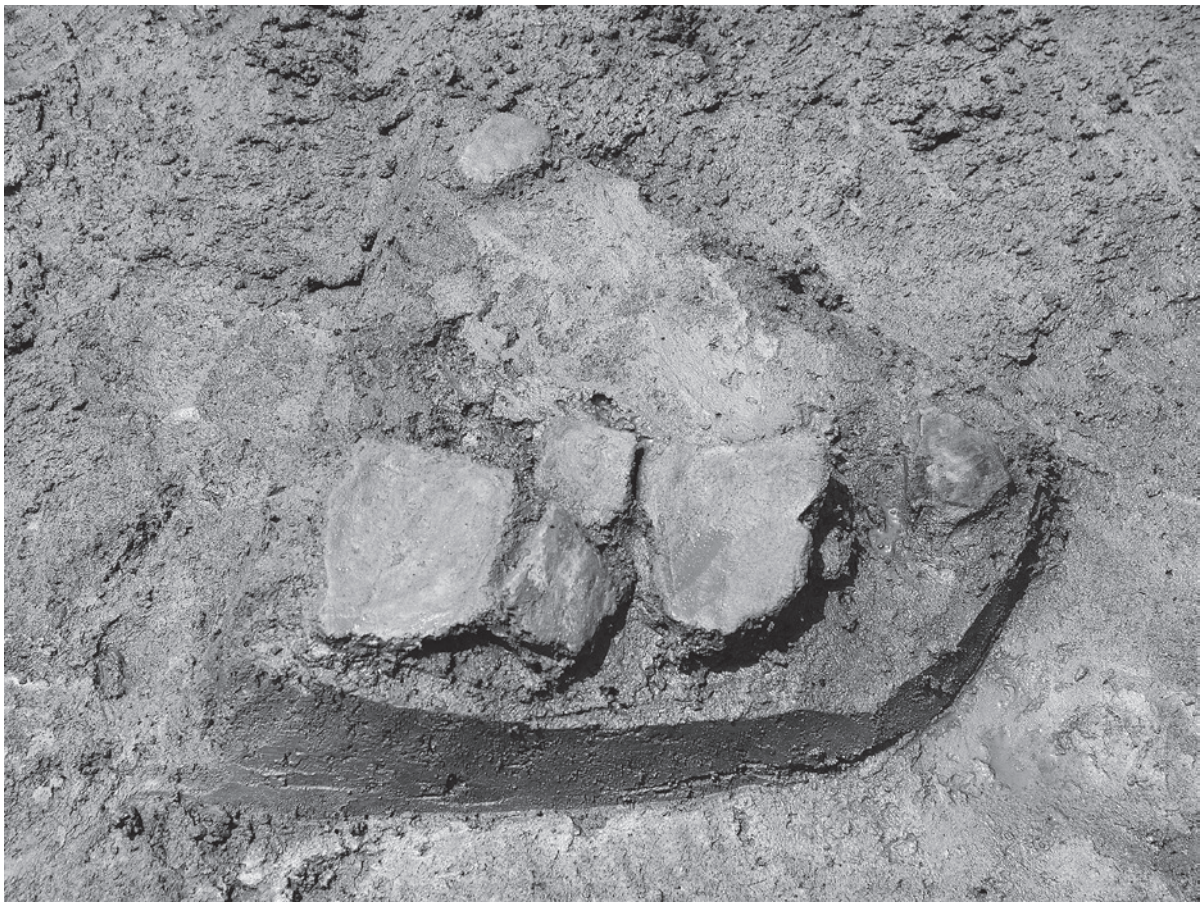
1．2 区横断ベルト土層堆積状況 (北東から)

2．2 区南東壁土層堆積状況 (北から)

1．2 区北西壁土層堆積状況 (北東から)

2．2 区北東壁土層堆積状況 (南西から)

図版 10



1．2 区縄文土器出土状況 (北から)

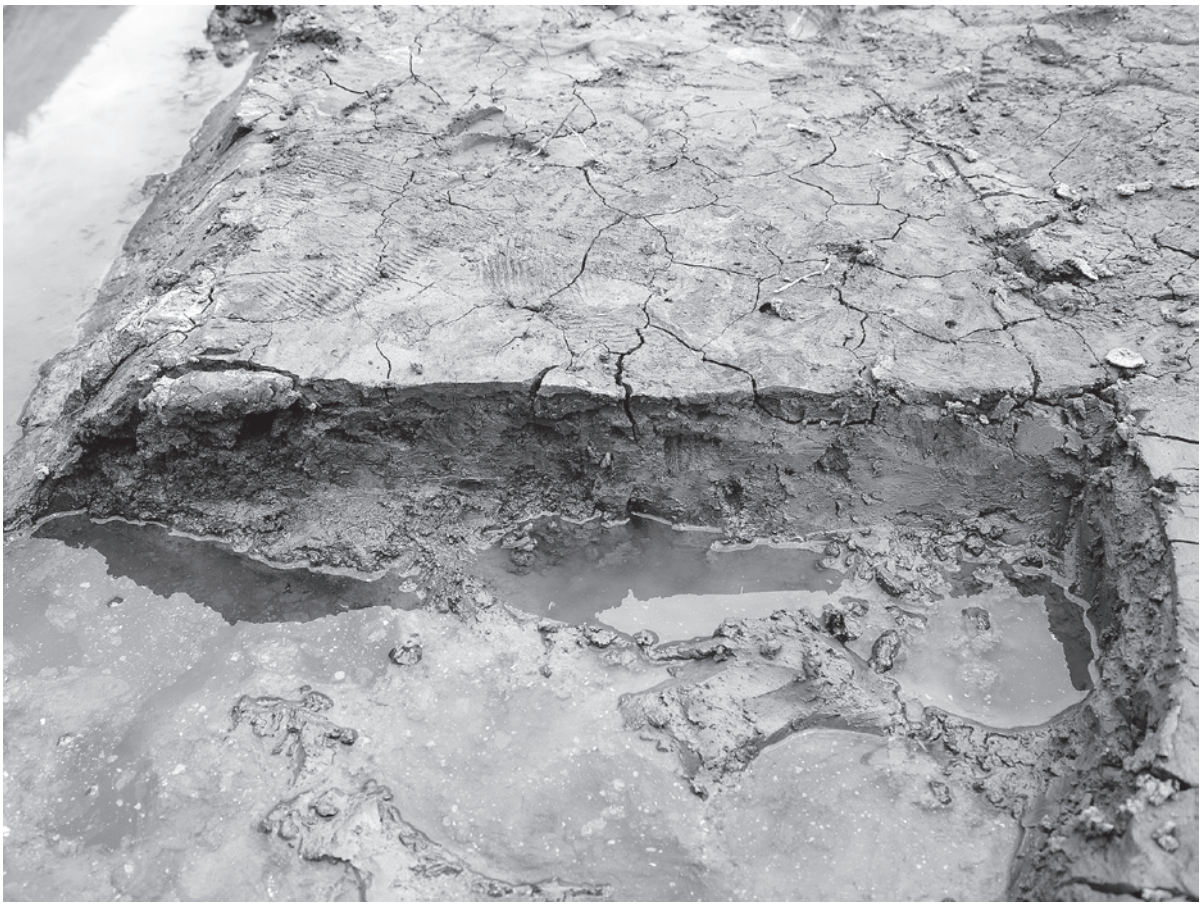
2．2 区倒木出土状況 (北から)

1．2 区完掘状況 (北東から)

図版 12

1．3 区第 1 遺構面遺構検出状況 (北西から)

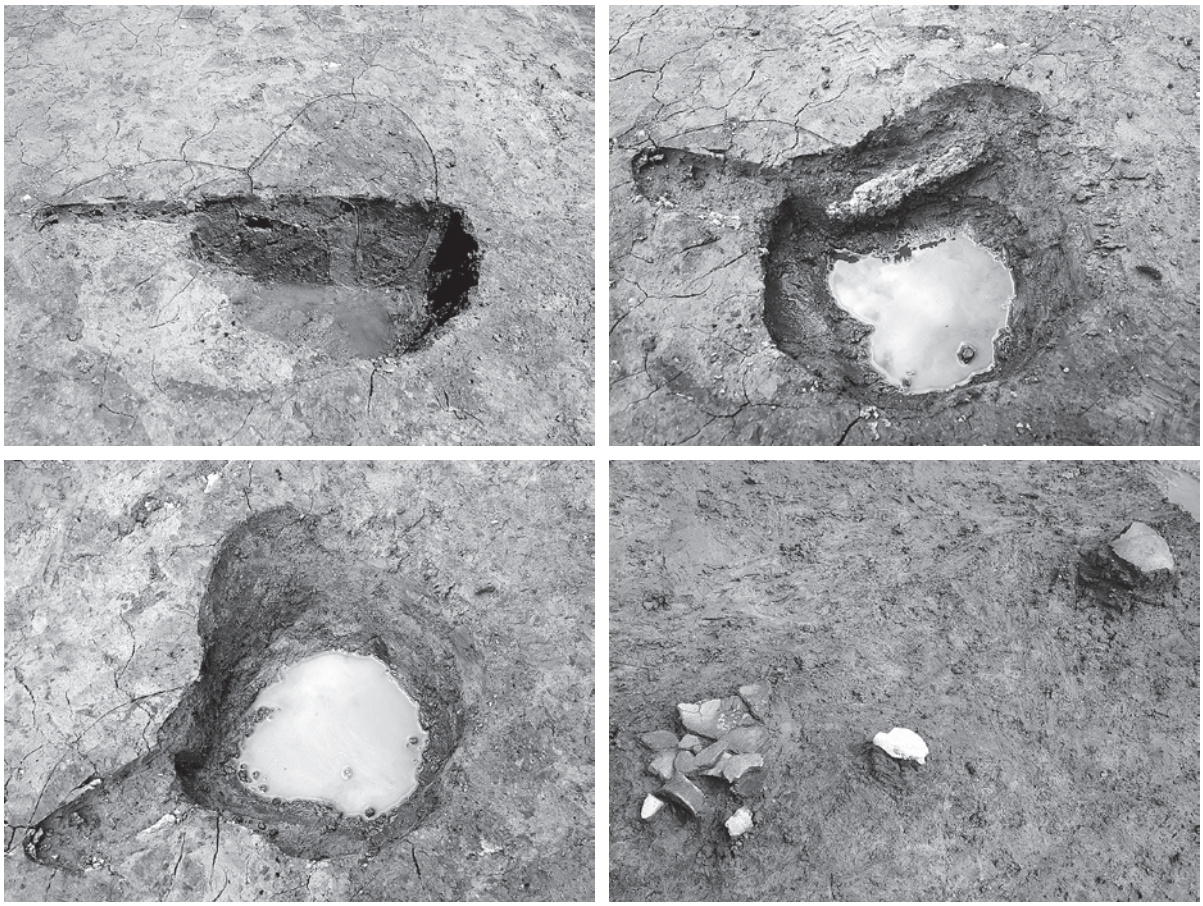
2．3 区第 1 遺構面完掘状況 (北東から)



1．3 区 SK01 埋土堆積状況 (北西から)

2．3 区北西壁土層堆積状況 (南東から)

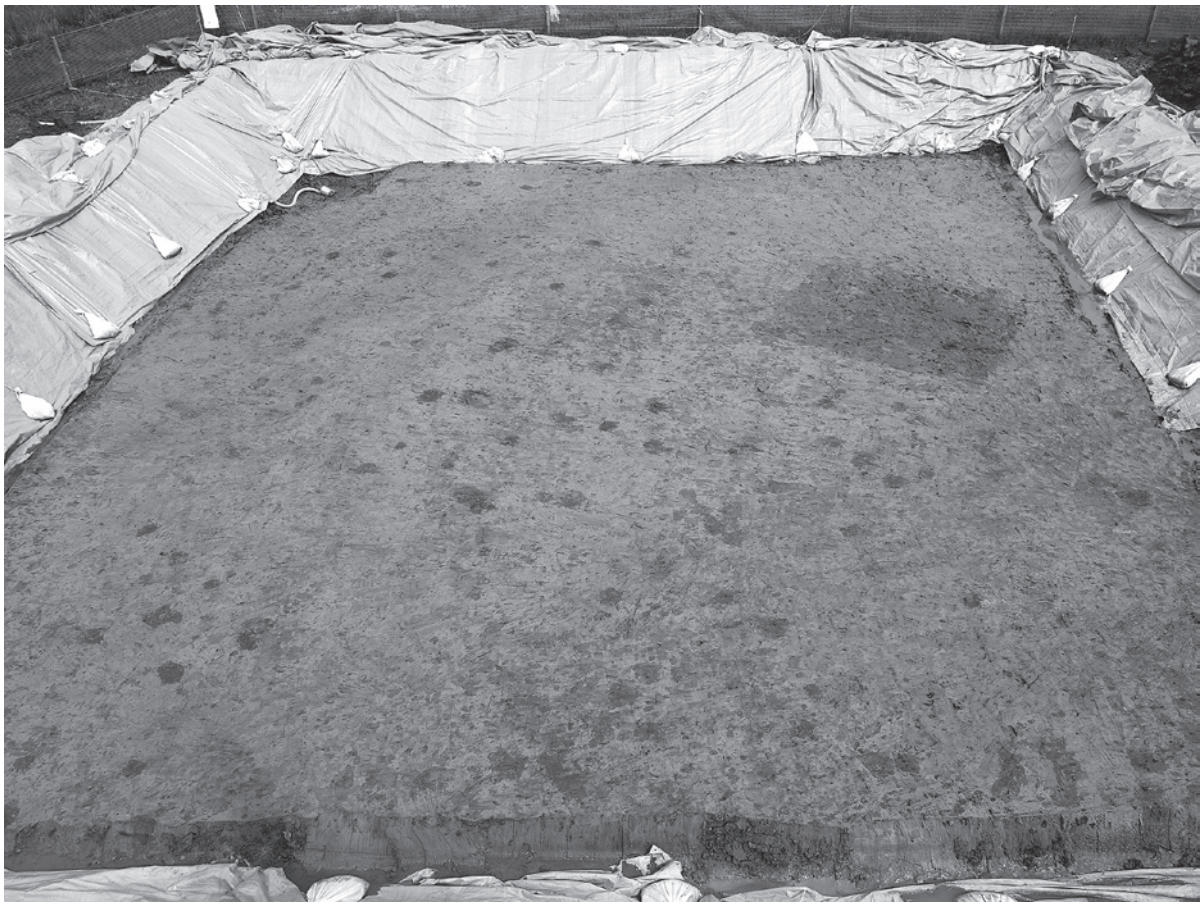
1．3 区北東壁土層堆積状況 (南西から)



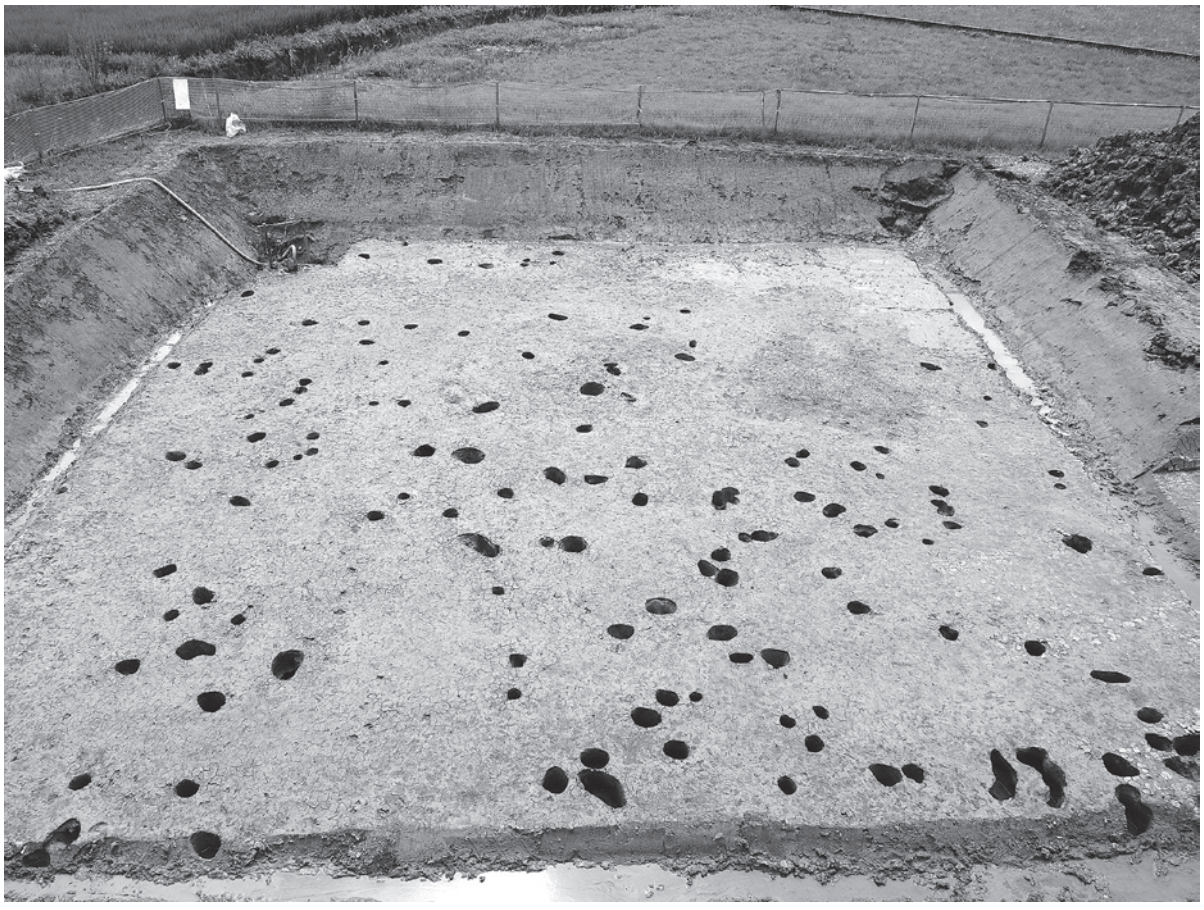
2．3 区第 2 遺構面 SX01 調査状況 (上・左下)、第 2 遺構面遺物出土状況 (右下)

1．3 区完掘状況 (北東から)

図版 16

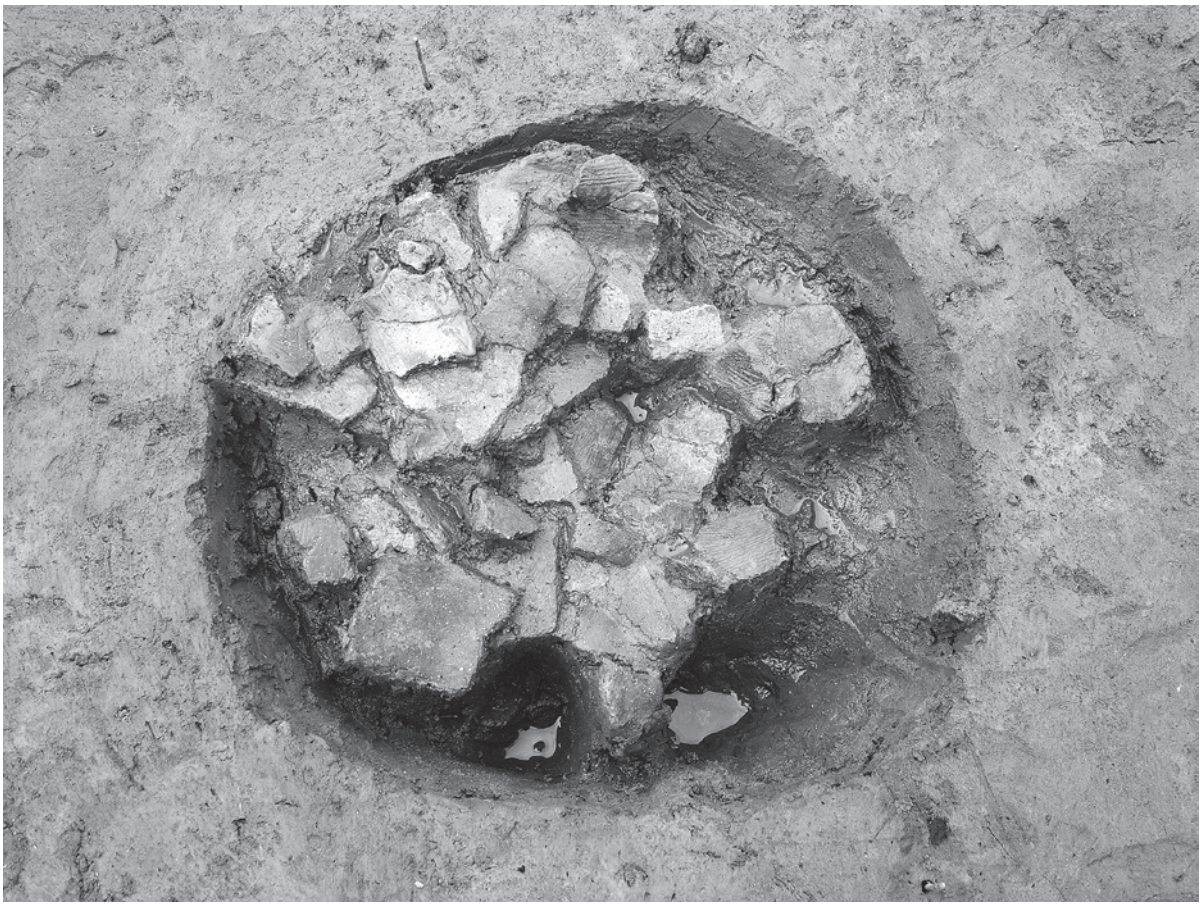


1．4区第1遺構面遺構検出状況 (北西から)

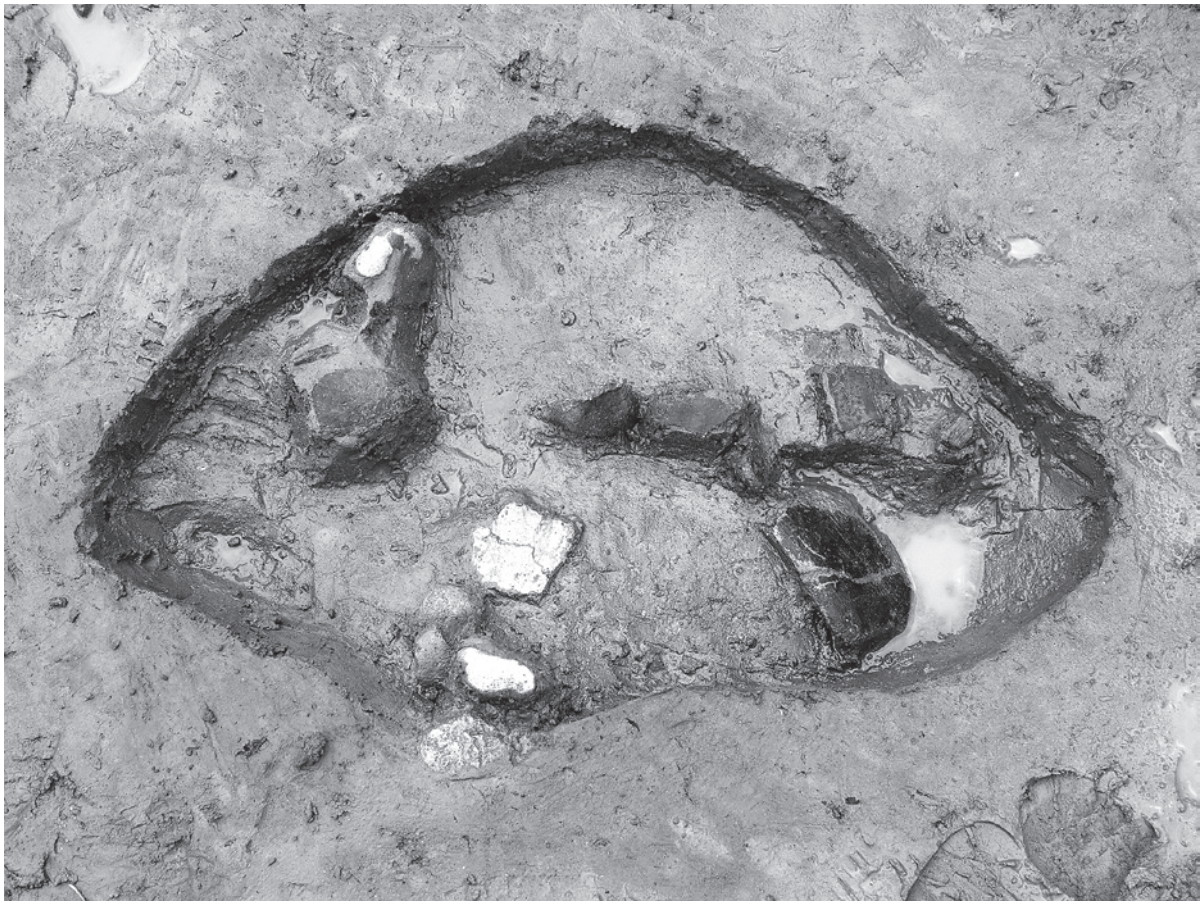


2．4区第1遺構面完掘状況 (北西から)

1．4区第２遺構面 SK01~05 検出状況 (北西から)



2．4区 SK04 遺物出土状況 (北西から)



1．4区第２遺構面 SK05 遺物出土状況 (西から)

2．4区第２遺構面完掘状況 (北西から)

1．4区北西壁土層堆積状況 (南東から)

2．4区北東壁土層堆積状況 (南西から)

1．5 区 SD01(新) 検出状況 (南東から)

2．5 区 SD01(新) 完掘状況 (南東から)

1．5 区 SD01(古) 遺物出土状況 (東より)

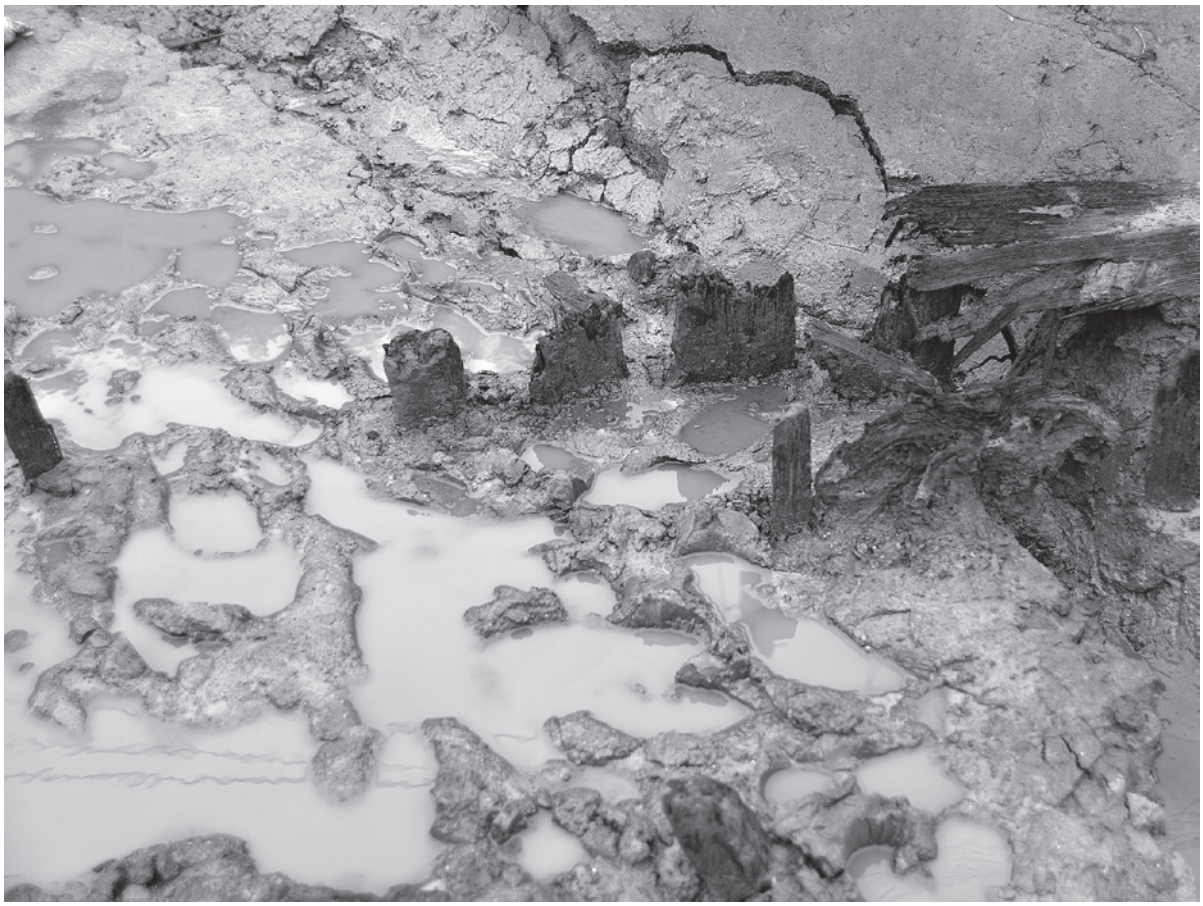
2．5 区 SD01(古) 遺物出土状況 (西より)

1．5 区 SD01(古) 遺物出土状況 (南西より)

2．5 区 SD01(古) 遺物出土状況

1．5 区 SD01(古) 護岸・堰出土状況 (北東から)

2．5 区 SD01(古) 護岸・堰出土状況 (北から)



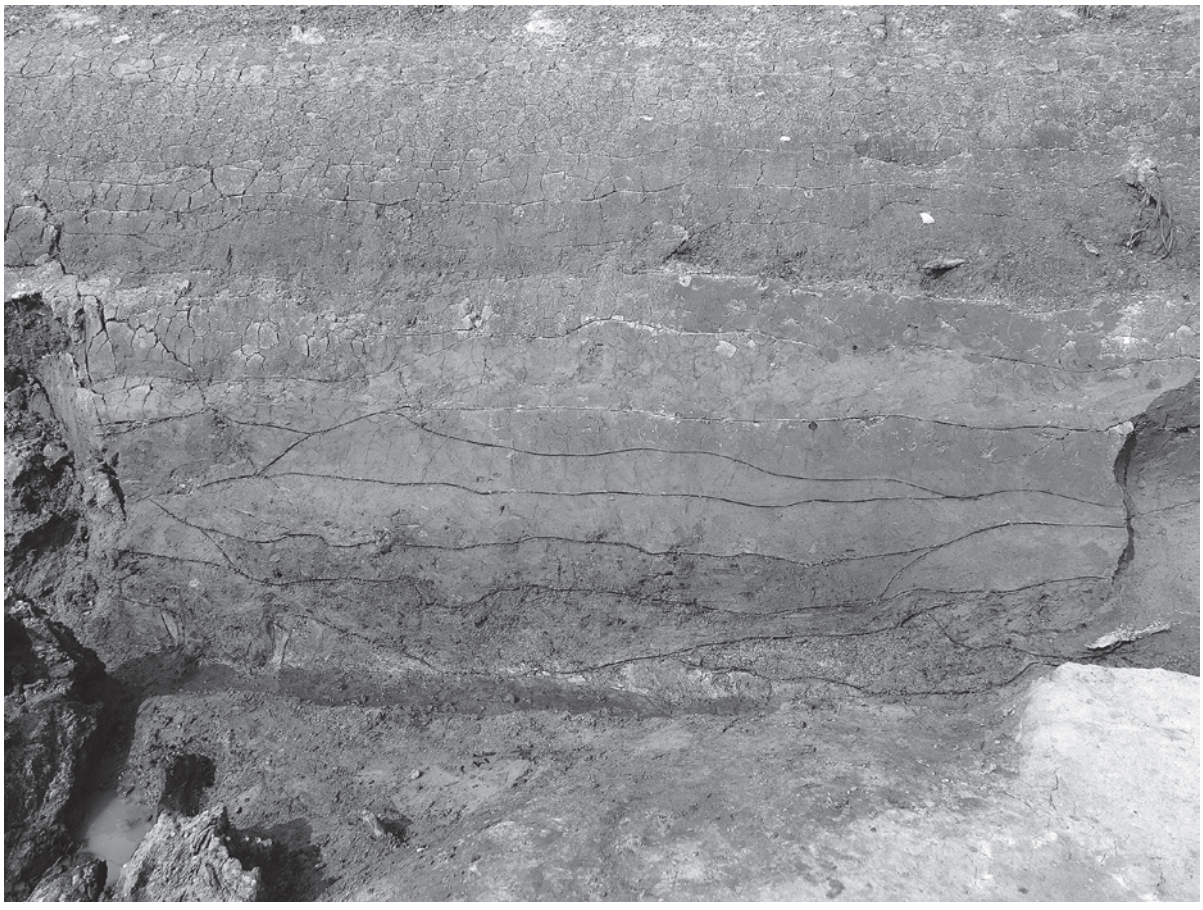
1．5 区 SD01(古) 矢板出土状況 (西から)

2．5 区 SD01 土層堆積状況 (南から)

1．5 区北東壁・SD01(古) 土層堆積状況 (西から)

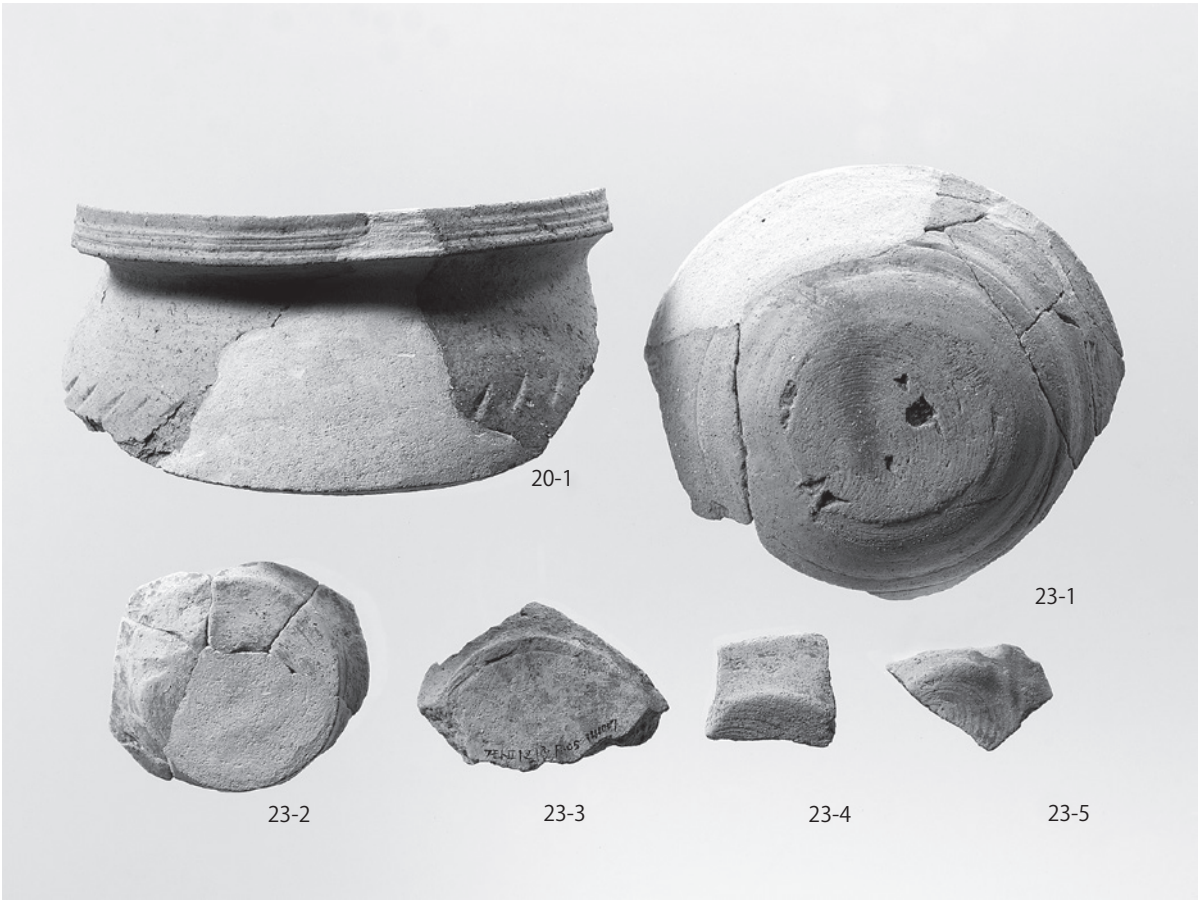
2．5 区南東壁・SD01(古) 土層堆積状況 (北西から)

1．5 区 SD02 杭・木材出土状況 (南東から)



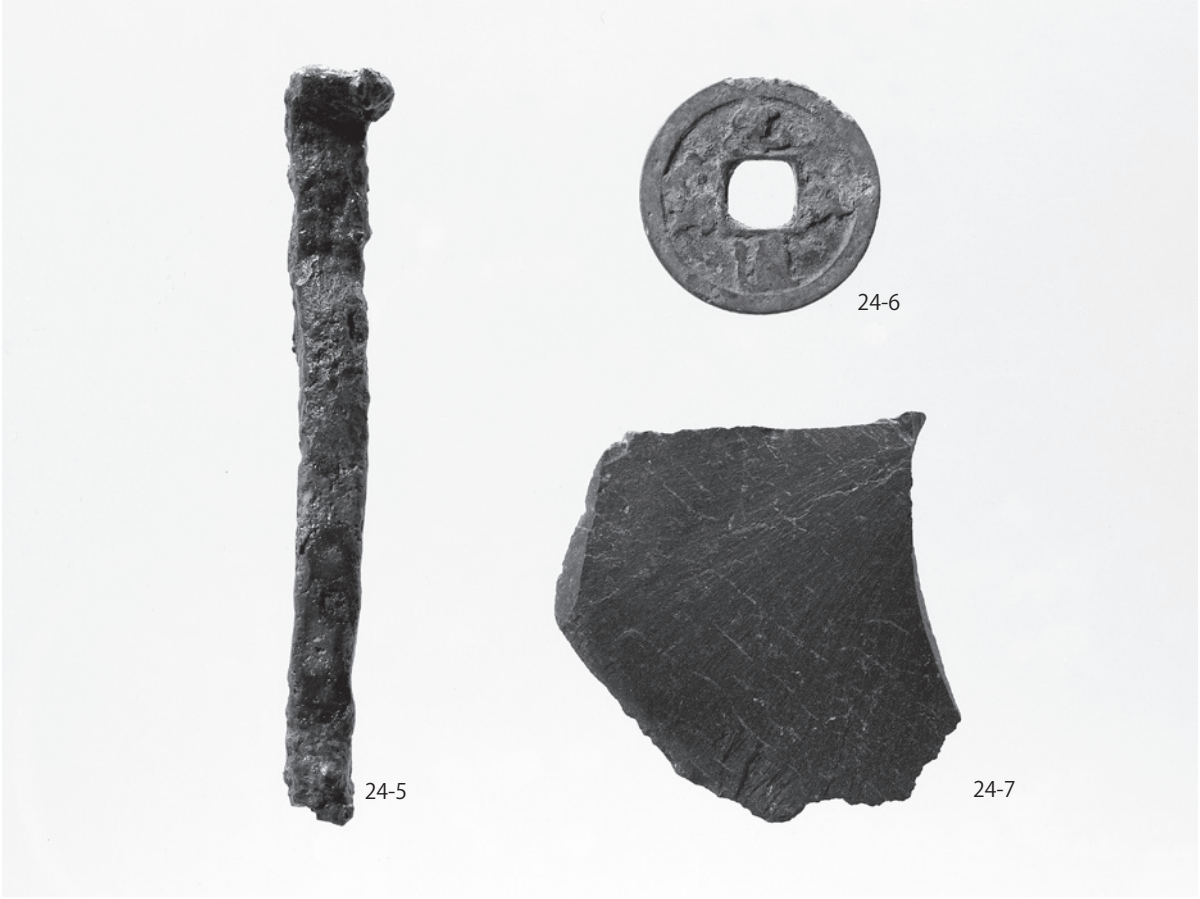
2．5 区北東壁・SD02 土層堆積状況 (南西から)

1．5区完掘状況 (南東から)

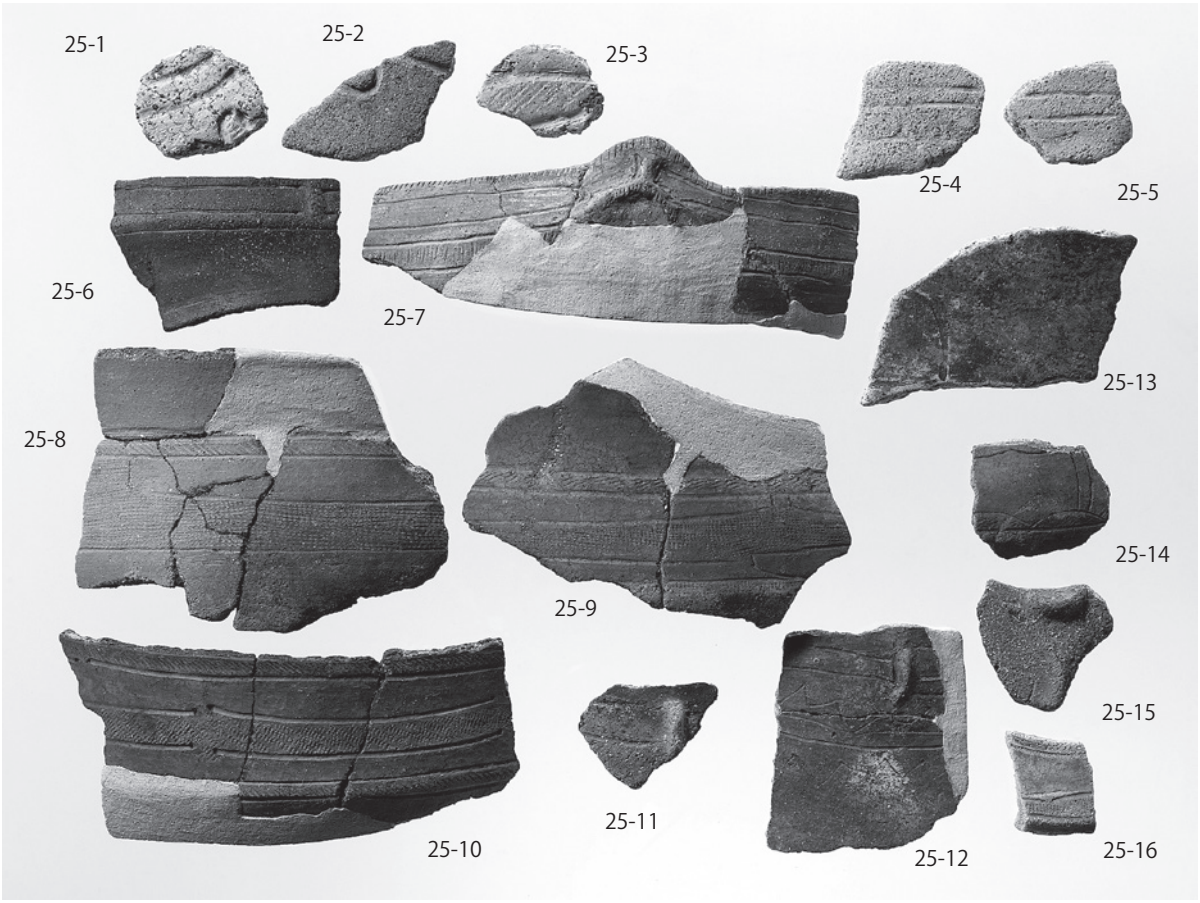


1．1 区 SK02 出土弥生土器 (第 20 図) ・斜面出土土師器 (第 23 図)

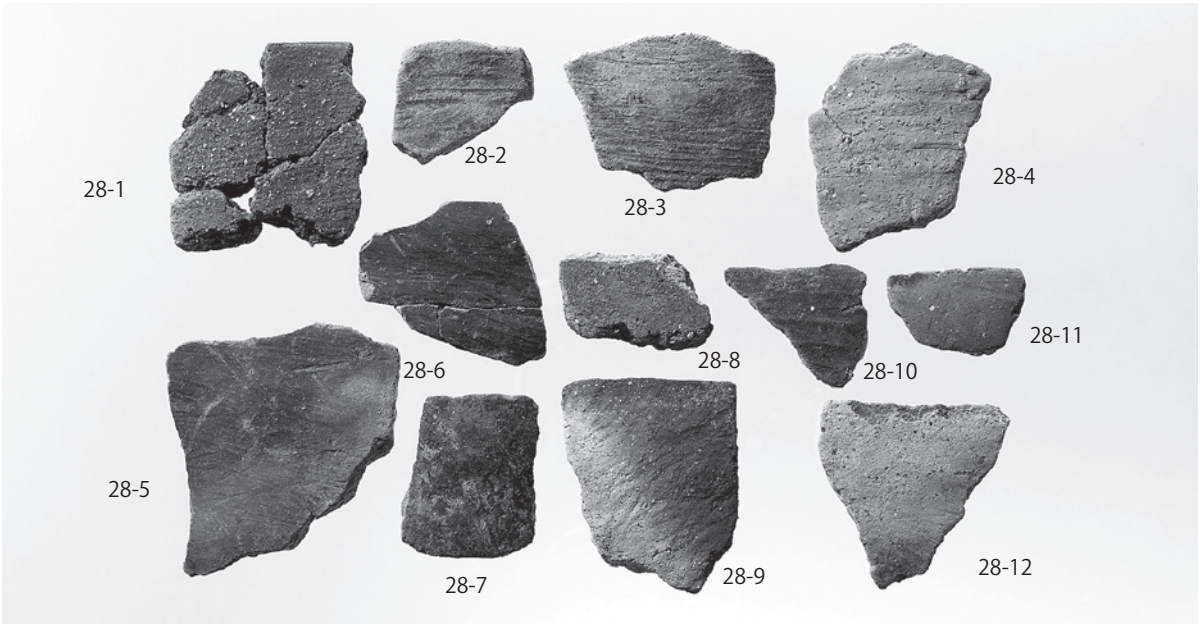
2．1 区出土遺物 (第 24 図)



1．1区出土鉄器・銭貨・石器 (第 24 図)

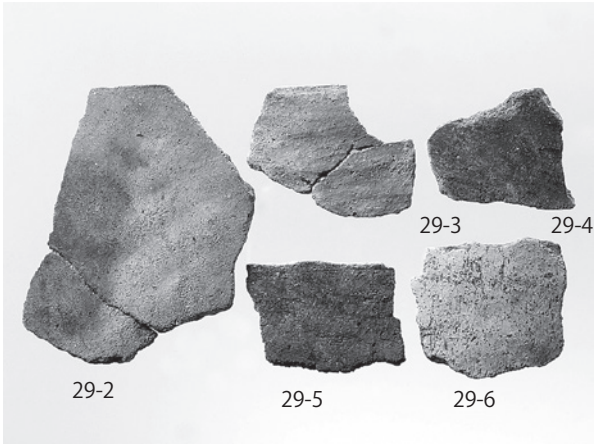


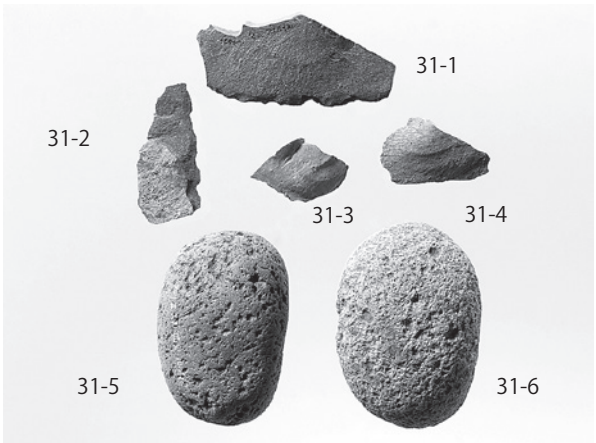
2．2区Ⅲ層出土縄文土器 (第 25 図)



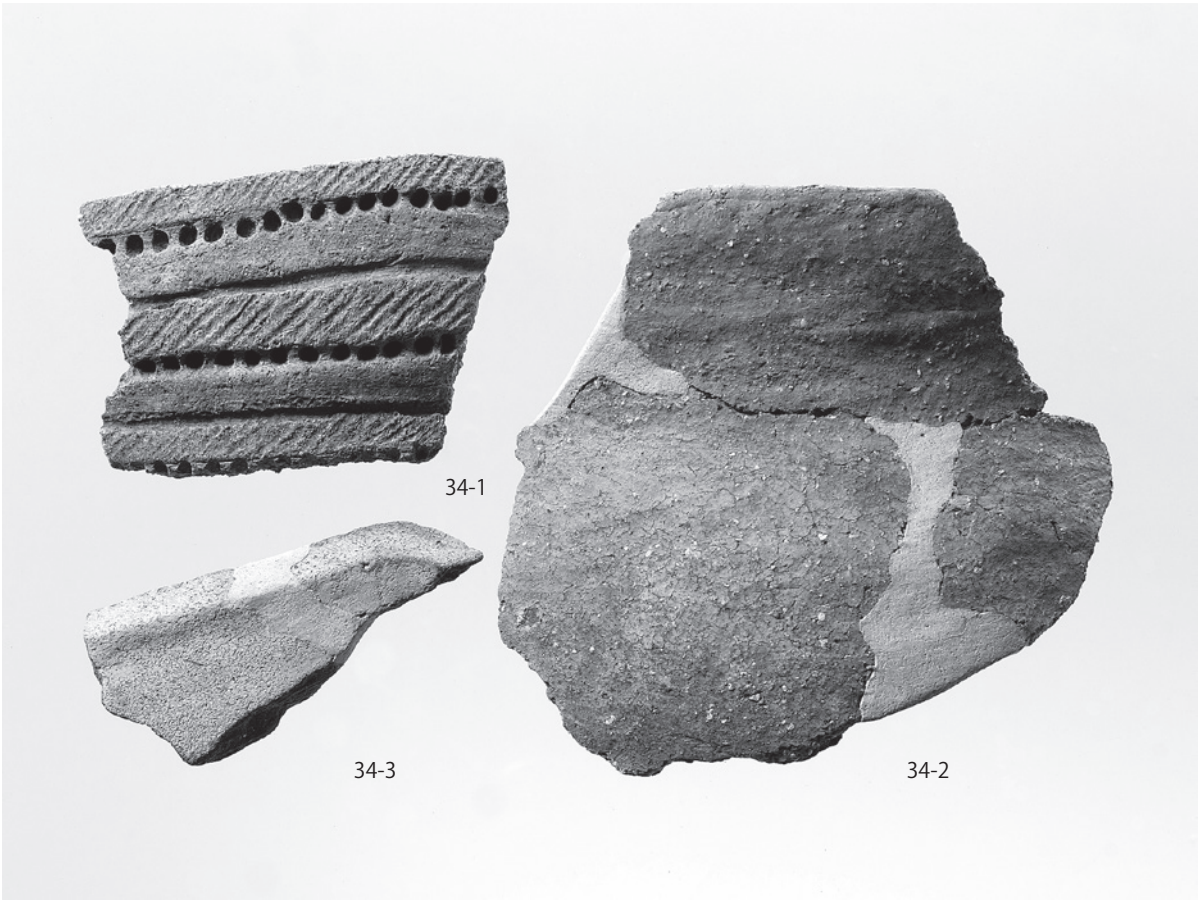
1．2区Ⅲ層出土縄文土器 (第 26 ～ 28 図)

1．2区Ⅲ層出土縄文土器 (第 29 図)

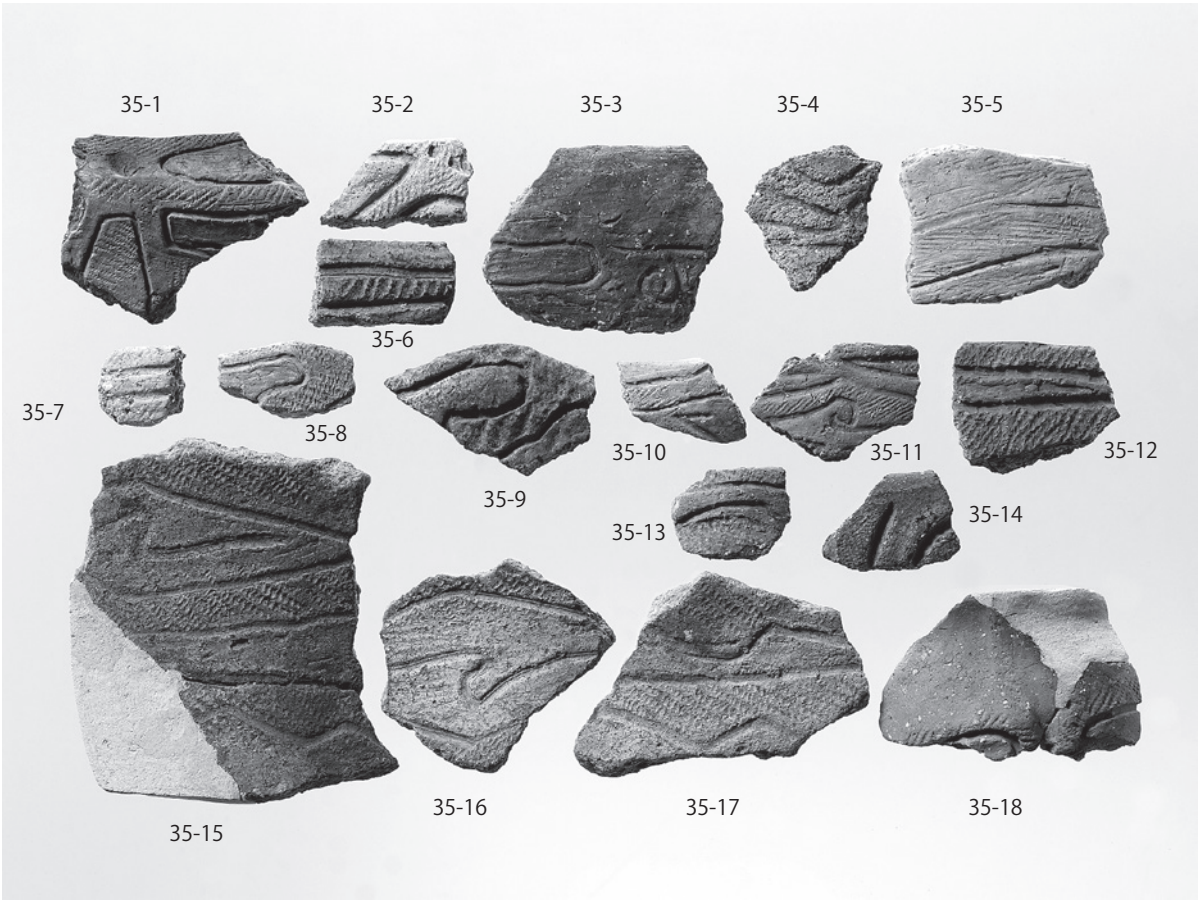




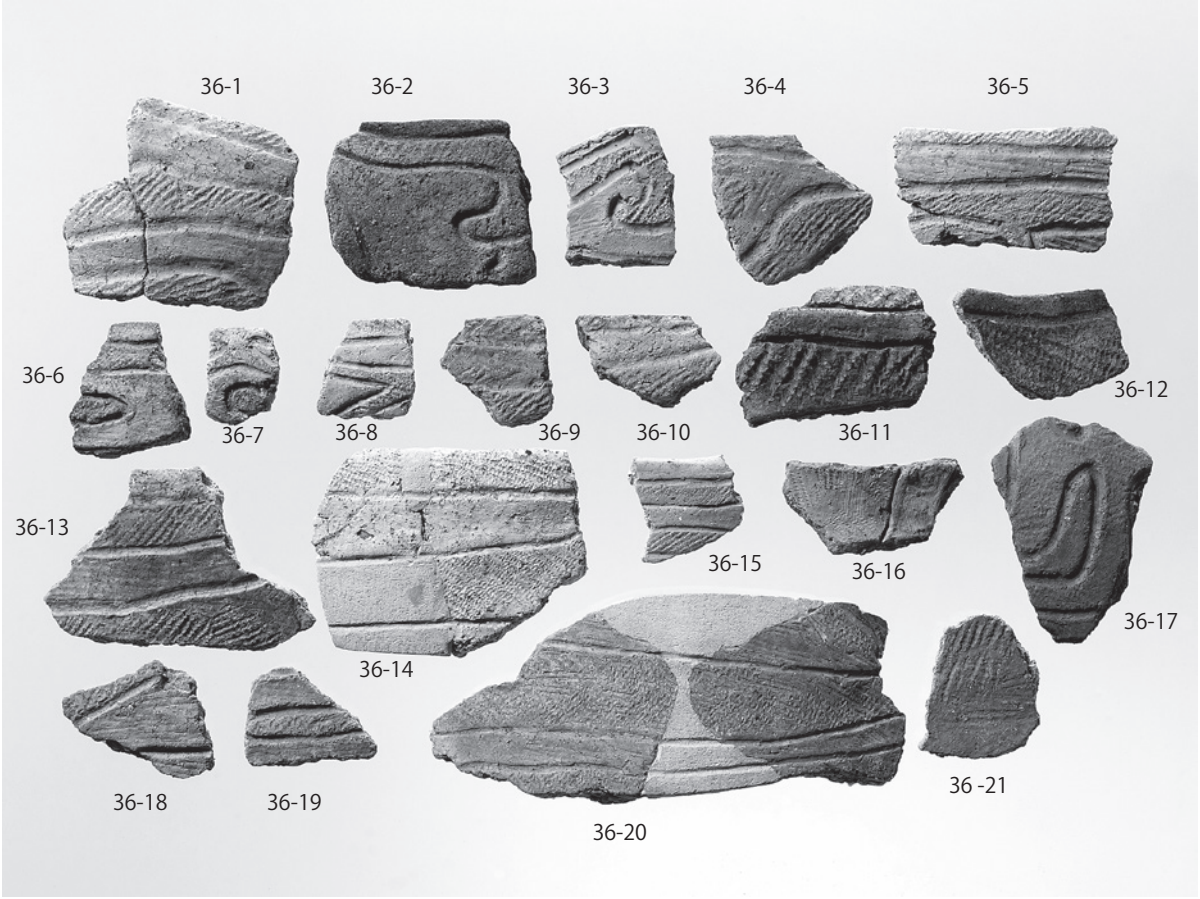
2．2区Ⅲ層出土遺物 (第 29 ～ 31 図)、Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 (第 32 図)



1．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 34 図)

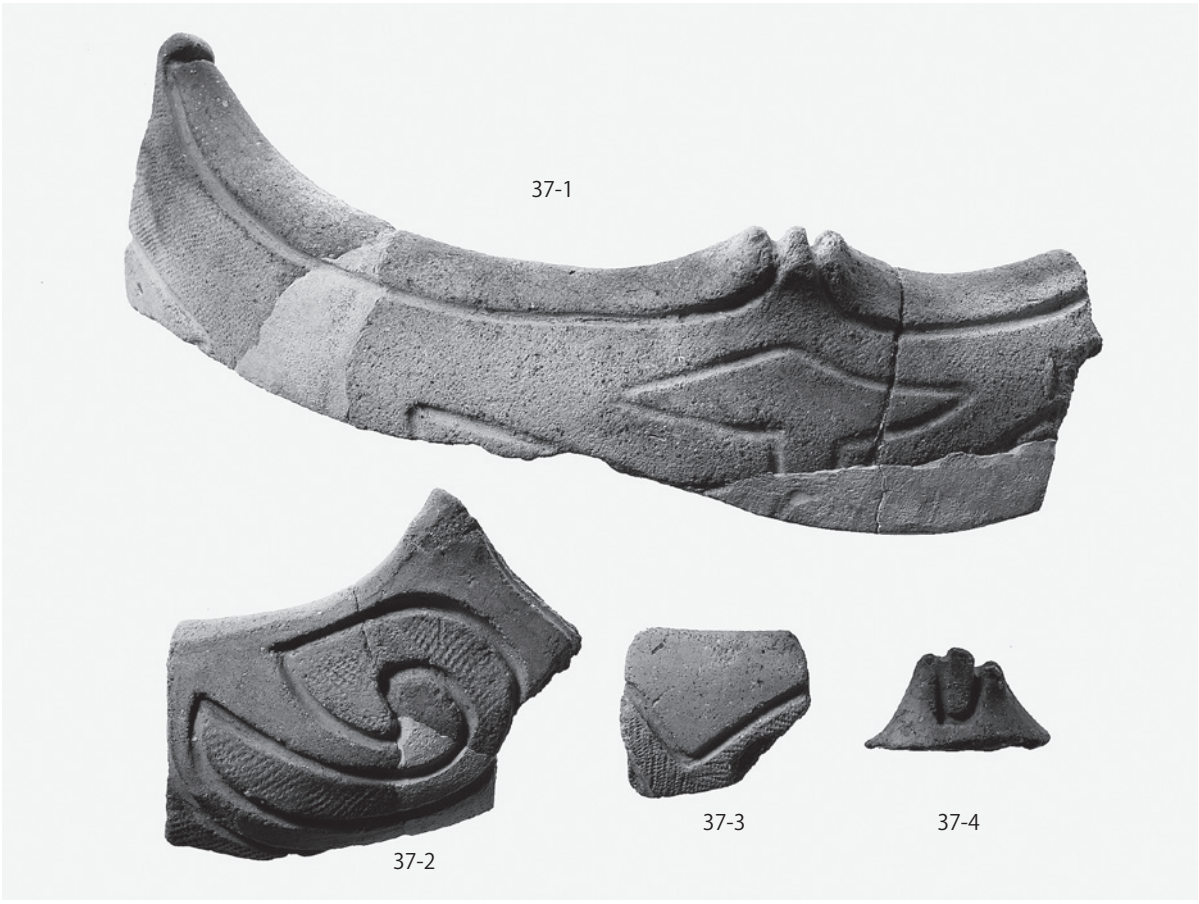


2．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 35 図)

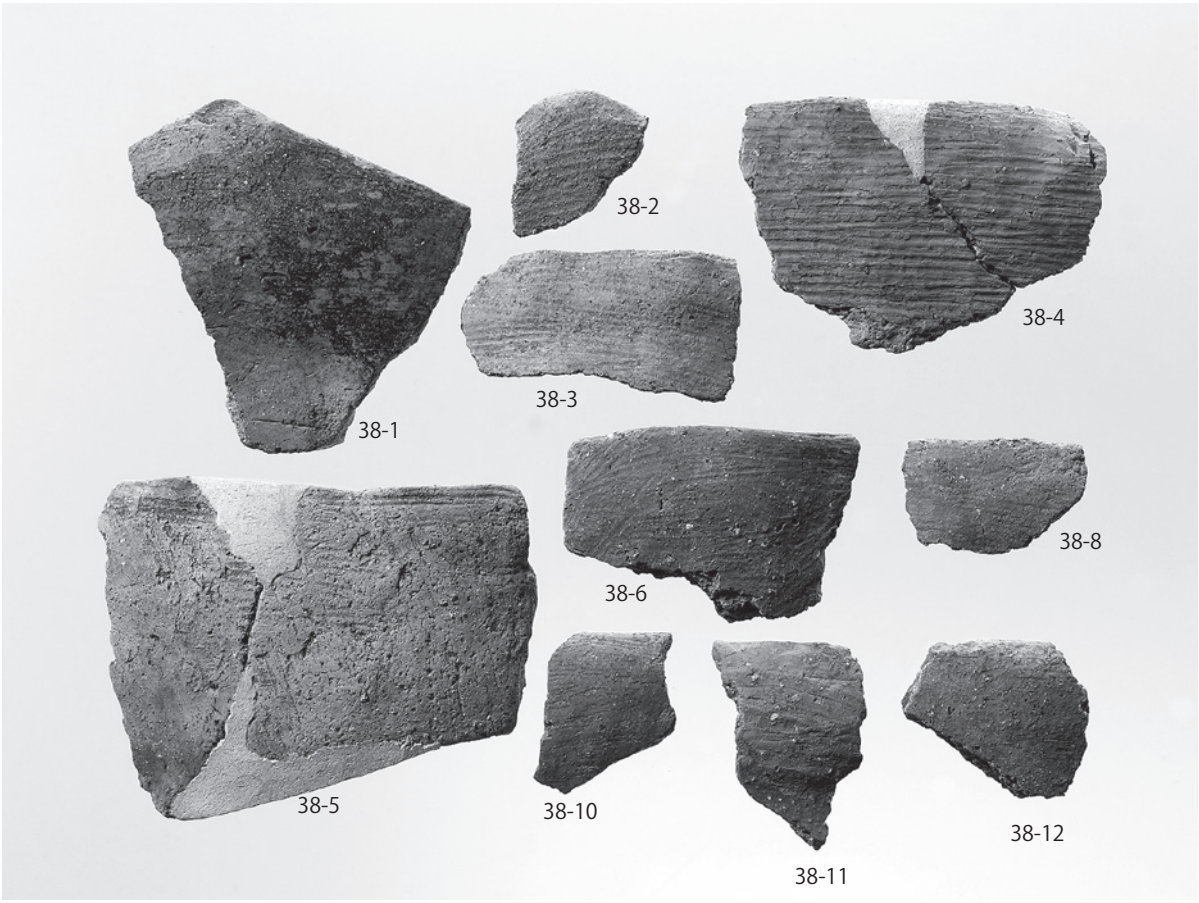


1．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 36 図)

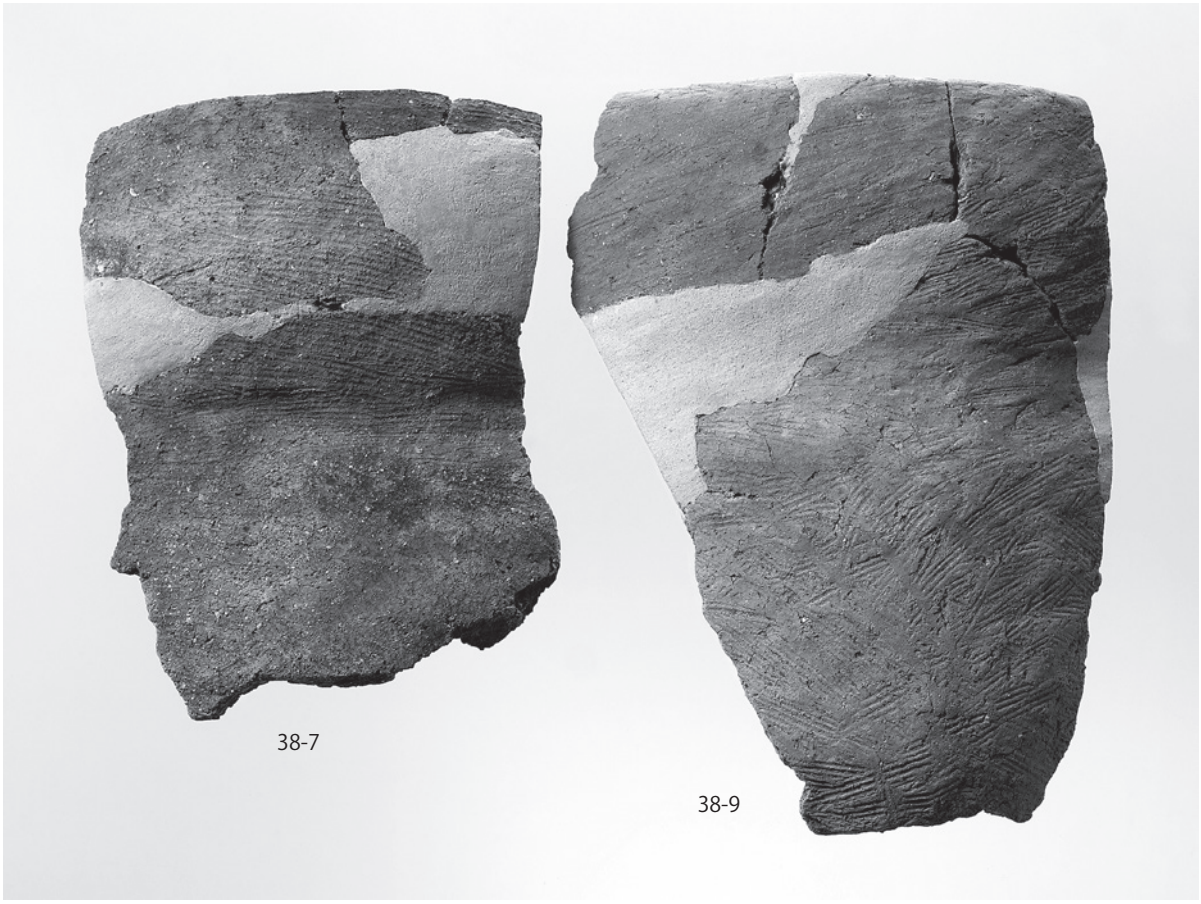
2．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 36 図)



1．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 37 図)



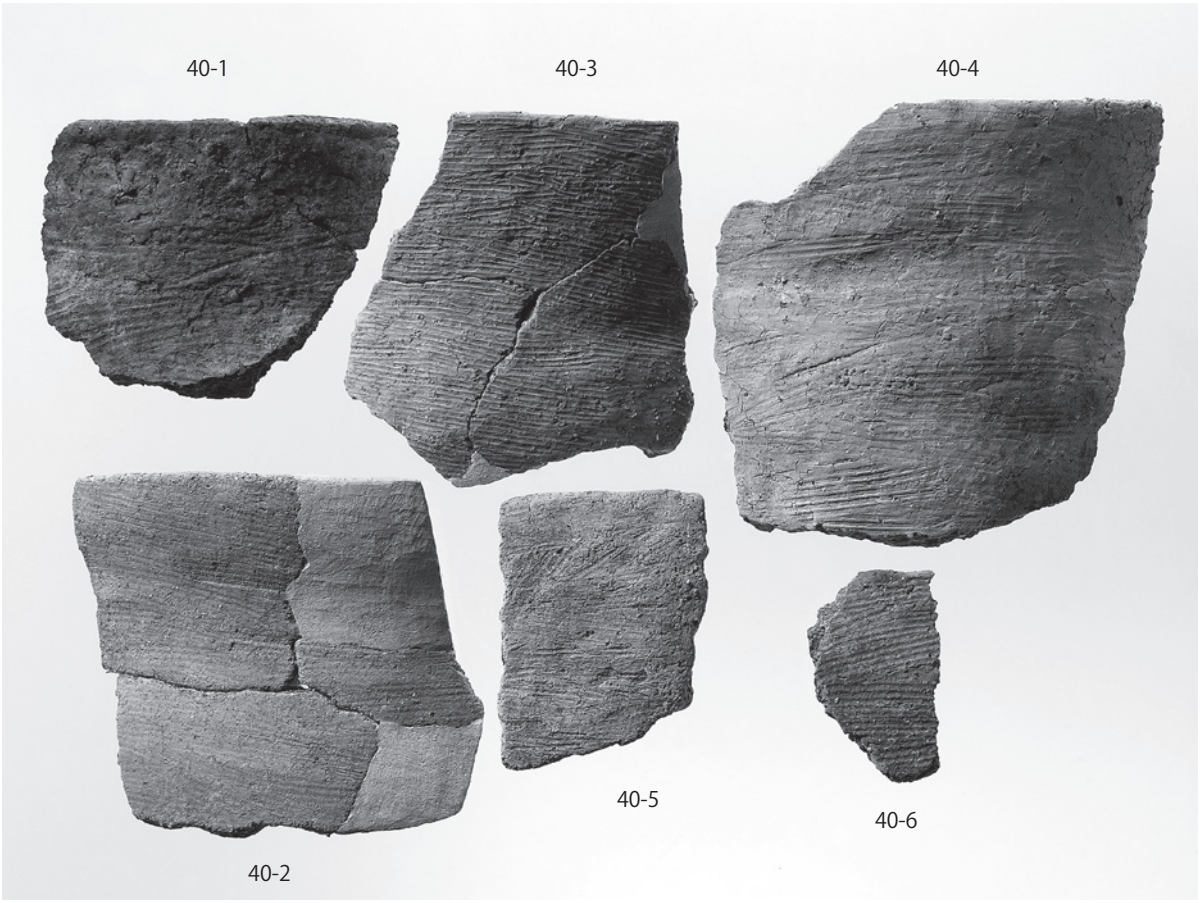
2．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 38 図)



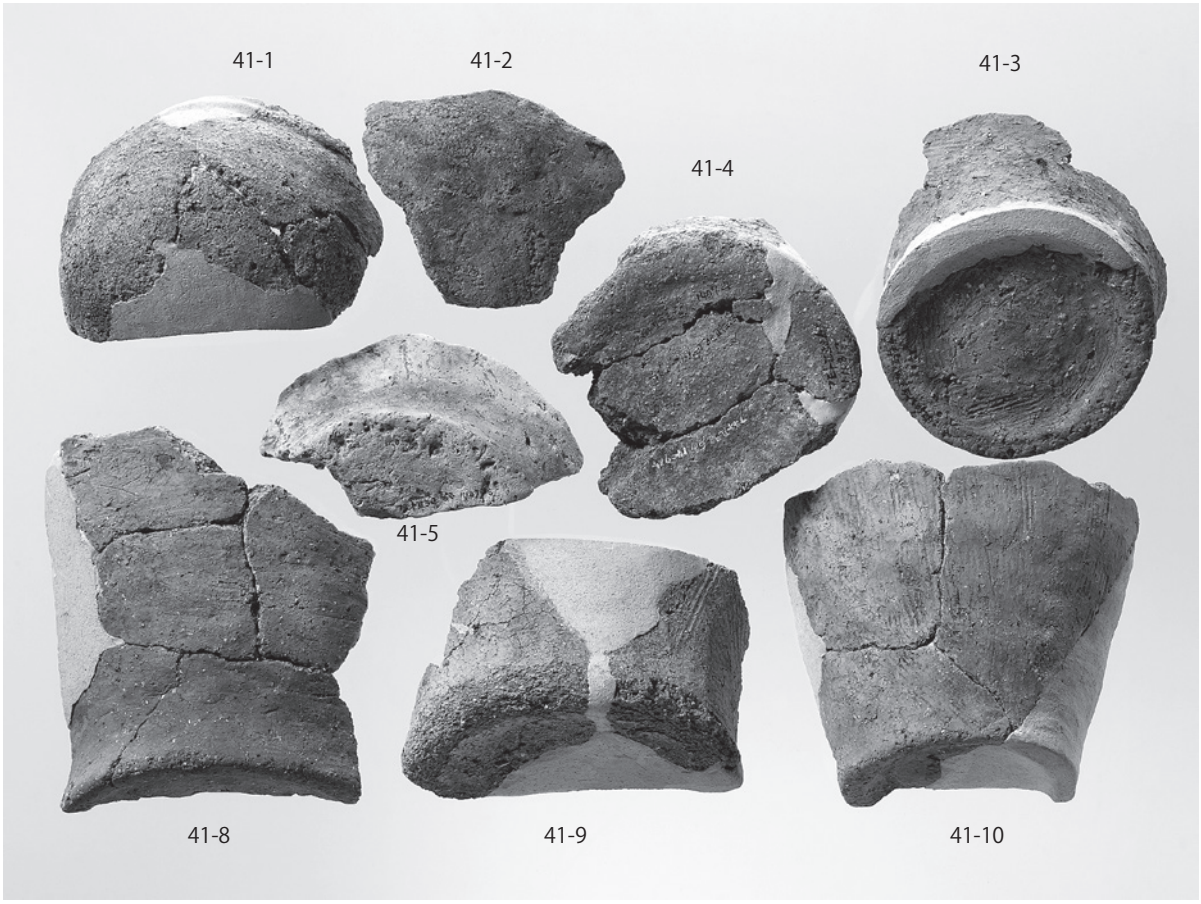
1．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 38 図)

2．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 39 図)

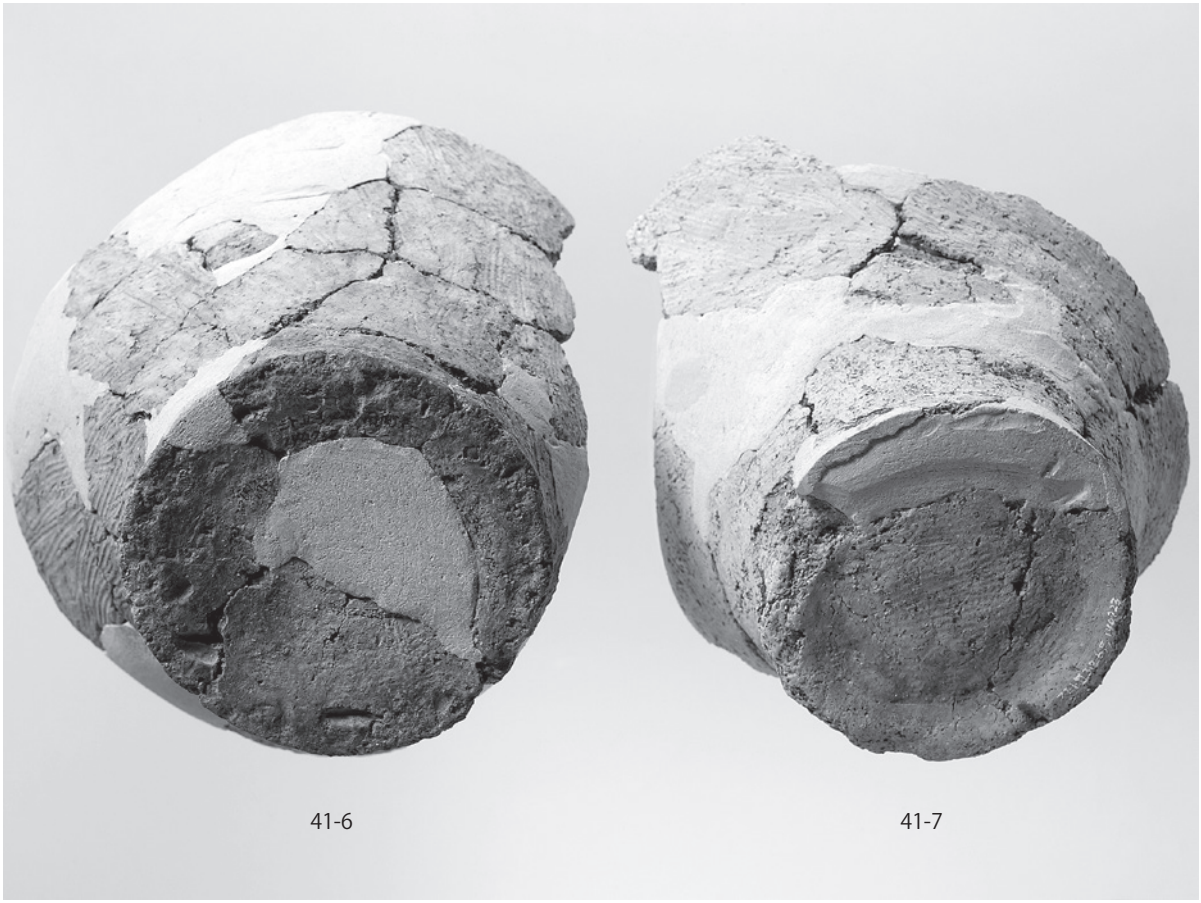
1．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 39 図)



2．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 40 図)

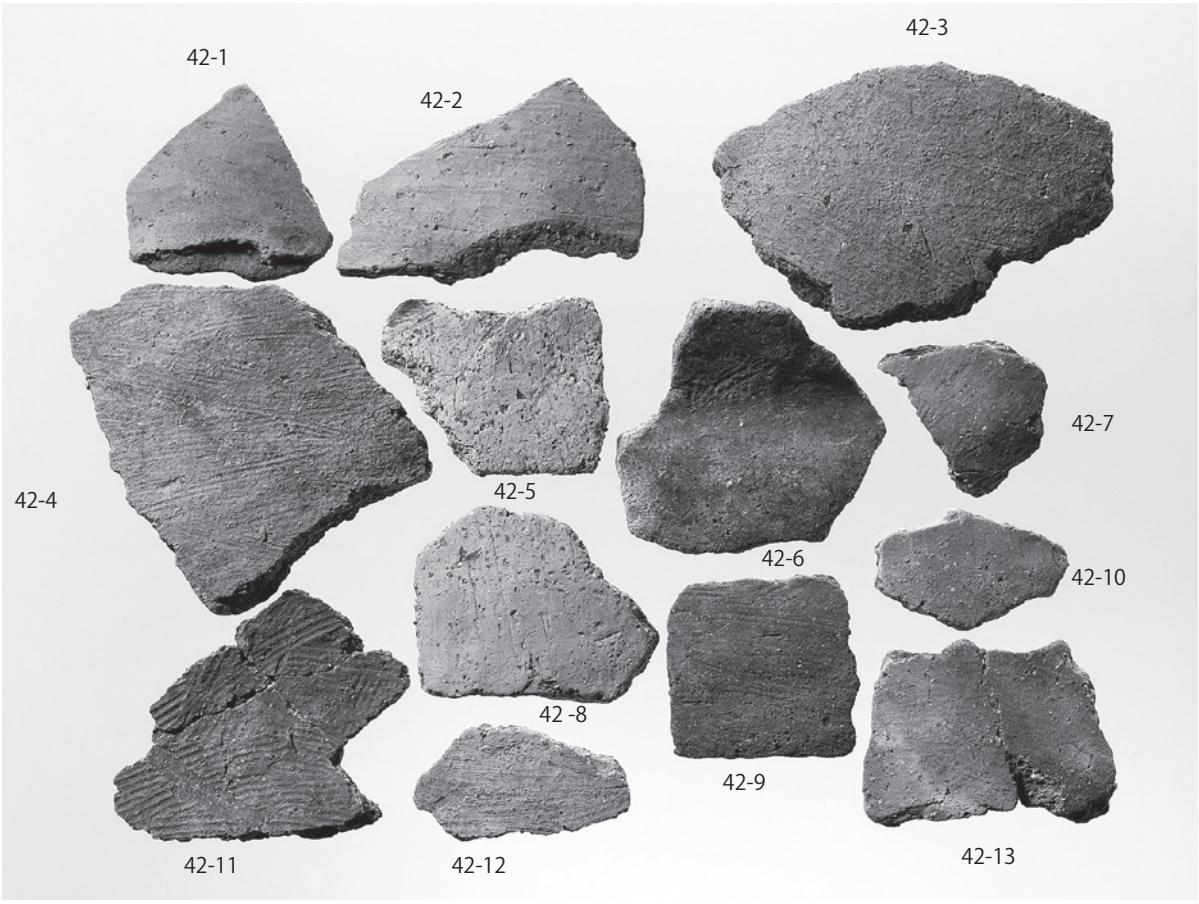


1．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 41 図)



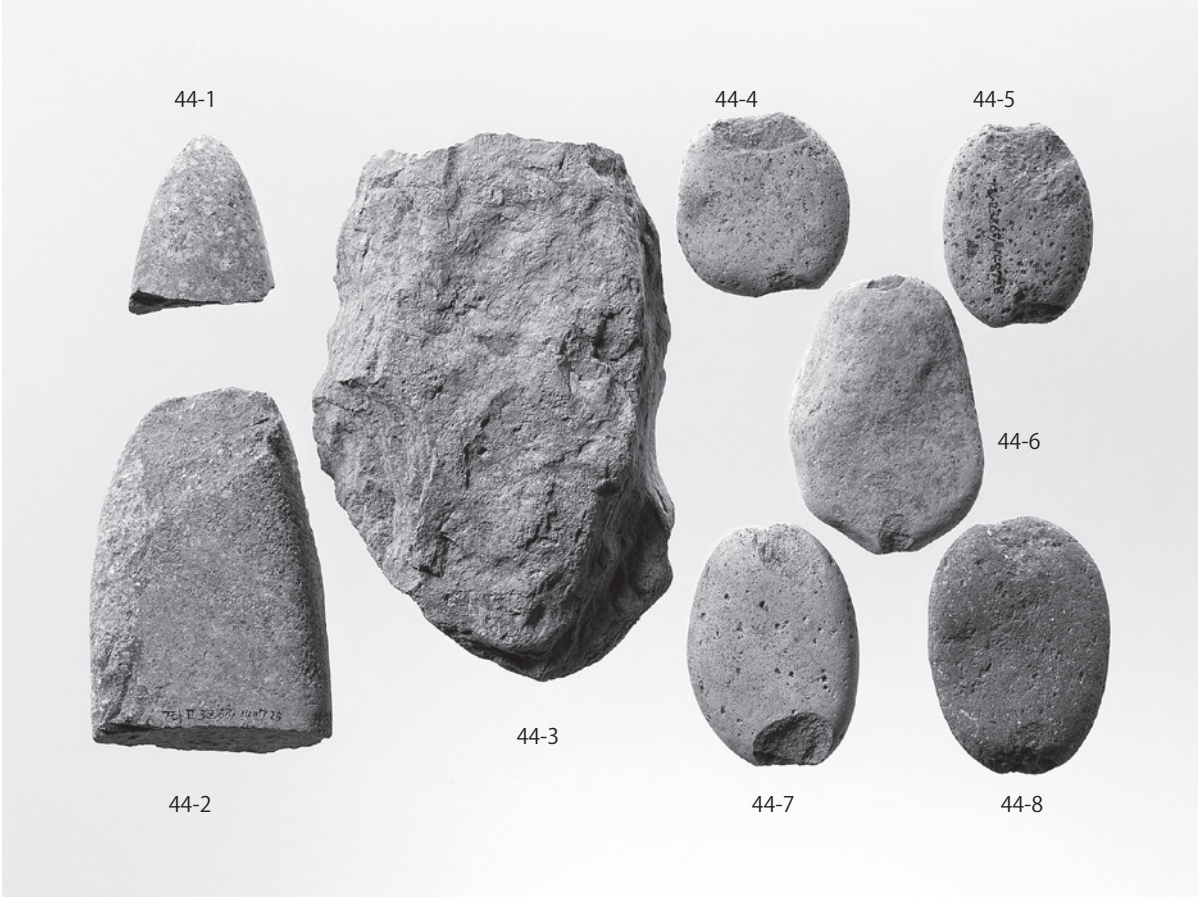
2．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 41 図)

図版 38

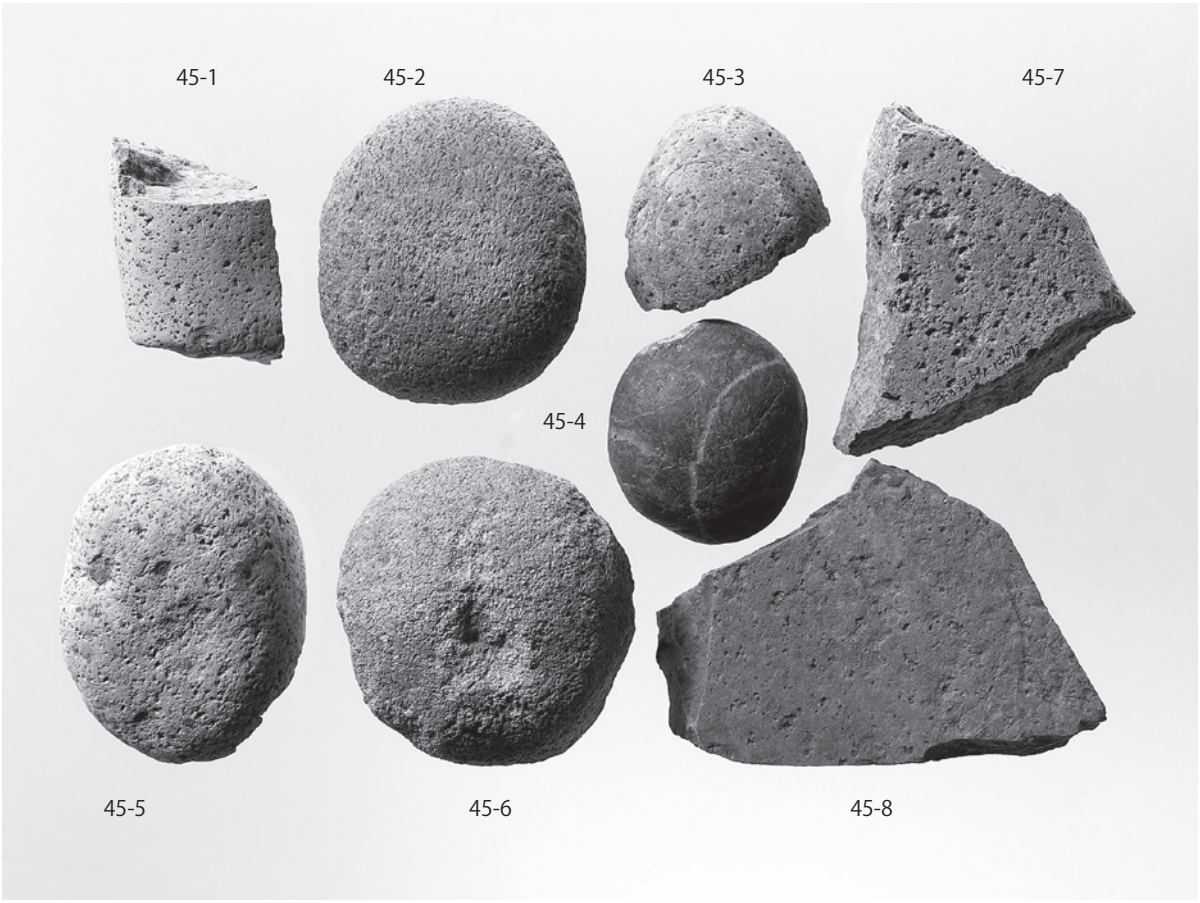


1．3区Ⅳ層出土縄文土器 (第 42 図)

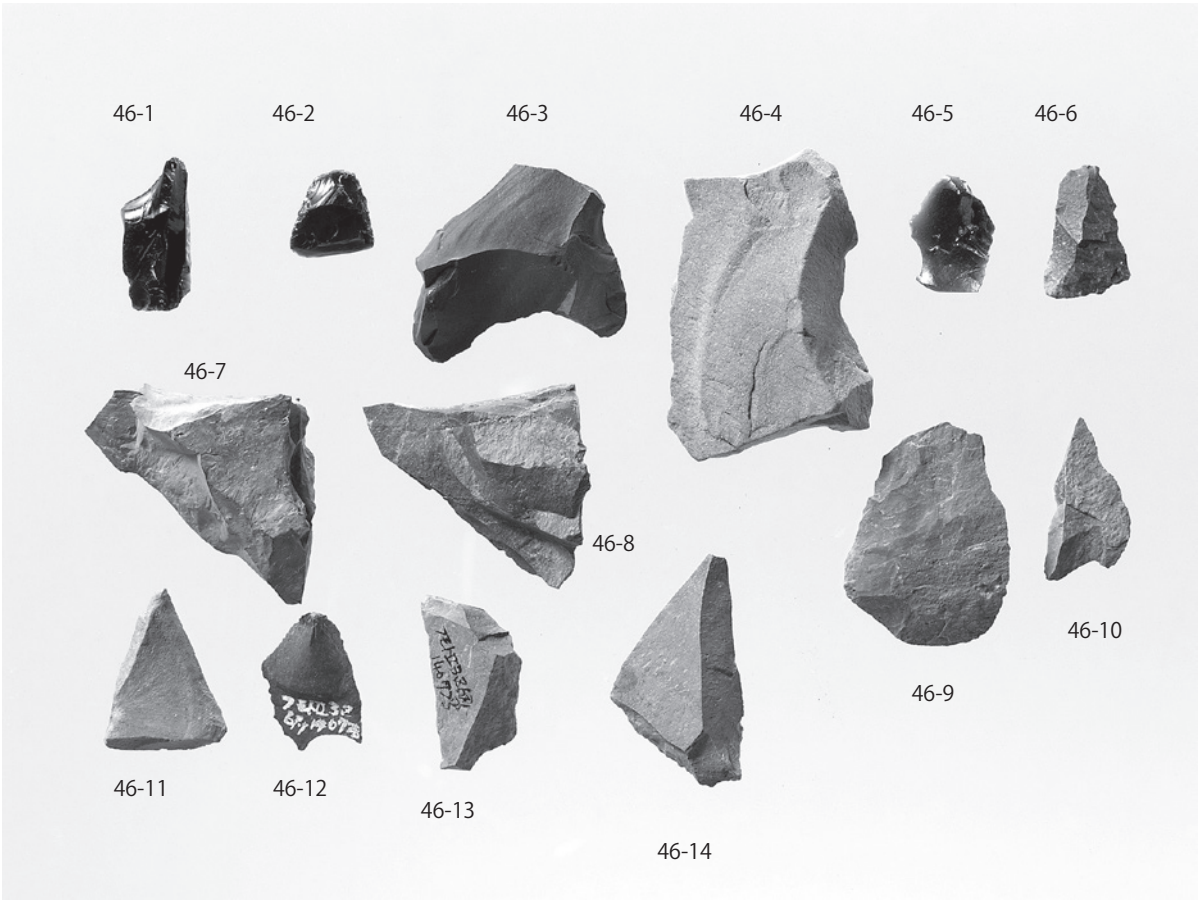
2．3区Ⅳ層出土土製品 (第 43 図)



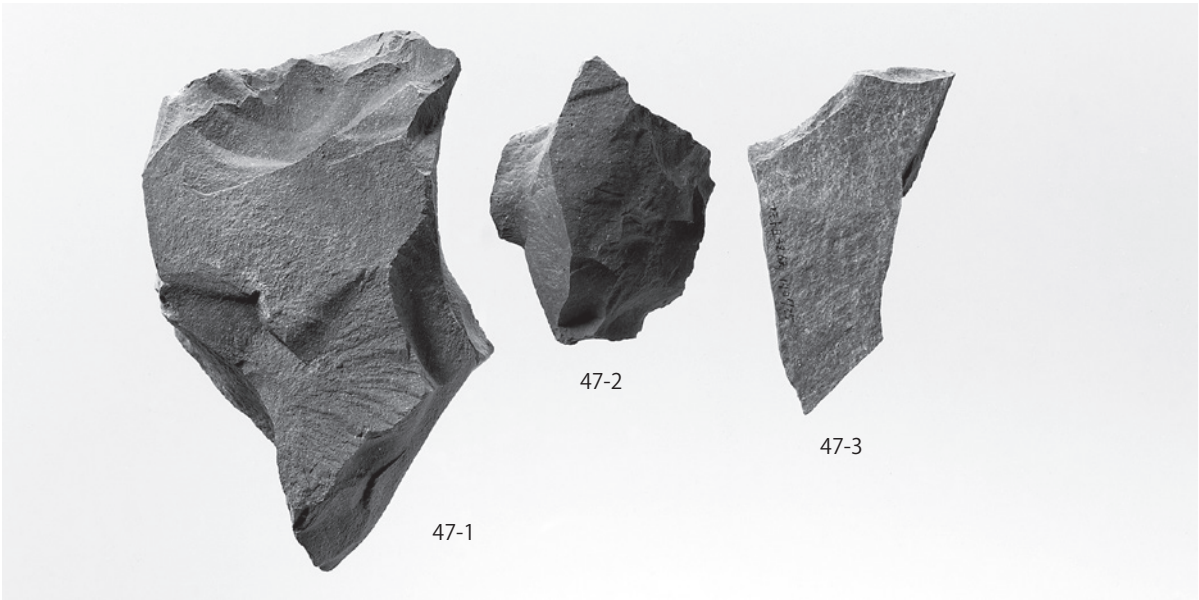
1．3区Ⅳ層出土石器 (第 44 図)

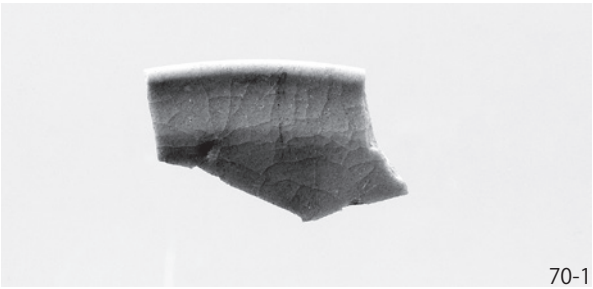


2．3区Ⅳ層出土石器 (第 45 図)



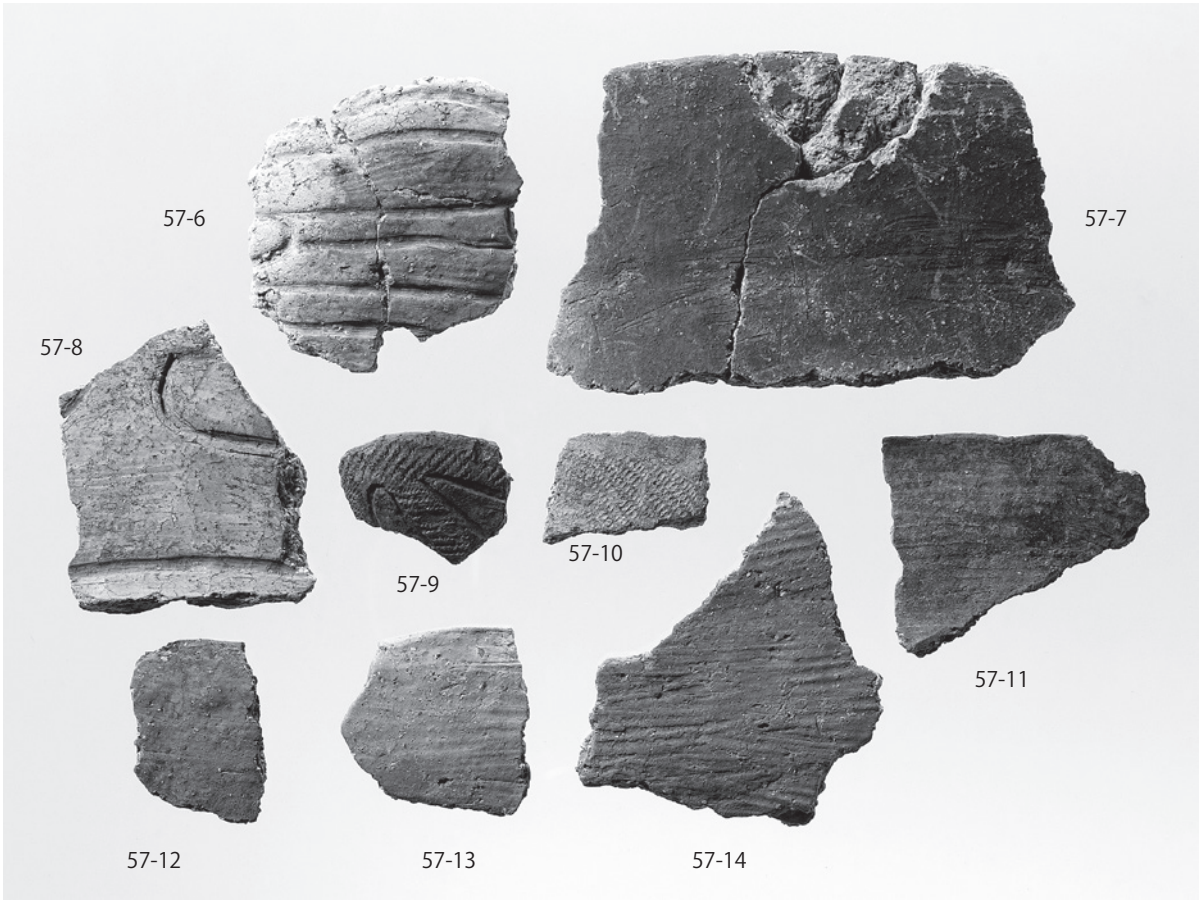
1．3区Ⅳ層出土石器 (第 46 図)



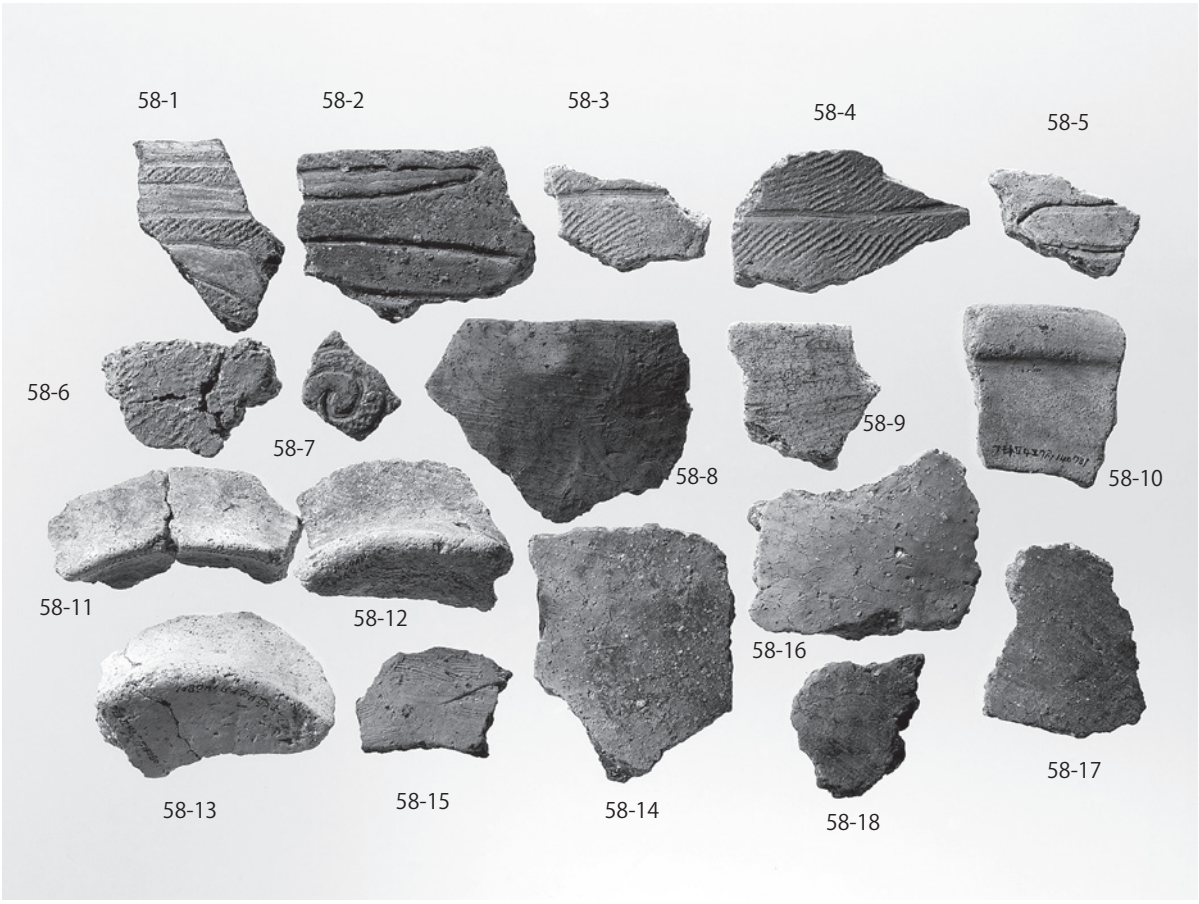


2．3区Ⅳ層出土石器 (第 47 図)・Ⅰ層出土銭貨 (第 55 図)、4区Ⅰ層出土青磁 (第 70 図)

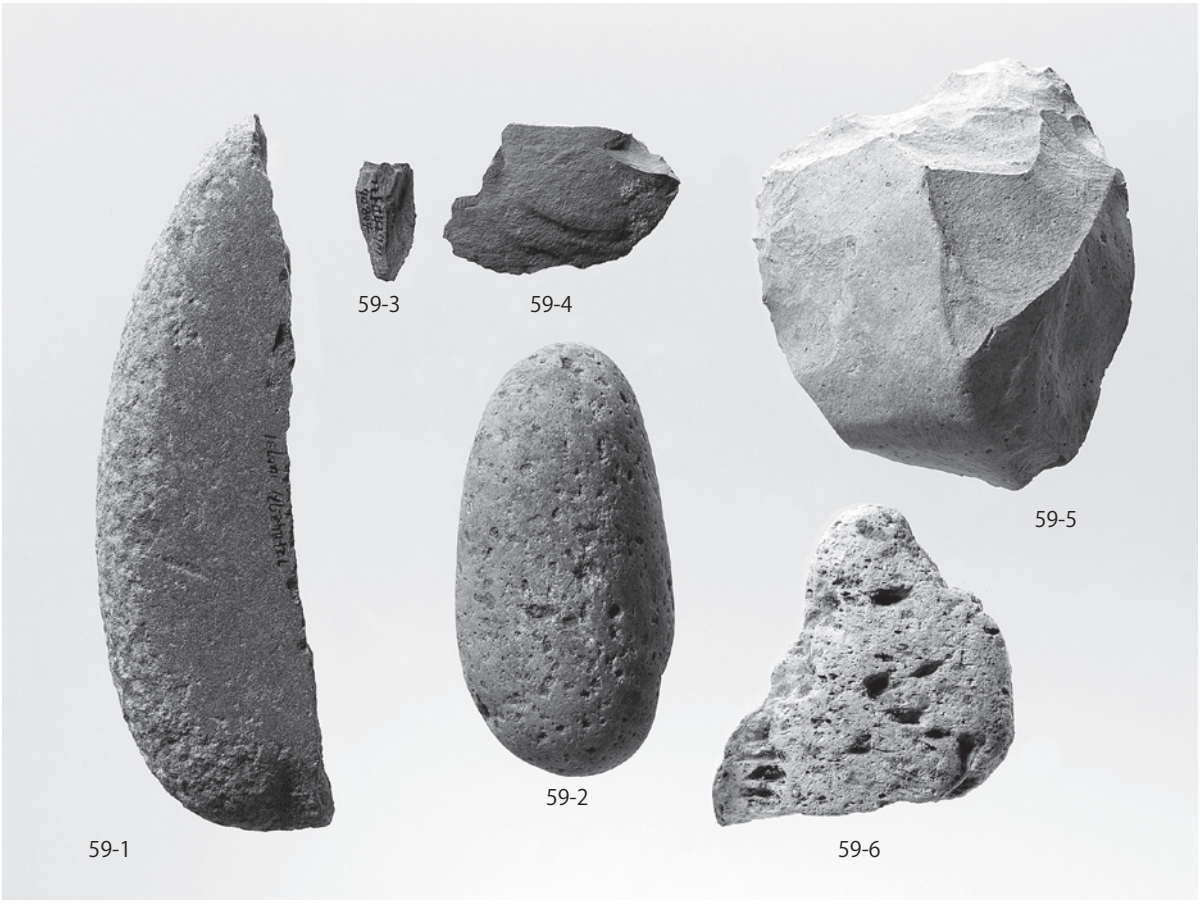
1．4区 SK01・02・04 出土縄文土器 (第 57 図)



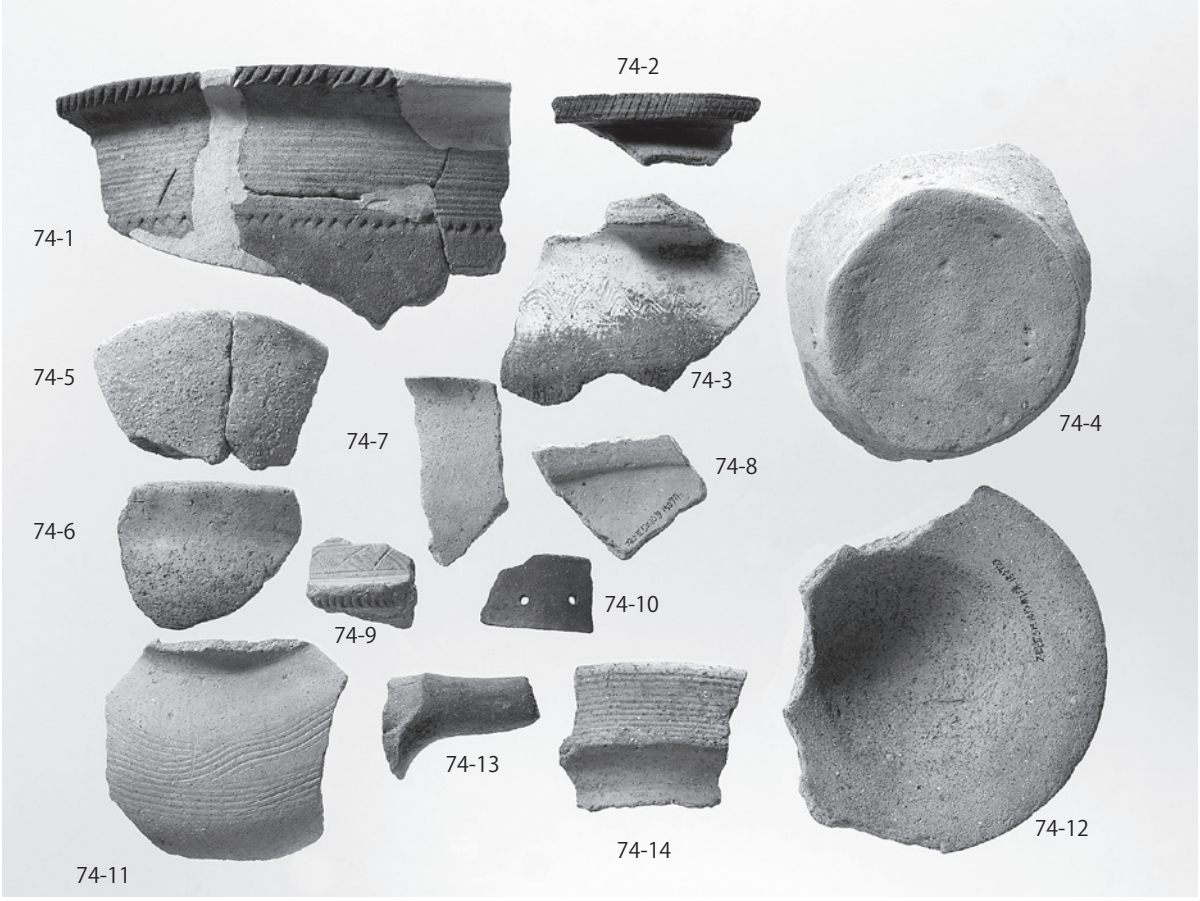
2．4区 SK05・落ち込み・流路跡出土縄文土器 (第 57 図)



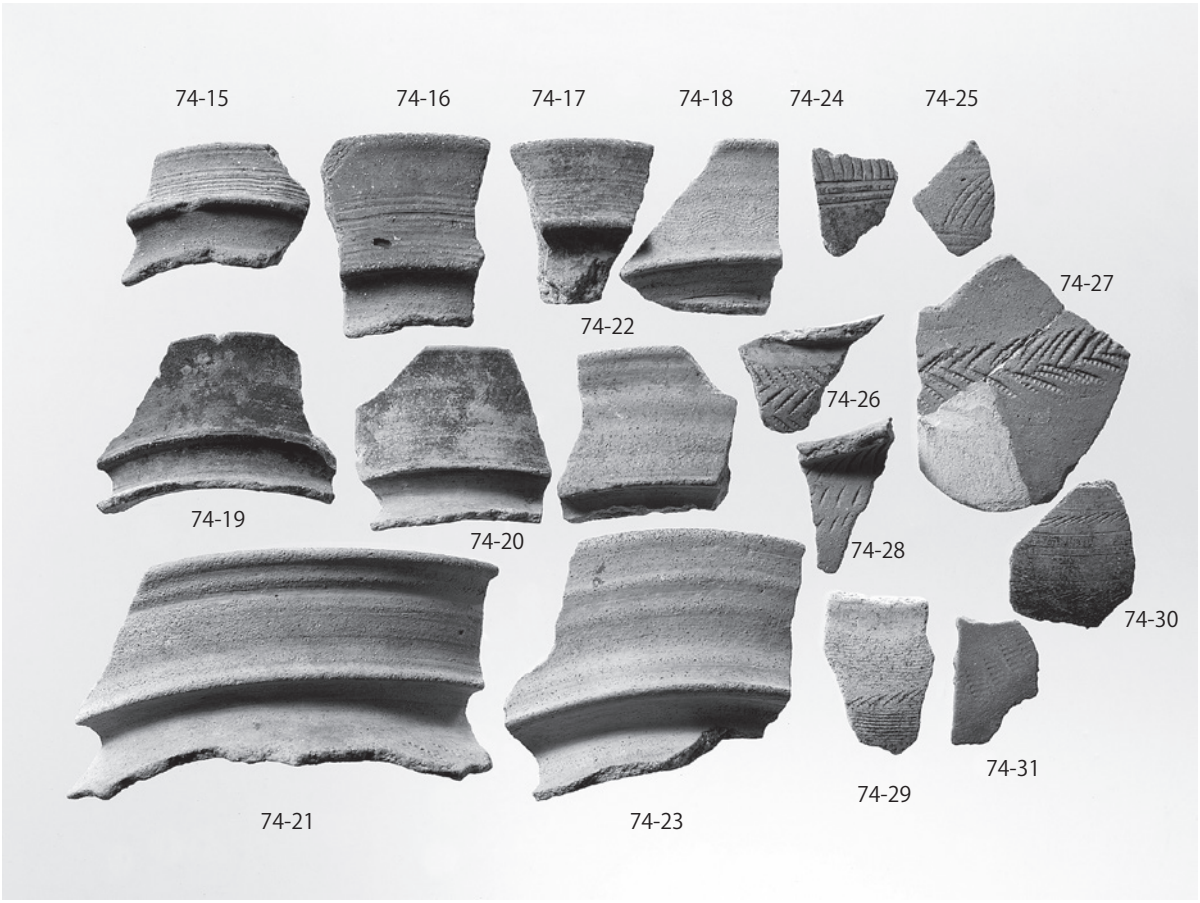
1．4区Ⅲ層出土縄文土器 (第 58 図)



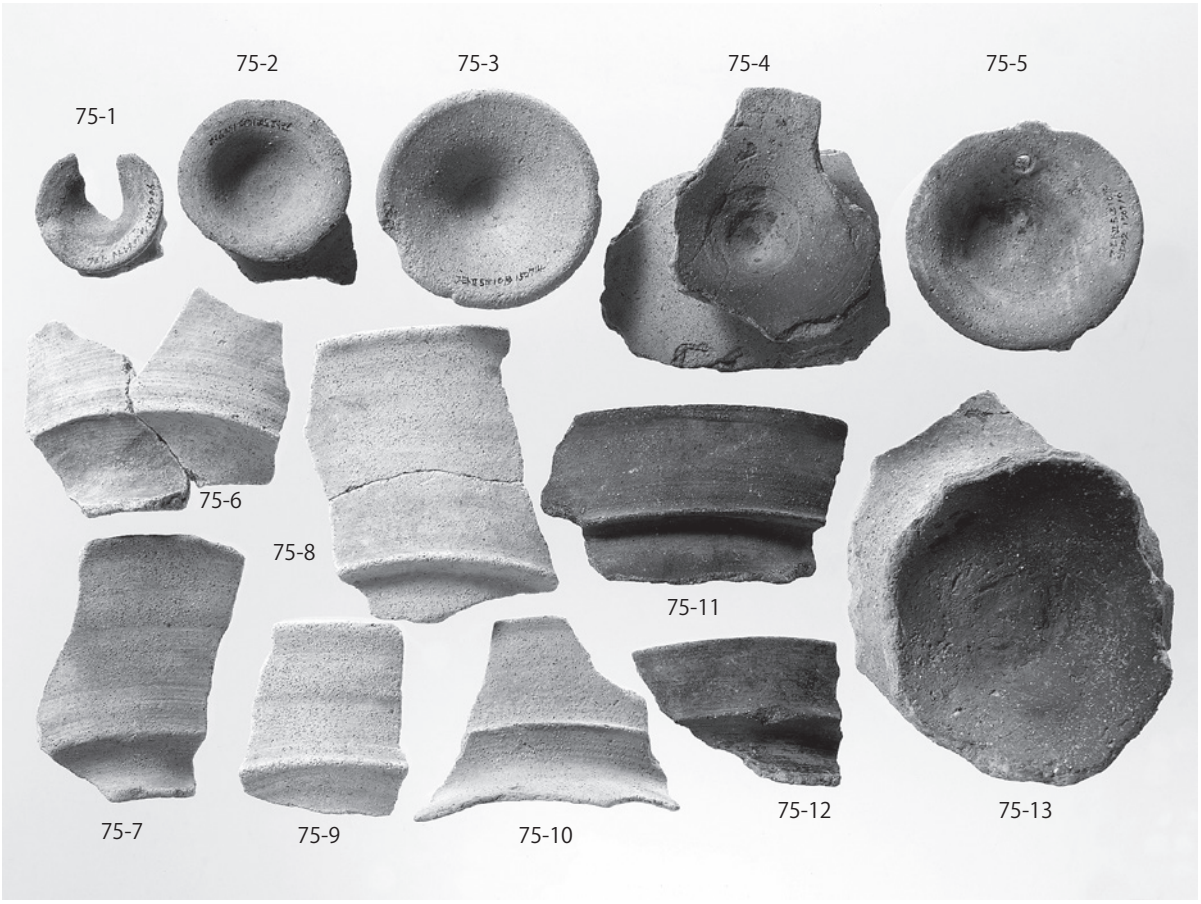
2．4区Ⅲ層出土石器 (第 59 図)



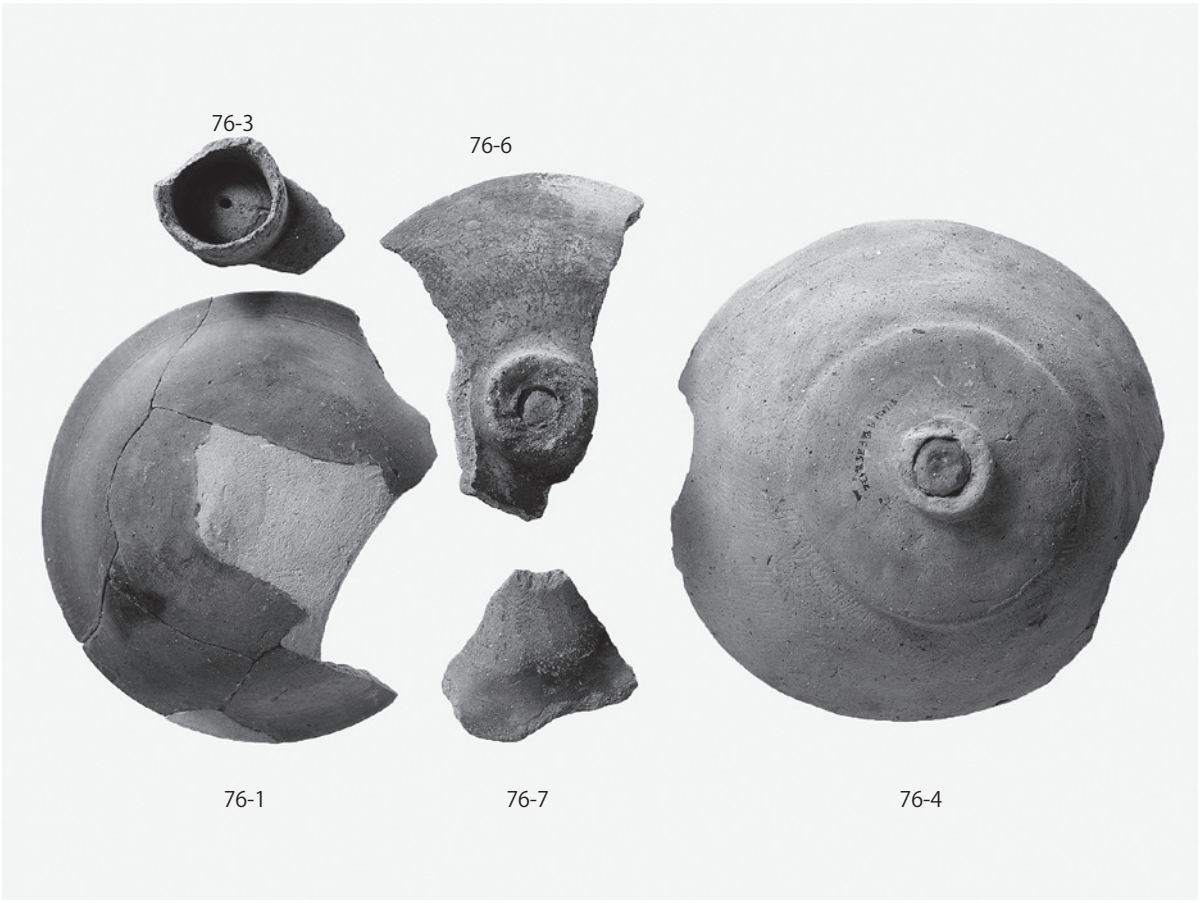
1．5 区 SD01(古) 出土弥生土器 (第 74 図)



2．5 区 SD01(古) 出土弥生土器 (第 74 図)



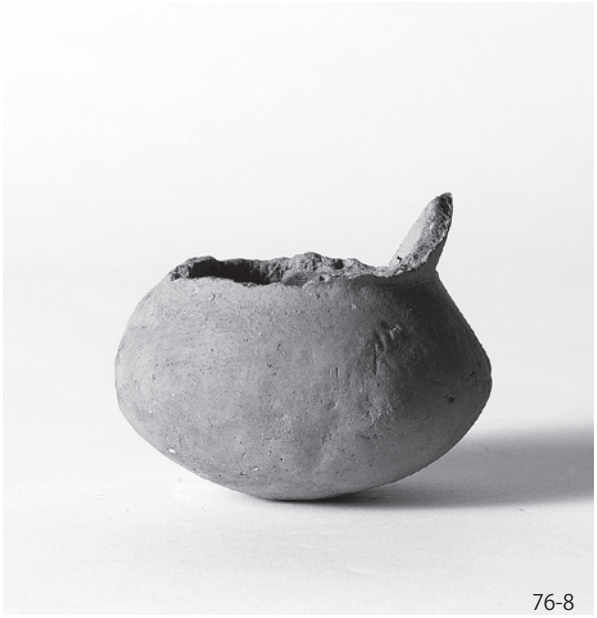
1．5 区 SD01(古) 出土遺物 (第 75 図)



2．5 区 SD01(古) 出土土師器 (第 76 図)

76-2

76-5


76-8

76-9

76-10

76-11

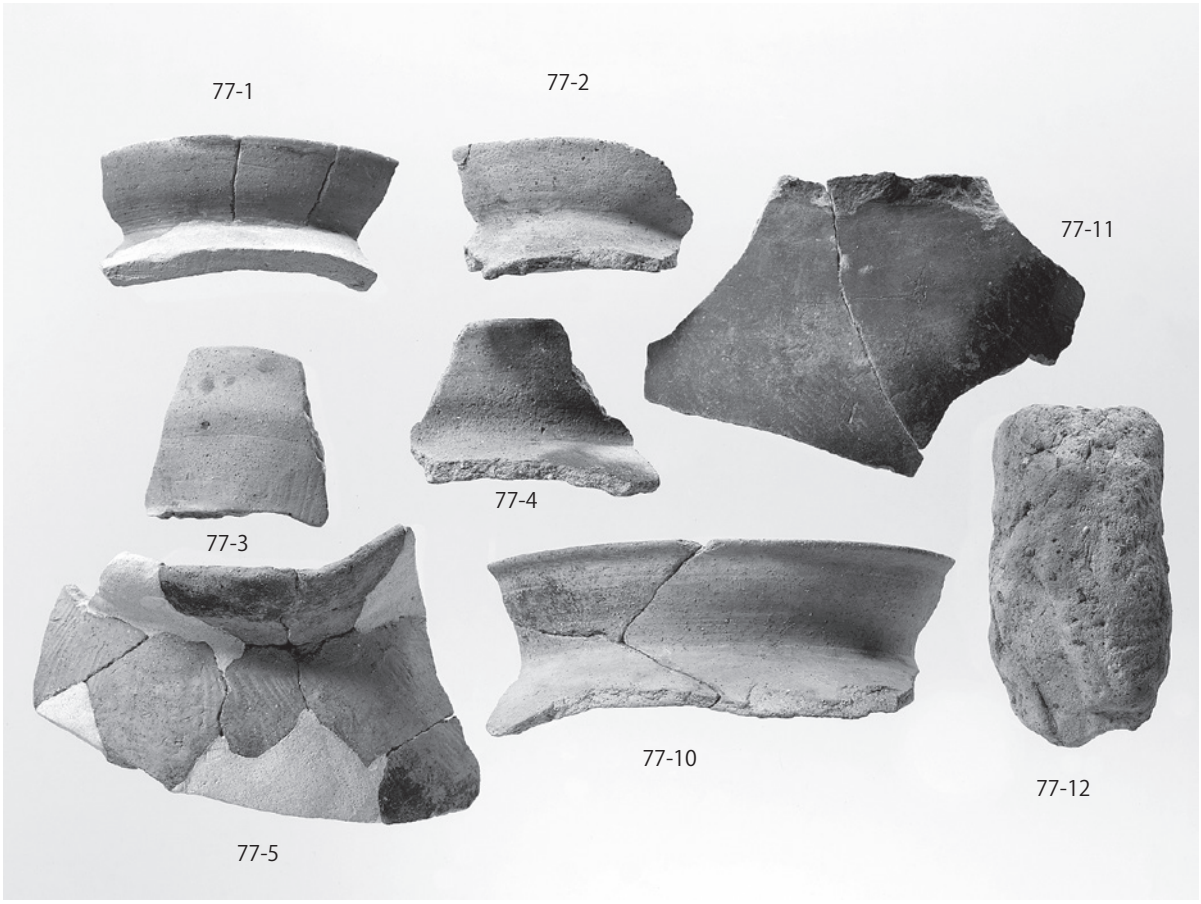
1．5 区 SD01(古) 出土土師器 (第 76 図)

77-6

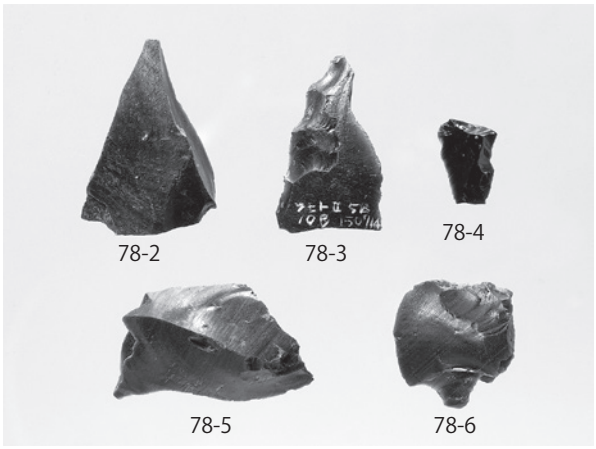
77-7

77-8

1．5 区 SD01(古) 出土土師器 (第 77 図)



1．5 区 SD01(古) 出土土師器 (第 77 図)



2．5 区 SD01(古) 出土土師器 (第 77 図)・石器 (第 78 図)

79-1

79-2

79-3

79-4

79-5

79-6

79-7

79-8

1．5 区 SD01(古) 出土木製品 (第 79 図)

79-9

79-10

80-1

80-2

80-4

80-3

81-2

1．5 区 SD01(古) 出土木製品 (第 79・80 図)

81-3

82-1

82-2

82-3

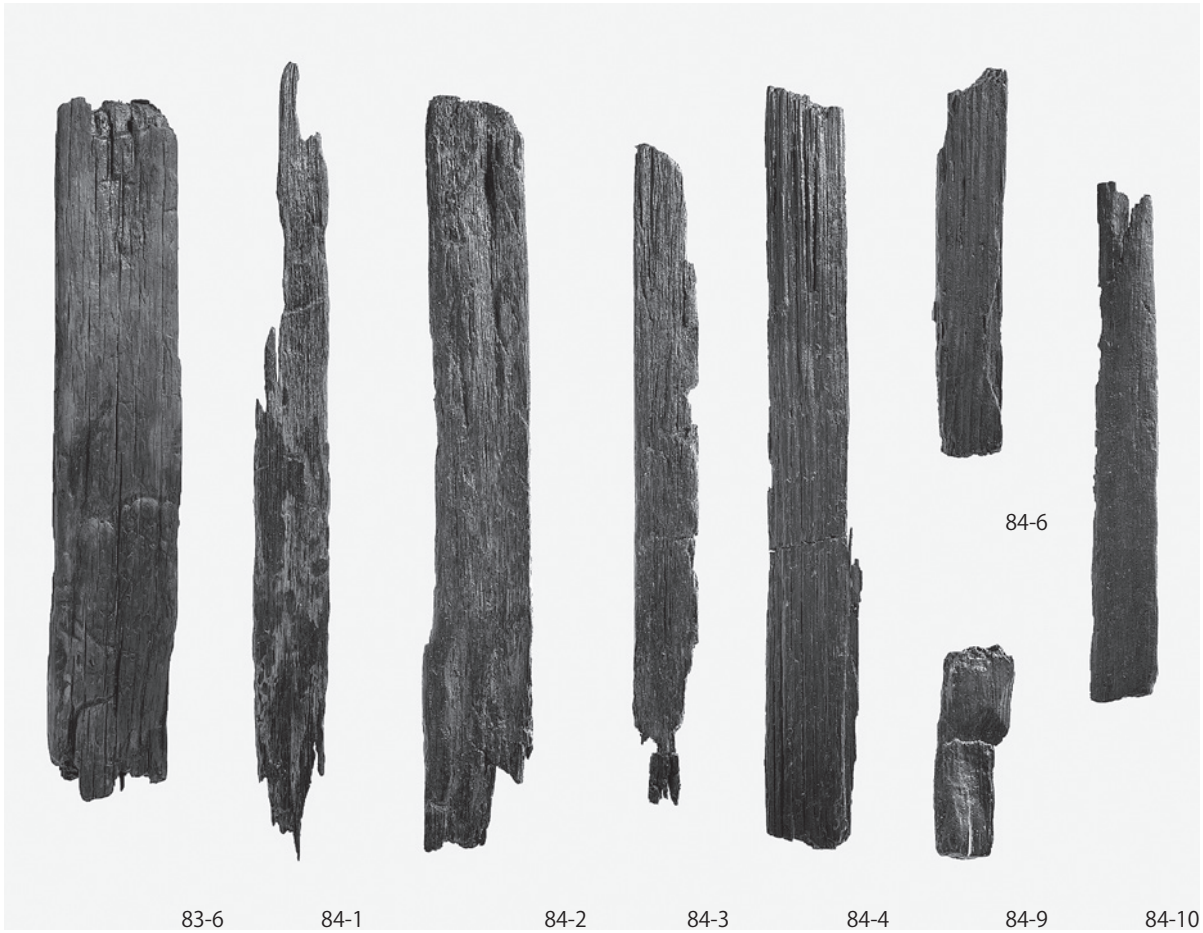
82-4

81-4

83-1

1．5 区 SD01(古) 出土木製品 (第 81 ～ 83 図)

1．5 区 SD01(古) 出土木製品 (第 81・83 図)



1．5 区 SD01(古) 出土木製品 (第 83・84 図)

84-15

85-1

85-2

85-6

85-3

85-4

85-5

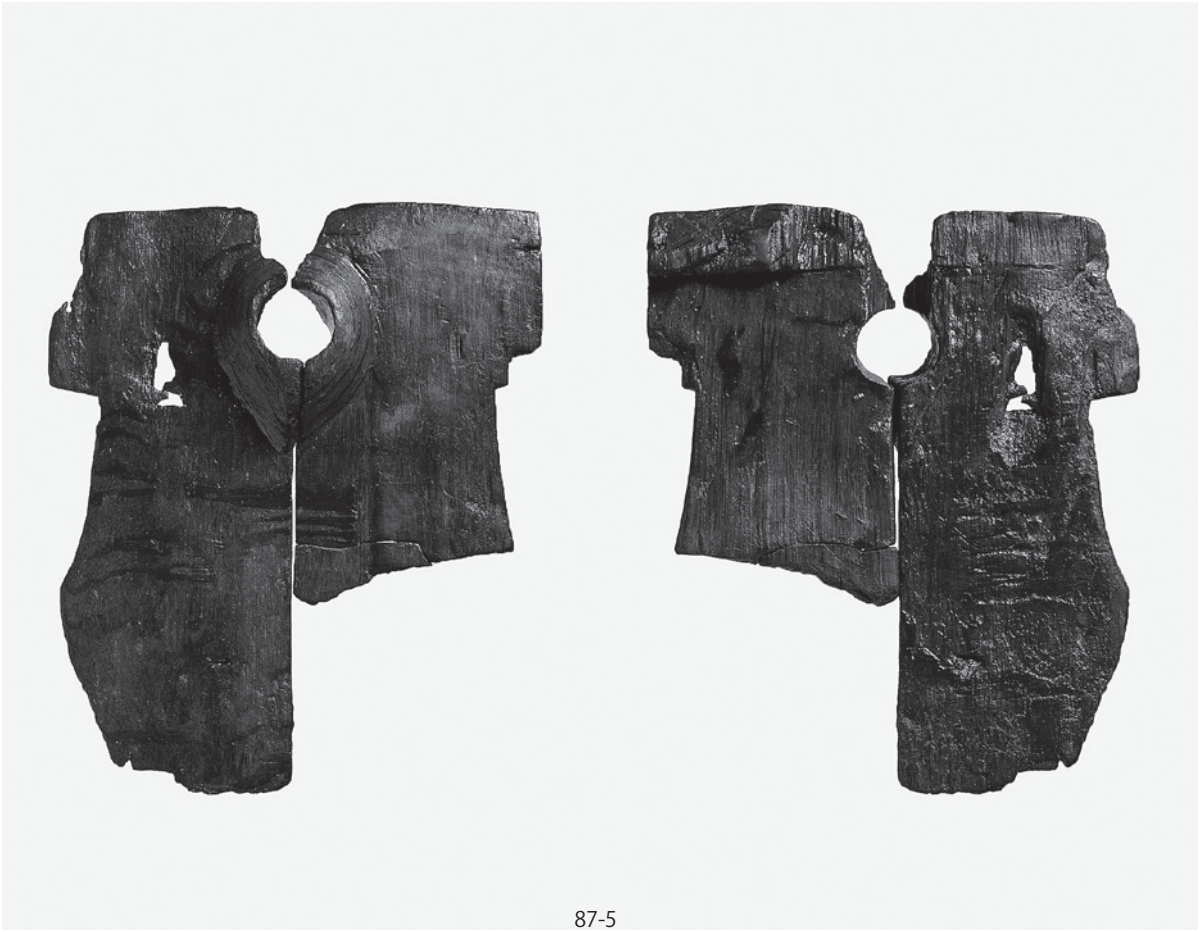
1．5 区 SD01(古) 出土木製品 (第 84・85 図)

87-1

87-2

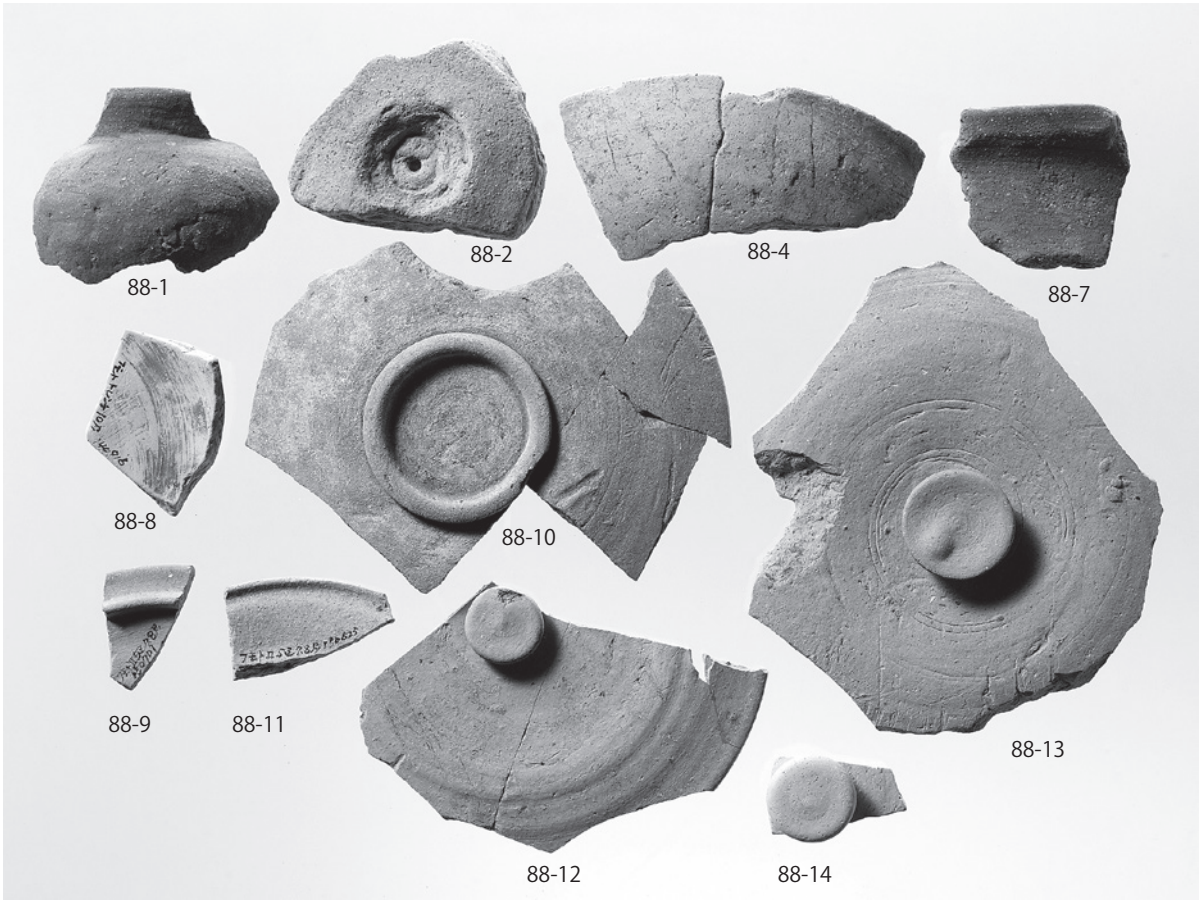
87-3

87-4



87-5

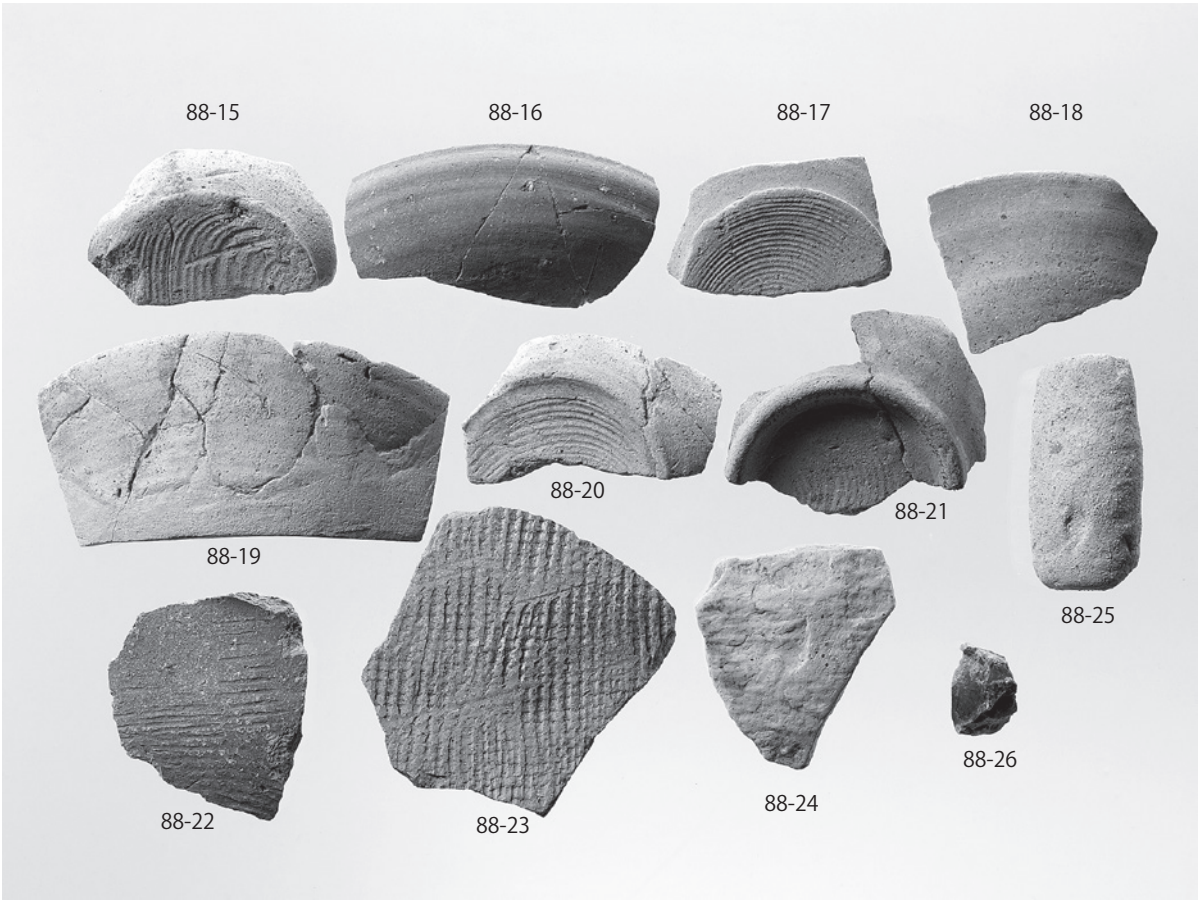
1．5 区 SD02 出土縄文土器・石器・木製品 (第 87 図)



1．5区Ⅲ層出土土師器・須恵器 (第 88 図)

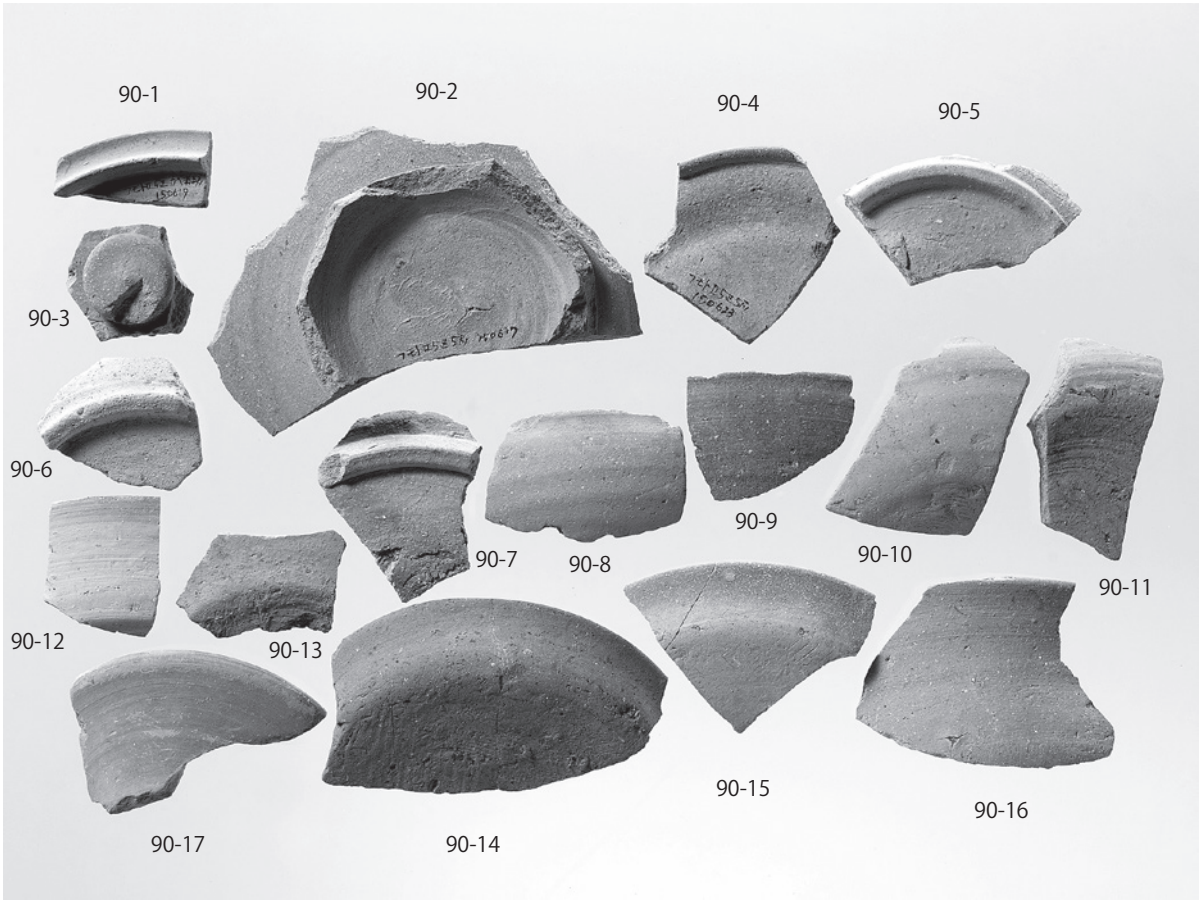
1．5区Ⅲ層出土土師器 (第 88 図)

図版 56

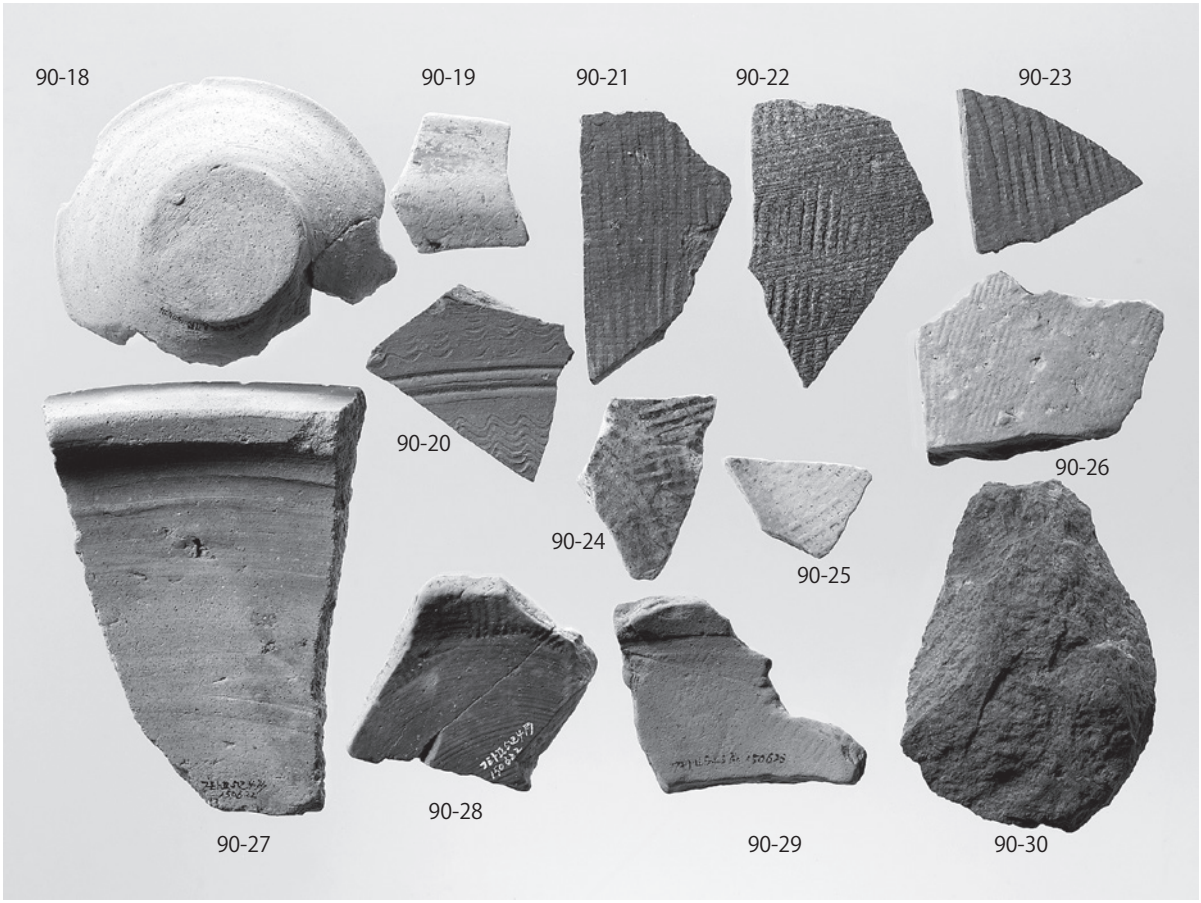


1．5区Ⅲ層出土遺物 (第 88 図)

1．5区Ⅲ層出土木製品 (第 89 図)・Ⅱ層出土白磁

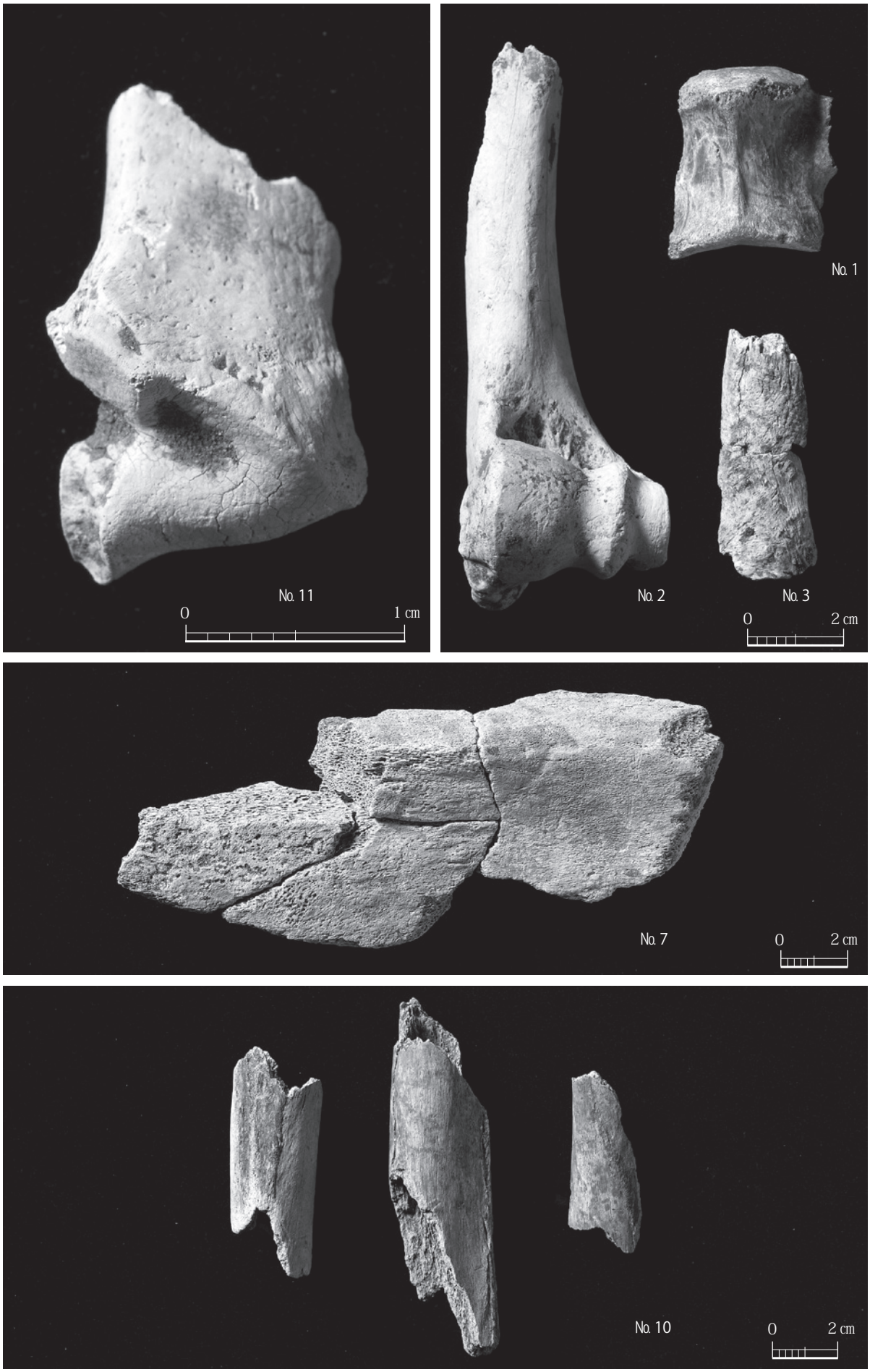


1．5区Ⅱ層出土須恵器 (第 90 図)



2．5区Ⅲ層出土土師器・須恵器・瓦質土器・石器 (第 90 図)

図版 58



1．麓Ⅱ遺跡出土 動物遺存体

1．坂本谷遺跡遠景 (上空：西から)

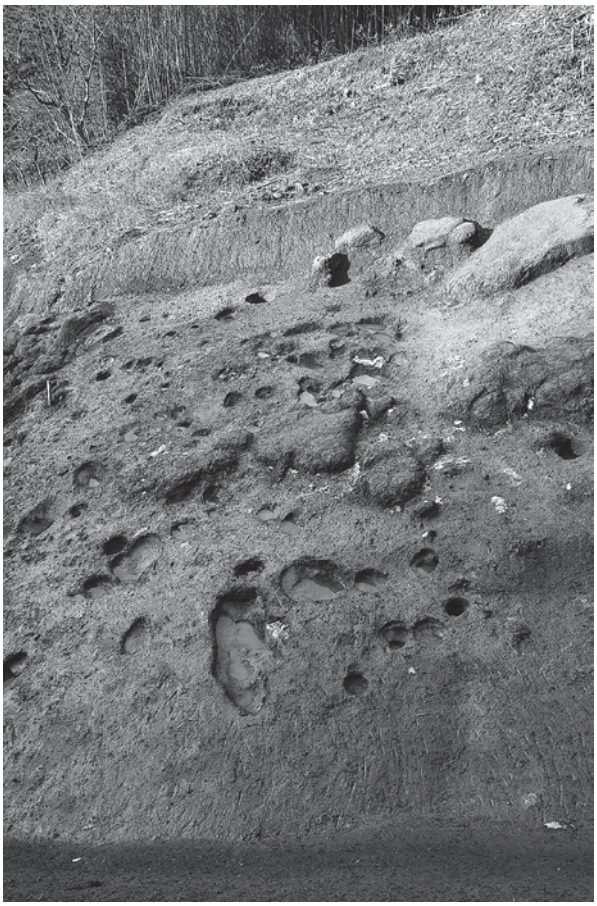
2．坂本谷遺跡遠景 (上空：東から)

図版 60

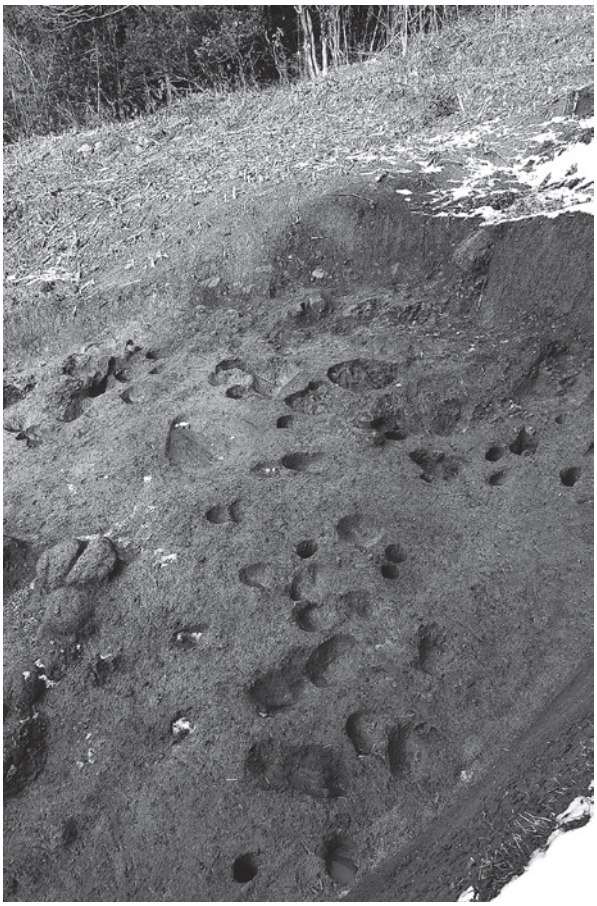
1．調査区南東壁土層堆積状況 (西から)

2．調査区南東壁土層堆積状況 (西から)

1．斜面ピット群検出状況 (南西から)



2．斜面ピット群完掘状況 (南から)

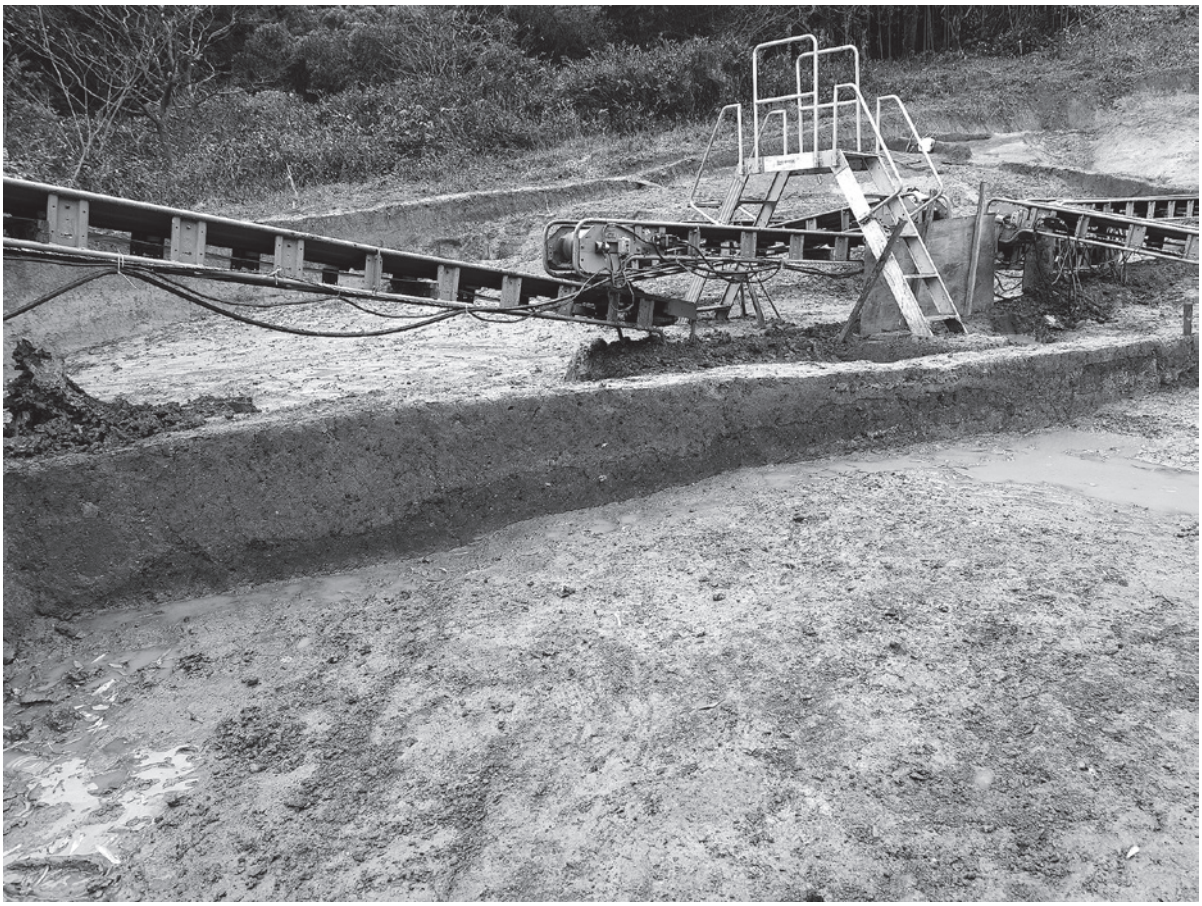


3．斜面ピット群完掘状況 （ 南西から)

図版 62

1．Cラインベルト中央土層堆積状況 (南から)

2．Cラインベルト西側土層堆積状況 (南から)



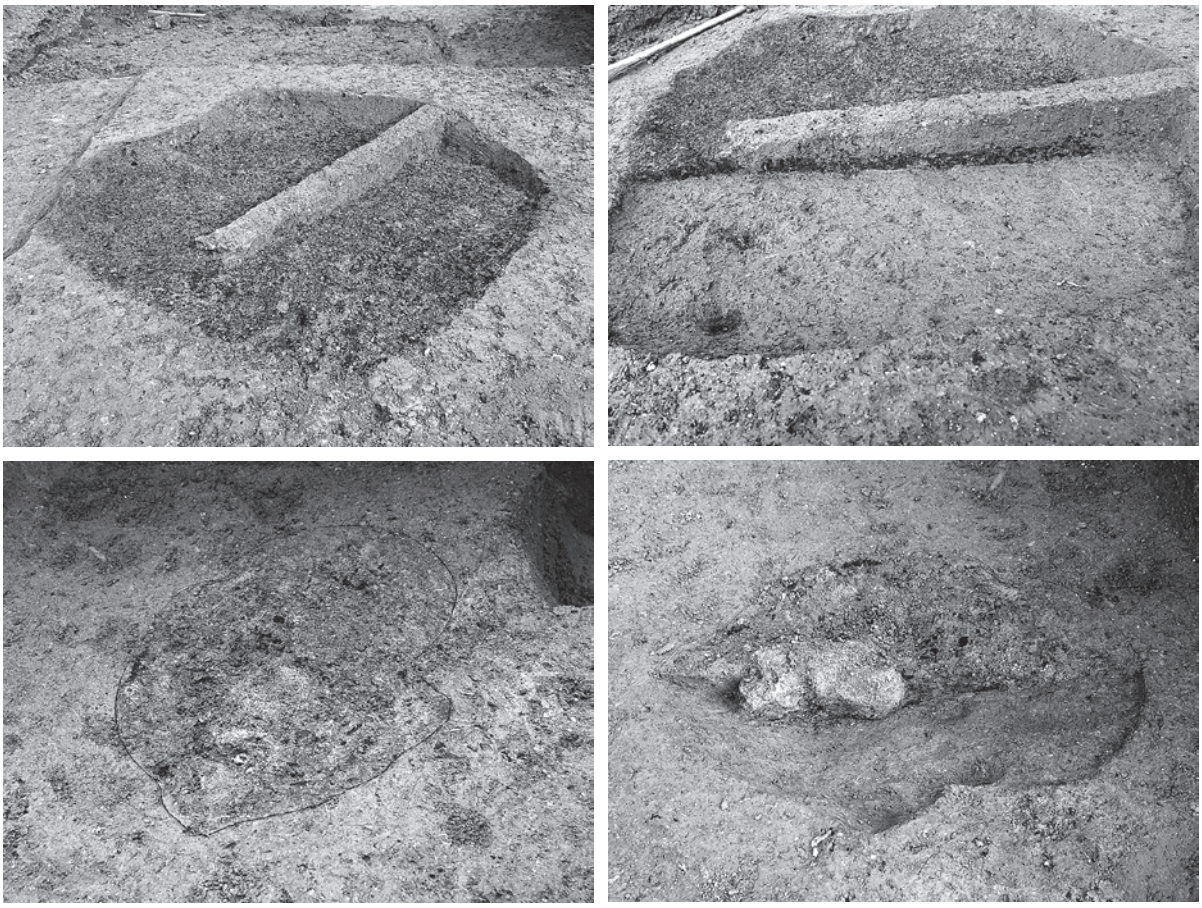
1．Cラインベルト西側土層堆積状況 (南から)

2．3ラインベルト南半土層堆積状況 (南東から)

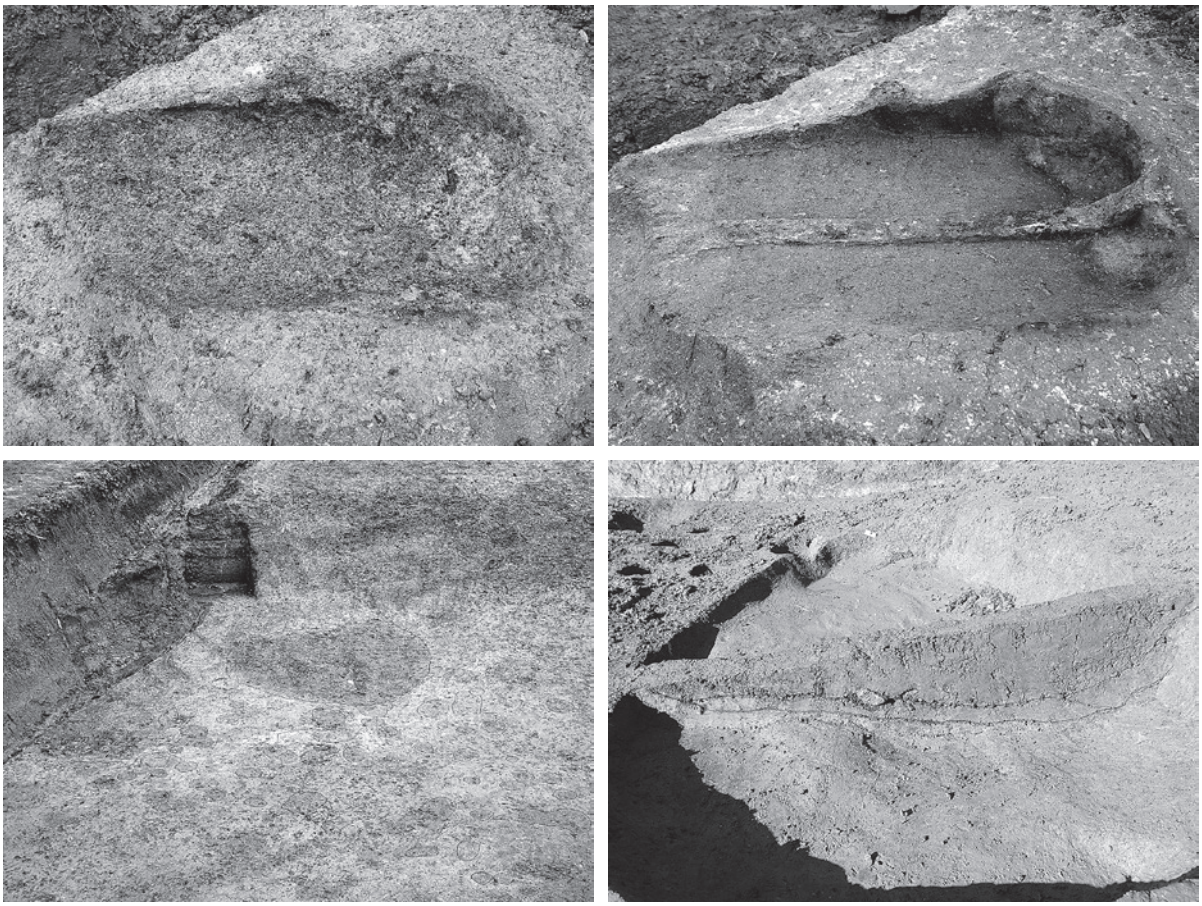
図版 64

1．3 ラインベルト北半土層堆積状況 (南東から)

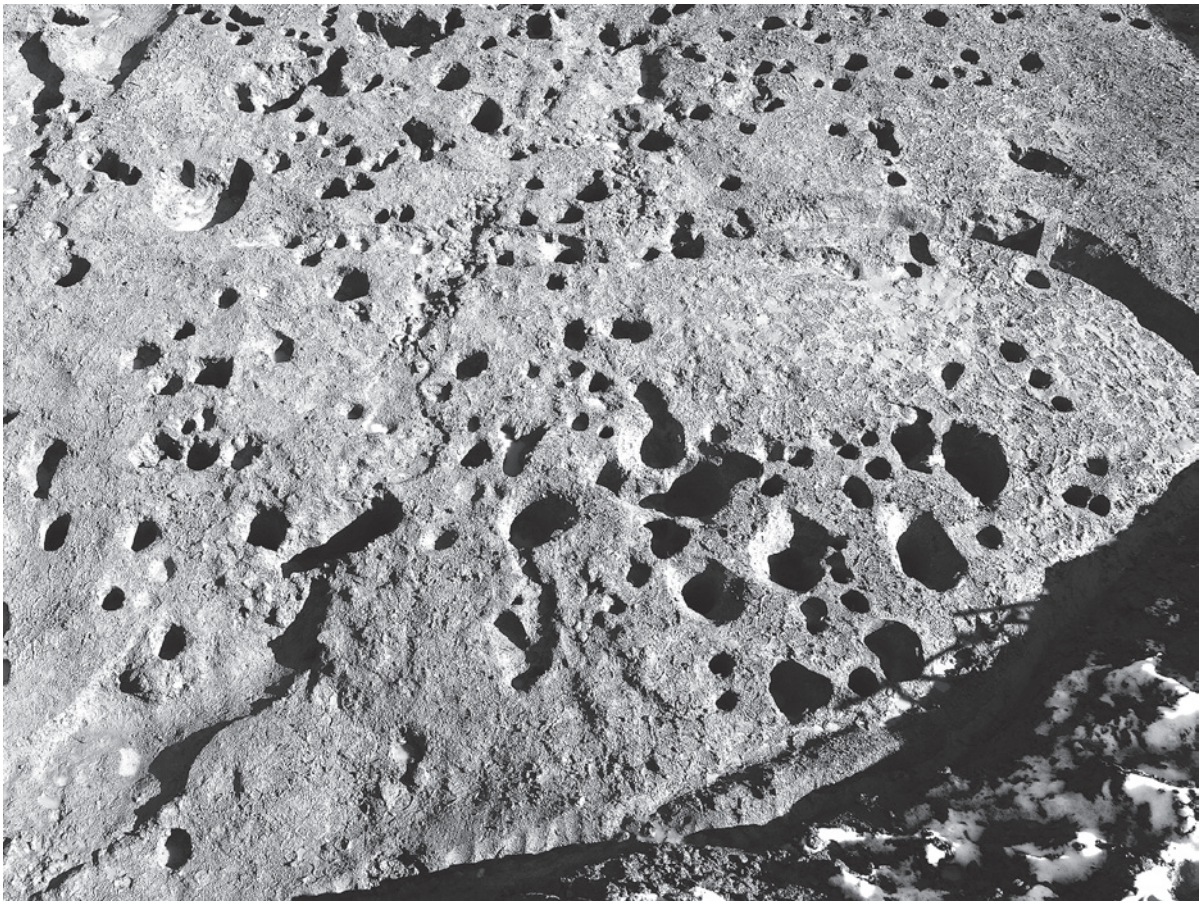
2．平坦部遺構検出状況 (南西から)



1．SK01(上)・02(下) 調査状況



2．SK03(上)・05(下) 調査状況



1．SB05 完掘状況 (西から)

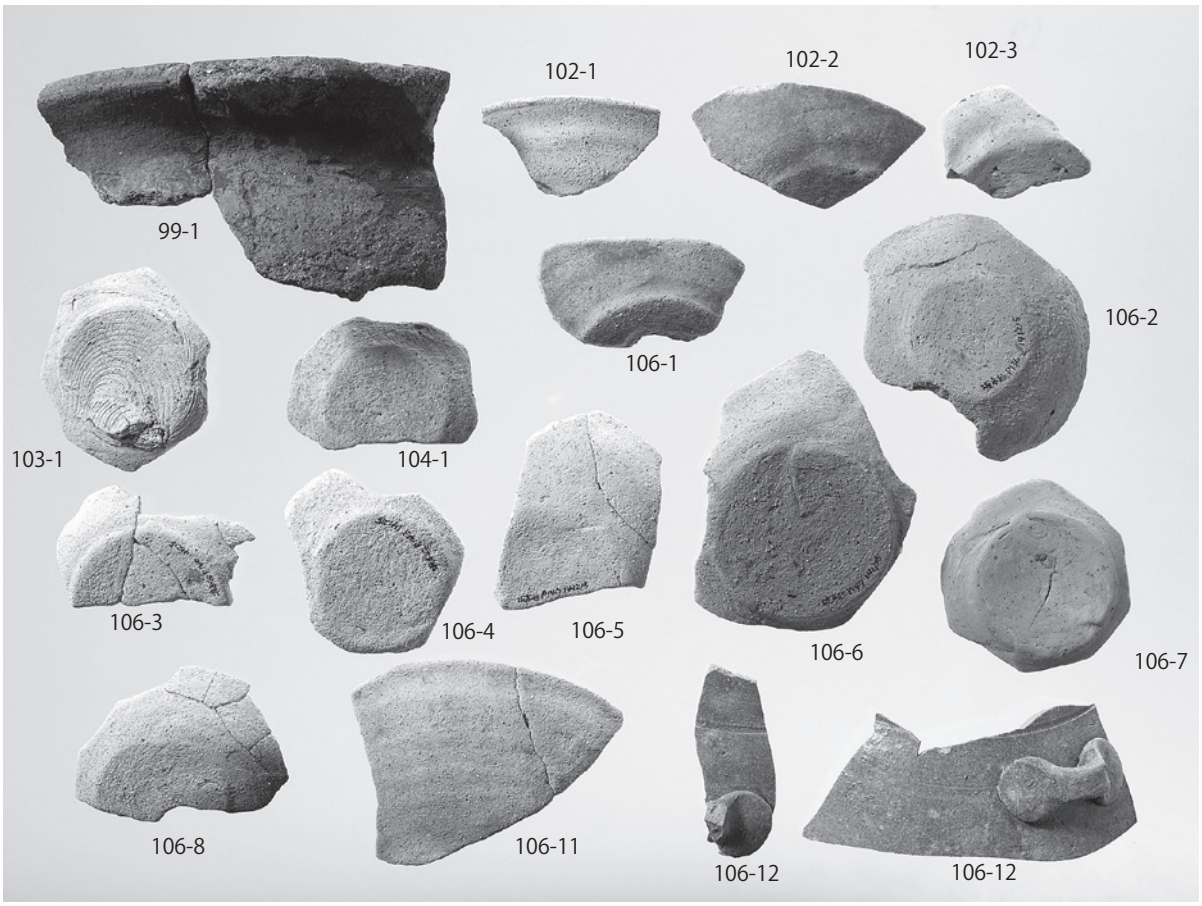
2．SB07 完掘状況 (西から)

1．SB03・08 完掘状況 (西から)

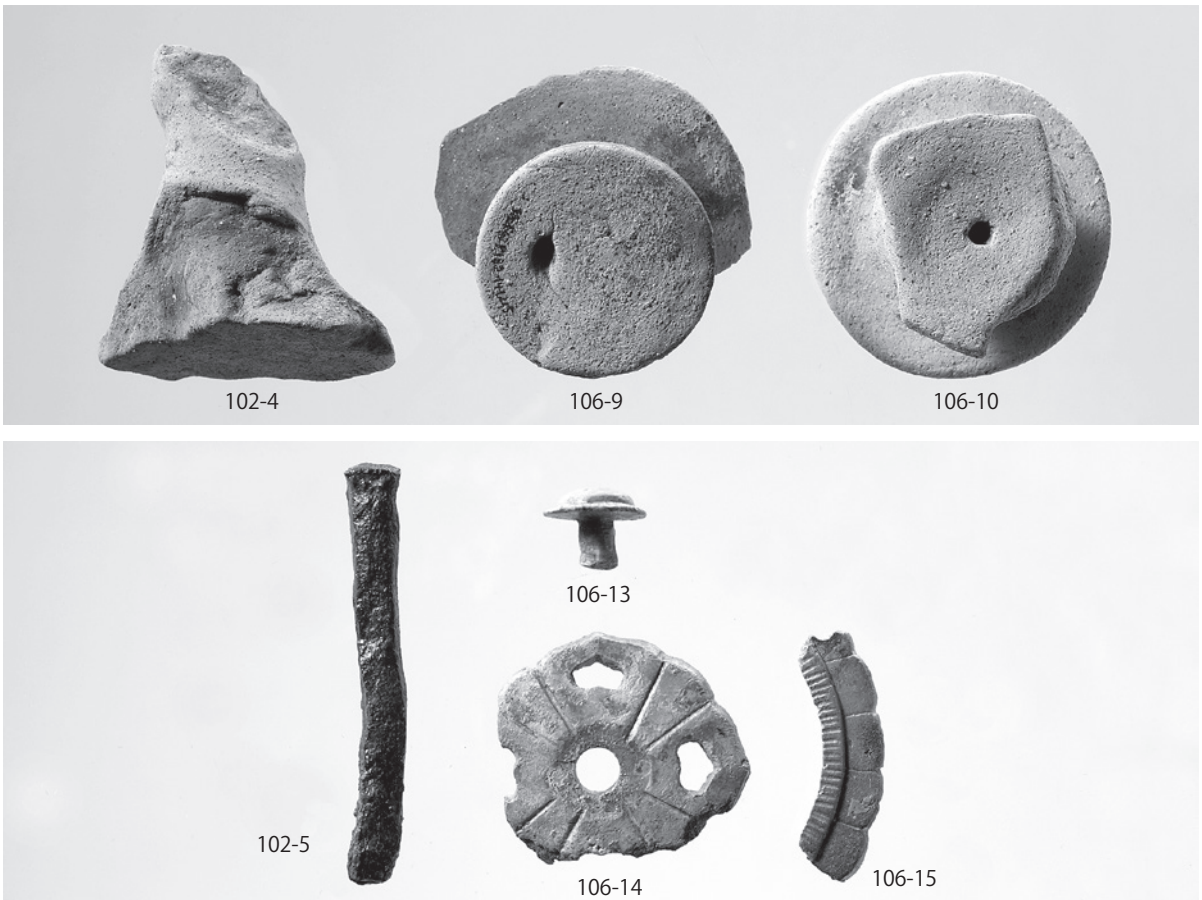
2．SB07 周辺 P382・383 遺物出土状況 (南から)

図版 68

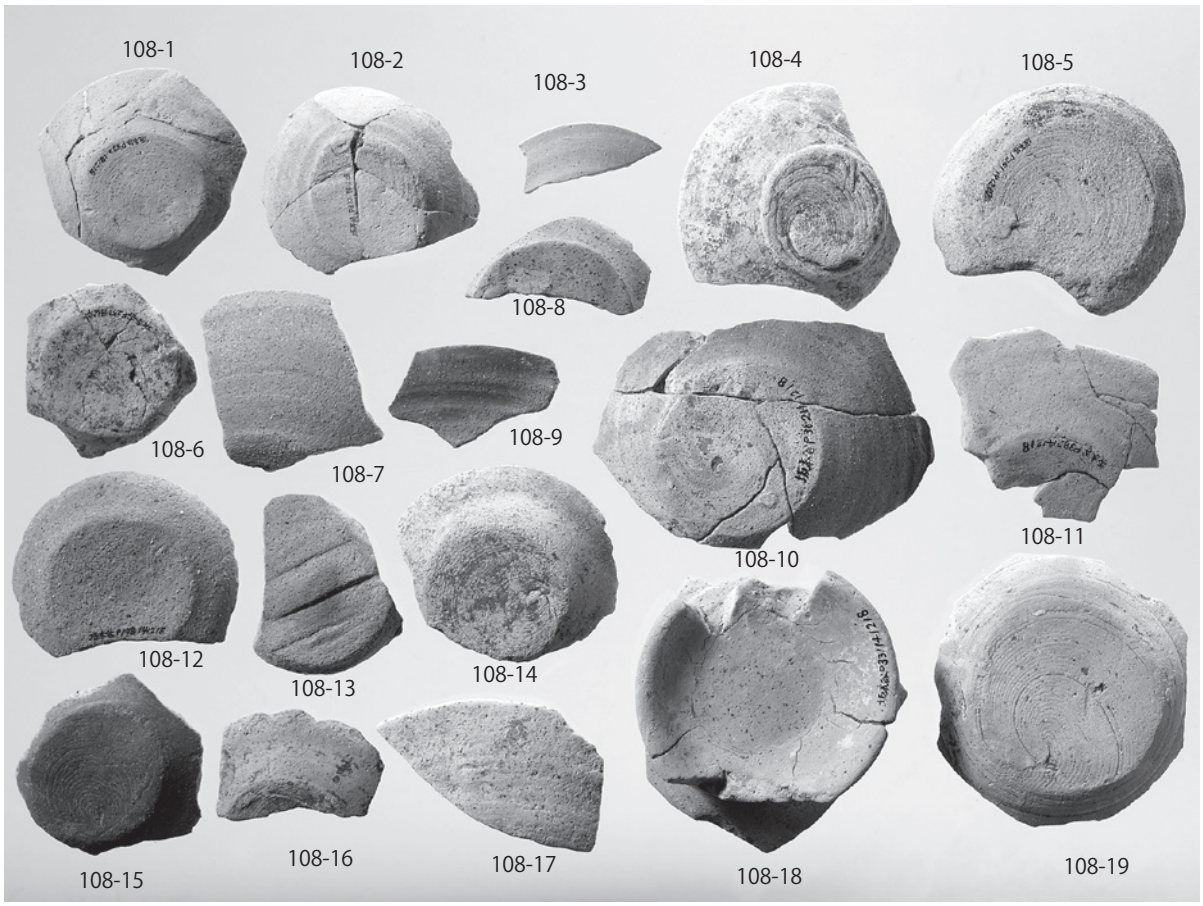
1．完掘状況 (西から)



1．斜面 P123・平坦部建物周辺遺構出土遺物 (第 99・102 ～ 104・106 図)

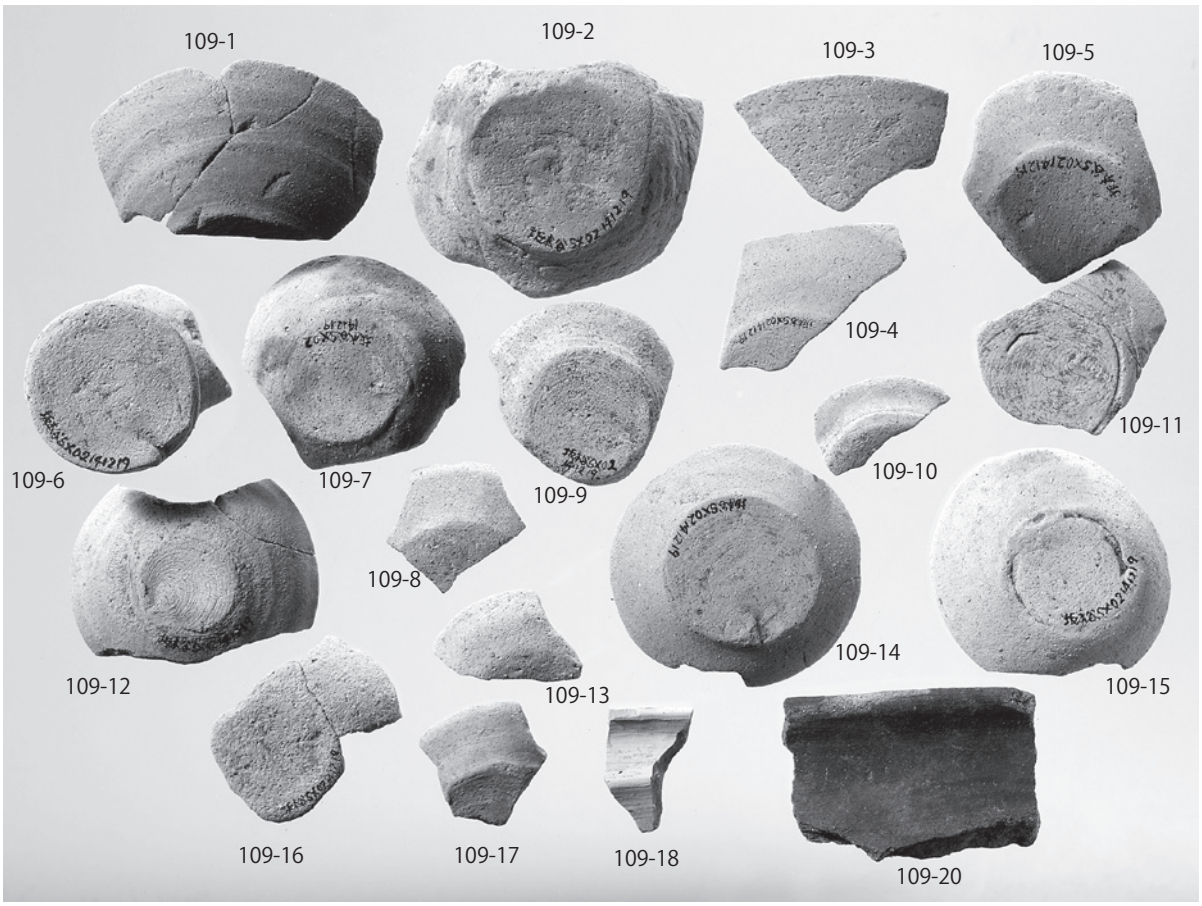


1．SB05・02 周辺ピット出土遺物 (第 102・106 図)

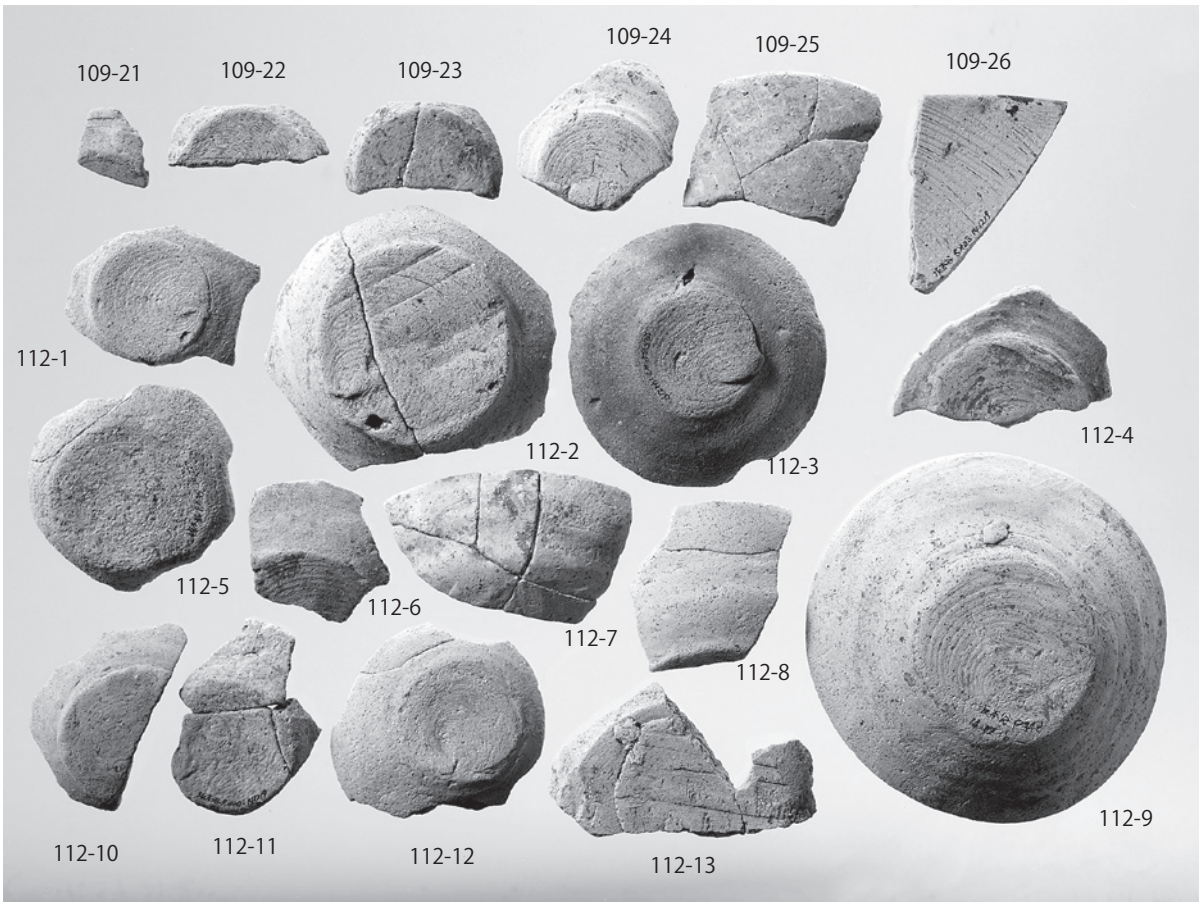


1．SB07・周辺ピット出土遺物 (第 108 図)

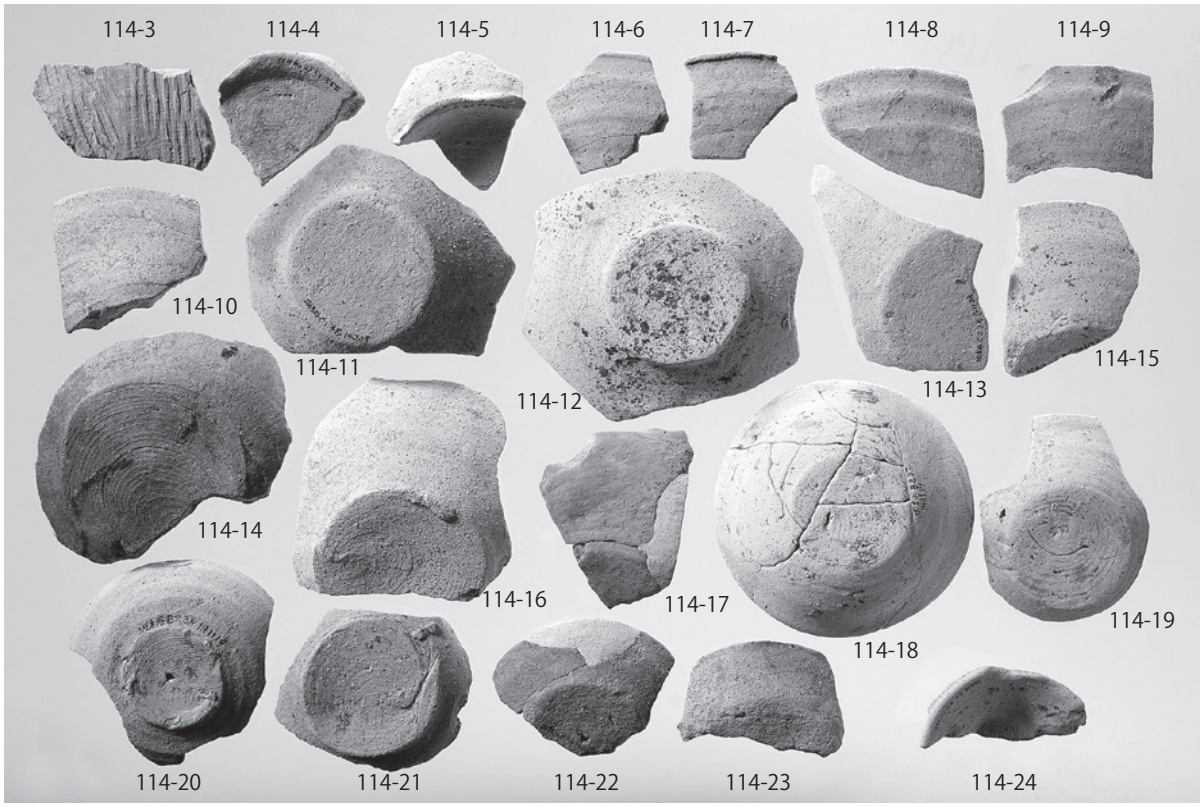
1．SB07 周辺 P200・383・SX02 出土遺物 (第 108・109 図)



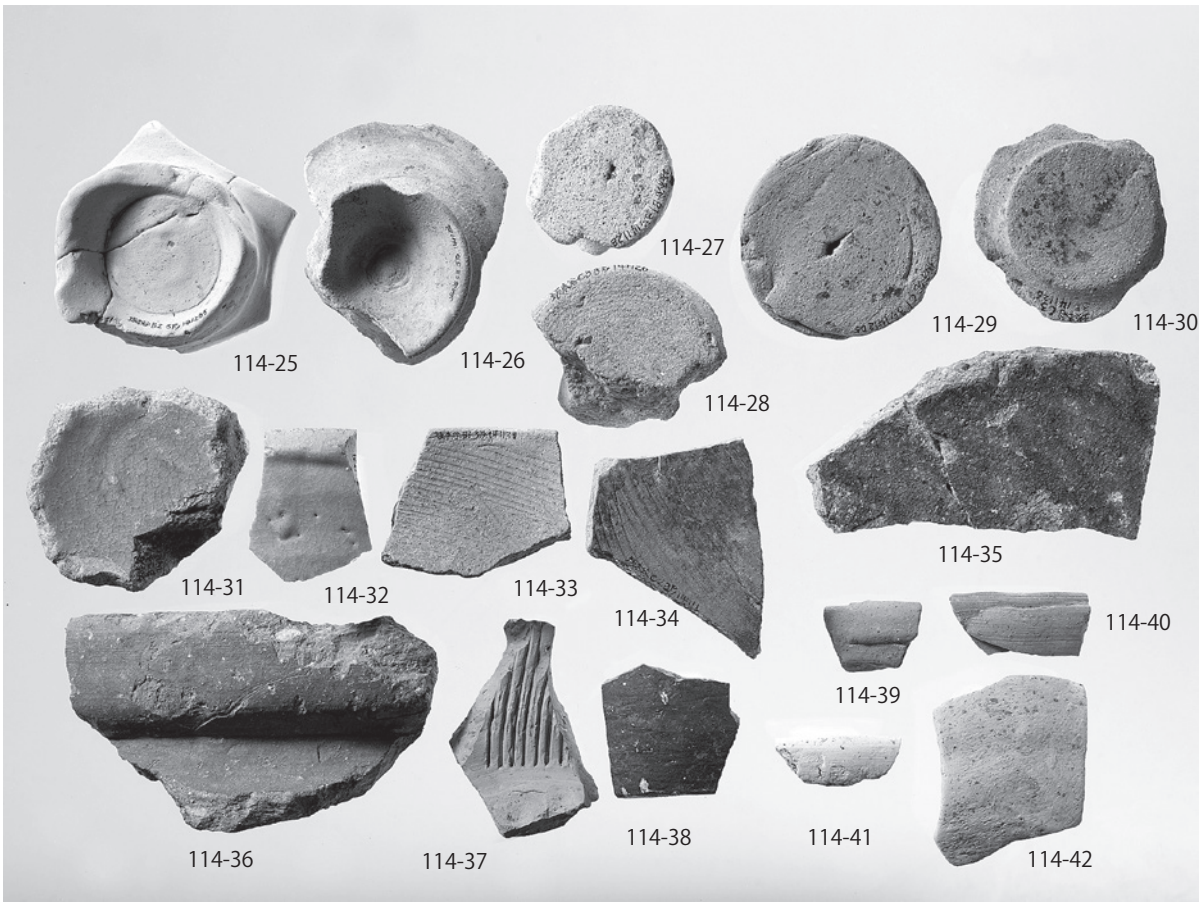
1．SX02 出土遺物 (第 109 図)



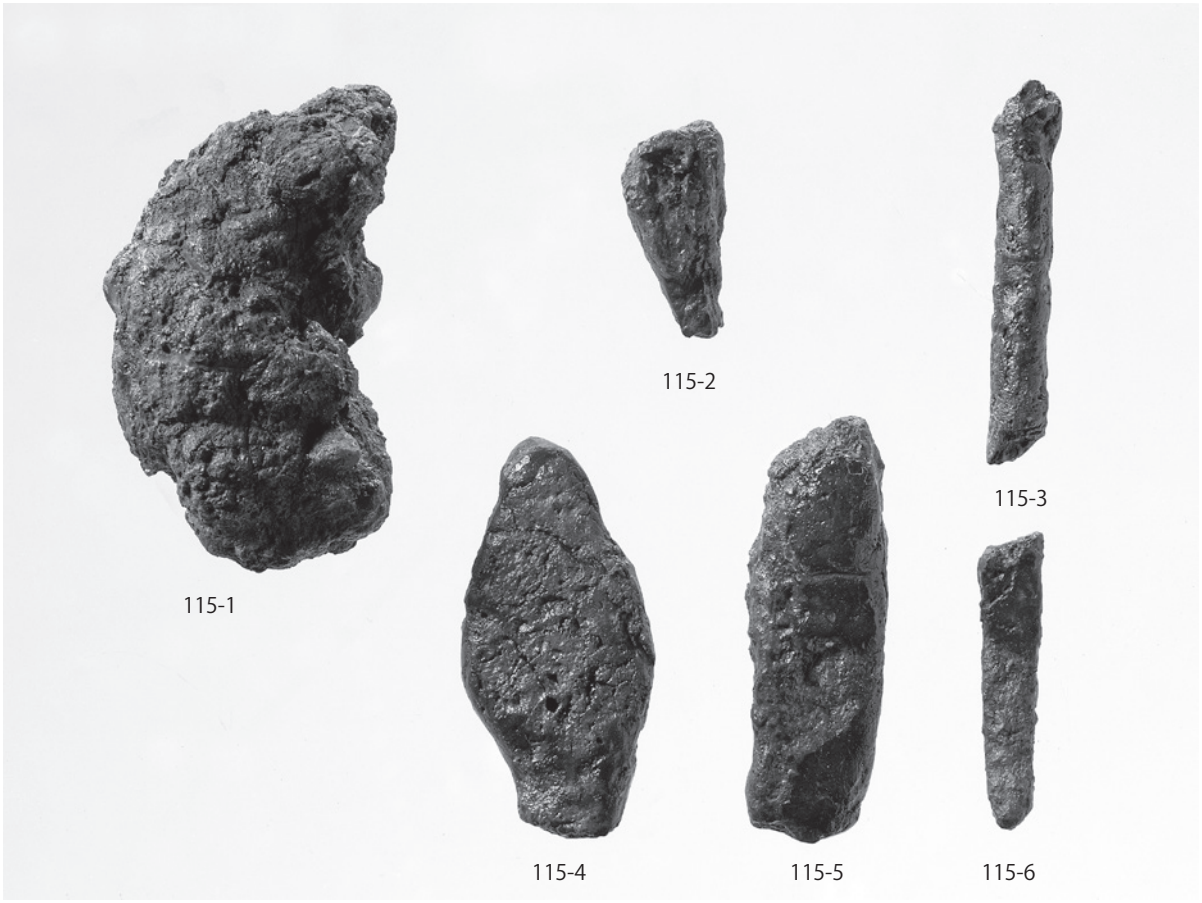
1．SX03・SB08・周辺ピット出土遺物 (第 109・112 図)



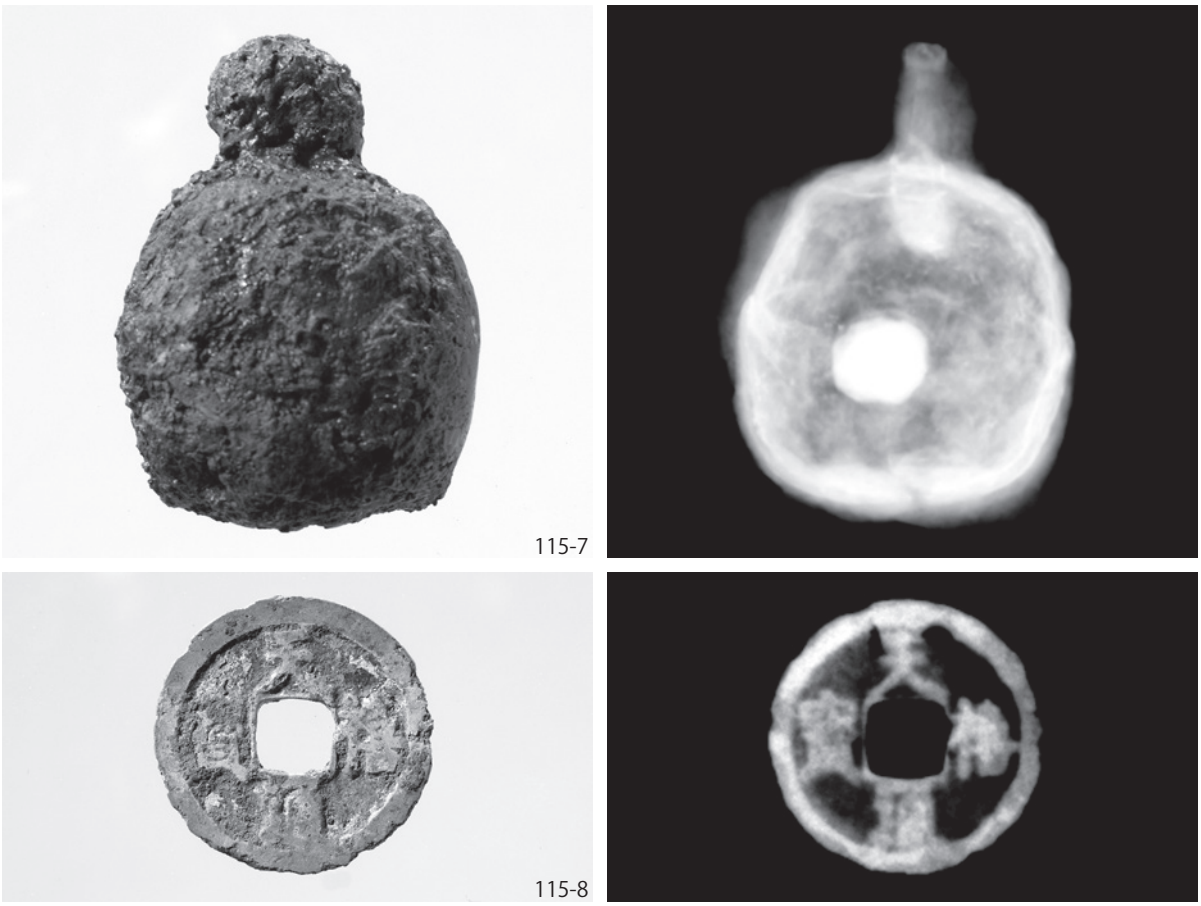
1．Ⅲ層出土遺物 (第 114 図)



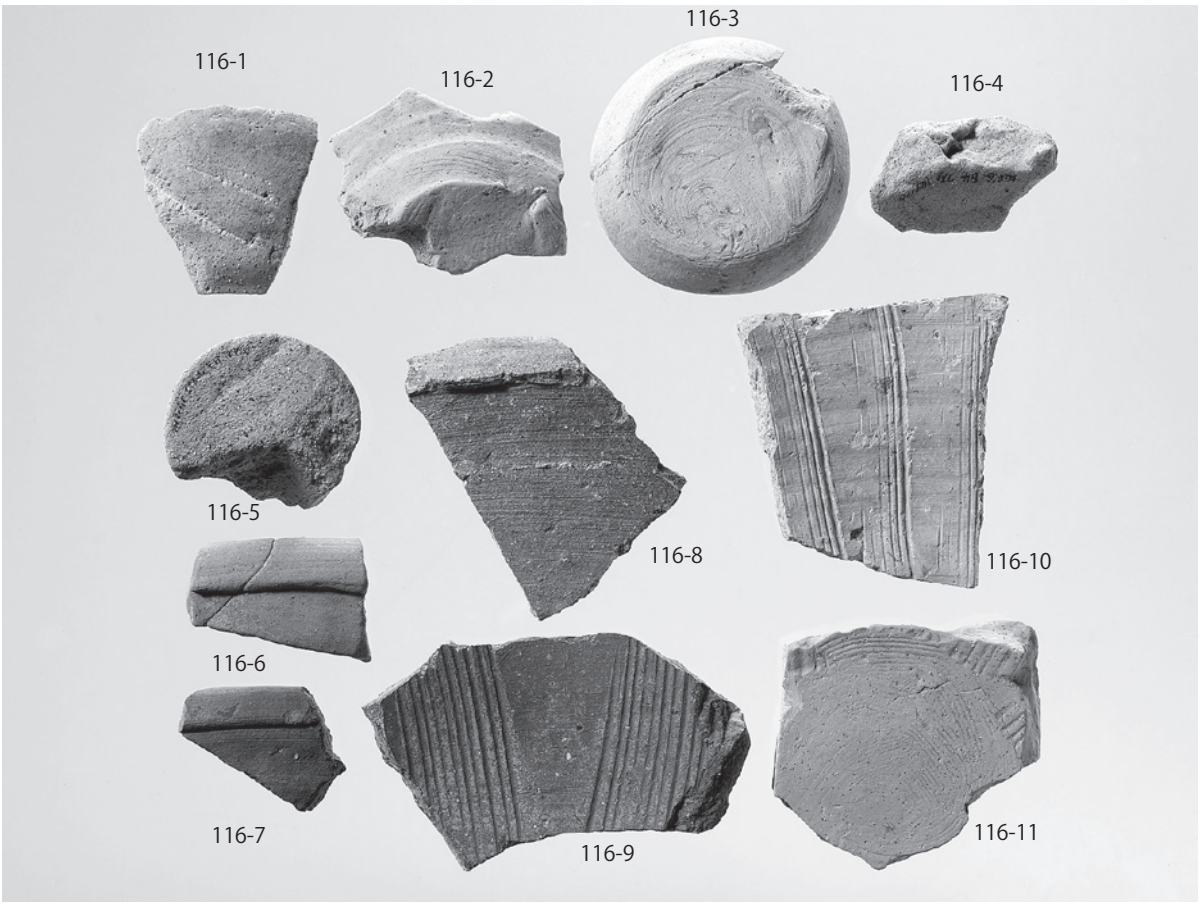
1．Ⅲ層出土遺物 (第 114 図)



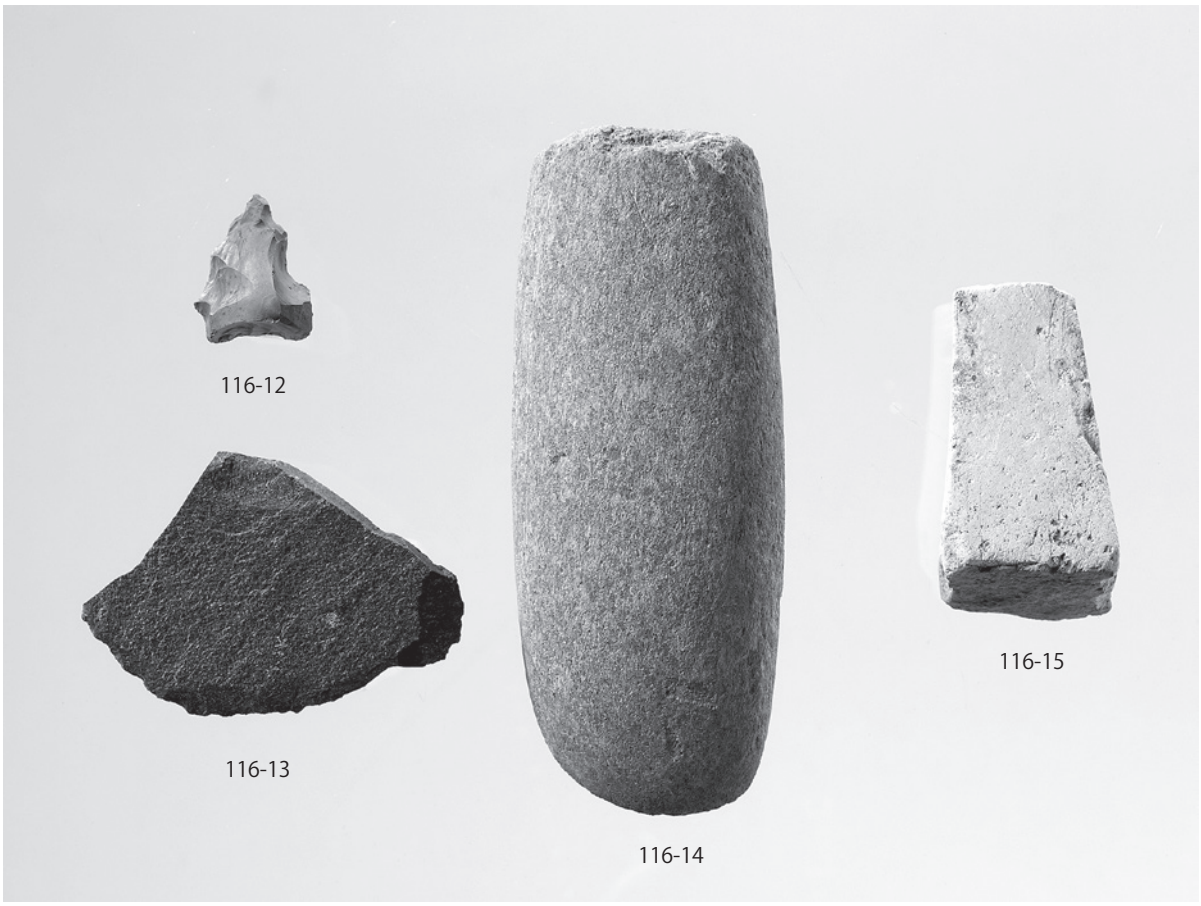
2．Ⅲ層出土鉄器 (第 115 図)



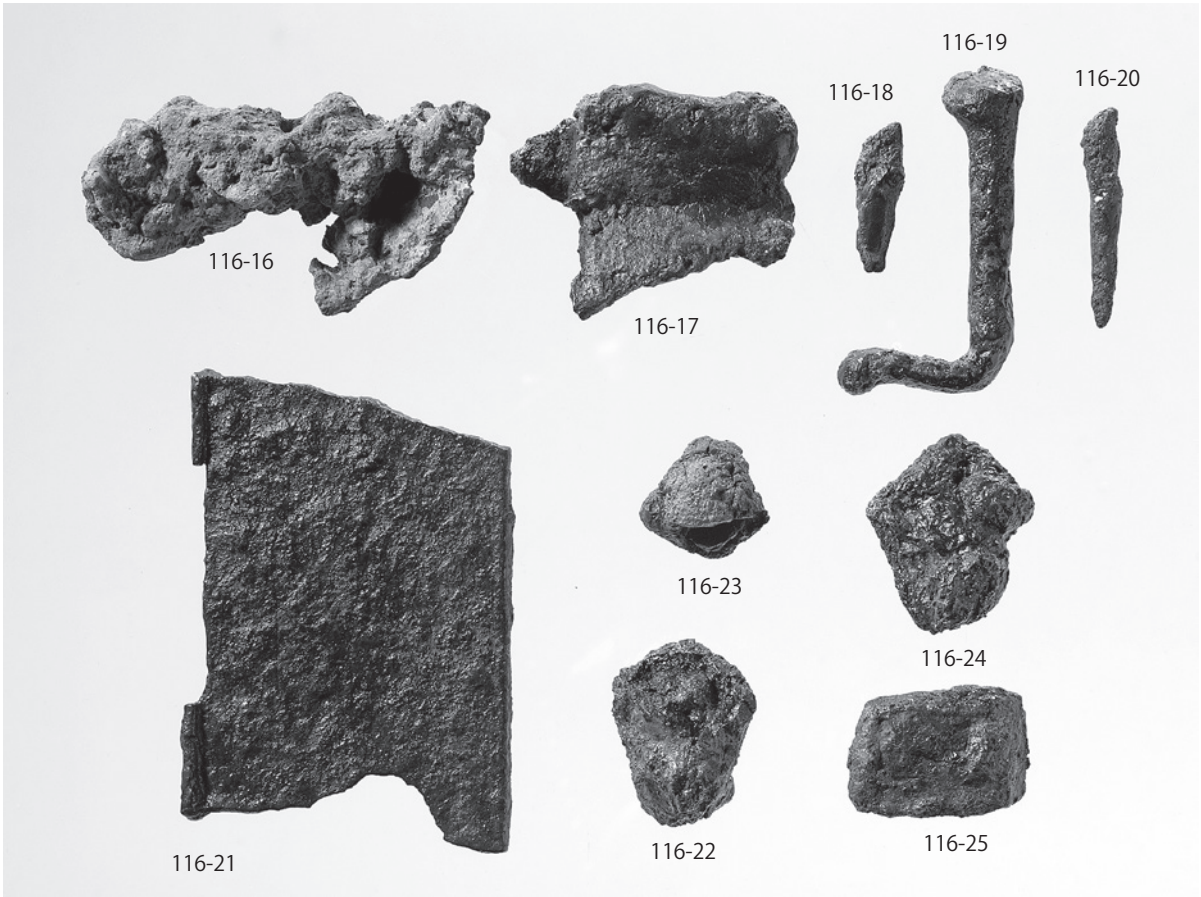
1．Ⅲ層出土鉄器・銭貨、同 X 線写真 (第 115 図)



2．Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 (第 116 図)



1．Ⅰ・Ⅱ層出土石器・石製品 (第 116 図)

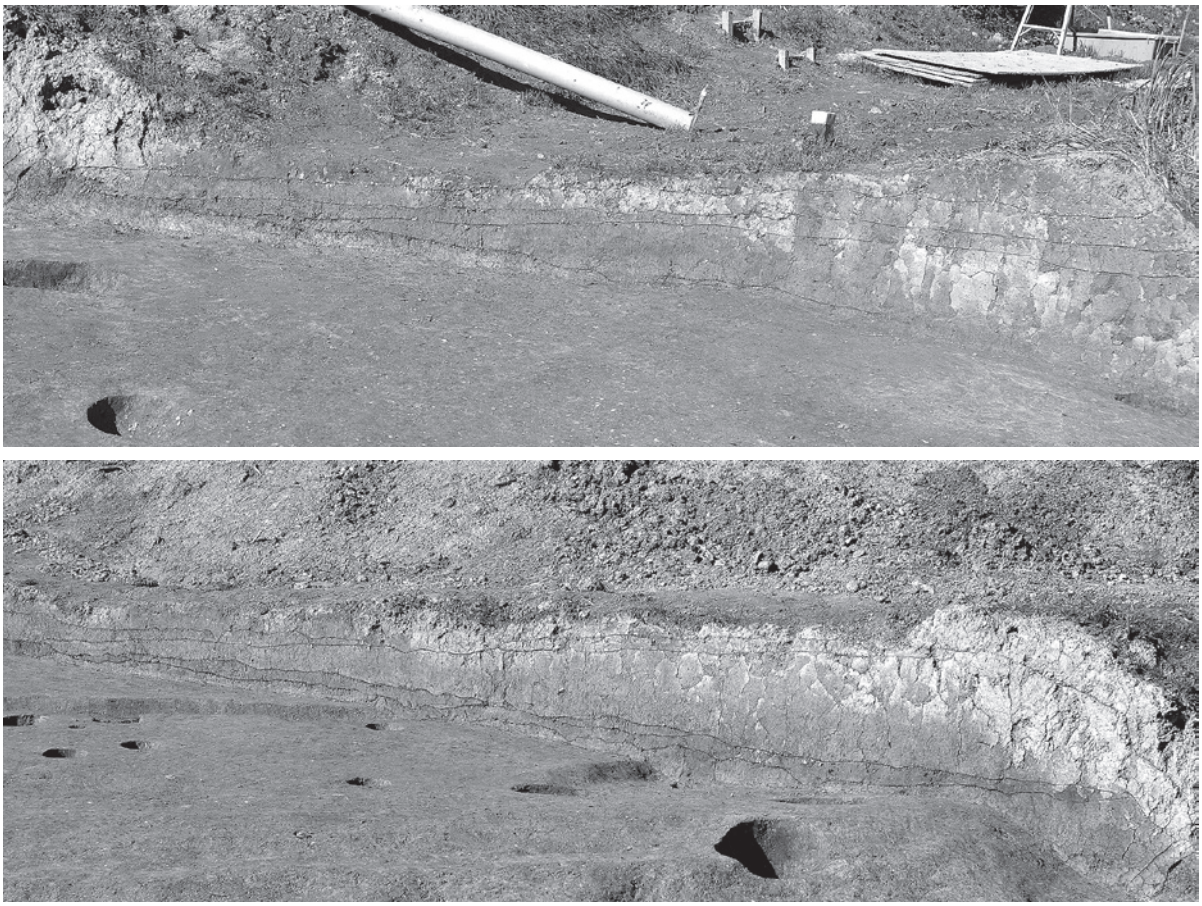


2．Ⅰ・Ⅱ層出土鍛冶滓・鉄器 (第 116 図)

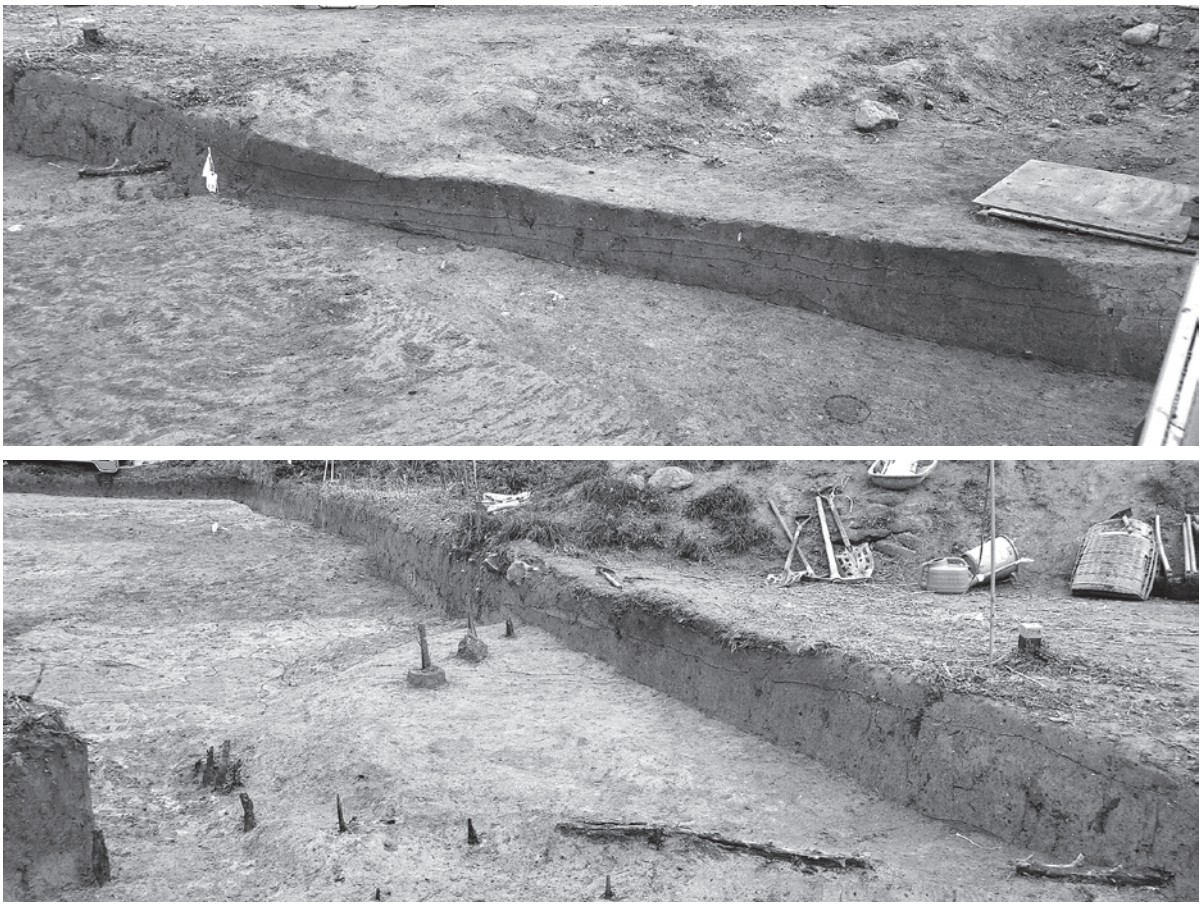
図版 76

1．京田遺跡 1 区遠景 (上空：南西から)

2．京田遺跡 1 区全景 (上空：南西から)



1．I1 ～ G2 北壁土層堆積状況 (南東から)



2．F2 ～ D3 北壁土層堆積状況 (南から)

1．C3 北壁土層堆積状況 (上：南から)、中央ベルト土層堆積状況 (下：北から)

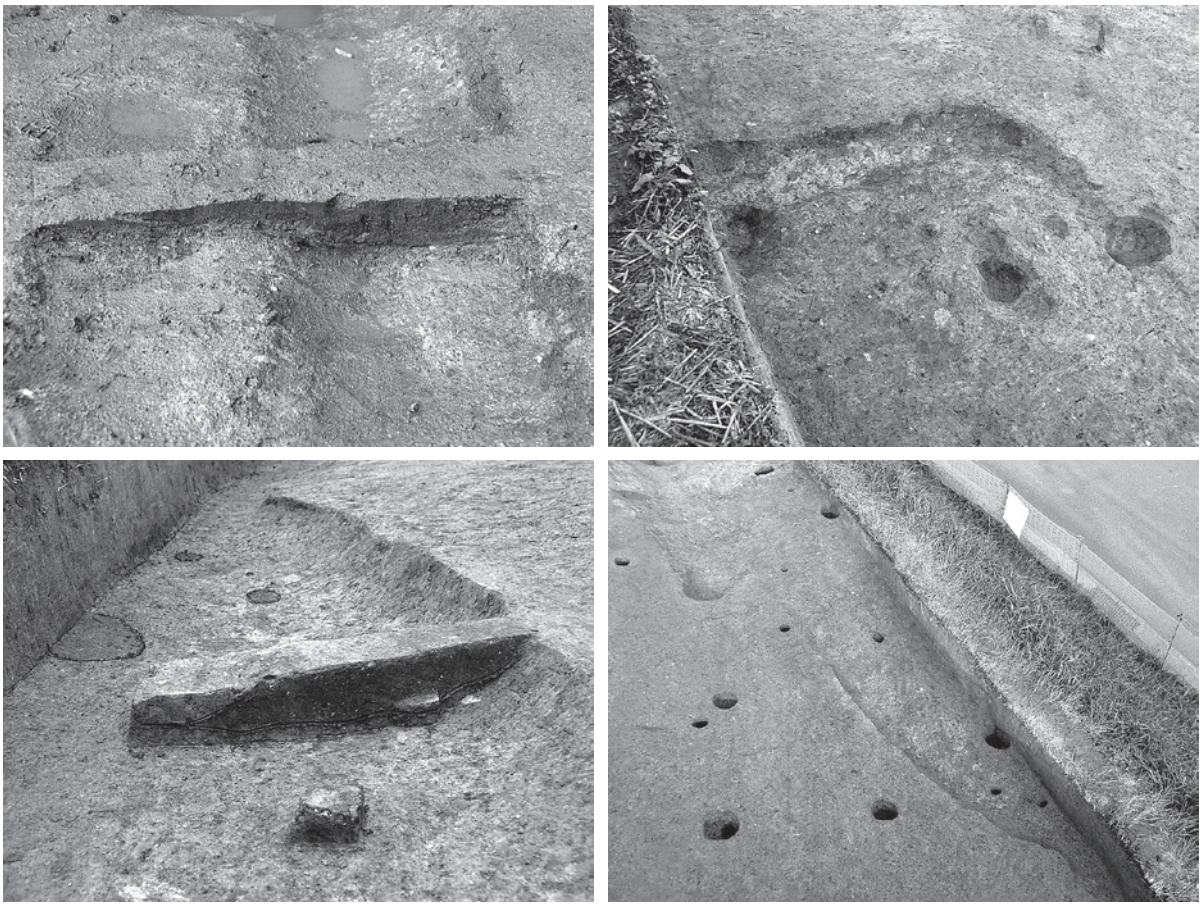
2．A8 ～ C9 南壁土層堆積状況 (上：北西から)、D9 ～ E10 南壁土層堆積状況 (下：西から)

1．SB01・02・05・06 検出状況 (南から)

2．SD04・ピット検出状況　(南東から)

1．SI01 検出状況 (南から)

2．SB05・06 完掘状況 (東から)

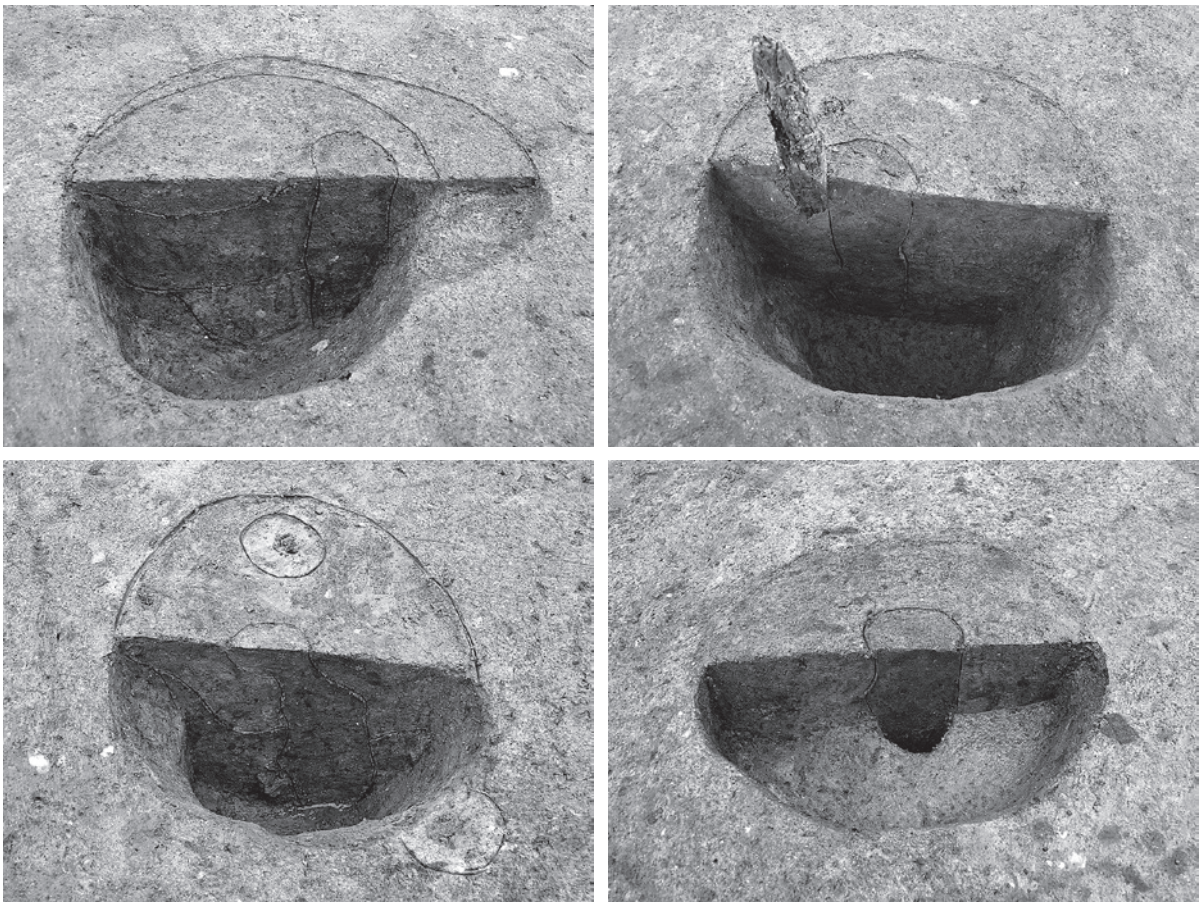


1．SD04 土層堆積状況・完掘状況 (上)、SI01 土層堆積状況・完掘状況 (下)

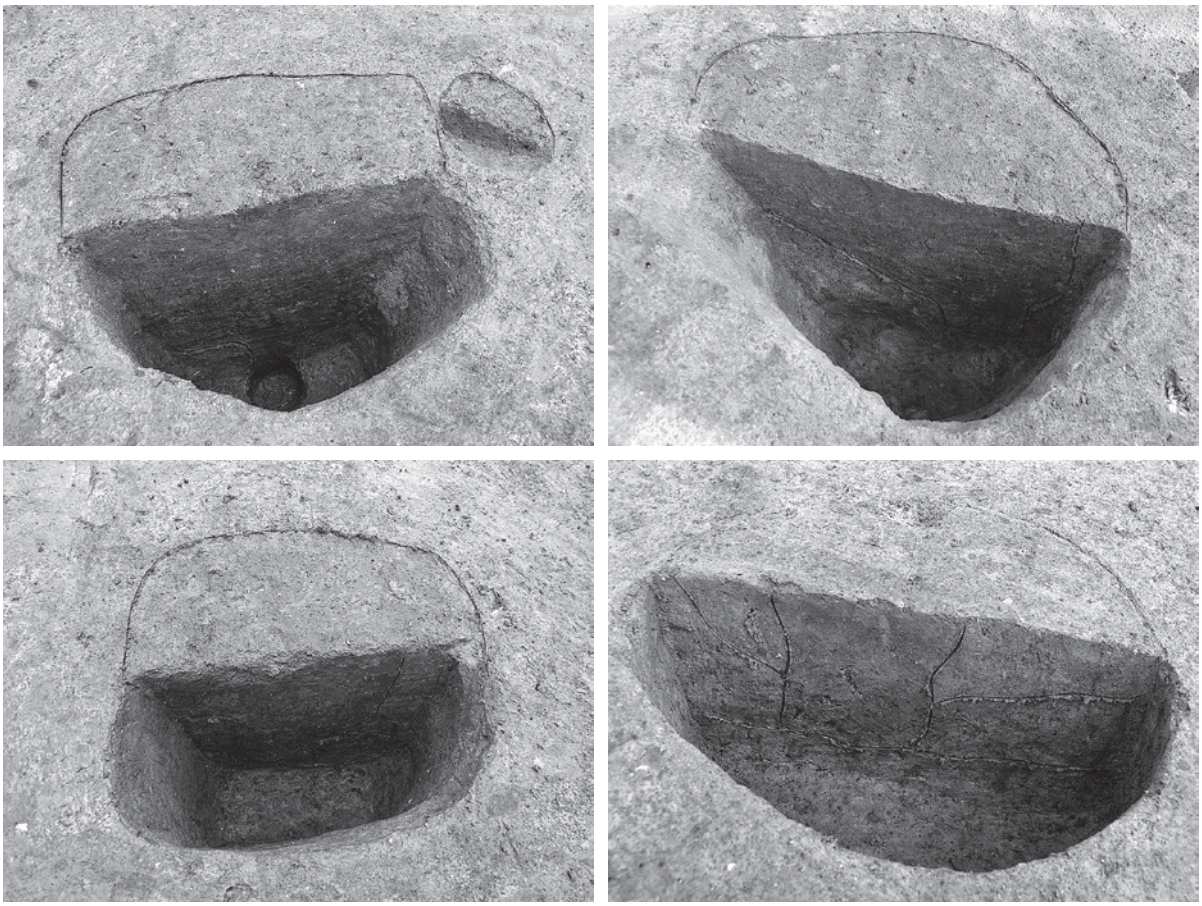
2．SB02・05 完掘状況 (南から)

1．SB03・04 完掘状況 (南から)

2．SB03、SD01・02 完掘状況 (南東から)

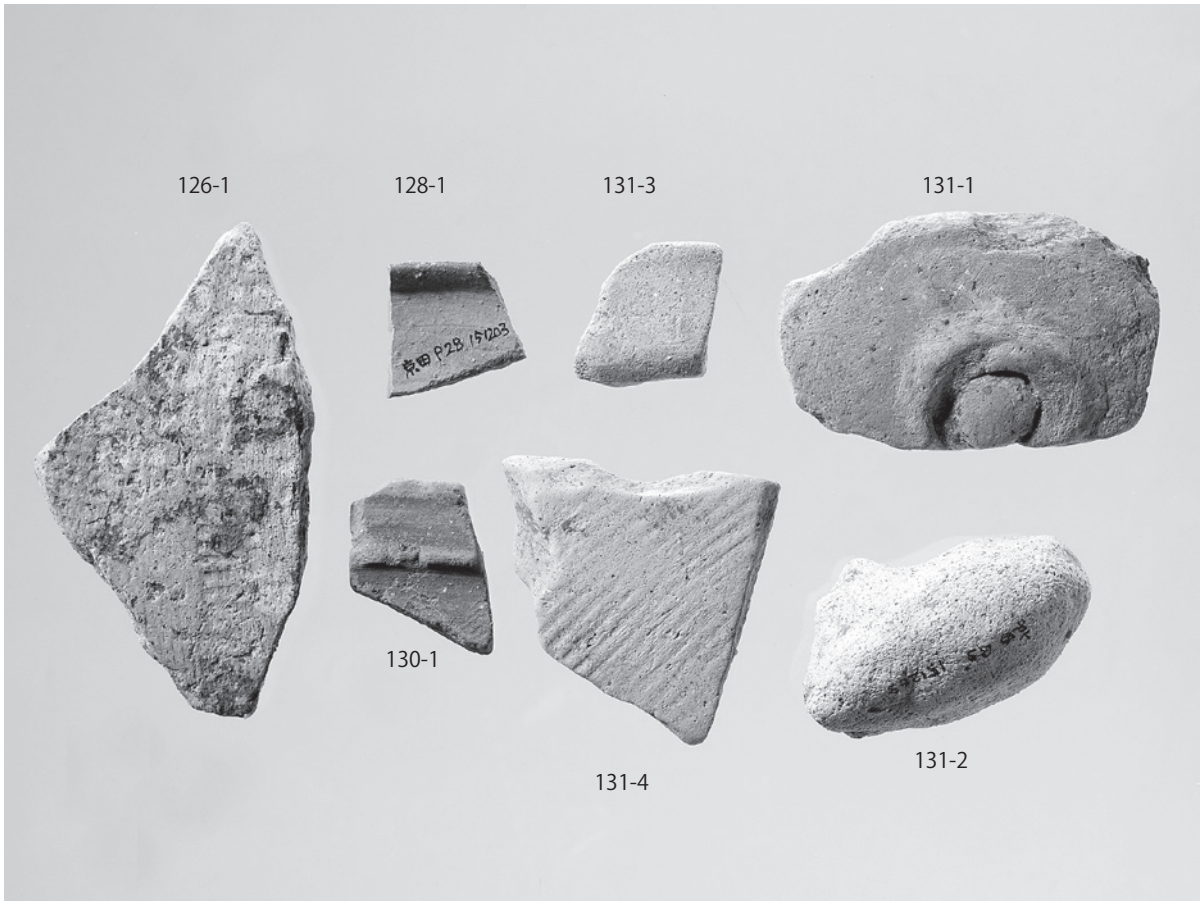


1．SB01 柱穴 P18(左上)・117(右上)・15(左下)・16(右下) 土層堆積状況

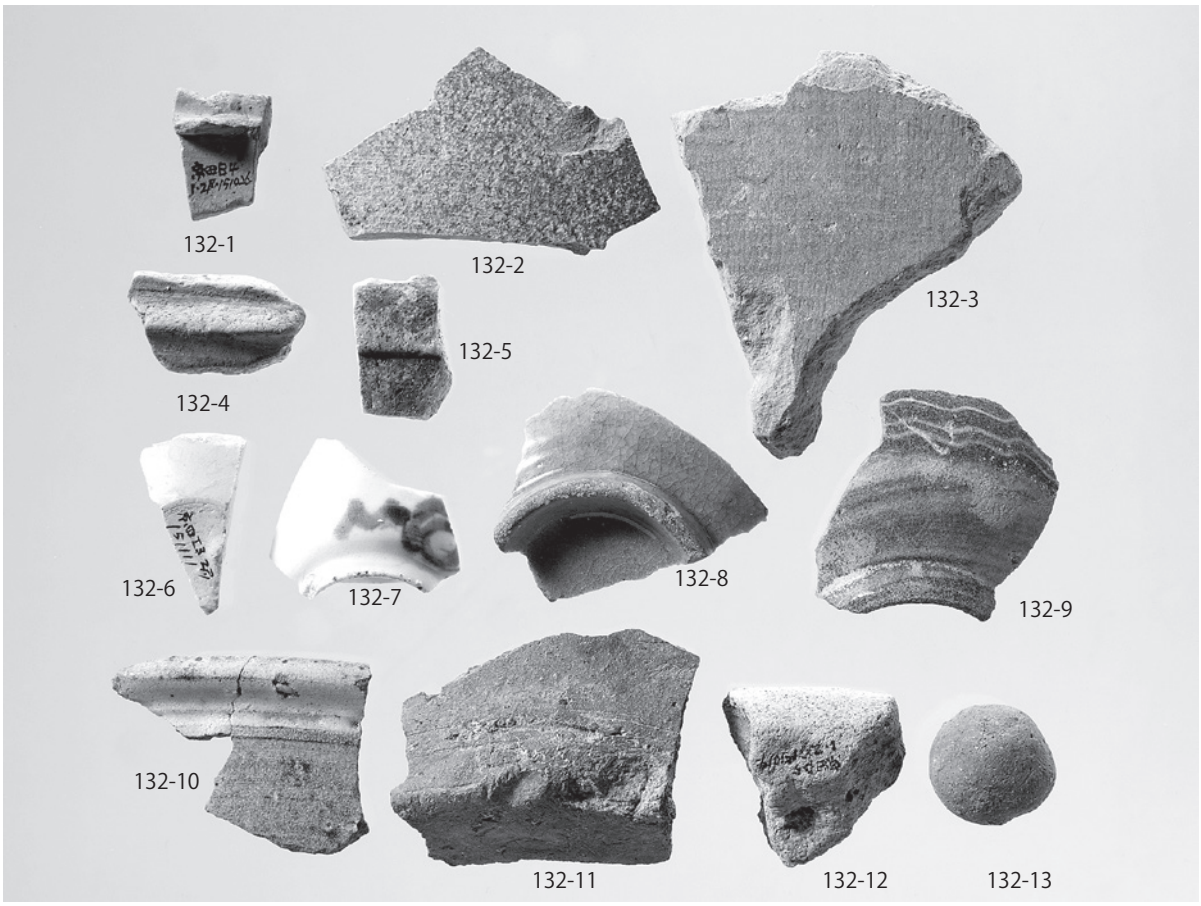


2．SB05 柱穴 P59(左上)・64(右上)・60(左下)・69(右下) 土層堆積状況

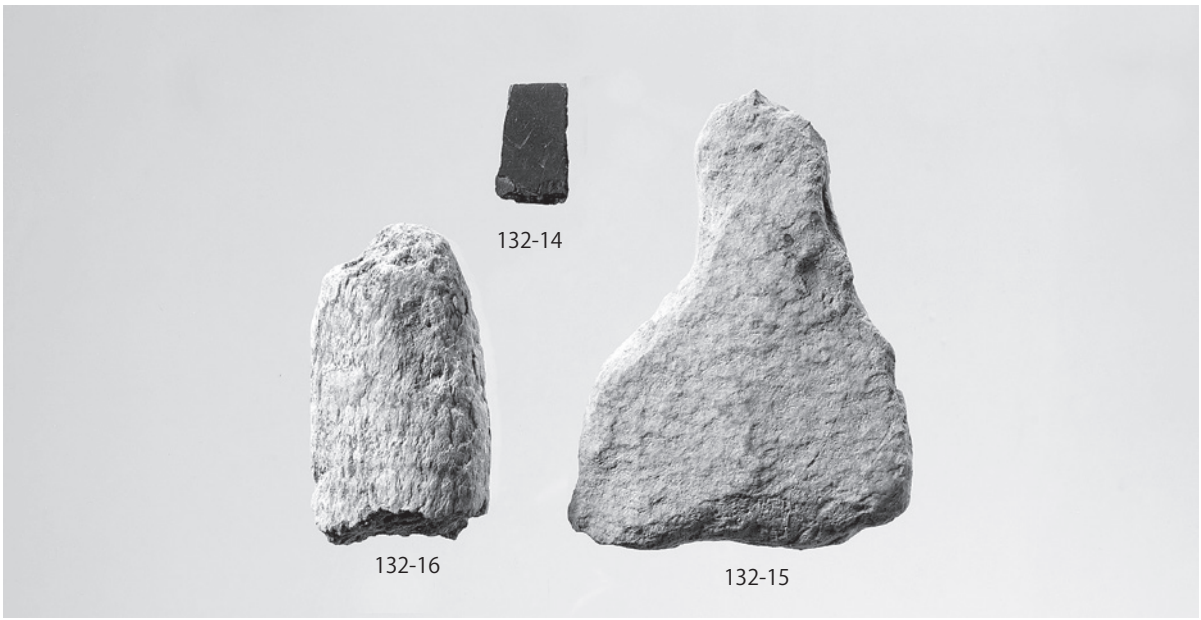
1．調査区北側完掘状況 (上空：東から)



2．遺構出土遺物 (第 126・128・130 図)、II 層出土遺物 (第 131 図)



1．Ⅰ層出土遺物 (第 132 図)



2．Ⅰ層出土遺物 (第 132 図)

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	フモトニイセキ・サカモトダニイセキ・キョウデンイセキ
書　　名	麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡 (1 区)
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	一般国道 9 号 (出雲湖陵道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	1
編 著 者 名	勝部智明 (編) 石丸恵利子 (一社) 文化財科学研究センター 渡辺正巳
編 集 機 関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒 690-0131　島根県松江市打出町 33 番地　TEL：0852-36-8608　FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp　http：//www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
発 行 年 月 日	2017(平成 29) 年 9 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ふもとにいせき 麓Ⅱ遺跡	しまねけんいずもしひがしじんざいちょう 島根県出雲市東神西町	32203	W203	35° 19′ 04″	132° 42′ 37″	2014 0528 ～ 2014 1016 2015 0615 ～ 2015 0806	1,630	道路建設
さかもとだにいせき 坂本谷遺跡	しまねけんいずもしにしじんざいちょう 島根県出雲市西神西町	32203	W269	35° 18′ 80″	132° 41′ 89″	2014 1016 ～ 2015 0115	1,400	道路建設
きょうでんいせき 京田遺跡	しまねけんいずもしこりょうちょう 島根県出雲市湖陵町	32203	b 51	35° 18′ 80″	132° 41′ 98″	2015 1013 ～ 2015 1215	640	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
麓Ⅱ遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 古代～中世	土坑 6 溝 2 建物跡 16、柵列 4	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、石器、 木製品	・第二遺構面　縄文後期 ・矢板、杭、横木を伴う溝 ・第一遺構面　古代～中世 ・斜面に神西城関連の防御施設が存在した可能性
坂本谷遺跡	集落	古代末 ～鎌倉時代	建物跡 8 、土坑 4 柵列 5	土師器、陶磁器、 金属器、銭貨	・斜面に神西城関連の防御施設が存在した可能性 ・平地部に集落跡
京田遺跡	集落	弥生時代 ～古代	建物跡 7	土師器、須恵器、陶磁器	・常楽寺川左岸の丘陵斜面に営まれた集落跡

要　約

麓Ⅱ遺跡では縄文時代の土坑を検出。出土した縄文土器は後期初頭の磨消縄文土器、中葉の縁帯文土器が大半を占める。食物残滓とみられる獣骨等も多数出土し、当該期の集落の一部であることを確認。古墳時代中期に埋没した溝は矢板・横木を伴い、堰止めた痕跡も確認。農具・建築材等が出土し、灌漑用の水路の可能性が考えられる。また、詳細な時期は不明だが、掘立柱建物跡は小規模なものが多く、神西城下に営まれた中世の農村集落と考えられる。斜面では柵列状ピットを検出。逆茂木等の神西城の防御施設と推定。

坂本谷遺跡では 11 ～ 14 世紀の土師器を伴う集落跡を確認。立地や出土遺物から、麓Ⅱ遺跡とは性格の異なる集落と推定。斜面上部で検出した柵列状のピット列は、麓Ⅱ遺跡斜面のピット列と同種の遺構と考えられる。

京田遺跡では建物跡 7 棟を検出。削平により遺物は皆無に近いが、弥生時代～古代にかけて営まれた集落跡と考えられる。

印刷仕様

紙　質	表　紙	レザック四六判　220kg
	本　文	上質紙Ａ判　57.5kg
		上質コート紙Ａ判　70.5kg
	写真図版	上質コート紙Ａ判　70.5kg
Ｄ Ｔ Ｐ	Windows　7	
	Adobe　InDesignCS5.5　PhotoShopCS5　IllustratorCS5	
画像原稿	階調画像線数　175 線 (AM スクリーン)	

麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡 (1 区)

一般国道９号 (出雲湖陵道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1

発　行　2017（平成 29）年９月

発行者　島根県教育委員会

編　集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒 690-0131　島根県松江市打出町 33 番地

電話　0852-36-8608

印　刷　株式会社報光社